

青山胤通 撰
林春雄 編
富士川游郎 編
宮本叔 編

第一册

〔一頁乃至
三〇四頁〕

緒論
內科史
原因總論

(第一回出版)

日本內科全書

壹卷

大正二年四月

吐鳳堂發行

稟告

日本内科全書卷一第一冊完成致シ本日ヲ以テ豫約諸君ニ配布致シ候事ヲ得ルハ弊堂ノ大ニ光榮トスルトコロニ御座候、本書ガ撰者及ビ編輯委員竝ニ、著者諸先生ノ辛苦ト勵精トニヨリテ、從來ノ著書ニ一頭地ヲ拔ツルコトハ今更申スマデモ無キコトニ候ヘドモ、特ニソノ校正ノ嚴密ナルト、印刷ノ至難ナルトハ、本冊ヲ御一覽下サレ候ハバ直チニ相分リ可申事ト存候、活版所ニテハコレガタメニ、數十萬個ノ活字ヲ新製致シ、夜ヲ日ニ繼ギテ努力罷在候ヘドモ、尙、準備ノ整ハサル點モ有之候ニツキ、第二回ハ來六月中ニ刊行シ、第二回ノ刊行ハ七月又ハ八月ニ致シ、十分準備ノ整フヲ待チテ、爾後ハ、毎月必ズ、一冊ヲ刊行致シ可申候、就テハコノ際ニ限り、刊行遲延ノ儀、何卒御諒恕被下候様伏シテ懇願致候。

大正二年四月一日

吐鳳堂

田中 増藏 敬白

謹告

- 一。日本内科全書ハ全十卷。毎巻紙數約九百頁ヲ標準トシ、毎月一冊、二百五十六頁宛ヲ刊行スル豫定ナルガ故ニ、毎冊ハ記事ノ途中ニテ中絶スルコトアルベシ。故ニ、毎冊ノ表紙ニ、卷數・冊數・頁數ヲ明記スルヲ例トス。
- 二。毎冊ノ内容ハ表紙ニソノ大要ヲ示スノミニテ別ニ目次ヲ附セズ。毎巻ノ終末ニ毎巻最後ノ冊子ニ、其巻ノ目次・索引・扉紙ヲ附スベキガ故ニ、製本ニ際シテハ、コノ點ニ留意アラシムコトヲ望ム。又希望ニヨリテハ、製本用ノクロス(金文字入)ヲ送附スベシ(但、コレハ頁數ノ多少ニヨリテ價格ニ差異アルガ故ニ、毎巻ノ結了ト共ニ價格ヲ定メテ報告スベシ)。
- 三。今回刊行シタル卷一第一冊ニハ、緒論・内科史・原因總論ヲ收メ、全篇讀切トシタルニヨリテ、豫定紙數(二百五十六頁)ヲ超過スルト五十餘頁ニ及ベリ、後來モ時時此ノ如キ場合アルベク、ソノ際ハ、次回ノ刊行ニ際シテ、豫定紙數ヨリ減少スルコトアルベシ、故ニ、毎冊ノ價格ニハ紙數ノ増加セルトキト、減少セルトキトニヨリテ變動ヲ生ズルコトナシ。
- 四。本書ニ用フルトコロノ術語及ビ用語ハ、成ルベクコレヲ一定センコトヲ企テタリ。譯語ノ選定ニツキテハ、選者、編輯委員、及ビ在京執筆者諸氏ノ會合ノ席ニテ、從來行ハレタル譯語ニシテ専門家諸氏ガ選用セラレタルモノハコレヲ其儘ニ用ヒ、不適當ト認ムルモノ及ビ新ニ譯字ヲ定ムベキモノハ編輯委員會ニテコレヲ議定スルコトニ評議一決シ、コノ目的ニテ編輯委員會ヲ開クコト、大正元年八月ヨリ毎月一回、特ニ斯學ニ造詣深キ大槻如電翁ヲ煩ハシテ、毎回出席ヲ乞ヒ、委員富士川游ノ原案ニ基ツキ、譯字ノ可不可ヲ討議シタリ。新定又ハ選定ノ譯字ハ、本文中ニ西洋語ヲ插入シテ明示スルガ故ニ、讀過スレバ明瞭ナリト雖モ、試ミニ卷一第一冊中ニ現ハレタルモノノ内、著シキモノヲ舉グレバ左ノ如シ。

基質

Anlage

姿質	Habitus
稟質	Temperament
枯瘦	Marasmus
物質代謝	Stoffwechsel
害物	Schädlichkeiten
能働性	Aktiv
受働性	Passiv
機能	Funktion
症状	Symptome

病名ノ中ニモ、從來西洋ノ語ヲ漢字ニテ書キタルモノトアリ、假名ニテ書キタルモノトアリ、本書ニハソノ書式ヲ一定シテ、タトヘバ、腸室扶斯・實布埜里・儂麻質斯等、已ニ廣ク公私ノ間ニ行ハレタルモノハ、漢字ニテ書クコトトシ(漢字ノ中ニテモソノ一種ヲ選ビタリ)、ソノ他ハ、スベテ假名ニテ書クコトトシタリ、タトヘバ、バラチーフス・アングイーナ・ヒステリー・スコルブート・マテリア・イレウス・インフルエンザ等ノゴトシ。

病名及ビ藥名等ノ選定ニツキテハ、一一コレヲココニ舉グルコト能ハズ。

五。用語ニ關スル事項、一一ノ特ニ舉ゲテ、注意ヲ乞フコトハ、本書ニテハ、『蓋、又、亦、甚、屢、始、漸等ノ文字ニシテ、一字ニシテソノ意義ヲ盡クスモノハ句點ヲ附スルノミニテ假字ヲ附セズ、若、ソノ文字ノハタラキニ變化アル場合、タトヘバ『及ビ、及フ』等ノ場合ニハ、常ニ假字ヲ附スルヲ例トセリ。又、新ニ假名ヲ製造シテ用ヒタルモノ數種アリ、左ノゴトシ。

ラ la リ li ル lu レ le ロ lo

Lノ音アラハスタメニ『ラ、リ、ル、レ、ロ』ニ○ヲ附シテ、Rノ音ト區別シタリ。

ㄨ cha ㄣ chi ㄣ che ㄣ ch

chノ音アラハスタメニ『ハ、ヒ、ヘ、ホ』ニ△ヲ附シタリ。

チ ロ ツ フ

Tノ音アラハスタメニ『チ、ツ』ニ△ヲ附シタリ。

又、從來發音ノ詰マル場合ニハツノ假字ヲ小サク書クヲ例トシタレドモ、拗音(タトヘバキ、モ、ギ等)ヲ示スニモ同一ノ書式ヲ用ヒザルベカラザルガ故ニ、本書ニハ新ニツノ字ヲ製作シテ、用ヒタリ、タトヘバ

ベツテンコーセル (Pettenkoser)

六。地名ニハ右側ニ複線ヲ附シ、人名ニハ右側ニ單線ヲ附スル等普通ノ例ニ依レリ。

七。本書ノ凡例等ハ、第一卷終末冊ニ附スベキガ故ニ、ココニ第一冊ヲ刊行スルニ方リテ、主要ノ點ヲ謹告スルニ止ム。

大正二年三月下浣

編輯委員

日本内科学全書

日本内科学全書 卷一

緒論

醫學博士 青山胤通述

我邦ノ醫學ハ、ソノ初、コレヲ支那ヨリ輸入シ、ソノ祖述シタルニ過ギズ、而シテ支那ノ醫學ハ、モト一種ノ哲學的思想ヲ基礎トセシモノニシテ、吾人今日ノ知識ヲ以テコレヲ觀レバ、比比トシテ取ルニ足ラザル空論妄說ノミ。泰西ノ醫學ノ始メテ我邦ニ輸入セラレシハ、遠ク二百年ノ前ニアリトイフト雖モ、輒近ノ自然科學ヲ基礎トセル醫學ノ汎ク我邦ニ行ハルルニ至リシハ、尙、僅僅數十年來ノ事ニ屬シ、醫學教育ヲ司ドルトコロノ大學竝ニ専門學校ノ如キモ、近年ニ至ルマデハ、全然泰西ノ制度ヲ模倣シ、而シテ諸般ノ設備ノ點ニ至リテハ、尙、未、迥カニ彼ニ及バザルノ歎ナキコト能ハズ。從テ從來我邦ノ醫學ニシテ、邦語ヲ以テ記述セラレタルモノハ、スベテ歐洲諸家ノ著述ヲ翻譯シタルニ過ギスト云フモ敢テ不可ナク、更ニ我邦醫學ノ特長ノ發揮セラレタルモノアルヲ見ザリキ。是、畢竟、我邦醫學ノ未、獨立ノ域ニ到達セザルコトヲ實際ニ證明スルモノニシテ、吾人ノ常ニ最、遺憾トスルトコロナリキ。

幸ニシテ最近ニ至リテ、我邦ノ醫學ハ駸駸トシテ長足ノ進歩ヲナシ、斬新ニシテ且、有益ナル業績ノ發表セラルルモノ甚、
尠カラズ、最早今日ニアリテハ、各個ノ分科ニ於テ、堪能ナル學者ヲ得ルコト敢、困難ナラザルニ至レリ。故ニ吾人ハコノ機
會ヲモツテ汎ク同志ノ諸士ト謀リ、各自得意トスルトコロノ部門ヲ擔任シ、邦語ヲ以テ記述シ、成ルベク特色ヲ發揮シテ
以テ日本ノ内科書ト稱スルコトヲ得ベキモノヲ編纂セントノ企圖ヲ起シタリ。

本書ノ内容ハ、コノ書ヲシテ、單ニ學生ノ教科書タラシムルニ止メズ、スベテノ醫師ノ參考書タラシムベキ希望ヲ有スノヲ以
テ、ソノ記述稍浩瀚ナリ。而シテコノ機會ニ於テ從來區區不定ナリシ醫家ノ用語ヲ選定シテ、以テ將來ノ範ヲ示シ、若
適當ノ譯語ヲ得ザルモノハ、原語ヲ用ヒ、記述ハ成ルベク平易ナラシメテ詰屈難解ノ文字ヲ省キ、窮屈ノ文體ヲ避ケ、以テ
讀者ノ通讀ニ便ナラシメンコトヲ期ス。

シカレドモ多數ノ著者ノ、ソノ意ニヨリテ記述シタルモノヲ統一セントスルハ、頗、困難ノ事業ナリ。試ミニ獨逸國ニアリテ出版
セラレタル斯種ノ著書、タトヘバノートナーゲル、⁽¹⁾ペンツォルト及ビスデンチング、⁽²⁾エプスタイン及ビシワル
ベ、⁽³⁾モール及ビスターヘリン⁽⁴⁾等諸家ノ書ヲ見ルニ、甲ノ部分ハアマリニ詳密ニ過ギ、乙ノ部分ハアマリニ簡單ニ失
シ、ソノ全體ニ互リテ十分ニ統一セラレザルノ觀ナキニアラズ。コレ全書トシテハ一個ノ缺典ナリ。サレバ吾人ハ先、コノ點ニ注
意シテ出來得ルダケ記述ノ統一ヲ圖ラントス。

我邦ニ於ケル固有ノ疾病、タトヘバ脚氣竝ニ一定ノ寄生蟲病ノ如キハ、勉メテコレヲ詳述シ、我邦ニ存在セザルコロノ疾
病、タトヘバ黃熱トリパノゾーマノ如キハ學術上ノ興味アルモノノミラ細記シ、然ラザルモノハ唯ソノ概要ノミラ舉グルニ止
メントス。

人アリ、説ヲナシテ曰ク、現今ノ時ニ方リ、邦語ヲ以テアマリニ浩瀚ナル醫學書ヲ記述スルハ、敢テソノ必要ヲ認メズ。其故

(1) Nothnagel
(2) Penzoldt und Stintzing

(3) Ebstein und Schwalbe
(4) Mohr und Staehelin

(1) Pawlow

如何トナラバ、我邦ニ於テ醫學ヲ研究セントスルニハ、到底我邦語ノミニテハ、ソノ目的ヲ達スルコト能ハズ、必、泰西ノ文獻
ニ據ルニアラザレバ、深奥ノ理論ヲ窮ムルニ由ナシ。故ニ邦語ヲ以テ、斯ノ如キ書ヲ編スルハ、畢竟無用ノ業タルコトヲ免レズ。
又、若、茲ニ邦語ヲ以テ記述シタル良好ノ醫學ノ刊行セラルルコトアリトセンカ、醫師ハ勢ヒコレガタメニ、泰西ノ書籍ヲ繙
讀セザル傾向ヲ生ジ、從テ我邦醫學ノ退歩ヲ來タス虞アルベシト。コノ議論ハ、一應道理アルゴトクナレドモ、實ハ甚シキ僻
説ナリトイハザルベカラズ。吾人ハ信ズ、若、我邦ノ醫學ニシテ、イツマデモ泰西ノ文獻ニ據ルニアラザレバ、進歩スルコト能ハズト
スレバ、我邦ノ醫學ハ永久ニ獨立ノ時期ニ達スルコトナカルベキコトヲ。吾人ト雖モ、亦將來我邦語ノミラ以テ、日本ノ醫
學ノ進歩ヲ圖ラントスルニアラズシテ、泰西文獻ノ必要ヲ感ズルコトハ敢テ論者ニ讓ラズ。シカモ我邦醫學ノ獨立ノタメニ、
邦語ヲ以テ記述シタル専門書ノ刊行ヲ以テ最、急務ナリト思惟スルモノナリ。歐洲ニアリテモ、露西亞、匈牙利等ノ大學
ハ、以前ハ皆ソノ教授ニ獨逸語ヲ用ヒシモ、近來ハスベテ自邦ノ言語ヲ用フルコトナリ、學術雜誌ノゴトキモ、皆ソノ邦語
ヲ以テ記載セラルルニ至レリ。タトヘバ彼ノ有名ナルパウロフ氏⁽¹⁾ノ業績ハ、露國語ヲ以テ記述シタルタメニ、ソノ學問上
著大ノ價值ヲ有スルモノナルニ拘ハラズ、獨佛英等ノ學者ノ注目スルコトナルコト遅ク、學問ノタメニハ甚、不利益ノ
結果ヲ生ズルコトヲ免レザリシモ、コノ不利益ヲ忍ビテモ尙、自邦ノ言語ニ據ラントスルハ、學問ノ獨立トイフコトノ、國民性
ヲ發揮スルニ就テ必要ノ關係アルヲ以テナリ。

吾人ノコノ計畫、動機トナリテ、他ノ醫學ノ分科ニ於テモ、同様ノ企圖ヲ起シ、コレニヨリテ我邦醫學ノ發達ニ貢獻スルコ
トヲ得バ、此舉モ亦、幸ニ徒勞ニ屬セザルコトヲ得ベキカ。

内科史

ドクトル 富士川 游述

序論

内科ノ歴史ハ醫學ノ歴史ノ一部分ナルコト言フマデモナシ。今日吾人ガ醫學ト稱スルトコロノモノハ、人類ノ成立ノ構造ノ働作及ビラノ動物界ニ於ケル位置ヨリ、疾病ノ本態原因及ビコレヲ豫防シ、若クハ治療スルノ方法等ヲ攻究スルトコロノ學科ニシテ、疾病ヲ治療スルコトハ、實ニ醫學ノ最後ノ目的タリ。而シテ、疾病ノ本態及ビ治法ヲ攻究スルニ方リテ、解剖學及ビ生理學ノ知識ヲ要スルコトハ勿論ナレドモ、醫學ノ發展ハ、コノ關係ヲ轉倒シテ、今日吾人ガ醫學ノ最後ノ目的トスルトコロノ治療ヲ第一トシテ起リタリ。コレ、アラユル學科ノ發達ノ徑路ニ同ジク、我ガ醫學モ亦、知識ヲ欲望スルニ本ツカズシテ、實際ノ要求ニソノ源ヲ發シタルガタメナリ。故ニ、メソポタミア、バビロン、アヅシリア(紀元前凡五千年)、印度(紀元前凡一千五百年)、古埃及(紀元前凡三千年)、猶太等古代曠昧ノ人民モ尙、醫術ヲ知リテコレヲ施セリ。殊ニ近年ニ及ビテ、専門學者ノ研究ノ漸ク精緻ニ赴クニ從ヒ、古代諸邦ニ於ケル醫術ノ狀況ハ益、明瞭ナルコトヲ得ルニ至レリ。中ニ就キテ、希臘人ハ、ソノ微妙ナル才能ニヨリテ、フェニシア、セミヂツク、埃及等ヨリ取リシモノヲ融

會シ、暗キヲバ明カニシ、足ラヌヲバ補ヒタルタメニ、古代諸邦民ノ難駁ナル見聞ハ、希臘人ノタメニ一個ノ科學トナリ、諸邦ノ古醫學ハ皆集マリテ希臘ノ醫學トナリタレバ、後世ノ醫學ハ希臘ノ醫學ニ淵源セザルハナシ。サレバ、世界的醫學トシテ、今日ニ舉ゲテ論ズベキモノハ希臘醫學ノ流派ナルコト争フベカラズ。

希臘醫學ハ、紀元前凡一千年ニ始マレリ。ソノ第一期ハ神及ビ魔ヲ信仰シタル時代ニシテ、コノ時代ニアリテハ、疾病ハ神又ハ魔ノ所爲ナリト信セラレ、從テコレヲ治療スルノ方法モ祈禱ニ外ナラザリキ。醫聖ニアスクレピオス⁽¹⁾アリテ尊崇セラレ、後ニハ神トシテ祭ラレタリ。第二期ハ紀元前第六世紀頃ニ始マリ、醫學ハ漸次ニ宗教信仰ノ外ニ立チ、漸次ニ自然哲學ノ影響ヲ蒙ルニ至レリ。コノ時代ニハ哲學者ニシテ、同時ニ醫家タリシモノ、タトヘバピタゴラス(紀元前五八四乃至五〇四年)⁽²⁾、エムペドクレス(紀元前五〇四年生)⁽³⁾アリ。醫家ノ地位モ、漸ク獨立シテ、宗教ノ迷信ノ支配ヲ離レ、疾病ノ自然的原因ニ著目シ、殊ニ食物及ビ消化障礙ニ重キヲ置クニ至レリ。

第二期ハヒポクラテス⁽⁴⁾ノ時代ナリ。古希臘ノ醫家ニテ同姓ノモノ數人アリタル中ニ就キテ、最、名高キハヒポクラテス第二世ナリ。ソノ生年及ビ歿年ハ甚、確乎タラズ。雖モ、紀元前四百六十年乃至四百二十三年ニコス島代ハ紀元前五世紀ヨリ四世紀ニ涉レリ。ヒポクラテスハ前代諸家ノ業緒ヲ承ケ、當時專バラ行ハレタル自然哲學ノ見地ヨリシテ説ヲ立テ、論ズルトコロ、爲ストコロ、スベテ經驗ニ本ヅキ、ココニ古希臘ノ醫學ヲ大成シタリ。故ニ、内科史ヲ、科學ノモノトシテ、論ズルニハ、コノ人ヨリ説キ始ムベシ。

- (4) Hippokrates II.
- (2) Pithagoras
- (1) Asklepios
- (3) Empedocles

ヒポクラテス

ヒポクラテスハ經驗的醫學⁽¹⁾ノ祖ナリ。ヒポクラテス以後、希臘ノ醫學ハアリストテリス・テオフラソツス・ヘロフィルス・エラジストラーツス等諸家ノ努力ニヨリテ大ニ發展シ、ソレヨリ羅馬人ノ手ニ移リ、ソレヨリツエルズス・ガレノス等諸家ノ出ヅルアリテ、醫學ノ發達ハ、多般ノ方面ニ向ヒシカドモ、概シテ言ヘバ、十六世紀ノ頃マデハ、コレヲ經驗的醫學トシテ一括スルコトヲ得ベシ。故ニ、コノ點ヨリ見テ、經驗的醫學時代ノ内科ノ歴史ヲ敘述スルニ方リテ、第一ニ舉グベキハ、ヒポクラテスノ醫學ナリ。

- (1) Empirische Medicin
- (2) περι νόσων γ = de morbis III
- (3) περι νόσων α = de morbis I
- (4) περι νόσων β = de morbis II
- (5) Gehirnsphacelismus
- (6) περι παθών = de affectionibus
- (7) περι γυναιχείων = de morbis mulierum
- (8) περι τῶν ἐντὸς παθών = de morbis internis

ヒポクラテスノ著述トシテ、今ニ傳フルモノハ、ソノ數尠カラズ、ソノ中ニハヒポクラテスガ自カラ記述セルモノノ外ニ、門人及ビ一派ノ學者ノ手ニ成レルモノアリ、後人ノ假托ニ出ヅルモノアリ、信僞相半バサルモノアリ、シカモ、眞ニヒポクラテス及ビソノ學徒ノ著述トシテ、學者ノ承認ヲ經タルモノノ中ニ、疾病ヲ論ズルノ書、數部アリ其一一ハ『疾病編第一』⁽²⁾ト題スルモノニシテ、腦病ヲニギキナ⁽³⁾黃疸破傷風角弓反張腸管閉塞肺炎及ビ肋膜炎等ヲ列舉シタリ。第二ハ『疾病編第一』⁽³⁾ト題スルモノニシテ、コノ書中ニハ原因豫後療法等ニツキテ論ツタル外ニ、膿胸熱病等ヲ説キタリ。第三ハ『疾病編第二』⁽⁴⁾ト題スルモノニシテ、粘液及ビ膽液ノ蓄積ニ因スル頭病腦壞疽⁽⁵⁾麻痺ニ音聲消失ヲ兼タル病骨疽麻痺⁽⁶⁾ポリウフ乾燥病等ヲ列舉シタリ。第四ハ『疾患』⁽⁶⁾ト題シ、膽液及ビ粘液ガ諸般疾病ノ原因ヲナスコト、病ノ始ニ下劑及ビ藥物ヲ用フベキコト等ヲ説キタル外ニ、耳痛嘔下痛齒痛水腫脾腫イレウス赤痢完穀下痢腰痛關節炎虎列刺裏急後重等ノ諸症ヲ舉ゲタリ。其他ニモ、疾病ノ症狀及ビ療法ニツキテ敘述セルモノアリ。固ヨリ系統的ニ、疾病ヲ類別セルニハアラズト雖モ、婦人病⁽⁷⁾小兒病等ヲ特別ニ舉ゲタルニ對シテ、『内部疾病編』⁽⁸⁾ト題スル一書ヲ

- (1) Littré
- (2) Häser
- (3) Fuchs

著ハシ、各種ノ肺病、膿胸ニ二種ノ肺癆、香髓癆、破傷風、四種ノ腎臟病、腰痛、水腫、肝臟病、脾臟病、黃疸、熱病、急性躁病、跨痛等ヲ敘述セルヲ見レバ、内科學ノ濫觴ハココニアリトイフモ、敢テ不當ニアラザルベシ。然レドモ、ヒポクラテスノ醫學ハ、内部器官ノ知識ニ缺ケタルガ故ニ、從テ、ソノ内部器官ノ變化及ビ疾病ニツキテノ知識ハ甚、幼稚ナリキ。余ハココニ、グヰツトレ⁽¹⁾、ヘーゼル⁽²⁾、フツクス⁽³⁾等諸家ノ所說ニ據リ、ヒポクラテス醫學ノ内科ニツキテ、ソノ重要ト認メラルル事項ヲ擧ケベシ。

病理學 ヒポクラテスハエムペドシクス以來、希臘ノ哲學家ガ唱道セルトコロニ本ツキ、『スベテノ物體ハ四種ノ元素ヨリ成レリ』トイフノ說ヲ奉ジ、コノ時マデ、經驗的ナリシモノヲバ、ソノ哲學ノ力ニヨリテ科學的ノモノニ變更シタリ。希臘ノ哲學家ガ四種ノ元素トシテ擧ゲタルハ、風、土、水、火ニシテ、コノ元素ハ相結合シテ以テ各種ノ物體ヲ形成ス、而シテ、

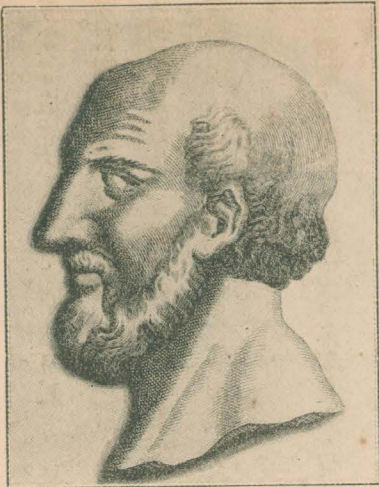
コノ四種ノ元素ニハ、各個固有ノ性質アリテ、風ハ寒、火ハ温、土ハ乾、水ハ濕ナリ。人體ニアリテモ亦同様ニシテ、コレヲ組成スルハ、風、土、水、火ノ四元素ナリ。ソノ固形部分ハ、土ヨリ成リ、流動部分ハ、水ヨリ成リ、兩部ヲ結合スルモノハ、風ト火トナリ、火ハ宇宙ノ間ニ存スルトコロノ氣狀ノモノニシテ、人體ニ入りテ、心臟ニソノ居ヲ占メ、血管ヲ通ジテ身體ノ各部ニ瀰蔓シ、體液ノ混合ヲバ正規ニ保チ、從テ身體ヲ保持スルノ用ヲナスナリ。

身體ノ成分ノ中ニテ、重要ナルハ流動成分ニシテ、一ハ血液、二ハ粘液、三ハ黄膽液、四ハ黑膽液ナリ。コノ四種ノ體液ハ、宇宙ノ四元素ニ相當シ、血液ハ温ノ元素ヲ代表シ、粘液ハ寒ノ性質ヲ代表ス、スナハチ風ノ元素ヲ存ス。粘液ハ腦ヨリ分泌シ、篩骨ヨリ出テ、身體ノ各部ニ向フ。黄膽液ハ肝臟ヨリ分泌シテ、乾ノ性質ヲ代表ス。黑膽液ハ脾ヨリ生ジテ胃ニ入り、水ノ元素ニ相當ス。コノ四種ノ體液、(スナハチ人體ノ四元素ノ混合狀態ノ正常ノ場合ヲバ體液佳良⁽⁴⁾トシ、コレヲ健康ノ狀態トス、若、コノ液ノ混合不調ナルトキハ、コレヲ體液不調⁽⁵⁾トス、疾病ココニ生ズ。殊ニ、各種ノ障礙ヲ起スコ

- (4) Eukrasie
- (5) Dyskrasie

ト多キハ粘液ト黄膽液トナリ。

此ノ如クニシテ、疾病ハ四種ノ體液ノ混合ノ不調ニ歸因スルモノトセラレ、從前ノ說ニ、疾病ヲ起スモノハ神又ハ惡魔ナリトイヘルニ反シテ、生活方法、殊ニ食餌、温暖、寒冷、空氣、風水及ビ蒸發氣、季節、日光、局處、睡眠、毒物、星運、遺傳、排泄物ノ滯積、年齢、生殖作用、暴力、等諸般ノ事項ヲ擧ゲテ、コレヲ疾病ノ原因ヲナスモノトセリ、蓋、コレ等ノ事項ハ、



ステイラクポヒ

四種ノ原液ニ不調ヲ起シ、ソノ一種ノ他ニ超越スルニヨリテ疾病ノ起スニ至ルト信ゼラレタルナリ。ココニ一二ノ例ヲ擧ゲテイヘバ、温暖ノ風ハ、濕潤及ビ粘液ヲ増加スルニヨリテ下痢ヲ起シ、又纖弱ノ身體ヲ生ズ、婦人ニアリテハ出血、不妊、流產ヲ起シ易ク、小兒ニアリテハ痙攣、呼吸困難及ビ癩癩ヲ起シ、男子ニアリテハ熱、痔、癩、麻痺、斯及ビ癩癩等ヲ生ズルコト多シ。寒冷ノ風ハ、強壯ニシテ體液ニ乏シキ人ヲ生ズ、コノ種ノ人ハ、便通緩徐ニシテ多量ノ膽液及ビ粘液ヲ有ス。故

ニ、此ノ如キ地方ニ住メルモノハ、肋膜炎、靜脈瘤、各種ノ急性症、膿胸、頑固ノ便秘、眼病、衄血及ビ重劇ノ癩癩發作等ニ罹リ易シ。女子ニアリテハ月經減少シ、分娩困難ニシテ、稀ニ流產スルコトアリ、授乳不能ニシテ、肺癆及ビ痙攣ニ侵サルノ傾向アリ。小兒ハ陰囊水腫ニ罹リ、生殖機能ノ熟スルコト遲シ。

涼水ハ人ヲシテ粘液質タラシメ、音聲ノ嘎嘶ヲ致ス、コレヲ飲ムトキハ脾腫ヲ起シ、體格纖弱及ビ水腫ヲ續發ス。

膀胱結石、腎臟結石、利尿困難、腰痛、脫腸等モ亦、各種ノ水ヲ飲ムニヨリテ起ル、而シテ、コノ場合ニアリテ、男兒ハ女

(1) De morbis internis
(2) De affectionibus

(3) κζύσος = Brennfieber
(4) Phrenitis

(5) Marasmus

兒ヨリモ病ムコト多シ、コレ女兒ノ尿管ハ短ク且、廣キガ故ナリ。
 季節モ亦、病ヲ發スルニツキテ重要ノ關係アリ、概シテ春季ヲモツテ最、人體ニ佳ナリトス。
 地方病ハ主シテ局部處ノ狀態ニ基ツキテ發シ、流行病ハ、季節及ビ氣候ノ變化ニ因リテ起ル。
 病理各論 ヒボクラーテスノ著述中ニハ系統的ニ疾病ノ各種ヲ列舉セルモノアラズ、シカモ、既ニ上段ニ説キタルガ
 如ク内部疾病⁽¹⁾、疾病⁽²⁾等諸編ノ内ニ、重要ノ疾病ヲ敘述シタルモノ尠カラズ。ココニハ、ソノ主要ナルモノヲ抄録スベシ。
 疾病ニハ劇熱性ノモノト、緩慢性ノモノトアリトイヘリ、コレ今日、吾人ガ急性病及ビ慢性病ト稱スルニ相當セリ。又ソノ發
 生ノ狀態ニ從ヒテ、地方病、流行病及ビ散發性疾患ヲ區別セリ。
 熱病ハ四原液ノ調和ヲ失スルニヨリテ起ルモノニシテ、ソノ原因ハ飲水或ハ瘴氣ナリ。熱病ノ中ニテ重要ノモノハ地方病
 性ノマテリア熱⁽³⁾ニシテ、コレニ一日熱、二日熱、四日熱等ヲ區別セリ。
 灼熱⁽⁴⁾ハ劇熱ヲ呈スルトコロノ流行病ニシテ、コノ内ニ弛張熱ヲ呈スル症アリ、内熱外寒ヲ主徴トス。原因ハ膽液ニシテ、コ
 レニ肺炎ヲ伴ナフヲ例トス。
 橫隔膜炎⁽⁴⁾ト名ツケラレタル熱病ハ、劇度ノ稽留熱或ハ弛張熱ニ、思考力ノ持續的障礙ヲ呈セルモノナリ。タソスニ流
 行シタル流行性肺癆ハインフルエンザト同一ノ症ナルカ、又ハコレニ類似ノ症ナルベシ。
 實布垤里腸室扶斯、膽汁性室扶斯モ亦、記載セラレ、流行性耳下腺炎ノ瘰癧丸ニ轉移セルトモ著目セラレタリ。
 局處疾患ノ内ニテ、シバシバ擧ゲラレタルハ水瘡、スコルプート(血性イレウス)、アフト扁扁桃腺炎、赤痢、完穀下痢、裏急
 後重下痢、イレウス、肝臟及ビ脾臟ノ腫脹等ナリ。肝臟腫脹ハ急性又ハ慢性ニ發起シ、黃疸、水腫及ビ枯瘦⁽⁵⁾ヲ續發
 ス。脾臟腫脹ハ衄血ヲ起スコト多シ。

呼吸器病トシテ擧ゲラレタルハ鼻感冒、鼻潰瘍、鼻ポリープ、アングーナ、喉頭狹窄、慢性喉頭炎、呼吸器加答兒肺
 炎、肋膜炎、膿胸、咯血、肺癆等ナリ。

肋膜炎ト肺炎トハ、時ニ確乎トシテ區別セラレザルコトアリ、其一側ニ病變ヲ呈セルモノヲバ肋膜炎トシ、兩側ニ病變ヲ呈
 セルモノヲ肺炎トセラレタル場合アリ。兩症ノ原因ハ腦ヨリ流下スルトコロノ粘液ガ肺及ビ肋膜ヲ刺戟スルニヨルモノニシテ、
 粘液ハココニ膿ニ變ジテ咯出セラレ、或ハ肺若クハ肋膜腔ニ膿竈ヲ生成スルナリ。肋膜炎ハ肺炎ニ續キテ起ルモノニシテ、
 肺ノ炎症ニ罹リテ容積ノ増大セルガタメニ、肋膜ヲ壓シテコレニ炎症ヲ傳フルナリ。肋膜炎ノ一症ニ、乾性ノモノアリ、コレ過
 度ノ渴ノタメニ起ルモノニシテ、乾キタル肺ガ、濕メリタル肋膜ニ粘著スルニ基ツキ、胸脇刺痛、熱等ノ症狀ヲ呈スルナリ。
 肺炎及ビ肋膜炎ノ後病トシテ、頻回遭遇スルモノハ膿胸ナリ。膿胸ニハ三様ノ意義アリテ、廣義ニテハ膿ノ胸腔及ビ腹
 腔ニ蓄積スルヲ云ヒ、狹義ニテハ肺若クハ肋膜ニ膿ノ蓄積スルヲ云ヒ、最狹義ニテハ膿ノ肋膜ニ蓄積スル場合ヲ指セリ。
 水胸ノ一症アリテ、牡牛羊豚ニ見ルコト多シトイヒ、又肺丹毒ト名ツケラレタル一症アリ、夏期肺ノ乾燥ノタメニ起ルモノ
 トセラレ、症狀ハ劇熱、乾咳、胸内充滿ノ感、胸痛、血ヲ交フル液若クハ膽汁及ビ粘液ノ咯出等ヲ主要ノモノトス。コレア
 ルペンステツペンナリ。

肺結核ハ血液、殊ニ粘液ノ血中ニ充填スルニヨリテ起ル、血液及ビ粘液ハ氣管枝内ニアリテ乾枯シ、肺ニ潰瘍ヲ生ジ、
 或ハ限局性ノ炎竈ヲ生ジ、コノ病竈ハ膿ニ變ジテ、空洞ヲ形成スルナリ。肺結核ヲ發生スルニ方リテハ、最初ニ音聲變換
 アリ。次テ胸部及ビ背部ノ疼痛、熱、咯痰等ノ諸症アリ。肺結核ノ痰ハ海水ニ沈没シ、火中ニ投ズレバ臭ヲ放ツ。其
 他、毛髮ノ萎縮、下痢、病ノ末期ニ至リテハ譫妄ヲ發ス。

ヒボクラーテスノ書ニハ、肺結核ノ傳染性ニツキテ、特ニ記述セントコロラズ。シカレドモ、ヒボクラーテスノ時、世ノ人ガ、既ニ肺結

(1) Isokrates
(2) Aristoteles

核ノ傳染性ヲ知リシコトハリットレ、マルクス諸家ノ研究ニヨリテ明ナリ。ソノ説ニ據レバ、肺結核ノ傳染性ナルコトハイソクラテス⁽¹⁾、アリストテレス⁽²⁾ノ著述中ニ明記セラレタリト云フ。

心臓病ニツキテハ、何等ノ記述ナシ。コレ古代ノ所説ニ同ジク、ヒポクラテスモ、心臓ノ病ヲ認メズ、心臓若、傷ツケラレバ直チニ死シテ病ムノ暇ナシト信ジタレバナリ。諸種ノ疾病ニアリテ心臓ノ鼓動ノ催進スルコトニツキテ記述セル場合アレドモ、固ヨリ重要ノモノトハ見ラレズ。動脈管ノ破裂ニ本ツキテ起ルトコロノ症状モ記載セラレタレドモ、甚、不十分ナリ。

泌尿器ノ疾病ニテ、當時希臘ニ多カリシハ結石ナリ。結石ノ腎臟及ビ膀胱ニ生ズルハ、潦水ヲ飲ムガタメニシテ、殊ニ熱性膀胱ヲ有スル人(尿利ノ少ナキモノ)ニアリテ、コノ病ヲ起スコト多シ。

腎結石ノ後病トシテ腎膿瘍ヲ起ス。コレニ急性ト慢性トアリ。

腎臟炎ハ殊ニ夏期ニアリテ、粘液及ビ膽汁ノ作用ヲ逞クスルニ由ル。

膀胱炎ニ急性ト慢性トノ二類アリ、小兒及ビ老人ノ急性膀胱炎ハ治癒スルコト難シ。

糖尿病ハ、既ニ印度人ノ知ルトコロナリシモ、ヒポクラテスハ未、コレヲ記載セザリキ。

男子生殖器病トシテハ、轉移性ノ辜丸腫瘍(流行性耳下腺・咳嗽・ヘルニア・辜丸水腫・辜丸靜脈腫尖形コンチローム・包皮潰瘍等)ナリ。

小兒病ノ中ニハ、各種畸形ノ外ニ、急性腦水腫ヲ舉ゲタリ。扁桃腺ノ上ニ、蜘蛛網ノ如キ滲出物ヲ生ジ、コレヲ排除スレバ更ニ新ニ發生シ、嚔下麻痺ヲ起シ、滲出物咽頭ニ及ベバ危険甚シク、呼吸困難ヲ起スト記載セルハ、實布垓里ノ症ナラン。

寄生蟲ノ中ニテ舉ゲラレタルハ條蟲・蛔蟲・蟯蟲ナリ。

(1) Phrenitis

(2) Pneuma

(3) Enodios, u. s. w.
(4) Temperament

神。經。系。統。ノ疾患ノ重要ナルモノハ、ソノ症状ニヨリテ、知ラレタリ。神經ノ構成ニツキテノ知識ニ缺ケ、腦ヲモツテ粘液分泌ノ器官トナシ、又感覺及ビ運動ハココヨリ生ズルモノトナセシ等、今日吾人ノ知識ニ遠ザカルコト甚シト雖モ、ソノ症状ニヨリテ認メラレタルモノニハ、第一ニ横隔膜炎⁽¹⁾アリ、(前ニモ出ツ)、急性熱病ニ腦性發揚ヲ伴ヘルモノニシテ、肺炎及ビ腸室扶斯ニアリテ腦ノ侵サレタル場合ハコレニ屬スベシト思ハル。

神經系統ノ疾病ハ、腦ヨリ流下スルトコロノ粘液ノ作用ニヨルモノトセラレ、粘液、腦ヨリ下リテ血管ヲ填塞シ、血及ビ靈氣⁽²⁾ノ流通ヲ妨グルトキハ、卒中及ビ偏癱ヲ生ズ。脊髓癆、腰痛、痛風及ビ癱瘓質斯モ、粘液ノ薦骨脊髓足脚・痔靜脈ニ入りテ、コレヲ填塞スルニ因リテ起ルモノトス。

跗指痛風ハ關節疾患ノ中ニテ最、痛楚甚シク且、頑固ノモノトシテ舉ゲラレ、顔面麻痺ハ卒中ノ前徴トシテノ外ハ、著明ナラザル疾病ナリト記サレタリ。

麻痺ニ續キテ起ルトコロノ筋肉ノ萎縮及ビ截癱モ亦、記載セラレタリ。

癲癇ニツキテノ記述ハ詳細ナリ。當時世人ガ、癲癇ノ發生ヲ神ノ所爲ニ歸シ、種々ノ神⁽³⁾ヲ舉ゲテ、コレヲ癲癇ヲ起スモノナリトセルニ反シテ、癲癇ハ神ノ所爲ニヨリテ發スルモノニアラストイフコトヲ辯ジ、更ニ説ヲナシテ曰ク、癲癇ハ腦ノ疾患ノ一種ニシテ、腦ハ感覺・運動及ビ精神作用ノ中樞器官ナリ、ソノ直接ノ原因ハ、頭内ニ粘液ヲ生ジ、タメニ腦ノ障得ヲ受クルガタメナリ。癲癇ハ稟質⁽⁴⁾、肺結核・脾臟疾患ニ同ジク、遺傳素因ヲ有スルモノニシテ、コレヲ發スルハ粘液質ノモノニ多ク、膽液質ノモノニ少ナシ、幼時ヨリ該病ノ芽子ヲ蓄フルニアラザルヨリハ、年齢二十歳以後ニアリテ癲癇ヲ發スルコトハ甚、稀ナリ。癲癇ノ發作ヲ起スハ多クハ風ノ變換ニヨルモノニシテ、南風ノトキニ癲癇ノ發作ヲ見ルコト頻回ナリ。癲癇ノ症状ニツキテノ觀察ハ詳細ニ涉リ、ソノ音聲ヲ失ナヒ、意識ヲ失ナフハ突如トシテ血管ニ侵入シタル粘液ノタメニ靈氣ノ腦及ビ胸ノ

静脈ニ入ルヲ妨ゲラルルニ由ルト説明シ、痙攣ヲ發スルハ、血管内ノ靈氣ガ、粘液ノタメニ下方又ハ上方ニ逐ハルルガタメナ
リト解釋シタリ。

婦人ノヒステリーニツキテノ記述モ亦、婦人病篇ノ中ニ擧ゲラレタリ。

精神病ニツキテノ知識ハ最、粗略ニシテ、精神病ト、譫妄ト、コレニ類似セル熱病症状トハ互ニ相區別セラレズ、若年ノ男
女、稀ニハ成年ノ男子ニアリテ、癩癩ガ安語、眩暈、驚愕、縊死企圖ヲ呈スルコトアルヲイヒ、又生殖機ノ既ニ熟セル女子
ガ、婚姻セザル場合ニハ、ソノ月經時ニ、上記ノ症状ヲ呈スルコトアルヲ記セリ。月經閉止ニ際シテハ、血液ハ精神ノ中樞ト
セラレタル心臓内ニ入りテ、譫妄、狂走、驚愕、自殺企圖ヲ呈スルナリ。

診斷學 他覺症狀ノ檢索ニ重キヲ置キ、ソノ成績ニ本ツキテ、診定スベシ。シカレドモ、病者ガ告白スルトコロノ自覺ノ症
狀ヲ度外視スベキニアラズ。病者ノ夢ノ如キハ、ソノ病ヲ診スルニ裨補アルガ故ニ注意スベシトナセリ。

醫家ノ病者ヲ診察スルハ、早朝日出テタル後、多時ヲ經ザル間ニスベシ、コレコノ時ニアリテハ、醫家ノ觀察鋭敏ニシテ、ソノ
判斷ノ正確ナルガ故ナリ。

診斷上ニ必要ナルハ、全身ノ状態ヲ視ルコトナリ、宜シク、病者ヲ裸體ヲラシメテ、健康ノ状態ニ異ナルトコロアルヤ否ヤヲ檢
スベシ。タトヘバ、胸部ノ疾病ニアリテハ、胸膈ノ形狀及ビ毛髮發生ノ狀況ヲ檢スルコトヲ怠ルベカラズ。次テ榮養ノ狀況、消
化器ノ障礙(噯氣、風氣、大便、殊ニ呼吸器疾患ニアリテハ熱ノ經過ニ注意スベシ。體溫ヲ檢スルニハ、手ヲ胸部ニ置キ
テスベシ。脈ニハ重キヲ置カス。

ヒボクラーテスガ重ク見タルハ他覺的診斷ニシテ、醫家ノ注意ヲ要ストシテ擧ゲタル症状ハ、皮疹、運動風氣、睡眠
及ビ醒覺不安、惡寒發作、嘔吐、下利、咳嗽、咯痰、吃逆、尿噴嚏、流淚、餓渴、多血、疼痛、疼痛缺如、病者ノ精神

状態及ビ言語、鼻粘膜ノ性状、心窩、四肢、眼ノ狀況、皮膚ノ色澤、動悸、皮膚硬化、靱帶及ビ關節ノ強硬、毛髮爪
甲、皮臭、口臭、耳臭、大小便ノ臭、創傷ノ臭、汗臭、夢、乳房精液、子宮ノ狀況等ナリ。

深ク藏レテ顯ハレザル疾病ヲ診スルニ方リテハ、試ミニ下劑ヲ與ヘ、又ハ歩行シテ勞セシメタル後ニ、コレヲ診スルヲ法トスベシ。
膿胸、肝臟病及ビ腎臟病ノ場合ニハ、コレヲ觸レテ檢シタルナラント思ハレドモ、打診ノ法ガ、コノ時ニ行ハレタリトノ記載
ハアラズ。コレニ反シテ、聽診ガ胸病ノ診斷ニ際シテ用ヒラレタルコトハ確實ナリ、スナハチ、化膿性肺炎ノ結果トシテ現ハルル
モノトセラレタル膿胸ノ場合ニハ、醫家ハンソノ手ヲ病者ノ肩ニカケテ、胸部ヲ震搖シ、コレガタメニ膿ガ、胸壁ニ打タレテ、一種
ノ雜音ヲ發スルヲ聽キテ、コレヲ診定スベシト説キタリ。

嘔吐、吐物、小便及ビ大便ノ檢査モ、診斷上忽諸ニ附スベカラザルモノトセラレタリ。嘔吐及ビ大便ニツキテハ、病者ノ自
覺症狀ノ他ニ、排泄物ノ量、性状、ソノ内ニ食物残渣、水、粘液、膽液、酸ヲ混和スルノ有無等ニ注目スベシ。小便ニツキ
テハ、ソノ變化ガ泌尿器ノ局處障礙ニ因スルカ、又ハ全身性障礙ニ本ツケルカラ識別スベシ。尿ヲ震盪シテ、水泡ヲ生ジ、
永クソノ水泡ノ留マル場合(蛋白ヲ含メル尿)ニシテ、視力障礙及ビ眩暈ヲ伴ナヘルトキハ、痙攣發作ヲ起スノ徵ナリトセ
ラレタリ。

豫後學 疾病ノ豫後ヲ定ムルコトニハ、特別ノ注意ヲ拂ヒ、醫家ハンソノ病者ニ對シテ、疾病ノ轉歸ヲ豫言スルコトニ熟練
スルヲ強要セラレタリ。

豫後ヲトスルノ症状ハ、スナハチ診斷ヲ下スノ標準トスベキ症状ニシテ、渴、衄、血死人ノヤウニ臥スコト乾燥、虛脫ニ對スル
抵抗力、呼吸障礙、上腹部腫脹、四肢厥冷、眼、皮膚ノ色澤、脈、震戰、皮膚硬化、臄、關節、音聲、思考力、毛髮爪
甲、皮膚臭、口臭、耳臭、淚、夢、聽覺、忍耐、報告ニ耳ヲ傾クルコト、子宮分泌物、鼻腔分泌物、眼脂等コレナリ。

(1) Facies hippocratica

(2) Materia peccans

(3) φύσις = Naturkraft

概シテ言フニ、豫後佳良ノ條件トセラレシハ、榮養佳良・四原液混合ノ佳良・一定ノ皮膚色・睡眠安穩・安樂ノ體位・思考明瞭・發汗多量(殊ニ分利ノ日ニアリテ)・運動可能氣分快活等ニシテ、コレニ反シテ、豫後不良ノ徵候トセラレシハ、上記ノ事項ニ反スルモノ、及ビ咬牙・言語斷續・口及ビ目ヲ開キ居ルコト不自然ノ體位・壯熱不眠・下痢・食思不振等ナリ。豫後最、不良ニシテ、二十四時間以内ニ、原因去ラザレバ死亡ニ陥ルトセラレシハ、所謂ヒポクラテース顔ニシテ、尖リタル鼻凹ミタル眼・顳顬部ノ肉ノ落チタル耳冷ク、翼ノ立チタル前額皮膚ノ乾固・顔色黃、黑或ハ鉛色ヲ呈シ羞明・流涙・眼球旋轉變小・潮紅變黃・眼ヲ開キ居ルコト等ヲソノ徵候トス。

其他、顔面ノ灰色・唇ノ冷エテ下ガレ・腹臥・譫妄・血斑・呼吸冷汗・上腹膨痛臭膿・急性病後ノ水腫・身體厥冷・手及ビ爪ノ褪色・生殖器ノ牽縮・便通ノ持續等ハ生命危險ヲ表示スルコロノ症狀ナリトセラル。ステテノ疾病ノ經過ニ、三期アリ、第一期ハ身體内ニ入りタル害物ガ病素トシテ、加工セラレザル状態ニシテ作用スルノ時期ニシテ、コレヲ未熟期トス。第二期ハ、成熟期ニシテ、コロ期ニハ、病毒ガ殊ニ熱ノ感作ニヨリテ、無害ノモノトナルヲ見ル。第三期ハ分利期ニシテ、コレニ二様アリ、甲ハ固有ノ分利ニシテ、病毒ハ汗・尿・咯痰等ノ分泌物ニヨリテ迅速ニ、且、全然、體外ニ排除セラル、乙ハ散換ニシテ、病毒ノ排除ハ遅徐ナリ。急性ノ疾病ニアリテハ、ソノ經過ニハ一定ノ期日アリ、ソノ分利ハ整然トシテ一定ノ時日ニ發呈スルモノニシテ、大抵七日ヲ以テ、ソノ期トス。

治療學 ヒポクラテースハ諸般ノ病理的障礙ハ一種ノ自然ノ力ニヨリテ調停セラルルモノト信ゼリ、故ニヒポクラテースハ、疾病ヲ治療スルニ方リテ、『疾病ハ自然ニ治癒ス、醫家ハ宜シク、コノ自然ノ力ヲ檢束シ、若クハ獎勵スルコトヲ圖ルベシ』對抗ハ對抗セルモノノ治藥ナリ、スナハチ治療ノ方術ハ、添加ト、除去トニアルノミ。類似ノモノハ病ヲ起シ、類似ノモノハ病ヲ治ス、病ヲ起ストコロノ感作ハ、又コレヲ治スルノ力アリ。自然ニ從フベシ、自然ハ良醫ナリ等ヲ原則トシ、

(1) Ptisane
(2) Hydromel (aqua mellis)
(3) Oxymel

疾病ヲ療スルニソノ體力ニ重キヲ置キタリ。從テヒポクラテースハ醫學ニアリテ、主ニ用ヒラレタルハ食養法ニシテ、食物ヲ制限シ、或ハコレヲ増加シテ、以テ身體ノ勢力ヲ保持スルコトヲ力メタリ。

ヒポクラテースハ、多數ノ病者ニアリテハ榮養物ノ量ヲ制限スベシト説ケリ、殊ニ病ノ極期ニアリテ然リトス、シカレドモ、食物及ビ飲料ノ量ハ病人ガコレニ堪ユルヲ度トシ、單ニ度目ニヨリテソノ量ヲ定ムベカラズトイヘリ。負傷者及ビ熱病者ニハ概シテ流動食ヲ與ヘ、ソノ他ノ病者ニハ煮タル食品ヲ與フルヲ法則トス。中ニ就キテ、最、重要ノモノハ所謂大麥煎ニシテ、ヒドロメル(蜜水)オキシメル(酸蜜)〔蜜醋・水ノ混合物〕牛乳・葡萄酒モ亦常ニ應用セラレタリ。其他、インゲン豆・豌豆・山藜豆・黍・ヤハズ・豌豆・扁豆・亞麻仁・紫蘇實・ハウチハ豆・胡瓜・罌粟・大蒜・葱・大韭・大根・芥子・胡荽・蒿苳・茴香・オランダ芹・各種ノ菓實・魚肉・獸肉・鳥肉・鶏卵・乾酪等、諸種榮養品ニツキテ、コレヲ食養法ニ用フルノ注意ヲ舉ゲタリ。

榮養品ノ外、身體ノ運動・睡眠・按摩・浴等衛生的の方法ニモ注意シ、殊ニ慢性病ニハコレヲ施シテ功アリトセリ、ダトヘバ、脾腫ニハ三十日間連續シテ材木ヲ鋸截セシメ、腎臟病ニアリテハ、演説・音讀・唱歌ニヨリテ音聲ノ練習ヲナスコト・食餌ノ量ヲ相當ニ制限スルコト等ノ方法ヲ施スベシトセリ。

刺絡ハ肺炎・上腹部ノ炎症・アングーナ等ノ場合ニ用ヒラレタリ。刺絡ヲ施スノ部位ハ、通常上腕ナレドモ、又、罹病患部ニ連接セル部分ニモ施スコトアリ、ダトヘバ、アングーナニアリテ、舌ノ靜脈ニ刺絡ヲ施スガゴトシ。瀉血ノ量ハ其人ノ體質・年齡・季節及ビ流出スルコロノ血液ノ色ニヨリテ相同ジカラス。肺炎及ビ肋膜炎ニアリテハ、流出血液ノ鮮紅色ヲ呈スルニ至ルマデ、或ハ初、鮮紅色ナリシ場合ニハ、暗黒色ヲ帶アルニ至ルマデ瀉血ス。豫防的ニモ刺絡ハ施サレタリ。シカレドモ、ヒポクラテースハ概シテ刺絡ヲ用ヒシコト稀ナリキ。

乾角モ亦、既ニ應用セラレタリ。

治療藥ノ中ニテ、外用ニ供セラレタルモノハ油・水・醋及ビ葡萄酒ヲ以テ最、重要ノモノトス。鼻・膀胱・創面ニ溫湯ヲ灌ギ、蒸氣浴・日光浴・溫器法ヲ全身又ハ局部ニ施スノ法モ行ハレタリ。發汗法トシテハ全身ノ溫拭・溫室ニテ脂肪物質ヲ皮膚ニ塗敷スルノ法等ヲ用ヒタリ。冷水ノ應用ハ一層盛ニシテ、タトヘバ急性ノ肺病ニ冷器法ヲ施スガゴトシ。海水浴モ賞用セラレタリ。醋及ビ醋蒸氣ハソノ作用海水ニ等シトセラレタリ。

藥物ノ應用セラレタルモノハ甚、尠カリキ。下劑トシテハ牛乳、殊ニ驢馬ノ乳ノ煮タルモノ、蕪菁榨汁、大根榨汁等ヲ單獨ニ用ヒ、又ハコレヲ酸蜜ニ伍シテ用フ。峻下劑ニハ白藜根及ビ黑藜根・タウダイ草實、殊ニウエラテリウム等アリ。灌腸ハ甚、屢、用ヒラレシガ、ソノ中ニテ最、緩和ノモノハニトルム(炭酸曹達)・蜜・甘酒及ビ油ヨリ成レルモノナリ。發汗藥ハ用ヒラレザリシニ似タリ。利尿藥ノ中ニテハ、カンタリヂン・葱・オランダミツバ・アビウム、海葱等ヲ主要ノモノトス。麻醉藥ニハ蔓陀羅華アリ、痙攣ニ内用セラレ、又ベツサリウムニテ外用セラレタリ。罌粟液モ亦稀ニ用ヒラレタル形跡アリ。

疾病ノ各個ノ療法ニツキテ、一ニノ例ヲ舉グレバ次ノ如シ。

赤痢及ビ下痢ニ對シテハ、粘液ノ流出ニヨリテ起レル疾患ノ多數ニ於ケルニ同ジク、嘔吐藥・吐劑・食養法・牛乳・粘液・油・溫湯ヲ下腹部ニ灌ク等ノ法ヲ施シ、裏急後重ニハ甘酒粕ヲ用ヒ、イビウスニハ空氣ヲ腸内ニ送入スルノ法ヲ施ス。

肝臟ノ腫大ニハ黃楊樹棒ニ煮エタル油ヲ浸シタルモノニテ燒灼法ヲ施スラ法トセリ。

アングリーナ及ビ舌ノ潰瘍ハ、血液ノ頸部血管ニ停滯スルニヨリテ生ズルモノナリトシテ、刺絡・嘔吐藥及ビ下劑ヲ用ヒテコレヲ治シタリ。

肺炎及ビ肋膜炎ノ療則ハ大抵同様ニシテ、解熱ヲ目的トスルコロノ普汎療法、スナハチ溫浴・溫器法・油類ノ塗布・

- (1) Dogmatiker
- (2) Platon
- (3) Aristoteles

食養法等ヲ施シ、第七日ノ後ニ至リテ始メテ外科的處置ヲ施スラ法トセリ。大麥煎ハ殊ニコロノ病ニ賞用スベシトイフ。肺膿胸ニ對シテハ始メ嘔吐藥ヲ與ヘ、次デ、咳嗽ヲ起ストコロノ藥品・脂肪食及ビ鹹食・酸酒ノ内用等ヲ施ス、刺戟性ノ藥品ヲ喉頭内ニ注ギ、劇甚ノ嘔吐ヲ起サシメテ氣管枝ヨリ膿ヲ排泄ヲ圖ルノ法モ行ハレタリ。肋膜腔ノ膿ハ刀或ハ燒灼器ニテ排除セラル。

肺結核ノ療法ハ、大略膿胸ノ療法ト同様ニシテ、多量ノ食餌殊ニ牛乳・麵包・大麥蒸餅ヲ少量ヅツ、頻回與フルコト・匾豆水・黑藜蘆・胸部烙鐵ヲ施スコト等ヲ主要トス。

コレヲ要スルニ、ヒポクラテースノ治療學ニハ、嚴格ノ意義ニテ言フトコロノ主義ヲ存セズト雖モ、シカモノノ治療ノ方式ニハ根據トスルコロアリ、疾病ハ自然ノ力ニヨリテ治癒ス、人體ニハ病的感作ニ抵抗スルコロノ力アリ、故ニ、醫家ハ、病人ノ體力ヲ保持シテ以テ自然ノ治癒機轉ヲ幫助スルコトヲ圖ルベシトセリ。何事モ急劇ニ轉變スルコトハ害アリ、填充モ、排除モ、急劇ニスルハ共ニ危険ナリ、暖ムルコトモ、冷ヤスコトモ、亦然リ、多キニ過グルコトハ自然ノ敵ナリ、故ニ、タトヘバ、排除スベキ場合ニ排除スルニモ、ソノ方法ハ緩徐ナルベシ、又個人及ビ外界ノ事情ヲ顧慮シテ、ソノ方法ヲ施スベシト云ヘリ。

希臘醫學ノ第四期ハ、所謂教義學派⁽¹⁾ノ興リシ時代ニシテ、先賢ガ説キタルコロヲ金科玉條トシテ尊奉シ、コレヲ教義トシテ一ノ系統ヲ組成セリ。此ノ如クニシテ、教義學派ノ努力ニヨリ、ヒポクラテースノ醫學ハ、大體ニ於テソノ所説ヲ變更スルコトナク、只僅ニ一二ノ點ノ多少修正セラレタルモノアルヲ見ル。プラトン⁽²⁾(紀元前四百二十七年乃至四百四十七年)ノ哲學ハ、醫學ニ影響セルトコロ甚、尠カリキ。次デ出デタルアリストテレス⁽³⁾(紀元前三百八十四年乃至三百二十二年)ハ、醫學ノ大家ニシテ、自然科學ノ研究ニ力ヲ致シ、殊ニ人體ノ解剖學ニ關スル業績ノ多カリシニヨリ

テ、ソノ哲學ハ、醫學ノ上ニ、著明ノ感作ヲ及ボシタリ。シカモ、尙、教義學派ノ勢力隆昌ニシテ、我醫學ノ新方面ニ向フテ發展スルコトナカリキ。

希臘醫學ハ、紀元前三世紀ノ頃ニ及ビテ、ソノ第五期ニ移レリ、コノ頃、アレキサンドリアノ勃興シテ、希臘學術ノ中心トナルアリ、我醫學ニアリテハ、解剖學ノ研究、新タニ興リ、コノ時マデ、心臟ハ感覺ノ中樞器官ナリトセラシテ改メテ、思考及ビ感覺ノ中樞ハ、腦髓ニアリトシ、神經ノ髓等ト混同セラシテ區別シ、血管系統ニツキテノ知識モ精シクナリテ動脈ト靜脈トヲ區別シ、動脈管内ニハ靈氣⁽¹⁾ノ外ニ、血液ノ流通スルヲ説キタリ。殊ニ、人ノ屍ニツキテ病理解剖的研究ヲ企テ、又手術的⁽²⁾外科ノ恢弘ヲ圖リテ、醫學ノ實際上ノ發展ニ貢獻スルコト多カリシハ、アレキサンドリア學派ノ功績ナリ。

(1) Pneuma

- (2) Herophilus
- (3) Erasistratus
- (4) Praxagoras
- (5) Chrysippus

ヘロフィルス

アレキサンドリアニ二人ノ大醫アリ。一人ヲヘロフィルス⁽²⁾トイヒ、一人ヲエラジストラーツス⁽³⁾トイフ。ヘロフィルスハ紀元前約三百年頃ニ世ニ在リシ人ニシテ、コスノブラキサゴラス⁽⁴⁾及ビクニヅスノクリンヅプス⁽⁵⁾ヲ師トシテ醫學ヲ修メ、アレキサンドリアニ住ミテ、人體ノ解剖學、殊ニ神經系統ノ攻究ニ力ヲ盡シ、腦髓ヲ以テ精神ノ器官トシ、神經ノ知覺性ノモノト、運動性ノモノトヲ區別シ、動脈ト靜脈トヲ別チ、靜脈管ニハ靈氣ノミ流通スレドモ、動脈管ニハ靈氣ノ外ニ血液ノ存スルコトヲ説ク等、斯科ニ關スル發明尠カラズシテ、後人ヨリ人體解剖學ノ創立者ト尊崇セラレタリ。

ヘロフィルスハ解剖學ノ泰斗アリシト同時ニ、病理學及ビ治療學ニツキテモ、時人ノ尊敬ヲ受ケタリ。ヘロフィルスハ人體ヲ構成スルトコロノ四種ノ元素ニツキテ、從來ノ所説ヲ排シ、人ノ生活ハ榮養・溫熱・思考・感覺ノ四力ヨリ成レルモノニシテ、コノ力ヲ生ズルノ場處ハ、肝臟・心臟・腦及ビ神經ナリトシタリ。

疾病ノ病理ヲ説クニ方リテ、ヘロフィルスハヒポクラテスヲ祖述シ、ヒポクラテス・ブラキサゴラスノ液體病理學ヲ奉ゼシカドモ、一定ノ體液ノ狀態ニヨリテ疾病ヲ起ストイフノ説ヲ廢セリ。而シテ、ソノ疾病ヲ論ズルニ方リテ、理論的説明ニ涉ルコトヲ避ケ、主ニ直接ノ症狀ヲ舉ゲタリ。ヘロフィルスハ、醫家ノ任務ヲ以テ、經驗シタル事實ヲ舉グルニアリトシ、從テ疾病ノ直接原因ヲ穿鑿スルコトニ重キヲ置カズ、症狀殊ニ脈及ビ解剖的變化ニ著目スルノ必要ナルコトヲ唱道シタリ。シカモヘロフィルスガ内科的⁽¹⁾疾病ニツキテ敘述セルトコロハ甚、不完全ナリキ。零碎ノ記錄中ヨリ一二ノ事項ヲ摘録スレバ、認識スベキ原因ナクシテ突如死亡ヲ致ス場合ハ、心臟麻痺ナリ。夢ニ二様ノ種類アリ、一ハ神ヨリ贈ラレタルモノ、一ハ身體ノ狀態ニ因ルモノ、一ハ精神ノ狀態ニ因ルモノナリ。齒牙ノ病メルモノヲ抜クコトハ戒慎スベシ、コレガタメニ死ヲ致スコトアレバナリ。コレヲ要スルニ、醫師ハソノ能力ノ限界ヲ知ラザルベカラズ、醫術ノ實際ニ際シテ、可能ト不可能トヲ識別スルハ完全ノ醫家ナリ、等ノ言アリ。

治療ニツキテハ、ヘロフィルスハ藥物、殊ニ植物性ノ藥品ヲ賞用シ、コレヲ神ノ手ト名ツケタリ。刺絡モ亦屢、用ヒラレタリ。出血ニ對シテハ、ヘロフィルスハ其師クリンヅプスノ法ニ從ヒテ、四肢ノ繃縛ヲ施シ、食鹽ヲ内服セシメタリ。

エラジストラーツス

エラジストラーツス⁽¹⁾(紀元前二百五十年乃至二百四十年ニ歿ス)ハメトロドルス⁽²⁾ノ門人ニシテ、ヘロフィル

- (1) Erasistratus
- (2) Metrodorus

スト時ヲ同フシ、有名ノ解剖學者トシテ、アレキサンドリア學派ノ泰斗タリシ人ナリ。

エラジストラーゼスハ、人體ノ構成ヲ論ズルニ方リテハ、デモクリトノ説ヲ醫學ニ應用シ、人體ハ原子ヨリ成レリトシ、エムベドレクス及ビヒポクラテスノ四元素説ヲ駁セリ。エラジストラーゼスハ生理及ビ病理ヲ説クニ、horror vacui (萬有ハ真空ヲ嫌忌ス)ノ理ヲ以テセシガ、饑餓、渴、消化、排泄及ビ呼吸モ亦全クコノ理ニ本ヅクモノトシ、身體ノ發育ヲモ同様ニ解釋シタリ。

靈氣ヲ區別シテ、一ヲ生活靈氣⁽¹⁾トシ、一ヲ精神靈氣⁽²⁾トス、生活靈氣ト精神靈氣トハ共ニ呼吸ニヨリテ心臟内ニ入り、前者ハ動脈ノ媒介ニヨリテ身體内ニ配送セラレ、後者ハ直チニ精神ノ坐所タル硬腦膜ニ達スルモノナリ。但、コノ説ハ、エラジストラーゼス以前、クリシツプス等ノ既ニ唱道セシトコロニシテ、エラジストラーゼスニ創マレルニアラズ。

エラジストラーゼスノ病理學ハ自家獨得ノ生理學の所見ニ基キ、疾病ハ尋常身體機能ノ障礙ニ外ナラズトナセリ。ダトヘバ、呼吸ノ障礙ハ、スナハチ疾病ヲ生ズトイフノ類ナリ。斯ノ如ク、エラジストラーゼスハ、疾病ノ本態ヲ、身體機能ノ異常ニ歸シタル後、更ニ進ンデ多血⁽³⁾ノ説ヲナセシガ、コノ説ハクリシツプスノ所説ニ本ヅキタルモノニシテ、榮養素ノ血管内ニ入りテ異常ノ充填ヲナストキハ、多血起リテ、靜脈壁ハ擴張シ、遂ニ炎症ヲ生ジ、靈氣ノ流通ヲ害シ、コレニヨリテ諸般ノ病症ヲ起スモノナリトスルナリ。而シテ血液ノ靈氣道ニ入ルハ、多血ノ作用ニヨルモノナラズ、動脈ヲ截切スルトキモ亦、同様ニシテ、靈氣ハ噴出シ、真空ノ不可能ナルガタメニ血液ハ外方ニ流レ出ヅルナリ。此ノ如キ靈氣ノ障礙ハ炎症ヲ起スノ原因ニシテ、コレガタメニ起リタル炎症ハ、動脈管ノ搏動ニヨリテコレヲ認識スベク、ソノ症狀ノ一ハ熱ナリ。手ニテ觸ルルニ身體ハ灼熱シ、動脈管ノ搏動ハ頻數トナリ、尿中ニ膿性沉澱アリ、又、常ニ煩渴ヲ引飲ノ症狀アリ。熱ニハ急速ノモノト、緩徐ノモノトアリ、麻痺、心臟病、胃口病、膽液病及ビ月經閉止ノ症狀トシテ發呈スルモノアリ。其他、多血ニヨリ

- (1) πνεύμα ζωτικόν
- (2) πνεύμα ψυχικόν

(3) πληθώρα = Plethora

(4) Kardialgie

テ起ルトコロノ病症ハ、痔核、出血、咯血、アングリーナ(扁桃腺及ビ會厭軟骨部ノ炎症)、關節炎等ナリ。多血ノタメニ胃ヲシテソノ内容ヲ擴大シ、若クハ縮小スルノ能力ヲ制遏スルニヨリテ消化障礙ヲ發起ス。肝臟及ビ脾臟ニ炎症ヲ起ストキハ血液ノ循環ヲ妨ゲ、淨清セラザル血液ハ、水様滲出物トナリテ腹膜ト内臟トノ間ニ蓄積シ、ココニ腹水ヲ生ズ。

治療學

エラジストラーゼスハ疾病ヲ治療スルニ方リテハ、疾病ノ因由ト、症狀トヲ詳ニスルノ必要ナルコトヲ説キ、ソノ治則トシテハ、スベテノ多血症狀ヲ治スルニ下劑ヲ以テセリ。下劑ノ中ニテハ、ソノ作用ノ緩和ナルモノヲ用ヒ、峻劇ノモノヲ排斥セリ。コレニ加フルニ、斷食、飲料及ビ食物ノ制限、輕キ食物ノ攝取、一定嗜好品ノ禁遏等ヲ以テシテ下劑ノ作用ヲ幫助セント勉メタリ。癩癩、腎臟病、脾臟病、肝臟病、痔核、炎症、イビウス、月經閉止、水腫等ノ諸症ハ皆、コノ法ニテ治療セラレタリ。下劑ニ代エテ、食後直チニ微溫飲料ヲ與ヘテ嘔吐ヲ起サシムルノ方法ヲ用フルコトアリ。麻痺及ビ水腫等ニハ灌腸ヲ用ヒ、腸管閉塞ニハ曹達ト食鹽トノ混合物ヲ灌腸セリ。又葡萄酒及ビ一種ノ飲料(記載不詳)ヲ痔核、肝臟病、膽液病及ビ水腫ニ應用セリ。

瀉血ハ病者ヲ衰弱セシムルノ弊アリトシテ、コレヲ排斥シ、コレニ代エテ、肩胛部、大腿部及ビ下腿部、腕部、生殖器部ヲ布帛ニテ緊縛スルノ法ヲ用ヒ、ダトヘバ、肺潰瘍、咯血及ビ痔核等ニ對シテ、常ニコレヲ施セリ。

體操、平地ノ散步、登山等ハ、病者ノ個性ヲ案ジ、規則ニ遵テコレヲ施サシメタリ。諸種ノ浴、拭擦法、寢法、發汗法、乾角等ハヒポクラテスノ法ノゴトクニ、コレヲ應用シタリ。

各個ノ疾病ニツキテ、療則ノ一ニテ摘録スレバ、加答兒ニ對シテハ、溫酒ニ浸シタル頭巾ヲ戴キ、酒及ビ熱油ニ浸シタル毛布片ヲ胸脇部及ビ橫隔膜部ニ置クノ法ヲ施シ、日射病ヲ療スルニハ濕海綿ヲ以テセリ。麻痺ニヨリテ尿ノ歇止ヲ起ストキハ、S字狀ノカテーテルニテコレヲ排出シ、或ハ病者ヲシテ跪カシメ、泡沫曹達ニテ尿道ノ尖端ニ觸ルルノ法ヲ用ヒタリ。

多血ヲ驅除スルニハ、獸肉・魚肉・牛乳・大麥及ビ粉食・飲料ヲ禁制シ、野菜・菓物・麵包ヲ攝取セシメ、コノ食養療法ニ兼テ、斷食・安靜・催吐法・下劑・發汗劑・身體運動・利尿法・各種ノ浴・卷法・緊縛・散步等ノ方法ヲ施用セリ。熱ニ對シテハヒポクラテスノ法ト同ジク、大麥煎ヲ用ヒ、體力ノ衰フルコトヲ防ガンガタメニ、多量ノ榮養物ヲ與フルヲ法トセリ。

アソクニナリテハ熱海綿或ハ卷法ヲ胸部ト腹部トニ交替シテ置キ、海狸香及ビ葡萄酒ヲ與ヘテ下利セシム。腹水ニ對シテ、穿腹術ヲ施スモノ甲斐ナシ、コレ腹水ノ原因ハ肝臟硬化ニシテ、水ヲ去ルモ、ソノ變化ハ永ク殘留スレバナリ。故ニ、コノ場合ニハ、溫和下劑・無花果或ハ芸香ノ貼布・灌腸・利尿劑・浴・散步・蒸氣浴及ビ一定ノ食餌(魚肉・鶏肉・獸肉・牛乳・蜜)ニヨリテ、ソノ原因ヲ治癒スルコトヲ圖ルベシトセリ。

エラジストラーゾスガ用ヒタル藥物ノ中ニテハ、人乳(毒獸咬傷)・牛乳ニ蜜及ビ鹽ヲ交セタルモノ(麻痺及ビ水腫)・烏腦ヲ葡萄酒ニ混ツタルモノ(毒蛇咬傷)・海狸香(アソクニ)等ヲ以テ、ソノ主要ノモノトス。

希臘醫學ノ第六期ハ、紀元前二世紀ヨリ紀元後二世紀ニ涉リテ、所謂經驗學派⁽¹⁾ノ盛行ハレタル時代ナリ。解剖學ノ中心タルアレキサンドリアニ、解剖學ヲ醫學上ニ必用ノ者トシ、病牀ニ於ケル治療的觀察ヲモツテ醫學研究上須要ノ事項トスル一派、スナハチ所謂經驗學派ノ起リタルハ寧、奇怪ノコトナレドモ、シカモ、當時ノ狀勢ヲ推シテ考フルニ、ヘロフィルス及ビエラジストラーゾスノ解剖學ハ不完全ニシテ、醫家ヲシテソノ必要ヲ認ムルニ至ラザリシモノナルベク、又多數ノ醫家ハ解剖學ニ精通スベキ機會ヲ有セス、加フルニ、人ノ屍ヲ解キ視ルハ罪惡ナリトノ宗教的觀念ノ盛ナリシガタメニ、フロフィルス及ビエラジストラーゾスノ學說ノ反動トシテ、經驗學派ハ興リタルナリ。而シテ、始メテ、コノ

(1) Empiriker

- (1) Philinus
- (2) Zeuxis
- (3) Hcraklides
- (4) Apollonius

說ヲ唱ヘタルハゾリヌス⁽²⁾ニシテ、コノ人ハ紀元前約二百八十年頃、世ニ在リテ、ソノ學ヲヘロフィルスヨリ受ケタルナリ。ゾリヌスニ次ギテ、ツオイキシス⁽³⁾・ヘラクザデス⁽⁴⁾・アポロニウス⁽⁵⁾等ノ諸家アリ、疾病ノ原因及ビ病理ヲ說クコトハ無益ナリトシテ、コレヲ排斥セルガタメニ、藥物ノ應用及ビ外科ノ技術ハ大ニ發展シタレドモ、内科ニアリテハ殊ニ擧グベキホドノ學說ハナカリキ。

アレキサンドリアノ全盛時代ハ極メテ短ク、ソノ文化ハ須臾ニシテ羅馬ノタメニ奪ハレタリ。コレヨリ先キ、紀元前四世紀ノ頃ヨリシテ、既ニ、希臘ノ醫師ノ羅馬ニ來往セルモノアリ、從テソノ醫學ハコノ人々ノタメニ多少羅馬ニ傳ヘラレタレドモ、眞ニ希臘醫學ヲ羅馬ニ移植シタルノ功績ハ、コレヲアスクレピアーデス⁽⁶⁾ニ歸セザルベカラズ。アスクレピアーデスハ紀元前百二十四年ノ頃、希臘ノブルサニ生マレ、クレオソングス⁽⁷⁾ニ就テ學ビタル後、バリウム・ヘルレス・ポント及ビアデンニアリ、年尙、壯ニシテ、羅馬ニ到タリシガ、天稟ノ才能ト哲學ノ知識トニヨリテ、速ニ儕輩ヲ超越シ、名聲ヲ國內ニ馳スルニ至レリ。

アスクレピアーデス

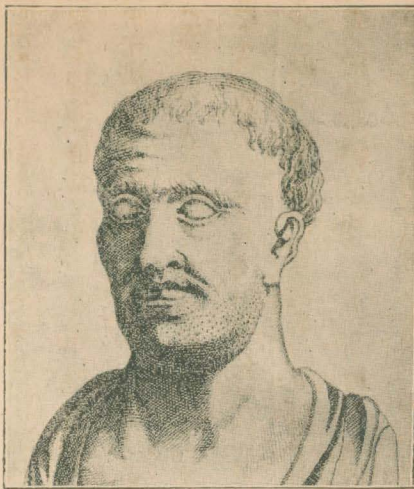
アスクレピアーデスハ單ニ學者トシテ、希臘ノ醫學ヲ羅馬ニ傳ヘタルノミナラズ、又、疾病ノ本能ニツキテ、獨創ノ說ヲナセリ。アスクレピアーデスハヒポクラテスノ液體病理學ニ反對シ、疾病ハ體液ノ變常ニヨリモ寧、身體ノ固形成分ノ變化ニ本ツクモノトナセリ。ソノ說ニ據レバ、人體ハ原子⁽⁸⁾ノ結合ニヨリテ成レル無數ノ小管⁽⁹⁾ヨリ組成セルモノニシテ、コノ小管ハ感覺性ヲ有シ、ソノ内ニ體液ヲ運行セシム、而シテ、ソノ原子ノ大小分量・排列及ビ運動共ニ正規ニシ

- (7) Atom
- (8) πόροι = Kanälen

- (5) Asklepiades
- (6) Kleophrantus

(1) Solidarpathologie

テ原子ヲ容ルルトコロノ氣孔ノ廣サモ亦、正規ナルトキハ、ココニ健康ノ状態ヲ得ベシ、コレニ反シテ、兩者ノ態度正規ナラズ、コレニヨリテ原子ノ滯滞ヲ致ストキハ、ココニ疾病ヲ生ズルナリ。此ノ如クニシテ、アスケレピアースノ學說ハ、ヒポクラテスノ液體病理學ニ對シテ固體病理學ト名ツケラル。



ステイアピレクシア

アスケレピアースハ疾病ヲ急慢ニ性ニ區別シ、又、始メテ痙攣ヲ類別シテ、緊張性・間代性トナシ、水腫ニモ急性ニ發スルモノト、慢性ニ起ルモノトノ數種アルコトヲ記セリ。日發熱ハ最大ナル基礎成分ノ滯滞ニ本ツキ、四日熱ハ最小ナル基礎成分ノ滯滞ニヨルモノトセリ。脈ハ治療上必要ノモノナリトシテ、精細ニ研究セリ。

治療ノ方則ハ、ソノ原子說ニ相當シテ、原子ト氣孔トノ關係ヲ調へ、原子ノ大小及ビ運動ノ異常ヲ除クコトヲ勉ムルヲ主トス。而シテ、コノ目的ヲ達センガタメニ、アスケレピアースハ飲食、殊ニ酒ノ禁斷、身體ノ摩擦、能働性及ビ受働性ノ運動、各種ノ冷水治法、殊ニ雨浴ヲ應用セリ。ヒポクラテスノ自然治癒說ニ反シテ、自然ハ却テ疾病ノ治療ヲ害スルモノトナシ、催吐及ビ瀉下ノ方法ヲ用ヒズ、又、強烈ノ作用ヲ有スルトコロノ藥品ヲモ摺斥シタリ。瀉血モ戒慎シテコレヲ應用スベシトセリ。

テミソン、フォン、ゾオチケイア

(1) Themison von Laodikeia
(2) Methodiker
(3) τόγος = Tonus

アスケレピアースノ所說ハ、ソノ死後、紀元第一世紀ノ頃、門人テミソン、フォン、ゾオチケイア⁽¹⁾ノタメニ、結束セラレテ、ココニ守法學派⁽²⁾ト名ツケルトコロノ一學派ヲ成スニ至レリ。守法學派ノ說ニ據レバ、生活體ノ固形部分ハ、弛緩及ビ收縮ノ能力ヲ有スルモノニシテ、コレヲ緊張力⁽³⁾ト名ツク。コノ弛緩ト收縮トノ各部ニ互ニ交替シテ現ハルニヨリテ生活體ノ諸種ノ現象ヲ呈スルモノニシテ、カク緊張力ノ交替ニ現ハルハ、一ハ外界ノ感作ニヨリ、一ハ身體ノ一部分ガ他ノ部分ニ及ボストコロノ感作ニ本ツク。若、コノ緊張力ガイツレカノ部分ニアリテ障礙セラルトキハ、ソノ部分及ビラノ部分ニ關聯セル機能ノ變常ヲ起ス、コレヲ疾病トス。而シテ、コノ場合ニアリテ、疾病ノ發呈スルニ一般ノ方法アリ、一ハ緊張力ノ異常亢進ニシテ、收縮ノ異常ナルガタメニ起ルトコロノモノニシテ、コレヲ Status strictus s. sclerosis (緊張状態)トイフ、一ハ緊張力ノ異常減退ニシテ、弛緩ノ異常ナルガタメニ生ズルトコロノモノニシテ、コレヲ Status laxus s. atonia (弛緩状態)トイフ。通常コレ等ノ病的状態ハ局處的ニ發呈スルモノニシテ、治療モ局處的ナルベシ。シカルニ、若、重要ノ器臟ノ侵サルルニ及ベバ、續發的障礙ヲ誘起シ、遂ニ延テ全身ノ疾患ヲ起スニ至ル。

初發ノ罹器臟ヲ認知スルコトハ甚、肝要ナリ、解剖學及ビ生理學ノ知識ハコノ目的ヲ達スルニツキテノ必要アリ。

Status strictus (緊張状態)ノ特徴ハ、硬固・乾燥・緊張・分泌ノ減却又ハ遏止等ニシテ、Status laxus (弛緩状態)ノ特徴ハコレニ反ス。一部ニ緊縮アリ、一部ニ弛緩アリテ、Status mixtus (混合状態)ト名ツクベキモノアリ。

コノ二種ノ基本状態ヲコムニターテス⁽⁴⁾ト名ツケ、疾病ハ畢竟、ココムニターテスノ身體ニ於ケル状態ヲ表現スルモノニ外ナラズ。故ニ、疾病ノ部位ト原因トヲ詳ニスルハ重要ノ件ニアラズ、疾病ハ常ニ全身ニ起ルモノナルガ故ニ、全身ニ作用スベキ方法ニアラザレバ、コレヲ治スルコト能ハザレバナリト云ヘリ。

(4) κοινωνότητες = Communitates

(1) Contraria contrariis

疾病が急性ノモノナルカ、慢性ノモノナルカ、若クハ疾患ノ進歩期ニアルカ、静止期ニアルカ、減退期ニアルカヲ明ニスルコトハ、
コムニターテスヲ定ムルコトニ次ギテ肝要ノコトセラレタリ。

治療ノ方法ハ相反相制⁽¹⁾ヲ法則トシ、緊張ノ場合ニハ擴大シ、弛緩ノ場合ニハ收縮シ、混合性ノモノナレバ、始メニソノ
重キ方ノ性質ヲ制シ、次テ輕キ方ノ性質ヲ制スベシ。擴大藥ニ屬スルモノハ瀉血病者ガ全ク衰弱スルニ至ル。蟻鉞・乾
角・按摩・浴・氈布等ニシテ、收縮藥ニ屬スルモノハ冷水・氷酒・醋・收斂藥・麻醉藥ナリ。

ツェルズス

守法學派ノ盛時ニ方リテ、多數ノ著述家輩出シテ、醫學ノ全書ヲ著ハシタル時期アリ、此ノ如キ著述家ノ中ニテ最モ著
シキハアウルス、コルネリウス、ヰルズス⁽²⁾ナリ。ヰルズスノ傳記ハ甚、詳ナラザレドモ、紀元前約二十五年乃
至三十年頃ニ羅馬ニ生マレ、紀元後四十五年乃至五十年ノ頃マデ世ニアリ、モト醫家ニハアラザリシガ、醫學ニ通ジ、又
屢、醫術ヲ實際ニ施シタリト傳フ。ヰルズスノ著述ニ八種アリ、ソノ第一冊ニハ先、醫學ノ發展ニツキテ敘述シ、アジ
キサンドリア時代ノ醫術ハ二様ニ分カレ、一ハ生活方法ヲ調へ、食養法ニ注意シテ以テ、疾病ヲ治シ、二ハ藥物ヲ應
用シテ疾病ノ治療ヲ圖リ、三ハ外科的手術ヲ施用スルヲ主トセリトイヒ、ヰルズス自家ハ科學的ノ醫術ヲ推稱シ、解
剖・生理及ビ疾病ノ直接原因ヲ探究シテ、以テ治療ノ方式ヲ定ムベシトナセリ。第二冊ニハ病理總論・症候學・豫後學
ヲ敘シ、第三冊及ビ第四冊ニハ病理各論ヲ擧ゲタリ。

ヰルズスハ疾病ヲ急性ト慢性トニ區別スルノ說ニ反對シ、コレヲ普汎性ノモノト、限局性ノモノトニ區別スベシトセリ。

(2) Aulus Cornelius Celsus

(1) Morbus cardiacus

ソノ普汎性疾病ノ中ニテハ、惡液熱・灼熱・マリア熱・精神障礙ノ各種(譫妄・橫隔膜炎)・昏睡・水腫(浮腫)・腹水・
鼓脹(萎縮)・癩癩・心臟病⁽¹⁾・黃疸・癩病・惡液質及ビ卒中等ヲ擧ゲ、限局性疾病ノ中ニテハ肺及ビ消化器ノ疾患、
殊ニ肺癆及ビ赤痢・狂犬傷・火傷・腫瘍・皮膚疹・丹毒等ニツキテ精細ニ敘述セリ。ヰルズスノ說ニ據レバ、肺癆ハ頭ヨリ
流下スルトコロノ峻烈ナル粘液ノタメニ肺ノ潰爛セルニ因由スルモノナリ、既ニヒボクラーテスハ、肺癆ヲ二種ニ別テ、
今ヨリ見テ、炎症性ト結核性トノ二種トスベキモノヲ擧ゲシカ、ヰルズスノ書ニハコノ事ニツキテハ、何等ノ記載ナシ。ヰル
ズスハ又、コレニ應用スベキ方法ノ食養法ナルカ、藥物ナルカ、或ハ外科的方法ナルカニ依リテ、疾病ヲ種種ニ區別シタ
リ。

ヰルズスハ疾病ノ豫後ヲ定ムルコトニ重ヲ置キ、ヒボクラーテスノ豫後學ヲ引キ、季節及ビ年齢ノ豫後ニ關スルコト
ヲ説キタリ。又疾病ノ増悪セルカ若クハ減退セルカヲ知ルニハ、身體周圍ヲ測リ、攝取セル水分ノ量ト排除セル水分ノ量ト
ヲ比較スベシトイヘリ。

治療法ニツキテハ、第一ニ食養法ヲ擧ゲ、藥物ハ重症ノ場合ニ限リテノミ用フベシトナシ、又瀉血法ヲ擧ゲタリ。

普汎的の疾病ノ初期症狀ヲ呈セル場合ニハ、安靜・斷食及ビ酒・水ノ飲用等ニヨリテコレヲ治スベシ。強度ノ運動・浴・催
吐藥・瀉下藥等ハ決シテコレヲ用フベカラズ。熱病、殊ニマリア熱ニ對シテハ食餌ノ撰擇・分量及ビコレヲ與フルノ時刻
等ニ注意シテ、體力ノ保存ヲ圖ルニテ足レリトナシ、小兒ノ病者ニハ、瀉血及ビ下劑ヲ施用スルコトヲ避ケ、大人ニアリテモ、
殊ニソノ身體ヲ攝護スルコトニ留意スベシ。水腫ヲ治スルニハ溫空氣浴ヲ推稱セリ。肺癆ノ療法ニアリテハ食餌ノ撰擇・牛
乳飲用・南方溫暖ノ地方ニ轉ズルコト・加答兒ヲ療スルコト・咯痰ヲ制止スルコト・溫和ノ運動・浴ノ禁止等ヲ主要ノモ
トトシ、既ニ進歩セル場合ニアリテハ、胸部ニ烙鐵ヲ貼シ、藥物トシテハ蜜及ビテルペンヂンヲ用フベシ。癩癩・癩病・卒中及

内部化膿ニ對シテモ亦、コレト同様ノ處置ヲナスベシ。
局處性ノ疾患ニ對シテハ、第一ニ藥物ヲ應用スルヲ法トセリ。

ツェルプスニ次ギテ、ブリニウス⁽¹⁾アリ。紀元後第一世紀ノ頃、世ニ出テテ『自然史』ヲ著ハシテ名アリシカドモ、ソノ醫學ハ極メテ粗笨ニシテ、ブリニウスノ著述ハ單ニ藥物ノ名稱ヲ擧ゲ、稀ニソノ應用法ヲ説キタルニ過ギズ。デオスコリデス⁽³⁾モ亦、第一世紀ニアリテ、藥物學ノ著述ニテ名高カリキ。此ノ如ク、紀元後第一世紀ニアリテハ、藥物學ノ勃興セルニ併ビテ、守法學派ノ隆盛ヲ致シ、ソノ代表ニゾラヌス⁽⁴⁾アリ、産科及ビ小兒科ノ大醫トシテ、ソノ所説ハ後世マデ影響シタリ。

守法學派ハヒポクラテスノ學派ヲ排斥シ、固體病理説ヲモツテ、液體病理説ニ代エタリトイフト雖モ、ソノ説クトコロ單調ニシテ、且、模型的ナリシガタメニ、コレニ賛成セザルモノ多ク、一方ニアリテハ、固體病理學ト、液體病理學トノ調和ヲ圖リツツ、病理ヲ説クニ新主義ヲ以テセントシ、ココニ靈氣學派⁽⁵⁾ヲ生ジ、又一方ニアリテハ、世ニ行ハルル多數ノ學說ノ中ヨリ、自己ノ意ニ滿ツルトコロノモノヲ拔萃シ、ココニ折衷學派⁽⁶⁾ヲ成スニ至レリ。

靈氣學説ヲ首唱セシハ、紀元後第一世紀ノ頃ニ、羅馬ニアリシアテチーウス⁽⁷⁾ニシテ、ソノ説ニ據レバ、人體ノ根本成分ハ四原素ヨリ成ル、ソノ原素ノ中ニテ寒ト熱トハ能働性ノモノニシテ、濕ト乾トハ受働性ノモノニシテ、コノ四原素ニ加フルニ、更ニ一原素アリ、コレヲ靈氣⁽⁸⁾トス。靈氣ハ宇宙ノ靈氣ニシテ、天地間ノ萬物ヲ形成シ、又人類ノ精神ヲ成ス。四原素ノ何レカ其一ノ過重ヲ致ストキハ、不調和起リテ、靈氣ノ障礙ヲ呈ス、コレスナハチ疾病ナリ。

- (1) Plinius
- (2) Historia naturalis
- (3) Dioskorides
- (4) Soranus

- (5) Pneumatiker
- (6) Eklektiker
- (7) Athenäus

(8) Pneuma

(1) Claudius Galenus

アテチーウスノ説ニ據レバ、疾病ノ原因ハ、一部ハ目視スベキモノニシテ、一部ハ目視スベカラザルモノナリ。而シテ、疾病ノ根本ノ原因ヲナスモノハ、能働性ノ原素熱寒ナルガ、コノ根本原因ハ又、同時ニ外因トナリテ、更ニ第二ノ原因ヲナスモノナリ。アテチーウスハ熱ヲ以テ、熱ト乾トノ過重ノタメニ四原液ノ腐敗セルニヨルモノトナシ、脈ハ常性ノ心臓及ビ動脈管運動ト異常ノ心臓及ビ動脈管運動ニヨリテ起ルモノト解釋シタリ(エラジストラーツスノ説ニ同ジク)。

治療ノ方法ハ、食養法ニヨリテ、過重ノ性質ヲ制御スルヲ以テ主トナシ、食品ノ撰擇ニ注意シ、體操及ビ生活方法ヲ調フルコトハヒポクラテス學派ノ所説ニ據リ、又瀉血ヲ施スコト等ニツキテハ、守法學派ノ説クトコロヲ用ヒタリ。

此ノ如ク、紀元後第一世紀ノ醫學ハ、各種ノ流派、樹立シテ、互ニ主張ストコロヲ異ニシ、ヒポクラテス以後、コノ時ニ至ルマデ、凡、五百年ニナリテ、醫學ハ幾多ノ方面ニ向ヒテ分散シ、殆、統一スルコトナキ狀勢トナリシガ、第二世紀ノ頃ニ及ビテ、クテウヂウス、ガレーヌス⁽¹⁾ノ出ヅルアリ。不世出ノオラモツテ、醫學ノ研究ニ從事シ、新古ノ學説ヲ咀嚼同化シ、コレヲ自家獨得ノ實驗ニ徴シテ、一新學説ヲ立テ、多數ノ著述ニヨリテコレヲ世ニ公ニシ、コノ著述ハ醫家ノ經典トシテ、中古ノ全時代ヲ通ジテ、醫學界ノ金科玉條タリキ。實ニガレーヌスハ我醫學ニ一新紀元ヲ劃シタルモノトシテヒポクラテス以後ノ第一人ナリ。

クテウヂウス、ガレーヌス

ガレーヌスハ紀元百二十年ノ頃、ベルガムスニ生マン、ソノ地ノ哲學學校ニ學ビ、後スミルナ及ビアレキサン
ドリニアニ醫學ヲ修メ、業成リテ後、羅馬ニアリシガ、晩年ハベルガムスニ住ミテ、ソノ生涯ヲ著述ニ盡シタリ。ガレーヌ

スハソノ受クタル教育及ビ時代ノ趨勢ニ影響セラレテ、折衷學派ノ一人タリシガ、經驗學派及ビ守法學派ニ異ナリテ、解剖學及ビ生理學ヲ以テ、醫學ノ基礎トナシ、コノ基礎ノ上ニ、古今ノ諸家ガ唱道セル病理學說ヲ應用シテ以テ、疾病ノ本態・原因及ビ治療ニ關スル新說ヲ立テタルニヨリテ、當時ノ醫學界ニアリテハ、醫學ノ革命ヲナシタルモノトシテ尊重セラレ、爾後數世紀ニ涉リテ、醫學界ノ權威者タルノ名譽ヲ保有シタリ。

- (1) πνεῦμα = Pneuma
- (2) πνεῦμα ψυχικόν
- (3) πνεῦμα ζωτικόν
- (4) πνεῦμα ψυχοικόν
- (5) δύναμις ψυχική
- (6) δύναμις σψυγματική
- (7) δύναμις ψυσική

- (8) Dyskrasieen
- (9) Temperament

ガレーヌスノ說ニ據レバ、人ノ身體ハ、ヒポクラテースノ說ノコトク、四種ノ元素(地・水・火・風)ヨリ成リ、血液ノ中ニアリテハ、四種元素ノ混和ナレドモ、粘液ニアリテハ水ヲ主トシ、黄膽液ニアリテハ火ヲ主トシ、黑膽液ニアリテハ土ヲ主トス。身體ハ精神ニヨリテ生活スルモノニシテ、精神ハソノ占居スルトコロノ部位(腦・心臓・肝臓)ニ從ヒ、三種ノ靈氣⁽¹⁾トナリテ現ハル、ソノ腦ニ占居スルモノヲ精神靈氣⁽²⁾トイヒ、心臓ニ占居スルモノヲ生活靈氣⁽³⁾トイヒ、肝臓ニ占居スルモノヲ自然靈氣⁽⁴⁾トイフ、又、コノ靈氣ノ發呈シテ特殊ノ力トナルモノヲ精神力⁽⁵⁾・搏動力⁽⁶⁾・自然力⁽⁷⁾トナス、コレ人體ノ根本ノ力ニシテ、コレニ竝ビテ尙、數多ノ副力アリ、殊ニ引援力(各臟器ノ榮養ニ必要ナリ)・分泌力・繼續力及ビ排泄力ヲモツテ、主要ノモノトス。

ガレーヌスノ病理學ハ、自家ノ生理學說ニ根據シ、哲學ニヨリテコレヲ守護セリ。ソノ說ニ據レバ、健康ト疾病トハ、外界ノ感作ニヨリテ起ルトコロノ自然的、又ハ反自然的ノ運動ニシテ、後者ハ病的素因ノ存スルトコロニ障碍作用ノ衝突スルトキニ起ル。コノ偶然的原因ノ中ニテ最、重要ノモノハ血液混合ノ不調⁽⁸⁾及ビ稟質⁽⁹⁾ナリ。以上說クトコロニヨリテコレヲ觀ルニ、ガレーヌスノ所說ハ、教義學派ノ昔ニ歸リテ、ヒポクラテース學派ノ液體病理學說ヲ採用シタルモノナレドモ、コレヲ當初ノヒポクラテース學派ノ所論ニ比スレバ、大ニ變更セラレタルトコロアリ。スナハ

(1) Temperament

(2) Dyskrasien

チ、ガレーヌスハ殊ニ重キヲ血液ニ置キ、又、ヒポクラテースガ區別シタル四種ノ稟質⁽¹⁾(多血質・粘液質・膽液質・黑膽液質)ハ常ニ純精ノモノニアラズシテ種種ノ變化ト移行型トアリ、コレ年齡・氣候・生活方法・住居及ビ爾他ノ關係ニ因由スルモノナリトセリ。



ガレーヌス

ガレーヌスノ說ニ據レバ、健康ト疾病トノ間ニハ、嚴然タル境界アルコトナク、各個ノ人ハ多少ノ度ニ於テ、不順ニ生活スルモノニシテ、稟質モ、既ニ障碍状態ノ初期ニシテ、各人ニ四原液ノ偏重セルヲ見ル。疾病ノ原因ヲナストコロノ血液混合不調⁽²⁾ニハ熱性・冷性・乾性・濕性ノ四類アリ、ソノ熱性ノモノハ多血ニシテ、冷性ノモノハ粘液ノ異常蓄積又ハ腐敗ニヨリテ起ル、コノ單純ノ混合不調ニ兼テ、熱性ニ濕性ヲ併セルモノ(黄膽液ノ變

常)、熱性ニ乾性ヲ併セルモノ、冷濕性ノモノ、冷乾性ノモノ(粘液又ハ黑膽液ノ變常)アリ。疾病ノ原因ヲ別チテ四種トス。第一ハ身體内ニ於ケル反自然的運動ノ直接原因、タトヘバ、多血體液缺乏。第二ハ反自然的運動自個、又ハ生活機ノ障碍。第三ハ前段ノ事由ニヨリテ罹病部位ニ起コレル作用、スナハチ、病機。第四ハ症狀ニシテ、症狀ハ更ラニ、コレヲ、細別シテ(イ)直接機能障碍(エ)續發狀態(タトヘバ熱)(ニ)分泌及ビ排泄ノ變常トス。

ガレーヌスハ、疾病ヲ大別シテ

(1) Methodiker

一。四種原液ノ疾病

二。同性質部分(組織)ノ疾病

トナシ、更ニ後者ヲ小別シテ、數種トナセリ。

(イ)緊張状態ノ變常(弛緩・緊張) コレハ、守法學派⁽¹⁾ノ説クトコロニ異ナラズ。

(ロ)組織ノ四性質(溫・寒・乾・濕)ノ偏重

(ハ)臟器ノ構造・數・大小・位置・連續ノ異常ニツキテノ疾病(局處病理學)

疾病ノ經過ニツキテハ、ヒボクラーテスガ、未熟期・成熟期・分利期ヲ區別セルニ異ナリテ、ガレーヌスハ疾病ノ初期・増進期・頂上期・減退期トナシ、而シテ、場合ニヨリテハ、這般時期ノ發呈十分ナラザルコトアリ、或ハ全ク、コレヲ認ムルコト能ハザルコトヲ言ヘリ。

分利ニツキテハ、ガレーヌスハヒボクラーテスノ所説ヲ奉ジ、ソノ原則ニ基ツキテ説ヲナシタリ、但、分利ガ必、一定ノ時日ニ發呈ストイヘルヲ排斥シ、又散渙ノコトヲ説キタリ。

疾病ノ經過ノ迅速ナルハ、血液及ビ黃膽液ノ缺損ニヨルモノニシテ、第七日ニ、分利スルヲ以テ特殊トシ、コレニ反シテ、慢性ノ疾病ハ、粘液及ビ黑膽液ニ因由スルモノナリトセリ。

ガレーヌスガ、疾病ヲ説クニ、經驗的事實ヲ、自家ノ學說ニ從屬セシメタルノ例證トシテ、炎症及ビ熱ニツキノ所論ヲ擧グベシ。ソノ説ニ據レバ、炎症ハソノ全體ノ性質ヨリ見レバ、病的腫脹ノ類ニ屬スルモノニシテ、ソノ原因ハ、當該部分ノ異常溫熱ニ因ル、若、ソノ病機ニシテ、溫熱發生ノ増加ニ止マルトキハ、乾性炎症ヲ生ズ、而カモ、通例、溫熱ノ亢進ハ、體液ノ流入ノ増加ヲ伴フモノニシテ、ソノ體液ガ、尋常ノ血液ナルトキハ、單一ノ炎症ヲ生ジ、水・粘液・黃膽液及ビ黑膽液ナル

(1) Pneuma

トキハ、浮腫性炎・丹毒性炎・腐蝕水性炎及ビ硬化性炎ヲ生ジ、若、靈氣⁽²⁾ナルトキハ、氣性炎ヲ生ズ、炎症ニアリテ、潮紅・腫脹・發熱・疼痛ノ四個主徵ヲ生ズルハ、體液ノ患部ニ停滯スルニ因リ、ソノ轉歸ハ、消散・釀膿(血液ノ半バ腐敗セルモノ)・腐敗・血清ノ滲出等ナリ。

熱ハ、炎症ニ類似スルトコロノ状態ニシテ、溫熱ノ病的亢進ニヨリテ起リ、コノ溫熱ハ心臟ヨリ動脈ヲ通ジテ、全身ニ及ブ。時ニハ濕氣ノタメニ、コレヲ起スコトアリ。惡寒ハ神經中樞ノ障礙ニ因ルモノニシテ、豫後ヲトスルニ重要ノ徵ナリ。熱ヲ生ズルノ原因ハ、靈氣ノ停滯・局處炎症及ビ原液ノ腐敗ニシテ、コレ等ノ諸項ハ、相集マリテ體溫ヲ亢進スルモノナリ。

病理各論 ガレーヌスハ疾病ノ各個ヲ分拆スルコトヲ努メタレドモ、主ニ隨意的ニコレヲナセシニテ、諸般ノ病機ヲ觀察シテ以テ症候簇ヲ作ル等ノコトニハ意ヲ致サズ。故ニ、病理各論ノ敘述ハ精細ナラザリキ。

熱病ノ中ニテ、最、單一ノモノハエフェメラ⁽³⁾ニシテ、コノ病ハ、過勞・酩酊・忿怒及ビ良性ノ腺腫ニヨリテ起ル。良性ノ腺腫ハ惡性ノ腺腫(ペストナルコト疑ナシ)ト區別セラレザルベカラズ。三日熱ハ、肝臟ヨリ起リ、四日熱ハ、脾臟ヨリ生ズ。三日熱ハシバシバ第七日ニ分利スルコトアレドモ、四日熱ハ頑固トシテ治セズ、日發熱ハシバシバ危險ナリ。

消化器病ニツキテハ、消化困難・嘔吐・腸加答兒・赤痢等ヲ擧ゲ、胃及ビ腸ノ疾病ハ體液ノ不純ニ基ツクモノナリトセリ。赤痢ハ峻劇ノ物質、殊ニ膽液ノタメニ腸管下部ノ崩潰ヲ起スニヨルモノニシテ、コノ病ハ春及ビ夏ニ發生スルコト多シ、又、青銅ノ管ヲ通セル水ヲ飲ムニヨリテコレヲ發生スルコトアリ、從來久シク劇甚ノ勞役ヲ事トセルモノガ頓ニソノ業ヲ罷メルニ方リテコレヲ發生スルコトアリ。

肝臟病ニツキテノ記述ハ精細ナラズ。黃疸ハ時トシテハ症狀トナリテ現ハル、局處疾患トシテハ、膽道ノ閉塞・炎症・腫瘍等ニ因リテ發呈ス。

(2) Ephemera

(1) Phymata

呼吸器病。急性加答兒ト慢性加答兒ト區別シ、又、肺炎ト肋膜炎トヲ鑑別スルコト、前代ノ醫家ヨリモ精緻ナリ。兩者ヲ鑑別スルノ症狀トシテ、肺炎ニアリテ、呼吸困難ノ劇甚ナルコト、血痰ヲ喀出スルコトヲ擧ゲタリ。膿胸ヲ診斷スルニハ病側ノ溫暖ト、自覺症狀トニ據ルベシ。

肺癆ニハ炎症性・潰瘍性・潛行性及ビ非炎症性ノ四種アリ。炎症性肺癆ノ主因ハ、肺ノ機械的障礙・劇甚ノ咳嗽及ビ咯血ノタメニ起レル肺組織ノ牽引ナリ。潛行性肺癆ハ體液ノ變敗ニ因ル。結核ノ發生ハ已ニヒボクラーテスノ注目セシトコロナレドモ、ガレーヌスハ肺ニ癰ト腺腫トノ中間ニ位スル腫瘍(コレヲフィマタ⁽¹⁾ト名ヅク)ノ生ズルコトヲ理論的ニ言ヒシノミ。肺癆ニアリテ、鹹味ノ痰・下痢・及ビ毛髮ノ軟弱トナルコトハ、豫後不良ノ徵ナリトセリ。

心臓病ニツキテハ、ガレーヌスモ亦、前代醫家ニ同ジク、觀察スルトコロ甚、乏シク、僅ニ心悸ノ一症ヲ擧ゲタルノミ。泌尿器疾病ノ中ニテハ腎臟及ビ膀胱ノ膿潰ヲ主要トス。ツノ原因ハ結石ニシテ、ガレーヌスハコレヲ痛風ニ親似セル疾患ナリトセリ。ガレーヌスノ說ニ據レバ、尿石ハ通例、腎臟内ニ生ズルコト、痛風ノ關節腫ヲ關節内ニ生ズルト同様ニシテ、隨テソノ療法ハ二症同一ナルベシトセリ。腎疝痛ト腸疝痛トハ、後者ニアリテ、下劑ノソノ效ヲ奏スルコト、前者ニアリテ尿ノ性質ヲ變更スルコトニヨリテ、互ニコレヲ區別スベシ。

尿崩ノ症狀ニツキテハ、精細ノ敘述アルモ、尿中ノ糖分ニツキテハ何等ノ記載モナシ。

糖尿病ハ當時醫家ノ說ニテハ胃ノ疾病ナリトセラレシガ、ガレーヌスハコレヲ腎臟ノ弛緩ニ歸シ、コレガタメニ、飲料ガ直チニ腎臟ヨリ排泄セラルルモノトナセリ。

腦ノ疾病ニツキテハ、貧血ノタメニ起ルモノト、多血ノタメニ起ルモノトヲ區別セリ。ソノ前者ニ屬スルハ癲癇及ビ麻痺ニシテ、後者ニ屬スルハ卒中ナリ。(卒中ハ腦出血ニ因ルニアラズシテ、粘液ノ停滯ニ因ルモノトシ、ソノ死ヲ致スハ呼吸器ノ麻痺ニ

(1) Phrenitis

- (2) Indication
- (3) Indicatio causalis
- (4) Indicatio temperamentalis
- (5) Indicatio morbis

因ルトセリ。眩暈ハ、或ハ腦ニ起因シ、或ハ胃ニ起因スルモノニシテ、所謂橫隔膜炎⁽¹⁾ノ症狀トシテ、シバシバ下痢ヲ生ズルコトアリ。癲癇ノ大人ニ發スルモノハ治癒スルコト難シ。ヒステリー症⁽²⁾ノ中ニテ最、興味多キハヒステリー性失神ナリ。癲癇ハ多血及ビ貧血ノタメニ生ズ。震戰ニモ種種アルコトイヒ、疼痛ハ神經ノ障礙ナリトシタレドモ、今日吾人ガイフトコロノ神經痛ハ擧ゲラレズ。

惡液性疾患ノ中ニテ主要ナルハ、痛風及ビ水腫ナリ。痛風ハ古代、盛ニ行ハレタル病ニシテ、ソノ原因ハ遺傳ト不攝生トナリ。ガレーヌスハ拇趾痛風・關節痛風ノ他ニ、胃痛風ヲ擧ゲ、殊ニソノ尿ノ性質ニツキテ細敘セリ。

水腫ハ、脾・腸・腎・肺ノ疾病・月經閉止・痔核等ニヨリテ起ルモノニシテ、就中、最多ノ原因ハ肝臟ノ硬化ナリ。

治療學。ガレーヌスノ治療方則モ、大都、ヒボクラーテスノ方則ト同ジク、所謂自然力ヲシテ、自由ニ行動セシメ、決シテコレニ反抗スルコトナキヲ期スルニアリ。故ニ、各個ノ疾病ヲ治スルニ方リテ、第一ニ、コノ害物ハコレヲ除却スルコトヲ得ルヤ否ヤヲ決シ、若、除却スルコトヲ得レバ、自然ノ力ニテ足レルカ、或ハ人力ノ補助ヲ要スルカヲ決セザルベカラズ。後者ハスナハチ所謂適應⁽³⁾ノ方則ニヨリテコレヲ定ムベキモノニシテ、適應ニハ二種アリ、第一ハ原因性適應⁽³⁾ニシテ、現存セル原因ヲ除去スルコトヲ期スルモノ。第二ハ稟質性適應⁽⁴⁾ニシテ、體液ノ偏重ヲ治スルコトヲ期スルモノ。第二ハ疾病性適應⁽⁵⁾ニシテ、疾病ノ本性ヲ除却スルコトヲ期スルモノナリ。而シテ、ソノ疾病性適應ハ、疾病ノ性質・劇度・定型・時期・轉歸・併發症及ビ恢復期ニヨリテコレヲ定ムベク、稟質性適應ハ病者ノ年齢・男女居處・稟質體力・罹病臟器ノ特殊性等ニヨリテコレヲ定ムベシ。

治療方法ノ中ニテハ、食養法及ビ體操法ヲ主要ノモノトシ、瀉血法モ亦、多ク用ヒラレタリ。藥物ハ、當時ノ經驗學派ガ好ミテ應用セルトコロニシテ、ソノ數、甚、多カリシガ、ガレーヌスハ更ニ多數ノ合劑ヲ製シテ、藥品ノ數ヲマスマス増加シタ

(1) Archigenes

熱ノ食餌缺損ニヨリテ起レルモノハ温浴・輕キ食料及ビ葡萄酒ヲ與へ、惡寒期ニ、足ヨリ始メテ身體ヲ按摩シ、正規ノ三日熱ニハ始、下劑或ハ吐劑ヲ與へ、次デ利尿劑ヲ用ヒ、後ニハ温浴ヲ施ス、不正規ノ三日熱ニハ、胃部ヲ煖メ、吐劑ヲ與へ、場合ニヨリテハ瀉血ヲ施シ、次デ七日間、胡椒及ビ類似ノ品ヲ與へ、最後ニ亞爾蘇^{ウエルムト}ヲ與フ、多血者ノ四日熱ニハ瀉血ヲ施シ、次デ胡椒ヲ用フ、化膿性熱ニアリテハ、大麥水・洋芹根浸ノ多量飲用・灌腸等ニヨリテ有害物質ヲ排除スルコトヲ期スベシ。

消化困難ニ對シテ、ガレーヌスノ師タル人ハ、皮膚發赤性藥品ヲ外用シ、收斂劑ヲ内用セシガ、ガレーヌスハアルビゲテス^①ガ賞揚セル方法、スナハチ吐劑・頭部及ビ胃部ヲ熱布ニテ覆フコト二十四時間ノ絶食場合ニヨリテハ胃部ノ冷罨法・冷飲料・氷ヲ施用シ、劇甚ノ嘔吐ニハ植物性ノ收斂藥ヲ與へ、最後ノ藥品トシテ阿片ヲ用ヒタリ。赤痢ノ治方トシテ主要ノモノハ斷食ナリ。病變、若、主ニ腸管ノ上部ニアルトキハ、ガレーヌスハ牡蠣殼・鹿角・沒食子・阿片等ヲ與へ、若、主ニ大腸ノ侵サルトキハ直腸ノ洗滌ヲ施用スベシ。

黄疸ガ症狀トナリテ現ハレル場合ニハ、温浴・摩擦ヲ施シ、局處疾患トシテ現ハレル場合ニハコロシント・利尿劑・亞爾蘇ヲ用フ。

脾臟ノ疾患ニ對シテハ、海葱・胡椒樹根ヲ主藥トシ、急性症ニハ強力ノ下劑、慢性症ニハ乾角ヲ應用セリ。

呼吸器ノ急性加答兒ニハ、阿片、喀痰不十分ノ場合ニハ蜂蜜、催眠藥トシテハ阿片ニ葡萄絞汁ヲ加ヘタルモノヲ施用シ、慢性加答兒ニハ輕キ酒・麻醉藥・コレニ兼テ胡椒・ガルバヌム殊ニマルバウムヲ賞用セリ。

肺炎ト肋膜炎トニ對シテハ、温罨法ヲ施スヲ第一トシ、殊ニ肺炎ニアリテハ病側ノ腕靜脈ニ瀉血ヲ施スベシ、但、コノ場合

ニハ、時トシテ、病者が眩暈ヲ起スニ至ルマデ瀉血シ、排出セラレタル血液ノ鮮紅色ヲ呈スルニ及フベシ(コレ病毒ヲ排除セラレタル證左ナリ)。コレニ次ギテ、コロシント・藜蘆等ノ下劑ヲ與フ。下痢アレバ阿片・ヒオスチアムス・利尿劑ヲ用フベシ(下痢ヲ起スハ豫後不良ノ徵ナリ)。喀痰少ナケレバ、蜂蜜水・大麥煎・輕キ食餌及ビ葡萄酒ヲ與フベシ。

膿胸ニ對シテ、穿刺術ヲ施シ、又ハ烙鐵ニヨリテ排膿スルノ方法ハ、從前ヨリ行ハレタレドモ、ガレーヌスハ、ソノ效果正確ナラズトセリ。

炎症性肺癆ニ對シテハ、場合ニヨリ、瀉血・四肢緊縛・胸部及ビ四肢ノ刺戟性塗擦・大麥水・果物・身體安靜・沉默ヲ施用シ、又、毎夕、睡眠ヲ促ガシ、分泌ヲ進ムルガタメニテリアクラ用フ。潛行性肺癆ニ對シテハ、氣候療法ヲ施スヲ第一トス、殊ニ海上旅行ハ偉效アリ。牛乳療法モ亦、賞用セラレタリ。乾燥空氣・善良ノ牧場・牛乳ヲ有シテ風ナキ地方ニ移住スルヲ佳トス。又、テルペンチン・沒藥・海葱等ヨリ成レル合劑モ亦、用ヒラレタリ。

心悸ニハ瀉血及ビ少量食餌ヲ用ヒタリ。

結石及ビ痛風ニ對シテハ、驢馬乳・葡萄酒・蜂蜜ヲ混ヅタルモノ等ヲ利尿劑トシテ與へ、藥物ニテハ沒藥・洋芹・アムモニア・葛縷子ヲ用フ、殊ニガレーヌスガコノ場合ニ賞用セルハ海綿内ニ存スル石ヲ粉末ニセルモノ(炭酸石灰?)ナリ。血尿ニハ明礬ヲ用ヒ、尿閉ニハアピウムヲ用フ。

横隔膜炎ニ對シテハ、瀉血ヲ施シテ、血液ノ腦内ニ流入スルヲ防ギ、次デ譫妄或ハ昏睡ノ發呈スルニ從ヒテ、冷水灌漑ヲ局處ニ應用シ、罌粟浸内用、又ハ嗅入藥ヲ施用ス。癩癧ニアリテハ、場合ニヨリテ足部ニ瀉血ヲ施シ、藥品ノ中ニテハ主ニテリアクラ用フ。

痛風ノ療法ハ、食養法ヲ主トシ、多血者ニハ瀉血及ビ下劑ヲ與へ、痛風發作ニハ刺戟性罨法ニ麻醉藥ヲ併セ用フ。

水腫ノ治療トシテ、重要ノモノハ海葱及ビ胡椒樹根ナリ。

中古期ノ醫學

ガレーヌス以後、十六世紀ニ至ルノ間ハ、コレヲ醫學ノ中古期トス。而シテ、コノ期ノ醫學ハ、コレヲ文化ノ中樞ノ相異ナレルニ從ヒテ、(一)ビザンチン帝國ノ醫學、(二)亞拉昆亞ノ醫學、(三)歐洲ノ醫學ニ區劃シ、ソノ歐洲ノ醫學ヲ更ニ(1)僧侶醫學(2)サレルノ時代ノ醫學(3)煩瑣哲學時代(4)人文學時代ニ區別ス。

ビザンチン時代ノ醫學ハ、ソノ前時代タル羅馬晩期ノ醫學ニ比シテ、獨得ノ產物ニ乏シキヲ特徴トス。コノ時ニ方リテ、醫家及ビ他ノ學者ノ努力セシトコロハ、ソノ所見ヲ基督教ノ教義ニ合セシメントスルニアリ、故ニ魔術ハ再ビ注意ヲ喚起スルニ至レリ。ビザンチンノ醫學ハ、古代希臘ノ醫學ガ、主トシテ食養の療法ヲ用ヒタルニ反シテ、藥理的療法ヲ賞用スルノ傾向アリ。疾病ニツキテノ詳細ノ記述ハ、一千三百年ノ頃、ヨハンチス⁽¹⁾ニ至リテ始メテ、コレヲナセシガ、ソノ說ハ、ガレーヌスニ據ルトコロ多ク、タトヘバ靈氣^{ノイ}ヲモツテ精神ノ物質の原基トナシタルガゴトキ、明カニコレヲ證明スベシ。

亞拉昆亞ノ醫學モ、亦、何等ノ發明ヲ致サズ。西曆九世紀ノ頃ニ、世ニ在リタルラーゼス⁽²⁾(八百五十二年乃至九百二十年)ハ當時有名ノ醫家ニシテ、ソノ說ハ概シテガレーヌスヲ祖述セシガ、ソノ痘瘡ニツキテノ敘述ハ、自家ノ實驗ヲ本トシテ、一新說ヲ立テタリ、ソノ說ニ曰ク、痘瘡ハ小兒ノ血液ガ、妊娠ノ間ニ經血ノ排除ノ停止スルニヨリテ、不純トナルニ基ツクモノナリ、故ニ、痘瘡ノ發現ハ、小兒ノ血液ヲ清淨トナスタメノ自然的良能ニ外ナラズト、又ラーゼスガハスバ

(2) Rhazes (1) Johannes

(1) Hasbah (2) Avicenna

1⁽¹⁾名ツケテ記載セル疾病ハ今日ノ麻疹ナルベシト云フ。
ラーゼスニ次ギテ、アヴセンナ⁽²⁾(九百八十年乃至一千三十七年)アリ、コノ人ハ「亞拉昆亞ノガレーヌス」ト名ツケラレタル名醫ニシテ、ソノ著述モ甚、多シ。アヴセンナハ專ラガレーヌスニ私淑シ、ソノ說ハガレーヌスノ範圍ヲ出ツルコトナカリシモ、ソノ觀察ハ精細ニ涉リ、疾病ヲ記載セルコトモ精緻ニシテ、神經症・急性發疹癩病等ニツキテ殊ニ然ルヲ覺フ。ゾノ療法ハ一ニガレーヌスニ依據シ、劇烈ノ作用ヲ有スルトコロノ藥品ヲ用フルニ方リテハ、大ニ戒慎シ、食養法、殊ニ産婦竝ニ初生兒ノ食養ニハ甚、注意セリ。

中古期歐洲ノ醫學ノ第一期ハ、所謂僧侶醫學⁽³⁾ナリ。學問ノ權ハ僧侶ニ歸シ、醫學ハ僧侶學校ニテ教授セラレタリ。次テ僧侶ニアラザルモノガ新ニ學校ヲ建ツルニ至リ、コノ學校ハ後ノ大學ノ濫觴ヲナセシガ、ソノ最、古クシテ且、最、有名ナルハサレルノノ學校ナリ。當時サレルノハ病者ノ巡遊地トナリシマデニ、隆盛ヲ窮メシガ、疾病ノ本態ニ關シテハ何等ノ名說モナカリキ。然レドモ、社會ノ狀勢ハ、科學ヲバ、單ニ宗教的ニ信仰スル以外ニ、哲學的ニコレヲ觀察スルノ思潮ヲ生ゼシメ、所謂煩瑣哲學⁽⁴⁾ヲ興スニ至リシガ、醫學ハソノ感作ヲ受ケテ、冥想ヲ事トスルニ至リ、觀察ト實驗トヲ主トシテ、說ヲ立ツルコトハ大ニ衰へ、從ツテ醫學ハ衰退ノ狀ヲ呈シタリ。

タダ、コノ間ニアリテ、學ゲテ言フベキコトハ、病者ノ看護ガ盛ニ行ハレタルコトナリ、ソハ、當時基督教ノ勃興セルガタメニ、國民ハソノ教義ノ一タル博愛主義ニ本ツキテ病院ヲ建設シテ、病者ヲ看護シタルナリ、又十字軍ハ病院ヲ建設ニ、少ナカラザル刺戟ヲ與へ、獨逸ニハ多數ノ武士アリテ、病者ヲ看護スルコトニ從事セルガタメニ、看護法ハソノ發達上、著明ノ影響ヲ受ケタリ。

(4) Scholastik (3) Mönchsmedizin

歐洲ノ醫學ガ、人文。學ノ影響ヲ受ケシバ、十二世紀頃ヨリシテ、煩瑣哲學ニ反抗シ、漸、大家崇拜ノ觀念ヲ排除シ始メ、且、自然ノ觀察ニ、カヲ盡スニ至レリ。十四世紀ニ及ビテハ、バツア、ボログナ、巴里、ブラーグ、維也納、ハイデルベルグ、グライブチヒ、ウユルツブルグ、ロストツク等ニ大學新設セラレ、學問ノ研究ハコレヨリシテ漸、盛ナルヲ致セリ。

記載科學的時代

西曆十五世紀ノ後期ヨリ十六世紀ノ前期ニ及ビテ、歐洲ニハ重大事變ノ相繼テ起レルアリ、スナハチ、グーテンベルグガ、一千四百五十年ニ、印刷術ヲ發明シタルヲ始トシテ、コロムブスガ亞米利加ヲ發見セルアリ（一四九二年）、ルイテルガ耶蘇教ノ革新ヲ試ミテ、大家崇拜ノ觀念ヲ打破セルアリ（一五一七年）、コペルニクスガ新タニ太陽中心說ヲ立テテ從來行ハレタル地球中心說ヲ辯駁スルアリ、ソノ感作ニヨリテ、學術上ニモ、革命行ハレ、プラトー、ヒポクラテス等古代大家ノ著述ハ再、眞面目ニ研究セラルルニ至レリ。殊ニ、我醫學ニアリテハ、コノ期、新タニ微毒・發疹室扶斯等諸病ノ發見セララルアリテ、固有ノ研究ト、獨立ノ思考トヲ必要トスルニヨリテ、ソノ革新ノコトハ、一層催進セラレタリ。

(1) Andreas Vesal

コノ時ニ方リテ我ガ醫學ノ革命ニ第一歩ヲ著ケシハ、解剖學ニシテ、ソノ革命者ハアンドレアス、ヴェーザル⁽¹⁾ナリ。ヴェーザルハ一千五百十四年ブルツセルニ生マレ、年二十二ニシテ、バツア大學ノ解剖學及ヒ外科學ノ教授ニ擧ゲ

ラレ、後、バーセル・ブルツセルニ移リ、次デ西班牙ニアリテ活動シタリ。ヴェーザルハ人ノ屍ヲ解キ視テ、精シク研究シタル後、ガレームスノ解剖學ヲ訂正シ、コレニ依リテ斯學ニ一新紀元ヲ劃シタリ。ヴェーザルニ嗣ギテ、多數ノ解剖學者アリ、大ニカラス學ニ盡シテ、醫學ノ發達上ニ一大基礎ヲ築キタリ。



ヲ廢棄シ、眞ノアリストテレスヲ識レリ、眞ノアリストテレストハソノ自然科學的著述中ニ現ハルトコロノアリストテレスニシテ、觀察ト、經驗トヲ主トシテ論ヲ立テ、事實ヲ記載スルニ重キヲ置キ、冥想的ニ説明スルコトヲ避クルヲ本旨トセリ。又、更ニ、ヒポクラテスノ原著ヲ研究セルニヨリテ、益、自然ヲ觀察スルノ價值ヲ詳ニシ、當時ノ解剖學者ノ纏ニ倣ヒテ、實際醫家モ亦、病牀上ノ觀察ニ熱中シ、ソノ成績ヲ記載シタリ。

斯ノ如ク、解剖學者ガ、屍ニツキテ精細ノ觀察ヲナシ、解剖學上ノ知識ヲ増加セルニ獎勵セラレテ、實際醫學ノ方面ニアリテモ、生活體ニツキテノ觀察始マリ、古代ノ所說ニ對シテ穩健ノ批評ヲ下スコトヲ得ルニ至レリ、タダ惜シムラクハ、當時、生理學上ノ基礎知識ノ未、革新セラレザルガ故ニ、疾病ノ病理ニツキテノ所說ニモ、十分ノ進歩ヲ認ムルモノ能ハザリシモノアリト雖モ、而カモ、當時ノ醫家ハ冥想的方法

(11) Paracelsus

- (8) Jean Fernel
- (9) Argentier
- (10) Joubert

- (1) Giovanni Monarde
- (2) Aloisio Mondella
- (3) Antonis Brassavola
- (4) Girolann Fracastori
- (5) Johannes Lange
- (6) Leonhard Fuchs
- (7) Pierre Brissot

研究ノ歩武、益、進行スルニ從ヒテ、亞拉昆亞ノ醫學ハ希臘ノ醫學ヲ誤マリ傳ヘタルコト、證明セラレ、殊ニ伊太利ノ醫家(モナルド、⁽¹⁾モンデルラ、⁽²⁾ブラツサウラ、⁽³⁾フラカストリ、⁽⁴⁾等ヲ主トス)ハ大ニ亞拉昆亞醫學ヲ駁撃シ、獨逸ノ醫家ニモ、ヨハンテス、ランゲ、⁽⁵⁾レオンハルド、フツクス、⁽⁶⁾等アリテ、盛ニ亞拉昆亞醫學ノ無稽ヲ批評セリ。中ニ就キテ、ココニ擧グベキハ、佛國ノブリツソー⁽⁷⁾(一四七八年乃至一五二二年)ニシテ、コノ人ハ巴里大學ノ教授ニシテ、ヒボクラーテス學派ノ錚錚タルモノナリシガ、亞拉昆亞ノ醫家ガ用ヒタル瀉血ニツキテ、劇シク反對シ、同ヅ佛國ノ醫家ノ中ニテ、贊否ノ論、囂囂タリシガ、十六世紀ノ終ノ頃ニハブリツソーノ說、勝利ニ歸シタリ。ブリツソーニ嗣ギテ、ジャン、ズルチル、⁽⁸⁾アルゼンチール、⁽⁹⁾ヨーベルド、⁽¹⁰⁾アリ。コノ三人ハ、新シキ生理學的所見ノ上ニ、自家ノ病理說ヲ立テ、中ニモズルチルハ一書(一五四八年)ヲ公ニシテ、ガレーヌス・アリストテレス及ビヒボクラーテスノ誤謬ヲ正シ、精神ハ腦髓ニ舍ドリ、神經ハ腦及ビ脊髓ヨリ起ル(アリストテレスニ對シテ)トナシ、原素ト性質トヲ區別シ、疾病ノ原因ヲ體液ニ歸シ、疾病ソノモノハ身體ノ固形部分ニ起ル(固體病理學ノ創立)モノトシ、症狀ヲモツテ機能ナリトナシタリ。アルゼンチールハガレーヌスノ說ヲ採リ、醫學ヲバ科學ト藝術トノ中間ニ位スルコロノ經驗的科學トナシタリ。ヨーベルトハ生活力ト自然力トヲ區別スルコトヲ難シ、カハ唯一ニシテ、即、溫ナリトナセリ。爾後、幾多ノ醫家アリテ、實際醫學ノ革命ニ盡力シ、臨牀上ノ觀察ヲ批判スルニ、解剖上ノ實驗ニヨリテ得タル知識ヲモツテシタリ。此ノ如クニシテ、十六世紀ニ於ケル醫學ハ、ヒボクラーテスノ古ニ復シ、自由研究ニヨリテ、學問ノ新路ヲ開クニ努力セリ。ソノ中ニテ、臨牀醫學ノ革新ニ與カリテ第一ニ功勞アリシハパラツェルズスナリ。

パラツェルズス

パラツェルズスハ本名ヲテオフラスト、ネン、ホーヘンハイム⁽¹⁾トイフ、ルーテルガ宗教ノ革命ヲシタル後、十年(一千四百九十一年)ニシテ、瑞西ノアインジールンニ生マレ、一千五百二十六年(三十三歳)瑞西バーゼル大學ノ教授トナリ、後、ストラーイスブルグニ移リ、一千五百四十一年、ザルツブルグニ歿シタリ。



スズルツラバ

パラツェルズスハ新プラト一派ノ哲學ヲ奉ジ、人體ヲモツテ小宇宙⁽²⁾トシ、人體、即、小宇宙ハ全世界、即、大宇宙ノ描寫ニ異ナラズトナセリ。ガレーヌスガ說ニ、人體ガ、ソノ四様ノ性質ニ相當シテ、四種ノ原素ヨリ成レリトスルハ不可ニシテ、人體ハ土ヨリ成ルモノニシテ、ソノ身體ノ臟器ハズルフル⁽³⁾、メルクリウス⁽⁴⁾、ザル⁽⁵⁾ノ三原素ヨリ成ルトセリ(ココニ擧ゲルトコロノ三原素ハ比喩的ノモノニシテ、コレニヨリ、人體ハ、硫黃・水銀及ビ食鹽ヨリ成レリトスルニアラズ。タトヘバ、ズル

- (8) Archaens
- (7) Archaeus
- (4) Sulphur
- (2) Mikrokosmos
- (1) Theophrast von Hohenheim
- (5) Mercurius
- (3) Makrokosmos
- (6) Sal

フルハ可燃質、ザルハ不可燃質トイフマテナリ。而シテ、人ガ生活スルハ生活力ノタメニシテ、コノ生活力ハアルベウス⁽⁷⁾ト名ヅケラレ、主ニ胃ノ中ニ存シ、上記ノ原素及ビコレヨリ成レル身體器臟ヲ消費シ又、新生スルモノナリトセリ。此ノ如ク、パラツェルズスノ所說ハ神祕說ニ傾ムキ、解剖學ニ依據スルコト尠ナク、却テ解剖學ハ醫術・診斷及ビ治療ニ必要ノモノナラズトナセリ。

パラツェルズスノ說ニ據レバ、疾病ハ、生活力⁽⁸⁾ノ變化ニ本ツクモノニシテ、全體、生活力ハ尋常ノ生活機ヲ調節スル

- (4) Ens naturale (1) Entia
 (5) Ens spirituale (2) Ens astrorum
 (6) Ens deale (3) Ens veneni

(8) Frantzen (7) Tartarische Krankheiten

モノナルニ、コノモノニ變化アレバ、生活機ノ障碍ヲ起スハ當然ナリ。又、疾病ハ疾病體(物質的)ト、疾病作用(力學的)トヨリ成レルモノニシテ、種子ヨリ發育シ、ソノ種子ハ遺傳的ノモノアリ、遺傳的ナラザルモノアリ。疾病ノ原因トシテ、外ヨリ來タリテ生活力ノ上ニ作用スルモノ(エンチア)ニ、五種アリ、其一ハ天體の事項(星運ノ感作)、其二ハ毒物(榮養毒)、其三ハ自然の事項(身體的基因)、其四ハ精靈の事項(精神的感作)、其五ハ神意(神ノ命令)ニシテ、コレ等ノ原因ハ、一定ノ病症ヲ發起スルニアラスシテ、同一ノ病症ニテモ、種種ノ場合ニアリテ、種種ノエンチアニ因スルコトアリ。此ノ如ク、バラヅルズスハ、疾病ヲモツテ、一個特別ノ有機體トスルガ故ニ、病的ノ有機體ト、尋常ノ有機體トノ間ニ、鬭争ヲ生シ、尋常ノ有機體ニ起ルトコロノ反應ハ、即、自然ノ治病作用トシテココニ發呈シ、コレガタメニソノ人ヲ死ニ致スカ、又ハソノ病機ヲ排除シテ(分利)治療セシムルナリト説キタリ。若、生活力ニシテ、身體ノ作用ヲ、正規ニ調節セザルトキハ、固形ノ病素ハ、沉澱シテココニ疾病ヲ生ズ、コレヲ酒石病ト名ツク、タトヘバ、痛風結石病、肝臟病等ノゴトシ、コノ場合ニハ、ソノ尿ヲ化學的ニ検査シテ、コレヲ認識スルコトヲ得ベシトイヘリ。

然レドモ、バラヅルズスハ、異想的ニ疾病ノ本態ヲ論ズルコトヲ主トシタルガタメニ、全體ニ、疾病ノ徵候ヲ記載スルコト十分ナラズ。一一ノ疾病ニツキテモ、詳細ニ敘述セルニ甚、尠ナク、中ニツキテ擧ゲテ言フベキハ酒石病ト佛蘭西病(後ノ微毒)ナリ。

酒石病ハ、既ニ前ニモ云ヘルガゴトク、固形病素ノ沉著ニヨリテ生ズルモノニシテ、ソノ原因ハ生活力ノ作用ノ十分ナラザルコトニシテ、コレニ數種アリ。佛蘭西病ハ、バラヅルズスノ説ニ據レバ、當時新タニ發生シタル疾患ニシテ、ソノ原因ハ人ノ不行狀ニアリ、病狀ハ癩病ニ酷似シ、而カモノノ治療シ易キヲモツテ異ナレリトス。該病ノ傳播ハ傳染ト交媾トノ二方法ニ因ルトナセリ。

(1) Caducus matricis

(2) Arcana

- (3) Simila similibus
 (4) Specifica
 (5) Morbus helleborinus
 (6) Morbus terebinthinus

婦人ノ疾病ハ、小宇宙中ノ小宇宙タル子宮ヨリ發生スルモノトナシ、ソノ病症ノ中ニ子宮脱落ト名ツクルモノヲ擧ゲシガ、コハ後ニイフトコロノヒステリーナラン。

バラヅルズスノ學說ガ、鍊金術及ビ占星學ノ所説ト屢、相一致スルモノアルハ、明カニ認メラルルコトニシテ、酒石病説ノゴトキハ、鍊金術ニ本ツクコト、疑ヲ容レズ。

バラヅルズスノ治療學ハ、ガレノヌスノ所説ヲ排シ、ヒポクラテスノ古ニ復シタルヲモツテ、革新ノ主旨トナス。ソノ説ニ據レバ、各個疾病ノ治療ハ、自然治療力ニ因ルモノニシテ、從ツテ、治療ノ方法トシテハ、新鮮空氣、精神安慰、陳舊ノ酒、斷食、祈禱等、所謂食養的、衛生的ノ方法ヲ主トスルコト、ヒポクラテスニ異ナラズ。自然治療力ノ作用十分ナラズシテ、病症治療ノ傾向ナキトキハ、ココニ始メテ、人工治療ノ方法ヲ講ズベシ。而シテ、疾病ハ、ソノ本態ヨリイヘバ物質的ノモノナラズ、神靈的、生活的ノモノナルガ故ニ、コレヲ治療スルニ用フルノ藥品モ、コノ神靈的ノ疾病種子ニ抗敵スルトコロノモノナラザルベカラズ。此ノ如キ藥品ヲ名ツケテアルカナ(祕藥ノ義)ト名ツケ、コノアルカナニ關スル研究ハ、バラヅルズスノ治療學ニアリテ、殊ニ重要視セラレタリ。

バラヅルズスハ以爲ラク、治療藥品ガ疾病ニ對シテ反抗性ノ性質ヲ有セザルベカラズトイフハ非ナリ、コレソノ性質ハ、タダ外部的、症狀的ナレバ、コレヲ用ヒテ治療スルハ、單ニ症狀的ノモノニ過ギズ、眞ニ自然ノ治療ノ力ヲ補助スルニハ、必、コレニ親似スルモノヲ用ヒサルベカラズ、所謂「同ジモノハ同ジモノヲ治ス」ノ法、コレナリ、而シテ、コノ目的ニ用フベキハ、即、アルカナ或ハスベシフィカ(ニシテ、コノモノハ罹病器臟及ビ疾病ニ對シテ特殊ノ關係ヲ有スルモノナリ)今日、吾人ガ言フトコロノ特殊藥トハ、ソノ意義異ナレリト。此ノ如クニシテ、バラヅルズスハ、コノスベシフィカニ重大ノ價値ヲ附シ、病症ヲ名ツクルニ、コレニ應用スル藥品ノ名ヲモツテスルニ及ベリ、タトヘバ藜蘆病(テレピン病)等ノゴトシ。

(1) Laudanum

アルカナノ作用ヲ認識スルニハ、數法アリ、第一ニハ、自然體ノ性質ガ病的器臟ノ形狀及ビ各個ノ病的現象ト相一致セルヤ否ヤヲ見ル(Signaturen)、第二ニハ、經驗ト實驗トニヨリテコレヲ定ムルニテ、コノ目的ヲ達スニハ、化學ノ力ヲ藉リ、植物及ビ礦物ノ中ヨリソノ有效成分ヲ析出シタリ、又、アルコール性エキス、即、丁幾劑ヲ應用シタリ、コレ藥理學上ノ一大進歩ナリ。

パラズルズスガ特殊藥トシテ學ゲタル中ニハ、水銀・安質母尼・鉛・金・鐵・亞鉛・銅・砒石(癌腫ニ用ヒタリ)・硫黃・礬砂・各種植物ノエキス・テルペン・藜蘆等アリ、殊ニ治癒ノ力ノ大ナリトセラレタルハ、阿片鹽ニシテ、パラズルズスガ自カラ發明シタルラウダニウム⁽¹⁾ハ、殊ニ有效ナリトセラレタリ。ヒステリー及ビ痙攣性疾患ニハ、磁石ヲ應用シタリ。

パラズルズスハ、又、天然礦泉ノ治癒作用ニツキテ研究シ、化學ノ力ヲ藉リテ、タトヘバ、礦泉水中ノ鐵ヲ試檢スルニ沒食子丁幾ヲ應用シ、又、人工的ニ礦泉ヲ模シタルモノヲ作りテ應用シタリ。

酒石病ニ對シテハ、アルカリヲ主藥トシ、佛蘭西病ニ對シテハ、當時ノ庸醫等ガ漫ニ施用シタル方法、殊ニ水銀塗擦及ビ水銀熏蒸法ヲ非難シ、又、當時新藥トシテ賞揚セラレタルゲアツクノ濫用ヲ非難シ、佛蘭西病ニ對シテハ、ソノ攝生ヲ嚴守セシムルニ兼テ、水銀製劑、殊ニ赤降汞ノ内服ヲ施スヲ可ナリトセリ。ゲアツクハ各種ノ疾病、殊ニ水腫・躁病・ヘルニア等ノ特效藥トシテ、當時大ニ賞用セラレ、強力ノ發汗法ト饑餓療法ト併セテ施サレタリ。佛蘭西病ニモ亦、盛ニ用ヒラレタレドモ、パラズルズスハ、ゲアツクノ治癒作用ノ持續的ナラザルコトヲ論ジ、醫家ガ判斷力ノ乏シキト、輕信ナルトヲ嘲笑シタリ。

- (1) Descartes
- (2) Rationalismus
- (3) Bacon
- (4) Empirismus

(5) Induction

(6) Harvey

第十七世紀

第十七世紀ニ及ビテハ、哲學ノ革新アリ、就中、デスカルト⁽¹⁾ノ唯理論⁽²⁾ト、ベーコン⁽³⁾ノ經驗論⁽⁴⁾トハ、學問ノスベテノ方面ニ於テ、ソノ面目ヲ一新セシガ、醫學ガソノ感作ヲ受ケタルコトハ甚、大ナリキ。殊ニベーコンハ醫學ヲ嗜ミテ常ニソノ



イ 登 1 ハ

研究ニ從事シ、人ノ健康ヲ保全スルコトハ、醫師ノ義務ナリト説キシホドナリシガ、ソノ歸納法⁽⁵⁾ハ、自然科學ノ研究ニ資スルコト多大ニシテ、コレガタメニ、自然科學、殊ニ醫學ガ、多大ノ刺戟ヲ得タルコトハ争フベカラズ。

斯ノ如キ、學問界ノ新機運ハ、生理學ノ革命ヲ致シ、ソノ革命ハ血液循環ヲモツテ始マレリ。コレヨリ先、中古期ノ學者ハ、ガジョ・ヌスノ所説ヲ信奉シ、右心ヨリシテ血液ハ靜脈ニ入り、左心ヨリシ

テ靈氣^{プンイ}ハ動脈ニ入ル、而カモ左心ト右心トノ間ノ中隔ニハ小孔アルガ故ニ、血液ハ又、左心ヨリシテ動脈ニ入ルモノナリト信ツタリ。シカルニ、十七世紀ノ前半ニ至リ、英國ニハーヴェイ⁽⁶⁾出テ、先、血管及ビ心臟ノ機能ニ關セル在來ノ學說ヲ駁撃シ、自家ノ觀察ニ本ツキテ、大小循環ヲ説明シ、遂ニ今日ノ意義ニ於ケル血液循環說ノ基礎ヲ立テタリ(一千六百二十八年)。

ハーヴェイノ血液循環ノ發明ニ嗣テ、淋巴管・胸管等ノ發見セラルルアリ、又、コノ頃、新ニ顯微鏡ノ發明セラルルアリ、コレニ依リテ、毛細管循環ノ發見セラルルアリ（一千六百六十一年、マルビギー氏）、又、マルビギー氏ノ新タニ赤血球ヲ發見セルアリ。

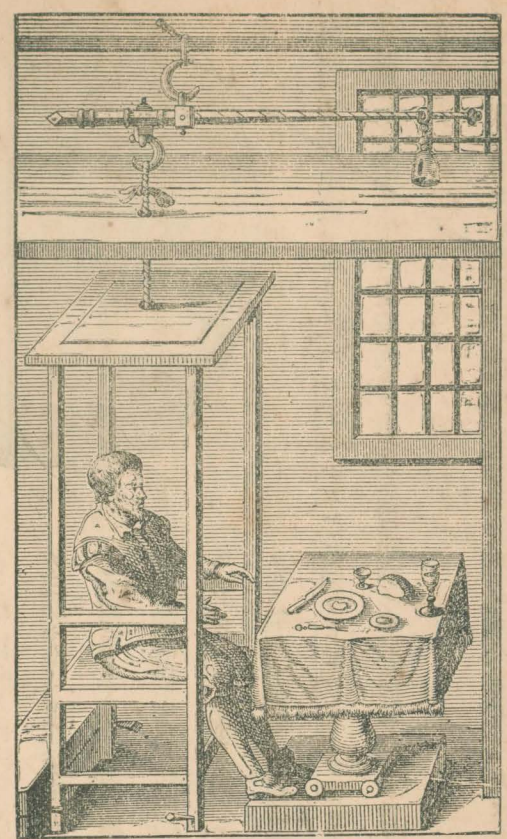
解剖學及ビ生理學ガ、此ノ如ク、革新セラルルヤ、臨牀醫學ハコレヲ基礎トシテ、ココニ蔚然トシテ勃興シタリ。バラッヅ・スガガリーヌスノ學說ヲ駁撃シナガラ、自家ハ敢テ、ガリーヌスノ所說ニ優レルトコロノ學說ヲ立テザリシニ反シテ、ハーヴェイハ獨立ノ觀察ト歸納法トニ依リテ、ガリーヌスノ學說ヲ根柢ヨリ打破シ、更ニ新ナル醫學ヲ生ズルノ基礎ヲ作りタリ。

コノ期ノ内科學ニハ、二大派アリ。一ハ理學的醫學派⁽¹⁾ニシテ、ゴノ學派ハ、先、ガリレイニ興リテニウトンニ大成シタル理學ノ所說ニ本ヅキテ、人體ノ機能ヲ説明シ、疾病ノ本態ヲ解釋セントセリ。一ハ化學的醫學派⁽²⁾ニシテ、疾病ヲ説明スルニ、前者ニ反シテ、體液ノ化學的變化ヲモツテセントシタリ。

理學的醫學派ノ創立者ハサントリオ、サントロ⁽³⁾（一千五百六十一年乃至一千六百二十六年）ニシテ、特別ノ裝置ヲ工夫シテ、各種ノ生理的及ビ病理的問題ヲ解釋スルニ、數理的理學ノ方法ヲ應用セント試ミタリ。次デアアルソ・ンソー、ボレルズ⁽⁴⁾（一千六百八年乃至七十九年）出デテ、各種ノ病型ノ發現スル所以ヲ、理學的ニ説明セント企テタリ。ボレルズ⁽⁴⁾ハ疾病ノ原因ヲ論ジテ、コレヲ神經液ノ不良ニ歸シタレドモ、シカモコレヲ起スモノハ神經液ノ流通ノ障礙、神經ノ皮膚腺ニ於ケル開口部ノ閉塞ナリトナセリ。ボレルズ⁽⁴⁾ノ說ニ據レバ、コレ等ノ原因ニ據リテ、神經液ノ流通ハ抑制セラレテ、病的變化ヲ起スモノナリトスルナリ。ボレルズ⁽⁴⁾ノ門人ベルズニー⁽⁵⁾ハ、更ニコノ說ヲ敷衍

- (1) Jatrophysiker
- (2) Jatrochemiker
- (3) Santrio Santro
- (4) Alfonso Borrelli
- (5) Lorenzo Borelli

- (1) van Helmont
- (2) Franz de le Boë Sylvius
- (3) Acrimonia
- (4) Acrimonia acida
- (5) Aerimonia alcalica bez. lixiviosa



ロ ト ン サ、ガ リ ト ン サ

シテ、血液ノ毛細管系統ニ滯滯スルニヨリテ、各種ノ熱性病及ビ炎症病ノ主因ヲナスモノナリト言ヘリ。化學的醫學派ノ先驅者ハヴン、ヘルモン⁽¹⁾（一千五百七十八年乃至一千六百四十四年）ナリ。ヴン、ヘルモントハバラッヅ・スノ說ヲ奉ジ、神祕ノ論ヲ立テシガ、疾病ノ成立ハ化學的方法ニ本ヅクモノトシ、一定ノ體液ノ變化・醱酵機等ヲソノ主因トナセリ。シカレドモ、ヘルモントノ說ハ、爾後ノ醫學ニ影響スルトコロ尠ナク、フランツ、ヅ、ル、ボエ、シルヴウス⁽²⁾ニ至リテ、化學的醫學派ハ始メテ成立セリトイフベク、化學ノ原理ヲモツテ自己ノ學說ノ根據トシ、スベテノ疾病ハ一種ノ腺分泌ノ化學的異常ノモノガ、血液ニ混ズルニ因リテ起ルモノナリト説キ、ソノ血中ニ入ルトコロノ害物ヲ辛辣液⁽³⁾ト名ヅケ、コレヲ酸性⁽⁴⁾トアルカリ性⁽⁵⁾又ハ滴汁性⁽⁶⁾ニ區別セリ、殊ニ膽液ノ異常酸性（膽液ハアルカリ性ナルヲ常トス）ハ多數ノ疾病ヲ發呈スルノ原因ヲ成スナリトイヒタリ。

斯ノ如クニシテ、理學的醫學派ト化學的醫學派トノ對抗ハ、ココニ古代ノ液體病理學ト、固體病理學トヲ復興セシメ

タル趣アリテ、化學的醫學派ハ、液體病理説ヲ奉ジ、理學的醫學派ハ固體病理學ヲ説キタリ。

トーマス、シデンハム



シデンハム

シカレドモ、此ノ如ク、單ニ理學的又ハ化學的ノ方面ノミヨリシテ、疾病ヲ説クニヨリテ、兩派ハ共ニ、疾病ノ本態ニツキテ完全ノ説明ヲ下スコト能ハザリシガ故ニ、實地醫家ハコレ等兩學派ニ遠ザカリ、病牀ニ於ケル經驗ヲモツテ、唯一ノ醫學的基礎ナリトスルニ至レリ。而シテ、コノ種ノ説ヲ立タル學者ノ中ニテ第一ニ擧グベキハトーマス、シデンハム⁽¹⁾（一千六百二十四年乃至一千六百八十九年）ナリ。シデンハムガ主張セルトコロハ、疾病ヲ説明スルニ、偏頗ノ學説ヲ用フルハ不可ニシテ、コノ際、必、經驗ニ依據セザルベカラズトイヒテ、理學的醫學派及ビ化學的醫學派ノ所論ニ反對セリ、シカモ、シデンハムトテモ尙、ヒポクラテスノ所説ヲ祖述スルニ過ギズ、多數ノ疾病ハ體液ノ異常ニ本ツキテ起ルモノナリトシ、液體病理説ヲ唱道セルナリ。故ニ、シデンハムハ『英國ノヒポクラテス』ト稱セラレ、自然觀察ニ重キヲ置キ、病者ノ他覺的診斷ヲ主トシ、空論鑿説ヲ避ケテ、偏ニ疾病ノ症狀ヲ詳ニスベキヲ言フコト、スベテヒポクラテスニ異ナラザリキ。

シデンハムノ病理學ハ、ヒポクラテスノ病理學ニ同ヅク、疾病ノ因由ハ、體液ノ特殊ノ發揚、或ハ特殊性質ニ

- (1) Dynamische Krankheiten
- (2) Materielle Krankheiten

- (3) Crusta pleuritica annua
- (4) Anlage
- (5) Constitutis morborum annua

本ツクモノナリトセリ。疾病ノ急性ナルト、慢性ナルトハ、ソノ原由ニ差別アリ、慢性ノモノハ體液ノ異常ニ基ツクモノニシテ、急性ノモノハ、外界ノ傷害作用ニ依リテ起ル。又、急性病ハ季節ノ感作ヲ受クルモノニシテ、マリアアソノ例證トスベシトセリ。

シデンハムハ疾病ヲ區別シテ、一ヲ力學的⁽¹⁾疾病トシ、一ヲ物質的⁽²⁾疾病トセリ。ソノ力學的疾病トイフハ人身ノ内部ニ存スルトコロノ生活力ノ變常ニ因スルモノニシテ、物質的疾病トイフハ身體ノ粗大部分、殊ニ體液ノ變常ニ本ツクモノナリ。シデンハムハ又、傳染性⁽³⁾疾病ト非傳染性⁽⁴⁾疾病トヲ區別セシガ、ソノ傳染性⁽³⁾疾病ニアリテハ、疾病ノ種子アリテ疾病ヲ繁殖スルモノニシテ、非傳染性⁽⁴⁾疾病ハコレニ反シテ、體液ノ缺損・血液ノ炎症ニ因由スルモノナリ。

血液ノ炎症ハ、シデンハムガ、諸種ノ病機ノ中ニテ、重要トセルモノニシテ、零團氣的・外界的及ビ殊ニ食餌的ノ感作ニ本ツキ、若クハ尋常分泌物ノ蓄積及ビ變敗ニ因由スルモノナリ。ソノ主徴ハ發熱ト肋膜炎⁽⁵⁾トナリ、時トシテハ、コノ病機ガ、高度ノ血液稀薄ヲ伴ナヘルコトナリ（タトヘバ、悪性痘瘡ニ於ケルガトシ）。

偶然ノ外部動機及ビ内部動機、タトヘバ、年齢・稟質等モ亦、病型ノ發達ニツキテ多少ノ關係アレドモ、主要ナルハ、外界ノ原因・内部ノ基質⁽⁴⁾、各個器官ノ原發性及ビ續發性侵犯・疾病自個ノ發達・體液變常ノ種類等ニシテ、同一ノ原因ニテハ常ニ必、同一ノ症狀、同一ノ病型ヲ呈スルモノニアラズ。

散發性⁽⁶⁾疾患ト流行性⁽⁷⁾疾患トヲ區別スルコトハ必要ナリ。ソノ甲種ノ疾病ハ、人類ガ常住遭遇スルトコロノ害物（タトヘバ、熱寒ノゴトシ）ニ因リテ起ルモノニシテ、一定ノ季節・天候ノ感作ニヨリテ疾病ヲ成立セシムルコトナリ、タトヘバ、肋膜炎・アングーナ肺炎・癩麻質斯及ビマリアアノゴトキ、コレナリ、シデンハムハ此ノ如キ場合ニアリテ、疾病ヲ候鳥ニ比較シ、自然ノ祕力ニヨリテ然ルモノトナシ、コレヲ年季素質⁽⁸⁾ト名ツケ、又、ソノ素質ニ從ヒテ、春季病・夏季病・秋季病・冬季病ヲ

- (1) Constitutio epidemica
- (2) Constitutio variolosa
- (3) Constitutio dysenterica

區別シタリ。
 流行性疾病ハ季節及ビ天候トハ關係ナク、土地ノ内部ヨリ發生スルトコロノ瘴氣、毒圍氣ノ不潔及ビ類似ノ事項ヨリ成立スルモノニシテ、此ノ如キ素質ヲ流行病性素質ト名ヅク。而シテ、斯ノ如キ素質ノ存在セル場合ニハ、病機ハ共通性トナリ、同一ノ症状ニシテソノ形狀ノ差異ヲ呈スルコトアリ。一個ノ病型ハ、他ヲ排シテ、ソノ素質ニ特性ヲ附スルコトアリ、タトヘバ、痘瘡性素質ノ行ハルルトキニハ、痘瘡ニ特有ノ症状ヲ發スルトコロノ疾病行ハレ、赤痢性素質ノ行ハルル際ニハ赤痢性ノ疾病行ハルナリ。

病理各論

シデンハムハ一定ノ系統ヲ立テテ、各種ノ病類ヲ擧グルコトヲナサズ、タダ機ニ臨ミテ、ソノ必要ナルモノヲ説キタルノミ。急性病ノ中ニテハ、熱病、殊ニソノ季節及ビ流行病性素質ノタメニ起レルモノヲ主要トス。間歇熱ト稽留熱トノ差異ハ、自然力ガ該病機ニ致ス力ノ持續的ナルト、間歇的ナルトニ由ルモノニシテ、ソノ發熱時間ヲ總計スルニ、間歇熱ニテモ、稽留熱ニテモ、共ニ同一ニシテ、凡、二百二十六時間ナリト云フ。

炎症病ニテ主要ナルハ肋膜炎ナリ、シデンハムハコレヲ區別シテ特發性ト續發性トナシ、コレヲ發スルノ原因ハ、病毒ノ入りテ肋膜及ビ肺ニ沈著スルニアリ。肋膜炎ニ似タルハ熱性癩麻質斯ナリ。癩麻質斯ニ似タル症ニ、ヒステリースコルブト性癩麻質斯⁽⁵⁾アリ、コレハ規那ノ濫用ニ因リテ起レル場合多シ。血液炎ノ一種ニ丹毒熱⁽⁶⁾アリ。アングーナハ病毒ノ咽喉ニ沈著スルニ因ル。猩紅熱モ亦、コノ種ニ屬スルモノニシテ、血液ノ沸騰スルニ因リテ起レルモノトス。痘瘡モ亦、血液炎ニ因由スルモノニシテ、コノ病ニ熱ヲ發シ、疹ヲ呈スルハ、自然ノ治癒作用ニ外ナラズ。融合性痘瘡ハ痘瘡物質ト血液トノ結合ノ強度ニ過グルニ本ヅクモノニシテ、ソノ危險ハ膿ノ吸收ニヨリテノ續發熱ニアリ。局處ノ血液流出ハ體液ガ炎症ヲ呈セル症狀ノ一ニシテ、衄血、咯血モ亦、コレニ屬スルモノナリトセラレタリ。又、血液ガ粘

- (4) Materia peccans
- (5) Rheumatismus hysterico-scorbuticus
- (6) Febris erysipelatos

- (1) Pneumonia notha
- (2) Spiritus

液性トナルガタメニ、症狀性肺炎⁽¹⁾ヲ起スコトアリ。

慢性病ノ中ニテ、主要ナルハ微毒ナリ。コノ病ノ本態ハ不明ナレドモ、シデンハムハ體液ノ炎症變化ヲモツテ原因上、重要ノモノトセリ。下疳及ビ淋疾ニツキテモ亦、記述セリ。ヒステリーハ慢性病中、最多ク發呈スルトコロノ疾病ニシテ、ソノ原因ハ靈氣⁽²⁾ノ失調ニヨル、殊ニソノ病的臟器ニ病的蓄積ヲナスニ因ル、ソノ診斷的要徴ハ水様ノ尿、疼痛發作後マデモ持續セル脊部知覺過敏ナリ。ヒステリーニアリテ、靈氣ガ分泌器官ニ作用シテ、體液ノ變化ヲ起スコトアリ、タトヘバ、萎黃病ノゴトキ、即、コレニシテ、亦、ヒステリー症ノ一類ナリ、卵巢水腫モ亦、同一ノ理由ニヨルモノニシテ、スベテ、コンラヒステリー性變性ト名ヅク。ヒポコンドリー産褥熱、爾他ノ婦人病モ亦、ヒステリート同様ノモノナリトセラレ、舞蹈病モ亦、病的體液ノタメニ神經ノ刺戟ヲ受クルニヨリテ起ルモノトセラレタリ。水腫ハ血液ノ特殊性稀薄ニ本ヅキテ起ルモノトス。

シデンハムノ治療學ハ、ヒポクラテスノ原則ニ準據シ、醫家ノ任務ハ、治癒機能ヲ誘導シ、或ハコレヲ催進シ、或ハコレヲ抑制スルニアリトセリ。シカレドモ、シデンハムノ所説ハ、コレヲヒポクラテスニ比シテ、大ニ制限セラレ、寧、後年スタールガ唱道シタルアニーマ⁽³⁾ノ説ニ似タルモノアリ。シデンハムノ説ニテハ、疾病自個ハ、既ニ自然ノ治癒作用ニ屬スルモノニシテ、發病物質ヲ排泄スルノ道具ハ熱ナリ。シカモ、自然ノ能力ハ常ニ顯著ナルニアラズ、又、多數ノ疾病ハ體液ノ變化ニ本ヅクモノナルガ故ニ、病機ノ原因ヲ探リテ、コレヲ除去スルノ法ヲ講ジ、以テ自然ノ能力ヲ補助シテ以テ發病物質ヲ排除スルコトヲ圖ラザルベカラズ。コノ目的ニ應用スベキハ所謂特殊藥⁽⁴⁾ニシテ、コレヲ植物ノ中ニ求ムベシ、蓋、動物性物質ハ人體ニ酷似シ、礦物性物質ハアマリニ異種的ナレバナリ。而シテ、當時、既ニ世ニ知ラレル特殊藥ノ中ニテ、眞ニ特殊藥トスベキハ唯一ノ規那皮アルノミ、微毒ニ用ヒラレル水銀、サルサバール⁽⁵⁾ハ特殊藥トスルニ當ラズ、肺炎ノ瀉血ハコレニ比スレバ有力ノ特殊作用アリトナセリ。

- (4) Specifica
- (3) Anima

シデンハムハ、多數ノ急性病ノ眞ノ原因ハ、所謂血液炎ニアリト假定セルガ故ニ、治療ノ方法トシテ主ニ用ヒタルハ瀉血ナリ。但、コノ法ハコレヲ大人ノ強壯者ニ施シ、衰弱者老人・小兒ニハコレヲ用フルコトヲ禁ジタリ。瀉血ニ次ギテハ食養法ニ重キヲ置キタリ。

藥品ノ中ニテ、多く用ヒシハ吐劑(アンデモン製劑)ヤイッパ・甘汞・一二ノ瀉下鹽類ニシテ、強壯藥トシテハ苦味及ビ芳香性藥品、殊ニ鐵及ビ規那ヲ用ヒ、神經藥トシテハ樹脂ガルバヌム・阿魏ヲ用ヒ、麻醉藥トシテハ阿片ヲ用ヒ、コレハ阿片ヲソノママ用フルカ、或ハラウダヌム(シデンハムノ名ヲ冠セリ)ヂアスコリヂウムヲ應用シタリ。

發汗藥ハシルヅウス以來、盛ニ用ヒラレシモノナリシガ、シデンハムハコレヲ賞用セズ、タダベストニコレヲ用ヒタルノミ。肋膜炎ニ對シテハ、病毒ヲ排除スルノ目的ニテ、三回乃至四回ノ瀉血ヲ施シ、毎回十「オンス」ノ血液ヲ排出スルヲ第一ノ法トス。熱性痲瘋質斯ニモ、同ジク瀉血ヲ施セシガ、後ニハソノ法ヲ廢シテ、消炎性食餌、殊ニ、瀉血ノ作用ヲ補償スルノ目的ニテ、モルケン療法ヲ施セリ。アンギーナニ對シテハ、腕及ビ舌靜脈ニ瀉血ヲ施シ、硫酸ヲ混セル水ニテ含嗽スルヲ可トス。

痘瘡ニ對シテハ、瀉血ハソノ效果、豫想ニ反セルガ故ニ、タダコレヲ強壯者ニノミ施シ、寧、下劑ヲ多く用ヒタリ。病者ヲシテ少ナクトモ第一日ニハ病牀ヲ避ケシメ、後ニハ鎮痛藥、殊ニメコニオ舍利別ヲ應用スルコトヲ稱揚セリ。

水銀ガ、微毒ニ效アルハ、ソノ特殊作用ニ因ルニアラス、ソノ作用ハ、コレガタメニ起ルトコロノ排泄、殊ニ流涎ニアリ。淋疾ニハ下劑ト少量ノ瀉血トヲ施用スベシ。

ヒステリーノ治療ニ際シテハ、強壯者ニハ瀉血、薄弱者ニハ下劑ヲ用ヒテ不良體液ヲ除去スルコトヲ力ムベシ。萎黃病ニ對シテハ、血液ヲ強クシ、從ツテ靈氣ヲ強クスルノ法ヲ用フベシ、即、鐵及ビ規那ヲ用フルコト二十日ナルベシ。ガルバヌム・カ

ストレウムモ亦、一時的ノ效果アリトセラレタリ。

ヒポコンドリー及ビ肺癆ニ對シテシデンハムハ乘馬ヲ推獎セリ。ソノ說ニ據レバ、乘馬ガコレ等ノ疾病ニ效果アルコトハ、水銀ノ微毒ニ於ケル、規那ノマリアニ於ケルニ匹敵スベシト云フ。舞蹈病ニ對シテハ瀉血下劑及ビ神經藥ヲ用ヒ、癩癩ニモ同一ノ療法ヲ施シタリ。

水腫ノ療法ハ、水ヲ排除スルコト・注意シテ下劑ヲ用フルコト・衰弱セルモノニハ利尿劑、殊ニアルカリヲ用フルコトヲ法則トセリ。豫防ノ目的ニテ鐵劑ヲ與フ。穿刺術ハ用フベカラズトセリ。

斯ノ如クニシテ、十七世紀ノ醫學ハ解剖學ト生理學トニ於テ、顯著ノ發達ヲ遂ゲ、コレガタメニ、醫學ニ一種特異ノ流派ヲナシ、疾病ヲ論ズルニ、理學的又ハ化學的ノ原則ニ據リ、一側的ノ說ヲ立ツルニ至リシガ、ソノ後期ニ及ビテハ、コノ學派ハ、漸次ニソノ勢力ヲ失ヒ、再ビヒポクラテスノ古ニ復シテ、病牀上ノ觀察ヲ主要トスルノ一派アリテ現ハレタリ。シカルニ、十八世紀ニ至リテ、ライブニツツ⁽¹⁾ノ元子哲學ヲ唱道セルアリ、實驗的自然科學モ亦、漸ク發展セルニヨリテ、我醫學モコノ新哲學及ビ科學ノ影響ヲ受ケ、ココニ學說ノ變動ヲ呈シ、實際醫學ニハ所謂統系學派⁽²⁾ヲ生ジ、折衷ノ論盛行ハルルニ至レリ。

第十八世紀

十八世紀ニハ、ライブニツツノ哲學ノ勃興セルト、自然科學ノ大ニ發展セルトニ依リ、内科醫學ハ、ソノ感作ヲ受ケテ、前世紀以來行ハレタル一側的ノ學說ヲ排シ、經驗ニ本ツキテ、醫學ノ統系⁽³⁾ヲ作ルコトニ努力シ、ココニ統系學派ヲ生ズ

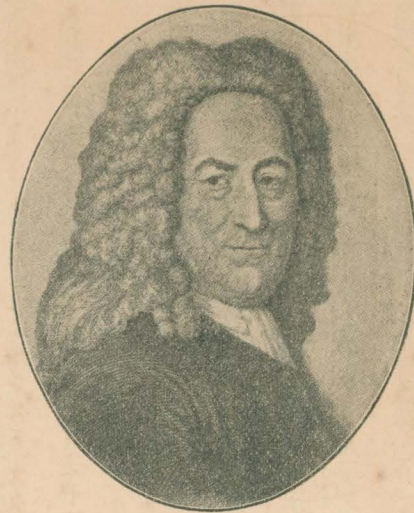
(3) System

(1) Leibniz
(2) Systematiker

ルニ至リシガ、ソノ首領タリシハフリードリヒ、ホッフマン⁽¹⁾、ゲオルグ、エルンスト、スタール⁽²⁾、ヘルマン、ベールハーヴ⁽³⁾ノ三人ナリ。

- (1) Friedrich Hoffmann
- (2) Georg Ernst Stahl
- (3) Hiermann Boerhaave

フリードリヒ、ホッフマン



ホッフマン

ホッフマン(一七六〇年乃至一七四二年)ハ、人ノ身體ヲモツテ、纖維ヨリ成レリトシ、コノ纖維ニハ緊張力(緊張シ及ビ弛緩スルノ性)アリトセリ。生活ヲ與フルノ原素ハ神經エーテルニシテ腦ヨリ出テ、血液ニヨリテ身體各部ニ送ラル。健康ハ身體各部ノ緊張力ノ正規ナル場合ニ成立スルモノニシテ、ソノ緊張力ノ正規ナルト否トハ、神經エーテルニ關係ス。疾病ハ緊張力ノ障碍ニ因ルモノニシテ、タトヘバ、熱ハ神經ノ痙攣ニヨリテ起レル血管痙攣、又ハ脊髓ヨリ起レル血管痙攣ニ本ツクナリ。各個ノ臟器モ、ソノ神經系統ニ痙攣ヲ起ス、殊ニ神經系統ニ連繫セル臟器(タトヘバ胃・腸)ニアリテ然リト説ク。即、アニスムスト理學的醫學派ノ所説トヲ折衷セルナリ。

ホッフマンノ説ニ據レバ、局處ノ炎症・出血・加答兒・神經痛モ亦緊張ニ因スルモノニシテ、コレニ反シテ、慢性病ノ多數ハ弛緩ノ状態ナリ。ゾノ説ハ、古守法學派ノコムムターテスノ説ニ髣髴タリ。

右ノ如キ理由ニ據リテ、ホッフマンハ疾病ヲ療スルニ、所謂鎮痙藥・鎮痛藥・強壯藥・排泄藥(病毒ヲ排除スルノ目

(1) Anima

(2) Archaeus

的ニ用フ)變質藥(同前)ヲ、各個ノ場合ニ適用セリ。殊ニ、慢性ノ疾病ニアリテ、諸種ノ刺戟藥・葡萄酒、カンフェル規那・鐵・香料・エーテルヲ用ヒタリ、又、諸種ノ合劑ヲモ費用セシガ、ソノ中ニ、ホッフマン滴劑・ホッフマン鎮痛液・ホッフマン生活バルサム・ホッフマン内臟エビキシル等、今日ニ傳ハリテホッフマンノ名ヲ冠セルモノアリ。

ゲオルグ、エルンスト、スタール

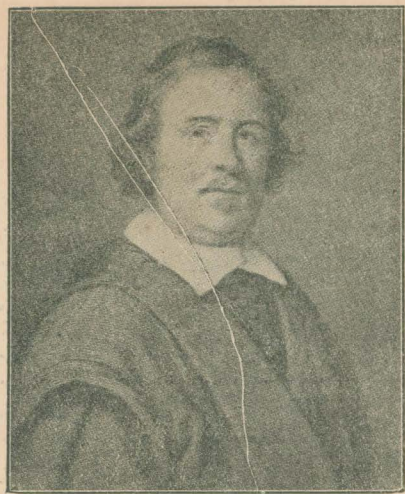


スタール

スタール(一七六〇年乃至一七三四年)ハ、全有機體ノ單位トスベキモノハアニマ⁽¹⁾ニシテ、有機體ノ作用ハコレニヨリテ調節セラルルモノトナシ、コノモノ破壊セラレテ消散スレバ死亡ヲ起スモノナリト説キタリ。スタールガアニマトイフハ古代ヒポクラテースガ自然力トイヒ、バラッセルズス及ビラン、ヘルモントガ生活力⁽²⁾トイヒシモノト同シカルベシ。疾病ノ理由ヲ説クニ方リテハ、スタールハ液體病理説ニ傾キ、多數疾患ノ主因ハ血液ノ蓄積(多血)ニアリ、アニマガコレヲ調節スルノ作用トシテ發呈スルハ出血ナリトセリ。熱ハアニマガ治癒的作用ヲ發揮スルガタメニ起ルモノナレバ、コレニ對シテ藥物ヲ用フルハ不可ナリ、又、規那阿片・變質藥ヲ用フルコトニハ、右ト同様ノ理由ニヨリテ反對シ、コレニ反シテ、排泄ヲ催進スルノ法、殊ニ積血ヲ除クコトニ力メタリ。

ヘルマン、ベールハーヴ

ベールハーヴ(一七六六九年乃至一七三三八年)ハ寧、折衷學派ニ屬スベキモノニシテ、古ヒボクラーテスノ自然治療力説ヲ根本トシ、コレヲ潤色スルニ、理學的醫學派及ビ化學的醫學派ノ所説ヲ以テセリ。ベールハーヴハ疾病ヲ區別シテ、固形部ノ疾病ト、體液異常ニ因スル疾病トノ二種トナシ、ソノ固形部ノ疾病ニハ、構造ノ缺損、臟器ノ數量・大小・位置ノ異常、或ハ組織ノ硬固若クハ弛緩、或ハ血管ノ狹窄等ヲ舉ゲ、體液異常ニハ性質ノ異常



ゲルハルド

(各種ノ體液混合不良)アリ、分量ノ異常(多血)アリト説キ、又、兩種ノ混合セルモノアルヲイヘリ。
治療ノ主義ハ、ヒポクラテスノ所説ニ本ヅキ、自然ノ治療作用ヲ催進シ又ハ抑制スルコトヲ圖ルヲ主トシ、重キヲ食養法ニ置キ、急性病ニハ冷却ノ法ヲ施シ、慢性病ニハ下劑ヲ用ヒテ害物ヲ去ルヲ法トセリ。當時大ニ行ハレタル發汗法ハコレヲ排斥シ、血液ヲ薄クスル藥品下劑・ゴムハルツヲ主藥トシテ用ヒタリ。

- (1) Gerhard van Swieten
- (2) Albrecht von Haller

ベールハーヴハ始メテ臨牀的教育ヲ規律的ニ施行シタル醫家ニシテ、ソノ名聲天下ニ噴噴タリシガ、ソノ學術上ノ事業ハ門人ノ二大家ニヨリテ繼承セラレ、シカモ二個ノ相異ナレル方面ニ發展セリ。ソノ二大家トハゲルハルド、ファン、スウィーテン⁽¹⁾トアルブレヒト、ファン、ハルツェル⁽²⁾トナリ。ハルツェルハソノ師ベールハーヴノ學術的方面ノ事業ヲ繼承シ、遂ニ生理學ヲ科學的ノモノニ發展セシメシガ、ファン、スウィーテンハコレニ反シテ、專ラ實際上ノ方面ノ發展ニ努

- (1) Die ältere Wiener Schule

- (2) Anton de Haën
- (3) Anton Stoerck
- (4) Max Stoll
- (5) Joseph Leopold Auenbrugger



ンテルク

カシタリ。

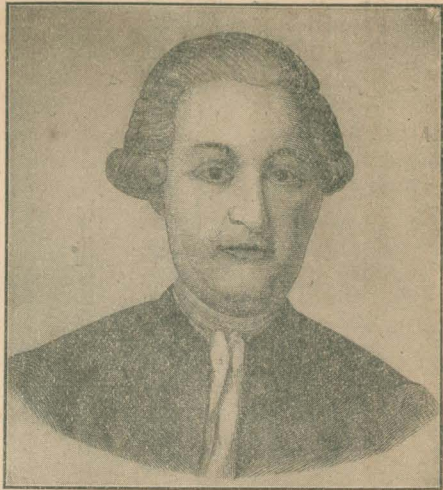
ゲルハルド、ファン、スウィーテン

ファン、スウィーテン(一七七〇年乃至一七七七年)ニシテ、最、カラ臨二年)ハ、ベールハーヴノ助手トシテ、ソノ後ヲ承クベキ筈ナリシガ、宗教上ノ關係ノタメニライデン大學ニ居ルコト能ハズ、一七四五年、墺國ノ皇室ノ聘ニ應ジテ、維也納ニ來タリ、ソノ醫科大學ニ教授トナリ、ココニソノ師ベールハーヴガ實際醫學上ニ於ケル事業ヲ扶植シ、所謂古維也納學派⁽¹⁾ヲ創立シタリ。

古維也納學派

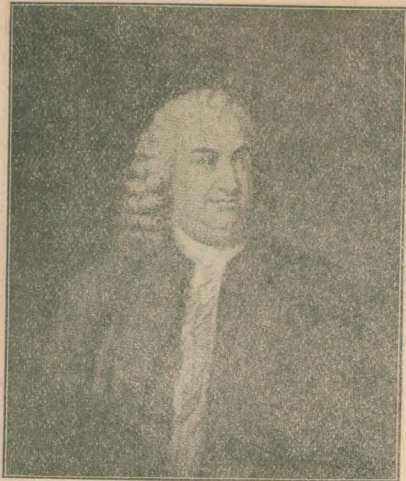
古維也納學派ニテ、最、名アリシハアントン、ヅ、ヘーン⁽²⁾(一七〇四年乃至一七七六年)ニシテ、最、カラ臨牀醫學ノ發展ニ盡シ、熱ヲ檢測スルニ、始メテ驗溫器ヲ應用セリ。ヘーンノ門人アントン、ストエルク⁽³⁾(一七三一年乃至一七八三年)及ビマックス、ストル⁽⁴⁾(一七四二年乃至一七八七年)モ亦、コノ學派ニテ、有名ノ學者ナリキ。就中、ヨセフ、ジョボルド、アウエンブルツゲル⁽⁵⁾(一七二二年乃至一七八九年)ハ打診法ノ發明者トシテ、ソノ名聲ハ千載不磨ナリ。

アウエンブルツゲルガ打診法ニツキテ記述セシハ、一七六一年ニシテ、ソノ書ニ名ヅケテ『胸膈ノ叩打ニヨリ



ルゲツルアンエウア

テ胸腔疾患ノ診徴ヲ得ルノ新發明(Inventum novum ex percussione thoracis humani ut signo abstrusus interni pectoris morbos detegendi)トイハ熱心ニコレヲ説キタレドモ、ルードウヒ及ビストル等二三大家ノコレヲ推稱セル止マリ、多數ノ醫家ハ冷笑シテ、コノ法ヲ顧ミズ、後年ニ至リテ、理學的診斷法ノ祖ト崇メラルルアウエンブルツゲルノ名モ、ソノ打診法ト共ニ、幾モナクシテ、遂ニ世人ノタメニ忘却セラルルニ至レリ。



ルレルハ

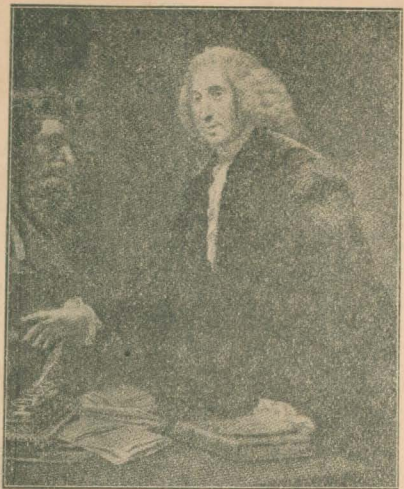
ベールハーヴノ門人タルラン、ユウーテング、實際醫學ノ方面ヲ恢弘シタルト同時ニ、同ジクベールハーヴノ門人タルハルレル(一千七百八年乃至一千七百七十七年)ハ實驗的生理學ヲ創始シ、斯學ニ一新紀元ヲ劃セシガ、コノ人ハ、運動ト感覺トノ現象ニツキテ研究セル結果、刺戟性⁽¹⁾及ビ感覺性⁽²⁾ハ動物性ノ生活ノ根本現象トナシ、ソノ刺戟性ハ筋肉ノ特性ニ屬シ、感覺性ハ神經系統ノ特性ニ屬スルモノトシテ、從來、神祕的ナリシ生活力ヲ解釋シタリ。

- (1) Irritabilität
- (2) Sensibilität

- (1) Cullen
- (2) Nervenpathologie

斯クテ、ハルレルノ所説ハ、當時ノ學界ヲ聳動シテ、コレガタメニ幾多ノ新統系^{システム}ヲ生ズルニ至レリ。

カルレン



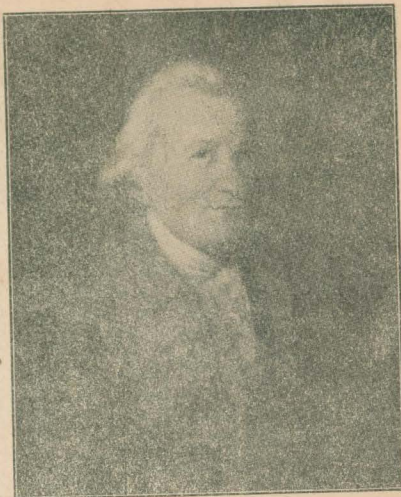
ンレルカ

ホッフマンガ、神經系統ヨリ出ツルトコロノ一種ノ物質ニヨリテ、身體ノ生理的及ビ病理的進機ヲ生ズト説ケルニ、關聯シテ、英國エヂンバラノカルレン⁽¹⁾ノ神經病理學⁽²⁾ヲ唱道セルアリ。カルレンハベールハーヴノ體液異常説ニ缺陷アルニ著目シ、ホッフマンノ所説ト、ウリスノ神經生理學ト、ハルレルノ刺戟論ト、モルガニノ病理解剖學トヲ取捨折衷シテ、一説ヲ立テ、腦ヨリシテ神經力アリテ出テ、神經ヲ通ジテ身體固形部ニ分佈シ、ソノ纖維ニ一定ノ緊張ヲ附與ス、一定ノ刺戟ノタメニ、腦ノ侵サレテ、ソノ緊張ニ變常ヲ呈スルトキハ、即、疾病ヲ生ズトナセリ、ソノ説ニ據レバ、多數ノ疾病ハ腦及ビ神經系統ノ衰弱ニ依ルモノニシテ、熱ノゴトキモ、一定ノ外部刺戟ニヨリテ、腦及ビ神經ノ勢力ヲ減ズルニ基ツクモノナリト言ヘリ。

カレンハ、ソノ一家説ニ本ツキテ、治療上ニ二個ノ要訣ヲ擧ゲ、一ニ反應ノ度ヲ輕クスルコト、二ニ腦及ビ神經ノ衰弱ノ原因ヲ去ルコト、三ニ腐敗ヲ防グコトナリトシ、藥品トシテハ強壯及ビ刺戟性ノ物品(阿片規那、葡萄酒、カンフェル等)ヲ用フルヲ推稱シ、瀉血及ビ排泄藥ノ應用ヲ不可トセリ。

- (1) Brown
- (2) Sthenie
- (3) Asthenie

- (4) Vitalismus
- (5) Bordeu



ンウラア

ブラウン

ブラウン⁽¹⁾(一千七百三十五年乃至八十五年)ハカ
 ンノ門人ニシテ、生活及ビ健康ノ保持ハ身體部分ノ常
 性ノ發揚性、竝ニ常性ノ發揚ヲ起スベキ刺戟ノ正當ナルコ
 トニ關係スルモノナリト説キ、ソノ發揚ノ過大⁽²⁾ナルカ、又ハ過
 小⁽³⁾ナルカニ因リテ疾病ヲ發生ズト言ヘリ。故ニブラウンガ
 治療ノ方法トシテ用ヒタルハ、發揚ノ效力ヲ有スルトコロノモ
 ノ(タトヘバ、溫熱・阿片・葡萄酒・運動・麝香等)又ハ鎮靖ノ作用ヲ早スルモノ(寒冷・斷食・瀉血・發汗等)ナリキ。

生力學派

十八世紀ノ中葉ヨリシテ、佛國ニモントベリール學派アリテ、生力學説⁽⁴⁾ヲ唱ヘシガ、ソノ創始者ハボルドウ⁽⁵⁾(一
 千七百二十二年乃至七十六年)ニシテ、ソノ後繼者ニハ、バルターズ・ビチル等アリ。コレニ關聯セズシテ獨逸ニモ生
 力學派興リシガ、コノ派ニテ著名ナリシハ、ブルームン・バツバ・ライル・フーフ・グレンドナリ。ソノ所説ハ、從前ノモノニ
 比シテ大ニ進歩シ、生活力ヲモツテ單一的ノモノトナサズ、各個ノ器臟、殊ニ腺ニ、特別ノ生活力ヲ存スルモノトナシ、臟器
 及ビ組織ノ檢索ニ腐心シタル結果、遂ニビシューノ組織學ヲ産ムニ至レリ。

- (1) Mesmerismus
- (2) Homopöathie
- (3) Friedrich Anton Mesmer

- (3) Samuel Hahremann

メスマリスムス

カルレン・ブラウン等諸家ノ所説ガ、疾病ノ本態ヲ論ズルニ方リテ、空想的ニ傾キシガタメニ、當時ノ醫家ニシテ、眞ノ
 事實ヲ離レテ、論ヲ立ツルモノ多カリシガ、中ニモ、メスマリスムス⁽¹⁾トホメオパチー⁽²⁾トノ兩説ハ、ソノ最ナルモノナリ。
 メスマリスムスハフリードリヒ、アントン、メスマル⁽³⁾(一千七百三十四年乃至一千八百十五年)ノ創始セルト
 コロニシテ、ソノ説ニ據レバ、人體ニハ一種ノ磁性液ノ循環スルアリ、自然ノ方則ニ準據シテ、人體ノ各部、殊ニ神經系
 統ノ上ニ、ソノ作用ヲ強クシ又ハ弱クスルノ感作ヲ及ボスモノニシテ、コレヲ動物電氣ト稱ストイヒ、病者ノ身體ニ手ヲ置キ
 テ、ソノ疾病ヲ療スルコトヲ唱道シタリ。

ホメオパチー

メスマリスムスノ神祕的治療説ニ比シテ、更ニ一段、空想的ナルハホメオパチーニシテ、創メテコレヲ唱道セルハザムユル、
 ハーチマン⁽³⁾ナリ。ハーチマンハ化學ニ通ジ、學術的ニ養成セラレタル人物ナリシガ、カルレン藥物學ヲ翻譯スルニ
 方リ、規那皮ヲ用フルトキハ間歇熱ニ類似スルトコロノ症狀ヲ發ストイフコトヲ知り、自カラコレヲ試驗シテ、規那が間歇熱
 ニ效アルハ、間歇熱ノ疾狀ヲ發スルガタメナリトシ、爾他ノ藥品ノ作用ニ亦、同様ナルベシトシテ、遂ニSimilia similibus cu-
 rantur (同ジモノハ同ジモノヲ療ス)ノ説ヲ立テ、一千七百九十七年、コレヲ世ニ公ニシタリ。斯ノ如クニシテ、ホメオパチーニ
 關スル著述ハ、ハーチマン及ビソノ一派ノ人人ノタメニ多數ニ公ニセラレ、ソノ所説ハ、僞科學的ニ構成セラレ、ソノ餘勢
 ハ今日モ尙、獨逸ニ保タレツツアリ。

第十九世紀

(1) Haller

十八世紀ノ末ニ、ハルツェル⁽¹⁾出デテ、生理學ヲ革新シ、ココニ實驗的生理學ヲ創始セルヨリシテ、我醫學ハ更ニソノ一面ヲ一新セリ。蓋、當時、自然科學ノ發達ニ從ヒテ、觀察ト實驗トニ重キヲ置クニ至リ、コノトキマデ行ハレテ、解剖學：生理學及ビ病理解剖學上ノ知識ニ基ツカザルトコロノ統系學派ハココニ排斥セラレ、觀察ト實驗トヲ根據トセルトコロノ醫學コレニ代リテ新ニ興レリ。コノ方面ニアリテ、特ニ功績アリシ

(2) Morgagni

ハモルガニー⁽²⁾（一千六百八十二年乃至一千七百七十一年）ニシテ、多數ノ解屍ニ本ツキテ、疾病ノ解剖的位置ヲ臟器ニアリトナシ、晩近ノ病理學ノ始ヲナセリ。次デ、ビシ

(3) Bichat

一⁽³⁾（一千七百七十一年乃至一千八百二年）アリ、組織學ヲ唱道シ、疾病ノ占居スルトコロヲ組織ナリトシ、同一ノ組織ハ各種ノ臟器ニアリテ、同時ニ病ムモノナルコトヲ説キタリ。十九世紀ニ及ビテハ、自然科學及ビ生物學ノ發達顯著ニ



モルガニー

シテ、テマルクノ進化論（一千八百一年）、ダルウ⁽⁴⁾ノ淘汰論（一千八百五十九年）、ダルトン⁽⁵⁾ノ原子論（一千八百八年）、ユール⁽⁶⁾ノ有機化學ノ創始（一千八百二十八年）、マイエル⁽⁷⁾ノ勢力保存法則（一千八百四十二年）、シワン⁽⁸⁾及ビバーストール⁽⁹⁾ノ非原始生殖說等アリ、我ガ醫學ハソノ感作ヲ受ケテ、生活機能ヲ説クノ神祕論及ビ冥想說ハ用ヒラズ、觀察ト實驗トヲ基礎トスルノ說、ソノ勝ヲ占ムルニ至レリ。余ハ、ココニ、コノ期ニ於ケル實際醫學ノ發

(1) Haller

(2) Morgagni

(3) Bichat

(4) Darwin

(5) Dalton

(6) Lavoisier

(7) Mayer

(8) Schwann

(9) Virchow

達ニツキテ、重要ノ點ヲ擧ゲベシ。

生理的醫學

- (1) Broussais
- (2) Die physiologische Medicin
- (3) Primum movens
- (4) Irritation
- (5) Gastroentérite

十九世紀ノ初ニ於ケル實際醫學ノ革新ハソノ端ヲ佛國ニ發シ、ブルツセイ⁽¹⁾（一千七百七十二乃至一千八百三十八年）ハ所謂生理學的醫學⁽²⁾ヲ唱道シタリ。ソノ說ニ據レバ、人ノ生活ハ外來ノ刺戟、殊ニ溫熱ヨリテ生ズ、コノ刺戟ハ生活力⁽³⁾ニ作用シテ、ソノ機能ヲ發呈セシム、ソノ機能ニシテ尋常ナル間ハ、生活及ビ健康ハ保存セルベシ、若、刺戟ノ分量異常アレバ病ヲ生ズ。刺戟ハ常ニ身體ノ一部ヨリソノ力ヲ及ボスモノニシテ、コノ原發的罹患部位ヨリシテ、神經系統ニヨリテ刺戟ハ各方ニ放散セラル、コノ放散ヲ疾病ノ症狀トシ、ソノ一部ノ疾病刺戟ヲイルリタチオン⁽⁴⁾ト稱ス。故ニ、ブルツセイノ說ニ據レバ、スベテノ疾病ハイルリタチオンニシテ、スナハチ、病的刺戟ノ結果ナリ。斯ノ如クニシテ、從來所謂全身症トシテ一定ノ限局處ナシトセラレタル熱病ヲモ、常ニ局處ノ障礙ニ本ツクモノトナシ、殊ニ消化管ノ粘膜ハ最、イルリタチオンニ遭遇スルトコロノ部位ナリトシ、コレニヨリテ胃腸炎⁽⁵⁾ノ說ヲナシ、スベテノ急性病ハ皆、コレニ本ツクモノトセリ。ブルツセイハコノ學說ニヨリテ治療上ニモ一側的ノ說ヲ立テ、乾角及ビ刺絡寒冷ノ應用、酸性及ビ粘液性物品ノ應用ヲ專一トシタリ。

巴里病理解剖學派

ブルツセイノ生理學的醫學ハ、此ノ如ク、ビシ⁽¹⁾、ブラウ⁽²⁾等ノ學說ヲ綜合シテ、冥想的ノ辯論ヲナセシマデナリシガ故ニ、ソノ學派ハ永ク生命ヲ保ツコト能ハズ、新タニ興レル病理解剖學派ノタメニ、ブルツセイノ說ハ排斥セラレタリ。所

(2) R. Th. H. Laënnec (1) Han Nicolas Corvisart des Marest



コルザール

ウエンブルツゲルノ打診ノ法ヲ再興シ、ソノ方法ノ足ラザルトコロヲ補ヒ、悪シキヲ直シテコレヲ臨牀上ニ應用シタリ。



レオンツク

謂病理解剖學派ハ、記載的病理解剖學、即、疾病ノ占居ト原因トヲ判定スルノミニテハ満足セズ、進ンテ病理解剖上ノ所見ト、臨牀上ノ所見トヲ對照センコトヲ企テタリ。コノ學派ノ創立者ハ、コルザール⁽¹⁾（一千七百五十五年乃至一千八百二十一年）ニシテ、コノ人ハナポレオン第一世ノ侍醫トシテ、巴里ニ於ケル第一ノ臨牀醫學教授トシテ有名ナリシガ、特ニ心臟病ノ研究ニ力ヲ致シ、又、二百年來世人ガ忘却シテ顧ミザリシコロノアコルザールニ嗣ギテレオンツク⁽²⁾（一千七百八十一年乃至一千八百二十六年）アリ。病理解剖學ヲ臨牀上ニ利用スルコトニ努力シ、症狀ト屍體變化トノ關係ヲ研究シ、病理各論、殊ニ呼吸器循環器ノ疾患ニツキテ詳細ノ調査ヲ企テタリ。就中、レオンツクハ希臘ノ醫家ガ既ニ著目シタリト傳ヘラルトコロノ聽診法ヲ發明シ、コレヲ臨牀上ノ診斷ニ適用シ、打診法ニ併セラ、理學的診法ヲ完全セルヲモツテ名ケリ。

胸部及ビ腹部ノ疾病ヲ診定スルニ、聽診法ヲ應用スルコトハ、ヒポクラテス時代ヨリシテ已ニ醫家ノ知レルトコロナリシガ、ソノ方法ハ直ニ耳ヲ局處ニ當テテスルノ法、所謂直接聽診法ナリキ。シカルニ、レオンツクノ發明ハ、間接聽診法ノ施行ニシテ、頃ハ一千八百十六年、レオンツクハ一少女ノ心臟病ヲ診査スル際シ、ソノ耳ヲ胸壁ニ當ツルコト、常法ノゴトクニスルコト能ハザリシニヨリ、偶、ソノ場ニアリシ紙片ヲ卷キテ筒トナシテ用ヒシニ、ソノ結果可良ナリキ。ココニ於テ、レオンツクハコノ法ノ診斷上ニ重要ナルコトヲ感ヅ、聽診器ノ創作ニ工夫ヲ凝シ、呼吸音及ビ水泡音ヲ聽取スルニハ中空ノモノヲ可トシ、心臟及ビ音聲ヲ聽クニハコレニ反シテ中實ノモノヲ可トスルコトヲ知り、レオンツクハ管狀ノ聽診器ニ閉鎖器ヲ附シタルモノヲ用ヒタリ。

實驗的病理學

- (1) P. Ch. A. Louis
- (2) J. Gavarret
- (3) Andral
- (4) Magendie
- (5) Die experimentaelle Pathologie

病理解剖學派ニハ尚、ルイ⁽¹⁾（一千七百八十七年乃至一千八百七十二年）アリテ、統計的方法ヲ創始シ、次デガダルレ⁽²⁾（一千八百九年乃至一千八百九十年）アリ、アンドラール⁽³⁾（一千七百九十七年乃至一千八百七十六年）ト共ニ病理解剖的變化ニ併セテ疾病現象ノ發育機轉ヲ攻究スルノ必要ヲ説キタリ。同時、佛國ニハマツゲン⁽⁴⁾アリ、ソノ實驗生理學ノ原則ヲ實際醫學ニ移シ、實驗ヲ病理及ビ療法ニ適用スベキコトヲ主張シ、病理學ハ罹患セル有機體ノ生理學ニ外ナラズトナシ、ココニ新タニ實驗病理學⁽⁵⁾ノ一派ヲ立テタリ。マツゲン⁽⁴⁾ハ動物ニツキテ實驗的ニ嘔吐膿血症ノゴトキ各種ノ病理學的狀態ヲ發呈セシムルコトヲ試ミ、ソレヨリ進ミテ病理學的研究ニ從事セシガ、單ニ解剖上ノ所見ニミ偏セズ、疾病ノ症狀ノ生理的發達ニモ著目シ、病的ノ身體ノ全部ヲ觀察スベキコトヲ主張シ、治療上ノ所見ハ虛無^{ニヒリスムス}ニ傾キタリ、而カモ學術上ノ療則ヲ立ツルコトノ可能ヲ信ゼリ。

斯ノ如クニシテ、巴里醫家ノ努力ハ、醫學ノ發達ニ資スルトコロ多カリシガ、殊ニコノ學派ノ偉績ハ、古代ノ症狀的疾
病學ガ症狀ノ類同ト不同トヨリテ疾病ノ同種ト異種トヲ區別セルヲ排斥シ、臨牀上ノ所見及ビ病機ノ判定ニ病理解
剖及ビ病理學ノ思考ヲ入レ、而シテ病機ヲ認識スルニ理學的診斷法ヲ以テセルニアリ。

英國ニアリテハ、シデンハム・フンテル・カルレンノ學說相續キテ久シク行ハレシガ、佛國諸派ノ學說入り來タリ、殊
ニ病理解剖學派ハ英國人ノ實際的思想ニ適合シ、病理解剖學及ビ理學的診斷法ハ、大ニ開發セラレタリ。コノ派ノ
代表者トシテ舉グベキハモーン⁽¹⁾（一千七百七十七年乃至一千八百三十六年）ストークス⁽²⁾共ニ記載セル呼吸
現象ニヨリテ名アリ。ストークス⁽²⁾（一千八百四年乃至一千八百七十八年）及ビグレーヴス⁽³⁾（一千七百九十
七年乃至一千八百五十三年。反射運動・室扶斯ノ研究・バセドウ氏病ノ記載等ニヨリテ名アリ）等ナリ。

自然史派

獨逸國ニアリテハ、實際醫學ハ、當時行ハレタル自然哲學ノ影響ヲ受ケテ自然史派⁽⁴⁾又ハ寄生生物派⁽⁵⁾ヲ成セシガ、ソノ
第一ノ代表者ハスタルク⁽⁶⁾（一千七百八十七年乃至一千八百四十五年）ニシテ、説クトコロハ古代醫家（バラヅ
ルズス・メン、ヘルモン）ノ實體論ニ類シ、疾病ヲモツテ生活ノ特殊ノ種類トナシ、健康ノ剝奪、スナハチコレ疾病ニア
ラズシテ、固有ノ生活機ニシテ特別ノ形態ヲ有シ、他ノ有機性進機ノゴトク、自家ノ保存ニ汲汲タルモノ、コレ疾病ナリトセ
リ、後ニハ疾病ヲモツテ直接ニ寄生生物ナリトシ、獨立ノ本態トシテ體內ニ生育スルモノナリト論ジタリ。第二ノ代表者ハカ
ー、エル、ヤン、ホツフマン⁽⁷⁾（一千七百九十七年乃至一千八百七十七年）ニシテ、疾病ヲモツテ、人類ガ有機界ノ
不十分ナル發育期ニ退步セルノ徵トナシ、タトヘバ、腺病性毒素ハ昆蟲ノ脂肪ニ等シクシテ、從ツテ腺病ハ昆蟲ノ幼蟲ニ

- (1) J. Cheyne
- (2) W. Stokes
- (3) R. Graves

- (4) Die naturhistorische Schule
- (5) Die parasitäre Schule
- (6) K. W. Stark
- (7) K. R. von Hoffmann

- (1) Ichann Lucas Schönlein
- (2) Johannes Müller

- (3) Christoph Wilhelm Hufeland
- (4) Heinrich Ferdinand von Autenrieth
- (5) Christian Friedrich Nasse
- (6) Peter Krukenberg
- (7) Die neue wiener Schule
- (8) K. Rokitansky

於ケル部分的變化ニ外ナラズ、痛風ノ結節ハ一定ノ植物ノ花蕾ニ比較スベキモノナリト説キタリ。第二ノ代表者ハシュ
ンライン⁽¹⁾（一千七百九十三年乃至一千八百六十五年）ニシテ、自然史派ヨリ出デテ、自然科學ノ研究方法ヲ醫
學ニ適用スルコトニ努力シ、病理解剖學及ビ理學的診斷法ノ價值ヲ認識シ、且、病機ヲ判知スルニハ顯微鏡的及ビ
化學的檢査方法ノ必須ナルコトヲ説キ、スベテコレ等ヲ方法ヲ臨牀上ノ教育ニ施シタリ。斯ノ如クニシテ、シュ
ンライン⁽¹⁾ハ輓近臨牀醫學ノ創立者トシテ、生物學ノ創始者ミルレル⁽²⁾ト、ソノ聲譽ヲ同ウセリ。

斯ノ如ク、柏林學派ハシュンラインヲ首領トシ、病理解剖學ト、理學的診斷法トノ發達ニ努力シ、實際醫學ノ進
歩ニ資スルトコロアリシガ、ソツ始、尙、理化學的診斷法（自然科學的方法）ノ臨牀上ニ應用セラレザリシ時代ニ、クリス
トフ、ウルヘルム、フーフラン⁽³⁾（一千七百六十二年乃至一千八百三十六年。折衷學派ノ泰斗）ヨハン
ハインリヒ、ズルヂナンド、ヤン、アウテンリット⁽⁴⁾（一千七百七十二年乃至一千八百三十五年）クリス
チアン、フリードリヒ、ナツセ⁽⁵⁾（一千七百七十八年乃至一千八百五十一年）ペーテル、クルーケンベル
グ⁽⁶⁾（一千七百八十七年乃至一千八百六十五年）等ノ諸家アリ

新維也納學派

佛國ノ病理解剖學派ノ學說ハ、維也納醫家ノタメニ恢弘セラレ、ココニ所謂新維也納學派⁽⁷⁾ヲ成セリ。ソノ創立者ハ
カー、ロキタンスキイ⁽⁸⁾（一千八百四年乃至七十八年）ニシテ、醫學及ビ醫術ノ基礎ハ全ク病理解剖學ニアリトナ
シ、而シテ、單ニ解剖的所見ヲ自然史的ニ記載シ、且、類別スルヲモツテ足レリトセズ、死後臟器ニ發見セラレタル變化ニヨ

(1) J. Skoda



ダ ー コ ス

リテ疾病ノ經過中ニ發呈セル症狀ヲ説明セント試ミタリ。後ニ至リテ、ウルフ、ウガ病理組織的ノ發見ヲナセシハ、ソノ源ヲコニ發セルナリ。

新維也納學派ニハ又、スコーダ⁽¹⁾(一千八百五五年乃至八十一年)アリ。病理解剖學上ノ所見ニ本ツキテ、理學的診法ノ革新ヲ企テ、打診及ヒ聽診ニヨリテ認メラレタル理學的の症狀ハ、身體ノ一定ノ理學的的狀態ニ因由スルモノナルコトヲ説キタリ。スコーダガ始メテナシタル打診

音及ヒ聽診音ノ區別ハ、理學的の診斷ノ基本ヲナシ、今日モ尙、學界ニ承認セラルルトコロナリ。

細胞病理學

實驗及ヒ顯微鏡的の検査法ヲ病理學ニ應用スベキコトハ、已ニミルレルガ唱道セシトコロナリシガ、ソノ門人ルードルフ、ウルフ⁽²⁾(一千八百二十一年乃至一千九百一年)及ビルドウヒ、トラウベ⁽³⁾(一千八百十八年乃至七十六年)ガ、病理組織學⁽⁴⁾及ヒ實驗病理學⁽⁵⁾ヲ創始スルニ至リテ、疾病ノ本態ヲ解スルノ所見ハ、根底ヨリ一新セラレタリ。ウルフ、ウハ、從來行ハレタル液體病理・神經病理及ヒ生活論ヲ排斥シ、コレニ代ユルニ自家ノ細胞病理學⁽⁶⁾ヲ以テシ、病機ノ占居セル處ヲ身體ノ根基原素タル細胞ニアリトナシ、コレニ依リテ、軌近ノ理化學的研究方法ヲ病理學ニ適用スルコトヲ得セシメタリ。

- (2) Ludwig Traube
- (3) Pathologische Histologie
- (4) Experimentelle Pathologie
- (5) Cellularpathologie

トラウベハ新維也納學派ノ所説ヲ伯林ニ傳ヘ、又、佛國ノマーゲンデーノ説ニ感ジテ、實驗病理學的の研究ヲナシ、遂ニ實驗的の病理學ヲ創立シタリ。ソノ呼吸器裝置ニ於ケル窒息症狀・迷走神經切斷後ノ肺炎症狀・心臟病ト腎臟病トノ關係・熱トチキターリス作用トノ關係・體溫ノ測定等ニツキテノ業績ハ、後來ノ研究ニ對シテ好模範ヲ示セルモノナリキ(體溫ノ測定ニハ、ファン、ベーンスブルグ・ウンデルグヒノ成績モ尠カラズ)。

實驗的の自然科學時代

解剖學興リテヨリ二百年、人體ノ器械ノ構造ハ、漸、コレヲ詳ニスルコトヲ得タレドモ、コノ器械ヲ運動スルトコロノ動力ニツキテハ未、コレヲ明ニスルコトヲ得ズ、實際醫學ハ尙、ソノ舊路ヲ蹈ミテ進行シタリ。シカルニ、ブリーストレイ・シェーン及ヒ殊ニラヴァジ⁽¹⁾ノ出デテ軌近化學ヲ創始シ、酸素ノ發見ヲ首トシ。原子論・アルカロイド檢索(ヅマス)・有機分拆改善(グリーブヒ)・人工尿素製造(ウーレル)・オゾン發見(シェーン・バイン)・焰色分拆(ブンセン・キルビホフ)等、斯學ノ進步顯著ナリシガ故ニ、我ガ醫學ハソノ感作ヲ受ケテ、生理的の化學及ヒ病理化學等ノ新學科ヲ生ジ、コレニヨリテ人體ノ器械ヲ運轉セシムルトコロノ動力ヲ詳ニスルコトヲ得、從ツテ又、榮養・毒物學・藥理學及ヒ治療學ノ全體ニ涉リテ、革新セルトコロ甚、少ナカラズ。

- (1) M. J. Oertel
- (2) Mastkuren
- (3) Entziehungskuren

身體殊ニ榮養・物質代謝ノ化學的・生理的の進機ニツキテノ知識ノ發展ハ、食養的方法、殊ニ慢性消化器病・榮養障礙及ヒ循環器障礙(エム、ヨット、エルテル)⁽²⁾ノ食養法ヲ進歩セシメ、又肥滿療法⁽³⁾及ヒ減食療法⁽⁴⁾ハコレガタメニ、慢性體質病ノ治療上ニ必要ノモノトナレリ。

水治療法ハ十八世紀ノ頃ヨリ、方式的ニ治療上ニ應用セラレシガ、始、コノ方法ノ研究ニ從事セシモノノ内ニハ二人ノ

- (1) Eucharius Ferdinand Oertel
- (2) Vincenz Priessnitz
- (3) Hallmann
- (4) Fleury
- (5) A. Pleniger
- (6) W. Winternitz
- (7) E. Brand

- (8) Fresenius
- (9) Fr. W. Vetter
- (10) J. Braun

非醫者アリ、一ハエー、エフ、エルテル⁽¹⁾(一千七百六十五年乃至一千八百五十年)ニシテ、アンスバツパナル中學校ノ言語學及ヒ歴史ノ教師ナリ。一ハヴンセンツ、ブリースニツツ⁽²⁾(一千七百九十年乃至一千八百五十一年)ニシテ、本ト農夫ノ子ナリシガ、偶然ノコトヨリ冷水ノ治療作用ヲ知り、一千八百二十七年、ソノ住地タルグレン⁽³⁾ニベルグニ水治療法ヲ設立シ、經驗ニ依リテ、冷水ヲ諸種ノ疾病ニ施用シ、兼テ新鮮空氣、嚴格ノ食餌ニヨリテ、治療上顯著ノ效果ヲ擧ゲタリシカバ、醫家モ亦、ソノ方法ヲ臨牀上ニ試ミ、ソノ生理的作用ヲ精究シテ、以テ水治療法ノ眞價ヲ定メントセリ。コノ方面ニツキテ努力セシハ、ハルマン⁽⁴⁾(一千八百十三年乃至五十五年)、フロイリ⁽⁵⁾(一千八百十四年乃至七十三年)、ブレニーゲル⁽⁶⁾及ビ殊ニ維也納ノウンテルニツツ⁽⁷⁾ナリ。シカレドモ、水治療法ハ、未、廣ク醫家ノ賞用スルトコトナラザリシガ、ステチンノブランド⁽⁸⁾(一千八百二十七年乃至九十七年)ガ冷水治療法ヲ室扶斯ニ用フルコトヲ稱揚セシヨリ、コノ方法ハ醫家ノ採用スルトコトナリ、爾後、諸家ノ實驗ニ依リテ、遂ニ水治療法ハ解熱ノ一方法タルニ至レリ。

氣候療法及ビ浴治療法ハ、理學及ビ化學ノ發達ニヨリテ多大ノ影響ヲ蒙リ、ソノ治療的作用及ビコレヲ用フルノ方法ハココニ學術上ノ根據ヲ得ルニ至レリ。氣象學ハフンボルトノ發意ニ本ツキ、ドーヅノ唱道ニ係レル測候所ノ設立ニヨリテ補ケラレ、ココニ各種氣象學ノ事項ノ研究ヲ遂グルヲ得テ、氣候療法ハ學術上ノ基礎ニ立ツニ至レリ。鑛泉學ハ化學的分拆方法ノ完成(フレゼニウス⁽⁹⁾)ニヨリテ、鑛泉水ノ化學的成分ヲ詳ニスルコトヲ得、又ソノ治療作用ノ生理的解釋ヲナスコトヲ得ルニ至リテ、浴治療法ハソノ面目ヲ一新セリ。コノ方面ニアリテ、第一ニ擧グベキハ、スツツル⁽¹⁰⁾(一千七百九十九年乃至一千八百四十三年)及ビブラウン⁽¹¹⁾(一千八百二十一年乃至七十八年)ニシテ、就中スツツルノ著述(一千八百三十八年)ハ、コノ科目ニ一新紀元ヲ劃セルモノナリ。

- (1) Pneumotherapie
- (2) Inhalationstherapie
- (3) L. Waldenburg
- (4) H. Brehmer

- (5) P. Ling
- (6) M. Schreiber
- (7) Schildbach
- (8) Zander

大氣療法⁽¹⁾或ハ吸入療法⁽²⁾ハワルドンブルグ・ゲー・レウ・クナウテ等諸家ノ努力ニヨリテ完成セラレタリ。ワルドンブルグ⁽³⁾(一千八百三十七年乃至八十年)ハ一千八百六十四年、呼吸療法ニツキテノ著述ヲ公ニシ、次デ一種ノ大氣療法裝置ヲ發明シ(一千八百七十三年)、又、呼吸器病及ビ循環器病ノ大氣療法ヲ敘述セリ。

ソノ他、コノ方面ニテ、功績多キハ、ブレーメル⁽⁴⁾(一千八百二十六乃至八十九年)ニシテ、コノ人ハゲルベルスドルフニ養生院ヲ創立シ、氣候療法ヲ合理的ニ施シテ、模範ヲ後人ニ示シタリ。

按摩療法及ビ體操法モ、精密ノ研究ニヨリテ、ソノ治療上ノ價值モ亦、承認セラルルニ至リシガ、コノ方面ニアリテハ、ペー、リング⁽⁵⁾(一千七百七十五年乃至一千八百三十九年)、エム、シュレーベル⁽⁶⁾(一千八百六年乃至六十二年)、シルトバツバ⁽⁷⁾、ツァンデル⁽⁸⁾等諸家ノ功績ヲ擧ゲザルベカラズ。

ソノ他、電氣理學ノ進歩・レントゲン線ノ發見・ラヂウム輻射線ノ發見・物理化學ノ進歩ガ、我内科醫學ニ及ボシタル感作ノ大ナルコト、殊ニ診斷及ビ治療ノ技術ガ、コレニヨリテ大ニ發展セルコトハ言フヲ俟タザルトコトナリ。

藥理學ガ、進歩セル化學ノ影響ヲ蒙ルルコトハ顯著ニシテ、コレガタメニ斬新ノ藥品ノ發見セラレタルモノ、尠ナカラズ、又從來、經驗的ニ效果ノ認めラレタルモノニシテ、ソノ治療作用ノ新タニ學術上ノ解釋ヲ得タルモノ、及ビ從來、ソノ效果ノ認めラレタル藥品ノ中ヨリ有效成分ヲ拆出セルモノ、尠ナカラズ。又、綜合法ニヨリテ、新物質ヲ製シ、コレヲ治療スルニ至レルモノ甚、多シ。ソノ著シキモノニ二三ヲ擧グレバ、規尼涅(一千八百二十年)、ベルシケール・カズントン(モルヒチ)一千八百五年、セルモルチル(ストリビニ)一千八百十八年、ベルシチール・カズントン(アトロピン)一千八百三十三年、ガイゲル(ヘツセ)・コカイン(一千八百五十九年、ニーマン)、沃度加里(一千八百三十六年、ワヂス)、クロフォルム・クローラール・ビドラー(一千八百六十九年)、リーブライヒ、アミール・ニトリート・クレオソート(一千八

(1) Insufflation
(2) Darminfusion

(3) Robertkoch

百七十七年、ブーシー等、殊ニフレンゼル・グムメル・プロート等ナリ。
マーゲンチー・ベルナル及ビトラウベ等諸家が、實驗方法ヲ藥理學ノ研究ニ應用シタルコトモ亦、ソノ學ノ發
達ニ多大ノ影響ヲ及ボセルコト勿論ナルガ、實際醫學上、殊ニ重要ナルハ、藥物ヲ應用スルノ方法ノ改良セラレテ、ソノ效
力ノ増強セルコトナリ、スナハチ一千八百五十三年、ブラヴツガ發明セル皮下注射法ヲ始メトシ、吹入法⁽¹⁾、灌腸法⁽²⁾、
胃腸管・靜脈内注射等ノ諸法ヲ應用シテ、喉頭・胃・腸等身體内腔ニ、直接ニ藥物ヲ應用スルニ至リテ、ソノ效果ハ
益、佳良ナルヲ致セリ。

細菌學

細菌學ハ、ローベルト・コッポ⁽³⁾(一千八百四十三年乃至一千九百十一年)ガ、脾脫疽菌芽胞ヲ發見セルニ、ソノ
端ヲ發シ、純粹培養法及ビ動物試驗ノ應用ハ、ソノ技術ノ進歩トニヨリテ、漸次、諸種疾病ノ原因タルベキ細菌ノ發見
セラルルアリ、傳染病ノ原因ガコレニヨリテ明瞭ナルヲ得タルコト尠カラズ。

コッポハ又、バストールガ、一定ノ傳染病、タトヘバ鶏虎列刺・脾脫疽ノ病毒ヲ動物ヨリ動物ニ移スコト數次ニシテ、
コレヲ人工的ニ減力セシメタルモノヲ取り、動物ニ攝取スルトキハ、ソノ動物ガソノ病毒ニ對シテ免疫性ヲ有スルニ至ルトイヘ
ル實驗報告ニ本ツキテ、免疫法ヲ研究シ、ソノ結果、傳染病ノ原因ニツキテノ所見ニ變動ヲ起シ、傳染病學ノ範圍ニ於
ケル科學上ノ研究ニ一新方面ヲ開キ、更ニ進ミテ血清療法(諸般ノ治療血清及ビ豫防血清等)及ビ化學療法(エ
ーテルヰヒ、秦氏ノサルヴァルサン等)ヲ新興スルニ至レリ。

我邦ノ内科

我邦ノ醫學ハ、奈良朝以前ノ時代ニアリテ、支那(隋・唐)醫方ノ傳來セルニ始マル。大寶ノ令ニ、醫學ノ專門ヲ立テラレ
タルトキ、體療ノ科目アリ、創腫・少小・耳目口齒ノ科目ト併ビタリ。體療トハ、身體諸病ヲ悉ク主治スルガ故ニ、名ヅクル
モノニシテ、ソノ稱呼ハ本ト、支那ニ出デタリ。支那ニアリテハ周ノ代ニコレヲ疾醫ト唱ヘ、唐ノ代ニ至リテ體療ノ名アリ、宋以
後ニ至リテハ方脈又ハ大方脈ト名ヅケタリ。我邦ニテハ足利氏ノ時代ニ及ビテコレヲ本道ト名ヅケ、創腫(後ニ外科・瘍
科)ト併ベタリシガ、コレスナハチ、後ニ内科ト稱セラルルモノナリ。奈良朝ヲ經テ、平安朝ニ至ルニ及ビ、唐醫方ハ益、盛ニ我
邦ニ行ハレ、内經太素・病源候論・千金方等ノ隋・唐醫書ハ金科玉條トシテ尊崇セラレシガ、圓融天皇ノ朝ニ、丹波康
賴ノ醫心方(永觀二年、西曆九百八十二年)三十卷ヲ著ハスアリ、唐ノ醫說ヲ奉ヅテ、疾病ノ原因ハ外感ヲ主トシ、治
療ノ方則トシテハ、灸刺・熨引・鍼石・按摩・醃藥ヲ主トセルコトヲ說キタリ。

鎌倉時代ニ至リテハ、宋ノ醫說入リテ、疾病ノ原因ヲ内因・外因・不内外因ニ別テ、疾病ノ發生ノ五運六氣ニ關スルコ
トヲ言ヒ、五運六氣ノ補瀉ヲ求ムルヲ治療ノ要訣トシ、灸治・湯治・食養ヲモツテ、治療ノ主方トシタリ。

安土・桃山時代ニ及ビテ、金・元ノ醫學入リ、徳川氏ノ初世ニハ李東垣・朱丹溪・劉完素・張子和等ノ說、專バラ行ハ
レ、疾病ノ原因ハ内傷ニ重キヲ置クベシトナシ、脾胃ヲ補フコトヲ治療ノ要訣トシタリ。シカルニ、徳川氏ノ中世ニ及ビ、一氣
留滯論・萬病一毒論・氣血水論等ノ學說出テ、外來ノ害物ト、身體ノ素質トヲ舉ゲテ、疾病發生ノ因由ヲ説明シ、從
ツテ治療ノ法則トシテハ、汗・吐・下ノ三方ヲ用ヒ、主トシテ外來ノ害物ヲ排除スレバ、疾病ハ從ツテ治癒スベキモノト解釋
シタリ。

- | | | |
|--------------------------------|--------------------------|------------------------------------|
| (14) Hermann Retzke | (8) Hufeland | (1) Johannes de Gorter (1688-1762) |
| (15) Hermann Helke | (9) Lebert | (2) Consruch |
| (16) Philipp Franz von Siebold | (10) Tissot | (3) Anton Stoerck |
| (17) Mohnike | (11) Canstatt | (4) Van Swieten |
| (18) Pompe van Meerdervort | (12) Cahl Peter Thunberg | (5) Boerhaave |
| | (13) Bernhard Keller | (6) Bischoff |
| | | (7) Conradi |

歐洲醫方ノ始メテ、我邦ニ傳ハリシハ、安土・桃山時代ノコトナルガ、爾後二百年間、獨、外科ノ方術ノミ行ハレテ、内科ノ學ハ未、傳ハラズ。一ニノ片片タル著述ヲキニアラザリシモ、寛政五年(西曆一千七百九十三年)、宇田川槐園ガ西説内科選要ヲ譯述シテ世ニ行ヒシヨリ始メテ、我邦ノ醫家ハ、歐洲内科ノ醫說ヲ知ルコトヲ得タリ。内科選要ハ和蘭ノ醫家ゴルテル⁽¹⁾ノ内科書(一千七百四十四年)ヲ譯述セルモノニシテ(ゴルテルハペールハーヴノ門人ニシテ、始メハソノ師ノ說ヲ奉セシモ、後ニハコレニ多少ノ改革ヲ施シタル人ナリ)、大體ニ於テ、ペールハーヴノ說ヲ我邦ニ傳ヘタルナリ。宇田川槐園ノ門人ニ吉田長淑アリ、泰西熱病論ヲ著ハシテ歐洲醫家ノ熱ニツキテノ所說ヲ紹介シ、且、西洋内科ヲ標榜シテ江戸ニ醫業ヲ開キタリ。ゴルテルノ書ニ次ギテ、我邦語ニ繙譯セラレタルハコンスブルツク⁽²⁾(小關三英ノ泰西内科集成、青地林宗ノ公私貌爾觚内科書、高良齋ノ公斯貌律屈内科書)・アントン、ストエルク⁽³⁾(足立長雋ノ醫方研幾)・ラン、スウィーテン⁽⁴⁾(宇野蘭齋ノ西醫知要)・ペールハーヴ⁽⁵⁾(坪井誠軒ノ萬病治準)・ビシヅフ⁽⁶⁾(伊東玄朴ノ醫療正始)・コンラーヂ⁽⁷⁾(兒玉順藏ノ醫宗玉海)・フリースランド⁽⁸⁾(緒方洪庵ノ扶氏經驗遺訓)・シーベルト⁽⁹⁾(坪井芳洲ノ醫療新書)・チツソー⁽¹⁰⁾(江島榴園ノ室速篤内科書)・カンスタツト⁽¹¹⁾(坪井信良ノ侃斯達篤内科書)等諸家ノ著述アリ。來朝ノ歐洲醫家ニモツムベルグ⁽¹²⁾(一千七百七十五年)・ケルレル⁽¹³⁾(一千七百九十四年)・レツツケ⁽¹⁴⁾(一千七百九十八年)・ヘルマン、ヘルケ⁽¹⁵⁾(一千八百十五年)・シーボルト⁽¹⁶⁾(一千八百二十二年)・モーニツケ⁽¹⁷⁾(一千八百四十八年)・牛痘種法ヲ傳フ等ノ諸家アリテ、長崎又ハ江戸ニアリテ、我醫學ニ歐洲ノ醫學ヲ傳ヘタリ。殊ニ文政六年(西曆一千八百二十三年)シーボルトハ長崎ニアリテ始メテ臨牀教育ヲ施シ、次テ、蘭醫ホムベ、ラン、メールデルスールト⁽¹⁸⁾ノ來朝シテ、長崎ノ養生所ニ教授ノ任ニ就クニ及ビテ、

- (1) Theodor Ednald Hoffmann
- (2) A. L. Wernich
- (3) Erwin Baelz
- (4) Scheube
- (5) Bocakema
- (6) Ermerins

我内科ハ漸、臨牀的ノ方面ニ進ムコトヲ得タリ。ゾノ間、刺絡ノ法ハ、ヘイステル・フリースランドノ書ニヨリテ十八世紀ノ末ニ我邦ニ傳ハリ、角法及ビ發泡打膿法モ天明ノ初年ニ我邦人ノ知ルトコロトナリ、カテーテル・灌腸器モ早クヨリ用ヒラレ、安政六年(一千八百五十九年)刊行ノ内服同效ニハ、感傳電氣及ビ平流電氣ヲ治療上ニ用フベキコトヲ記セリ。聽診器ハ嘉永元年(一千八百四十八年)モーニツケ始メテコレヲ齋ラシ來タリ、品川梅村始メテコレヲ模製セリト傳フ。

明治年間ニ至リテ、來朝シテ我が醫科大學ニ内科ヲ講ゼシハ、獨逸醫家ホツフマン⁽¹⁾(一千八百七十一年)ヲ始トシ、コレニ次ギテダルニビ⁽²⁾(一千八百七十四年)・ベルツ⁽³⁾(一千八百七十五年)アリ。大學以外ニモシイベ⁽⁴⁾(一千八百七十七年)・京都・ブーケマ⁽⁵⁾(東京)・エルメレンス⁽⁶⁾(大阪)等ノ諸家アリ。明治十七年、佐佐木政吉ガ獨逸ヨリ歸リテ教授ニ任ゼラレ、内科學ノ講座ヲ擔當セルニ次ギテ青山胤通(明治二十年)ノ新ニ教授ニ任ゼラルルアリ、明治二十八年三浦謹之助擢デラレテ佐佐木ニ代ハリ、明治二十三年ベルツノ職ヲ辭スルニ方リテ入澤達吉教授ニ任ゼラレタリ。後ニ興サレタル京都・福岡ノ醫科大學ヲ始トシ、専門學校ニモ一個又ハ二個ノ内科學講座アリ。内科學ノ會合モ成リ、コノ科ヲ専門トスルトコロノ雜誌モアリテ、我内科ガ、今日現ニ獨立研究ノ地域ニ進メルコトハ論ズルマデモナキコトナリ。

参考書目

- 1) Pagel, Einführung in die Geschichte der Medizin. 1898.
- 2) Neuburger und Pagel, Handbuch der Geschichte der Medizin. 1901.
- 3) Baas, Die geschichtliche Entwicklung des ärztlichen Standes und der medicinischen Wissenschaften. 1896.

- 4) O. v. Bokkenstein, Die neuere Geschichte der Medizin. 1900.
- 5) Ernst Schrabbe, Vorlesungen über Geschichte der Medizin. Zweite Auflage. 1909.
- 6) Bäumler, Die Entwicklung der Medizin einst und jetzt. 1902.
- 7) Adler und Kronfeld, Medicinische Chronik des 19. Jahrhunderts. 1900.
- 8) 三浦謹之助。東京醫學會二十五年祝賀論文集。明治四十五年。
- 9) 青山胤通。內科學史。醫海時報第九六七號。
- 10) 富士川游。日本醫學史。
- 11) Y. Fujikawa, Kurze Geschichte der Medizin in Japan. 1911.

大內科第一冊五頁

原因總論

醫學博士 藤 浪 鑑
 醫學博士 速 水 猛 述

甲 疾病及ビ疾病原因

疾病ノ原因ヲ攻究セントスルニハ、先、『疾病ノ何者ナルカ』ヲ詳ニセザルベカラズ。又、『疾病ノ原因トハ果シテ何ゾ』トノ疑問ヲ釋明セザルベカラズ。

一 疾病概說

『何ヲカ疾病トイフ』、ソノ義、甚、明カナル如クニシテ、ソノ實ハ決シテ然ラズ。蓋、『疾病』ハモト世人ノ日常經驗ニ基ツキタル普通慣用ノ語ニシテ、ソノ意義ハ窮メテ漠然タルヲ免カレズ、コレニ對シテ嚴正ノ科學的定義ヲ下サンコトハ、頗、難事ナリ、若、強テ之ヲナサント欲シテ、徒ニ字句ノ上ニ拘泥スルトキハ、ソノ論議モ遂ニ無用ノ努力ニ終ルベシ。

(1) Lebensvorgang

吾人ハ、今茲ニ疾病ノ定義ニツキテノ諸家ノ所説ヲ擧ゲテ批評スルコトヲナサズ、直ニ進ミテ、現今ノ病理學ニ於ケル疾病ノ概念ニツキテ、ソノ根本的理論ヲ概説セント欲ス。

『疾病』ハ健康ノ反對ナリト看做サル。而シテ『健康』ノ意義ガ、決シテ絶對的ニアラザルト同ツク、疾病ノ意義モ亦、畢竟關係的ナリ。且、コノ兩者ハソノ實決シテ絶對的ニ互ニ相反スルモノニアラズシテ、交互ノ差別ハ唯移行的ナリトイフベシ。蓋、生物個體ニアリテ、ソノ生活機能⁽¹⁾ノ正且、常ハ即、健康ニシテ、疾病ハソノ生活機能ノ變調セルヲイフニ外ナラザルナリ。シカモソノ變調タルヤ、性質ヨリイヘバ障礙的ノモノニシテ、ソノ時間ニツキテハ、多少持續性ノモノナラザルベカラズ。何トナレバ瞬時ニシテ恢復スルトコロノ變調ハ、未、コレヲ疾病ト稱スルニ足ラズ、又ソノ變調ハ障礙的ナルニヨリテ始メテ重要ノ意義ヲ存スルニ至ルベケレバナリ。但、コレ等ノ間ニ移行的關係ノ存スルモノアルハ勿論ナリトス。サレバ『個人ノ疾病』トイフハ、ソノ身體組織ニ於テ障礙ヲ受ケタル生活機能ノ綜合ヲ指シ、コレニヨリテ起ルトコロノ身體生活機能平衡ノ變調ヲ疾病トスルナリ。個人ガ疾病ヲ自覺スルハ、全クコノ變調ヲ自覺スルニ外ナラズ。

『疾病』ノ語ハ、本トコレヲ個人全體ノ上ニ用フルヲ以テ普通トスルモ、尙、他ノ對象ノ上ニモコレヲ適用スルコトヲ得ベシ。即、身體内ノ各部分ヲ各一個ノ全者ト看做シテ論ズレバ、上述ノ説ニ準據シテ、個個ノ臟器系統、個個ノ臟器、又個個ノ細胞ノ『疾病』トイフコトヲ唱フルコトヲ得ベシ。但、コハ各ソノ對象ヲ異ニスルモノナレバ、彼此ノ混同ヲ避ケザルベカラズ。一細胞ノ疾病ハ、全臟器ノ疾病ニ全身體ノ疾病ノ基礎ヲナスモノナレドモ、コレヲ以テ直チニ全臟器ニ全身體ノ疾病ナリトイフコト能ハズ。諸細胞、諸臟器ハ、全身體内ニアリテ常ニ親密ノ關係ヲ保チ、各部分ニ於ケル生活機能ノ變調ハ相減殺シ、相補正シ、或ハ相増長シ、ソノ綜合ハ全身體ノ疾病ヲナス所以トナルナリ。

コレヲ要スルニ、疾病ハ變調ヲ致セル生活機能ニ外ナラズ。而シテソノ病的生活機能タルヤ、モトヨリ個體生活ノ範圍内ニ

(1) Vorgang

アルモノナレバ、疾病ヲ以テ外來ノ特殊ナル實體トナスベカラザルコトハ自ラ明白ニシテ、今日ニアリテハ、最早コレヲ辨ズルノ必要ヲ見ズ。實ニ疾病ノ本義ハ、ソノ『機能』⁽¹⁾ナルトコロニアリ。サレバ個個ノ形態的異常ハ、未、疾病ニアラズ、個個ノ臨牀的症狀若クハ個個ノ化學的、生物學的反應モ亦疾病ニアラズ、又疾病ノ病原物若クハ病理的要約ソノ物モ疾病ト稱セラルベキモノニアラザルナリ。然レドモ、ココニ疾病ハ機能ナリトイフハ、全ク概括的ノ言ナリ。吾人ガ學理上ニ又實際上ニ、個個ノ疾病ヲ論ズルヤ、常ニ(一)身體内ニ於ケル個個ノ病的生活機能(二)身體内ニ於ケル個個ノ病的狀態(三)疾病原因ニツキテ識別スルコトヲナサザルベカラズ。

病的な生活機能トハ、既ニ上文ニ説キタル如ク、健康ノ生活機能ノ變調セルモノノ謂ニシテ、個個ノ部位ニツキテコレヲ明カニスルコト難カラズ。タトヘバ諸臟ニ於ケル衝衝ノ如キ、又ハ腦動脈栓塞ノ如キ、又ハ栓塞ニヨリテ腦質ノ破壊ヲ來タスコトノ如キコレナリ。而シテ通常コノ際同時ニ個個ノ病的狀態ヲ發現ス。コレ即、一定部位ノ被害狀態、自個ヲ指スモノニシテ、就中ソノ形態的變化ノ如キハ、最、著明ナリ。タトヘバ肝、腎ノ顆粒萎縮ノ如ク、心臟瓣膜ノ肥厚、短縮、癒著ノ如ク、動脈管腔ノ閉鎖ノ如ク、腦髓ノ軟化囊胞ノ如シ。病的狀態ハ敢テ形態的ニ限レルニアラズ、又機能のニモアリ。タトヘバ四肢ノ麻痺ノ如シ。コノ病的狀態ノ、疾病ニトリテ重要ノコトナルハ論ナシ。然レドモコレヲ以テ直ニ疾病トナスベカラズ。何トナレバ、疾病ハ個個ノ身體病的狀態ヲ指スニアラズシテ、ソノ機能ノ變調ヲ指スモノナレバナリ。サリテ上述セシ如キ個個ノ病的機能ノミヲ以テ、常ニ直ニコレヲ身體疾病ノ全幅ナリトイフコト能ハザル場合亦多シ。タトヘバ腦動脈内ノ栓塞ハ、タシカニ一ノ病的機能ナリ。然レドモ、唯コノ一現象ヲ一瞬間ニ捉ヘ、コレノミヲ以テ直ニ疾病ナリトイフベカラズ。コハ個人全體ヨリ見ルモ、又腦髓トイヘル一臟器ヨリ見ルモ、共ニ然リ。蓋、身體ノ疾病ト稱スルモノノ範圍ハ、先、一定ノ原因ニヨリテ最初ノ組織障礙ヲ起シ、コノ障礙ノ、或ハ完全ニ、或ハ不完全ニ治癒スルマデノ間、若クハコレガタメニ死スルマデノ間

ニ行ハルトコロノ個個ノ病的生活機能ノ總計ナリ。

茲ニ於テ、眞ノ『疾病』ト、單純ノ『病』ノ區別略、明瞭トナレリ。コノ區別ハ、近時ノ病理學者ガ、齊シク特記スルトコロニシテ、コレヲ認識スルハ、醫學上重要ノコトニ屬ス。タトヘバ肺ニ焮衝アリテ、種種ノ滲出性變化ヲ來タスコトアリトセシ、コノ滲出性炎ハ、即、肺ニ於ケル病の機能ナリ。而シテソノ時肺臟ノ形態的變化トシテ所謂『肝變』ヲ呈シ、後チ『肉變』ヲ遺ス。コレ即、病の狀態ナリ。又腎臟炎、心瓣膜炎ハ、一個ノ病の機能ニシテ、コレガタメニ、後ニ腎ノ顆粒萎縮、心瓣膜ノ肥厚短縮、瓣膜ノ閉鎖不全ヲ起スニ至ル。即、病の狀態ヲ留ム。コノ故ニ、近時アシツフ氏⁽¹⁾ハ兩者ノ區別ヲバ、言語ノ上ニモ明カナラシメント欲シ、腎臟炎⁽²⁾、心内膜炎、心筋炎⁽³⁾ニ對シ、如上ノ病の狀態ヲ、腎臟患⁽⁴⁾、心臟患⁽⁵⁾ト名ツケントセリ。蓋、コノ例ニツキテハ、病の機能タル腎臟炎、心内膜炎ハ既ニ過ギ去リテ、顆粒萎縮腎、心瓣膜閉鎖不全ノ病の狀態ヲ遺留セルモノニシテ、兩者ハコレヲ同一視スベカラザルヲ以テナリ。身體ノ畸形モ亦一ノ病の狀態ナレドモ、必シモ直ニコレノミヲ以テ『疾病』ナリトイフベカラズ。

斯ノ如クニシテ、病の機能ト病の狀態トハ、互ニ相區別セザルベカラズ。又疾病ハ機能ナルガ故ニ、疾病ヲ論ズルニハ、病の機能ヲソノ根據トナサザルベカラザルナリ。然レドモコノ兩者ノ間ニハ、又甚、密接ノ關係アリテ、聯絡シテコレヲ觀察スルノ必要アリ。否、場合ニヨリテハ、全然コレヲ分離シテハ考フルコト能ハザルコトアリ。吾人ヲ以テコレヲ觀レバ、『炎』ハ、モトヨリ一ノ病の機能ナリ。シカモ病の機能ハ直ニ皆『炎』ナリトハイフベカラズ。疾病ト炎トヲ全然同一視スルコト能ハザルト同時ニ、病の狀態ガ、又直接ニ、且、移行の、他ノ病の機能ヲ惹起スルノ關係ニモ思ヒ及ボサザルベカラズ。タトヘバ肺ノ『肉變』ハ病の狀態ナリ。而シテコレアルガ爲ニ、更ニ血行ノ障礙ヲ惹起スルナリ。又心瓣膜ノ肥厚顯著ハ、同ジク一個ノ病の狀態ニシテ、心瓣膜疾患ニ由來セル肺血行障礙及ビ全身ニ互レル血行障礙ハ、主トシテコノ病の狀態ニ基因スルナリ。蓋、

- (1) L. Aschoff
- (2) Nephritis

- (3) Endo- u. Myocarditis
- (4) Nephropathia
- (5) Cardiopathia

(1) Faktoren

- (2) R. Virchow
- (3) Cellularpathologie

病的狀態ハ、一個ノ病の機能ノ轉歸トシテ殘留スルコトナリ。又病的機能ト相伴ヒテ現ハルコトナリ。又更ニ他ノ病の機能ヲ惹起スルコトナリ。サレバ一個ノ疾病經過シ去リテ、一定ノ病の狀態ヲ殘留スルコトナリ。或ハ一個ノ疾病ノ經過中種種ノ病の機能並ビ三種ノ病の狀態ヲ現ハスコトナリ。又一個ノ疾病アリテ、コレニヨリテ更ニ他ノ病の機能ヲ誘起スルコトナリ。又ハ一個ノ疾病ノ、何等ノ病の狀態ヲモ遺留スルコトナクシテ、經過シ去ルコトナリ。最後ノ場合ハ即、完全ノ治癒ナリ。

サレバ、疾病ヲ攻究スルニ當リテ、病の機能ト病の狀態トノ意義ヲ明カニ區別スルコトノ緊要ナルト同時ニ、又ソノ兩者ノ關聯ノ方面ニモ、細密ノ注意ヲ拂フコトノ必須ナルハ論ヲ待タズ。而シテコノ兩方面ト密接ノ關係ヲ有スルハ、疾病原因ナリ。疾病原因トイヘバ、疾病ヲ惹起スルコトノ諸般ノ要件ヲ總括シタルモノナリ。サレバ『疾病ノ原因』ト『疾病』自個トハ、全然相區別スルヲ要シ、毫モ兩者ノ意義ヲ混同スルコトヲ許サズ。シカモコノ原因の要件ハ、疾病ニ於テ、前述ノ病の機能及ビ病的狀態ノ二者ト纏綿結合シテ、往往甚、複雑ノ關係ヲ呈シ、他方ニ於テ病的機能ト病の狀態トハ、上文所記ノ如クニ相關聯スルコトアレバ、茲ニ『疾病原因』トイフモノモ、單ニ狹義ニ於ケル疾病若クハ個個ノ病の機能ニ對シテノミナラズ、病的狀態ヲ惹起スルコトノ原因ヲモ含蓄包含シテ攻究セザルベカラザルナリ。

疾病ナクシテ、疾病ノ原因モ亦、アルコトナシ。疾病原因ノ闡明ハ、病的機能、病的狀態ノ研究ト須臾モ相離ルベカラザルトコロノ關係ヲ有セリ。今日ノ病理學ノ根本義ハ、尙、依然トシテウヰルヒウ氏⁽²⁾ノ細胞病理學⁽³⁾ノ基礎ノ上ニ立テラレテ、疾病原因ノ研究モ亦、同一基礎ノ上ニアラザルベカラズ。サレバ疾病原因ヲ攻究スルニ當リテハ、先、一瞥ヲ現今ノ細胞病理學上ニ與フルノ必要アリ。

- (1) G. B. Morgagni
- (2) Krankheitsitz
- (3) Ontologie
- (4) Vitalismus

- (5) Ens morbi
- (6) Wesen
- (7) R. Virchow, Hundertjahre allgemeiner Pathologie. Berlin, 1895.

ウルヒウ氏ハ、身體ヲ構成セル細胞ノ真意義ヲ闡明シ、スベテノ細胞ハ細胞ヨリ生ズル(凡テノ細胞ハ細胞ヨリス。Omnis cellula a cellula。千八百五十五年)モノニシテ、コノ單位の有機體ト稱スベキトコロノ細胞ハ、身體ノ能動成分ナレバ、コレ即、生活ノ保有者ニシテ、同時ニ又疾病ノ保有者タルコトヲ揚言シタリ。蓋、モルガニー氏⁽¹⁾以來、疾病部位⁽²⁾ヲ究メントセル解剖學的の思考ハ、茲ニ成功ヲ告ク、臟器・組織ヨリ、更ニ進ミテ細胞ニ及ボシ、細胞若クハ細胞簇ニ、疾病部位⁽³⁾ヲ究メントセル解剖學的の思考ハ、茲ニ成功ヲ告ク、疾病ヲ實體トシテ見ルトコロノ學說⁽⁴⁾ノ色彩ヲ帶アルコトヲ看過スベカラズ。而シテウ氏ハコレヲ以テ寧、ソノ長所ナリトシ、變化セル細胞及ヒ細胞簇ハ「疾病ノ本體ナリ」(Erg. Hohn)トイヘリ。即、疾病ノ局在性ナルベキコトハ、コレニヨリテ最、明白ニイヒ現ハサレタルナリ。又ウ氏ハ「生活」ニ對シテ特別ノ「生活力」アリトスルノ說ヲ排斥セルモ、コレヲ單ニ理學的・化學的作用ニ還元スベカラズトノ考ヨリ、生活力說⁽⁵⁾ト稱スルモ妨グズト稱セリ。蓋、ウ氏ノ立論ハ、全然科學的ニシテ、モルガニー氏以來ノ病理解剖學ヲ根據トスルモ、又病理組織學ヲ重シ、竝ニ病理的實驗ヲ行ヒ、病態生理學及ヒ臨牀觀察ヲ必要トシ、當ニ解剖的變化ノミナラズ、ソノ機能ヲ闡明スルコトヲ期セリ。病理學研究ノ必要點ノコトニ存スルコト、實ニ今猶古ノ如キナリ。ウ氏ガ自家ノ研究法ニヨリテ得タルトコロノ實體說、生活力說の疾病觀ハ、同氏以前ニ於ケル非科學的ノ疾病實體說及ヒ生活力說トハ、固ヨリ日ヲ同シテ語ルベキモノニアラズ。ウ氏ノ「生活力說」ハ、氏ガ反覆揚言シタル如ク、疾病ハ變化セル要約ノモノニアルトコロノ生活ニ外ナラズトイヘル、ソノ「生活」ニ歸著シ、氏ノ實體論モ、コノ「生活」ヲ變調ノ、細胞並ニ細胞簇ニ存スルコトヲ看取スベキナリ。

ウ氏ガ疾病ヲ論ジテ、疾病本體⁽⁶⁾ハ變化セル細胞ナリトイヘル言ヲ捉ヘ、ソノ字句ニ拘泥シテ「疾病」ヲ以テ直ニ一ノ實體⁽⁶⁾ナリトスハ不可ナリ。疾病ハ既ニ前項ニ説キタル如ク、生活機能ニシテ、細胞ノ物ニアラズ。又固ヨリ特殊ノ實體ニアラザルナリ。唯單位的ナル病的機能ノ行ハルトコロハ、即、細胞ナリトノ義ニ解スベキノミ。ウ氏モ自ラ曰ク、「單位的機能ノ普通病理的考察ハ、當ニ變化セル細胞簇ヲ以テ、ソノ出立點トセザルベカラザルニ至レリ」(普通病理學ノ百年)第三十六頁ト。ウ氏ニヨリテ設立ラレタル細胞病理學ノ真訣ハ、實ニココニアリトイフベシ。

- (1) Chondren
- (2) Microsomen
- (3) Plasmosomen
- (4) Protomeren

(5) R. Altmann

ウルヒウ氏細胞病理學ノ世ニ出デテヨリ既ニ半世紀餘ヲ經タリ。ソノ根本意義ハ益、確率トナリテ、遂ニ今日ニ於ケル科學的醫學ノ思想ノ基礎ヲナスニ至レリ。然レドモ翻テ思フニ、ウ氏ガ今日ヨリ半世紀前ニ細胞病理學ヲ唱道シタルモ、亦畢竟ソノ時代ノ學術界ノ思潮ニ乗ジタルニ外ナラザレバ、數十年間ノ學術進歩ヲ遂ゲタル後ニアリテ、ウ氏ノ細胞病理學ガ、全然其舊態ヲ保チテ、學問界ニ行ハルベシトハ信ズベカラズ。却テ斷ニ進行發達シツツアルトコロノ科學的風潮ガ、ウ氏ノ所説ニ若干ノ變動ヲ起サシメタルコトハ、實ニ當然ノコトトイハザルベカラズ。唯ソノ大本ノ主義ハ、永ク變異スルコトナク、當ニ疾病ノ理及ヒ疾病原因ノ理ヲ究明スル根據ヲナスナリ。蓋、吾人ノ「生活」ニ關スルトコロノ知識ニハ、尙、未、徹底セザルトコロアルガ故ニ、イツレノ理論ニモ完全ヲ求メ難ク、觀察ノ方面如何ニヨリテハ、種種ノ異議ヲソノ間ニ挾ムベキ場合固ヨリ少ナカラズ。ウ氏ノ細胞病理學ニ對スル疑義ハ、今日ト雖モ、決シテソノ跡ヲ絶チタルニアラズ。ココニソノ一二ヲ舉グレバ、第一ニソノ根本意義タル細胞ノ單位の有機體說ヲ疑フモノアリ。ウ氏ガ細胞ニノミ特ニ生活ノ意義ヲ附シタルニ對シテ、細胞間質ニモ亦生活機能ノ顯著ナルモノアルコトヲ主張スルモノアリ。又ウ氏ガ「疾病部位」ヲ思考ニ對スルトコロノ駁論アリ。又ウ氏ノ細胞ニ種刺戟ニ對スルトコロノ異説アリ。今コレ等ノ異論ヲ一々列舉シテ批評ヲ加フルハ、此書ノ主旨ニアラザルガ故ニ、ココニコレヲ敢テセズト雖モ、唯コレニ關スル吾人考察ノ一斑ヲ陳アルコトハ無益ノ業ニアラザルベシ。

細胞ハ複雜ノ構造ヲ有スル有機體ナリ。又細胞内ノ諸物質ニヨリテ生活機能ノ營マルコトモ事實ニシテ、細胞内ニ種種ノ名ヲ冠シタル細微原質アルコトモ亦、疑フベカラズ。(ヒュンデルン⁽¹⁾「顆粒」⁽¹⁾、ミクゾーメン⁽²⁾、アラスモゾーメン⁽³⁾、プロトメーレン⁽⁴⁾等)然レドモ管テアルトマン⁽⁵⁾氏ガ企テタル如ク、コノ細胞内ノ顆粒等ヲ以テ、構造ノ單位トナスベシトノ說ハ、十分ナル根據ヲ缺クモノニシテ、吾人ハ未、コレヲ顆粒等ヲ以テ、直ニ獨立生活體ナリトナスコト能ハズ。寧、コレヲ細胞ニ屬セル物質トシテ、始メテソノ存在ノ意義ヲ認ムベキモノナリ。蓋、斯ノ如キ細胞内物質ハ、今後更ニ大ニ研鑽スルノ必要ヲ生ジ、又興趣ヲ存スルニハ相違ナキモ、コレニヨリテ、細胞ノ單位の有機體說ヲ動カスコトハアラザルナリ。又、有機體ノ組織ニ於テ、或ハソノ胎生學的發達ノ時期ニ於テ、嚴然タル細胞型ヲサザルモノ(タトヘバ多核ノギンチチウム型)

(1) D. v. Hansemann, Ueber das konditionale Denken in der Medizin etc. Berlin, 1912.

(2) Bedingungen

イハザルベカラズ。吾人若、前章ニ述ベシトコロノ疾病ノ理ニ據リテ、一個ノ疾病ノ發生狀況ヲ仔細ニ觀察スレバ、ソノ發生ニハ種種ノ刺戟・個々ノ要件ノ作用ニ因ルトコロノ身體組織ノ諸種ノ變化ヲ伴ヒ來ルコトヲ知ルベシ。シカモコレ等ハ常ニ精緻ナル連絡ヲ有シ、固ヨリソノ中ニ就テ、意義ノ異同輕重ヲ辨別スベキモノハアレドモ、單ニソノ一個ノ事物ヲ捉ヘテ、以テコレヲ『疾病原因』ト全體トナシ、他ノ病的現象ヲ以テ、直ニソノ『結果』ナリト速斷スルコトハ、正鵠ニ中レリトイフベカラズ。ダトヘバ『寒冷』ハ、即レ氣管枝炎ノ『原因』ナリ。『氣管枝炎』ハ、即レ『寒冷』ノ『結果』ナリトイフコトハ、屢、行ハルル論法ナレドモ、此ノ如キハ甚、疎漫ノ論理ニシテ、非學術的ナリトイハザルベカラズ。何トナレバ『寒冷』ハ、此際一個ノ原因的要件ヲナスコトアルモ、實際ニ寒冷ヲ以テ直ニ原因ノ全部トナスコト能ハズ。且、寒冷ガ作用スルモ、毫モ氣管枝炎ヲ發スルコトナキ場合モ亦甚、多クレバナリ。又結核菌ハ通常結核ノ『原因』ナリト稱セラル。然レドモ結核菌ノ侵入ト結核症トハ、決シテ同一視スベキモノニアラズ。何トナレバ、結核菌ノ侵入ヲ受ケテ、尙『結核症』ト名ツクル疾病ノ起ラザル場合モ決シテ少カラザルナリ。結核菌ノ侵入ガ『結核症』ノ『原因』ニ對シテ重要視セラルベキモノナルコトハ論ナシト雖モ、結核菌ノ侵入ヲ受ケテ結核症ノ發生スルニハ、結核菌ノ外ニ尙、他ノ原因的要件ヲ必要トスルナリ。サレバ少クトモ結核菌ヲ以テ『原因』ト全部ナリトスルコトヲ得ズ。即、結核菌ヲ以テ常ニ原因ト全然同物視スルハ、不可ナリ。要スルニ疾病ニ於ケル『原因』ト『結果』トハ、ソノ連絡甚、複雑ニシテ、身體機能ノ變調ヲ惹起セシムル『原因』ノ作用ハ、決シテ單一簡易ノモノニアラズ。從テ疾病ノ『原因』ト『結果』トヲ一々明確ニシ、且、ソノ間ニ於テ、常ニ常住不變ノ關係ヲ明カニ認メントスルコトハ、頗、困難ノ業トイフベシ。サレバ近者獨逸ノ病理學者ハンゼマン氏⁽¹⁾ガ疾病ニ於テ『因果』ノ關係ヲ論ズルハ、寧、正確ナル學術ノ主旨ニ適ハザルモノニシテ、却テ疾病發生ノ『要約』⁽²⁾何如ニ就テ考フベシトイヘルモ、亦、コノ原因結果討尋ノ困難ニシテ、兩者ノ輪廓ノ漠然タルモノアルニ基ツクナリ。

(1) Schädlichkeiten

(2) Aetiologie
(3) Pathogenese

サレバ吾人ハ今茲ニ『疾病原因』ヲ套語ヲ襲用スルモ、ソノ内容ニ就テハ、頗、細心ノ注意ヲ要スルコトナリ、ダトヒ特殊性ヲ帯ビタルモノノ作用ガ、最、重要ノ發病的關係ヲ有スル場合ニテモ、一定ノ疾病ヲ惹起セシムルニハ、通常必、亦他ノ種種ノ要件ノ共同作用ヲ要スルガ故ニ、若、眞實ニ『原因』ヲ語ヲ用ヒントナラバ、宜シクコレ等ヲ總括スルモノナラザルベカラズ。疾病ノ原因ハソノ性質常ニ集合性ナリトイハザルベカラズ。又同一ノ事物作用シテ、甲ノ場合ニハ疾病ノ惹起ヲ見、乙ノ場合ニハ然ラザルコトアリ。且、尋常一樣日常生活ト相離レザル事物ト雖モ、ソノ作用ノ方法又ハ個人性ノ何如ニヨリテハ、所謂『無害』ノモノガ明カニ健康ヲ傷害スルコトアリ。又諸種ノ病原性寄生性ニ微體ノ如キ特殊性ヲ備ヘ、且、有害作用ヲ營ムコトヲ得ルモノモ、一定ノ要約ノ下ニテハ、全ク無害物タルコトアリ。サレバ疾病ノ原因ハソノ作用ノ方法ト又ソノ作用ヲ受クルトコロノ個體ノ性質狀態トニヨリテ、常ニ大ニ變動スルモノニシテ、疾病ノ原因ノ意義ハ、關係的ニシテ絶對的ニアラスト稱スベシ。吾人ハ通常、身體ノ健康ニ危害ヲ及ボス事物ヲ總稱シテ『害物』⁽¹⁾トイヒ、後章ニモコノ語ヲ用フルトコロ多シ。コノ語ノ義モ亦決シテ絶對的ニアラスシテ、關係的・移動的ナリ。コレ恰モ化學的害物即『毒物』ノ意義ノ關係的ナルト相同ジ。

疾病原因ハ、ソノ性質『集合性』ニシテ、ソノ意義『關係的』ナリ。サレバソノ裡ノ個個要件トソノ相互間ノ關係ト、並ニソノ作用ノ狀況トヲ明カニスルコトヲ得テ、始メテ、疾病原因ハ明白トナルベシ。而シテコノ事ハ實ニ原因學或ハ疾病因果論⁽²⁾ニ於テ頗、緊切ノ問題ナリトス。換言スレバ、疾病ハ如何ニシテ發生スルカ(疾病發生論⁽³⁾)ヲ明カニシテ、始メテソノ發生ニ與カレル諸ノ要件ノ眞義ヲ知ルコトヲ得ベク、コノ研究ヲ没却シテハ、眞ニ疾病原因ヲ探究スルヲ得ルコトナシ。且、疾病ノ生ズルハ身體内ニシテ、身體ヲ離レテ疾病アルコトナク、疾病ノ發生ハ、身體組織自個ニ一定ノ變化ノ成立スルニヨリテコレヲ知ルコトヲ得ベシ。サレバコノ身體組織ノ變化ノ、何如ニシテ、成立セシカラ闡明スルハ、コレ即、原因學ノ基本トモ稱スル

ニ足ル。詳言スレバ、何如ナル物〔害物〕ガ、何如ナル身體組織ニ、何如ニ作用シ、身體組織ハ何如ニシテ現在ノ病的現象ヲ呈スルニ至リシカラ研究スベシ。吾人ハコレヲ明カニシ得タル後、始メテ何如ナル原因ニヨリテ現在ノ疾病ハ起リシカトノ問ニ答フルコトヲ得ベシ。論ツテ茲ニ至レバ、疾病原因學ガ又細胞病理學ト雖ルベカラザル關係ヲ有シ、ソノ理論ノ根柢ヲ同ウスルヲ知ルニ足ラン。

原因學ノ發達ハ、常ニ醫學ノ歴史ト相結托シ、各時代ニ於ケル疾病原理ノ思索ト共ニ、原因觀ニモ種々ノ變遷ナキコト能ハザリシガ、疾病原因ノ研究ハ、流行病即、傳染病ニ於テソノ所謂『生活性傳染素』⁽¹⁾ヲ闡明セシヨリ以來、頓ニ長足ノ進歩ヲナスニ至レリ。而シテム微寄生體ガ疾病原因論中特殊ノ重要ノ位置ヲ占ムルコトハ勿論ナレドモ、曩時ハソノ意義ノ屢、過大視セラレタルモノナキニアラザリキ。即、傳染性疾病ノ『原因』ヲ以テ殆ドコノ外來寄生體ト同一視シ、寄生體性質ノ研究ニヨリテ疾病原因全部ヲ明カニスルコトヲ得ベシトマデ考ヘラレタルコトナキニアラザリキ。コハコツポ氏⁽²⁾等ニヨリテ新タニ細菌學ノ建設セラレ、頓ニソノ勃興ヲ來タシタル頃ニ於テ頂點ニ達シタルモノナリキ。コレニ對シテペツテンコ一セル氏⁽³⁾ノ所謂地水説⁽⁴⁾ノ如キハ、原因學上、外界ノ要約ヲ重シタルモノトイフコトヲ得ベシ。

疾病ノ原因ニハ、上述ノ如ク、種々ノ要件ヲ含蓄包有スルモノナリ。サレバコレヲ研究スルニ當リテ、單一ノ方面ニノミ著眼シテ足レリトナスベカラズ。曾テヒ、ツベ氏⁽⁵⁾ガ疾病原因ヲ論ジ、ソノ要素トシテ疾病基質⁽⁶⁾、疾病誘起者⁽⁷⁾、疾病刺戟⁽⁸⁾、竝ニ外界要約⁽⁹⁾アリ。且、各者ノ變動的ナルコトヲ說キシトモ亦理アリトイフベシ。即、吾人ハ一面ニ於テハ、身體自個ニ存スルトコロノ、原因的要件ニ就テ研究シ、他面ニ於テハ、コノ身體ニ加ヘラルトコロノ諸要約、外來ノ諸要件即、『害物』ニ就テ、ソノ性質トソノ作用方法トヲ考案スルコトヲ要シ、且、コレ等、各者間ノ關係、連絡ヲ明カニスルコトヲ務ムベキナリ。

(1) Contagium vivum

(2) R. Koch

(3) M. v. Pettenkofer
(4) Grundwassertheorie
(5) F. Hueppe
(6) Krankheitsanlage
(7) Krankheitsauslösung
(8) Krankheitsreize
(9) Aussenbedingungen

既ニ述ベタル如ク、身體ヲ離レテハ、疾病アルコトナシ。故ニ原因學上先、身體自個ニ就テ研究シ、身體自個ニ存スルトコロノ原因的要件ヲ明カニスルハ、蓋、甚、緊要ノコトナリ。即、身體ノ解剖的構造及ヒ生理的機能ヲ審カニシ、疾病ノ發生ニ對シテ果シテ何如ノ自然的約束ヲ有スルカラ攻究スルヲ要ス。殊ニ次ノ三項ノゴトキハ、原因學ニ於テ緊切ノ關係ヲ有スルモノナリ。

(一) 身體各臟器ノ相互關係ハ、健康ヲ保ツ樞機ノ存スルトコロナルモ、疾病發生ガ、コノ關係ヲ基礎トスルコトモ亦コレアルガ故ニ、コノ生理的相互關係ハ、原因學上ニモ重要ノ意義ヲ有シ、疾病ノ中、ソノ發生ノ原因ヲ身體臟器官能ノ缺陷ニ歸セシムベキモノ決シテ稀ナラズ。(二) 又コレト關聯シテ、身體組織ハ、生理的ニ自個ノ健康状態ヲ保護シ、種種ノ外來ノ有害刺戟〔害物〕ニ對シテ防禦ヲ行フ性能アリ。即、身體組織ハ、危害ニ對スル抵抗力ヲ有ストイフコトヲ得ベシ。コノ生理的防禦性能ハ、固ヨリ健康保持ニ必要ノコトニシテ、コノ範圍ヲ逸脱シテ而シテ後ニ始メテ疾病ノ發生アリ。サレバコノ生理的防禦性能ハ、先、研究セラレザルベカラズ。(三) 而シテコレ等身體ノ臟器組織ノ有スル性質能力ハ、個體ノ生活期中ニ於ケル種種ノ要約ノ下ニソノ變動ヲ見ルコトアレドモ、又個人ノ遺傳性ニ基ツクトコロノ個人的差別アリ。且、身體組織ノ病的變化若クハ疾病ノ發生ガ個人的遺傳性ニヨリテ影響ヲ蒙ルコトハ頗、大ナリ。遺傳ト疾病原因トハ實ニ親密ノ關係アリトイフベシ。以下コノ身體自個ニ存スル重要ノ要件ニツキテ、コレヲ略說スベシ。

(一) 臟器組織ノ相互關係ハ、疾病原因上ニ意義ヲ有スルハ、一ノ臟器組織(乃至細胞)ノ變化ガ、自ラ他部ノ變化ヲ惹起スル作用ヲナストコロナリ。蓋、臟器組織細胞ハ、相集成シ、相結合シ、解剖的機能的ニ密接ノ連絡ヲナシ、以テ全有機體ノ生活ヲ營マシムルモノナレバ、個個ノ部位ニ於ケルトコロノ個個ノ病的變化ハ、原因ノ結果ヲ相助

(1) C. Ricker, Entwurf einer Relationspathologie. Jena, 1905.

(2) E. H. Starling
(3) Marasmus

成シテ、絶ツベカラザル病的生活機能ノ連環ヲナスコトモ亦宜ナリトイフベシ。例ヲ擧ゲテイハ、腦髓疾患、タトヘバ軟化竈アリテ、コレガタメニ末梢神經ノ官能障碍、タトヘバ麻痺ヲ來タシ、心臟ノ機能不全ガ、肺臟ノ靜脈血鬱積ヲ惹起シ、肝臟ノ分泌機能減退ガ、腸管内ニ於ケル消化機能ヲ妨害シ、腦下垂體ノ腫瘍ガ、アクロメガリーヲ誘發セシムルノ類コレナリ。斯ノ如ク臟器機能ノ諸種ノ變化ハ、相互ノ間ニ緊切ノ關係アリテ、コノ關係ノ、各者間ノ直接的構造的連絡ニ據ルノ外、多ク血管・血液(及ビ淋巴)並ニ神經ノ作用ヲ介シテ保タルコトハ掩フベカラス。サレバ這般ノ關係ノ要素ヲ研究スルハ、病理學上緊要ノコトニ屬シ、曩ニリツケル氏ガ關係病理說⁽¹⁾ヲ出セルモ亦決シテ徒爾トイフベカラス。コノ臟器組織ノ相互關係ニ基ツキテ現ハルルコトコノ病變發生ノ方法ハ明白ナルモノモアレドモ、亦甚微妙ニ互リテ、容易ニソノ真相ヲ窺フコト能ハザルモノナキニアラズ。サハレソノ二ニノ類ヲ異ニセルモノヲ擧ゲレバ、或者ハ、主トシテ器械的ナルコト明カナリ。輸膽管ニ膽石アリテ、肝内ニ膽汁鬱滯ヲ來タシ、心臟ノ僧帽瓣口ニ狭窄アリテ、肺臟ニ鬱血ヲ惹起スル如キハコレナリ。又或者ハ、化學的ニシテ、相互關係ノ殊ニ甚、微妙ナルモノアリ。即、分泌液・内分泌液ガ所謂ホルモン作用ヲナスコト、自家中毒作用ノコト、生理的ニ存スル解毒作用ニ異變ヲ生ズルコト等、コレニ屬シ、コハ病理學中重要ニシテ、且興趣ニ富メル部門ナリ。タトヘバスターリング氏⁽²⁾等ガ夙ニ證明セシ如ク、生殖腺ノ、化學的ニ他臟器ニ影響ヲ及ボスコトハ疑ナキトコロニシテ、ソノ他、萎縮腎ニ於ケル尿毒症、甲狀腺・副甲狀腺ノ病變ニ於ケル枯瘦症⁽³⁾、粘液水腫⁽³⁾、又前掲ノ腦垂體下トアクロメガリートノ關係等ニ想到スベシ。コレ等ノ化學的作用ニ就テハ、後章自家中毒及ビ内分泌異常ノ條下ニテ細論スベシ。又脊髓ノ一部ニ病變竈ノ存スル場合ニ於テ、更ニソノ上部ト下部トハ各神經徑路ニ應ジテ、續發變性竈ヲ呈シ、加之末梢神經ニ機能障碍ヲ及ボシ、且、コレニ屬スル諸臟器ノ病變ヲ惹起スルガ如キ、コレ明カニ神經ニ由レルモノナリ。又血管内栓塞ニヨリテ、甲處ノ病變ガ乙處

ノ病變ヲ惹起セシムルガ如キ、コレ血管・血液ニ由レル關係ナリ。動脈管壁ニ硬變アリテ、腎臟ノ萎縮ヲ促スガ如キモ、亦血管性ト稱スルヲ得ベシ。シカモ上述神經性病變ノ例ノ如キ、又ハ動脈硬變ノ、諸臟器ヲ一貫シテ、所謂動脈硬變性ノ諸種ノ病變ヲ呈出セシムル等ノ如キハ、病變ノ、臟器構造ノ自然系統ヲ逐ヒテ發生セルモノト稱スルコトヲ得ベシ。斯ノ如ク臟器關係ニ據ルトコロノ病變ノ發生ハ、即、身體ニ於ケル病變ノ蔓延擴張ヲ意味スルモノナルモ、時トシテハ又代償性・調節性ノモノモコレナキニアラズ。一腎缺損ノ際ノ他腎ノ肥大・瓣膜疾患ニ因ル心臟ノ動作性肥大ノ類似機能ヲ營ム臟器間ノ代償性增生等ハ、即、コノ類ニ屬ス。コレ等ノ諸例ニヨリテ考フルニ、臟器組織ノ相互ノ關係ノ、身體ニ於ケル疾病ノ發生ニ對シテ、重要ノ意義ヲ有スルコトハ明カナリ。而シテコノ關係ハモトヨリ身體自個ニアリテ存スルモノナリ。

(二) 身體組織ノ防禦性能ハ、廣ク生物界ニ存スルモノニシテ、身體組織ハ外物ノ侵入・加害ニ對シテコレヲ防禦シ、自己ヲ保護スル性能ヲ具有セリ。身體組織外ニアリテ場合ニヨリテハ、亦身體内ニ生ズルモノアリ組織ニ危害ヲ及ボスモノハ、其數無量ナリ。故ニ若、コノ性能ナカリセバ、生物ハ死滅シ果ツルモノ甚、多カルベシ。而シテ侵入セントスル「害物」ヲ作用ノ、コノ生理的防禦性能ノ範圍ヲ超越シタルトキ、或ハ身體ノ既存ノ事情ノタメニ、一定ノ組織ニ於ケル生理的防禦性能ノ缺陷ヲ呈セルトキハ、容易ニ「害物」ヲ侵入ヲ受ケ、ソノ有害作用ニヨリテ病變ヲ惹起シ、疾病ヲ發生セシムルニ至ル。

諸臟器組織ノ構造及ビ機能ニ就テ考察スレバ、自然的生理的ニコノ防禦性能ノ備ハリ存スルコトヲ看取スルコト

容易ナリ。即、一面ニハ、『害物』ヲ侵入ヲ妨害シテコレヲ體內ニ入ラザラシメ、他面ニハ、既ニ侵入シタルモノヲ驅除シ、或ハ體內ニ於テソノ有害性ヲ撲滅減少セントスルノ性能、若クハ傾向ノ存在スルコトヲ明知スルコトヲ得ベシ。今ソノ二、三ノ實例ヲ舉グレバ、皮膚表皮ノ解剖的構造ハ、能ク『害物』ヲトヘバ細菌等ノ侵入ヲ阻碍スルニ適シ、皮膚竝ニ體表ニ於ケル神經感覺、即、鋭敏ナル痛覺等竝ニコレニ基因スル反射的運動ハ、恰モコレ極テ細心ニ『害物』ヲ侵入ヲ妨害シテ、傷害ヲ豫防スル所以ナリ。又皮膚ノ色素ガ、光線ノ作用ニ對シテ身體保護ノ用ヲナスガトキモ亦然リトス。又一タビ體內ニ侵入セル『害物』ヲ、身體ノ内の表面、即、諸消化管・氣道ニテ嘔吐・便秘・咳嗽ニヨリテ直ニ體外ニ驅除セラレ、且、氣管粘膜ノ上皮細胞顫毛運動ハ吸入ノ微小異物ヲ排出スルニ適シ、諸部粘膜ヲ被ヘル粘液ハ、細菌ノ組織侵害ヲ遮斷スルニ效アリ。更ニ又諸腺分泌液ノ化學的性質(タトヘバ胃分泌液ノ鹽酸ノ病原性細菌ヲ殺滅スルニ與リテカアルガ如キ)、諸淋巴腺・淋巴組織ノ位置・構造竝ニ生理的機能(タトヘバ肺臟ニ吸入セラレタル炭粉ノ淋巴道ニヨリテ掃除セラレ、粘膜面ヨリ組織内ニ入りタル細菌ノ、淋巴腺ニテ抑留セラレ、場合ニヨリテハ茲ニテ殺滅セルルコトアルガ如キ)ニ就テ審カニ觀察ヲ下サバ、體內ニ進入シタル『害物』ヲ驅除・殺滅・減力ニ關シ、身體組織ノ、如何ニ許多ノ自然的努力ヲナスカヲ知ルベシ。ソノ他、體液殊ニ血液ニハ、一程度ニ於テ自カラ殺菌性・毒中和性ノ附與セラレタルモノアリテ、諸種ノ所謂『防禦素』⁽¹⁾ノ形成アリ(免疫ノ條下參照)。細胞ニ所謂『喰細胞』アリ。白血球・遊走細胞等コレヲナシ、ソノ他血管内被細胞及ヒ諸種ノ組織細胞モ亦コレノ貪食作用ヲナスコトアリ。コハ細菌・異物・組織破壞產物等『害物』タルベキモノヲ運搬シ去リ、或ハコレヲ消滅セシムルノ用ヲナスナリ。又化學的毒物ノ身體竄入ニ際シ、身體組織内ニ於テ、コレニ對スル一定度ノ化學的解毒作用ノ行ハルルコトモ亦看過スベキニアラズ(化學的毒物ノ原因作用ノ條下參照)。

(I) Schützstoffe

(I) Akklimatisation

吾人ハ病理學ニ於テ、敢テ輕忽ニ、目的論的思想ヲ鼓吹スルモノニアラズト雖モ、尙、他ノ病的組織變化ノ形成ニ就テ考フルモ、コレノ變化、自個ニ於テ、侵入『害物』自個ノ有害作用ヲ組織内ニテ減殺シ、且、新シキ障礙ノ發生ヲ防遏スルノ形跡ハ、往々ニシテ歴然タルモノアリ。蓋、炎ハ、身體ノ、侵入『害物』ニ對スル組織反應ヲ最、明カニ示スモノナリ。今、ソノ際ニ現ハルルトコロノ個個ノ變化、即、漿液ノ滲出・白血球ノ遊走及ヒ集簇・喰細胞作用ノ出現・細胞增生・肉芽組織增殖等ハ、コレノ『炎』ヲ惹起セシメタル『害物』自個、タトヘバ細菌ヲ殺滅シ、或ハ減力シ、若クハ異物ヲ包封シテコレヲ破壞スル等『身體防禦』ニ與ツテカアルノ半面ヲ窺フニ足ルベシ。又一タビ『害物』ガ、ソノ有害作用ヲ逞ウシタル後、コレガタメニ、一定ノ場合ニハ、一定ノ程度ニ於テ、新タニコノ『害物』ニ對スル防禦性能ヲ生ジテ、適應性ノ馴致セラルルコトアリ。後天性免疫コレナリ(免疫ノ條下參照)。

斯ノ如ク、身體ニハ、生理的ノ受働的及ヒ能働的防禦性能ヲ備フ。而シテ身體ノ能ク外的境遇ニ應ジテ生理的ノ生活機能ヲ調節スルガ如キモ、亦、固ヨリコレノ防禦性能ニ屬ス。タトヘバ外氣ノ寒熱ハ、直ニ皮膚血管ノ收縮或ハ擴張・汗腺ノ動作・呼吸作用等ニ影響ヲ及ボシ、以テ體溫放散ヲ加減シ、巧ニ調節ヲ行ヒ、體溫自個ノ變動ヲ防ギ、能ク健康ヲ保ツガ如キコレナリ。又人ハソノ習慣ニヨリテ、コレノ適應症ヲ驚クベキホドマニ發揮スルコトヲ得ルナリ。所謂氣候適應⁽¹⁾及ヒ化學的毒物ニ對スル習慣作用ノ如キ亦コレニ屬ス。

但、コレノ防禦性能ノ原因學上ノ意義ハ、寧、關係的ナリト解スベキコト猶『害物』ヲ意義ガ關係的ナルガゴトシ。且、コレノ性能ニシテ、後天性免疫ノゴトク、生活期中ニ獲得セルモノモアレドモ、モト組織ノ固有性質ト共ニ、先天的・遺傳的且、生理的ニ備ハリタルモノナリ。シカモ個人間ニ多少差異ノ點ナキコト能ハズ。又生活期中何等カノ病變ヲ贏チ得テ、コレガタメニ、コレノ防禦性能ニ減力・消失・變動ヲ來タスコトモ亦決シテ少カラズ。タトヘバ粘膜上皮細胞層ノ傷害剝脫

ハ、後チニコノ所ヨリスル細菌ノ侵入ニ對シテ、防禦ノ一機關ヲ失ヒタルモノトイフベシ。コノ防禦性能ノ減退ハ、即、疾病ノ發生ニ對シテ一ノ「素因」ヲ作クルコトナリ、「害物」ノ侵害ヲ受ケ易カラシメテ、ココニ疾病發生ノ一原因の要件ヲ構成スルニ至ル。サレバ後章ニ述アルトコロノ「素因」ト「緊切ノ關係」アリ。

(三)遺傳ノ原因學上、重要ノ事項タルコトハ、毫モ疑ヲ容レズ。シカモ遺傳ハ全然生理的ノコトナリ。蓋、「遺傳」トハ親(廣キ意味ニテ)ノ性質ガ子(廣キ意味ニテ)ニ、親子タル生物學的固有關係ニ依リテ、相傳ハルコトイフ。即、兩性胚種細胞ノ結合ニヨリ(受精作用)テ、新ラシキ卵ノ作ラルトコロニ、遺傳ノ基礎ハ存セリ。斯ノ如クニシテ、兩性胚種ニ具ハリタル性質ハ、新生ノ卵ニ繼紹セラレ、コノ卵ガ、ソノ固有性ヲ包有シテ己ノ發達ヲ遂グルヤ、終ニ兩親ヨリ傳承セルトコロノ性質ガ、顯著ニ現ハルルニ至ル。コハ生理的性質ノ遺傳ニ於テ然ルトコロニシテ、病的性質ノ遺傳モ亦同一理ナリ。

蓋、疾病ニ於ケル遺傳ノ意義ハ、前章ニ述ベタルトコロノ疾病ノ本義ニ則リ、「疾病」自個ノ「遺傳」ト解スベカラズ。何トナレバ、胚種細胞ヨリ生ヅタル一卵中ニ、後年發現スベキ「疾病」ト稱スベキ「生活機能」ガ、果實ノ種子ノ如ク一所ニ伏在セリトハ考フベカラザレバナリ。然ラバソノ伏在セルモノハ、後年「疾病」ヲ發生セシムル基礎ナラザルベカラズ。即、疾病原因ト遺傳トハ、緊切ノ關係ヲ有シ、コノ關係ハ遺傳的性質ニ基ツケル疾病ノ素因、又ハ基質ノ遺傳スルトコロニ存セリ。

抑、遺傳ノコトタルヤ、全ク生物學・生理學ノ問題ニシテ、特殊ニ病理的ト稱スベキモノアルコトナシ。サレバ茲ニ遺傳ノ原理ヲ説クハ、敢テ本旨ニアラズ、シカモノ精緻ニ至リテハ、假定、想像多クシテ、確實ニ闡明セラレタルモノ尙、甚、僅少ナ

- (1) E. Godlewski
(2) M. Verworn

リ。殊ニ病的性質ノ遺傳的發現ノ理ニ關シテハ、隔靴搔痒ノ歎ニ堪ヘザルモノ尙、頗、多シ。然レドモ兩性胚種細胞、即、精子及び卵子ガ、受精作用ニ際シテ呈出スルトコロノ形態的變化、殊ニソノ核・核染色體ニ於ケル、甚、規則正シキ變化ノ如キハ、頗、明白顯著ニシテ、ヨシ遺傳ハ決シテ單ニ形態的現象ニアラザルモ、コレ遺傳學中、最、多ク闡明セラレタル事實トイフベク、遺傳ノ形態學的基礎ハ、實ニ茲ニ存セリ。コノ核ノ變化タルヤ、兩性細胞ハ結合ニ際シテ、豫メ各ソノ核染色體ヲ分割シテ半數トナシ、受精作用ニヨリテ兩者ノ相結合スルニ及ビテ、核染色體ノ數全クナリ、ココニ完全ノ新細胞核ヲナシ、卵細胞ヲナス。卵細胞ハ即、新生ノ生體ノ最始ノ階級ヲナスモノナリ。サレバコノ卵細胞核ハ、父母兩性ヨリ由來セル核染色體ヨリ構成セララルモノナルガ故ニ、父母兩性ノ性質ガ、コノ新生ノ卵細胞ニ傳承セララルコトモ亦、甚、明白ナリ。蓋、コノ胚種細胞ノ受精狀態ハ、近代諸學者ノ精緻ナル研究ニヨリテ、諸種動物ニ就キテ頗、闡明セラレ、皆自ラ整然タル秩序ノ存スルコトヲ知り得タルガ故ニ、ソノ理ヲ人體ニ當テテ考フルコトモ固ヨリ不當ニアラズ。而シテコノ際細胞中ノ核、變化ハ最、顯著重要ニシテ、生殖質・遺傳質ノ主ナル保有者ハ核ニシテ、殊ニソノ染色體ナリト信セララルコトモ亦宜ナリトイフベシ。而シテ核染色體中ノ遺傳質ガ如何ナル狀態ニテ存スルカニ關シテハ、種種ノ憶説ナキニアラザレドモ、今ソノ正確ヲ知ルニ由ナキヲ以テ、ココニコレヲ述ベズ。但、細胞ニ在リテ、核ト細胞體原形質トハ、常ニ密著ノ關係ヲ有シ、全然相分離シテ考フベカラザルノミナラズ、又核ヲ有セザルトコロノ卵子細胞體部ノ他ノ精子ニヨリテ受精セシメタルモノガ、若干ノ程度ニ於テ亦母體ノ性質ヲ現ハシ來ルトノ實驗モアリ(タトヘバゴドレンウスキー氏⁽¹⁾ノ實驗ノ如キ)又細胞ノ諸成分共ニ、一様ニ遺傳作用ニ與カルモノナリトノ説ヲナスモノアリ。固ヨリ核以外ノ細胞體原形質ヲ全然度外視スベキニアラザルベシ。ヴルヲルン氏⁽²⁾ノ如キモ、核質ト細胞原形質トハ、同様に生活現象ヲ營ムニ與カルモノニシテ、遺傳モ亦兩者ノ關與スルトコロナリトイヘリ。要スルニ、コノ胚種細胞自個ノ受精

(1) O. Hertwig

(2) Keimplasma
(3) Soma
(4) A. Weismann

現象ハ、遺傳ノ説明ニ、最、有力ナル基礎ヲナスモノニシテ、ソノ際ニ於ケル變化ハ、殊ニ核ニ於テ最、正確ニ現ハルト稱スベシ。サレバ嘗テヘルトウヰツヒ氏⁽¹⁾モイヘルゴトク、遺傳問題ハソノ主要ノ點ニ於テ一ノ細胞問題ナリト稱スベシ。ココニ於テ、吾人ハコノ胚種細胞ニ固著スルトコロノ或病的性質アラバ、ソノ性質ガ遺傳的ニ兒孫ニ繼承セラルルノ理由ヲ解スルコトヲ得ルナリ。即、兒體ニ發生スル疾病ノ原因ハ、ソノ一要素ヲコノ遺傳ニ求ムベキモノアルヲ知ルニ足ル。サレバ遺傳ニヨリテ、親子間ニ同様ノ病的性質ノ現ハルルハ、猶、相似ノ生理的性質ノ現ハルト同様ニシテ、親子家族ヲ通ジテ、同一疾病、若クハ病的状態ノ發生スルトハ、素ヨリ怪ムベキニアラズ。

斯ノ如ク、病的性質遺傳ノ基礎ハ、實ニ胚種細胞ニ固著セルトコロノ性質ニ存セリ。抑、胚種細胞ハ、他ノ身體細胞ニ對シテ、獨立の態度ヲ有シ、コノ細胞内ニ存スルトコロノ『生殖質』⁽²⁾ハ、身體組織⁽³⁾ノ一代ニテ滅亡スルニ反シ、能ク世代ヲ逐ヒテ連續スルモノトハ(所謂『生殖質ノ連續』⁽²⁾說ハワイスマン氏⁽⁴⁾ニヨリテ大成セラレタリ)、ソノ大本ニ於テ、今ノ學者ノ信憑スルトコロニシテ、若、胚種細胞ノ、身體細胞ニ對シテ、常ニ必然的ナル從屬關係ヲ有シ、身體ニ現ハルトコロノ病變ガ、一一必ズソノ影響ヲコレニ及ボスベキモノトスレバ、日常見ルゴトク、遺傳ニヨリテ同一性質ガ、連續傳承セラルルコト、シカク確實ナラザルベキ筈ナリ。

然レドモ遺傳ニ當リテ、生理的ニ既ニ親子兄弟ノ間ニ相似共通ノ性質アルト共ニ、幾多ノ差異アルヲ示スコトハ亦爭フベカラズ。蓋、受精ニ際シテ、兩性胚種細胞ノ核染色體(動物ノ種類ニヨリテソノ數凡ソ一定ナリ)ノ各者ニ於テ、先、半數分割シ、然後ニ兩兩相結合スルトハ、前ニ述ベタリ。コノ際個個ノ核染色體ニ就キテ考察スレバ、分割結合ニ際シ、コレニ種種ノ相異ナリタル組合セラズベク、コノ個個核染色體組合セテ差異ニヨリテ、タトヒ同時ニ生成セラレタル同胞タリト雖モ、各者ノ間ニ、共通遺傳的性質ノ存スルト同時ニ、又、父母性質分配ニ差異ヲ生ズル所以モ亦、察

(1) Amphimixis

(2) Keimvariation

知セラルベシ。コレト同ジク遺傳性病的性質ノ發現ニ於テモ、親子兄弟ノ間、常ニ全ク同一ナルヲ必セザルコトナリ。或ハ同様ノ病的性質ノ、世代ヲ隔テテ認メラレ、若クハ却テ傍系ノ親屬ニ類似點ヲ見ルコトアリ。コノ事ハ亦、上述生理的性質遺傳ノ狀況ニ徴シテ首肯シ得ラルベシ。蓋、兩親ヨリ出テタル兩遺傳質ノ合同、即、**アムフィミキシス**⁽¹⁾ニ當リ、兩性物質結合ノ状態何如ニ因リテ、病的性質ノ基礎ハ、或ハ相累加シ、或ハ相乗除シ、或ハ變化セラルルニ至ルベシ。近親結婚ニヨリテ遺傳性病變ノ多ク現ハレ來ルハ、コレ同様ノ病的基礎ヲ有スルモノノ相累加スルタメニシテ、血族結婚自個ガ、必、直ニ病的性質ヲ作り出ストイフ證據ナシ。又コレニ反シテ、世世一定ノ病變(タトヘバ畸形)ヲ遺傳スル家族ガ、漸次他ノ健康家族ト婚ヲ通ズルニ從ヒテ、終ニソノ病的性質ヲ没却スルニ至ル。

斯ク胚種細胞ガ、受精時ニ於ケル**アムフィミキシス**ニヨリテ、病的ノ胚種變異⁽²⁾ヲナスノ外、尙、新タニ遺傳性病的性質ノ發現ヲ促シ出スベキ他ノ理由ノ考ヘ得ラルルモノアリ。即、受精以前ニ於テ、胚種細胞ガ、身體内ニ於テ若干ノ變異ヲ來タスコトコレナリ。若、胚種細胞ニ若干ノ變異ヲ生ジ、ソノ生殖質ニ何等カノ變化ヲ來タスコトアラバ、コレニヨリ形成セラルルトコロノ卵細胞中ノ遺傳質ニモ、ソノ影響ヲ及ボシ、遺傳性病的性質ノ發現ニモ差異ヲ起スノ理ナリ。而シテコノ胚種細胞ニ變異ノ加ハルトハ、ソノ生殖腺中ニ在ル時期ニ於テスルモノナルベシト雖モ、又ソノ臓器内組織隊伍ヨリ遊離セル後、或ハ受精ノ瞬間ニ於テスルコトモナキアラザルベシ。殊ニ身體ニ攝受セシトコロノ一定ノ毒物(タトヘバ**アルコホール**ガ、身體組織細胞ヲ傷害シ、兼テ同時ニ胚種細胞ヲモ害シ、ソノ生殖質ニ直接變化ヲ與フルモノハ、時トシテ亦能ク一定ノ遺傳性病的性質ヲ生ゼシムルニ足ルノ理ナリ。タトヘバ親ニ**アルコホール**中毒症アル場合ニ、タトヒ**アルコホール**中毒自個ハソノママ遺傳スルトコトナキモ、ソノ子ニ神經性疾患ヲ發シ、ソノ疾患ノ更ニ孫ニ傳ハルガゴトキコレナリ。

- (1) Lamarck
- (2) Charles Darwin
- (3) A. Weismann

- (4) Brown-Séguard
- (5) C. Westphal
- (6) H. Obersteiner
- (7) M. Sommer

茲ニ病理學上ニモ緊切ノ關係ヲ有シ、生物學上ニ於ケル一大疑問ナルハ、身。體。組。織。ト。生。殖。質。トノ。直。接。關。係。何。如。ナリ。即、身體組織ガ獲得セル病變ハ、終ニ何等カノ影響ヲ同一身體内ノ胚種細胞生殖質ニ及ボスコトナキカ、又胚種細胞ノ生殖質ハコレガタメニソノ性質ヲ變化シ、コノ病變ニ由來スルコロノ新遺傳現象ヲ生ズルニ至ルコト無キヤ否ヤノ問題ナリ。コレ即、生物學上ノ一大疑問タル獲得性質ノ遺傳如何ノ議論ニ歸著スルモノニシテ、如今未、眞ノ解決ヲ經ルニ至ラズ。蓋、獲得ノ性質ハ能ク遺傳スルモノトシテ、デマーク氏⁽¹⁾モダルウィン氏⁽²⁾モ共ニ、彼等ノ進化論ヲ立テタレドモ、『新ダールウイン説』ニ據レバ、コノ種ノ遺傳ハナシト唱ヘラレ、獨逸ノワイスマン氏⁽³⁾大ニコレヲ主張シ、同氏ノ説ヲ奉ズルトコロノ學者モ亦、甚、多ク、コレニヨリテ疾病遺傳ノ理ヲ講ズルトコロノ醫學者モ亦、少ナカラズ。然レドモ他方ニハ、コレニ對シテ、獲得性質モ亦遺傳スルモノナリトノ主張モ近時復、漸ク、ソノ聲ヲ高メントスルニ至レリ。蓋、粗大ナル身體ノ損傷、ダトヘバ手足若クハ動物ノ尾ノ切除・皮膚火傷・猶太人ノ陰莖包皮割斷等ガ直ニ遺傳性ヲナスニアザルコトハ、既ニ確證セラレタリ。然レドモ身體全者ノ物質代謝ニ於ケル意義ノ重要ニシテ、作用ノ微妙ナル影響ガ、多數ノ世代ヲ通ジテ加ハリ、コレニ由來スルトコロノ身體ノ性質ガ、終ニ遺傳的トナルコト無キカ、又コノ際如何ナル作用ヲ胚種細胞ガ受クルカニツキテハ、未、正確精緻ノ釋明ヲ得ザルモノアリ。又コノ原因學上ニモ亦生物學上ニモ、重要ナル問題ニ對シテ、醫學上ノ經驗竝ニ試驗ニ據リテコレヲ解決セントノ計畫ハ、已ニ諸家ノ指ヲ染メタルトコロニシテ、ブラウン、セター氏⁽⁴⁾以來ウエストワール氏⁽⁵⁾、オーベルスタイテル氏⁽⁶⁾、ゾムメル氏⁽⁷⁾等ノ神經症狀ニ關スル試驗アリト雖モ、要スルニ我病理學上ヨリコノ問題ニ對シテ十分有力ナル積極的證明ヲ與ヘタルモノハアラストイハザルベカラズ。

蓋、前述ノゴトク、生殖質ガ、身體組織ニ對シテ獨立的態度ヲ取り、連綿トシテ、世代ヲ逐ヒ、繼承セラルルコトハ、固ヨ

(1) C. C. Guthrie

リ是認スベシト雖モ、翻テ考フルニ、生殖質ヲ保持セル胚種細胞ハ、ダトヒ身體組織ノ變動ニ對シテ、ソノ裡ノ遺傳質ヲ固持シテ失ハザルトコロノ特性アルニモセヨ、コレ亦同一身體内ノ細胞ニ外ナラズシテ、他ノ組織細胞ニヨリ包圍セラレ、コレト同ジク臟器ノ一成分トナリ、他ノ身體組織ニ對シテ、或ハ體液ニヨリ、或ハ神經ニヨリ、又ハ部位的解剖的關係ニヨリテ相連絡スルモノナレバ、身體組織ガ若、一定ノ病變ヲ呈スルニ至ラバ、コレヨリシテ、或ハ化學的ニ、或ハ理學的ニ、將タ神經作用ヲ介シ、又ハ内分泌作用ノ自家中毒作用ニ依リテ、何等カ物質代謝上ノ影響ヲ胚種細胞ニ及ボスコト無キカ、ダトヒ吾人ハ未、コレニ關シテ明細ノ知識ヲ有セザルモ、今遽カニ全然無關係ナリト速斷スルヨリハ、寧、若干ノ關係アルコトヲ想像スル方事實ニ近シトイフベシ。サレバ場合ニヨリテハ、身體組織ノ獲得性病變ガ、胚種細胞ニ影響ヲ與ヘ、ソノ胚種ノ性質ニ若干ノ變異ヲ生ゼシメ、ソノ遺傳ヲ致スコトモ亦可能的ニアラズトイフベカラズ。近者ガスリー氏⁽¹⁾ノ雞卵巢移植試驗ニ於ケル成績ノ如キハ、身體組織ガ、卵巢内ノ胚種細胞ニ若干ノ物質的影響ヲ及ボスコトヲ推知セシムルニ足ル。ソノ他尙、類似ノ試驗成績ヲ擧ゲタルモノアリ。但、吾人ハコノ疑問ヲ以テ、未、十分ニ解決シタルモノトハ認ムルコト能ハズ。

ガスリー氏試驗ハ概略次ノ如シ。羽色ノ全然純粹ナル黒色鶏及ビ白色鶏ノ二種ヲ取り、ソノ雌鶏ノ卵巢ヲ相交換シテ移植シ置キ、後、白色鶏ノ卵巢ヲ有スル黒色雌鶏ヲ白色雄鶏ト交尾セシメ、又ソノ反對ニ黒色鶏ノ卵巢ヲ移植シタル白色雌鶏ヲ黒色雄鶏ト交尾セシメ、コレヨリ產生シタル雛鶏ノ羽色ヲ檢スルニ、元來ノ卵巢ノ出處ニヨリ期待セラルベキ性質ノ外、實ニ該卵巢移植鶏ノ羽色(即、身體組織ノ性質)ヲモ帶ベルヲ見キトイヘリ。

遺傳性病的性質ガ、子孫ニ發現スルノ狀ニ一定ノ法則アリヤ。コレ亦切ニ吾人ノ知ランコトヲ希フトコロナリ。コノコトニ關シテ、血友病ノ病的基質ガ、通例女子ニヨリテ傳承セラレ、ソノ病變ノ發現ハ主トシテ男子ニ於テスルコトノゴトキハ、

(1) Ahnentafel

(2) Bastard
(3) Mendels Regeln

(4) Uniformitätsregel
(5) Spaltungsregel

比較的明瞭ノモノナレドモ、尙、ソノ精微ノ關係ヲ知ルコト能ハズシテ、概シテコノ事ニ關スル知識幼稚ナリ。蓋、一定ノ特殊病變徵候ヲ捉へ、完全ナル先祖誌⁽¹⁾ニ據リテソノ發現ノ狀ヲ勘查スルヲ要スルモ、正確・緻密ノ材料ヲ得ルコトハ常ニ困難ニシテ、殊ニ我邦ノ現狀ニテハ殆、不可能ナリ。サレバ人體ノミナラズ、他ノ生體ニ於テ生理的性質ノ遺傳的發現ノ狀ニ、一定ノ法則ノ、發見セラレタルコトアラバ、移シテ以テ、我が疾病現象ノ遺傳狀態ヲ知ルノ準繩或ハ補助トナスベシ。コノ發現狀況ヲ知ル方法トシテハ、遺傳的ニ特徴アル一定ノ性質ヲ有スル生體ノ交合ニヨリテ生ヅタルモノ即、間種⁽²⁾ニ就キテ、ソノ形態・性質ヲ察シ、遺傳的性質ノ子孫分佈ノ狀況ヲ知ルコトヲ得ベシ。

コノ間種ノ示ス性質ニ徴シテ、種々ノ遺傳狀態アルコトヲ知ルベシ。即、偏側性間種⁽³⁾（兩親ノ性質ノ何レカニ偏セルモノアリ、中間性間種アリ。中間性間種ノ中、更ニ嵌工様間種⁽⁴⁾（兩方ノ性質ヲ兼ネ備へ、各處ヲ異ニシテ現ハルモノ）アリ、混合間種⁽⁵⁾（兩方ノ性質ノ平等ニ混同シテ現ハルモノ）アリ。而シテ間種ガ所謂メンデル氏法則⁽³⁾ニ據ルモノノゴトキハ、殊ニ甚、注意ヲ惹クニ足ル。

メンデル氏法則ニ據ルモノハ、甚、整然タル遺傳現象ヲ示シ、一定ノ相異ナル標徵ヲ有スルトコロノ兩者ノ結合ニ當リ、ソノ標徵ニ優性ト劣性トアルコトヲ識リ得ベク、コレニ應ジテ各標徵ハ、一定ノ數ノ割合ヲ保チテ後裔ニ見ハルモノナリ。タトヘバ赤色ノ花ヲ有スルトコロノ金魚草ト、白色ノ花ヲ有スルトコロノ金魚草トアリ。ソノ兩者ノ生殖細胞ヲ合ハセ生ヅタル「間種」ハ、盡ク赤色ノ花ノモノノミナリ。（紫茉莉^{オシロイバナ}ニテハ、コノ間種孰レモ赤白ノ混合色ナル薔薇色ノ花ノモノノミナリ）コレ所謂「一樣則」⁽⁴⁾ヲ示スモノニシテ、赤ハ即、優性ナリ。コノ第一世代ノモノヲ、更ニ相受孕セシメテ生ヅタル間種ニハ、赤色ノ花ヲ有スルモノト、白色ノ花ヲ有スルモノトアリ。（所謂「分離則」⁽⁵⁾）シカモノノ數ノ比例一定シ、赤三・白一ナリ（紫茉莉ナラバ、赤一・白一・薔薇色二）コレヨリ以降、ソノ赤者ノ一ハ永久唯赤性ヲミ遺傳シ、他ノ一ノ赤

(2) Gregor Mendel (1) Unabhängigkeitsregel

者ハ、次ノ世代ニ至リテ復、分離ヲ示シ、同ジク赤三・白一ヲ作り（薔薇色ノモノハ復タ赤一・白一・薔薇色ニヲナス）、白色ノモノハ常ニ白色ヲノミ遺傳ス。而シテ數多ノ相異ナル可遺傳性ノ共ニ存在セル場合ニハ、各者ハ相獨立のニ遺傳スルモノナリ（獨立則⁽⁵⁾）。

コノメンデル氏法則ハ、最、整調セル内容ヲ有シ、現今ニ於テハ、最、重要ナル遺傳法則タリ。コレモト植物ニ於テ發見セラレタルモノ（グレゴル、メンデル氏⁽²⁾）ガ千八百六十年代ニ發見シタルモノニシテ、近時ニ至リ始メテ汎ク世ノ視聽ヲ惹クニ至レリナレドモ、亦動物體ニ於テモ適用セラレ得ベク、更ニ進テ人體ニモ推シ及ボシ、殊ニ皮膚ノ色・毛髮・虹彩ノ色等ノ標徵ニヨリテ攻究セラレ、又人ノ遺傳性病的性質ノ上ニモ、ソノ應用ヲ見ントスルニ至レリ。タトヘバ種々ノ畸形狀態・血友病・色盲或ハ糖尿病等ノ遺傳性的病的性質ハ、或ハ所謂「優性」或ハ所謂「劣性」ノ標徵トシテ認メラレ、ソノ子孫ニ發現スル態度ヲメンデル氏法則ニ當テ嵌メテ説明シ得タルモノモ亦無キニアラス。但、元來コノ法則タルヤ一定ノ標徵ニヨリ育種^{デューピング}ヲナスコトヲ前提トナシタルモノニシテ、コレヲ人體ニ於ケル病的性質遺傳ニ適用セントスルニハ、甚、困難ノ事情アリ。然レドモ尙、コレニ關スル後來ノ醫學的研究ニ裨益スルトコロ尠少ニアラザルベシ。

疾病原因ヲ構成スルトコロノ要件ニシテ、身體自個ニ伏在スルモノアルコトハ、上述ノゴトシ。コレ原因學上講ゼザルベカラザルモノノ一ナリ。而シテ生活體ノ榮養ヲ受ク、且、機能ヲ發揮スルニ當リ、絶エズ外界ト密接ナル關係ヲ有ス。即、健康ノ生活ヲ營ムニハ、外界ト相俟チテ一定ノ生活要約ノ下ニアルヲ要ス。サレバコノ尋常ノ生活要約ニ、一朝異變ヲ呈スルコトアラバ、タトヒ生來健全ノ身體ニシテ、且、特殊「害物」ノ來リ加ハルコト無キモ、亦能ク疾病ヲ惹起スルニ足ルベシ。コノ生活要約ノ異變ハ、コレ講ゼザルベカラザルモノノ一ナリ。又更ニ新タニ「害物」ノ來リ加ハルコトヨリテ、疾病ノ發生ガ特ニ著明

(r) Disposition

ナルモノアリ。コノ『害物』ノ何者ニシテ、ソノ作用ノ何如ナルカハ、コレ講ゼザルベカラザルモノノ二ナリ。斯ク二者ヲ別チテ掲ゲ出シタレドモ、二者固ヨリ常ニ相關聯シ、往往全ク相離ルベカラザル連絡ヲ保テリ。蓋『害物』ヲ遭遇ハ、身體ノ素因ト相俟テ始テ疾病ノ發生ヲ促ガシ、又通例素因ト稱セラルルモノノ中ニハ、寧『害物』遭遇ノ頻繁トイフコトト殆ド相一致スルモノモアリ。又生活要約ノ異變トイフモ、コレ時トシテハ『害物』遭遇及ビ侵入ヲ容易ニスルノ義ニ外ナラザルコトアリ。或ハ病的素因ヲ形成シテ、間接ニ他ノ疾病ノ發生ニ與カルモノアリ。

疾病ノ原因ハ已ニ上述ベタルゴトク、集合性ナリ、關係的ナリ、又疾病ノ發生スル身體ハ、各人皆相異ナレリ。サレバ各個人、個個ノ病例ニ於テ、ソノ疾病原因ノ全者ガ、全然同一ナルコトハナキ理ナリ。故ニ各例ニ於テ疾病原因ヲ構成スルトコロノ個個ノ要件ヲ分拆シ、識別シ、且、ソノ發病ニ對スル一ノ意義ヲ明ラカニスルコトヲ務ムベシ。換言スレバ、諸原因的要件ニ種種ノ差別アルコトヲ知ルヲ要ス。即、意義ノ輕重ニ應ジテ、主因・副因ヲ區別シ、又由來セル時期何如ニヨリテ、遠因・近因ヲ分チ、又ハ直接因・間接因・誘因等ノ稱ヲ用フルコトヲ得ベシ。ソノ他、身體自個ノ内ニ存スル原因的要件ヲ内因ト稱シ、外來ノ『害物』ノ作用ニヨルモノヲ外因ト呼ブコトハ、亦廣ク行ハレタルトコロナリ。原因的要件ノ身體自個ノ性質狀態ニ存スルモノヲ概稱シテ素因⁽¹⁾トイフ。素因ハ即、所謂『内因』ナリ。蓋、コレ等ノ稱呼ハ必シモ甚、重要ノモノニアラズ、又必シモ常ニソノ意義ヲ明晰ニ相區別シ得ルニ限ラズ。要ハ諸原因的要件ノ意義ト關係トヲ知り、コレニヨリ何如ニシテ疾病ノ發生シタルカラ究ムルニアリ。

疾病ノ原因或ハ主要ナル原因的諸要件ノ作用シタル時期ヲ明確ニ知ルコトハ、必シモ容易ナラス。然レドモ、又敢テ不可能ニアラズ。而シテコノ時期ノ何如ニヨリテ疾病ノ發生ニ大差アリ。即、先、(一)後天性。(二)先天性ヲ別ツベシ。後天性トハ、出生後ノ生活時期中ニ於テ疾病原因ノ作用セルモノヲイヒ、先天性トハ、ソノ以前ノ時期ニ於ケルモノヲ稱ス。尙、コレ

ヲ細別スレバ、(甲)子宮内生活時期ニ於セルモノト(乙)胚種ニソノ原因的ノ要件ニ存スルモノトヲ區別セザルベカラズ。胎兒ガ、子宮内ニアリテ外傷ヲ受ケ、或ハ子宮・卵膜等ノ異變ニヨリテ傷害ヲ蒙リ、若クハ胎盤ヲ介シテ母體ヨリ化學的毒物ヲ輸入セラレ、或ハ病原么微體ノ感染ヲ惹起スルガゴトキハ、即、子宮内生活時期ニ於ケル『獲得』ナリ。眞ノ遺傳ニハアラズ。コレニ反シテ、胚種細胞ニ固著シテ存スルコロノ性質ガ、疾病發生ニ對シ、原因要素ヲナスコトアラバ、コレハ眞ニ遺傳性トナスベキモノナリ。但、胚種細胞ニ病因的の要件ノ加ハルコトハ、必シモ常ニ遺傳性ナリトイフベカラズ。タトヘバ病原性么微體ノ胚種細胞ト共ニ存スル場合ノゴトキ、所謂『胚種感染』ハアルベシ。コノ么微體ノ、胚種細胞ニ固著ノ性質ニアラザルハ勿論ナルガ故ニ、コレヲ眞ノ遺傳ト同一視スベカラザルナリ。コレ等ノ意義ハ相混同セシメザルコトヲ要ス。

上文、吾人ハ凡テ『疾病ノ原因』ノ語ヲ用ヒタリ。然レドモ、疾病概說中ニ述ベタルト同様ノ理由ニヨリ、下文ニ述フルトコロハ、必シモ狹義ニ於ケル『疾病』ノ原因ヲイフノミニアラズシテ、疾病ト名ツクル病的機能ノ外、他ノ病的狀態ヲ惹起セシムルモノヲモ共ニ包括セリ。

参考文献

(本篇ハ所定ノ紙數限リアルナリテ、記述ノ簡約ナ期シ、人名ノ如キハ務メテ省略シ、研究成績ヲ引用シタルトコロモ著者ノ名ヲ掲出セザルモノ多シ。茲ニ載スル参考文献モ唯少數ヲ擧ゲテ一斑ヲ窺フニ止メタリ)

疾病及ヒ疾病原因

Adami, J. G., The Principles of Pathology, 1910, I.
 Albrecht, E., Krankheit. Frankfurter Zeitschrift f. Pathologie, 1907, I, S. 205.
 Albrecht, E., Zellular-Pathologie. Frank. Zeitschr. f. Path. 1907, I, S. 1.
 Arctioff, L., Ueber den Krankheitsbegriff u. verwandte Begriffe. Deutsche med. Wochenschr. 1909, S. 1417.

- Bier, A.*, Über die Berechtigung des teleologischen Denkens in der praktischen Medizin. 1910.
- Birch-Hirschfeld, F. V.*, Grundriss der allg. Pathologie. 1892.
- v. *Hensemann, D.*, Über das konditionale Denken in der Medizin. 1912.
- Hüghe, F.*, Über Krankheitsursachen vom Standpunkte der naturwiss. Medizin. 1901.
- Kreil, L.*, Pathologische Physiologie. VII. Aufl. 1912.
- Labarthe, O.*, Die allgemeine Pathologie. 1905. I. 1. Heft.
- Labarthe-Ostertag, Ergebnisse d. allg. Path.* 1896. I. Beeinträchtigung und Fortfall von Organfunktionen als Krankheitsursache. (*Labarthe, O., Minkowski, O., Chevret, F.*)
- Lukjanow, S. M.*, Grundzüge einer allgem. Pathologie der Zelle. 1891.
- Marchand, F.*, Einleitung zum Handbuch der allg. Pathologie von *Kreil* und *Marchand*. 1908. I. Über die natürlichen Schilzmittel des Organismus etc. 1900.
- Martin, Fr.*, Pathogenese innerer Krankheiten. 1909.
- Mitchnikoff, E.*, Leçons sur la pathologie comparée de l'inflammation. 1892.
- Orth, J.*, Riechliche. *Virchow's Archiv*. 1910. CC, S. 1.
- Ribbert, H.*, Das Wesen der Krankheit. 1909.
- Ricker, G.*, Entwurf einer Relationspathologie. 1905.
- v. *Rindfleisch, E.*, Die Elemente der Pathologie. III. Aufl. 1896.
- Rogers, H.*, Introduction a l'étude de la pathologie générale; Étiologie et Pathologie (Considérations générales). *Bouclard, Traité de Pathologie gén.* 1895. I, p. 1, p. 155.
- Röske, R.*, Innere Krankheitsursachen. *Aichoff's Patholog. Anatomie*. II. Aufl. 1911. I, S. 1.
- Schlater, G. G.*, Die Cellularpathologie u. der gegenwärtige Stand der Histologie. Sammlung anatomischer u. physiologischer Vorträge und Aufsätze. 1911. Heft 14. (非細胞病理學)
- Thälé, Fr.*, Das vitalistisch-teleologische Denken in der heutigen Medizin. 1909.
- Virchow, R.*, Die Cellularpathologie etc. IV. Aufl. 1871. Krankheitswesen und Krankheitsursache. *Virchow's Archiv*. 1880. LXXIX, S. 8. Hundert Jahre allgemeiner Pathologie. 1895.
- Weigert, C.*, Neue Fragestellungen in der pathologischen Anatomie. Deutsche med. Wochenschrift. 1896. S. 635.

(本邦ニ於ケル病理總論殊ニ病因論)

- 桂田富士郎 病理汎論第一卷(第二版)明治三十二年。第三卷(一般原因)明治二十九年。
- 今 裕 近世病理學總論第三版(大正元年)。
- 三宅秀三 浦謹之助 增訂病理總論卷上, 明治二十七年。
- 佐多愛彦 顯微鏡的研究法前篇(第三版)明治三十四年。
- 田中祐吉 病理總論下卷(一般病原論)第四版(明治四十四年)。
- 山極勝三郎 病理總論講義中卷(病因論)第八版(明治四十二年)。

遺傳ニ關スルモノ(疾病素因ノ條下ニ屬スルモノヲモ包含ス)。

(遺傳ノ生物學的理論ニ關スル文籍ハ今一ニコンテ擧グルコト能ハズ。近時刊行ニ係ル *Haeckel's V.*, Allgemeine Vererbungslehre. 1911. ノ如キハ簡ニシテ要ヲ得タリ, 且多ク文籍ヲモ掲ゲタリ。又大澤(謙)博士ノ「日新醫學ニ於ケル記述マリ第一年第八號(明治四十五年)」左ニシテ尙シ他ニ三ニ文籍ト竝ニ殊ニ疾病ノ遺傳ニ關スルモノ若干トナリ列記セリ)。

- v. *Baumgarten, P.*, Die Lehre von den Krankheitsanlagen (angeborene und erworbene Dispositionen, Erbllichkeit). *Kreil u. Marchand*, Handbuch der allg. Pathologie. 1908. I, S. 363.
- Brown-Séquard*, Nouvelle recherches sur l'épilepsie etc. Archives de physiologie. 1869. II, p. 219, 422, 446. Quelques faits nouveaux relatifs a l'épilepsie etc. Arch. de phys. 1871. IV, p. 116. 其他
- Delage, Yv.*, L'Hérédité et les grands problèmes de la biologie générale. II. Édition. 1903.
- Godlewski, E.*, Untersuchungen über die Bastardierung der Echindien- u. Crinoidenfamilie. Arch. f. Entwicklungsmechanik. 1906. XX, S. 579.
- v. *Gruher, M. u. Rüdlin, E.*, Fortpflanzung, Vererbung, Rassenhygiene. II. Aufl. 1911.
- Guthrie, C. C.*, Further Results of Transplantation of Ovaries in Chickens. The Journal of exper. Zoology. 1908. V, p. 568.
- v. *Hausmann, D.*, Descendenz u. Pathologie. 1909.
- Hertwig, O.*, Allgemeine Biologie. II. Aufl. 1906.
- Loosen, H.*, Die Blutfamilie Mampel etc. Deutsche Zeits. f. Chirurgie. 1905. LXXVI, S. 1.
- Martius, F.*, Über die Bedeutung der Vererbung u. die Disposition in der Pathologie mit besonderer Berücksichtigung der Tuberkulose. Verhandlung des Kongresses für innere Medizin. 1905. XXII, S. 53.

Mendel, G., Versuche über Pflanzen-Hybriden. 1865. Verh. Naturf. Ver. Brünn. 其他 (Theodor = 藤野.)
 宮本 寛 血友病ノ一例 日本邦ニ於ケル血友病 醫事新聞 第八百十三號 明治四十三年。
 Obersteiner, H., Zur Kenntniss einiger Hereditätsgesetze. Ost. med. Jahrb. 1875. Heft 2. (Virchow-Hirsch, Jahresbericht. 1875. I, S. 279.)
 Orth, J., Angeborene u. ererbte Krankheiten u. Krankheitsanlagen. Senator u. Kammer, Krankheiten und Ehe. 1904. I. Abt., S. 26.
 Orskowsky, J., Die Vererbung. 1903.
 Schillingen, W., Vererbung u. Auslese im Lebenslauf der Völker. I. Aufl. 1903. (S. 91.)
 Schrodler, E., Das Problem der Vererbung in der Pathologie. Minch. med. Wochenschrift. 1903. S. 1579.
 Semon, R., Der Stand der Frage nach der Vererbung erworbener Eigenschaften. Fortschritte der naturw. Forschung. 1911. II, S. 1.
 Sommer, M., Die Brown-Séquardsche Meerschweinchenepilepsie etc. Zieglers Beiträge. 1900. XXVII, S. 289.
 外山龜太郎 Mendel's Law of heredity as applied to the sick-worm crosses. Biolog. Centralbl. 1906. XXVI, S. 321.
 Verorn, M., Allg. Physiologie. V. Aufl. 1909.
 Weismann, A., Die Kontinuität des Keimplasmas als Grundlage einer Theorie der Vererbung. 1885. Aufsätze über Vererbung. 1892. 其他。
 Westphal, C., Über künstliche Erzeugung von Epilepsie bei Meerschweinchen. Berl. klin. Wochenschrift. 1871. S. 448, 461.
 Ziegler, E., Können erworbene patholog. Eigenschaften vererbt werden etc.? Zieglers Beiträge. 1886. I, S. 361

- (1) Schädlichkeiten
- (2) Krankheitsdisposition oder Krankheitsanlage

乙 疾病素因

一 概説

疾病原因ヲ論ズルニ當リテ、身體ノ内外ニ起リテ新タニ身體組織ニ加ハルトコロノ『害物』⁽¹⁾ヲ觀察スルノミニテハ十分ナラズ。必ズヤ又、豫メ身體自個ニ存スルトコロノ原因的要件ヲモ辨知セザルベカラズ。而シテ、豫メ身體自個ニ存スルトコロノ状態性質ニシテ、疾病ノ發生ヲ促スココロノ要件ヲ總括シテ、コレヲ疾病素因⁽²⁾ト稱ス。

疾病素因ノ概念ハ單一性^{アインハイトリヒ}ノモノニアラズ、又必シモ全然精確ニ測量セラルベキ固定的ノモノニアラズ。ソノ内容ハ甚、複雑ニシテ、ソノ性質ハ必シモ一定不變ナリトイフコト能ハズ。蓋、素因ノ語ガ通常好テ用キラルルハ、所謂『外因』ト相依リテ以テ疾病ヲ發生セシムル場合ニアリ。若、後來我ガ學術ガ更ニ進歩シテ疾病ヲ成立セシムルトコロノ各種ノ要約・要件ヲ一一分拆識別スルコトヲ得、又、ソノ相互關係ヲ逐一闡明スルコトヲ得ルニ至ラバ、或ハ終ニコノ用語ヲ不要ニ歸セシムルコトナキヲ保セズ、而カモ、尙、外來ノ『害物』ニ相對シテ、身體自個ニ存スルトコロノ各種ノ病因的・要件ヲ重要視スルノ考ハ、終ニ渝ルコトナカルベシ。

素因ノ語ハ尙、多少漠然タルノ感ナキニアラザレドモ、今日ノ原因學ハ決シテ『素因』ヲ度外視スルコト能ハザルナリ。現ニ細菌性タルコトノ明瞭ナル傳染病ニ於テスラ決シテ素因ノ重要意義ヲ没却スルコト能ハズ。何トナレバ、同一ノ病原菌ガ作用セル場合ニテモ、疾病發生ノ狀況ハ人人ニアリテ必シモ同様ニアラズ、又所謂『菌保有者』ラゴトキ、己レ病マズシテ他人

(1) J. Cohnheim

(2) Germain Sée
(3) Predisposition

(4) J. Orth

ニソノ病ヲ傳染スルモノアリ、コレ等疾病發生ノ不同ハ、病原菌ノ性質以外ニ、身體組織自個ニ、ソノ因由ヲ求メザルベカラザレバナリ。ソノ他ノ疾病ニ於テモ亦、毎ニ同様ノ關係ノ存スルヲ認ムベシ。蓋、我ガ醫學ノ中ニツキテ、原因學ハソノ發達最、遲遅タリシガ、一朝細菌學ノ勃興スルアリテ、隆盛ヲ極ムルニ當リ、細菌ノ侵襲及ビソノ毒性ハ以テ傳染病原因ノ總體ヲ解釋スルニ足レリトナシ、世人ハ重キヲ所謂「外因」ニ置キ、細菌學ハ殆、原因學ノ全部ヲ支配セントスルノ觀アリ。細菌學專家ナラザル病理學者コーンハイム氏⁽¹⁾スラ、結核ヲ論シ(千八百八十一年)謂ヘラク、「總テソノ病原體ノ特性ト、竝ビソノ作用トニ歸著ス」。又、謂ヘラク「結核素因ノ説ハ、學術的研究ノ範圍ヲ超エテ存スルモノアルコトヲ觀念セシメントスルモノニシテ、甚、不可ナリ」。高名ノ病理學者コ氏ニシテ已ニ斯ノ如シ、當時細菌學專門學者ノ所説ガ、外來寄生物ニ多大ノ原因ノ價值ヲ附與セントシタルモノ決シテ偶然ニアラザルナリ。

細菌學ハ一層、進歩セリ。コレト共ニ爾他ノ醫學諸科ニ於ケル觀察ト實驗トハ、漸、吾人ヲバ中道ニ導クニ至レリ。今日ニ於テモ、素因ニ關スルコロノ意見ハ未、一定セズ、コノ語ノ用法モ亦、必シモ同一ニハアラズト雖モ、疾病原因トシテ細菌萬能ヲ唱ヘタルノ時代ハ既ニ過ギ去リタリ。世人ハ漸ク眞面目ニ素因ノ意義ニツキテ考慮スルニ至レリ。蓋、素因ノ意義ハ複雜ニシテ吾人ノ知識ニ不明ノ點多キニモセヨ、今日、コレヲ以テ、單ニ曖昧模糊ナルモノトノミ思フベカラズ。佛人「ゼルメイン、セー」⁽²⁾ノ説ニ「素因」トハ吾人ノ無知ヲ覆フトコロノ言葉ノミトイフハ、慥ニ半面ノ眞理ヲ伏藏スルコトナリ。今日モ常ニ悉ク然リトハナスコト能ハズ、又、素因ヲ以テ單純ニ免疫性ノ缺乏トシテ、唯消極的ノ概念ノミトスルコトナキヲ要ス。オルト氏⁽⁴⁾モ言ヘルガゴトク、コノ概念ハ「決シテ神祕的ノモノ、學術以外ノモノナラズ。吾人知識ノ未、至ラザルトコロアルニモセヨ、同ジク學術的の攻究ニ堪フルコト、猶、爾他ノ病理學上ノ諸問題ニ異ナラズ。サレバ、コレニ關スルコロノ諸方面ノ研究モ、漸、精緻トナリ、或ハ身體ノ解剖的狀態ニツキテ、或ハ理化學的及ビ生物學的の性状ニツキテ、或ハ體組

(1) Disposition
(2) Exposition

織ノ榮養及ビ動作ニツキテ、或ハ身體全部ニ互タレル性質ニツキテ等、素因ノ研究ハ、實ニ學術的基礎ヲ有スルニ至レリ。唯ソノ事項ノ甚、複雜ニシテ今日尙、個個ノ要件ニ於テ、吾人ノ知識ノ完全ヲ缺クモノ少カラザラ憾トスルノミ。

學者ハ好テ疾病原因ヲ分チテ「外因」「内因」トス。ソノ内因ヲ以テ身體内ニ存スルコロノ「原因」若クハ「發病要約」トナサバ、素因トイフモノハ即、「内因」ヲ内容ノ最大、最要ノモノナリ。

既述ノゴトク、素因ノ内容ハ複雜ニシテ、種種ノ要件ヲ含蓄セリ。今コレ等諸項ヲ一括シテ廣ク「素因」ト稱セラルルトコロノモノヲ觀察スレバ、ソノ内ニ凡、左ノ二者ヲ區別スベシ。

一。身體ガ唯、一定ノ境遇ニ在ルガタメニ、罹病ノ可能ヲ多カラシム、換言スレバソノ身體ヲシテ罹病ヲ容易ナラシムルモノ。但、コノ場合ハ多クハソノ境遇ニヨリテ身體内外ノ「害物」ニ遭遇スルコトヲ頻繁ナラシムト云フマデニシテ、未、眞ニソノ身體自個ニ屬スルコロノ「素因」トイフコトヲ得ザルモノ多シ。即、多數ノ場合ニテハ、眞ノ「素因」ヲ消長ニツキテ謂フヨリモ、寧、害物遭遇ノ多少ト言フ方ガ合理的ナリ(コレ嚴正ノ意味ニ於ケルチオスボジチオン⁽¹⁾ヨリモ、寧、エキスボジチオン⁽²⁾「害物ニ遭遇セシ」ト云フ方ガ適當ナリ。タトヘバ探炭ニ從事スルコロノ人夫ハ肺臟炭粉沈著症ニ罹ルモノ多キガゴトキ、コレナリ。但、コノ境遇ガ、又、身體ノ榮養等ノ狀態、性質ニ影響ヲ及ボシ、コレニ由リテ眞ノ「素因」ニ關與スルコトアルハ否認スベカラズ。

二。身體ノ狀態、性質ニ存スル事項ガ、一個ノ原因の要件、即、素因トナリ、後ニ他ノ原因の要件ノ新タニ來タリ加ハルト相俟チテ、始メテ疾病若クハ病的狀態ノ發生ヲ來タスモノ。タトヘバ生來所謂「神經質」素因(ナル人ガ、後日精神過勞ニ因リテ精神病ヲ惹起スルガゴトキ、是ナリ。

三。身體ノ狀態、性質ニ一定ノ特殊ノ事項アリテ存シ、コレガタメニ後日自ラ必發的ニ、或ハ殆、必發的ニ、一定ノ疾病

(1) P. v. Baumgarten
(2) Anlage

又ハ病的状態ヲ發生セシムルモノ。タトヘバ血友病ノゴトキ、コレナリ。僅微ナル粘膜血管損傷ノ如キハ日常ニ見ルトコロニシテ、假令、コレアルモ通例ハ直チニ止血スルモノナレバ、コノ損傷自個ヲ以テ直ニ血友病ノ特殊原因トナスコト能ハズ。コノ場合ハソノ主因ヲ身體組織ノ特殊性質ニ歸セザルベカラズ。又、遺傳性近視ノゴトキモコノ例ニ屬ス。又、屢、泰西ニ於テ見ル痛風ノゴトキ、一定ノ家族ノ人ハ平生攝生ニ注意シ痛風ノ原因ト稱セラルル事項ヲ十分ニ回避セルニ拘ハラズ、後年亦、コノ疾病ニ罹ルモノアリト云フ。果シテ然ラバ、ソノ主ナル原因ハコレヲソノ人ノ身體組織ニ存スルトコロノ特殊ノ性質・變化ナリトセザルベカラズ。コノ第三項ノモノヲパウムガルトン氏⁽¹⁾ハ特ニ獨逸語ノ「アンラーゲ」⁽²⁾（基質）ノ語ニテ表示セントセリ。但、コノ語ハ元來チスホジチオン⁽³⁾ト同義ナレバ、吾人ハ茲ニ廣ク「素因」ノ言葉ヲ用キタルガ故ニソノ中ニテ、特ニコノ一項ヲ標別セリ。

(3) Disposition

通常素因ト稱セラルルモノハ、(一)外的境遇ニ依ルトコロノ[○]素因ニシテコレヲ眞正ノ素因ト謂フベカラズ。但、コノ境遇ガ、身體ノ状態・性質自個ニ影響ヲ及ボシ、コレニヨリテ特ニ「害物」ヲ身ニ受ケ易カラシムル場合ハコレアリ。(二)身體ノ状態・性質ニヨリテ、更ニ他ノ「害物」ヲ身體内侵入・固著及ビソノ有害作用ヲ特ニ容易ナラシメ、且、ソノ「害物」ニ對スルトコロノ身體ノ抵抗・防禦ヲ困難ナラシムルコト。(三)身體ニ於ケル特殊ノ病的状態・性質ニシテ、必シモ、特殊ノ外來「害物」ノ動作ヲ俟タズシテ、直チニ後日ノ疾病ノ素地ヲナスコト。コレ最、特異性トスベキモノニシテ、コハ先天性ニ基ツクモノ殊ニ多シ。

吾人ハ便宜上、斯クノ如ク、三項ニ分チテ論ジタレドモ、コノ間ニハ亦、ソノ差別・移行的、ナルモノ、少カラズシテ、判然コノ三項ニ區劃スルコトノ困難ナル場合モ固ヨリ多クコレアリ。要スルニ、「素因」ノ意義ハ廣汎ニシテ、ソノ成立及ビ發現ノ時期等ハ甚、一定セズ。即、遺傳性ノモノアリ、或ハ獲得性ノモノアリ。生活ノ早期ヨリ、ソノ存在、既ニ明カナルモノアリ。或ハ年

(1) Wieland
(2) Esch
(3) Hueppe
(4) Liebreich

月ヲ經テ後始メテコレヲ知ルベキモノアリ。又、ソノ性質モ甚、特異ノモノアリ、或ハ頗、普汎的ノモノアリ。固著性ノモノ・移動性ノモノ・永久性ノモノ・一時性ノモノアリ。ソノ發病ニ對スルノ意義・價值ニモ大小・輕重ノ別、直接・間接ノ差アリ、又、ソノ關係ノ必シモ判然タラザルモノアリ。而シテ、素因ノ基礎ガ、時ニ或ハ明カニ理學的・解剖的ノモノアリ(タトヘバ、打撲ヲ受ケタル部ニ、後ニ細菌性疾患ヲ惹起スルガゴトシ)。或ハ明カニ化學的・機能的ノモノ(タトヘバ、胃ノ「鹽酸缺乏」ガ消化障礙ノ素因ヲナスガゴトシ)等アリ。

サレバ、コレ等ヲ一括シテ、全ク精緻、且、全ク具體的、且、單一的ノ定義ヲ下サントスルハ、今日ノトコロニテハ、甚、困難ナリトイハザルベカラズ。近者ウキーランド氏⁽¹⁾ハ、説ヲナシテ曰ク「刺戟ヲ受ケタル被害身體細胞ノ反應ハ、即、疾病ニシテ、コノ反應ノ發現ニツキテ必要ノ前提ハ、即、刺戟感受性ナル身體細胞ノ存在ナリ。コレヲ疾病素因ト稱ス」ト。又エシ⁽²⁾氏ハ、コノウ氏ノ説ニ對シ、寧、ヒツツベ氏⁽³⁾ノ所謂「防禦裝置ノ形成ノ不十分」ヲ主ニシテ論ズルヲ可ナリトナシ、素因ノ定義ヲ以テ身體プロトプラスマン⁽⁴⁾ノ低格、即、體質不良、若クハリーブライヒ氏⁽⁵⁾ノ「減退セル生活性」トナス方、却テ適切ナラズヤト論ゼリ。コレ等ノ説、各、ソノ見解ニ依リテ相異ナリ、且、皆許スニ完全無缺ヲ以テスルコト難シト雖モ、イツレニシテモ、要ハ「素因」ハ敢テ空漠ノ概念ニアラス、實ニ身體組織細胞ノ性質ニ基ツケルモノナルヲイフコト明ナリ。

吾人ハ今、素因ノ總括的理論ニ餘リニ深く進入スルコトヲヤメ、個個ノ重要ノ實際的要件ニツキテ、コノ素因ノ存在ト意義トヲ説クベシ。吾人ハ茲ニ「疾病素因」ヲ語ヲ用フルモ本篇ニ於テハ前章ニモ特記シタルガゴトク、必シモ、狹義ニ於ケル「疾病」ニ就テノミナラズ、又、汎ク病的状態ニ互テソノ原因ヲ論ズルモノナレバ、今「素因」ヲ説ク場合モ亦、コレニ準ゼリ。

二 動物種類並二人種ニ基ツケル疾病素因

先、生物界中、自然的區別アルモノニ就テ、疾病發生ノ素因ガ又、自然ニ差異アルコトヲ示サン。同様ナル外的要約ノ下ニ在リナガラ、動物ノ種類ノ相異ナルニヨリテ、ソノ病的現象ニ多大ノ差異ヲ見ルコト稀ナラズ。コレ多クハ遺傳性ニソノ動物身體ニ固著セルトコロノ性質ノ相異ナルニ因ルナリ。コレヲ原因學上ヨリ見テ、動物種類ニ於ケル『疾病素因』ノ差異ニ因ルトイフコトヲ得ベシ。吾人ハ冷血動物ト、温血動物トノ間ニ、傳染病原體ニ對スルトコロノ感受性ニ差異アルコトヲ知ル。ダトヘバ、温血動物ト冷血動物トハ、相互間ニ疾病ヲ相感染セシムルコトナク、温血動物、殊ニ哺乳動物間ニ於テモ、ソノ種類ノ相違ニヨリテ、自然的發病ノ狀ニ大差アリ。牛ハ牛疫ニ罹ルモノ多ク、レドモ、人類ハコレニ罹カラズ。人類ニハ麻疹、猩紅熱多ク、レドモ、他ノ動物ニハコレアルコト無ク、ソノ他、人類ノ窒扶斯微毒ノゴトキ、犬ノ犬瘟熱ノ如キ、動物種類ニヨリテ、疾病種類モ亦、限ラレタルヤノ觀アリ。又動物試験的ニ證明セラレタルトコロノ所謂自然免疫性ノ例ハ亦、甚、多シ。ダトヘバ、馬ト牛トハ、其ニ破傷風毒ヲ感受スルノ性アレドモ、實布埜里ニアリテハ兩者著明ノ差異ヲ示シ、馬ガ甚、感受性ナルニ反シテ、牛ハ感受性ヲ有セズトイフガゴトシ。コノ所謂自然免疫ハ、必シモ常ニ絶對的ナラザルモノアリト雖、ソノ外來『害物』ニ對シテ現ハルルトコロノ發病ノ差異ハ各者ノ身體組織ノ性質ニ基ツクモノニシテ、即、素因ノ不同ニ歸スベキナリ。斯ノ如キ關係ハ時ニ甚、特殊ニシテ、外來ノ『害物』ヲ病原原々微體ガ相近似性ナルニ拘ハラズ、動物ノ種類ニヨリテノ差別ノ甚、顯著ナルコトアリ。ダトヘバ、コッポボ氏⁽¹⁾、バウムガルテン氏⁽²⁾等ノ研究ニ據レバ、人結核菌ト牛結核菌トニ對スルトコロノ感受性ハ動物ニヨリテ相異ナリ、牛・家兔・モルモットハ、牛結核菌ニ對シテ、同様ニ高度ノ感受性ヲ有スルモ、ソノ中ニテ牛・家兔ハ人結核菌ニ對シテハ、感受性無ク、或ハ甚、僅微ナリ、コレニ反シ

(1) R. Koch
(2) Baumgarten

(x) Kitt

テモルモットハ、治テク人ノ知ルゴトク、コノ人結核菌ニ對シテ感受性强シ。又斯ノ如キ素因ノ差異ハ動物種屬ノ相近親ナルモノノ間ニモ認メラル。ダトヘバ、同一鼠屬ノモノニシテ、野稜甘口鼠^{フェルドマウス}及ビキツト氏^ガ證明シタルガゴトク森林甘口鼠ハ、馬鼻疽ニ罹リ易キニ反シ、家鼠及ビ白甘口鼠ハ通例コノ病ニ罹ラザルガゴトキ、コレナリ。又、脾脫疽菌ヲ皮下ニ移植スルニ、甘口鼠ハ非常ニ強度ノ感受性ヲ現ハシ、鼠ハコレニ比シテ概シテ感受性甚、鈍ク、而カモソノ免疫性ハ鼠ノ種類ニヨリテ程度相異ナレリト云フ。

化學的毒物モ亦動物種類ノ差異ニヨリテ發病ノ關係ヲ異ニスルモノ少カラズ。即、上述細菌毒物ノ外ニ、又純粹化學的毒物ニ於テモ然リトス。今唯一二ノ例ヲ擧ケレバ、ベドンナ葉^{ベドンナ}ヲ家兔ガ喰フモ危害無キニ反シ、人ハソノ中ニ含蓄サルルトコロノアトロピンノタメニ直ニ中毒ヲ招ク。又カンタリゲン^{カンタリゲン}ノ如キ、他ノ動物ニアリテハ猛烈ナル皮膚刺戟藥ナルモ、蛙ノ組織ハコレニ對シテ不感應性ナリ。又猶ハモルモットニ比シテ四十倍モ多ク、蛇毒ニ堪フルコトヲ得ベシト云フ。

斯ノ如ク、大部分動物試験的ニ査究セラレタル事項ノ外ニ、諸種動物ノ自然的罹病ニ對スル素因關係ニ就テ、尙、他種ノ例ヲ擧ゲン、ソハ各種動物ニ於ケル腫瘍ノ發生ノコトナリ。全動物界ヲ觀テ、腫瘍殊ニ悪性腫瘍ヲ發生セシムルトコロノ素因ガ、人類ニ於テ多キコトハ疑フベカラズ。而シテコノ素因ハ、冷血及ビ温血動物兩界ノ間ニ大差アリ、冷血動物界ニモ腫瘍無キニアラズト雖モ、人類ニ於ケル眞、正腫瘍、殊ニ悪性腫瘍ト同一視スベキモノノ發現ハ今日ノトコロ甚、稀有ナリトイハザルベカラズ。但、從前ハ動物ノ腫瘍ヲ以テ、概シテ甚、珍奇ノモノトセシガ、檢索ノ進ムニ從ヒテ、ソノ必シモ然ラザルヲ悟リ、人類ノ悪性腫瘍ト同一列ニ置クベキモノモ、動物界ニ於テ決シテ稀有トスルニ足ラザルコトヲ知ルニ至レリ。然レドモ、腫瘍發生ノ素因ハ、動物ノ種類ニヨリ相異ナレト同時ニ、若干ノ腫瘍種類ハ好テ一定ノ動物ヲ選ンデ發生シ、殆、コノ種ノ動物ノ特異性トイフコトヲ得ベキモノアリ。ダトヘバモルモット・家兔ニハ腫瘍形成甚、稀有ナリ。又犬ハ他ノ家

- (1) Sticker
- (2) Species
- (3) Varietas
- (4) Rasse

(5) Rasse

- (6) Bourcy
- (7) Aurillac
- (8) Guéret
- (9) Guingamp

(10) Morlaix

畜ニ比シテ癌多キモ、人類ニテ多キ胃癌ヲ發生スルコト甚、稀ナリ。スチツケル氏⁽¹⁾ノ統計ニ據レバ、三四一例ノ犬乳癌ニ對シテ胃癌ハ唯一例ナリ。馬ニテ特ニ黑色腫ノ多キコトハ亦、屢、記載サレタリ。又甘口鼠ハ泰西ノ報告ニ據レバ比較的ニ自發性腫瘍ヲ多ク生ジ、コレ主トシテ癌腫性ナルニ反シテ、甘口鼠ト近似ナル鼠⁽²⁾ニテハ主トシテ肉腫性ノモノナリ。斯ノ如ク、動物種類ニヨリテ癌病素因ニ差別アリ時ニハ殆、特殊性トスベキモノアルコト、復、疑ノ挾ムベキモノ無シ。

同一種類⁽³⁾ノ動物中ニ於テモ、ソノ種族⁽⁴⁾ノ變種⁽⁵⁾人ニ於テハ人種⁽⁶⁾ヲ異ニスルニヨリ、假令ヒ一時性ナルニモセヨ、往往疾病素因ノ關係ニ差異アルコトハ、亦實驗腫瘍學ノ明示スルコトナリ。同一種ナル白甘口鼠ニシテ、ソノ出生ノ本源ヲ異ニセルガタメニ、甘口鼠癌移植ノ成績相同ジカラザルコトハ、夙ニ泰西ニ於テ經驗セラレタルコトニシテ、我邦ニ於ケル志賀氏ノ報告ニ據レバ、英國產ノ甘口鼠癌ハ、コレヲ日本種甘口鼠ニ移植シ難キモ、日本產ノ甘口鼠癌ハ日本種甘口鼠ニ移植スルコト容易ナリト云フガゴトキ、即、コレナリ。

種族⁽⁷⁾ニヨリテ癌病素因相異ナルコトハ、他ノ傳染病ニ於テモコレヲ認ムルニ難カラズ。泰西ノ成書ニコレヲ記スルモノモ少カラズ。プーシ⁽⁸⁾氏ノ記スルコトニ據レバ、佛國內ニテオーリ⁽⁹⁾ラツク⁽¹⁰⁾及ビゲレ⁽¹¹⁾エ⁽¹²⁾產ノ馬ハゲエン⁽¹³⁾ガーン⁽¹⁴⁾及ビモル⁽¹⁵⁾産ノ馬ニ比シテ、馬鼻疽ニ罹ルコト多シト。又、阿弗利加⁽¹⁶⁾アルゼリア⁽¹⁷⁾種ノ羊ハ歐洲大陸ノ羊ニ比シテ脾脫疽及ビ痘瘡ニ對スル感受性少シト云フガゴトキ諸書ニ記載セラレタル事實ナリ。又、我邦ノ北里氏ハ和牛ノ洋牛ニ比シテ牛結核菌ニ對スル感受性少キコトヲ謂ヘリ。蓋、コレ等種族ニ依ルトコロノ素因關係ハ敢テ必シモ絶對的ノ差別トスルコト能ハザルベク、又、コノ差異ヲ惹起スルコトノ原因ガ寧、食餌生活狀態等ニ於テ存スルコトアリテ、必シモ嚴ニ種族⁽¹⁸⁾ニ固著セル特殊性ニヨルモノニアラザルベシ。然レドモ、コレ亦、甚、注目ヲ要スルコトノ現象ニシテ、實際的問題

- (1) Das gelbe Fieber
- (2) Schlafkrankhit
- (3) F. G. Clemow

タル人類中ノ種族、即、人種ノ疾病素因ヲ論ズル上ニ、重要ノ比較材料ヲ供給スルモノナリ。

眞ニ「人種」ニ固著セルトコロノ素因ノ異同ヲ曰フニハ、頗、慎重ノ考察ヲ要ス。然レドモ古來人種ノ別ニ因レル疾病素因ノ異同ヲ説キタルモノ少カラズ、而カモ、人種ニ依リテ疾病或ハ病的現象發生ノ狀ニ往往大差ノ認メラルルハ掩フベキニアラズ。コノ場合ニモ、傳染病ハ多ク人ノ注目ヲ惹ケリ。黑色人種ハ白色人種ニ比シテ黃熱⁽¹⁾ニ罹ルコト少ク、睡眠病⁽²⁾ハコレニ反シテ主ニ黑人ヲ侵ス(尙、後文ヲ見ヨ)ト云フ。又、マテリヤニ關シテモ一時人種ノ差別ノ唱ヘラレタルコトアリ。結核症ニツキテモ人種ノ素因ノ強弱ヲ説ケルモノアリ。ソノ他、コレヲ腫瘍ニ徵スルニ、未、精確周到ノ報告無ク、ソノ人種ノ關係ノ明瞭ナラザルモノ多キモ、今クレモウ⁽³⁾氏ガ疾病地理學(千九百二年)ニ記載スルコトニ據レバ、癌性疾病ハ英、佛、蘭、瑞典、獨逸、北米合衆國等ニテ比較的普通ニ見ルトコロナリト雖モ、アイスランド、波斯、アラビヤ、亞弗利加等ニテハ稀有ナルカ、或ハ不明ナリト云フ。更ニ本邦ノ疾病ニ就テコレヲ見ルニ、亦多少特有ノ點アリ。西洋ニテハ佝僂病ノ多キニ反シ、本邦ニテハコノ病ハ稀ナリ。痛風ハ英國等ニ多クシテ我邦ニハ稀ナリ。普汎性澱粉樣變性ハ西洋ニ於テ普通ニ見ル病變ナルニ反シ、我邦ニテハ然カク廣汎性ノモノハ至テ少ク、多クハ唯僅微ノ病竈ヲナスニ止マリ、若クハ澱粉樣反應ヲ呈セザルトコロノ硝子樣變化ナリ。ソノ他、我邦ニハ脚氣多ク、又所謂乳兒脚氣ノ如キモ西洋人種ニ對スルノ特色タルコトヲ失ハズ。然レドモ、コノ發病ノ差異ヲ以テ、直ニ悉ク「人種」ノ素因⁽⁴⁾ヲ差別ノミニ歸スベカラズ。人種ノ素因トイヘバ、眞ニソノ人種ニ特有ナル身體ノ狀態、性質ニ由來セルモノヲ指スベシ。而シテ發病狀況ニ異同ヲ生ゼシムルニハ素因ノ差別ノ外、尙、幾多ノ要約アルコトヲ知ラザルベカラズ。且、人種ニ依ルトコロノ罹病ノ異同ト云フコトハ頗、調査、檢索

ノ精粗如何ニ關シテ大差ヲ來タスモノナレバ、コノ調査、檢索ノ方法及ビ程度ヲ異ニスルコトノ諸邦土、及ビ諸時代ヲ同一視シテ論ヲ立ツルコトアタハズ、我邦ニハ嘗テ佝僂病絶無ナリト思ハレタリ。然レドモ、精檢ノ結果必シモ然ラザルコト

(1) Baelz

明ニナレリ。又ベルツ氏⁽¹⁾ハ嘗テ歐洲ニ於テ報告シテ曰ク「歐人ニ比シテ、日本人ニハ疑モ無ク癌腫稀少ナリ」ト。然レドモ、今日吾人が見ルトコロヲ以テスレバ、現在、我國人ニ、殊ニ惡性腫瘍僅少ナリト斷言スルコトヲ得ザルガゴトシ。狼瘡ノゴトキモ、亦然リトス。斯クノ如ク、調査方法ニ關係セル異同ノ外ニ、人種ニツキテ最、顧慮スベキコトハ、ソノ人種ガ受クルトコロノ外界境遇ニヨリテ「害物」遭遇ノ狀勢ヲ異ニスルコトナリ。即、氣候・生活狀態・習慣・文化ノ程度等ノ差異ニヨリテ、外來「害物」ニ遭遇スルノ頻度ヲ異ニシ、若クハコレ等ノ境遇ガ「人種」的ニアラザル普汎性身體性質ニ影響ヲ及ボシ、素因ノ異同ハ寧、コノ普汎性ナル身體性質如何ニアルコトアリ。サレバ、所謂「人種」的素因「ト稱セラルルモノ」中ニテ、眞ニ素因トスベキモノノ領域ハ甚、僅少ナルベシト思ハル。タトヘバ、結核症ハ、白人ヨリモ黒人ノ方ガ感受性強ク、罹病ノ割合モ、後者ニ多シトハ諸家ノ記載セルトコロナリ。然レドモ、コノ際、寧、生活競争場裡ニ立テル、兩人種ノ境遇ニ主因ヲ求ムルモノナルベク、殊ニ熱帶地方ノ黒人ガ、歐洲ニ來リ棲メルモノニ於テコノ事多キガゴトキハソノ理、最、明白ナリ。又、明治四十二・四年滿洲ニ肺ベスト猛烈ニ流行シタル際、主トシテ清國勞働者コレニ罹リ、本邦人ハ多ク免カレタルガゴトキ、ソノ差異ノ理由ハ固ヨリ兩國人ノ生活狀態ニ歸スベクシテ、人種的素因ニ言ヒ及ベキニアラズ。西洋ニ於テモ猶太人種ハ比較的、結核症ニ罹リ難ク、コレニ反シテ變性的の神經及ビ血管疾病ヲ患フルノ傾向強シト云フノ記載ヲ見ル、而カモ、ソノ主要ノ原因的要約ハ、恐ラクハ同人種ノ生活狀態ニ歸スベキモノニシテ、果シテ眞正ノ人種素因ニ據ルモノナリヤハ疑ハシ。他面ニアリテ、人種素因ガ、爾他ノ特殊事情ノタメニ誤認セラルルコトアリ。タトヘバ、ミーギチア住民ニマテリアニ對スル疾病素因無キヲ觀アルハ、ソノ實、住民ガ已ニ小兒期ニコノ病ニ罹レルガタメニ贏チ得タルトコロノ後天性免疫ノ存在ニ外ナラズト云フ（コツボ氏⁽²⁾等）又上文ニ引ケル黃熱ニテモ、嘗テ黒人ノ先天性免疫ヲ説カレタルコトアレドモ、近時ノ研究ハソノ然ラザルコトヲ示シ、且、ソノ免疫性ハ罹病ニヨリテ獲タルモノナルコトヲ知ルニ至レリ。蓋、傳染病ニ關スルトコ

(2) R. Koch

ロノ「人種素因」問題ハ、寧「害物」遭遇ノ如何ニ歸著セシムルコト多カルベシ。又、我邦ノ脚氣・乳兒脚氣及ビ佝僂病等ニ於テモ、ソノ疾病發生ノ主ナル要約ハ恐ラクハ、食餌及ビソノ他ノ生活狀態ニアルベク、果シテ如何ホドマデ、眞ノ人種素因ニ基ツクモノアリヤハ未、確ナラズ。

コレヲ諸家ガ食餌及ビ生活狀態ノ變動ニヨリテ諸種試驗動物ヲ罹病セシメ得タル經驗（タトヘバハンキン氏⁽¹⁾ガ食餌ノ相違ニヨリテ、^{ラツテ}鼠初生兒ノ脾脫疽ニ罹ル關係ヲ異ニセシメタルガゴトキ。又ハンゼマン氏⁽²⁾ガ犬ノ佝僂病狀症ヲ發コス要約ヲ「飼養」ニ歸セシムルガゴトキニ徵スルモ、ソノ一端ヲ窺フニ足ルベシ。

(1) Hankin
(2) v. Hansemann

要スルニ、人種素因ト稱セラルルモノノ中ニテ、ソノ嚴正ニ然カルモノハ蓋、意外ニ少ナルベク、人類疾病ノ素因ハ人種ニ依レル差別ヨリモ、ソノ共通・平等ノ點ニ於テ遙ニ勝レリト謂フベシ。

然レドモ、吾人ハ尙、素因ノ人種的差別ヲバ全然無視スルコトヲ欲セズ。蓋、「人種」ノ意義ハ必シモ嚴密ナルコト能ハズ、又、人種ニ存スルトコロノ身體ノ狀態・性質ハ必シモ、全然移動性ニアラズト謂フコト能ハズ、又、人種ノ境遇ノ特殊ナルニヨリテ身體ノ狀態・性質ニ若干ノ影響ヲ及ボシ、コレガ疾病發生ニ對シテ素因の要件ヲナスニ至ルコトハ否認スル能ハザルナリ。コノ點ニツキテ、「澱粉樣變性」ニ關スルコトノゴトキハ、前述ノモノニ比スレバ、尙、人種素因ノ領域ニ留メ得ルモノアリト謂フベシ。何者、東西人種ヲ通ジ、澱粉樣變性ヲ惹起セシムルトコロノ原發性疾病ガ同様ナルニモ拘ハラズ、コノ病變ノ程度マデソノ人ノ現在ノ食物ノ差異ガ、直接ノ關係ヲ有スルヤハ尙、精究ヲ要スルノ點ナリ。蓋、人種間ニ解剖學的・人類學的區別アルコトハ（勿論、絶對的ノ區別ニハアラザルモ）亦、争フベカラズ。當ニ、外觀外表及ビ骨骼ニ人種間ノ差別アリテ見ハルルノミナラズ、筋肉等、軟組織ノ上ニモ（足立氏研究ニ據ル）ソノ差異ヲ見ルベク、更ニ又、個個ノ生物學

(1) Marchoux et Simond

化學的關係ニモ(タトヘバ)前述ノ澱粉樣變性、尙優病性病變ノゴトキ、又、我邦ニテ糖尿病患者數ハ敢テ西洋ニ比シテ大差無キニ拘ハラズ、アチエト醋酸尿ノ甚、少キガゴトキ)ソノ差別ヲ見ルコトアリ。而シテ後者ノゴトキハ、固ヨリ食餌、ソノ他ノ生活狀態ト密接ノ關係アルベシト雖モ、コレ等ヲ總括シテ考フレバ、固ヨリ絶對的ニハアラザルニセヨ、若干ノ程度ニ於テ、亦、疾病ニ對スルコロノ人種的素因ヲ認ムルコトハ蓋、不可能ニアラザルベシ。而シテコノ際、疾病發現ノ人種的異同ヲ來タセル個個ノ要件ヲ闡明スルコトハ、コレ病因學ノ進歩ヲ圖ル所以ナリ。

上文ニ引用セル黃熱及ヒ睡眠病ノ人種的差別ノゴトキハ本ト「害物」遭遇ノ如何ニ基ツクコトナレドモ、ソノ間、亦、多少「人種」的性質ニ關係スルコロナキニアラズ。白人種ヲ侵ストコロノ黃熱、病原媒介者タル刺蚊(ステゴミイア、カロプス)ハ黑人ノ皮膚ヨリモ好ミテ白人ノ皮膚ヲ侵シ、且、概シテ血液多キ皮膚ヲ好ムト云フ。蓋、皮膚ノ色鮮白ナルモノ程罹患ノ度多シト云フ。(マルシウ及ヒシモン氏)コレニ反シテ、黑人ノ睡眠病病原ハ微體タルトリパノヅマ、ガムビヒンゼノ侵入ヲ媒介スルコロノ刺蠅(グロツミナバルパリス)ハ好ミテ黑色人種ノ皮膚ヲ襲フト云フ。コレ即、唯「害物」遭遇ノ多少ト云フニ止マレドモ、コノ際、各人種ニ存スルコロノ身體ノ性質、狀態ガ「害物」遭遇ヲ多少ニスルノ點ハ亦、看過スベキニアラズ。

三 男女及ビ年齢ニ基ツクコロノ疾病素因

男女ノ性ニ依リテ罹病ニ異同アリ。但、此際眞ニ男女ノ性ニ固有セル身體ノ狀態、性質ヲ基礎トスルノ素因ト、然ラザルモノトハ、コレヲ相判別セザルベカラズ。婦人ニ固有ナル生殖器ノ構造、竝ニ、ソノ官能、及ビコレト關係セル諸生理的機能ガ、男子ニ比シテ、頗、相異ナル疾病素因ヲナスコトハ明白ナリ。タトヘバ、子宮、卵巢、乳腺等ノ特殊ノ解剖的關係ノ外、生殖細胞ノ定期的成熟、月經、妊娠、分娩、產褥、授乳、經閉等ハ直接ニ疾病素因ノ基礎ヲナスモノナリ。子宮ノ

(1) Locus minor resistentiae

筋腫、癌腫、卵巢囊腫ガ婦人ニ限ラレ、攝護腺癌ガ男子ニノミ存スルガゴトキ例ハ言フマデモ無キコトナガラ、兩性ヲ通ジテ、乳腺ノ癌腫ガ、殆、婦人ニ特有ニシテ泰西ニ本邦、共ニ男子ノ乳腺癌ニ罹ルノ數ノ甚、僅少ナルハ、性ニ固著セル乳腺ノ解剖的及ビ生理的關係ニ基ツキテ、疾病素因ニ差アルコトヲ示スモノナリ。ソノ他、女子ハ、月經期、妊娠期、產褥期等ニ於テ、往往諸神經性疾患、循環障礙ノ發生ヲ容易ナラシムルガゴトキ、又ハ妊娠期ニテ腎臟實質ノ障礙ヲ惹起シ、產褥期ニテ子宮内面ノ生理的瘡面ヨリ病原ハ微體ノ侵入、固著ヲ容易ナラシメ、或ハ妊娠期、產褥期ニ於テ「害物」ノ侵入又ハ跋扈ニ對スル身體ノ抵抗力減退シ、所謂「抵抗減少地」ヲ作りテ、他ノ疾病ニ對スルノ素因ヲナスコトアリ、タトヘバ、結核症ノ發現、或ハ増悪ヲ促ガサシムルニ至ル。又、妊娠時ニハ骨質ノ物質代謝ニ異變ヲ起シ易クシテ、タメニ骨軟化症ヲ生ズルコトアリ。

更ニ、身體性質ノ全體ヨリ考フルモ、男女ニ依リ多少ノ疾病素因ノ相異ナルヲ見ルベシ。バセドウ氏病・ヒステリ！又、泰西ニテ稱セラルトコロノ萎黃病ガ婦人ニ多キコト等ハコレヲ事實ト認メテ可ナリ。

ソノ他、泰西ノ成書ニ記載セラレタルコロヲ見ルニ、痛風、脊髓癆、腎石症、肝硬變症、ヘルニア、動脈硬化症、胃癌等ハ男子ニ多ク、胃潰瘍、膽石症、畸形性慢性癱瘓質斯、遊走腎等ハ女子ニ多シト云ヘリ。コノ場合ニアリテハ、先、諸人種ヲ通ジテ、男女ガ常ニ同一ノ傾向ヲ呈スルヤ否ヤヲ調査シ、而シテソノ眞ニ男女ノ體質ニ基ツケル素因ニ依リテ然ルカ、將タ「害物」遭遇ノ關係ヲ唯男女ノ生活狀態ニヨリテ異ナラシムルガタメニ然ルカラ識別スルコトヲ要ス。タトヘバ、胃潰瘍ハ泰西ニテ、英、獨、佛ノ諸家ノ統計ハ概、相一致シテ、女子ニ多キコトヲ示セドモ、我邦ニ於ケル臨牀的及ビ病理解剖的經驗ハ共ニコレト正反對ヲ示セリ(山極氏病理總論講義、及ビ湯川氏)。サレバ唯コレノミニ據ルモ、女子ト胃潰瘍發生トノ關係ガ決シテ性ニ基ツケル素因ニ根據スト謂フコト能ハザルハ明ナリ。又、婦人ニ膽石多シトイフハ、西洋ニテ多クコル

セツトニ因レル季肋部壓迫絞榨ノタメナリト稱セラル。果シテ然ラバ、コレ眞ニ性ノ素因ニ基ツケルモノニハアラザルナリ。吾人ノ我邦ニ於ケル解剖的經驗ハ、同ジク膽石ノ婦人ニ多キコトヲ示(而カモ、西洋ニ比シテ少シ)セドモ、ソノ果シテ西洋ニ於ケルガゴトク、女帶等ニ因レル壓迫絞榨ニ由來セルヤハ未、確答セラレズ、斯ノ如ク、病的現象ノ男女の差別ニ依リテ直チニ、性ノ素因ヲ謂フコトハ頗、困難ナル場合少カラズ、而カモ、實際上寧、唯男女ノ生活状態ノ差異ニソノ眞因ヲ負ハシムベキモノ多シ。タトヘバ、我國ノ脚氣病ハ女ヨリモ男ニ多シ。コレ主トシテ男子ノ生活状態ガ食、住、勞働等)ノ疾病ヲ發起セシムルニ適スルガタメナルベシ。胃癌ガ男ニ多キコトハ我邦ニアリテモ西洋ニ於ケルニ同ジ。吾人ハ未、胃癌ノ原因ヲ審ニセ、ト雖モ、少クトモコノ男女差異ヲ來ス所以ノ一部分ハコレヲ男子ノ生活状態(タトヘバ、飲酒、食餌、暴食等ノ如キ)ニ歸スベキモノニシテ、未、必シモ性ノ素因ニヨルモノトミ謂フコト能ハズ。ソノ他、男子ハ屢、酒害ヲ受ケ又、花柳病傳染ノ機會モ婦人ニ比シテ多シ。從テ直接、間接コレト發生の關係ヲ存スル疾病ガ特ニ男子ニ頻發スルコトハ怪ムニ足ラザルコトナリ。脊髓癆、麻痺狂、大動脈瘤ノ男子ニ多キ所以ハソノ疾病ノ發生ガ、男子ノ微毒感染ト關係アルガタメナルコトハ、夙ニ學者ノ注意セルトコロナリ。ソノ他、男子ノ職業、習慣等ガ各コレニ從テ『害物』遭遇ノ狀ヲ異ナラシメ、唯コノ『害物』遭遇ノ相違ノタメニ罹病ニ男女の差別ヲ示スコトアルハ明白ノ事實ナリ。而カモ、コノ『害物』遭遇何如ニノミヨルモノハ、コレヲ眞個ノ性ノ素因ト謂フコト能ハザルナリ。

然レドモ、男女身體ニハ自然的、解剖的、生理的、心理的ニ若干ノ別アリ。サレバ生理的生活機能ノ變調タル疾病ノ發生ニ對シ、實ニ眞個ノ性ニ依レル素因アルコトモ亦、コレヲ認メザルベカラズ。

年。齡。ニ依レル共通ノ疾病素因アルコトモ亦、疑フベカラズ。蓋、人ノ一生涯ヲ通ツテ、生活時期ニ應ジテ身體組織ノ發

育榮養状態及ビ機能働作用並ニ心理作用ニ差異ヲ來タシ、又、時期ニ應ジテ特殊ノ臟器ニ特殊ノ生理的變化ヲ見ハスモノアリ。タトヘバ、青年期ニ於ケル生殖器ノ發達、並ニ生殖作用、及ビ老年期ニ於ケル婦人經閉ノゴトキ、コレナリ。而シテコレ等ノコトヲ基礎トセル疾病素因ハ即、年齢ニ依ルトコロノ素因ナリ。シカレドモコノ場合ニ於テモ眞ニ年齢ニ依レル身體本來ノ状態、性質ニ基ツケル疾病素因ト、單ニ『害物』遭遇ニ過ギザルコトヲ常ニ相區別セザルベカラズ。

便宜上、人ノ生涯ヲ區分シテ、胎兒期、初生兒期、哺乳時期、幼年期、少年期、青年期、壯年期、初老期、老人期等ニ分ツ。生活時期ニヨリテ、生活状態ニ差異アルハ自然ノ勢ナリ、サレバ唯單ニコノ生活状態ニ基ツキテ一定ノ『害物』ニ遭遇スル機會ノ殊ニ多キコトアリ、又、コレト共ニ身體組織ノ適應性、或ハ防禦作用ノ貧弱ナルガタメニ疾病ノ發生ヲ故ラニ容易ナラシムルモノアリ。又、時期ニ依リテ相異なる身體組織ノ發育及ビ榮養ノ状態何如ハ、病變發生ノ部位及ビ狀況ニ影響ヲ及ボスモノアリ。而シテ實際ノ場合ニテハ、種種ノ要件錯雜紛糾シテ存シ、個個ノ例ニ於テ果シテ『害物』遭遇ガ主ナル乎、若クハ眞ノ身體素因ガ主ナルカラ判別スルニ難キモノモ亦、少ナカラザルベシ。

胎兒ガ母體ヨリノ影響ヲ、殊ニ受ケヤスキ事情ノ下ニ立チ、初生兒ガ特殊ノ生活要約ノ下ニアルガタメニ特殊ノ疾患ヲ起シ易キガゴトキハ言フ俟タズ。概シテ、小兒ノ生活状態ガ、殊ニ『害物』ヲ遭遇ヲ容易ナラシムルコトアルハ、最、注目ニ値スルトコロナリ。哺乳時期ニ全身ノ榮養不良及ビ胃腸症狀ヲ起シ易キハ我邦、西洋共ニ然リ。コレ一ハ榮養物供給ニ關シテ、種種ノ故障ヲ起シ易キニ因ル(人工榮養等、即、外的『害物』)、然レドモ、又一ハ消化器並ビニ全身組織ノ適應力僅微ナルコトガ、ソノ素因ヲナスニ與ツテ力アルモノト謂フベシ。幼年期、少年期ニハ、身體組織發育ガ活潑ニ行ハルモノニシテ、亦、特ニコレト直接關係アル疾患ヲ生ジ易シ、尙、佝僂病ノゴトキハソノ好適例ナリ。ソノ他、コノ時期ニ於テ淋巴組織ニ疾病ヲ來タシ易キガゴトキハ、亦、時期ニ應ズル臟器組織ノ素因ニヨルモノト謂フベシ。又、粘膜炎侵サレ易クシテ、鼻加答

兒・中耳炎又ハ氣道ノ加答兒ヲ起スコトモ亦、概シテ幼少ノ時期ニ多シ。所謂「腺病」ノ發現モ主トシテコノ時期ニアリ。ソノ他、一定ノ疾患タトヘバ、一定ノ神經及ビ筋肉ノ疾患(タトヘバ、搐搦症・小兒麻痺・小兒進行性筋削瘦・假性筋肥大等)及ビ腦膜炎等ハ、幼年期若クハ少年期ニ限リテ多キコトアリ。又、同一病原性疾患ニシテ、ソノ主ナル病竈及ビ臨牀的病狀ガ年齡ニヨリテ若干ノ相違ヲ示スコトアリ。タトヘバ、結核症ガ小兒ニ於テ屢、原發竈ヲ腸壁ニ見ハスコトハ、吾人ノ我邦ニ於ケル解剖的經驗ニ據ルモ、コレヲ斷言スルニ憚カラズ。又、小兒ニテ骨關節結核、淋巴腺結核ノ比較的ニ多キガゴトキモコレヲ生活時期ニ關セル臟器素因ニ歸シテ誤無シト信ゼラル。又、蛔蟲ハイツレノ年齡ノモノニモ寄生スレドモ、小兒ニ於テ特ニ往往危害ヲ呈シ。日本住血吸蟲病ハ少年期・青年期ノモノニ於テ身體發育障礙ノ病症ヲ最顯著ニ示セリ。么微寄生體性ノ疾病ニシテ、特ニ小兒ヲ侵シ、加之、殆、小兒ニ限レルガ如キ觀ヲ呈セルモノアリ。實布埵里・麻疹・痘瘡・百日咳・猩紅熱・我邦ノ疫痢等コレナリ。然レドモ、コレハ注意ヲ要スルコトニシテ、ソノ中ニハ小兒期ニ罹リタル傳染病ガ、ソノ身體ニ免疫性ヲ附與シ、コレガタメニ、後年ニ罹病スルコト無キモノアリ。サレバ斯ルモノヲ以テ、直ニ年齡ニ依レル疾病素因ヲ論ズベカラズ。麻疹・猩紅熱・痘瘡ノゴトキハ即、コレナリ。コレヲ流行病ニ徵スルニ、麻疹ノ如キ始テソノ流行ヲ來シタル地ニ於テ、罹病ハ敢テ小兒ニ限リタルニアラズ、壯者亦、同様ニコレヲ患ヒタル事實アリ。(我國一條天皇長徳四年ニ麻疹大ニ流行シタル際ニハ貴賤、老少、縉素男女、一モノ瘡ヲ免カレタルモノ無シトノ記事アリ。扶桑略記。富士川氏『日本疾病史』ニ據ル。泰西ノ學者モ亦、同様ノコトヲ說ケリ)。コノ際ニ於ケル疾病發生ノ理ハソノ主ナル者ヲ「害物」遭遇如何ト、ソノ結果トニ歸セザルベカラズ。然レドモ若干ノ身體組織、タトヘバ、皮膚・粘膜等ニ於テ、年齡ニ關セル素因の要件存スルコトヲ全ク閑却スベカラズ、コハ實扶埵里ノ例ニ就テ見ルベシ。實布埵里ハ上述諸傳染病ノゴトク生涯ノ長時ニ互ル免疫性ヲ與フルモノナラズ、而カモ、コレ大人ニハ稀ニシテ小兒ニ多ク、又、小兒ニテモ三ヶ月

以內ノモノコレニ罹ルコト稀ナリ。斯ノ如キハ、年齡ニ關セル身體組織ノ素因の事項、タトヘバ、小兒ノ咽頭組織ガ、他ニ比シテ感受性ニ富メルコトヲ想像スルニ難カラズ。又、初生兒期ニテハ麻疹・百日咳等ニ罹ルコト通例無シト云フ。年齡時期ニ應ジテ若干ノ素因の特殊性存スルコトノ可能ナルコトハ、殆、疑ヲ容レザルナリ。青年期ニ入りテ、身體ノ解剖的構造及ビ生理的働作漸ク成熟ニ近ヅキ、臟器殊ニ生殖器ノ特殊性漸ク發揮セラレントスルニ至リテ、コレト共ニ病的基質モ漸、顯著トナリ、或ハ終ニ疾病トシテ現ハルルニ至ル。又、コレヲ潜伏シタル疾病、或ハ一定ノ病的現象ガ、コノ身體發育ノ特殊時期ニ於テ始テ顯著トナリ、又ハ更ニ旺盛トナルコトアリ。タトヘバ、萎黃病・一定ノ腫瘍・一定ノ神經性疾患、肺結核病等ニコノ事アルヲ見ル。又、コノ時期ハ生殖器及ビソノ機能ノ發達ト共ニ、精神狀態ニモ影響ヲ及ボシ、男女ニ依レル疾病ノ差別モ益、顯著トナリ、且、各コレニ因ルトコロノ疾病ノ素因及ビ「害物」遭遇ノ狀態ヲ特異トスルニ至ル。又、我邦ノ脚氣ノ如キハ殊ニ青年期ニ於テ(若クハ青年期及ビ壯年期)最、罹病多シ。壯年期ニテハ諸種傳染病(タトヘバ、室扶斯・結核病・赤痢ノゴトキ)・精神病等多ク現ハル。蓋、ソノ理由ノ一ハ、コノ時期ニ於ケル生活狀態ニ依ル「害物」遭遇ノ多キニアレドモ、又體質及ビ其他ノ個人的素因ニヨルモノモアルベシ。初老期ヨリ老人期ニ互リテハ身體ノ榮養及ビ物質代謝狀態漸、變化シ、從テ罹病ノ狀ニモ影響ヲ及ボセリ。

何年ヲ以テ老人期ノ始メトスベキヤニツキテハ、固ヨリ明瞭ナル限界ヲ劃スベキモノニアラズ。個人性・人種國民性等ニヨリテ差異アリ。ナウニン氏⁽¹⁾獨逸ハ凡、六十五歲頃ヨリ始マルコトヲ記セリ。固ヨリ唯老人期トイフハ唯ソノ年齡ニ就テイフコトニシテ、必シモ所謂「老病」時期トイフ意ニハアラス。我邦ニテハ未、定説無シト雖モ、私見ニヨレバ還暦以後ハコレヲ老人期ニ入レテ差支ナシト考ヘラル。

脂肪症・結石症・糖尿病・慢性腎臟炎・血管硬化症・大動脈瘤・癌・腦出血・ソノ他諸種ノ所謂老人性枯瘦性疾患、タトヘバ、老人性枯瘦性肺氣腫・腦髓・心臟等諸臟ノ組織萎縮及ビ機能減退等ハ初老及ビ老人期ニ於テ殊ニ

屢、見ルトコロナリ。又、同一ノ疾病ニシテ、老人ナルガタメニ、ソノ發生及ビ經過ヲ異ニスルモノアリ、ダトヘバ、格魯布性肺炎ノ如キハ、臨牀家ノ言ニ據レバ寒冷等ノ有害影響ヲ蒙ルコト少ナキニ拘ハラズ、高年者ノコレニ侵サルコト少カラザルノミナラズ、肺ノ炎症浸潤ノ退散殊ニ緩慢ニシテ且、往往不完全ノコトアリ。且、コレガタメニ死スルノ割合モ高年ナルホド多シ(グリズルン氏⁽¹⁾統計ニ據ル。ナウニン氏ニ據ル)。又結核症ハ老人ニ於テ經過緩慢ニシテ比較的良性ナリ。蓋、老年期ニ於テ身體ノ解剖及ビ生理ニ多少ノ特異アルコトハ爭フベカラズ、サレバ、コレヲ基礎トスルトコロノ疾病素因ニ多少ノ特點アルハ亦、理解スルニ難カラズ。

生理的ニ『老』ガ果シテ何者ニシテ、又何故ニ『老』ガ現ハルルノ理ニ就テハ、吾人未、正確ニコレヲ知ラズ。メヒニコフ氏⁽²⁾ハ腦神經細胞ノゴトキ、貴重ノ組織細胞ガ、喰細胞ノタメニ滅ボサルコトヲ以テ老衰ノ基礎トナセドモ、コハ未、確實ノ根據ヲ有セザルモノトイフベシ。但、老人ニ於テ、腦神經細胞ニ幾多ノ退行性變化ノ見ハルルコトハ事實ニシテ樞要ノ變化ニハ相違ナシ、シカモ唯コレノミ特殊ノ價值ヲ置クベキモノナルヤハ疑ハシトス。老衰死ニ就キテ研究ヲ積メルミウルマン氏⁽³⁾ノゴトキ、又リツベルト氏⁽⁴⁾ノ如キハ共ニ、中樞神經細胞ノ變化ヲ以テ主要ナルモノトシ、天然ノ老衰死ハ腦死ナリトセリ。且、コノ際老衰ヲ以テ各個ノ有機體ニ始メヨリ固著セル性質ナリトノ結論ニ到着センカ、將タ寧、外來『害物』ガ作用シタル結果ニ重キヲ置カン乎、吾人ハココニモ精緻ノ知識ヲ缺クゴトヲ憾ミトス。サレバ、老人期ノ疾病素因ヲ論ズルニ當リテ、果シテ嚴正ニ生理的ニ『老人』ニ固著セル身體ノ狀態、性質ニ依レル素因ナリヤ、將タ『老人』ニ至ル迄長時日ヲ通シテ身體ニ働キタル諸種『害物』ノ作用ノ結果ガコレヲナスニ至リシヤ、コノ兩者ヲ判別スルハ決シテ容易ノ業ニアラズ。而シテ『老年期』ノ身體狀態、性質ヲ獲得セシムル上ニ於テ、コノ後者ノ與テ力アルコト、亦、頗、重キヲ置クベキナリ。且、臟器ノ絶エザル働作ハ假令ヒ外來ノ『害物』無シトモ、自ラ組織ノ衰弱ヲ來タシ解剖的構造ヲ變ジ又ソノ生理的機能ヲ

(3) Mühlmann (2) Metschnikoff (1) Grisolle
(4) Ribbert

減力セシムルハ理ノ親易キトコロニシテ、神經細胞ノ老人性變化、心筋・血管ノ變化等、コレニ歸セシムベキモノ尠少ニアラザルベク、亦、コレ直ニ老人期ニ於ケル疾病素因トナリ得ルモノナリ。蓋、組織ノ老人性變化ハ『老年期』ニ固著セルモノモアルベク、又多年ノ『害物』作用ニ由來スルモノモアルベク、一一ノ場合ニ當リテ綿密ノ考慮ヲ要スルトコロナリ。

四 身體ノ部位ニ基ツケル疾病素因

前掲諸項ノ外ニ、素因問題上尙、頗、注意ヲ要スルハ殊ニ直接個人ノ身體組織ニ固著セル要件ニシテ、同一身體内ニ在リテモ、各部位ニ依リテソノ疾病素因ニ差異アルヲ見ルベシ。今先、コレニ就テ述ベシ。

身體ヲ構成セル諸部分、即、各臟器系、各臟器、各組織、各細胞ハソノ自然ノ位置、解剖的構造、理化學的性質、生理的機能ヲ相異ニシ、又、相互間ノ聯絡關係ノ相同ツカラザルモノアリ。且、コレニ因リテ外來『害物』ニ遭遇スルコトノ多少、『害物』ヲ停留固著セシムルコトノ難易、竝ニコレニ對スルトコロノ防禦作用及ビ組織的反應ニ差異アリ。コレ疾病素因ガ身體部位ニヨリテ自ラ相違ヲ來タス所以ニシテ、原因學上緊要ノ事ニ屬ス。但、コレ等ハ他ノ事項ニ於ケルト齊シク必シモ一一ノ場合ニ於テ、常ニ明瞭ナルニアラズシテ、各身體部分ニ生理的ニ存スルトコロノ素因ノ本體ヲ一十分ニ闡明シ難キモノ決シテ少ナカラズ。

身體諸部分ノ位置、解剖的構造及ビ生理的機能ノ關係ニヨリ、殊ニ外來ノ『害物』ニ遭遇シ、若クハコレヲ停留セシメ易キモノ甚、多シ。皮膚及ビ消化器官ノ粘膜炎直接ニ外來『害物』ノ感作ヲ受ケテ容易ニ種種ノ損傷、腐蝕、焮衝等ヲ惹起スルノ例ハ枚擧ニ暇アラズ。皮膚ニ於ケル火傷、食道及ビ胃ノ化學的物質ニ因ルトコロノ腐蝕等コレナリ。而カモ、腐蝕作用ノゴトキハ粘膜炎ニ於テハ、皮膚ニ於ケルヨリモ激甚ナリ。又、身體内ニ於テモ『害物』侵入及ビ固著ニ對スルトコロノ

(1) Chauffard et Castaigne

部位の關係ノ明白ナルモノアリ。血液ヨリ出デテ尿ト共ニ排泄セラルトコロノ物質ニヨリテ腎臟ニ於テ、及ビ更ニコレヨリ膀胱ニ於テ、病變ヲ惹起スルガゴトキ、コレナリ。スベテ斯ノ如キ場合ニ於テハ、唯單ニ『害物』遭遇ノ如何ニ歸スベキモノモ亦、實ニ少ナカラズ。然レドモ、ソノ部分ノ構造及ビ機能ガコノ『害物』遭遇ヲ容易ナラシムルノミナラズ、ソノ固著及ビ侵害ヲ特ニ助長セシムルコトアリテ、コノ裡亦、眞ノ『素因』トシテ擧グルニ足ルモノ無キアラズ。腎ヨリ排泄セラルル有害物質ガ齊シク尿排泄道ヲ通過シナガラ、腎盂・輸尿管・膀胱ノ間ニ病變發生ノ部位ト性狀ト異ニスルガゴトキト、コレナリ。尙、コノ身體内ニ在リテ主ニ位置及ビ解剖的關係ヨリスル(但、構造・機能ト常ニ相關聯アルハ勿論ノコトナリ)『臟器素因』ニツキテ例證ヲ擧ゲレバ、一ニシテ足ラズ、タトヘバ、大腸アメーバ性赤痢ガ肝臟膿瘍ノ形成ヲ合併セシムルゴトキ、又ハ動物試驗的ニ脾臟ニ接種シタル結核菌ヲ肝臟ニ輸入セシムルガゴトキ(タトヘバ、シヨヅナル及ビカステイニ¹⁾氏¹⁾試驗ノゴトキ)、其他、蟲樣突起内ニ於テ屢、腸管内ノ器物ガ嵌入セラレテ炎症ヲ發シ易キガゴトキ、内臟ヨリ腸腔内ニ出デタル癌腫細胞ガ好テ直腸膀胱窩ニ沈降シ、ココニ固著シテ屢、轉移竈ヲ作ルガゴトキ、靜脈血流内ニ入りタル『病原體』若クハ『異物』ガ栓塞性態度ヲナスヤ、通例肺ニソノ栓子ヲ作り、ココニ病變ヲ惹起セシムルガゴトキ、又ハ動脈血流ニ入りタル么微寄生體ガ好テ脾臟ニテ抑留セラレ、淋巴道ノモノハ淋巴腺内ニ入り、各ソノ處ニ病變ヲ催起スルニ至ル。シカモノノ侵入物質如何ニ依リテ、コレ等臟器組織ニ現ハルトコロノ變化ハ固ヨリ同一様ニアラズ。

以上述べタルトコロハ、イツレカト謂ヘバ、位置若クハ位置及ビ解剖的關係ニヨレル『害物』遭遇ヲ根據トスルモノニシテ、尙、比較的單純ナルモ、身體部位ノ素因ヲ成立セシムル所以ハ決シテ斯ノ如キ簡單ノモノノミアラザルナリ。

位置ノ外ニ組織ノ精細ナル構造・生理的機能・理學的・化學的及ビ生物學的性狀ハ身體部位ノ素因ニ、微妙ノ影響ヲ與フルモノナリ、所謂臟器素因ガコレニ負フトコロハ實ニ甚、多く、原因學上頗、興趣ニ富メルモノナルニ拘ハラズ、ソノ

(1) Heidenhein
 (2) Chronszewsky
 (3) Ribbert

關係甚、複雑ニシテ吾人ノ未、闡明スルコトヲ得ザルノ點、亦、少カラズ。理學的關係ニ基ツケル組織素因ノ差別、タトヘバ、皮膚彈力組織ヨリモ、骨ガ連續斷裂ヲ來タシ易キ等ノ外、多數ノ化學的作用ニ基ツケルモノアリ。即、コノ方面ニ於テ既ニ個個細胞ト雖モ、各ソノ素因ヲ同ウセザルコトアルハ、ハイデン・ハイン氏¹⁾・クロン・テウス・キー氏²⁾・リッ・ツベ³⁾ルト氏³⁾等、及ビ其他ノ研究家ニヨリテ行ハレタル『生體染色法』ノ成績ニ就テ考フルモ、首肯スルニ難カラズ。即、**インチケカルミン**・**リチオンカルミン**及ビソノ他ノ色素ヲ動物體内ニ注入スルニ、諸種臟器細胞ガ色素ヲ攝取スルノ狀ニ著明ノ差異アリ、且、色素ノ如何ニヨリテ、コレヲ沈著セシメ或ハコレヲ排泄セシムル細胞ノ相同ジカラザラ見ルベシ。蓋、斯ノ如キ關係ハ恐ラク又細胞間質・組織液ニモコレアルベク、臟器素因ヲ論ズルモノノ看過スベカラザルトコロナリ。實ニ同ジク身體内ニ輸入セラレタル『害物』ニシテ、ソノ性質ニヨリテ、毎ニ好テ一定ノ細胞ニ働作シ、若クハ一定ノ部位ニソノ作用ヲ見ルノ例ハ、我病理學上ニ甚、多シ。蓋、組織ニ於ケル生物理化學關係ニ基ツクモノ大ナルベシ。コハ種種ノ化學性毒物ノ『毒物作用』ニ徴スルモ亦、明ナリ。クロー¹⁾ル・カリウムハ殊ニ對シテハ毒物ナレドモ、顫毛上皮精蟲ニ對シテハ害尠シ。モルヒテノ藥理學的作用ハ極メテ選擇性ニシテ、局所的刺戟ヲ起サズ速ニ吸收セラレテ大脳ノ機能ヲ麻痺セシム、而シテ筋肉及ビ末梢神經ニハ無害ナリ。クロー¹⁾ホルム・エーテル等ノ揮發性麻醉劑ハ脂肪樣物質ニ容易ニ溶解スル性質アルガ故ニ、コノ物質ニ饒多ナルノ神經組織ハコレニ對シテ特殊ノ素因ヲ有スルモノナリ。蓋、斯ノ如ク藥理學的臟器作用ハ多數ノ臟器素因ニ對シテ、道シルベトナルモノニシテ、組織細胞ノ性質ニヨレル理化學的親和ノゴトキハ、臟器素因ノ大ナル要素ヲナスコトヲ推知スベシ(化學的毒物ノ原因作用條下參照)。サレバ、一タビ身體内ニ入り、若クハ生ツタル『害物』ノ動作ヲ遲ウスルトコロノ身體部分ガ、各ソノ性質ニヨリテ相異ナル所以ヲモ知ルニ難カラズ、黃疸ノ際、膽汁成分ハ血液ト共ニ全身ヲ循環スルニ拘ハラズ、皮膚・肝臟・腎等ヲ濃染シテ、腦ノ白質ハ殆、黃色ヲ呈セザルナリ。又、病原細菌

及ビノ毒素ノ感作ニ對ストコロノ臟器ノ素因ハソレズレニ相異ナレリ(寄生性生物ノ原因作用ノ條下參照)。腸窒扶斯菌ガ消化管内ニ入ルヤ、腸壁殊ニソノ淋巴組織、就中集腺ハコロ菌ノ感作ニ因レル特異ノ病變ヲ示シ。更ニ腸間膜淋巴腺ニモ及ボス。ソノ他、脾、肝、腎等ヨリハ、能クコロ菌ヲ採集シ培養ヲ行フニ適スルモ、他ノ一定ノ身體部位ヨリハコレヲナスコト困難ナリ。加之、有馬氏ノ研究ニヨルモ、窒扶斯菌體ノ毒素ヲ家兔ノ靜脈内ニ注射シ、亦、能クソノ腸ニ於テ、窒扶斯性特殊病變ヲ發生セシメタリト云フ。又、肺炎複球菌ガ、咽頭粘膜炎ニ在リテ多ク無害性菌タルニ止マルニ反シ、コロ部ハ實布埤里菌ニ對シテ激甚ノ疾病素因アルコトヲ示セリ。且、コロ實布埤里菌ハ破傷風菌ノ如ク、侵入内ニ限局存在スルニ拘ハラズ、ソノ菌毒ノ内部侵入ニ對シテハ他ノ身體部分ニモ感受性アルコトヲ示シ、而カモ兩者間ニ、明カニ部位的素因ノ相違アルコトヲ確ムベシ。即、神經中樞、殊ニ脊髓ノ組織ハ先、強ク破傷風毒素ノ結合スルトコロトナリ、實布埤里菌毒ニヨリテハ屢、好テ末梢神經ガ侵害セラレ、所謂實布埤里麻痺ヲ遺留セシムルガゴトキコレナリ。又、結核病等ニ就テ觀ルモ、亦、明ニ身體部位ニ基ツク素因(コレ亦、ソノ部位ノ『害物』遭遇如何ニ依ルモノト相結託シテ存シ、往往相分離シテ考ヘ能ハザルニモセヨ)ノ存在ヲ知ルニ足ルベシ。結核ノ最、劇甚ノ病變ヲ見ハスハ通常、肺・淋巴腺・漿膜・腸等ニシテ、腦ニコレヲ見ルコトモ亦、頻回ナレドモ、腦質内ノモノハ腦膜ニ比シテ稀ナリ。骨ノ結核モ亦、稀ナラザレドモ、筋肉ハ通例結核ヲ生ゼシムルノ素因ニ乏シ。コレニ反シテ、筋ニ顯著ナル微毒性護膜腫及ビ微毒性筋炎ヲ來タスコトハ決シテ稀有ニアラズ。又、肝臟ハ微毒性護膜腫ノ好テ發生スルトコロナレドモ、ココニ顯著廣汎ノ結核竈ヲ見ルコトハ稀ナリ。又、肝臟ノ粟粒結核ハ頻發スルモノナリト雖モ、ソノ大サ微小ナルヲ普通トス。更ニ腫瘍ノ發生地ニ就テ觀察スルモ、自ラ臟器素因アルコトヲ推知スルニ難カラズ。癌ノ原發部位ハ大抵一定シ、同一臟器内ニテモ自ラ好發地アリ。胃ニ於ケル幽門部・子宮ニ於ケル腔部・食道ニ於ケル氣管分岐部ノゴトキ、癌腫發生ニ對シテ部位的素因多キ場處ト稱セ

- (1) Goldmann
- (2) M. B. Schmidt

(3) Neusser

(4) Oestreich

- (5) R. Virchow
- (6) Castens
- (7) Herxheimer

ラル。又惡性腫瘍ノ蔓延ノ狀モ亦、身體部位ノ素因ニ重要ナル意義アルコトヲ示スモノナリ。胃ノ幽門癌ハ廣ク胃壁内ニ蔓延増殖スルモ幽門輪ヲ越エテ十二指腸壁ニ及ボスコトハ少ナク、脾臟、腦髓、心臟筋又、軀幹筋ニハ癌轉移稀少ナルニ反シ、肝臟ニハ甚、數數ナルガゴトキ、假令、コロ際多少位置的・器械的ノ關係アリテ、コレニ與カルニセヨ、決シテコレノミニ因ルニアラズシテ、各臟器ニ於ケル化學的・生物學的關係ニ基ツクコロノ素因ニ依ルモノ多カルベシト信ゼラル。何トナレバ、癌腫細胞ガ又、能ク血行ニ依リテ傳播セラレ、屢、コレヲ血管内ニ發見スルトハゴルドマン氏⁽¹⁾、シュミ、ツド氏⁽²⁾及ビ吾人ノ經驗ニ據ルモ然ルトコロニシテ、而カモ癌腫細胞栓塞ガ皆必、轉移竈ヲ發生セシムルニ限ラザレバナリ。吾人ハコロ際、癌細胞ノ血管内滅亡ヲ認知スルト共ニ、尙、複雜ナル化學的・生物學的關係ニ基ツクコロノ臟器素因ヲ承認セザル能ハザルナリ。ノユセル氏⁽³⁾ガ腫瘍ノ原發及ビ續發セル臟器相互間ニ『アルトワニルワントシヤト』⁽⁴⁾血族的關係』ノゴトキモノアルヲ說ケルハ必シモ誇張ニアラザルベシ。且、惡性腫瘍ノ連續的蔓延ニ對シテ、動脈管壁及ビ軟骨ガ特ニソノ侵蝕ニ抵抗スルノ性ニ富メルハ病理解剖ニ從フモノノ容易ニ檢出スルトコロニシテ、ソノ理由ハ器械的性質ノ外、更ニ化學的性質ニ因ルトコロアルベシ。(オーストライヒ氏⁽⁵⁾ハコレヲ軟骨及ビ動脈壁ニ存セルヒュンドロイチン硫酸ニ意義ヲ附セントセリ)。

上述シタルゴトキ、身體部位ノ素因ハ、更ニソノ處ニ於ケル病變ノ性質如何ニヨリ、又、コレト關係セル個人ノ生活時期・性及ビソノ他ノ要約ニヨリテ種種ノ相違ヲ示スモノナリ。タトヘバ、攝護腺ヨリ出デタル癌ニ對シテ骨ハコレガ轉移竈ヲ作ルトコロノ素因ヲ比較的の多ク有シ、又、肺臟ノ微毒性病變ヲ示スモノハ先天性微毒ニ於テ殊ニ多ク、後天性微毒ニ於テハコレニ比シテ甚、少シ。タトヘバ、ウィルヒウ氏⁽⁶⁾ガ所謂肺ノ白色肝變、即、肺ノ氣胞上皮細胞ノ增生及ビ變性並ニ間質増殖ハ共ニ先天性微毒ニ見ルトコロノ特異ノ病的狀態ニシテ、カステンズ氏⁽⁷⁾ノ統計ニ據レバ、先天性微毒例ノ五八%ニ於テコロノ諸型ノ肺臟微毒ヲ見タリト云フ(ヘルクスハイメル氏⁽⁷⁾ノ引用セルトコロニ據ル)。而シテ後天性微

毒ニ在リテ肺ニソノ病變ヲ見ルハ少ナク、若クハ特殊ノ病變ヲ見ハスコト稀有ナリ。コレ等ハ病原體感染ノ時期如何ニヨリテ臟器ノ素因の關係ニ自然の差異アルノ一證ナリ。男女ニヨレル臟器ノ素因ノ差ハ前項既ニコレヲ述ベタリ。身體部位ガ嘗テ一タビ若干ノ病變アリシコトニ基ツキテ、ソノ素因ニ變動ヲ來タスコトアリ。但、コノ病の要約ノ下ニ羸チ得タル特殊ノ臟器素因ハ、次章ニ於テコレヲ述ベシ。

要スルニ、吾人ハコノ身體部位ニ基ツケル疾病素因ノ存在ヲ確認シナガラ、ソノ理論的説明ヲ完全ニナスコト能ハザルモノ尙、甚、多シ。今後ニ於ケル病理學ノ研究ハコノ邊ニ尙、荒漠ノ原野ヲ有スルモノト謂フベシ、ソノ開拓ノ必要ト興趣トハ固ヨリ言フコトヲ俟タザルトコロナリ。

五 身體ノ病變ニ基ツケル疾病素因

前項所説ノ身體部位素因ガ、身體組織ノ生理的關係ヲ基礎トスルニ異ナリテ、尙、別ニ個人的疾病素因ヲナストコロノ重要ノモノアリ。若、前者ヲ目スルニ、普汎性、生理的ナル疾病素因ヲ以テスベクンバ、後者ハ特殊個人性、病的ナル疾病素因トモ謂フコトヲ得ベシ。蓋、身體組織ハ後天性ニ又、先天性ニ遺傳性及ビ母體內生活時期ニ於テ多少ノ障礙ヲ受ケザルコト殆、無ク、而シテ素因ノ基礎ガコノ病的變化ニ在リテ存スルモノ亦、實ニ少カラザルノミナラズ、個人ノ疾病發現ヲ甚、複雑ナラシムルトコロノ多數ノ理由モ亦、ココニ存セリ。コレ特ニ論述ヲ要スル所以ナリ。

コノ先發既存ノ病變アルガタメニ、身體ノ一定部ハ外來『害物』ニ遭遇スルコト竝ニコレガ侵入、固著ヲ常ヨリモ容易ナラシメ、若クハ、コレガタメニ却テコレヲ回避セシメ。又ソノ部位ニ固有ナル防禦性能ヲ變動シ、且、組織反應ヲ異ナラシムルニ至ルコト稀ナラズ。

殊ニ身體各部分ニ固有ナル防禦性能ノ變動ハ常ニコノ病的素因ト甚、親密ノ關係ヲ有セリ。蓋、コレニヨリテ『害物』ニ遭遇シ且、コレヲ侵入、固著セシムルコトヲ利便ナラシムルコト多クレバナリ。ダトヘバ、皮膚ニ於テ知覺麻痺アル部ハ更ニ他ノ障礙、ダトヘバ、火傷ヲナシ易キガコトシ。知覺麻痺ハ、火傷ニ對シテ、何等直接ノ關係アラズト雖モ、ソノ局部ニ固著セル防禦性能ノ缺損ヲ惹起スルモノナレバ、コノ際主要ノ病因の要件ハ『害物』(異常高温)遭遇ニアリトハイ、コノ防禦性能ノ缺損ヲ基礎トスル上ニ於テ、亦、組織ノ病的素因中ニ入ルヲ妨ゲザルナリ。實ニ病的素因ハ、コノ防禦性能ノ異變ニ對シテ常ニ密接ノ關係ヲ有ス。然レドモ、總體ヲ皆、同一型ニ入レテ論ズベキニアラス。

吾人ハ便宜上一、局所ニ於ケル一定ノ病變(生理的或ハ解剖的)ニヨリテ特ニソノ局所ニ見ハルルトコロノ素因ト、二、普汎性ニ廣ク身體ニ生ヅタル病變、若クハ身體他部ニ生ヅタル病變ニ基ツケル素因トヲ區別スルコトヲ得ベシ。又、ソノ素因ノ基礎ヲナス個個ノ要件ニハ、器械的、化學的ノモノ、或ハ解剖的、機能的將タ物質代謝の等種種ノ差異アリ。

コノ種ノ病的素因ハ就中、ソノ局限性ナルモノニ於テ甚、明晰ニ認メラルヲ得ベシ。先、ソノ器械的、外傷的ナルモノノ例ヲ舉グレバ、皮膚及ビ粘膜ノ損傷、ダトヘバ、上皮細胞ノ剝脱ハ他ノ病原菌侵入ニ對シテ、ソノ部ノ局所性素因ヲ成立セシメ、又、外傷ニヨリテ所謂『抵抗減少地』ヲ作り、『病原體』ヲ侵襲、固著ヲ容易ナラシメ、或ハ他ノ發病要約ヲ誘導シ、タメニ他ノ疾病ヲ催起スルニ至ルノ例證ハ實ニ多シ。外傷ト局所の素因トノ關係ハ病因學上ノ價值、決シテ僅少ナルモノナラズ。サレバ嘗テウヰルヒウヰ氏^①モ微毒性骨膜炎ヲ論ジ、甚、屢、外傷作用ノ加ハリタル局所ニ起ルコトヲ謂ヘリ。又、外傷ト局所性結核症ノ發生トノ間ニ屢、輕視スベカラザル關係ノ認メラルゴトキハ、假令ソノ發生要約ガ必シモ一定ナラズトスルモ、シカモ亦、コノ一例トナスニ足ルモノアリ。ソノ他、損傷アル心臟瓣膜ハ血流中ノ細菌ヲ容易ニ固著セシメ、コレニヨリ心臟内膜炎ヲ形成セシメ得ルコトハウヰツソコウウヰツチ氏^②等ノ動物試驗ニ徴シテ明ナリ。更ニ又、腫瘍

(1) Locus minoris resistentiae

(2) R. Virchow
(3) Wyszokowitsch

發生ノ事實ニ鑑ミルモ、外傷性組織損傷ガ癌腫發生ニ對シテ素因ヲナセル例ハ少カラズ。但、コノ場合ニテハ恐ラク防禦性能ノ缺損ノミノ外、尙、複雜ナル組織的要約ノ在ルベク、又、單純ナル器械的外傷作用ノ外ニ尙、化學的及ヒ理學的作用ノ共働モ少カラザルベシ。外傷ト腫瘍發生トノ關係ノ著明ナル例ハ、齒ノ銳縁ニテ絶エズ僅微ノ外傷ヲ舌縁若クハ口腔粘膜炎ニ生ジタル處ニ後チ癌腫ノ發現ヲ見ルガゴトキモノ即、コレニシテ、尙、類似ノ例ニ乏シカラズ。明白ニ化學的關係ニ基ツケル病の素因モ亦、ソノ例甚、多シ。タトヘバ、胃液ノ化學的異常(鹽酸缺乏ノ如キ)ハ平生ナラバ能ク殺滅、若クハ減力シ得ル病原菌(タトヘバ、結核菌、虎列刺菌)ヲモ易クソノ儘ニテ通過セシメ、コレヲシテアルカリー性ナル腸液存在地ニテソノ毒性ヲ發揮シテ腸炎ヲ惹起シ、若クハ、胃壁自個ニテ通常ハ見ルコト無キ病竈(タトヘバ、結核性潰瘍)ヲ發生セシムルガゴトキ、コレナリ。

コレ等ノ器械的外傷性、又ハ化學的變化ト相關聯シタルコトナガラ、身體ニ於ケル一定ノ解剖的構造の變化ガ特ニ疾病素因ニ對シテ重要ノ意義アルコトヲ證明スルノ實例ハ頗、饒多ニシテ、コノ病理解剖的變化ヲ呈スルコトコノ身體ノ病的狀態、或ハコレト結合セル病機ハ更ニ他ノ病變ヲ惹起シ、若クハソノ發生ヲ助クルニ適セリ。コレ一面ニハ明カニ病的素因ニ又、病理解剖的基礎ノ存スルコトヲ示スモノナリ。但、コノ際トテモ、固ヨリ形態的變化ノミガ唯一要件ニアラズシテ、理化學的・物理化學的・生物學的要件ノ中ニ含マルコトハ論ナシ。胃ニ於ケル慢性潰瘍ノ邊縁、若クハ腸壁ノ日本住血吸蟲卵介在部ニ癌腫ヲ發生シ、肝癌ガ時ニ肝硬化ニ續發シ、皮膚癌ガ屢、皮膚慢性炎或ハ慢性刺激アリシ處ニ現ルル等、慢性炎的變化アル部位ガ屢、癌腫ノ好發地トナリ得ルコトハ事實ナリ。吾人ハ未、癌ノ原因、竝ビニ組織發生ノ最始ノ狀況ヲ審ニスルコト能ハザレドモ、慢性炎的組織變化ハ此處ニ於ケル組織細胞ノ腫瘍性增生ヲ惹起スルニ適スルヤ明ナリ。

又肺臟ニ塵埃吸入症性病變アリテ、コレヨリシテ更ニ他ノ疾患ヲ惹起スルコトコノ素因ヲナスコトアリ、シカモソノ塵埃ノ性質如何ニヨリテ肺組織ノ解剖的變化ヲ相異ニシ、更ニコレニ基ツキテ肺結核症ニ對スル素因ノ程度ニモ差別ヲ生ズ、タトヘバ、石炭粉沈著肺ヨリモ石粉沈著ニ於テ結核症ノ發現遙ニ多キコトハ普通ニ認メラルトコロナリ。コノ素因ノ差異ヲ致ス所以ハ主トシテ吸入粉末ノ特殊性狀ニ關シ、細球狀ヲナス微小塊ニシテ組織毀傷性少キ炭粉ト圭角アリテ質硬固ナル石粉トガ各所謂『内部外傷』ヲナスニ當リ、各ソノ解剖的變化ヲモ異ニシ、コレニ據リテ結核菌ノ組織固著及ビ侵入ノ程度ニ相違ヲ來サシムルニ至ル。ヨシコノ解剖的變化ガ素因ノ全者ニアラズスルモ、ソノ重要ノ主件ナルヤ疑ナシ。ハルト氏⁽²⁾モ亦、コノ形態的關係ヲ以テ緊要ノコトトナセリ。但、コノ際コノ塵埃沈著ノ組織像ニ就テ結核竈トノ關係ヲ考フレバ、沈著ノ物質竝ニコレニヨリテ反應トシテ生ゼル解剖的組織變化自個ノ理化學的性質ノ外、沈著部竝ニ附近肺組織ニ於ケル機能障礙・體液循環ノ異常等モ亦、病竈形成ノ上ニ影響ヲ及ボスコトヲ察知スベシ。タトヘバ、肺ニ於テ炭粉沈著多量ナレバ、結締織肥厚ヲ促シ、且、淋巴道ノ閉鎖ヲ致ス等、結核病竈ノ増進蔓延ヲ妨グル解剖的變化ヲ形成スルコトヲ度外視スベカラズ。而シテ幾何ノ程度ニ於テ、炭粉ノ化學的性質ニ基ツケル結核免疫、若クハ防禦ノ作用アルヤハ、諸學者間ニ種種ノ言說アルニ拘ハラズ、尙、頗、明瞭ヲ缺グリ。然レドモ、コノ種ノ化學的性質ガ時ニ亦、少カラザル關係ヲ有スルコトハ疑ナキトコロニシテ、石灰粉末沈著ノ如キハ石炭粉末ニ比シテ肺結核ニ對スルノ素因ヲ肺ニ與フルコト尙、一層尠キナリ。實ニ石灰粉末ヲ盛ニ吸入スル職業ノ人ニシテ、肺ノ罹患ヲ見ザル例乏カラズ。學者ニ依リテハコノ石灰粉ガ管ニ無害ナルノミナラズ、寧、多少結核ヲ豫防スルノ力アリトノ意見ヲサヘ抱持スルモノ無キニアラザレドモ、果シテ眞ニコノ種ノ作用アリヤ未、確ナラズ。

尙、例ヲ肺結核ニ取リテ、顯著ナル病理解剖的事實ガ疾病素因ノ根據ヲナスコトヲ示スベシ。青年期・成人期ニテ肺臟

(1) W. A. Freund

(2) Hart

(3) Mendelsohn
(4) Hart

(5) Birch-Hirschfeld

中特ニ肺尖部ガ結核ノ發生ニ對シテ、強度ノ素因ヲ有スルコトハ、洋ノ東西ヲ問ハズ、臨牀上、及ビ病理解剖上、疑ナキトコナリ。肺ノ散布性結核竈トイヘドモ、吾人ノ見ル所ニ據レバ、上部ニ於ケルモノハコレヲ下部ノモノニ比シテ形ノ大ナルヲ常トセリ。此ノ如ク、肺尖ニ部位の素因ノ強キ所以ハ、青年及ビ成人期ノ肺尖ガ、小兒ノ肺尖ニ比シテ、殊ニ結核菌ノ固著・繁殖等ニ適スルニアリトイヘドモ、ソノ何故ニ然ルヤノ理ニ至リテハ、未、全然明瞭ナルニアラズ。然レドモ、ソノ重要ナル要約ノ一ヲ、此處ニ於ケル解剖的の要件ニ歸セザルベカラザルハ殆、疑ナキトコナリ。ソハフロユンド氏⁽¹⁾ガ夙ニ唱道シタルガゴトク、胸廓上口ノ狭窄ニシテ、コノ病變ノ形成ハ、F氏ノ説ノゴトク骨性胸廓ノ發育不良ニ因ル第一肋骨ノ軟骨短小ニ基ツクモノニシテ、又、コレニ關シテハ尙、肋骨ノ形・長さ及ビコノ部ニ於ケル諸解剖的の要件ヲモ顧慮セザルベカラザルハハルト氏⁽²⁾等ノ説ニ據ルモ亦、然ルナリ。コノ骨性胸廓上部ニ於ケル解剖的の變化ハ胸廓上口ノ狭窄ヲ成シ、肺尖部ハタメニ換氣ト血液及ビ淋巴液流通トノ不良ヲ致シ、コレ恰、結核發生ノ好適地ヲナス所以トナル。蓋、斯ノ如キ骨發育不良ハソノ細微ナル發生方法ハ、種種ナルコトヲ得ルモ、或ハ軟骨ノ發育ガ元來微弱ナルガタメカ或ハ正當ノ發育ガ早ク停過セルガタメカ等、要スルニ、コレヲ身體素質ニ歸セシムルコト、最穩當ナルベシ。且、コノ解剖的の變化ハ通常生ナガラニシテ顯著ナルニアラズシテ、身體全部ノ發育ガ進ムニ從ヒテ徐徐ニ成立スルモノナリ。但、メンデルゾン氏⁽³⁾ハコレヲ屢、幼兒ニ見タルノ故ヲ以テ異見ヲ挾ミタレドモ、ハルト氏⁽⁴⁾ハコレヲ以テ甚、稀有ナリトシ、コノ軟骨過短ノ發現及ビ意義ヲ小兒ニ於テ研究セントスルハ誤謬ナリト論ゼリ。蓋、コノ事タルヤ學者間ノ論議ノ既ニ絶エタルニアラズ、今後ニ於テ尙、精緻ノ研究ヲ要スルモノナリト雖モ、吾人ハ、コノ病理解剖的の基礎ヲ捉フルコトヲ得テ、肺尖ノ結核素因論上ニ光明ヲ得タルコトヲ否ムベカラズ。勿論肺結核ノ人ニハ必、常ニコノ變化アリト云フニアラズ、胸廓上口狭窄アル場合ニハ必、常ニ肺結核アリト謂フベカラズ、又肺尖ニ於ケル素因の要件ニハ尙、他ノ諸點、ダトヘバ、囊ニビルビ・ヒルシスルド氏⁽⁵⁾ニヨリ唱道

(1) Exposition
(2) Cornet

セラレタル生理的ノ氣管枝分岐状態、又ハ他ノ病的現象、ダトヘバ、肺尖ニ於ケル肋膜癒著等ヲモ顧慮スベシ。吾人ハ、今茲ニ特ニ、肺結核ノ素因ヲ説カントスルモノニアラザルガ故ニ、ソノ細論ヲ避クベシト雖モ、結核菌ガ唯一ノ真正『病原菌』ナルニ拘ハラズ、各人ニ於テ又、身體各處ニ於テ結核症ノ發現状態ガ頗、多樣ナルハ、前章ニモ述べタルゴトク、唯一ノ結核菌侵入ノミヲ以テ疾病發生ノ理由ノ全幅ヲ説明シ能ハザル所以ナリ。各臟器ニ於ケル疾病素因ニ生理的ナルモノ、又、病的變化ニ基ツクモノアリテ、コレ等ガ疾病發生ノ上ニ多大ノ影響ヲ附與シ、病的現象ニ差異ヲ惹起スコトヲ知ルベシ。而カモ肺臟組織性質ニ固著セル真正ノ疾病素因ト、ソノ部位ニ於テ唯『害物遭遇』⁽¹⁾多キコトトハ、必シモ容易ニ相判別シ得ラルルモノニアラズ。肺臟ノ結核素因ト云フモノモ、コルチツト氏⁽²⁾ノ注意シタルガゴトク、『害物遭遇』強盛ニ依ルコトガ、亦、與テ力アルナルベシ。斯ノ如ク、病理解剖的の變化(同時ニ固ヨリ機能ノ障碍アリ)既存セルガタメニ、殊ニソノ部ニ於ケル『害物』ヲ遭遇、侵入、固著・蔓延ヲ利便ニシ、局所ニ於ケル疾病素因ヲナスノ例證ハ尙、甚、多クシテ枚舉ニ違アラズ、又コノ素因ニ據リテ疾病ヲ發生セシムル要約モノニシテ足ラズ。體腔ノ癒著性閉鎖ノタメニ腔内ノ臟器ニ亦、異變ヲ生ツ、コレ後日ノ疾患ニ對シテノ素因ヲナスガゴトク、諸種ノ炎性變化及ビ壞死等ノ部ガ更ニ他ノ『害物』ヲ侵害ヲ容易ナラシムルガゴトク、排泄口狭窄ニ因ル内容液瀦溜鬱滯之際シ、ソノ分泌液・排出液中ニ混入セル病原菌微體ノタメニ膽囊・膀胱等ノ炎性變化ヲ起スコト殊ニ甚、顯著ナルガゴトク等、コレナリ。吾人ハ今一、コレ等ノ例ヲ擧ゲテ解説スルノ暇無キヲ以テ、コレヲ省略ニ附スト雖モ、ソノ中ニ就テ、局部ニ於ケル血行・淋巴流ノ異常竝ニ神經機能ノ變調ガ、屢、局部ノ疾病素因ノ成立ニ與アルコトハ殊ニ輕輕ニ看過スベカラズ。肺臟ニ於テ血液循環不良ノ状態アレバ、コレニ乘ツテ往々所謂『垂下性肺炎』發生シ、腹腔ニ於ケル淋巴液吸收ガ、一定ノ

(1) Bier

動機ニヨリテ不良トナリタル場合ニハ甚、容易ニ腹膜炎ヲ惹起シ、迷走神經若クハニ又神經ノ切斷後ニ於テ各ソノ支配下ニ抵抗減少地ヲ作り、肺炎若クハ角膜痙攣ヲ來タシ易キコト等ニ鑑ミレバ、思半ニ過ギン。

先發ノ病變ノ一定ノモノハ時ニ他ノ病變ヲ防遏シ、或ハ外來「害物」ヲ侵害ヲ却テ妨害スルコトナキアラズ。ダトヘバ僧帽癩疾患ニ因レル肺臟血行ノ慢性鬱血ハ肺ノ結核ニ對シテ却テ良好ノ影響ヲ與フルコトアリ。治療上ニ效果アリト稱セラルル「ビール氏」⁽¹⁾ノ「充血療法」ハ、痙攣領域内ニ見ハルルコロノ血行障礙ヲ模倣シ、コレヲ利用シタルモノトモ稱スベク、鬱血ニ因レル組織物質代謝ノタメニ催炎病原體ノ生活力ヲ減殺スルコトハ、ソノ最、價值アル作用ナリ。ソノ他、血行障礙ハ病原菌ノ毒力ニ影響シ、時ニコレヲ減絶シ或ハコレヲ輕減シ、或ハソノ毒物ノ吸收ガ妨害セラルルコトニモ考ヘ及ボスベキハ動物試驗ニ徴シテモコレヲ證明スルニ難カラズ。又肋膜兩葉ノ癒著ハ、タメニ肺臟内結核性空洞ノ穿孔ヲ不可能ナラシメ、腸管相互ノ癒著ハ、屢、潰瘍ノ腹腔穿孔ヲ豫防ス。斯ノ如キ例ハ尙、他ニモ多シ。

以上、主トシテ限局性ノ病變ニ基ツケル局所性素因ヲ概説シタリ。吾人ハ更ニ全身ニ互レル廣汎性障礙ニ基ツク疾病素因ニ就テ考ヘザルベカラズ。全身ノ榮養ヲ損シ物質代謝ノ障礙ヲ來タセル場合ニテハ、或ハ普通ノ意味ニ於テ、或ハ特殊ノ性質ヲ帶ビテ、防禦性能ノ減退ヲ示シ、組織反應ノ狀態ヲ變ジ、タメニ往往「害物」ヲ侵害ニ恰適シ、罹病ヲ容易ナラシム。全身ノ榮養不良ノモノガ、諸種ノ疾患、ダトヘバ、結核症及ビ傳染病等ニ罹リ易ク、若クハコノ際疾病經過ノ險惡ニナリ易キコトハ日常、吾人ノ經驗スルトコトナリ。泰西ニテモ尙、痙攣小兒ガ結核症ニ罹リ易ク、本邦ニテモ榮養不良ノ小兒ニ結核病多シ。又、西洋ニテ嘗テアリシ所謂「饑餓室扶斯」例ニ徴シテモ明ナリ。サレバ、スベテ全身ノ榮養ヲ不良ナラシメ、物質代謝ニ不良ノ影響ヲ及ボスモノハ、能ク他ノ疾病ニ對シテ、素因ヲナスコトヲ得ルナリ。飲酒過度ガ直ニ結核症ノ發生ヲ容易ナラシムルヤ否ヤニ就テハ異論ナキアラズト雖モ、アルコホール中毒ガ身體組織ノ物質代謝ヲ損シ、消

(1) v. Stubenrauch

化器ヲ傷害シ、心筋ノ動作ヲ薄弱ニスルコト等ヨリ推スモ、身體組織防禦性能ノ減力アルハ明ニシテ、疾病發生ニ對シテ一ノ素因ヲナスニ至ルハ頗、可能ト謂フベシ。又、同様ノ理ニヨリ諸種職業病、即、鉛燐等ノ慢性中毒症ニ於テ、コレ等ノ毒物ガ直接ニ局所組織ヲ侵害スルノ外ニ、亦、全身ノ物質代謝ニ不良影響ヲ及ボシ、コレヤガ發病ノ素因ヲナスコトアリ。スヅウベンラウハ氏⁽²⁾ニ據レバ燐職工ガ顎骨ニ壞死性炎ヲ發スルハ燐ノ直接作用ノミニ歸スベカラズ、慢性燐中毒ニヨリ組織ノ性質ヲ變ジ、茲ニ化膿菌ノ侵入・固著ヲ容易ナラシメタルニ因ルト云フ。上述諸例ト相比肩セシムベク、而カモ尙、多少特殊性ヲ帶ベルモノノ例ハ糖尿病ニ就テ見ルトコトナリ。コノ物質代謝異變ヲ呈セル身體組織ハ化膿菌及ビソノ他病原菌ニ對シテ好適ノ培養地ヲナシ、ソノ侵入ヲ容易ナラシメ、タメニ本症ノ經過中ニハ皮膚及ビ内臟ニ屢、化膿性病竈ヲ作り易シ。且、コノ時コノ病竈ハ屢、壞疽性ヲ帶フルコトアリ、コレ本症ハ屢、動脈硬變ヲ伴フガ故ニ、恐ラクソノ大部分ハ亦、コノ病變ニ基ツケルモノナルベシ。而カモ、コノ動脈硬變ノ發生ハ糖尿病ニ於ケル組織榮養障礙ニ歸セシムベキモノナリ。

蓋、全身ノ榮養及ビ物質代謝ノ障礙ハ種種ノ臟器・種種ノ機能ノ異常ニヨリテ發呈スルモノナレバ、一定ノ臟器ノ變化ハ能ク全身ノ榮養及ビ物質代謝ニ重大ノ影響ヲ及ボシ、コレヤガテ又、他ノ疾病ニ對スルノ素因ヲナスニ至ル、且、コノ際、生理的ニ存スルコロノ臟器ノ相互關係ガ亦、重要ナル意味ヲ有スルコトヲ想ハバ、素因ノ基礎ヲ形成スル事項ノ甚、複雑ナルコトヲ知ルニ足ラン。

六 個人的特異性竝ニ遺傳ニ基ツク疾病素因

前項ノ末尾ニ論ツタルトコト、關聯ヲ有スルモノニシテ、個人身體ノ特異性質ガ、特ニ疾病素因ニ對シテ、若干ノ關係

- (1) Idiosynkrasie
- (2) Temperamente

ヲ有スルコトヲ看過スベカラズ。

必シモ病的トハ謂フベカラザルモ、外來ノ刺戟ニ對シテ間特殊ノ過敏性トモ見ルベキ個人的特異反應ヲ呈スルコトアルハ人ノ知ルトコロナリ。所謂イデオジククラチー⁽¹⁾即、コレナリ。又、心理的動作ノ方面ニモ個人的特異性アリテ、所謂「稟質」⁽²⁾ノ相違ヲ呈セリ。蓋、古來稱スルトコロノ「稟質」ノ四型「粘液質・膽汁質・多血質・黑膽質。或ハ後世寧、臟器系統ノ狀況ニ徴シテ、粘液質・黑膽質ノ名ニ代フルニ淋巴質・神經質ノ名ヲ以テセルモノアリ」ノ名稱ハ本ト古代ノ荒唐ナル液體說ヨリ出デタルモノニシテ、コノ各個稟質ニヨリ身體ノ構造・性質ニモ多少ノ殊別アルコト唱ヘラルト雖モ、要スルニ、今日ノ病理學上ニ甚大ノ意義アルモノトハ思ハレズ。又精神的疾病ガ必、コノ稟質ノ相違ニヨリテソノ發生ヲ異ニスルヲ明ニスルガゴトキモノアルナシ。然レドモ、尙、多少疾病發生ノ素因ニ對シテ關係ヲ有スルコトヲ承認スベシ。タトヘバ、所謂『神經質』ノ人ハヒステリー・鬱憂病・癱瘓等ヲ發シ易キガゴトシ。

個人ニ個人的特異性アルコトハ疑アルコトナシ。生理的ノ範圍内ニ於テ既ニコレ有り、而シテコレ疾病素因上ニ全ク影響アルコトナシトハ考ヘラレズ。殊ニ個人身體ノ解剖的及ビ生理的造成ノ總計即、所謂「體質」⁽³⁾ノ素因ニ對スル關係ハコレヲ閉却スルコト能ハザルナリ。體質⁽⁴⁾ノ外ニ又、姿質⁽⁵⁾ノ語アリ。コレ等ノ語ノ用法ハ必シモ一定セザレドモ、ワグネル氏⁽⁶⁾モ記シタルゴトク、姿質ヲ以テ體質ノ外ニ現ハレタル態度ト做シテ可ナリ。又、素質⁽⁷⁾ノ語モ屢、一定ノ病的現象ヲ發生セシムル傾向アル體質ノ義ニ用キラル。體質ハ疾病發生上ノ一要件トシテ昔日ノ醫學ニ於テハ、甚、重要ノ位置ヲ占メタリキ。即、液態病理說ニ基因シテ一定ノ體質ハ直ニ一定ノ疾病ノ素地ヲナスモノト信ゼラレタリ。實ニ「體質」ノ醫學上ニ於ケル價值ハ時代ニヨリ幾多ノ變遷ヲナシタリ。然レドモ臨牀上及ビ病理解剖上ノ豐富ナル經驗ニ據レバ身體全部ノ解剖的及ビ生理的性狀ト疾病發現ノ態度トノ間ニ、何等カノ關係若クハ連絡アルコトハ到底看過スルコト能

- (3) Konstitution
- (4) Habitus
- (5) Wagner,
- (6) Diathese

ハザルナリ。體質ノ成レル所以ハ決シテ一朝一夕ノコトニアラズ、又、固ヨリ一樣一色ニアラズ、或ハ全然先天性・遺傳性ノモノアリ。或ハ種種ノ生活要約ニヨリテハ獲得シ養成セラレタルモノアリ。サレバ場合ニヨリテハ一定ノ體質ハ一定ノ疾病ノ結果ト稱スベクシテ、ソノ疾病ニ對スルノ素因の關係ハ、單ニ外觀的ニ過ギザルモノアルコトニ注意セザルベカラズ。故ニ、最、吾人ノ重要視スルトコロハ眞ニ個人ニ固著特有ナルモノニアリ、即、先天性・遺傳性ニ基ツケル體質ナリトス。但、コレトモ生活時期中ニ於テ若干ノ變動ヲ蒙ルコトハ固ヨリ可能ナリ。

體質ノ由來ガ、イツレニアルニモセヨ、疾病素因ノ上ヨリ論ジテ重要ナル問題ハ、一、外來ノ「害物」ニ對シテ普汎的ニ抵抗カヲ有スルコト如何(數量的)。二、特殊ノ疾病ニ對シテ特殊ノ素因の關係ヲ有スル特殊ノ體質アリヤ(性質的)コレナリ。蓋、體質ノ素因の關係ニ就キテ最、懷疑的ナル人トテモ、コレニ數量的ノ相違アルコトヲ否ムコト能ハザルベシ。即、體質ノ強若クハ弱、剛若クハ柔ヲ區別シ、外來ノ「害物」ニ對スル抵抗力ノ多少、竝ニ被害恢復ノ性質ニ差異アルコト等ヲ認識スベシ。コレ、即、疾病素因ノ多寡ニ相當スルナリ。但、斯クノ如ク普汎的ニ體質ノ剛強及ビ柔弱ヲ分ツト雖モ、柔弱ナル體質ノモノ必シモ各種ノ疾病原因ニ對シテ常ニ平等ニ感受性多シト限リタルニアラザルコトハ、ソノ實例ヲ發見スルニ苦マザルナリ。

是ニ於テ、體質ノ如何ニヨリテ特殊疾病素因アリヤノ問題ハ喚起セラレザラ得ズ。但、コノ問題ニ對シテハ頗、慎重ニ審議セラレザルベカラズ。卒、中質⁽⁸⁾ナル語ハ今モ慣用セラルトコロナリ。コノ語ハ必シモ不合理ト謂フベカラズ、何トナレバ、實際腦卒中症ニ罹ル傾向ヲ有スル人アリテ、コノ傾向ノ存在ハ凡、ソノ人ノ外觀狀貌ニヨリテ略、推測シ得ラルナリ。但、コノ際「卒中」ヲ以テ直ニ「體質」ノ必然ノ結果ナリト謂フコト能ハズ、何トナレバ腦卒中ハ通例腦出血ニ據ル症狀ニシテ、腦出血ハ實ニ血管ノ病的狀態(動脈硬化)ニ基ツクモノナレバナリ。然レドモ吾人ハ又、注意セザルベカラズ、腦卒中ハ血管ノ

病變ニ因リ、コノ病變自個ハ寧、後天性獲得ナルモ、萬人皆同様ニコレヲ獲得スルモノニアラズシテ、吾人ノ解剖的經驗ニ徴スルモ、ソノ差、人ニヨリテ甚、大ナリ。又、假令略、同様ノ生活狀態ニ在ルモノトモ、動脈硬變ノ發現ノ程度ハ必シモ同一ニアラズ。即、ソノ人固有ノ性質ニ依ルモノ亦、アルコトヲ察知セシム。痛風ノ如キ亦、相似タル關係ヲ示セリ。コノ一事既二人ノ「體質」中亦、多少ノ特殊點アルヲ揣摩セシム。加之、若干ノ身體外景及ビ内景ニ於ケル解剖的及ビ生理的性狀形態ハコノ多少特殊ナル疾病傾向ノ標徴ヲナスコトアリ。換言スレバ、某某ノ標徴ヲ有セル體質ノ人ハ、某某ノ疾病ニ對スル素因多キコトヲ經驗上ニ察知シ得ラルナリ。タトヘバ、上述ノ「卒中質」ト稱セラルルモノハ全身肥滿シ、頸太ク、短ク、顔面紅ヲ潮ス。コレニ反シテ、「癆瘵質」ト稱スルモノハ頸細長ク、胸廓扁平狹隘ニシテ、比較的長ク、骨格纖弱、皮膚菲薄、粘膜加答兒ニ罹リ易シ等ノ事實ヲ示セリ。而シテ斯ノ如ク肺癆ニ罹リ易シト稱セラルトコロノ體質ガ、果シテ全然結核症ニ罹リタル結果ニヨリテ羸チ得タルモノナリヤ、或ハ斯ノ如キ體質、若クハ體質ノ素ハ實ニ結核菌感染以前ニ既存セシヤ否ヤニ就テハ學者ノ意見紛紛タリ。結核症ガ全身ノ榮養ニ不良ノ影響ヲ與ヘ、從テ體質ヲ不良ニスルコトハ事實ナルモ、若干ノ不良體質ニ先天性ノモノ、原發性ノモノアルコトハコレヲ否認スベキニアラズ。若干ノ胸廓形態不良、又、殊ニ前項所說ノ胸廓上口ノ狹窄等ニ就テハ、吾人ノ見ルトコロニ據リ、亦、他ノ諸學者ト齊シクソノ素質ノ先天性存在アルコトヲ信セント欲ス。

蓋、身體ノ「體質」ニ幾多ノ「型」アルコトハ經驗上疑ヲ容レズ、又、吾人ノ經驗上、コノ諸型ト病型トノ間ニ若干ノ關係アルコトモ亦、否拒スベカラズ。但、素因問題ヲシテ甚、紛糾タラシム所以ハコノ體質成立ノ理竝ニ體質ト疾病發生トノ間ノ關係ヲ未、十分學術的精確ニ闡明シ得ザルトコロニ在リ。殊ニ疾病ガ外部ニ顯ハルルニ至ルマデハ往々數年、十數年ノ長キヲ要スルモノアリ、且、體質ガ完備スルハ生後直チニスルニアラズシテ、身體成熟期ヲ待ツモノモ亦、少カラザレバ、吾人

- (1) Rokitsansky
- (2) F. W. Beneke
- (3) J. Bartel
- (4) Virchow

ノ檢索ハコレガタメニ益、困難ヲ感セシムルナリ。

- (6) Stiller
- (7) Habitus enteropticus
- (8) P. Cohnheim

(5) Rössle

故ニ、吾人ハコノ方面ニ於テ尙、研究ノ餘地ヲ有スルモノ少カラザラザラ感ズ。昔年ロキタンスキ氏⁽¹⁾及ビベチケ氏⁽²⁾ノ解剖的研究ニ於ケルガゴトク、又、近時バルテル氏⁽³⁾ガ甚、精力ヲ注ギタル調査ノゴトク、一定ノ疾病ニ於ケル身體諸臟ノ解剖的状態ヲ精究シ、體質ト疾病トノ關係ヲ闡明スルハ決シテ無用ノ業ニアラザルナリ。コノ方面ニ於テウルヒウ氏⁽⁴⁾ハ夙ニ萎黃病ニ於ケル體質ヲ論ジ、大動脈ノ管徑小ニシテ管壁菲ク壁ハ伸展性ニ富ミ、肋間動脈開口部ハ相對性ヲ缺ギ内壁ニ脂肪斑ヲ見ルコト多キコトニ注意セリ。コノ大動脈ノ性質ハ恐ラク必シモ續發變化ト謂フベカラズト雖、コノ際ニソノ原發、續發イヅレナルカノ見解ヲ異ニスルモノ少カラズ。タトヘバ、現今ニテモ癌腫者ト結核患者ノ體格ヲ通觀シ、兩者間ニ於ケル大動脈ノ大サ及ビ血管壁ニ差異ヲ見、コレヲ以テ體質的差別ナリト論ズル人アルニ反シ、肺結核患者ノ大動脈狹小ヲ以テ常ニ原發性狀態トナスハ誤ニシテ、寧、肺結核症ニ因ル貧血性消耗狀態ノ結果ト做スベシト云フノ說アリ。更ニコレニ反シテ、肺癆患者殊ニ年少ノ者ニシテ肺動脈ノ狹小且壁ノ彈力纖維及ビ筋纖維ノ少キコトヲ注意シタル人アリ(ロフスレ氏⁽⁵⁾)。果シテコノ事アリトセバ、コレ恰、前項ニ述ベタル胸廓上口狹窄ノゴトク、肺結核ノ發生ニ對シテ若干ノ素因的關係ヲ有セル體質的要件或ハ所謂「ステヂメント」ノ一ナラズトセズ「ステヂメント」ハ一定ノ病的性質ニ於テ多少規則的ニ見ハレ來ル個個ノ異常ヲ謂フ。又近時經驗上、消化器癌ガ狹細ノ體質(「スチルレル氏⁽⁶⁾」ノ腸下垂質⁽⁷⁾)即、所謂癆瘵質ニ一致スルモノヲ有スル人ニハ稀ニシテ豐廣ノ體質ノ人ニ多シト唱フルモノアリ(コンハイム氏⁽⁸⁾)。要スルニ、斯ノ如キ體質ニ關與スルトコロノ病理解剖的檢索ハ、他ノ臨牀上觀察ト相俟チテ、近時復ビ學者ノ注目ヲ惹クトコロトナレリ。且、比較的幼少時期ニ顯ハレ來ルモノニ在テハ他ニ比シテ純正ニ近キ像ヲ見得ベク、先天性殊ニ遺傳性ニソノ人ニ固著セル體質ヲ認知スルニ利アリ。蓋、病的素因ニシテ遺傳性ノ強キモノハ、往往既ニ早期ニ

ソノ發現アリテ且、屢、顯著ナリ。コレ小兒科醫家ノ間ニ於テ特ニ多ク體質素質ニ對スル注意ヲ惹起セラレシ所以ナルベシ。サレバ種種ノ名目ノ下ニ特殊體質ノ記載セラレテ、近時更ニ頗、人ノ注意ヲ促シタルモノ少カラズ。ロキタンスキ
 ー氏⁽¹⁾、バルテル氏⁽²⁾ノ低度形成體質⁽³⁾、バルタウフ氏⁽⁴⁾ノ淋巴體質、淋巴性クローゼ體質⁽⁵⁾、又、胸腺淋巴
 状態⁽⁶⁾、チェルニー氏⁽⁷⁾ガ唱ヘタル滲出質⁽⁸⁾、スチルセル氏⁽⁹⁾等ノ謂フ薄弱體質⁽¹⁰⁾、佛國コムビー氏⁽¹¹⁾ノ小兒關節炎
 質⁽¹²⁾等コレナリ。

七 遺傳ト疾病素因トノ關係

- (1) Rokitansky
- (2) J. Bartel
- (3) Hypoplastische Konstitution
- (4) A. Paltauf
- (5) Lymphatische Konstitution, Körperkonstitution lymphatisch-chlorotischer Natur
- (6) Status thymico-lymphaticus
- (7) A. D. Czerny
- (8) Exsudative Diathese
- (9) Stiller
- (10) Asthenische Konstitution
- (11) J. Comby
- (12) L'arthritisme chez les enfants

疾病素因形成ノ時期ニ甚、差異アルコトハ前掲諸項ノ解説ニヨリテモ明カナリ。就中特ニ注意ヲ拂フノ要アルハ先天性殊ニ遺傳性ナル疾病素因ナリ。先天性ト遺傳トノ別、竝ニ遺傳ノ理ノ概要ハ前章(疾病原因概論)ニ於テ既ニコレヲ述ベタリ。而シテ疾病原因ニ於ケル遺傳ノ意義ハ主トシテ疾病素因(或ハ「基質」)ノ遺傳ト云フコトニ存セリ。

遺傳性疾病素因ノ存在ガ既ニ出生ノ時ニ於テ或ハ生後間モ無ク分明ナルコトアレドモ、又、多クノ年月ヲ經テ始メテ人ニ知ラルルモノアリ。蓋、コノ事實ハ決シテ怪ムニ足ラザルトコロニシテ、吾人一タビ親子形貌ノ類似ガ兒ノ生長ノ後ニ殊ニ甚、明瞭トナリ、又、男子ノ鬚髯ガ青年期以後ニテ始メテ生長スルコト等ニ想ヒ到ラバ、身體ノ病的状態ノ性質ニモ亦、同様ノ事情アルヲ認知スルニ難カラズ。

疾病素因ノ遺傳性ヲ確カムルハ必シモ容易ニアラズ。蓋、病的變化ノ性質及ビ發現ノ時期ヲ察シ、竝ニ父母近親ノ身體性質ヲ考へ、又、動物ニ於ケル比較研究ヲ參照スルコトハコノ際ニ於テ重要ノ方法ナリトス。即、一、一定ノ疾病或ハ病的變化ガ同一若クハ類似ノ形狀ヲ取テ親子及ビ近親ノ間ニ見ハルルコト、二、親子及ビ近親ノ間ニ於テ所謂「抵抗

弱點」ヲ共通ニ有スルコト、三、一定ノ疾病ノ發現ニ對シ親密ナル關係ヲ有スル一定ノ解剖的構造及ビ生理的機能ニ於テ特殊ノ共通點若クハ類似點ヲ親子近親ノ間ニ認ムルコト、四、シカモコレ等ノ諸點ガソノ根源ヲ母體內及ビ後天性獲得ニ歸スルコトヲ得ズ、又外的要約ノミニテハ、該疾病發生ノ理及ビ個人間ニ於ケル病變ノ差異ヲ説明シ能ハザルコト等ニヨリテ、推測考察シ得ベシシカモ個個ノ場合ニ於テ、ソノ果シテ母體內獲得若クハ後天性獲得ノモノニアラザルヤヲ正確ニ否定シ得ザルモノ固ヨリ少カラズ。

吾人ハ「素因」ヲ中ニ於テ、殊ニ「基質」ヲ字ヲ用ヒタルモノアリ。コレハ殊ニ身體固有ノ状態ノ性質ニ基キテ後來自然ニ疾病若クハ病的状態ヲ現出セシムルモノヲ謂フ。コノ「基質」ハ遺傳性ナルモノニ於テ頗、ソノ特色ヲ窺フベシ。

疾病(若クハ病的状態)ノ遺傳性素因ハ或ハ主トシテ解剖的構造異常ニ依テ見ハレ、或ハ主トシテ生理的機能ノ異常ニ於テ見ハル。又、遺傳的性質ニヨリテソノ本體ノ不可解ナルモノ亦、コレ無キニアラズ。

遺傳性素因(又ハ基質)ニテ顯著ナル解剖的病變ヲ主トシテ見ハスモノハ多ク「先天性畸形」ニ於テ見ルトコロナリ。病的状態ノ中ニ就テ先天性畸形ハ最、多ク又最、明ニ遺傳性「基質」ヲ存在ヲ證スルモノナリ。然レドモ先天性畸形ノ悉クガ遺傳性ニアラザルコトハ固ヨリ明白ニシテ、比較的の多クノモノハ寧、子宮内發育ニ當リ獲得シタルモノナリ。但、今コレヲ除外スルモ、胚種ニ存セル病的基質ニ根據スト推理セザルベカラザルモノ亦、決シテ少カラズ。ソノ中ニ就テ殊ニ遺傳性ナル畸形ハ贅指⁽¹⁾、癒合指⁽²⁾、短指⁽³⁾等ノゴトコレナリ。又、タトヒ、全者ガコノ種類ニ屬セズトスルモ、兔唇、狼咽等ノゴトキモノ

ニモ、亦、遺傳的關係ノ認ムベキモノ無キニアラズ。其他斯ノ如ク外貌ニ甚シキ變形ヲ示サザルモ、亦、畸形若クハ異常態ノ部ニ入ルベキモノ、タトヘバ多毛症・色素缺乏症・色素性及ビ血管性母斑・コロボーマ(虹彩ノ缺損)・斜視ノゴトキ、皮膚及ビ視官ニ於ケル解剖的異常、竝ニ組織畸形ヲ基礎トスル一定ノ腫瘍等、亦、コレニ屬セシムベシ。進行性筋瘦削

- (1) Polydactylie
- (2) Syndactylie
- (3) Brachydactylie

(1) Lossen

ノゴトキ身體組織ノ發育及ビ榮養異常ヲ基礎トスル疾病ガ亦、遺傳性基質ニ據ルモノアリ。顯著ナル異常ガ解剖的・外貌的ナルヨリモ、寧、機能作用ノ上ニ現ハルモノニ於テコレガ源ヲ遺傳性基質ニ求ムベキモノ亦、決シテ稀ナラズ。遺傳性近視ノゴトキノ一例ナリ。又、血管損傷ニ因ル出血ガ容易ニ停止スルコト無キ病的性質（血友病）ノゴトキハ、ソノ本體ガ不明ナルニモセヨ、遺傳性基質ニ因ルコトハ全ク確實ニシテ、能ク數代ニ互リテ遺傳シ（ロツセン氏⁽¹⁾）ノ數代ニ互リテ明細ニ調査シ得タル有名ナル明細表アリ、且、通常男子ニノミコノ病的性質見ハル。コノ基質ハ常ニ女子ニヨリテ遺傳セラルルモ女子ニハコノ病變ノ現ハルコトナク、若クハ極メテ稀ナリ。我國ニ於ケル十數例ノ報告ニ徵スルモ亦、常ニ同一型ヲ示セリ。其他、吾人ハ未、十分ニコレガ解剖的基礎ニ就テ知ルトコロ無キモ、色盲・夜盲ノゴトキ亦、遺傳性病的基質ニ本ツクモノニ外ナラズ。

上述ノ病的現象ハ遺傳性素因或ハ基質ニヨリテ現出スルコト甚、明白ニシテ、殆、『内在原因』自個ヨリ發展シ來レルモノトモイフベシ。又、コレト稍、異ニシテ『内在原因』タル病的素因或ハ基質ハ存スルモ、前者ノゴトク專制的ニアラズ、若干ノ外的要約ト相待チテ始メテ一定ノ疾病或ハ病的状態ヲ成立セシムルモノアリ。但、コレハ前者ニ對シテ斷然タル區劃アルニアラザルナリ。多クノ『疾病』ニ於ケル遺傳性素因ト稱スルモノハ、寧、コノ後者ノ範圍ニ屬シ、ソノ素因ノ解剖的・生理的基礎ニ差異アリ、且、ソノ程度頗、種種ニシテ前者ニ比シテソノ差別實ニ甚、移行的ナリ。結核症ノゴトキ特殊病原性ノモノト雖、ソノ發病ニハ結核菌侵入ノ外ニ幾多ノ素因的要約アルハ前項ニモコレヲ述ベタリ。ソノ胸部骨格ノ形成ニ於テ、又所謂『體質』ニ於テコレヲ閑却スル能ハザルナリ。サレバ結核患者ノ兒ニシテ早クソノ兩親ヨリ離レ傳染ノ危險ヨリ遠ザカリタルモノニシテ、尙、同症ニ罹ルコト多シト云フ說ハコレヲ是認シテ可ナリ。コノ際ソノ『素因』ハ少クトモ一部ハ真正ノ遺傳ニ基ツケリト見テ可ナリ。又、斯ノ如ク某某ノ素質ト稱シ某某ノ資質ト云フモノ、亦、ソノ形成ヲ少クトモ一部分若

(1) Echeverria

クハ大部分『遺傳』ニ歸セシムベキナリ。泰西ニ於ケル痛風ノゴトキ亦、明カニ遺傳性素因ノ認ムベキアリ。神經病・精神病ニ於ケル遺傳性素因モ亦、看過シ去ルベキニアラズ。疾病ノ遺傳性素因ニ二種ノ區別ヲナスベシ。コレハ上文『體質』ノ條下ニテ述ベタルト齊シク、一ハ普汎性ノモノニシテ所謂『體質』ノ柔弱ナルモノ、即、身體抵抗力ノ菲薄ナルモノト、一ハ多少特殊性ヲ帶ビタルモノニシテ、特ニ一定ノ疾病、若クハ病變ヲ惹起シ易キモノトアリ。又、コノ兩者ヲ兼ネ有スルモノアリ。痛風ノ例ノゴトキハ蓋、後者ニ屬セリ。又、肺結核症ニ於テ骨性胸廓ノ異常ハ亦、一ノ素因的要件ヲナシ、且、ソノ遺傳性ナルモノアリ。又、斯ル『體質』ニハ通例普汎性抵抗力ノ菲薄ヲモ見ルナリ。

遺傳ノ理既ニ甚、複雑ナルニ加ヘテ、素因ノ内容亦、頗、多趣ナリ、且、人身體ハ又、絶エズ外界的の要約ノ下ニ立テソノ影響ヲ受クルガ故ニ、タトヒ、同シ遺傳性素因ヲ有スルモノニテモ、ソノ病變發現ノ状態ハ必シモ同一性ノモノノミニアラズ。即、所謂同形ノミナラスシテ又、異形ノ疾患アルナリ。タトヘバ、コレヲ神經疾患ノ或者ニ徵スルニエシズリア氏⁽¹⁾ハ癲癇者一三六人ニ出テタル兒五五三人ヲ調査セシニ、ソノ中、健者ハ唯一〇五人ニシテ、他ノ一九五人ハ小兒期ニ癲癇ニテ死シ、七八人ハ癲癇性、三九人ハ麻痺ノ症狀ヲ有シ、五人ハヒステリー或ハ舞蹈病、一人ハ精神病、一人ハ白痴ナリシト云フ。カカル疾病ノ異形ハ病的素因同一ナルモ外的境遇ノ差異ノタメニ生ツタルコト固ヨリ亦、コレアルベキモ、又、遺傳ノ理及ビ生理的の遺傳現象ニ鑑ミレバ、同一ノ父母ヨリスルモノニシテ、病的基質ガ兄弟姊妹間ニ多少ノ相違アルハ亦、甚、可能ナリ。

又、通例遺傳性素因ニ基ツクト稱セラルル疾病ガ時ニ又、全クコノ事無クシテ發スルコトアリ。コレ或ハソノ主因ヲ外的の要約ニ歸スベク、或ハ一定ノ原因ニヨリテ胚種ニ變化ヲ來シタルニ因ルトモ推測セラル。

以上述べタルゴトク、眞ニ疾病素因ト稱スベキモノハ身體自個ニ存スルコロノ原因的要件ナリ。ソノ在ル處ハ疾病或ハ病變ヲ發生シ可能ナラシメ、若クハコレヲ容易ナラシム。且、コノ身體組織ノ素因何如ハ當ニ疾病發生ニ影響ヲ及ボスノミナラズ、又疾病ノ經過ニモ差異ヲ來タサシム。更ニ疾病ノ發生ニ就テ、コレヲ他方面ヨリ觀察スルニ、身體自個ノ性質何如ニ依リテハ、一定ノ疾病ヲ全然發生セシメサルコトアリ。或ハソノ罹病ノ至テ困難ナルモノ、若クハソノ疾病經過ノ特ニ頗、輕易ナルモノアリ。原因學ヲ講究スルニ當リテハ、又、コノ身體ノ不感受性ニ對シテ特殊ノ注意ヲ拂フコトヲ要ス。所謂「免疫」フコト、コレナリ。蓋、素因ヲ義ハ總括的ニシテ、ソノ内容複雜ナリ。吾人ハ前章ニモ記シタルゴトク「免疫性」ノ缺亡ヲ以テ直ニ「素因」ヲ意義ノ全幅ヲ蔽ヒ盡セリトイフヲ欲セズ。然レドモ、免疫性ノ存スルコロハ即、素因ノ缺如セルトコロナリ、シカモコノ事ノ既ニ先天性ニ全ク固定セルモノアリ。又、元來身體組織ニ、一定ノ疾病素因ノ存タルモノガ、一定ノ理由ニ因リテ、新ニソノ性質ヲ變化シ、素因消失シテ、個人的免疫性ヲ獲得スルコトアリ。原因學上最、多ク興趣ヲ惹クハ殊ニコノ後天性免疫ナリ。

以下聊コノ免疫ニツキテ述フベシ。

免疫

前章ニモ述べタルゴトク、生活體ハ外來ノ「害物」ニ對シテコレヲ防禦スル性質ヲ有セリ。サレバ、屢、身體ニ危害ヲ及ボシ、疾病ヲ惹起セシムル傳染性么微生體ノゴトキハ、常ニ吾人ノ身體ヲ圍繞シテ存シ、傳染ノ機會ハ到ル處ニ存在スルニ拘ハラズ、身體組織ハ能クソノ有害作用ニ抵抗シテ疾病ヲ發生セシメザルノ性能ヲ有セリ。斯ノゴトク、疾病殊ニ傳染病ニ對

- (1) Species
- (2) Artimmunität

シテ不感受性ナルヲ「免疫」ト云フ。

免疫テフ語ハ普通、狹義ニ用ヒラレ、傳染病ニ對シテ不感受性ナルコトノ義ナレドモ、屢、傳染病以外ノ疾病、或ハ病變ニ對シテ不感受性アル場合ニモ亦、適用セラルルコトアリ。ダトヘバ乳兒ハ船暈ニ對シテ免疫性ヲ有スト云フガゴトシ。又、輓近免疫學ノ隆盛トナルニ從ヒ、ソノ範圍、益、擴張セラレ、無生物及ビ么微寄生體以外ノ生物(細胞)ニヨリ起ルトコロノ特殊ノ現象ヲモ「免疫」ト稱スルニ至レリ。ダトヘバ、動物ニ赤血球ヲ注射シ、ソノ體內(血清)ニ、該血球ニ對シテ溶血性ノ作用ヲ有スル物質ノ成生スルヤ、コレヲ溶血性免疫ト云フガゴトシ。ソノ他、凝集及ビ沈降現象モ、廣義ノ免疫ニ屬スルモノニシテ、ソノ範圍頗、廣汎トナレリ。然レドモ、本章ニ於テハ、主トシテ傳染病ニ對スルモノヲ殊ニ後天性免疫ニ就キテソノ大要ヲ述フベシ。

免疫ニ先天性及ビ後天性ノ二種アリ。先天性免疫トハ生來ノ性質ニヨリテ、一定ノ傳染病ニ感受性ノ無キモノヲ云フ。コノ種ノ免疫ハ動物ノ種類(屬)ニヨリ、略、一定セルモノニシテ、コレヲ種屬免疫ト稱ス。コレ素因論中ニモ、既ニ述べタルトコナレバ、ココニハ細説ヲ省略スベシ。

後天性免疫トハ生來感受性ヲ有スルモノガ、自然ノ罹病、又ハ人爲的處置ニヨリテ一定ノ傳染病ニ對シ、獲得セル特殊ノ個體的(個人的)免疫ヲ云フ。

天然痘ニ罹リタルモノガ、コレニ罹ルコトノ稀ナルハ既ニ數百年前ヨリ人ノ知リタルトコロナリ。又、腸窒扶斯・麻疹・猩紅熱等モ一度コレニ罹レバ、通常生涯免疫性ヲ得。コレ等ノ外、濾過性病毒ニヨル傳染病(口蹄病・牛肺周圍炎等)及ビ原蟲病ナルバベシア病(テキサス熱・海岸熱等)、諸種ノトリバノゾーマ病モ罹病又ハ人工的免疫ニヨリテ免疫性ヲ得。又マリアモ反復罹病セルモノハ免疫トナル、亞弗利加ノ或地方ニ於テハ、土人ノ小兒ハ皆、コレニ罹レドモ、成人ノ

罹病ガ只、少數(七・七%)ニ留マレルハ、コレ後天性免疫ニ因ルモノニシテ、熱帶地方ニ屢、見ルトコロナリ。本邦ニ於テモ同様ノ事實アリ、マダリア^マ「わらわやみ」ト稱スルハコレガタメナルベシ。マダリアノ免疫ハ他ノ傳染病ニ於ケルゴトク特殊性ニシテ同種ノマダリア^マニミ不感受ナリ。タトヘバ、四日熱ニ罹リ免疫性ヲ得タルモノモ、三日熱及ビ熱帶マダリア^マニハ免疫性皆無ノモノト同様ニ容易ニ感受ス。多數ノ傳染病ニ於テハ、罹病ニヨリ免疫性ヲ獲得スレドモ、ソノ免疫ノ強サ、及ビ持續期ハ同一ナラズ。天然痘・麻疹・腸窒扶斯ニアリテハ、免疫ノ度強ク且、持續長クシテ生涯ニ互ル、コレニ反シテ、虎列刺實布垚里ニアリテハ免疫持續期短シ。又、ベスト肺炎・インフルエンザ・丹毒等ニ於テハソノ持續期甚、短ク、時トシテ當ニ免疫性ノ獲得無キノミナラズ、却テ疾病素因ノ増加スル觀アリ。肺炎ノ反復傳染ハ稀ナレドモ、人ニヨリテハ數回(五乃至八回)コノ病ニ罹ルコトナキニアラズ。又丹毒ハ反復同一ノ人ヲ侵スコトアリ。

斯ノ如ク自然の罹病ニヨリテ免疫性ヲ得ルノ外、又、人為的ニコレヲ發現セシムルコトヲ得、人工的免疫、即、コレナリ。ゾノ最、顯著ナル例ハ、天然痘種痘ニシテ、天然痘ニ罹レルモノ(人又牛)ノ體液(淋巴液)ニヨリ強度ノ免疫性ヲ生ズ。コレノ病ニ依リテ免疫性ヲ發起セシムルモノニシテ、所謂毒ヲ以テ毒ヲ制スルナリ。

(天) 能働性免疫

- 一、能働性免疫トハ病原體又ハソノ生産物ヲ人又ハ動物體内ニ輸入シテ發生セル免疫ヲ云フ。
- 一、減毒セシメタル生活病原體ニヨル免疫

病原體ノ毒力ヲ減殺シテ、コレヲ人畜ニ注射シ、免疫性ヲ得セシム。ゾノ著明ナル例ハ天然痘ナリ。先、人ノ天然痘毒

(1) Pasteur

ヲ牛ニ感染セシムレバ、ソノ毒ハ牛體内ニ於テ(即、動物體通過ニヨリ)減殺セララルヲ以テ、コレヲ人ニ移スモ極メテ輕度ノ反應ヲ呈スルニ止マリ、シカモ強度ノ免疫性ヲ得ベシ。牛ヨリ得タル天然痘毒含有液ハ即、種痘ニ用フル痘苗ナリ(牛痘痘苗)。

輒近、免疫ニ關スル大研究ヲナシ、現今ノ免疫方法ノ基礎ヲ作りシモノハ佛國ノ碩學バストール氏^のナリ。氏ハ先、鶏虎列刺ノ免疫ニ就キテ研究シ、次テ脾脫疽・豚丹毒・狂犬病ノ免疫ニ關スル攻究ヲ遂ゲ、共ニ皆、成功セリ。ソノ方法ハ動物通過・高温培養・培養液中藥品混和等ニヨリ毒力ヲ減殺シ、コレヲ注射シテ免疫性ヲ生セシムルニアリ。

毒力減殺セラレシモノト雖、時トシテハ強キ傳染性ヲ有シテ死ヲ致スコトナキニアラズ(タトヘバ舊天然痘種痘法)。故ニコノ方法ハ特別ノ場合ヲ除キ、コレヲ人類ニ適用スベカラズ。

二、毒力強キ微量ノ生活病原體ニヨル免疫

コレハ毒力強キ生活病原體ノ致死量以下ノ少量ヲ注射シテ、免疫性ヲ發生セシムルニアリ、虎列刺・室扶斯・バベシア病(テキサス熱・海岸熱)トリバノゾーマ病ハコノ法ニヨリ免疫セシムルコトヲ得。但、コノ方法ハコレヲ毒力強大ナル病原體ニハ應用スルコト能ハズ。タトヘバ脾脫疽菌・鶏虎列刺菌ノゴトキハ何如ナル微量ヲ以テスルモ感受動物ニ致死ノ傳染ヲ致ス。故ニコノ方法ニ依ルコト能ハズ。又、斯ノ如ク毒力強カラザルモ、尙、危険ナルモノハ人體ニ應用セラレズ。タトヘバベスト菌ノ如シ。

三、殺滅セル病原體及ビ病原體生産物ニヨル免疫

高温(通常攝氏五五乃至六五度)乾燥・消毒藥混和等ニヨリテ病原體ヲ殺滅シ、コレヲ注射ス。虎列刺・室扶

(1) Plasmine

斯・ベスト・赤痢ハコノ方法ニヨリテ免疫スルコトヲ得。ソノ他、細菌抽出液・壓搾液(プラズミン)⁽⁶⁾・培養液・罹病動物ノ血液・組織液・滲出液等ノ無菌性濾過液ヲ以テスルモ、同様ニ免疫スルコトヲ得。

外毒素ヲ分泌スル細菌(破傷風菌・實布埤里菌等)ニ於テハ、ソノ培養液及ビ無菌性濾過液中ニ外毒素ヲ含有ス。故ニコレヲ用ヒテ免疫スルコトヲ得。斯ノ如ク處置シテ免疫シタル動物(馬)ノ血清ハ、即、豫防及ビ治療ニ用ヒラルルモノナリ(破傷風血清・實布埤里血清)。

尙、茲ニ特ニ附記スベキハアグレッツシン免疫ナリ。アグレッツシン(傳染病編參照)ハ病原菌ヲ動物體腔(腹腔・肋膜腔)ニ注射スルノ後、此處ニ生成セル滲出液中ニ含蓄セラルルモノニシテ、コノ液ヲ適當ノ方法ニヨリテ殺菌シ、又、濾過シテ無菌トナシ、コレヲ他動物ニ注射スルニ、多量ヲ用フルモ全く無害ナリ。而シテ、コノ注射ニヨリ免疫性生ズ。アグレッツシンハ無害ノ物質ナルヲ以テ、コノ方法ニヨルトキハ前述ノ諸法ト異ナリテ、傳染ノ危険、又、ソノ他ノ障礙ナクシテ免疫セシムルコトヲ得。ソノ他、上述諸法ニヨリテ免疫シ難キモノニアリテモ、コノ方法ニ依ルトキハ、比較的容易ニ免疫スルコトヲ得(鶏虎列刺・豚疫)。コノ二點ハ他法ニ於テ見ザル特殊ノ長所ナリ。

能働性免疫ノ強度及ビ持續期ハ病原體ノ種類及ビ免疫方法等ノ異ナルニ從ヒテ互ニ差異アリ。死菌ヲ以テスルト、生活菌ヲ以テスルトニヨリ差アリ。又、接種物質注入ノ方法及ビ場所ニ關スルコト少カラズ。微毒ハ皮膚傳染ニヨリテ強度ノ免疫性ヲ得。天然痘種痘モ同様ナリ。又、虎列刺菌ニ對シテ腹腔傳染ニヨリ強度ノ免疫性ヲ得タルモルモツトモ、經口ノ傳染ニヨリテ容易ニ斃サル。又、脾脫疽ノ皮膚傳染ニ對シ強度ノ免疫性ヲ有スルモノモ脾脫疽菌芽胞ノ食餌傳染(腸傳染)ニヨリ容易ニ罹病ス。ソノ他、接種物質ノ量モ亦、大ナル關係アリ。天然痘(種痘)ノゴトク極テ微量ヲ用フルモ持續期ノ長キ強度ノ免疫性ヲ得ルモノアリ。往往多量ヨリモ少量ノ方が、却テ強度ノ免疫性ヲ生ズ

ルコトアリ。概シテ言フニ、死菌ハ生活菌ニ比シテ多量ヲ用ヒズンバ、同一程度ノ免疫性ヲ生ゼシムルコト能ハズ。

(地) 受働性免疫

受働性免疫ハ能働性免疫ヲ有セル動物ノ體液(血清)ヲ注射スルニ因リテ生ズル免疫ヲ指シテ曰フ。コレ即、既成ノ免疫性物質含有液(血清)ヲ輸入ナリ。

抗毒素血清ハ定型性ノモノニシテ、實扶埤里血清・破傷風血清、コレニ屬ス。ソノ他、非抗毒素性細菌濾過性寄生體・原蟲ニヨリ、傳染病(脾脫疽・鶏虎列刺・回歸熱・牛ベスト・口蹄病・トリバノゾーマ病・海岸熱)ニ於テモ適當ノ血清注射ニヨリテ受働性免疫性ヲ得、當該傳染病ヲ豫防シ又屢、一たび發生シタル疾病ヲ治愈セシムルコトヲ得。

免疫血清自個ハ毒性ヲ有スルコトナシ。牛ニ一〇〇乃至三〇〇立方仙迷ノ血清(脾脫疽)、人ニ二〇乃至三〇立方仙迷ノ血清ヲ注射スルモ、通常無害ナリ。但、往往、所謂血清病ノ起ルコトアリ。コハ免疫血清ノ特殊毒性ニ基ヅクニアラス、異種血清(蛋白質)ノ作用ニシテ、健康動物ノ血清ヲ注射スルモ同一ノ症狀アリテ發現ス。第二回ノ同種血清注射ニヨリテ起ルトコロノ類似ノ症狀ハ、前者ニ比シ劇甚ナリ、コレ等ハ過敏性現象ニ屬ス(過敏性ノ條下參照)。コレ亦、毒素ニ關係ナキモノナリ。實布埤里血清注射ノタメニ往往頓死ヲ來スコトアルハコノ、過敏性シヨツクニ因ルナリ。

受働性免疫ハ能働性ノ者ニ比シテ、通常ソノ效力弱ク、且、持續期短シ。コレ使用血清ハ通例、異種動物ノモノナルヲ以テ(人ニ用ヒラルル免疫血清ハ多クハ馬血清ナリ)、體内ニ入ルモ、自體ノ蛋白質ト同化シ難ク、一種ノ異物ノゴトクニ作用シテ、早ク排泄セラルルカ、又ハ破壊セラルルガタメニ、ソノ免疫作用モ早ク消失スルナリ。故ニ、同種動物血清ヲ

(1) Ehrlich

用フルトキハ、ソノ持續期及ビ強度ハ能働性免疫ニヨリ得タルモノト大差ナキコト多シ。タトヘバ馬ヨリ得タル破傷風血清ハ馬ノ破傷風ニ對シテハ、ソノ效果、能働性免疫ニ於ケルモノト略、同様ナレドモ、家兎及ビモルモツトヨリ得タルモノハ、馬ノ同病ニ對シテ有效ノ度遙ニ少シ。

抗毒素性免疫血清(破傷風血清、實布埤里血清)ハ一定ノ比例ニ於テ毒素ヲ中和スルコト、猶、通常ノ無機物ノ化合物ノゴトシ(エールリビ氏⁽¹⁾)、故ニ毒素ノ量ノ何如ニ依リテ、コレニ該當スル量ノ免疫血清(抗毒素)ヲ用ヒザルベカラズ。コノ分量ノ關係ガ、豫防及ビ治療上ニ參照適用セラルルコトハ、人ノ善ク知ルトコロナリ。

同一ノ免疫血清ニテモ、ソノ用法何如ニヨリテ、結果ノ大ニ異ナルコトアリ、タトヘバ注射ノ方法(皮下組織、血管内、頭蓋腔(破傷風・ハイチ、メヂン氏病)局所塗布(眼結膜ニ於ケル肺炎菌血清))、注射ノ時期、動物ノ種類ノ異ナルニ依リテ互ニ差アリ。

受働性免疫ハ通常、人工的發生ニ係レドモ、時ニ亦、自然的ニ生成スル特殊ノモノアリ、遺傳免疫、コレナリ。コノ種ノ免疫ハエールリビ氏⁽²⁾ノアプリン及ビリチン(細菌毒素ト性狀酷似セル植物毒ニ於ケル所謂「乳母交換試驗」ニヨリ、コレ眞ノ遺傳性ニアラズシテ、母體內能働性免疫物質ガ胎盤ヲ通過シテ胎兒血中ニ入り、胎兒ニ受働性免疫ヲ得セシムルニ外ナラザルコト明白トナレリ。

同様ノ遺傳免疫(免疫ノ遺傳)即、受働性免疫ハ破傷風、實布埤里ニ於テモ確メラレタリ。又、脾脫疽、鶏虎列刺(家兎)ニ於テモ同様ノ免疫アリ。而シテ管ニ細菌性傳染病ノミナラス、又、濾過性毒ニ因ルモノ(口蹄病)ニモ同様ノ免疫證明セラレタリ。

上述セル眞ノ免疫物質ノ外、他ノ抗體、即、廣義ニ於ケル免疫物質(凝集素等)ガ母體ヨリ胎兒ニ移行スルコトハ、

(1) Gruber

諸種ノ細菌性及ビ原蟲性傳染病ニ於テ、確證セラレタリ。

(人) 複免疫法

複免疫法ハ同一個體ニ前記ニ法ヲ施スノ法ナリ。即、免疫血清注射ヲナシ(受働性免疫)、コレト同時ニ、或ハ時ヲ異ニシテ、病原體又ハソノ生産物ヲ注射ス(能働性免疫)。同時ニ兩者ヲ注射スル場合ニハ、ソノ混合液ヲ同一處ニ注射シ、又ハ兩者ヲ別別ニ異處ニ注入ス。

上述ノゴトク、先天性ノ性質ニヨリ、一定ノ傳染病ニ罹ラザルモノアリ。又自然ノ罹病、或ハ人爲的處置ニヨリテ、一定ノ傳染病ニ對シテ不感受性ナル性能ノ生ズルコトアリ。コレ等免疫ノ生成ニ關シテハ、實ニ無數ノ研究アリテ、重要ナル發見、亦少カラズ。既ニ學理上、竝ニ疾病豫防及ビ治療ノ應用上ニ顯著ナル效果ヲ呈セリ。然レドモ、微細ノ點ニ至ルマデ、闡明解決セラレタルモノハ尙、極メテ少シトイフベシ。

先天性免疫生成ノ理由、タトヘバ鶏、犬ハ脾脫疽ニ罹ラザルノ性質ヲ有シ、又動物ガ虎列刺菌、室扶斯菌ニヨリテ何等ノ症狀ヲ呈セズ、若クハコレヲ呈スルモ、人類ニ於ケルモノト差異アルハ何故ナルカ。コノ問題ニ關シテ、從來多數ノ研究ノ企圖セラレタルニ拘ハラズ、ソノ事由ハ殆、全く不明ニ屬セリ。或ハ體液中ノアレキシンナル抗體ニヨリテ説明セントセシガ、ソノ根據頗、薄弱ニシテ、コレニヨリテハ十分ノ説明ヲ與フル能ハズ。又喰細胞作用ニヨリテソノ成立ノ理ヲ明ニセントシタレドモ、同ジク失敗ニ歸セリ。然レドモ、近者、喰細胞説ノ見地ヨリシテ新ナル解説ヲ試ミ、先天性免疫成立ノ理由ヲバ稍、明ニセルモノアリ(グルーベル氏⁽¹⁾及ビニ木)。次ニ、ソノ要點ヲ述フベシ。

家兎・モルモツトハ脾脫疽ニ感受性強ク、犬、鶏ハ同病ニ對シテ免疫性ヲ有ス。前二者ノ血清ハ同菌ニ對シテ強キ殺菌性アリ、コレニ反シテ、後二者ノ血清ハ、コノ性ヲ有セズ、故ニ血液ノ殺菌性物質ニヨリテコレヲ説明スルコト能ハズ。

犬、殊ニ鷄ノ白血球ハ、毒力強キ脾脫疽菌ヲバ霎時ニシテ貪喰ス、然ルニ、モルモツト及ビ家兔白血球ハ、コレヲ自體內ニ攝取セズ、只接觸スルノミニシテ、該菌ヲ死ニ至ラシム。故ニ單純ノ喰細胞作用ニヨリテハ、コレヲ説明スルコト能ハズ。脾脫疽菌ハ動物體內及ビ適當ノ培養法ニヨリテ被膜^{カフセル}ヲ形成ス。コノ被膜細菌ハ白血球ニヨリ貪喰セラレズ、又、接觸ニヨリテ殺サレズ。モルモツト及ビ家兔ノ皮下組織ニ於テハ被膜^{カフセル}形成セラレ、何等ノ傷害ヲ蒙ラズシテ益、増殖ス。コレ皮下組織内淋巴液ニ殺菌性無キニヨリ、又、被膜^{カフセル}形成セラレシガタメ、他ノ「害物」(白血球等)ノ作用ヲ蒙ラザルニヨルナリ。斯ノ如クニシテ、モルモツト及ビ家兔ハ感受性ヲ有シ、疾病ヲ惹起ス。コレニ反シ、犬及ビ鷄ニテハ、皮下組織ニ於テ被膜^{カフセル}ヲ形成スル暇ナクシテ細菌ハ死滅ス。コレ鷄ニ於テハ、モルモツト及ビ家兔ト異ナリテ、皮下組織内淋巴液ガ強度ノ殺菌性ヲ有スルニ因ル。而シテコノ殺菌性物質ハ鷄白血球ニヨリテ盛ニ生成セラルレドモ、モルモツト白血球ニハコノ性能アルコトナシ。コレ鷄ニ自然の先天性免疫性アル所以ナリ。蓋、コノ説ハ脾脫疽ニ對スル自然免疫ヲバ頗、良ク説明シ得タルガゴトキモ、爾後、他ノ研究者ノ所説ニ據ルニ、被膜^{カフセル}形成ノ意義ニ就テハ、尙、研究ノ餘地アルモノノゴトシ。

後天性免疫ハ先天性免疫ニ比シテ、ソノ成立理由ノ明ナル點少カラズ、且、實地上特ニ必要ナルヲ以テ、次ニコレヲ述フベシ。

後天性免疫成立ノ説明ニ、主要ナルモノニアリ。抗體説・喰細胞説・組織免疫説、コレナリ。

抗體説ハ即、液體説ニシテ、免疫ノ直接ノ原因ヲ、體液ノ作用ニ歸スルモノナリ。

抗體ハ體液中ニ存在スルモノニシテ、ソノ主要ナルモノハ抗毒素ナリ。蓋、後天性免疫ニ於テ、ソノ成立ノ理由ヲ闡明シ、免疫學ニ新紀元ヲ劃セシハ、實布埜里及ビ破傷風抗毒素ノ研究ナリ。抗毒素ハ溶菌素(菌溶解素)・溶血素・凝集素・沈降素等ト共ニ、抗體(即、免疫體或ハ防禦素ニ屬シ、就中前記ノ二抗毒素ハソノ主要ナルモノナリ。

自然ノ罹病・人爲の傳染及ビ毒素注射ニヨリテ、適當ナル動物體內ニ抗毒素アリテ生成ス。コノ物質ハ血液(血清)中ニ多量ニ存在スルヲ以テ、抗毒素トシテハ通常免疫動物血清ヲ使用ス。又細菌性毒素ノ外、植物性(リチン・アブリン等)及ビ動物性毒素(蛇毒・蜘蛛毒等)アリ。ソノ性状、實布埜里毒素等ニ酷似シ、抗毒素ヲ生成セシムルノ性能ヲ有ス。

抗毒素ハ比較的抵抗力強クシテ、攝氏七〇乃至八〇度ノ溫熱ニ逢フモ、著シキ障礙ヲ蒙ラズ。又日光乾燥・腐敗ニヨリ害セラルルコト少シ。コレ免疫血清保存上ニ都合ノ良キ性質ナリ。乾燥セル實布埜里血清ノ硝子管ニ密封サレタルモノハ、殆、永久不變ナリ。抗毒素ノ化學的構造ハ全ク不明ニシテ、非蛋白質性ナリ。

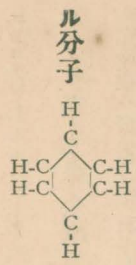
抗毒素ハ毒素ニ作用シテ、ソノ毒性ヲ消滅セシムルヲモツテ、疾病發現スルニ至ラズ、即、免疫成立ス。抗毒素ガ毒性ヲ消滅セシムルノ理由ニ關シテハ、多數ノ研究出デタリ。嘗テ抗毒素ハ酸酵素ノゴトクニ作用シテ毒素ヲ破壊スト考ヘラレシガ、エールヰビ氏⁽¹⁾ノ研究ニ據レバ、酸類ト金屬トガ化合物中中性鹽類ヲ生ズルガゴトク、毒素ト抗毒素ト化合物シテ無毒ノモノトナレルナリト云フ。

抗體、就中抗毒素ノ生成ノ理及ビ毒素ト抗毒素トノ中和ニ關シテ、從來諸多ノ學説出デタレドモ、多數ノ精細ナル實驗ト緻密ナル考慮トニヨリ構成セラレシモノハエールヰビ氏ノ側鎖説⁽²⁾ナリ。蓋、コノ側鎖説ハ抗體生成ノ理由及ビソノ他ノ免疫現象ヲ悉皆説明シ盡スモノニアラズ、又、諸方面ヨリノ駁撃ナキニハアラザレドモ、確カニ輓近免疫ニ關スル最良ノ學説ニシテ、傳染及ビ免疫ノ學理ニ貢獻セシトコ僅少ニアラザラ以テ、次ニソノ大要ヲ述フベシ。

細胞體ハ諸種ノ物質ト化合スルノ性能アリ。所謂營養物ハ消化管ヨリ吸收セラレテ體細胞ニ至リ、ソノ原形質内ニ於テ化學的行爲ヲ營ム。コノ際、營養物分子ガ適當ノ細胞原形質分子ト化合シテ、原形質ノ一員トナリ、ソノ生理的機

能ノ遂行ヲ助クレバ、即、コレヲ同化トイフ。ダトヘバ食物ヨリ來タル物質ガ、肝臟細胞原形質ト化合シ、コレニヨリテ肝細胞ノ生理的物質代謝及ビ其他ノ機能遂行セラルレバ、即、同化ナル現象アリテ發現ス。コレニ反シテ、他種ノ物質ガ身體細胞ニ來リ、ソノ原形質分子ト化學的ノ行爲ヲナスニ當リ、ソノ細胞ノ生理的機能ノ發現ヲ不可能ナラシメバ、コレヲ中毒トイヒ、コノ物質ヲ指シテ毒物ト稱ス。傳染病ニ於テモ、ソノ理ハ同様ニシテ、病原寄生體ヨリ生成セラルル物質ガ(直接又ハ間接ニ)體細胞ニ作用シ、玆ニ中毒即、病的症狀ヲ起スニ至ル。

側鎖説ニ於テハ、外來物質ト體細胞原形質トニ相關ノ原子簇アルコトヲ想像シテ、立論セリ。即、外來物質(榮養物・毒物)ノ分子ニ一定ノ原子簇アリ、一定ノ體細胞ト化合スルノ性質ヲ有ス、コノ原子簇ヲハフトフォール簇⁽¹⁾ト稱ス。又體細胞原形質分子ノ骨子ヲ成ス比較的安定ナル原子簇アリ、コレヲ誘導核⁽²⁾ト云フ。コレ恰モベンツォール分子(C₆H₆)ノC₆ノゴトシ。更ニコノ誘導核ニ連結セル他ノ原子簇アリトシ、コレヲ側鎖又ハレツェプトル⁽³⁾ト名ツク。ベンツォール分子



ノHニ相當スルモノナリ。コノハフトフォール簇ト側鎖トノ兩種原子簇ハ化學的ニ互ニ相適合セルモノニシテ、他種ノ原子簇ト結合セザルコト、恰、錠ト合鍵トノ關係ノゴトシ。毒素分子ニ於テハハフトフォール簇ノ外、尙、特殊ノ機能ヲ有スルトキソフォール簇⁽⁴⁾アリ、體細胞原形質

分子ト化合シテコレニ有害ノ作用(中毒即、病的變化)ヲ起サシム。

斯ノ如ク、毒素分子ニハ二種ノ原子簇アルコトヲ想像ス。コノ兩者ガ細胞原形質ノ一定ノ原子簇ニ、特殊ノ親和力ヲ有シ、ソノ化合ニヨリ原形質内ニ有害ノ變化生成ス。而シテソノ結合ハ、先、ハフトフォール簇ガ細胞ノレツェプトル簇ト結合シ、然ル後トキソフォール簇ガ結合スルナリ。斯ノ如キ化學的變化ニ起因シテ破傷風・實布埜里ノゴトキ疾病ノ發現スルヲ見ル。

- (4) Toxophore Gruppe
- (1) Haptophore Gruppe
- (2) Leistungskern
- (3) Receptor

(1) Toxoide

毒素分種々ノ原因(長時ノ保存等)ニヨリ、ソノ毒性ヲ失フモ、抗毒素ヲ生成スルノ性能ハ、有毒ナル毒素ト同様ナルモノアリ。此ノ如キ變化シタル毒素ヲトキソイド⁽¹⁾ト稱ス。コレ通常ノ毒素分子ガトキソフォール簇ヲ失ヒテ、只ハフトフォール簇ノミヲ有スルモノナリ。

毒素ノハフトフォール簇ガ、細胞原形質ノレツェプトルニ結合セバ、コノレツェプトルハ飽和スルヲ以テレツェプトルトシテノ機能ハ消失ス。コレ細胞ニ於テ一ノレツェプトルノ缺損ヲ來セルナリ。ココニ於テ、コノ缺損ヲ補充センガタメニ、細胞ハレツェプトルノ再生ヲ致ス。而シテコノ際、營ニ單純ノ補缺代償ノミナラズ、却テ再生過剩(過剩代償)ヲナス。而シテ過剩ノレツェプトルハ、細胞自個ニハ不必要ナルヲ以テ、細胞原形質分子ヨリ離脱シテ血液中ニ入り、體内ヲ循環ス。コノ遊離セルレツェプトル、即、側鎖ハコレ抗毒素ナリ。今體内(體液内)ニ更ニ毒素ノ入り來ルモノアラバ、ソノ毒素ノハフトフォール簇ハ遊離セルレツェプトル、即、抗毒素ト特殊ノ親和力ヲ有スルガ故ニ、兩者ハ互ニ相結合ス。カク毒素ノハフトフォール簇ハ結合ノタメニ、飽和セルルヲ以テ、毒素分子ハ原形質分子ト化合ラ營ムコト無ク、從テ細胞ニ對シテ何等ノ有害作用ヲ逞ウスルコト能ハズ。換言セバ、毒素ハ無害トナレリ。コレ即、抗毒素性免疫ノ本體ナリ。故ニレツェプトルハ細胞ニ於テハ毒素ノ有害作用ヲ媒介シ、血液中ニアリテハ抗毒素トナリ、毒素ノ作用ヲ妨グ。

トキシイドハトキシフォール簇ノ消失セル毒素ナレドモ、ハフトフォール簇ニハ異常ナキヲ以テ、コノモノ細胞ノレツェプトルト結合シ、ソノ再生ヲ促シテ、過剩代償ヲ起スガ故ニ、抗毒素生成機能ハ尋常ノ毒素ニ於ケルニ異ナラズ。故ニ毒性ナキモ、抗毒素アリテ生成ス。エールヰビ氏⁽²⁾ハコノ抗毒素性免疫ノ學說ヲ擴張轉用シテ、他ノ免疫現象(溶菌・溶血・凝集・沈降等)ヲモ説明セリ。

上文述ベシゴトク、エールヰビ氏ノ臆説(側鎖説)ニ據レバ、通常吾人ガ見ルトコロノ化合ト同様ニ、毒素ハ抗毒素ト

(2) Ehrlich

(2) Pfeiffersche Phänomen (1) Arrhenius und Madsen

結合シテソノ毒性ハ中和セラル。近者、コノ化合説ニ對シテ、有力ナル反對説出テタリ(アレニウス氏及ビマドセン氏等)。ソノ説ニ據レバ、毒素及ビ抗毒素ハコロイド(膠質)ノ性質ヲ有シ、ソノ反應ハ純粹ナル化學的ニアラズシテ、物理化學的ナリトイフ。

少數ナル毒素性傳染病(破傷風・實布垔里)ニ於テハ、抗毒素ニヨリテ、明白ニソノ免疫ノ理ヲ説明シ得レドモ、ソノ他ノ大多數ニ於テハ、免疫發生ノ理由ハ全く明瞭ナラズ。

抗體中、抗毒素ニ次ギテ、重要ナルハ溶菌素ニシテ、コレモ亦、諸種ノ傳染病免疫ニ至大ノ關係アリ。依リテ次ニソノ大要ヲ述ベン。

自然的、又ハ人爲的傳染ニ依ル罹病者ノ血清ハ、當該病原體ニ對シテ、殺菌性ヲ有スルモノアリ。又所謂バイエル氏現象(細菌殊ニ虎列刺菌・室扶斯菌ヲ以テ免疫シタル動物ノ腹腔ニ當該細菌ヲ注入スレバ、細菌體ハ顆粒狀ニ分解シテ溶融ス)モ同様ニ、體液中ニアル溶菌性物質ニヨリテ、細菌ノ殺滅ヲ示スモノナリ。コノ溶菌素ハバイエル氏派ノ學者ガ、依テ以テ免疫ノ理ヲ説明セントスルモノナレドモ、溶菌ノミニヨリ免疫現象ヲ完全ニ解決スルコトハ至難ナリ。ソノ理由ハ次ノゴトシ。

室扶斯・虎列刺等ニ於テハ、罹病後一定時期間(室扶斯ニテハ發病後數ヶ月以内)、抗體・溶菌素・凝集素等ノ存在、證明セラルレドモ、ソノ以後ハ抗體、スベテ消失ス。然ルニ、室扶斯ニ罹リタルモノハ、通常生涯ニ互ルトコノ強度ノ免疫性ヲ有セリ。又、コレト反對ニ、人工的免疫ニヨリテ體內ニ多量ノ溶菌素發生セルニ拘ハラズ、ソノ動物ガ、新ナル傳染ニヨリテ斃ルルコト屢、コレアリ(室扶斯菌・虎列刺菌)。又、天然痘免疫ハ、頗、強度ナルニ拘ハラズ、體中ニ何等ノ抗體、發見セラレズ。脾脫疽・鶏虎列刺モ亦、コレト同ジク體內ニ抗毒素又ハ溶菌素ヲ認メズ。ソノ他免疫性アルモノノ體內ニ、

(1) Phagozytentheorie
(2) Metschnikoff

毒力強キ細菌包藏セラルルニ拘ハラズ、何等ノ症狀ヲ呈セザルモノアリ(室扶斯菌・虎列刺菌・實布垔里菌・脾脫疽菌・鶏虎列刺菌・葡萄狀化膿球菌・スピロベータ等)。又、原蟲性傳染病ニ對シテ免疫性ヲ得タルモノノ體內ニ有毒ノ病原體存在スルコト稀ナラズ(トリパノゾーマ・バベシア・テキサス熱・海岸熱)マテリヤフラスモチウム。

コレニ由リコレヲ觀ルニ、體液(血液)中、特殊抗體(溶菌素・凝集素等)ノ含量ハ、免疫性ノ強弱ト並行セズ、又強度ノ免疫性ヲ有スル身體内ニ、何等ノ抗體ヲモ發見スルコト能ハザル場合アリ。ソノ他、虎列刺菌等ニ因リ生成スル溶菌素ハ、特殊性ニアラズシテ、他ノ病原菌及ビ非病原菌ニ因リ得タルモノト、共通ノ溶菌作用アリト云フ説アリ。故ニ免疫ヲ惹起スルモノハ、既知ノ抗體(溶菌素等)以外ノモノニコレヲ求メザルベカラズ。然レドモ溶菌素ガ、免疫ニ重大ノ關係アルコトハコレヲ否定スベカラズ。時トシテ免疫現象成立ノ重要ナル要件ヲナスコトアリ。現今、抗體ノ研究ニ造詣深キ學者ノ説ニ據レバ、溶菌素等ハ免疫物質自個ニアラザルモ、免疫ノ標徴ト看做スコトヲ得。コレニ反シテ、コレ等抗體ノ缺如ハ、必シモ免疫ノ不成立ヲ示スモノニアラズ。

上述、抗體説ニ次ギテ、必要ナルハ、喰細胞説ナリ。メテニコツフ氏ハ、喰細胞説論者ノ鼻祖ニシテ、且、今日モ尙、熱心ナル唱道者ナリ。氏ニ據レバ、喰細胞ハ管ニ傳染及ビ免疫ニ關シテ、重要ノ意義ヲ有スルノミナラズ、コノモノハ又榮養・炎症・疾病治療等ノ諸現象ニ至大ノ關係ヲ有セリ。コノ喰細胞ノ主要ナルモノハ白血球ナルガ故ニ、喰細胞ト白血球トハ殆、同意義ヲ有スルモノトス。

細菌性(及ビスピロベータ性)傳染病ニ於テ、病原體ガ白血球内ニ攝取セラルルコトハ、動物體(又、人體)内及ビ試験管内ニ於テ、屢、吾人ノ目撃スルトコトナリ。葡萄狀化膿球菌・連鎖狀化膿球菌・虎列刺菌・室扶斯菌・脾脫疽菌・回歸熱・スピロベータ等ニ於テハ、容易ニコノ現象ヲ見ルコトヲ得。

(1) Ehrlich

ザレドモ、多少ノ免疫性發現ヲ示スコトナキニアラズ。
 人類ニアリテ、悪性腫瘍(癌腫)ニ對スル後天性免疫ノ生成何如ハ未、全ク明カナラズ。細菌學ニ於テ、常ニ用ヒラルル方法ヲ以テ、人ニ人工的免疫法ヲ施シシモ、吾人ハ未、著明ナル陽性ノ成績ヲ得ズ。又、癌腫患者ノ血中ニ特殊ノ抗體(凝集素沈降素等)生成ストノ說アレドモ、抗體ト免疫トノ關係及ビテノ意義ニ就キテハ、殆、全ク暗黒ノ裡ニアリ。
 動物腫瘍(癌腫・腺癌腫・肉腫・軟骨腫等)ノ移植可能ナルモノ發見セラレシ以來、腫瘍免疫ニ關スル研究勃興シ、動物ノ種類ニヨリ腫瘍ノ發生及ビ移植ニ對スル感受性ニ差異アルコト明瞭トナリタル外、(素因ノ條下參照)、又、後天性免疫ノ生成モ略、確實トナレリ。
 エールリビ氏⁽¹⁾及ビシノ他ノ學者ハ、腫瘍細胞ヲ恰、一種ノ寄生體ノゴトクニ處置シ、細菌學ニ於テ日常用ヒラルル方法ニ依リ、腫瘍ニ由來スル後天性免疫生成ニ就キテ研究セシニ、(研究者ニヨリシノ成績必シモ一致セザレドモ)、概、陽性ノ結果ヲ得タリ。
 傳染病免疫ニ於ケルゴトク、腫瘍免疫モ亦、能働性及ビ受働性ノ二者ニ分ツコトヲ得ルナリ。能働性免疫ニアリテハ腫瘍組織又ハコレニ人工的處置ヲ施シテ『毒力』等ニ變化ヲ生ゼシメシモノヲ動物ニ接種スルニ、動物ハコレニ依リ、爾後ノ腫瘍接種ニ對シ、感受性ヲ失ヒ、腫瘍ハ全ク發育セザルカ又ハ一タビ多少ノ發育ヲ爲スモ、早晚吸收セラレテ消失ス。斯ノ如キ感受性ノ消失又ハ減退ノ程度ハ、腫瘍及ビ動物ノ種類、又、免疫方法ノ何如ニヨリテ差異アリ。受働性免疫ニ關シテハ吾人ノ知ルトコロ、甚、少シ。
 傳染病ニ於ケル免疫性ハ、特殊性ナレドモ、腫瘍ニ於テハ必シモ然ラズシテ、共通ノモノ多シ。即、一定種ノ癌腫ヲ以テ

(1) Ehrlich
 (2) Panimmunität
 (3) Atrepsie
 (4) Atreptische Immunität

(5) Anaphylaxie

免疫セバ、同種ノ癌腫ニ對シテノミナラズ、又、他種ノ癌腫・肉腫等ニ對スル免疫性發生ス。而シテ又、コレト反對ニ肉腫等ヲ以テ免疫スルモ同様ナリ。斯ク共通ナルヲ以テ、エールリビ氏⁽¹⁾ハコレヲ共通免疫⁽²⁾ト名ツケタリ。斯ノ如キハ、雷ニ腫瘍間ニ於テ然ルノミナラズ、又、健能組織(内臓・胎兒組織等)ヲ以テスルモ、腫瘍ニ對スル免疫性ヲ獲得セシムルコトヲ得。免疫性發生ノ理ハ大多數ノ傳染病ニ於ケルゴトク、腫瘍ニ於テモ亦、殆、全ク不明ナリ。エールリビ氏ニ據レバ、腫瘍發育ニ際シテ特殊ノ(假定的)榮養物質ヲ必要トスルヲ以テ、若、コノ物質缺如セバ腫瘍發育セズ。腫瘍免疫中コレニ屬スルモノアリ。コレヲアトレプシー⁽³⁾(榮養缺如ノ義)或ハアトレプシー性免疫⁽⁴⁾ト稱ス。
 コノ憶說ハ甚、巧妙ナレドモ、シカモ反對說モ亦、少カラズ。コノ說ノ根據ハ未、全ク確實ナリトイフコト能ハズ。

過敏症

病原性么微生體及ビシノ生産物ノ人畜體內輸入ニヨリテ、當該疾病ニ對スル免疫性ノ發現ヲ招致シ得ルコトハ、已ニ前章ニ述ベタルガゴトシ。一見コレト反對ノゴトクニシテ、シカモノ本體、相酷似シ、原因學及ビ疾病發生論中、重要ノ部門ニ屬スルモノヲ『過敏症』⁽⁵⁾トス。蓋、過敏症ノ學說ハ、最近時、勃興シタルモノニ係リ、現今尙、研究ノ初期ニ屬シ、多數ノ有益ニシテ興味アル事實續續發見セラレシニ拘ハラズ、尙、ソノ說ハ假定ノ基礎ノ上ニ立ツモノ少カラズ。熱心ナル研究者ハ、雷ニ傳染及ビ免疫ノミナラズ、又、子癩ノ發生・分娩ノ生理等ヲモ、一ノ過敏症現象ニヨリテ解說セント試ミタリ。然レドモ、過敏症ノ領域が果シテ然ク廣大ナルモノナリヤ否ヤハ、將來研究ノ大成ヲ俟チテ、始テコレヲ斷定スルヲ得ベシ。ココニハ、コノ過敏症ニ就キテ、只疾病ノ原因ニ關スル、必要ノ概念ヲ得レバスナハチ足ルヲ以テ、極メテ大要ヲ述フルニ止ムベシ。

(1) E. Friedberger

動物(又ハ人類)ニ於テ、ソノ體內蛋白質ト、異種ノ蛋白質トヲ、消化管以外ノ部分ヨリ、體內ニ送入シ、更ニ一定時ヲ經テ、再、同一ノ蛋白質ヲ注射ストキハ、ソノ分量ハ敢テ有害ト看做スベカラザルニモ拘ハラズ、一種ノ中毒様、又ハ傳染病様ノ症狀アリテ發現ス。コレヲ過敏症ト稱ス。異種蛋白質ガ消化管ヲ經テ體內ニ輸入セラルルヤ、通常消化液ニヨリテ同化セラレ、體內蛋白質ト同種ノ者ニ化スルガ故ニ、過敏症ハ固ヨリ發現セズ。但、甚、多量ヲ攝取スルカ、又ハ消化管ガ病的狀態ニアルトキハ、異種蛋白質ハ一部分消化セズシテ、ソノ儘吸収セラレ、過敏症ヲ起スコトアリ。

免疫發生機能ニ於テ、抗體ノ闡明セラレタルモノアルガゴトク、過敏症發生ニ際シテモ同ジク抗體ノ生成アリ。過敏症對^チ抗素(免疫元)、即、過敏症ノ起原トナリ得ベキモノハ、動物性(諸種血清・牛乳・卵白・コブラ毒・脾液等)及ビ植物性蛋白質(花粉蛋白質・細菌及ビソノ生産物等)ナリ。而シテ概シテ送入セラルベキ動物體、或ハ人體ノ蛋白質ト異種ナルコトヲ必要ノ條件トナセドモ、最近ノ研究ニ據レバ、同種蛋白質、ダトヘバ同種動物ノ水晶體蛋白質ヲ輸入スルモ、尙、過敏症ヲ發生セシメ得ト云フ。加之、他種動物ノ水晶體蛋白質ヲ以テスルモ、齊シク過敏症ヲ喚起セシメ得ルガ故ニ、コハ動物ノ種類ニ對シ、固有ナラズシテ一定ノ臟器ニ特殊ナル關係ヲ有スルモノトスベシ。コレ等ノ對^チ抗素ヲ消化管以外ノ皮下組織・靜脈内・腹腔内等ヨリ體內ニ送致シ、潜伏期(必シモ一定セザレドモ通常十日内外)ヲ經過シテ再、同一ノ蛋白質ヲ注射セバ、過敏症發現ス。潜伏期經過後、過敏症性反應ヲ來シ得ル期間ハ、ホルモツトニ於テハ二年間、人ニ於テハ五年間マテ持續シ得ト云フ。理解シ易カラシガタメニ、左ニフリードベルゲル氏⁽¹⁾ノ實驗ヲ述ベシ。健康ナル羊血清(〇・〇〇〇一瓦)ヲホルモツトノ皮下組織ニ注射シ、凡、十日(潜伏期)ヲ經テ再、同一血清(〇・〇〇〇五瓦)ヲ靜脈内ニ注射スルニ、動物ハ五分間以内ニ窒息症狀ヲ呈シテ斃ル。若、第二回ニ於テ腹腔内注射ヲ施サバ、反應輕度ニシテ經過延長シ、死ニ至ラザルコトアリ。注射量ハ極メテ微小ナルモ尙、能ク反應ヲ呈ス。ダトヘバ馬血清ヲ以テホルモ

(2) Antianaphylaxie

(1) E. Friedberger

ツトニ試驗ヲ施スニ、第一回ニハ〇・〇〇〇〇一瓦ヲ皮下ニ、第二回ニハ〇・〇〇〇一瓦ヲ靜脈内ニ注射スルモ、能ク過敏症ヲ起シテ死ヲ致ス。

過敏症發生ノ理ハ、溶血現象或ハ補體結合作用等ト同様ニシテ、補體ノ存在ニヨリ對^チ抗素(免疫元)ト抗體ト結合シ^テ過敏毒ト稱スル毒物ヲ形成ス。コノ毒物ハ動物體內ニ於テ形成セラルルノミナラズ、又試驗管内ニ於テモコレヲ生成セシムルコトヲ得(フリードベルゲル氏⁽¹⁾)。試驗管内毒物生成ノ一例ヲ舉グレバ、馬血清(對抗素)ト馬血清ヲ以テ處置シタル家兔血清(抗體)トヲ試驗管内ニ於テ混ズレバ沈澱ヲ生ズ。コノ沈澱ノ上澄ヲ去リ、沈澱物ヲ生理的食鹽水ニテ洗滌シタル後、適當ノホルモツト血清(補體)ヲ加ヘ、一定時ヲ經テコレヲ遠心器ニテ沈澱セシムレバ、ソノ上澄液中ニ過敏毒存在ス。コレヲ動物ニ注射スルニ、定型性ノ過敏症ヲ發生スルヲ見ル。

潜伏期中ニ於テ、第二回注射ヲ施スカ、又ハ潜伏期經過後、尙、過敏性ヲ有スル時期ニ於テ、致死量以下ヲ注射スルトキハ、動物ハ過敏症性⁽²⁾シツクヲ起サズシテ恢復シ、爾後ノ注射ニヨリテハ何等ノ反應ヲ呈セズ。コレヲ抗過敏症ト稱ス。

傳染病ニ於テ能働性及ビ受働性免疫アルガゴトク、過敏症ニ於テモ亦、能働性ト受働性トアリ。上文ニ述ベシモノハ、即、能働性過敏症ナリ。コノ過敏症ヲ得タル動物ノ血清中ニ抗體形成セラル。故ニコレヲ他ノ動物ニ注射セバ、ソノ動物ハ受働性(移植性)免疫ヲ獲得シ、對抗素注射ニヨリ過敏症ヲ發生ス。

人類ニ發呈スルトコロノ病的現象ニシテ、過敏症ニ屬スルモノ少カラズ。ソノ一二例ヲ舉グレバ、最、著明ナルハ所謂血清病ナリ。血清病ハ治療血清(實布埜里血清等)ヲ注射スル際ニ、往往見ルトコロニシテ、八日乃至一二日ノ潜伏期ヲ經テ、發熱・發疹(蕁麻疹)・淋巴腺腫脹・關節痛及ビ筋肉痛等ヲ來シ、數日乃至數週間後ニ消失ス。第一回注射

後、凡、十日乃至四十日間ニ於テ、第二回注射ヲ施サバ、第一回注射ニヨリ起リシモノニ類似セル症狀ヲ來シ、往往死ヲ招クコトアリ。第一回注射ニヨリ起ル血清病ハ、注射血清ノ一部分ガ抗体トナリ、他ノ一部分ハ變化セズシテ殘留シ、第二回注射ニヨル新ナル血清ニ相當スル作用ヲナシ、輕度ノ過敏症ヲ發生スト云フ。ツベルクリン反應(皮下注射ニヨル反應・皮膚反應・眼反應)モ一種ノ過敏症現象ニ屬ス。又、食物及ビ藥品(母子・蝦・牛乳・鶏卵・ヨードフォーム等)ニ對スル特異性(禁忌症)中、過敏症ニ屬スルモノアリ。傳染病(タトヘバ肺炎)ノ本體及ビ發熱ヲ過敏症性現象トシテ説明スル人アレドモ、現今ニ於テハ、ソノ說ノ根據、頗、薄弱ナルモノトイハサルヲ得ズ。

參考文籍

疾病素因

- 足立文太郎 本邦人脈管調査(人類學上ノ關係ニ就テ)第一報、東京醫學會雜誌第十卷第二十四號、明治二十九年。
 Beiträge zur Anatomie der Japaner. Die Statistik der Muskelvarietäten. Zeitschrift f. Morphologie u. Anthropologie. 1909. XII, S. 261.
 Bada, E., Verhandl. des Comités f. Krebsforsch. 1902. I, S. 46.
 有馬龍吉 Über die Typhustoxine u. ihre pathogene Wirkung. Centralbl. f. Bak. Orig. 1912. LXIII, S. 424.
 Bartsch, J., Über Konstitution u. Krankheit. Verhandlung d. Deutsch. Path. Gesells. 1910. XIV, S. 174. Diskussion: Bencke, Hauser, Dietrich, Rösle.
 Bartsch, J., Über Morbidität u. Mortalität des Menschen, zugleich ein Beitrag zur Frage der Konstitution. 1911.
 v. Baumgarten, P., Die Lehre von den Krankheitsanlagen etc. *Kyzeil u. Marzhandl*, Handbuch der allg. Pathologie. 1908. I, S. 363.
 v. Baumgarten, P., Über das Verhältniss von Perlsucht u. Tuberkulose. Berl. klin. Wochenschr. 1901, S. 894. Arbeiten aus dem pathol. Inst. zu Tübingen. 1894-1899. II, S. 368. (*Gäster, R.*).
 Bencke, F. W., Die anatomischen Grundlagen der Konstitutionsanomalien des Menschen. 1878. 其他.
 Birch-Hirschfeld, F. V., Über den Sitz u. die Entwicklung der prim. Lungentuberculose. Deutsches Archiv f. klin. Med. 1899.

IXIV, S. 58.

- Bowry, P., Predisposition et Immunité. *Bouehandl*, Traité de path. générale. 1895. I, p. 387.
 Chauvignard, G. et Catoigne, J., Lésions experim. du foie d'origine splénique. Archives de méd. exp. et anat. path. 1901. XIII, S. 321.
 Clemens, F. G., The Geography of Disease. 1903.
 Cohnheim, J., Die Tuberkulose vom Standpunkte der Infektionslehre. *Gem. Abhandlungen*. 1885, S. 679.
 Cohnheim, P., Die Körperkonstitution beim Krebs der Verdauungsorgane. *Zeitschr. f. Krebsforschung*. 1911. X, S. 317.
 Comby, J., L'urémie chez les enfants. Arch. de méd. des enfants. 1901. IV, p. 1. L'arthritisme chez les enfants. Arch. de méd. des enf. 1902. V, p. 1, 65.
 Cornet, G., Die Tuberkulose. *Neulings* Spec. Pathologie u. Therapie. 1899. XIV, 2te Hälfte, II. Abt.
 Cserny, AD., Die exsudative Diathese. Jahrbuch f. Kinderheilkunde. 1905. LXI, S. 199.
 Escherichia (*Schulmeyer*), Vererbung u. Auslese. etc. 1903. S. 91. (=據ル)
 Esch, Über Krankheitsdisposition. Fortschritte d. Medizin. 1908. S. 705.
 Escherich, Th., Studien über die Morbidität der Kinder in verschiedenen Altersklassen. Jahrbuch f. Kinderheilkunde. 1900. II, S. 1.
 Freund, W. A., Der Zusammenhang gewisser Lungen-Krankheiten mit primären Rippenknorpelanomalien. 1859. Thorax-Anomalien als Predisposition zu Lungengphthise u. Emphysem. Berl. klin. Wochenschrift. 1902. S. 1, 29.
 Friedrich, J. K., Der Status lymphaticus. (Kritisches Sammelreferat) Zentralbl. f. Grenzgebiete d. Med. u. Chirurgie. 1900. III, S. 465.
 富士川游 日本疾病史「明治四十五年」第一六九頁。
 Goldmann, E. E., Anatomische Untersuchungen über die Verbreitungswege läsartiger Geschwülste. Beitr. z. klin. Chirurgie. 1897. XVIII, S. 595.
 Gundobin, N., Die Eigentümlichkeiten des Kindesalters. Jahrbuch f. Kinderheilkunde. 1907. LXXV, S. 720.
 Hahn, M., Natürliche Immunität (Resistenz). Handbuch der path. Mikroorganismen. 1904. IV, 1, S. 266.
 Hankin, E. H., Über das Alexin der Ralte. Centralbl. f. Bak. 1892. XI, S. 722.
 v. Hensenmann, D., Die anatom. Grundlagen der Disposition. Die deutsche Klinik. 1903. I, S. 665.

- v. *Hansen*, D., Über das konditionale Denken in der Medizin. 1912.
- Hart*, C., Die anatomischen Grundlagen der Disposition der Lungen zu tuberkulöser Erkrankung. *Lubarschs Ergebnisse*. 1910. XIV, 1, S. 337.
- Hersheimer*, G., Patholog. Anatomie der kongenitalen Syphilis. *Lubarschs Ergebnisse*. 1908. XII, S. 539, 545.
- Hirsch*, A., Handbuch der histologisch-geographischen Pathologie. 1881-1886.
- 伊東結廬 小兒ノ疾病素因『日新醫學』第一卷第九卷明治四十五年(第三十一頁)。
- 北里柴三郎 和牛ノ結核ノ關係ニ就テ『細菌學雜誌』明治三十七年(第五百四十九頁)。
- Kitt*, Th., Impfrotz bei Waldmäuse. *Centralbl. f. Bak.* 1887. II, S. 241.
- Koch*, R., Die Bekämpfung der Tuberkulose unter Berücksichtigung der Erfahrungen etc. 1901. S. 549.
- Koch*, R., Berichte über die Tätigkeit der Malariaexpedition. *Deutsche med. Wochenschrift*. 1899-1900. 殊ニ Dritter Bericht. 1900. S. 281, 296.
- Krehl*, L., Pathologische Physiologie. VII. Aufl. 1912.
- Lubarsch*, O., Infektionswege u. Krankheitsdisposition. *Lubarschs Ergebnisse der allg. Pathologie*. 1896. I, S. 217.
- Marchoux* et *Simond*, Etudes sur la fièvre jaune. *Quart. Mémoire. Annales de l'Inst. Pasteur*. 1906. XX, S. 167.
- Martin*, F., Die Vererbbarkeit des konstitutionellen Faktors der Tuberkulose. *Berliner klin. Wochenschrift*. 1901. S. 1125.
- Mendelsohn*, L., Rippenknorpelanomalien u. Lungentuberkulose. *Archiv f. Kinderheilkunde*. 1904. XXXVIII, S. 57.
- Metchnikoff*, E., Studien über die Natur des Menschen (獨逸譯). 1904. S. 319.
- 三宅 彌 本邦ニ於テノ膽石症ニ就テ『日本外科學會雜誌』第十三期(第三號)大正元年。
- Müllmann*, M., Das Altern u. der physiologische Tod. *Sammlung anatom. u. phys. Vorträge u. Aufsätze*. 1910. Heft 11.
- Nannay*, B., Einleitung zum Lehrbuch der Greisenkrankheiten von *J. Schwalbe*. 1909. S. 3.
- Nussert*, E., Klin. haematol. Mitteilungen. *Wiener klin. Wochens.* 1892. No. 3, 4.
- v. *Noorden*, K., Die Bleichsucht *Volkmanns spez. Path.* 1897. VIII, 2.
- Oestreich*, R., Die interne Behandlung des Krebses mit Antitumum (Chondroitinschwefelsaurem Natrium). *Zeitschr. f. Krebsforschung*. 1911. XI, S. 44.
- Orth*, J., Präcarcinomatöse Krankheiten u. künstliche Krebse. *Zeitschr. f. Krebsforschung*. 1911. X, S. 42.
- Parkuf*, A., Über die Beziehungen der Thymus zum plötzlichen Tod. *Wiener klin. Wochenschrift*. 1889. S. 877. 1890. S. 172.

- Ribbert*, H., Der Tod aus Altersschwäche. 1908.
- Robitansky*, C., Handbuch d. Path. Anatomie. 1844. (*Bartel* = 據ル)
- Röske*, R., Innere Krankheitsursachen. Über Disposition. *Aschoffs Patholog. Anatomie*. II. Aufl. 1911. I, S. 10.
- 志賀 彌 日本種鼠癩ニ關スル研究『外科』ノトキキ』『醫學』五十年第一卷(明治四十四年)第三十一頁。
- Schmidt*, M. B., Die Verbreitungswege der Karzinome etc. 1903.
- v. *Stubenrauch*, L., Die Lehre von der Phosphornekrose. *Volkmanns Sammlung Klin. Vorträge*. Chirurgie. 1901. No. 303.
- Stiller*, B., Die asthenische Konstitutionskrankheit. 1907. *Habitus phthisicus u. tuberculöse Dyspepsie*. *Berl. klin. Wochenschr.* 1905. S. 1201.
- Treherz*, R., Die Cellularpathologie. IV. Aufl. 1871. S. 267. (Chlorose). Die krankhaften Geschwülste. 1864-1865. II, S. 404.
- Wieland*, E., Über Krankheitsdisposition. *Beihft zur Med. Klinik*. 1908. Heft 4.
- Wysokowitsch*, W., Beiträge zur Lehre von der Endocarditis. *Vierteljahr Archiv*. 1886. CIII, S. 301.
- Zerner*, H., Beiträge zur Kenntnis der durch Abstammung u. Entwicklung bedingten körperlichen Schwächenanomalien. *Volkmanns Sammlung klinischer Vorträge*. *Innere Medizin*. 1912. No. 212/13.
- 醫學ニ關スルキモノノ説ニ載ヤス

免疫 過敏症

K. W. = *Kolle* und *Wassermann*, Handbuch der pathologischen Mikroorganismen.

- Beck*, M., Immunität bei Influenza. *K. W.* 1904. IV, S. 1200.
- Casper*, M., Immunität bei Maul- und Klauenseuche. *K. W.* 1904. IV, S. 1319.
- Diadomni*, A., Immunität bei Pest. *K. W.* 1904. IV, S. 929.
- Ehrlich*, P., Experimentelle Studien an Mäuseimmunen. *Zeitschr. f. Krebsforschung*. 1907. V, S. 59.
- Ehrlich*, P. und *Morgenrath*, J., Wirkung und Entstehung der activen Stoffe im Serum nach Seitenkettentheorie. *K. W.* 1904. IV, S. 432.
- Eisenberg*, P., Über die Anpassung der Bakterien an die Abwehrkräfte des infizierten Organismus. *Centralbl. .. Bakt.* 1903. Orig. XXXIV, S. 739.
- Frank*, E., Über Typanosomentherapie. *Milch. Med. Wochenschr.* 1905. S. 2059.
- Friedmann*, U., Anaphylaxie. Jahresbericht über die Ergebnisse der Immunitätsforschung. 1910. VI, S. 31.

- Gruber, M.*, Über Infektion und Resistenz beim Milzbrand. *Centralbl. f. Bakt.* 1906. XXXVIII. Ref. Beihft. S. 11.
- Gruber, M.* und *Fukaki, K.*, Seroaktivität und Phagozytose. *Münch. med. Wochenschr.* 1906. S. 249.
- Hetsch, H.*, Choleraimmunität. K. W. 2. Aufl. 1912. IV, 4. 6. u. 7. Lieferung, S. 110.
- Hontenmiller, O.*, Immunisierung gegen Hühnercholera mit Aggressinen und Bakterienaufschwemmungen. *Centralbl. f. Bakt.* 1906. XLII, S. 170.
- Klein, E.*, Ein weiterer Beitrag zur Kenntnis der intrazellulären Bakteriengifte. *Centralbl. f. Bakt.* 1894. XV, S. 598.
- Koch, R.*, Über Typhusformenkrankheiten. *Deutsche med. Wochenschr.* 1904. S. 1705.
- Kolle, W.*, Die Grundzüge der Lehre von der (aktiven, allgemeinen und lokalen sowie passiven) Immunität. K. W. 2. Aufl. 1912. I, 21/22. Lieferung, S. 905.
- Kossel, H., Weber, A., Schütz und Miesner*, Über Hämoglobinurie der Rinder in Deutschland. *Arb. a. d. Kais. Ges. Amt.* 1903. XX, S. 1.
- Krus, K.* und *Volk, R.*, Studien über Immunität gegen Variolavaccine. Experimentelle Begründung einer subkutanen Schutzimpfung mittels verdünnter Vaccine. Sitzungsberichte d. Kais. Akad. d. Wiss. 1907. CXVI, S. 295.
- Lentz, O.*, Immunität bei Typhus. K. W. 1904. IV, S. 849.
- Lentz, O.*, Immunität bei Ruhr. K. W. 1904. IV, S. 894.
- Levin, G.*, Die bösartigen Geschwülste. 1909.
- Manteghi, E.*, Experimentelle Beiträge zur Kenntnis der Rekurrenssprochaeten und ihre Immunsere. *Arb. a. d. Kais. Ges. Amt.* 1908. XXVIII, S. 327.
- Nesfeld, K.*, Opsonine und Bakteriotropine. K. W. 1909. 2. Ergänzungsband. S. 303.
- Nidal, G.*, Canine piroplasmosis. *Journ. of Hyg.* 1904. IV, p. 219.
- Otto, M.*, Über Anaphylaxie und Serumkrankheit, im besondern experimentellen Serumüberempfindlichkeit. K. W. 1909. 2. Ergänzungsband. S. 231.
- 大野 謙一 ノノノキミ一(過敏症)ノ意義該研究ノ趨勢並ニ諸種ノ疾患トノ關係 *日新醫學* 第一卷第二二號第四一頁 大正元年。
- Pfeiffer, H.*, Das Problem der Eiweissanaphylaxie. 1910.
- Pittman, E.*, Fortschritte der Toxinlehre. K. W. 1909. 2. Ergänzungsband, S. 278.

- Provasack, S.*, Untersuchungen über das Wesen des Vaccineerregers. *Deutsche med. Wochenschr.* 1905. S. 752.
- Ruge, R.*, Malariaerkrankheiten. 2. Aufl. 1906.
- Ruge, R.*, Malariaerkrankheiten. K. W. 2. Aufl. 1912. VII, 16/20. Lieferung, S. 1.
- Sacharoff, G.*, Über die Gewöhnung der Milzbrandbazillen an die baktericide Wirkung des Serums. *Centralbl. f. Bakt. Orig.* 1904. XXXVII, S. 411.
- Sauerbeck, F.*, Neue Tatsachen und Theorien der Immunitätsforschung. *Lubarschs Ergebnisse.* 1907. XI, 1. S. 690.
- Schultz, W.*, Immunität bei Gonorrhoe. K. W. 1904. IV, S. 1160.
- Schiene, G.*, Vergleichende Pathologie des Krebs. Fortschritte der deutschen Klinik. 1910. I, S. 95.
- Sobernheim, G.*, Immunität bei Milzbrand. K. W. 1904. IV, S. 793.
- Sobernheim, G.*, Immunität bei Rinderpest. K. W. 1904. IV, S. 1246.
- Sobernheim, G.*, Die Lehre von der Immunität und von den natürlichen Schutzvorrichtungen des Organismus. *Kretzl* und *Marchands* Lehrb. der allgemeinen Pathologie. 1908. I, S. 417.
- Sticker, A.*, Die Immunität und spontane Heilung der Krebskrankheiten nach den Ergebnissen der modernen experimentellen Forschung. *Zeitschr. f. Krebsforschung.* 1909. VII, S. 55.
- Thaler, A.*, Beiträge zur Frage der Immunität bei der Piroplasmose des Hundes. *Centralbl. f. Bakt. Orig.* 1904. XXXVIII, S. 401.
- Wassermann, A.*, Antitoxische Sera. 1904. K. W. IV, S. 452.
- Wassermann, A.* und *Keyser, Fr.*, Wesen der Infektion. K. W. 2. Aufl. 1912. I, 5. und 12. Lieferung, S. 555.
- Wichelbaum, A.*, Pneumokokkenimmunität. K. W. 1904. K. W. IV, S. 1164.
- Wiel Ed.*, Die schützenden Eigenschaften des Blutes von aggrassinimmunen Hühnercholera. *Arch. f. Hyg.* 1905. LIV, S. 149.

丙 生活要約變異ノ原因作用

一 概説

敢テ外界ヨリ特殊ノ「害物」方來リ加ハルトイフ意味ニアラズシテ、日常ノ生活要約ノ變異ガ、時ニ又、疾病ノ原因ヲナスニ足ルコトアリ。即、健康生活保續ニ對シテ、重要ノ生理的「刺戟」方、單ニソノ數量ヲ變動シ、或ハ若干ノ性質ヲモ異ニシ、コレニ依リテ、原因的作用ヲナスニ至ルコトアリ。斯ノ如キハ、最、本章ニ於テ説クトコロニ適フモノナリトイヘドモ、日常ノ生活要約ハ、常ニ外界ト相關聯シ、又、絶エズ身體組織ノ榮養等ニ影響ヲ及ボスガ故ニ、ソノ變異ノ原因作用ハ、屢、複雑ナル關係ヲ呈セリ。サレバ、コノ生活要約變異ハ、ソノ變異自個ニ於テ、原因作用ヲナスノ外、コノ變異ヲ起サシムル身體境遇ハ、恰、後章ニ述アルゴトキ、各種「害物」ノ侵襲ヲ誘起シ、若クハコレヲ容易ナラシメ、以テ直接ノ「原因」作用ヲナスコトアリ。或ハ寧、主トシテ身體ノ物質代謝及ビ榮養ノ傷害ヲ來タシ、不良體質ヲ養成スルニヨリテ、一定ノ疾病ニ對シテ素因ヲナスニ至ルモノアリ。斯ノ如ク、齊シク生活要約ノ變異トイフモ、ソノ原因作用ハ、個個人ノ場合ニ應ジテ、必シモ相同ジカラズ、常ニ頗、紛糾タル事態ヲ示セリ。

且、吾人ノ生活ニ對シテ、必要ナル要約、若クハコレト常ニ結托シテ相離ルベカラザル身體内外ノ事項ハ甚、多シ。コレ等ハ皆、人類ノ健康保續ト常ニ密接ノ關係ヲ有スルモノニシテ、各者ノ作用方法ノ何如ニ依リテハ、或ハ直接ニ、或ハ間接ニ、原因作用ヲナスニ至ルモノ決シテ少キニアラズ。シカモ、コレ等ハ多ク、個人及ビ社會衛生學ノ主題ナルガ故ニ、本章ニ

(1) Cv. Voit
(2) v. Pettenkofer

(4) Heubner (3) Rubner

於テハ、ソノ一ニノ事項ニ就キテ約説シ、全豹ノ一斑ヲ示スニ止ムベシ。

二 榮養物供給ノ障礙

吾人が健康ヲ保續スルニ必要ナル榮養物ノ攻究ハ、主トシテ醫化學、衛生學ノ範圍ニ屬スルトコロニシテ、フアイト氏のベツテンコーズル氏⁽²⁾等ノ研究ニ依リ、食物ノ衛生的眞價ハ大ニ闡明セラルルニ至レリ。コノ食物ノ攝取ニヨリ身體ノ健康ヲ保續セシメンニハ、ソノ性質、數量共ニ一定ノ適度アルヲ要ス。シカモノノ必需量ハ、種種ノ個人的要約ニ依リテ必シモ一定セズ。

食物ハ、身體ヲ構成スルトコロノ諸原素ヲ含蓄シ、コノ諸原素ハ種種ノ複雑化合物ヲナシ、蛋白質トナリ、脂肪トナリ、含水炭素トナリ、⁽¹⁾他、鹽類及ビ水トシテ身體内ニ攝取セラレ、身體成分ノ消耗ヲ補足シ、身體ノ榮養ヲ保存或ハ増進セシムルモノニシテ、一人一日、蛋白質・脂肪・含水炭素ノ必要量限度(タトヘバ、フアイト氏以來體量七〇基瓦ノ人ニシテ蛋白質一一八・〇瓦、脂肪五六・〇瓦、含水炭素五〇〇・〇瓦ヲ以テ保健ノ食餌量ト看做サレタリ、又ハ一人一日必要ナル全榮養物量ガ供給スベキカロリー(タトヘバ、ルブチル氏⁽³⁾ニ據レバ、大人中等度働作ニ於テ體量一基瓦ニ付一日四〇カロリー)モ大抵一定セラレタリト雖モ、種種ノ個人的要約ノ人種等ニヨリテ異同ヲ生ズルハ亦、明ナリ。本邦人ノ榮養ニ就キテ、本邦學者ノ研究シタルトコロニ據レバ、本邦人ニテハ、概シテフアイト氏ガ定メタルヨリモ蛋白ハ尙、少量ニ、脂肪ハ尙、適ニ少量ニテ足ルモノノゴトシ。泰西人ニアリテモフアイト氏ノ定メタル蛋白量ガ必シモ常ニ一定不變ノ程度トイフコト能ハサルガゴトシ。又、小兒ニアリテハソノ體重ニ比較シテ溫ヲ放散スル體表面積廣キガ故ニ、コレヲ補充スルガタメニ、概シテ多分ノカロリーヲ要シ、ホイブチル氏⁽⁴⁾ニ據レバ、生後數ヶ月ハ平均體重一基瓦ニ對シテ一日凡、一〇〇カロリーヲ要ストイフ。

斯ノ如キ食物攝取ニ障礙ヲ來シ、或ハソノ量ノ不足、或ハ過多、又ハ食物性質ノ不適當ナルコトハ、屢、疾病ノ原因ヲ構成シ、或ハ直接主要ノ原因、若クハ一ノ誘因ヲナシ、或ハ素因の要件ヲナスニ足ル。而シテ這般ノ關係ハ、食物ノ成分何如ニ依ルノ外、又、吸收量ヲ定メテ論ゼザルベカラズ。且、又、大ニ個人身體ノ生活機能如何ニヨリテ、甚シキ異同ヲ示スモノトス。

食物ノ量過少ノ状態ニ在ルヤ、身體ハ先、自個ノ組織成分ノ貯藏ヲ消費シ、コレニヨリテ幾分ノ補給ヲナシ、尙、若干時生命ヲ持續スルモ、終ニ枯瘦⁽¹⁾ニ陥リ、甚シクレバ死ス。食物殊ニ食物及ビ水ヲ全然給セザルコト長時ニ及ベバ、體重頓ニ減退シテ、所謂『餓餓』状態ヲ呈ス。コノ際、身體組織ノ蛋白分解強ク、水分亦、消耗シテコレヲ補フノ道ナク、諸重要細胞ノ機能減退シ無方トナリ、終ニ死ヲ來ス。所謂『餓餓死』⁽²⁾是ナリ。餓餓ニ際シ、全身ノ組織消耗ノ度ハ臟器ニヨリテ頗、差アリ。最、消耗ノ甚シキハ脂肪組織ニシテ、殆、全量ノ大部分ヲ失ヒ盡スニ至リ、筋ノ消耗ハ、又、體重減少ノ主件ヲナセリ。内臟中肝・脾等ハ萎小顯著ニシテ、血液モ亦、體重ニ應ジテ減少シ、赤血球・色素ノ消耗ヲモ認ムベシ。骨ハ比較的體積ヲ減ズルコト少キモ、又、ソノ組織ニ消耗ヲ認メ得。而シテ、心臟・腦髓ノゴトク重要ナル臟器ハ永ク減量ヲ見ハサズ。ソノ他、組織鏡檢上ニモ亦、能ク組織萎縮・消耗ノ狀ヲ認メ、臟器實質ニ變性及ビ血行障礙ノ狀等ヲ目撃シ得ベシ。

同ジク『餓餓』トイフモ、ソノ個人性ニヨリテ身體ノ病變ニ差異無キコト能ハズ。ダトヘバ、全然健康者ガ故意ニ食物ヲ攝取セザルニ至リシモノト、他ニ重患ノ基礎アリテ(精神病ノゴトキ、或ハ食道癌ノゴトキ)コレガタメニ『餓餓』ニ陥レルモノトハ、相互ノ間ニ若干ノ相違ナキコト能ハズ。人ハ凡、何日間、能ク餓餓ニ堪ヘ得ルカト云フニ、ソノ日數ハ正確ニ擧ゲ難キモ、ムンク氏⁽³⁾ノ記スルトコロニ據レバ、水ヲ給スレバ成人ハ六週間マデ生命ヲ保チ、全然供給ヲ絶ババ恐ラク唯ニ四週ノミナ

- (1) Inanition
- (2) Inanitionstod
- (3) Marasmus

(4) Munk

ルガゴトシト。サレド、又、他ノ記載ニ據レバ、コノ日數ノ尙、短小ナルモノアリ。

榮養物供給ノ障礙ガ能ク原因的作用ヲナスコトハ、殊ニ小兒ニ於テ甚、明白ニシテ、乳兒ノゴトキハソノ影響殊ニ甚大ナリ。又、管ニ食物數量ノ變ノミナラズ、性質ノ變ニ頗、重要ノ意義アルコトモマタ、頗、顯著ニ見ハル。即、乳兒ニ於テ、哺乳量ノ不足ノタメニ身體ノ榮養ヲ損シ發育ヲ妨グルニ至ルハ固ヨリ然ルトコロニシテ、又、ソノ乳汁ノ性質何如ガ、直ニ乳兒ニ尠ナカラザル影響ヲ及ボスモノナリ。即、乳兒ニ、ソノ最良食物ナル人乳ヲ與ヘズシテ、人工榮養品、若クハ牛乳ヲ與ヘタルモノハ、ダトヒ、計算上カロリノ値ガ略、同等ナルニ拘ハラズ、到底、自然的榮養法ニ及フベクモアラズ。而シテ、此際ソノ化學的性質ニミ注意スルヲ以テ足レリトセズ、又、頗、物理化學的關係ニ就キテ考フベシ。蓋、攝取榮養液ハ體液ニ對シ略、同等ノ滲透壓ヲ有スルモノ、即、同壓性ナルヲ以テ理想トス(近者平井氏ノ特ニ注意ヲ促シタルゴトク)。然ラザレバ(ダトヘバ)煉乳稀釋ノ度ヲ誤マリテ用フルガゴトキ)消化管内ノ吸收作用平調ヲ失シ、抵抗力ニ乏シキ乳兒ノ胃腸ハ傷害セラレ、身體ノ榮養ハ毀損セラルルニ至ル。我邦ニテハ目今尙、泰西ニ比セバ人乳哺育多シ。コレ我邦ニ於テ乳兒ノ消化器病ニテ死スルモノノ比例數、泰西ニ對シテ少キ所以ナルベシ。

チルニー氏及ビケルレル氏⁽⁴⁾ノゴトキハ、食物攝取ノ不適當ニ由來スル乳兒ノ消化障礙ヲ以テ、唯、胃腸局部ノ解剖的變化ヲ以テノミ論ズベカラズトシ、コノ際、物質代謝ノ變常ヲ來タシ、ソノ物質代謝產物ノ中毒ニ因ル全身ノ榮養障礙ナリトナセリ。又、同ジク小兒科醫オンケルスタイン氏⁽⁵⁾ガ、小兒虎列刺重症腸加答兒ノ大部分ハ從來考ヘラレタルゴトク細菌傳染ニ因ル毒素中毒ニアラズシテ、食餌性中毒症トスベシトイヘルガゴトキハ、甚、注目スルニ値ス。

斯ノ如ク、食物全數量ノ不足、並ニソノ性質ノ不良ハ、小兒ニ於テモ、又、大人ニ於テモ、能ク原因的の要件トナルニ足ルモ

- (1) Czerny und Keller
- (2) Finkelstein

ノナリ。殊ニ身體發育機能旺盛ニシテ、ソノ資料ヲ多ク食餌ニ求メシカモ抵抗力ニ貧弱ナル小兒ニ於テ、諸種ノ榮養障礙ニ由來スル疾病ヲ起スハ、理ノ略易キトコロナリ。(實際ノ場合ニハ、食物ノ外、他ノ重要生活要約ノ缺陷ヲ伴フモノナレバ、個個ノ疾病ニ於ケル原因ノ攻究ニ當リテ、スベテノ要件ニ就キテ考察スルヲ要ス)。ダトヘバ、人工榮養ヲ受ケタル哺乳兒ニバル。ロウ氏病ニ罹ルモノアリ。コレ攝取食量必シモ不足ナルタメニアラズシテ、寧、ソノ性質ノ不適當ナルニ因ルナリ。成人ニ於ケルスコルブトニ於テモ、亦、ソノ發生ヲ促ガシタル所以ヲ食物性質ノ不適當ニ負ハシムベキモノアリ。又、肉食ノ偏重ハ西洋ニ於テ往往痛風ノゴトキ物質代謝異常症ノ發生ニ與リテ力アルモノト看做サレ。脂肪、含水炭素ヲ過多ニ身體ニ攝取シ、シカモンノ消費少ケレバ、亦、能ク脂肪過多症ノ原因的要約ヲ作スニ足レリ。我が邦人ハ西洋人ニ比シテ日常ノ食料ニ差アリ、概シテ植物性食物ヲ比較的多ク攝取シ、シカモ亦、十分ニソノ健康ヲ保ツコトハ、本邦諸學者ノ研究ニヨリテ明ナリ。而シテ彼此疾病發現ノ狀ニ差異アル所以ニ對シ、生活要約、殊ニ食物ノ差異ガ重大ノ關係ヲ有スルコト疑ナシ。本邦ノ脚氣ノゴトキ、ソノ原因尙、不明ノ裡ニ在レドモ、ソノ發生要約ガ食餌、殊ニ米食ト若干ノ關係アルコトハ、掩フベカラズ。

更ニ食物中石灰及ビ鐵等ノ含有量ニモ大ニ注意ヲ要ス。鐵ノ攝取量少ナケレバ血液ノ血色素減損ヲ來タシ、食物中ニ石灰量少ナケレバ發育期ニ於ケル骨形成機ヲ害ス。試驗動物ニ石灰乏少ノ食餌ヲ與ヘテ、著明ナル骨發育障礙ヲ惹起セシメ得ルコトアリトイフ。

食物ト共ニ供給セラルル水ノ必要ナルハ復、言フ俟タズ。水ハ體液ノ主成分ニシテ諸臟器組織ニ於テモ要素ナリ。且、物質代謝ノ老廢物ヲ排除運搬スルノ用ヲナシ、汗、尿等トナリテ體外ニ出ヅルガ故ニ亦、能ク體溫調節ノ效ヲナス。水分攝取過少ナラバコレ等ノ作用減退シ、又、淋巴液・血液ノ循環ノ圓滑ヲ妨ゲ、重要ナル分泌液ノ產出ヲ困難ナラシムルニ

至リ、全然水ヲ絶タバ、コレヲ試驗動物ニ徵スルモ、固形食餌ヲ取ル能ハザルニ至リ、饑餓ニ陥ル。

食物ノ性質ハタトヒ良好ナルモ、必要以上ノ過多量ヲ攝取スルコトハ、亦、健康障礙ノ基ナリ。ダトヘバ、善良ノ母乳ニテモ授乳ノ際、知ラズ識ラズ過多量ヲ哺マシメ、所謂『榮養過剩』ヲ弊ヲナシ、タメニ胃腸障礙竝ニ終ニ全身ノ榮養ヲ不良ナラシムルコトハ往往見ルトコロナリ。コレ、人民ノ習慣、國土ノ氣候等ニ關係ヲ有シ、我邦ニテモコノ弊ハ決シテ少ナカラザルガゴトシ。

吾人、日常ノ生活ニ對シ、前掲食物ノ他ニ、尙、甚、重要ノ關係ヲ有スルモノハ、空氣及ビ日光ナリ。

空氣ノ理學的及ビ殊ニ化學的性質ノ變異ガ、直接ニ、吾人ノ健康ヲ迫害シ、能ク原因作用ヲナスコトハ固ヨリ明ナリ。殊ニ酸素ノ缺乏ハ直接ニ生命ヲ危ラス。コハ、或ハ瘴圍氣中、酸素ノ乏少ナル場合、身體呼吸道及ビ肺臟ニ故障アリテ、空氣吸入ガ妨ケラルル場合、或ハ身體組織殊ニ血液ノ變化ニヨリテ酸素攝取ガ不完全ナル場合等ニ於テ見ルトコロニシテ、酸素ニ乏シキ血液ハ呼吸中樞ヲ興奮セシメテ、一時呼吸作用ヲ促進シ、終ニソノ働息、心臟ノ運動亦、停止スルニ至リテ死ス。今、コトニ關シ詳論セザルベシ。空氣ノ理學的性質ノ變異、殊ニ、ダトヘバ、氣壓ノ變、如キハ他章ニコレヲ論ズベシ。

空氣モ、水モ、又食物モ、時トシテ他ノ病原性「害物」ヲ人體侵襲ヲ媒介シ、コト方面ニ於テ、特殊ノ原因的關係ヲ有スルコトアリ(塵埃、有毒瓦斯・細菌ノ吸入、諸種化學的毒物・病原性寄生體等ガ水及ビ食物ト共ニ消化器官ニ入り來ルコト等)。日光ガ、ソノ作用方法ノ何如ニ依テハ、又、一ノ理學的「害物」トシテ原因作用ヲナスコトアリ。

三 動作過度及ビ缺乏

身體諸部分ガ適當ニ機能ヲ營ミ、動作ヲナスコトハソノ部ニ於ケル體液循環・物質代謝機能ヲ佳良ナラシメ、延テ全身

ノ健康ニ好影響ヲ與フル所以ナリ。コレ反シ、コノ働作ノ障碍ハ、ソノ部ノ榮養ノ順適ヲ失調セシメ、疾病或ハ若干ノ病變ヲ惹起スルニ足ル。コノ働作ノ障碍トハ、一ハソノ過度・一ハソノ缺乏・廢止ナリ。

働作ノ過不及ノ起ル由來ハ、甚多様ナリ。能働的ニ、或ハ受働的ニ、又、原發的ニ、或ハ續發的ニ等、種種ノ場合アリテ、ソノ間ニ又、移行的ノモノアリ。タトヘバ、過度ノ疾驅ヲナシテ筋肉ノ過勞ヲ來タスハ、即、能働的・原發的ナリ、神經障碍ニ因ル脚節ノ働作休止ノゴトキハ受働的・續發的ナリ。

働作過不及ガ何如ナル要約ニヨリ來リタルニセヨ、コレ終ニソノ部ノ榮養ヲ障碍スルニ至ル。但、他ノ病的事項ト齊シク生理的領域ニ對スル移行、頗、緩徐ニシテ、且、個人的素因及ビ他ノ要約ノ加ハルニヨリテ結果ニ較著ノ差異ヲ來タス。蓋、身體ノ防禦作用及ビ適應能力ハ人人相異ナルモノニシテ、ソノ範圍ヲ逸脱シテ、始メテ原因の意義ヲ有スルモノトナレバナリ。

働作過度ハ筋肉ニ於テ、ソノ狀ヲ最、明ニ看取スベク、又最、多ク研究セラレタリ。筋肉ノ外、神經系統及ビ諸分泌腺等ニ於テモ、亦働作過度ハ、明ニコレヲ認知スベシ。

一定ノ機能ヲ永ク且、強ク營マシムレバ終ニ『疲勞』⁽¹⁾ノ状態ニ陥ル。筋肉ニ於テ疲勞ノゴトキハ最、明白ニ現ハルル現象ナリ。然レドモ、本來『疲勞』ハ必シモ病的ニアラス。日常ニイフ『疲勞』ハ寧、生理的ノコトナリ。即、筋肉ヲ作用セシメテ『疲勞』ヲ來タシ、次デコレヲ静息セシメ、依テ完全ニ恢復シ得ルモノハ、コレヲ病的ト稱スベカラス。茲ニ病的トイフハ、斯カルモノノ謂ニアラズシテ、静息ニ要スル時間ガ、常者ニ比シテ甚、長キカ、或ハ静息ニヨリテ安全ノ恢復ヲナス能ハザルモノ、或ハ他ノ病的現象ヲ續發セシムルモノニ就キテナリ。

『疲勞』(獨逸語ノ Ermüdung 英語ノ Fatigue)トイフ語ト『働作過度』(獨逸語ノ Ueberanstrengung 英語ノ Summenge)トイフ語ト

(1) Ermüdung

- (1) Marfon
- (2) Adami
- (3) Dufour
- (4) Inanition
- (5) Hunger

- (6) Ermüdungsstoff
- (7) Weichardt
- (8) Kenotoxin

ノ用法ハ必シモ一定セズ。或ハ『疲勞』ヲ以テ唯、感覺ナリトシ、或ハコレヲ以テ、一ノ状態トシテ論ズ。マルフォン氏⁽¹⁾ハ『疲勞』ヲ以テ一ノ生理的状态トシ、コレヲ病的状態ナル『働作過度』ニ對シテ相區別セントセリ。アダミ氏⁽²⁾亦、コレニ左袒セリ。蓋、『疲勞』トイヘバソノ意義廣ク、生理的ニモ亦、コレ有ルハ固ヨリソトコロニシテ、過度ノ働作ニヨリ生セル病的ノ疲勞状態トハ相同シカラズ。シカモ、コノ病的ト生理的トノ間ニ劃然タル區別ヲ設クルコトハ往往ニシテ困難ナリ。ゾーホル氏⁽³⁾(マルフォン氏ニ據ル)ガ『働作過度』ト『疲勞』トハ猶『饑餓』⁽⁴⁾ト『饑感』⁽⁵⁾トノ區別ノゴトシトイヘルハ、適當ナラズトセズ。

『疲勞』ノ理論ハ殊ニ筋肉ニ施サレタル諸生理學的實驗ニヨリテ多ク明示セラレタリ。即、永ク且、頻繁ニ收縮セシメタル筋肉ガ、理學的ニモ、又化學的ニモ、ソノ性質、或ハ反應ヲ變ズルコトハ治ネク人ノ知ルトコロニシテ、コノ際、筋肉内ノ榮養分ヲ消耗シ、化學的物質代謝産物、即、生理學者ガ所謂『疲勞素』⁽⁶⁾ノ形成・蓄積ヲ來タス。サレバ、働作過多ニシテ筋肉休息ト新鮮血液ノ輸入トガ不十分ナル場合アラバ、茲ニ病的ノ現象ヲ惹起スニ至ル。

ワイハルト氏⁽⁷⁾ノゴトキハ、疲勞ヲ以テ、一種ノ毒素ノ生ズルガタメニ起ルモノトシ、高度ニ疲勞セシメタル動物ノ筋肉及ビ排泄物、ソノ他ヨリコレヲ得ベシトイヘリ。コノ人工的ニモ蛋白ヨリ分解セシメテ獲ベキ物質(毒素)ヲワ⁽⁸⁾氏ハ名ケテケノトキシ⁽⁸⁾ト稱セリ。コノ毒素ノ性ハ他ノ既知ノ毒素ト同様ニシテ、コレヲ注射シテ抗毒素ヲ形成セシメ得ベシト云フ。コノワ⁽⁸⁾氏毒素説ハ未、悉ク正確ニ信憑セラルルマデニ至ラズト雖、後來ノ研究ニ多大ノ衝動ヲ與フルモノトイフベシ。

働作過多ハ、或ハ急激ニ、或ハ緩徐ニ來ル。急激ナル筋肉働作過多ハ呼吸逼切・チアノーゼ・脈不正・一時性心臟擴張・窒息ニ陥リ、時トシテハ死ヲ招ク。コレ筋肉ノ要求ニ應ズルノ程度ニテ、心臟ガ急速ニ血液ヲ循環セシムルコト不能トナリ、心臟能力不十分ナルトコレニ伴ヘル窒息トヲ以テ主ナル要件トス。筋働作過多ガ左程急激ニアラザルモ永ク持續セ

ル場合ニハ、亦種種ノ障碍ヲ殘留ス。永續セル疲勞感覺、筋痛、熱發等ノコトアリ。又、輕微ノ動作ニテ持續性ナルガタメニ、一定ノ筋ニ病變ヲ來タスコトアリ。寫字者或ハ奏樂者ノ手指痙攣ノゴトキ、主トシテ筋ノ過勞ニ因ルモノト信ゼラル。又、眼目ヲ過度ニ勞シ殊ニソノ輻輳機ヲ過度ニ持續セシメ、終ニ近視ニ陥ルガゴトキ(一定ノ素因ヲ有スル人ニテ)、善ク人ノ知ルトコロナリ。

過度ノ筋動作ガ、ソノ組織ニ著シキ解剖的變化ヲ繼發セシムルコトアルモ亦、明白ナリ。心臟ノ動作過度ノ場合ニ往往急性擴大ヲ來タス。但、コハ場合ニヨリテハ單ニ一時性ノコトアリ。或ハ徐徐ニ肥大ヲ成シ、各筋纖維ヲ肥大ス。コレ屢、代償作用ノ意義ヲ有スル動作性肥大ナリ。(他ノ臟器、タトヘバ、腎臟、辜丸等ニモ、同様ノ動作性肥大ノ現象アリ。斯ク肥大セル心筋ハ後ニ至リテ容易ニ脂肪變性等ヲ來タシ、心筋ノ動作不能ヲ惹起スコトアリ。本邦ノ人力車夫ニ往往心臟肥大ヲ見ルコトアルハ亦、コノ動作過度ノ結果ニ外ナラズ。

吾人ハ以上、筋肉ヲ主題トシテ論ジタルガ、神經系統ニ於テモ亦、明白ニ、動作過度ノ病因作用ヲ實驗スルニ足ルベク、疲勞ニ際シ刺戟反應ノ遲鈍トナルハ事實ナリ。コレ蓋、一ノノイロンヨリ他ノノイロンヘノ刺戟傳達ニ抵抗加ハリ、ソノ影響ノ現ハルル所以ニシテ、シカモ神經細胞自個ガンノ動作ノタメニ疲勞シ、ソノ過度ナルニヨリテ終ニ病變ヲ見ハスハ亦、疑ナキトコロナリ。即、種種急激ノ精神感動及ビ睡眠ヲ不足セシメ、精神休養ヲ減ジテ持續性ニ精神勞苦ヲナスコト等ハ、往往頭痛、腦髓充血、神經衰弱ヲ惹起シ、竝ニ他ノ神經性疾患ノ發生ニ與カルコトアリ。而シテ、コノ際神經細胞ガソノ構造ニ若干ノ變異ヲ生ズルニ至ルハ頗、可能的ナリ。蓋、筋ヲ反復刺戟シタルトキハコレヲ靜止時ニ比較シテ、ソノ筋運動ヲ支配セル神經細胞ノ構造ニ變異ノ認メラルコトアレバ、動作過度ニヨリテ病的疲勞ヲ促シ、コレ容易ニ恢復シ難キ場合ニ於テ神經細胞ニ若干ノ解剖的變化アルベキハ能ク想像ニ堪フルトコロナリ、斯ク、神經細胞自個ノ直接ノ

(1) Hallepeau et Apert Traité élément de Pathol. gén. VI Éd. 1904. p. 58.
(2) Charrin et Roger

疲勞ハ能ク考ヘ得ラルルトコロニシテ、コレヨリ諸種ノ腦症狀ヲ惹起スルノミナラズ、又、全身ノ物質代謝及ビ榮養ノ狀態ニモ不良ノ影響ヲ及ボスニ至ル。神經纖維自個ハ疲勞スルモノニアラズトハ從來信ゼララルトコロナレドモ、近時ノ研究ニ據レバ無髓ノ有髓神經共ニ亦、コノ事アルガゴトシ。

又神經中樞ノ過度ノ急激刺戟ハ一時、ソノ機能ヲ興奮スルモ亦、急ニソノ麻痺ヲ來タスコトアリ。筋及ビ神經以外、他臟器ニ於テモ動作過度ニ因リ、病的變化ヲ惹起スルモノ少ナカラズ。音聲ノ動作過度ハ往往喉頭炎ヲナスニ與リテ力アリ、吹笛者ノゴトク、絶エズ強ク呼吸ヲ出ダス習慣ノ人ハ肺氣腫ヲ發生セシメ易キガゴトシ。ソノ他過度ニ臟器機能ヲ勞セシムルコトハ、ソノ臟器ノ榮養及ビ動作能力ヲ害シ、往往神經ノ疲勞ヲ來タシ、或ハ全身ノ榮養ヲ不良ナラシムル等、種種ノ惡影響ヲ及ボスモノナリ。シカモ今ハソノ一一ニ立入りテ論ゼザルベシ。

動作過度ノ原因作用ノ意義ニ關シテハ、又、個人的「素因」ヲ大ニ顧慮スベキコトハ前述シタルガゴトシ。且、ソノ原因作用トイフモ、亦、決シテ同様ニアラズシテ、或ハ直接ナル眞ノ疾病原因ヲナスモノアリ、或ハ他ノ疾病ノ發生ニ對シテ素因的要件ヲナシ、或ハ一ノ誘因ヲナスコトアリ。タトヘバ、身體ノ動作過度ニヨリテ疲勞ノ持續セル場合ニテハ(通例、コノ時、全身ノ榮養不良ヲモ合併スルコト多シ)諸種疾病殊ニ傳染病ニ罹リ易キ素因ヲ強ムルガゴトキ、コレナリ。佛人ハロ、ツポウ氏⁽¹⁾ノ書中ニ記スルトコロニ據レバ、巴里籠城ノ際、新鮮ノ食物ヲ獲ルコト能ハズシテスコルブートニ罹リタルハ、體質弱キ人ヨリモ寧、體質強キ人ナリキ。ソハ體質強壯ノ人ハ過度ニ身體ヲ勞働セシメテ疲勞ヲ來タシ、シカモ、ソノ損失ヲ十分ニ補フ能ハザリシガ故ナルベシトイフ。又、シルレン及ビロゼー兩氏⁽²⁾ノ動物試驗ニ據ルモ、身體過勞ヲ強ヒタル試驗動物ハ、病原菌感染ヲ受ケ易キノミナラズ、病原菌ニ對スル抵抗力亦減少シ、常時ナラバ危害ナキ量ニ於テラモ、コノ場合

(1) Inaktivitätsatrophie

ソノ動物ノ死ヲ招クコトアリ。

働。作。缺。乏。ハ、ソノ部ニ於ケル血液供給ノ不十分ト相伴ヒテ、榮養不良ヲ來タシ、コレ持續セバ終ニ解剖的ニモ認メ得ベキ組織ノ萎縮及ビ他ノ退行性變化ヲナスニ至リ所謂不働作性萎縮⁽¹⁾更ニ益、ソノ機能ノ不振ヲ由來セシム。タトヘバ、永ク働作ヲ缺キタル筋肉ノ各纖維ハ萎小ヲ呈シ、神經ヲ切斷シテソノ影響ヲ斷チタルモノニテモ亦、明カニコレヲ認メ得ベシ。尙、コノ働作缺乏ニ因リテ榮養及ビ物質代謝機ノ旺盛ナラザルコトハ、終ニ亦、防禦作用ノ薄弱ヲ來タシ、他ノ疾病ニ對シテ素因ノ原因ヲ作ルニ至ルコトアリ。又、一タビ不働性萎縮若クハ他ノ退行性變性ニ陥リタル部分アレバ、ソノ機能缺損ガ時ニ尠少ナラザル障礙ヲ他ニ及ボシ、直ニ疾病或ハ一定ノ病的變化ノ原因ヲナスコトアリ。實ニ生活機能ニ對シテ重要ノ意義(タトヘバ、主要ナル分泌・内分泌ヲ營ムモノ)アル組織細胞ノ不働作ハ直ニ全身ノ生活機能ノ平衡ヲ破ルニ足ル。

コノ外、職。業。風。俗。習。慣。衣。食。住。婚。姻。飲。饌。娛。樂。竝ニ人ノ意思。道。德。社。會。文。化。等ノゴトキモ、亦、吾人ノ日常生活ト相離ルベカラザルモノニシテ、身體健康ノ保タル所以ノ此ニ存スルゴトク、疾病及ビ病的状態ヲ發生セシムル原因ノ要件モ亦、コノ裡ニ伏在スルコトヲ思ハザルベカラズ。職業ニ關聯シテ所謂「職業病」アリ、採炭夫ガ炭粉吸入症ヲ患ヒ、絶エズ直立シテ作業スル人ニ屢、下腿ノ靜脈擴張症アリ、纏足ノ風俗ガ支那女子ノ足ヲ萎小ナラシメ、西洋婦人ノコルセットガ絞榨肝ヲ由來セシメ、而シテコノ病的状態ハ更ニ他ノ疾病ヲ誘發セシムルガゴトキ、又、人人ノ習慣如何ハ外氣ノ寒・暑・燥・濕等ニ對シテ或ハ能クコレニ堪ヘシメ、或ハ然ラズシテ病的變化ヲ喚起セシムルガゴトキ、

然リトス。ソノ他、體溫ノ調節ニ對シ不適當ナル衣裝・汚穢低濕陰暗ナル家居・放浪無頼ニシテ酒色ニ耽リ、自ら節制スルトコロ無キ生活等ハ孰レモ、或ハ直接ニ、或ハ間接ニ、疾病ニ對シテ原因ノ作用ヲナスニ足ルヲ知ルベシ。若クハコレヲ社會全般ノ生活ニ就キテ觀察スレバ、人民ノ知識・宗教及ビ道德、竝ニ經濟状態ノ如何ハ、大ニコノ社會ニ於ケル疾病發生ノ上ニ影響アルコトヲ首肯シ得ベシ。吾人ハ本章ニ於テ一、コレ等ノ諸件ニ就キテ、論述スルノ餘裕ヲ有セザルヲ遺憾トスルモ、コレ等ノ事項ガ有スル原因ノ作用ヲ、概括スレバ要點ハ凡、次ノ如シ。

一、諸種ノ生活要約ニ結託シ、各、コレニ應ジテ一定ノ外來「害物」(器械的・理學的及ビ化學的或ハ寄生物的等)ニ遭遇スルヲ特ニ容易ナラシム。即、「害物遭遇」何如ヲ主トス。タトヘバ、所謂「職業」ノ疾病素因⁽²⁾ト稱セラルルモノノゴトキハ、コノ外觀的(假性)素因ノ謂ナリ。

二、他ノ場合ニテハ、コレガタメニ、ソノ人ノ身體・榮養ヲ減損シ、物質代謝ニ變動ヲ來タシ、或ハ精神状態ニ不良影響ヲ及ボシ(タトヘバ、働作過度等ノタメ)、コレニヨリテ直ニ疾病ヲ發生セシメ、或ハ一定ノ疾病素因ヲ作ルニ至ル。

ソノ他、全ク外界ニ屬スルモノニシテ、吾人ノ生命保護ニ對シ須臾モ缺クベカラザル空氣・土地・日光・水及ビ食物ト密接ノ關係ヲ有シ、人間ノ日常生活ニ甚大ナル影響ヲ及ボスモノハ氣候⁽³⁾ナリ。氣候ハ一定地方ノ地上ニ於テ現ハルル氣象學的現象ノ綜合ニシテ、地方ニヨリテ多少ノ差異及ビ特色ヲ示スモノナリ。コレニハ、雰圍氣ノ諸現象・土地ノ諸狀況等附隨シ、若クハ包容セラル。コノ氣候ガ疾病原因ニ對シ干涉ヲ有スルコトハ明白ニシテ、一面ニハ上文記述ノ諸生活要約(職業・風俗・衣服・飲食・嗜好・住居等)ト直接ノ連絡ヲ有シ、氣候ノ原因的關係ハ即、コレヲ基礎トシテ存セリ。又、他面ニ於テ更ニ甚、重要ナルハ氣候ノ何如ハ直ニ諸種ノ所謂病原性「害物」ノ存在竝ニ遭遇ノ程度

(1) Klima

及ビ『害物』ノ性質ニ影響シ、コノ所謂『害物』ノ病因的作用ヲ受クルコトニ因テ疾病ヲ發生セシム。コノ氣候ニ直接關聯セル『害物』ハ千差萬別ニシテ各種ノモノ存スレドモ、寒熱(タトヘバ寒帶・熱帶ノ別ノゴトキコレナリ。但、寒帶・熱帶ニ於ケル原因學的的要約ヲ當ニ溫度ノ差異ニノミ歸セシムベカラザルハ本ヨリ明白ナリ)。空氣ノ壓力・濕度ソノ他ノ性状・日光空氣中ニ於ケル電氣等理學的ノモノ殊ニ甚、多シ。ソノ個個ノ要件ハ後章(理學的『害物』條下)ニ説述スルコトアルベシ。ソノ他、空氣及ビ水等ノ化學的性状ニ關係スルトコロノモノ、亦、コレアレドモ、更ニ頗、著目ヲ要スルハ氣候ニヨリテ病原性寄生性生體ノ生存及ビ繁殖ノ適否ニ多大ノ相違ヲ來タシ、ソノ住民ノ生活狀態・土地・水及ビ季節ト相俟テテ、コノ種『害物』ヲ遭遇・侵入・侵害ノ狀態ニ影響ヲ及ボスコト甚、深刻ナリ。(タトヘバ、阿弗利加土人ニ睡眠病アリ、印度ニ虎列刺アリ、臺灣ニアメーバ赤痢アルガゴトキコレナリ及ビソノ他ノ流行病・地方病)。コレ亦、後章ニ於テ論ズルトコロアルベシ。

且、コレ等ノ諸要約ニ基ツキテ、或ハ上述ノ諸種原因作用ノ働キニ伴ヒテ生ゼル身體ノ榮養物質代謝變異ガ恰、他ノ疾病發生ニ對シ素因ヲナスコトハ、亦、考ヘ得ラルルナリ。シカモ、身體ハ曾テ記述セルガゴトク『害物』ヲ侵襲ニ對スル防禦性能ヲ有シ、又、習慣ニヨリテ一程度迄ハ生活要約ノ異變ニ適應スルヲ得ルモノナリ。サレバ『氣候』ヲ異ナル地ニ來リ住ムモ、所謂『氣候適應』ヲナスヲ得テソノ健康ヲ保チ能フベシ。

参考文献

生活要約變異ノ原因作用

- Czerny, A. D. u. Keller, A., Des Kindes Ernährung, Ernährungsstörungen und Ernährungstherapie. 1906- I. u. II.
 Dittel, W., Die Pathogenese der Rachitis und ihre experim. Erforschung. Verhandlung d. deutschen path. Gesell. 1909.

(1) Akklimationation

XIII. Tagung. S. 33.

- Funkstein, H., Lehrbuch der Säuglingskrankheiten. II. Hälfte, 1911.
 Heubner, O., Die Energiebilanz des Säuglings. Zeitschr. f. Diätet u. physik. Therapie. 1902. V, S. 13.
 平井毓太郎 乳兒ノ營養法(營養障礙時ノ營養法)日新醫學, 第一年, 第三號, 明治四十四年。
 稻葉良太郎 本邦農夫ノ營養ニ就テ, 東京醫學會雜誌, 第二十一卷, 第二十一號, 明治四十年。
 Krahl, L., Pathologische physiologie. VII. Aufl. 1912 (Die Ernährung u. der Stoffwechsel). S. 415.
 隈川宗雄 Vergleichende Untersuchungen über die Ernährung mit gemischter u. rein vegetabilischer Kost mit Berücksichtigung des Eiweißbedarfes. Tschizow's Archiv. 1889. CXVI, S. 370.
 森林太郎 Japanische Soldatenkost von Voit'schen Standpunkte. (1886). Zur Nahrungsfrage in Japan. (1887). Mori, K., Japan u. seine Gesundheitspflege. Tokyo 1911.
 Munk, I., Einzelnahrung u. Massenahrung. 1893. (S. 8)
 v. Pettenkofer, M. u. Voit, C., Untersuch. über d. Stoffverbrauch des normalen Menschen. Zeits. f. Biologie. 1866. II, S. 459.
 Rubner, M., Lehrbuch der Hygiene. 1900. (其他同氏ノ諸研究).
 v. Voit, C., Physiologie des allgem. Stoffwechsels u. der Ernährung. Hermanns Handbuch der Physiologie. 1881. VI, 1. Teil.
 湯川玄洋 日本僧侶純植物食ノ營養(東京醫學會雜誌, 第二十三卷, 第六號, 明治四十二年)。

- Adami, J. G., The Principles of Pathology. 1910. I, (Overstrain) p. 396.
 Charvin et Roger, La fatigue et les maladies microbiennes. La semaine Méd. 1890, p. 29.
 Frühlich, Fr. W., Die Ermüdung der markhaltigen Nerven. Zeitschrift f. allg. Physiologie. 1904. III, S. 468.
 Helms, G., On morphological changes in exhausted ganglion cells. Zeitschr. f. allg. Physiologie. 1903. II, S. 502.
 Mayfan, A-B, La Fatigue et le surmenage. Bouhnerl, Traité de Path. générale. 1895. I, p. 445.
 Obersteiner, H., Die Funktion der Nervenzelle. Obersteiner, Arbeiten aus dem neuropolog. Institute. 1910. XVIII, S. 147.
 Thorne, W., Die Ermüdung der markhaltigen Nerven. Zeitschrift f. allg. Physiologie. 1908. VIII, S. 530.
 Veraguth, O., Über Neurasthenie. Ergebnisse d. inneren Medizin u. Kinderheilkunde. 1909. III, S. 370.
 Verworn, M., Ermüdung, Erschöpfung u. Erholung der nervösen Centra des Rückenmarks. Arch. f. Anatomie u. Physiologie. Physiol. Abt. 1900. Suppl.-Band. S. 152.

Wienand, W., Über Ernährungsstoffe. II. Aufl. 1912. (其他同氏ノ諸研究).
 Widmer, C., Die Rolle der Psyche bei der Bergkrankheit und der psychische Faktor bei Steigerkrankungen. Münch. med. Wochenschrift. 1912. S. 912.

Winterkin, H., Über die Ernährung. Med. Klinik. 1906. S. 1261.

Zuntz N., Über den Stoffverbrauch des Hundes bei Mischarbeit. Pfleger's Archiv. 1897. LXVIII, S. 191.

丁 理學的害物ノ原因作用

一 概説

本章以下(丁・戊・癸)ハ諸種外來ノ『害物』ヲ來リ加ハルコトガ主ナル要件ヲナシテ疾病若クハ疾病狀態ヲ發生セシムルモノニ就キテ、ソノ個個ノ『害物』ノ有害作用ヲ論ズルヲ以テ目的トス。『害物』ノ義ハ前章(及ビ後章)化學的害物毒物ノ原因作用概説ノ條下參照。既ニコレヲ述ベタルガゴトク、ソノ能ク『害物』タルハ一定ノ要約ノ下ニ於テ然ルナリ。又、ソノ性質・狀態モ千差萬別ナリ。又、コレ必シモ、身體外界ヨリノ來ルニアラス、時ニ身體内ニ生ジテ身體内ノ他ノ組織細胞ニ作用スルモノヲモ包含セリ。『害物』ノ原因作用トイフモ、身體ノ部位・性質・狀態何如(素因何如)又、『害物』ノ性質及ビソノ作用方法何如ニヨリテ、依テ起ル病變ハ常ニ頗、差異ヲ呈セリ。『害物』ノ病因作用ヲ論ズルニ當リテハ、殊ニココニ心ヲ用フルコトヲ要ス(疾病原因概説及ビ素因概説條下參照)。

理學的トイヒ、化學的トイフモ、ソノ精微ノ點ニ至リテハ、ソノ作用ノ果シテ孰レニ屬スルカ判明セザルモノアリト雖、ココニハ

(1) Trauma

唯、大要ヲ捉ヘテ便宜上相分チタルナリ。

理學的『害物』中ニハ、諸多ノ性質ノ相異レルモノヲ有スルガ故ニ、ソノ作用ヲ一括シテ説明スルコトハ難シ。故ニ、ソノ中、重要ナルモノ若干ニ就キテ、項ヲ分チテ、コレヲ論ズベシ。

二 器械的暴力

齊シク器械的暴力ニ因ル『外傷』トイフモ、前項ニ述ベタルガゴトク、種種ノ要約ニ依リテ、ソノ原因的意義ニ多大ノ差異アリ。外傷ニ於ケル原因作用ヲ論ズルニ當リテ最、多ク、コレニ注意スベシ。タトヘバ、銳利ノ刀ヲ以テスルモ、ソノ作用方法ト、ソノ加ハリタル部位トニヨリテ、必シモ常ニ切創ヲ作ルニアラス。又、同一ノ打撲ニ因レル傷害ハ身體部位及ビ組織ニヨリテ、必シモ常ニ同一性質・同一程度ナルニアラス。又、同一性質ナル組織離斷モ亦、實ニ種種ナル外力ノ作用ニヨリテ惹起サルナリ。蓋、斯ノ如キ關係ハ常ニ外傷ノ場合ニ限ラズ、他ノ所謂『外因』性『害物』ノ作用ニ於テ亦、同ク然リトス。

器械的暴力ノ種類ハ、一ニシテ足ラズ。シカモ、ソノ種類ニヨリテ組織傷害ノ狀態ノ固有ナルモノアリ。タトヘバ、銳利ノ刀ヲ以テ切レバ、通常銳緣ヲ有スル切創ヲ作り、刺突ノ場合ニハ刺傷ヲ作り、鈍力ノ作用ニヨリテ、組織挫傷ヲナスガゴトキ、コレナリ。然レドモ、今、コレ等ヲ一一、茲ニ列舉セズ。唯、暴力作用ニ依リテ直接ニ身體組織ニ現ハレタル傷害ノ性質ニ據リテ大別スレバ、一、組織連續ノ斷裂著明ナルモノ、即、『創傷』。二、組織連續ノ斷裂著明ナラズシテ種種ノ組織傷害ヲ來タスモノトアリ。斯ク、兩者ヲ區別スルモ、ソノ間又、移行的ノモノアリ。同ジク連續斷裂性ナルモノニテモ、創傷ノ性質ニ種種ノ差異アリ。就中、刺傷ト切傷トハ最、單純ナル特殊型ヲ示シ。尙、暴力ノ性質及ビ作用方法、竝ニ身體部位ニヨリテハ割創・裂創・銃創或ハ身體内部ニ於ケル臟器ノ破碎壞類ヲ來タシ、又ハ骨折・脫臼等ヲナス。後者、即、組織連

- (1) Contusion
- (2) Distension
- (3) Compression

續ノ斷裂著明ナラザルモノハ、本ト前者ニ對シ、ソノ區別寧、移行的ニ過ギズ。外力ノ作用鈍ニシテ且、急激ナル場合ニ、組織ノ挫傷ヲナシ、又、急激ニ、或ハ緩慢ニ、過度ノ伸展ヲナスモノアリ。筋・腱・神經等或ハ内臓ニモコレアリ。又壓迫ニ因ルモノアリ。

ソノ他、急激ニ暴力加ハリテ解剖的ニハ著明ナル損傷ヲナスコトナクシテ、シカモソノ部ニ於ケル機能障礙ノ頗、劇甚ノモノアリ。震盪ノゴトキコレナリ。震盪ニ因ル病の現象ノ最、明ニ現ハルルハ軟柔組織、或ハ液態成分ガ質緻密、或ハ硬固ナル組織ニ密接シ、或ハコレニテ包擁セラレタルモノニ於テ然リ。頭蓋骨内ノ腦髓・骨性胸廓内ノ肺臟・腹腔壁内ノ胃腸・或ハ骨髓等ノゴトキ、コレナリ。

外力ノ直接ニ作用シタル部位ト、病變ノ現ハルル部位トノ關係ハ、通例相一致スルヲ常トス。然レドモ、ソノ外力ノ作用方法ト、竝ニ當該部位組織ノ性質ト依リテ、顯著ノ病變ガ却テ他處ニ現ハルルコトアリ。ダトヘバ、頭蓋ガ急劇ニ強ク壓迫ヲ受ケテ、頭蓋裂傷ガ壓迫部位ヨリモ、寧、他側ニテ緊張彎曲ノ最、強キ處ニ現ハルルガゴトキ、又ハ顛頂部下ニシテ墮落シテ頭蓋骨底部ニ骨折ヲ來タスガゴトキ、コレナリ。而シテ、コノ際、外力ノ作用方法何如ノ外ニ、臟器ノ生理的、又、病的性狀ニヨリテ、殊ニ外力ニ因ル傷害ヲ蒙リ易キモノアリ。ダトヘバ、腹部ニ打撲ヲ受ケタル際ニ、皮膚ノ損傷著明ナラズシテ、却テ内臓ノ破裂ヲ促スコトアリ。斯ノ如キハ肝臟ニ於テ殊ニ多シト稱セラル。又臺灣人ニ於ケル實驗ニ據レバ、マリア性肥大脾ヲ有スルモノハ、拳闘術ニヨリテ、甚、容易ニ脾臟皮下破裂ヲ來タストイフ。

外傷性ナル局所組織ノ直接的・單位的變化ハ、コレニ概説スレバ、孰レモ「退行性」變化ナラザルハナシ。殊ニ、ソノ急性ナルモノニ於テ、コノコト明白ナリ。即、組織構造ノ生理的秩序ヲ亂シ(壓迫・伸展・連續斷裂・剝離・細胞排列ノ動亂等)及ビ、殊ニ細胞壞死ヲ來タス。且、斯カル變化ノ見ハレ來レル部位、及ビ時期何如ニヨリテ、更ニ種種ノ病的狀態及

ビ疾病ヲ惹起ス。ソノ重要ナルモノヲ局處ニ於ケル血行障礙(出血・貧血・鬱血・血塞等)・神經障礙(疼痛・運動及ビ知覺麻痺等)竝ニ、コレ等ト併立シ、若クハコレニ繼發セル榮養障礙及ビ機能障礙ナリトス。ダトヘバ、壓迫性萎縮及ビ消耗・變形、若クハ骨折ニヨル歩行不能等、コレナリ。蓋、大抵、斯ノ如ク身體組織ノ構造の變異ニ基因スルコトガ明瞭ナルニ拘ハラズ、唯、神經障礙ニ屬スルモノノ中ニハ、腦震盪・脊髓震盪ノゴトキ、又外傷性神經症ノゴトキ、神經組織、殊ニ神經細胞及ビ又、膠質ニ若干ノ變異ヲ推測セシムルニ拘ハラズ、剖檢的所見ノ全ク陰性ナルモノアリ。而シテ、コノ際、中樞神經ニモ亦、細微ノ出血・神經細胞ノ變性・壞死等ノ認メラレタル例アリ。震盪後時日ヲ經タルモノニテ神經細胞ノ石灰化アリシモノアリ。蓋、斯ノ如キハ今後ニ於ケル神經組織検査方法ノ進歩ニヨリテ尙、精細ナル構造ノ變化ヲ窺ヒ得ルニ至ルヲ期待スベシ。

コノ組織變化ニ續キテ組織ノ能働性・反應的變化ナル炎症性變化ヲ發シ、シカモ前者ニ對シテ往往明瞭ノ區劃ヲ見ザルコトアリ。又、コノ炎症變化ニ種種ノ差異アリ。從テ、ソノ病的現象モ個個ノ場合ニ於テ同一ナラズ。シカモ、炎症ノ甚シク旺盛激甚ナルハ、通例、單純ノ器械的外力ノタメノミアラズシテ、外傷ニ合併シ來レル病原么微體感染ノ結果ト看做サザルベカラズ。輕度ニシテ、シカモ永續性ナル壓迫・摩擦・衝突等アル部ニ於テ組織ノ增生・肥厚ガ却テ殊ニ顯著ナルコトアリ。コハ、吾人ノ見解ニ依レバ、絶エズ僅微ノ外傷性損傷アルニ續キテ、ソノ組織反應ガ反復連綿トシテ現ハレタル結果ニシテ、所謂「増殖性炎症」ニ算入シ、若クハコレト同様ニ考フベキモノナリ。又、我邦ニテモ、屢、實驗セラルル兵士ノ「操練骨」(化骨性筋間質炎アリテ、筋間質増殖ノ裡ニ骨質新生ヲ現ハスモノ)ノゴトキ亦、然ナリ。

上述ノゴトキ、外傷性病變ガ、コレヲ生ジタル部位何如ニ依リテ、重要ナル身體生活機能ニ影響ヲ及ボスコトアルハ、固ヨリ言ラ俟タズ。

尙、本項ニ於テ、甚、注意ヲ要スルハ、『外傷』ニ直接又ハ間接ニ合併シ來レル他ノ『害物』ノ作用、竝ニ『外傷』ト組織ノ疾病素因トノ關係ナリ。

單純性器械的作用ニ因リテ生ヅタル『外傷』ノ外ニ、甚、屢、病原么微體感染ノ合併アリ。コレニ依リテ組織傷害ノ狀ニ甚シキ差異ヲ呈シ、往々旺盛、強激ノ炎性變化ヲ由來セシム。而シテ、コノ感染ハ、或ハ外傷ト同時ニ成立チ、若クハ一タビ外傷アルトコロハ、屢、病原性么微體ノ侵入、固著、茂殖ニ適シ、容易ニコレニ因スル病變ヲ催起セシム。『外傷』ト『傳染』トハ實ニ屢、親密ノ關係ニ於テ立テリ。又、外傷ハ必然的、或ハ偶然的ニ、他ノ病變ヲ間接ニ誘發スルコトアリ。タトヘバ、頸部傷害ニ於テ靜脈ニ空氣ヲ吸入シ、右心ヨリ肺動脈ニ互リテ空氣栓塞ヲ呈シ、骨折ニ際シテ脂肪栓塞ヲ亦、同ジク肺ニ作スガゴトキ、コレナリ。

『外傷』ト素因トノ關係ハ、素因論中ニ述べタルガゴトク、甚、重要ノ事項ナリ。即、身體部位ノ生理的性狀、竝ニ病的素因何如ハ自ラ外傷ヲ受クルコトノ難易、強弱ヲナシ、又、『外傷』自個ハ他ノ病變ヲ發生セシメ、或ハコレヲ蔓延擴張セシムルノ素地ヲ成スコトアリ。又コレニ反シテ、他ノ既存ノ病的機能、或ハ病的狀態ガ外傷ニ繼テ始メテ明カニ認めラルルニ至リ、若クハ外傷ノタメニ他ノ重要ナル病變ヲ惹起スルニ至ルモノアリ。タトヘバ、骨脆弱症^{オステオポロセ}ノ骨、或ハ腫瘍轉移ヲ有スル骨ガ、輕微ノ打撲ニヨリテ破折シ、或ハ外傷アリシ部ニ腫瘍ノ發生ヲ見、又ハ打撲ノタメニ腸潰瘍ノ穿孔ヲナスガゴトキ、コレナリ。斯ノ如キハ、外傷ハコレ一個ノ『誘因』或ハ一個ノ發生動機ヲナスモノナリ。

三 異常寒熱

外界ノ寒熱ハ身體ノ正調ナル生活機能ト、常ニ緊切ノ關係ヲ保チ、生活體ハ一定ノ範圍内ニテハ、ソノ變動ニ對シテ、

(1) Wärmestarr

能クコレニ適應スルコトヲ得ルノ性質ヲ有ス。故ニコノ範圍ヲ脱シテ、始メテ原因的作用ヲナスニ至ル。但、コノ原因的作用タルヤ、寒熱ノ度自個ノ外ニ、又、寒熱媒介物、及ビソノ媒介物ノ作用方法ノ何如、竝ニ個人固有ノ生理的素因ノ習慣、又、特殊病的素因何如ニヨリテ甚、差異アリ。サレバ、單ニ溫度數ノミヲ標準トシテ、直ニソノ結果ヲ論ズルコト能ハズ。

動物體ノ組織細胞ガ寒熱ニ抵抗シ得ルノ程度ハ、常體溫ノ上下ニ於テ其ニ同等ナリトハイベカラス。概シテ、寒冷ノ方、抵抗ノ範圍ノ廣キヲ通例トス。攝氏三七度ヲ身體常溫トスレバ、コレニ超ユルコト數度ニシテ、細胞原形質ハソノ運動性ヲ失ヒ、所謂『溫硬』⁽¹⁾ヲ來タシ、終ニ死スルニ至ル。タトヘバ、人ノ白血球ハ五十度ニテ溫硬ヲ來タス。コレニ反シテ、體溫以下ノ寒冷ニ堪ヘ得ルノ範圍ハ常ニ尙、甚、廣シ。實驗ヲ細心ニ行ヘバ、筋肉ノゴトキ蛋白質ハ凝固スルコトナクシテ、零下^{ウンタルキユルト}一八度マテ『低冷』^{セシムルコトヲ得ベシトイフ}ニ至ル。

異常ノ寒熱ハ、或ハ主トシテ直接ニ一局部ニ作用スルモノアリ、而シテ又、コレヨリ更ニ、他ノ部位ニ病的影響ヲ及ボスコトアリ。或ハコレニ反シテ、全身ニ、若クハ身體ノ大部分ニ、寒熱ガ一旦ニ作用スルコトアリ。

甲 局處的作用

局處の直接作用ハ、寒熱共ニ組織細胞ノ障礙殊ニ退行性變化ニシテ、甚シキモノハ直ニソノ壞死ヲ起サシム。サレバコレガタメニ、種種ノ構造及ビ機能ノ變化ヲ生ズ。通常寒熱ガ先、作用スルトコロハ、體ノ外表ニシテ、此處ニアル感覺鋭敏ナル血管神經ハ、直ニコレニ對シテノ反應ヲ呈シテ、局處性血行障礙ヲ來タス。コノ事、先、最、著明ノ變化トシテ現ハレ、次デ、被害組織ニ炎性滲出ヲ見ルニ至ル。而シテ場合ニヨリテハ組織壞死ガ甚、廣汎ニシテ、殆、病變ノ全幅ヲ占ムルコト

トアリ。又、他ノ場合ニテハ、血行障碍或ハ炎症變化ガ主ナルコトアリ。

一。異常高溫和局處的作用ニ就キテ、殊ニ觀察スルニ、組織成分ノ被害、殊ニ壞死、血行障碍、並ニ炎症變化ハ常ニ密接ノ關係ヲ保チ、害物ノ作用方法何如ニヨリテ種種ノ状態ヲ示スモノナリ。サレバ、皮膚火傷ノ二度^下稱セララルモノ、(一)紅斑、即、血管運動神經ノ作用ニヨル血管擴張、(二)水泡形成、即、炎症漿液滲出ガ外皮ト真皮トノ間ニ現ハルモノ、(三)局處性組織壞死ノ三者モ往往相聯立シテ存シ、ソノ間判然タル區劃ノ設クベカラザルモノアリ。

異常高溫和局處組織ニソノ作用ヲ及ボスニ當リ、ソノ組織成分ガ始メテ被害サレ後、終ニ壞死ニ陥ルマデノ間ノ性状ハ、組織ノ性質何如ニ依リテ、各、多少ノ差異ヲ呈スルモノニシテ、吾人ハコレヲ一々實驗的ニ知得スルニ難カラズ。就中、血液及ビ血球ノ變化ハ頗、人ノ注目ヲ惹クトコロニシテ、赤血球ノ死及ビ變形、破壞、血球溶解ノ現象及ビ血管壁ノ變化ト相俟テ、血流滯止及ビ血塞ヲ來タスコト等ハ、殊ニ重要ノモノナリ。コノ血液ノ變化ハ、血管自個ノ傷害ト共ニ直接、或ハ間接ニ、血行障碍ヲ惹起シ、且、組織ノ營養障碍ヲ起スニ與カレリ。

コノ際局處ニ於ケル神經ノ障碍ハ、注意ヲ要スルモノニシテ、局處ニ於ケル皮膚ノ神經刺戟ノタメニ疼痛ノ感覺ヲ惹起シ、コノ神經末端ノ刺戟ハ、反射的ニ血管神經ノ上ニ作用シテ血管擴張ヲ來タス。又、コノ神經刺戟ニヨリ更ニ腦症狀ヲ誘起スルニ至ルコトアリ。

コノ血管擴張ハ、輕度ナラバ、早ク消散シ去ルモ、熱ノ作用ノ強カリシモノニテハ、血管壁ヲ透シテ炎症滲出ヲ促ガシ、更ニ他ノ炎症變化ヲモ績發セシムルコトヲ得ルナリ。而シテコノ血管擴張自個ノ結果トシテ、又、能ク血液ノ滯在ヲ促シ、血管壁ノ變化ト相待テ血塞ヲ形成スルニ足ルモ、熱ノ作用ノ強キ場合ニテハ、又、直接ニ血管内通過ノ血液ヲ變化セシムルコト前述ノゴトシ。且、甚シキ強熱ノ作用ニヨリテ血管ガ直ニ收縮ヲ來スコトアルハ、動物試驗的ニ認メララタリ(サムエル

氏)蓋、高溫和局處の有害作用中、血行障碍ハ殊ニ顯著ニシテ殆、コレニヨリテ、全幅ノ病變ヲ説明スルコトヲ得ベキガゴトシト雖、又、熱ガ直接ニ諸組織成分ニ作用シテ生ゼル被害状態ヲモ決シテ輕視スルコト能ハズ。而シテコレ等ノ諸種病變ハ、常ニ相關聯シテ發生スルモノナリ。

皮膚ノ大部分ニ汎ク火傷ヲ生ジタル場合ハ、延テ全身ノ諸組織ニ障碍ヲ波及シ、終ニ死ヲ來タス。通例、全身外表ノ三分ノ一、或ハ二分ノ一ヲ侵シタルモノハ甚、危険ナリト稱セラル。ソノ「火傷死」ヲ惹起スルノ病理ニ至リテハ、古來諸家ガ幾多ノ實驗及ビ動物試驗ヲ重テ、種種ノ學說アリテ出デタルニ拘ハラズ、吾人ハ、コレニツキテ今日、未、十分正確ナル知識ヲ有セズ。

火傷死ノ病理解剖所見ニ關シテハ、若干病變ノ指摘スベキモノ無キニアラズ。腦膜及ビ腦髓ノ充血、腦膜ノ水腫アリ、又、神經細胞ニ精微ノ變化ヲ見ルコトモコレアリ。漿膜、胃腸ニ出血點、實質性臟器ニ多少ノ變性アリ。又、血球溶解ニ由來セル變化ノ認メラルモノアリ。即、脾臟ニ於ケル赤血球破壞像又ハ色素尿ノゴトキ、コレナリ。ソノ他、往往續發性ト看做スベキ肺炎竈モアリ。蓋、火傷死ヲ來セル時期何如ニヨリテ解剖的所見ハ、一ナラス。

コレ等ノ病理解剖所見ハ未、火傷死ノ理ヲ十分明確ニスルニ足ラズ。人或ハ神經障碍ニ重テ置キテ中樞神經系ノ反射性麻痺ニ歸シ。或ハ反射性ニ血管壁緊張ノ減失ニ因ル心臓麻痺ナリトシ。或ハ血行及ビ血液ノ變化ヲ最重要視シ。或ハ火傷ニ因レル組織破壞ニ際シテ蛋白質破壞產物ノゴトキ化學的毒物ヲ生ジ、火傷死ヲ以テソノ中毒ノ結果ナリト稱スルモノアリ。蓋、中毒說ハ所說、甚、巧妙ナルモ、單ニコレノミヲ歸スルコト能ハズ。他ノ神經・血行・血液ノ變化ノゴトキハ固ヨリ亦、重要視スベキモノナラン。要スルニ、同ジク火傷死トイフモ、熱ノ作用方法ト個人性トニヨリテ、必シモ、常ニ同一型ノモノノミトナス能ハザルゴトシ。マルシン氏^ハ結論シテ曰ク「火傷死ハ急性シヨツクノ

(1) Frostgangraen

結果、即、生活ニ重要ナル機能ノ中樞ヲ麻痺セシムルコトノミ因ルモノアリ、又、急激ノ死ニアラザル場合ニ於テハ神經中樞、殊ニ延髓ニ徐徐ニ増加シ來タル麻痺ヲ起シ、コレ死因タルコトアリト。又、曰ク「殊ニ腦竝ニ一部ハ亦、肺及び腹部臟器ニ於ケル重大ノ血行障礙ハ重要ノ意義アリ。且、コレハ器械的障礙(血栓)ヲタメニハアラズシテ、血管壁ノ血管神經性麻痺及び心臟機能ノ不可ニ歸スベシ。血液ノ變化自個ハソノ高度ナルトキニ於テノミ重キ意義アルニ過ギズ。毒性物質ノ著シキ共働アルコトハ、急性火傷死ニ於テ證據立テラレタルモノナラズト。蓋、穩當ノ意見トイフベシ。

二。異常低溫、即、寒冷ノ局處性作用ハ、熱ト同ジク組織細胞自個ノ傷害ヲ惹起シ、ソノ甚シキモノハ、直ニ組織細胞ノ壞死ヲ來タス。シカモ、血管ヲ有スル部ニテハ寒冷ニ原因セル血管壁ノ收縮ガ先、著明ニ見ハレ、且、コレニ續發スル病變、竝ニコレガ結果ヲ生ジ、コレ屢、重大ノ意義ヲ示セリ。即、局處貧血ヲ呈シ(著甚ノ蒼白)、血管收縮ガ一定時、續キタル後ニハ、又、自ラ血管擴張ヲ來タシ(赤色或ハ紫赤色)、更ニ血行停止ヲナスニ至ル。而シテ血管擴張ト共ニ、往往、輕微ノ炎症漿液滲出ヲ促ス(凍瘡)。コノ血管障礙殊ニ動脈ノ攣縮ニ因ル血液輸入障礙ガ強クレバ、終ニ貧血及ビ血行停止ニ基ツケル壞死(凍瘡壞疽)ヲ來タスニ至ル。コハ屢、四肢ノ末端・耳殼・鼻端等、寒冷ニ觸接シ、且、血行障礙ノ起リ易キ處ニ現ハル。蓋、コノ場合ノ寒冷ハ未、直接ニ組織壞死ヲ惹起スルホドノ強烈ナルヲ要セザレバ、コレヲ直接寒冷自個ノ作用ニ因ル組織壞死ニ對シテ區別スベキナリ。サレド、此ノ如キ、未、極度ニ達セザル寒冷トモ、亦、組織ノ榮養ヲ不良ニスルモノナルガ故ニ、血行障礙ヲ惹起スル以外ニ、又、コノ凍瘡壞疽ノ形成ニ關與スルトコロナシトイフベカラズ。

乙 全身的作用

一。高溫度ノ雰圍氣内ニ居ル等、全身ガ異常高溫度ニ接シタル場合ニ於テハ、コレガタメニ心臟機能、呼吸及ビ神經機

(1) Hitzschlag

能ニ重大ノ障礙ヲ來タシ、終ニ死ヲ招クコトアリ。但、空氣ハ熱ヲ導クコト不良ナルガ故ニ、比較的高溫度ナルモ暫時ナラバ能クコレニ堪フルコトヲ得ルナリ。且、人ハ一定度マデハ周圍ノ高低溫度ニ適應スルノ性質ヲ有スルモノナレバ(タトヘバ、汽船ノ火夫ガ熱帶航海中毎日五六十度ノ汽罐室ニテ働作スルガトキ)、通例周圍ノ高溫度ヲタメニ危險症ヲ發スルモノハ、他ノ不健康的要件ノ兼存セル場合ニ於テ然ルナリ。夏日嚴格ナル紀律ノ下ニ行ハルル兵士ノ行軍ノゴトキ、暑時過度ノ持續的勞働ニ服シ、シカモ體溫發散ガ不良ナル際シテ、所謂「中暑症」ヲ惹起スルハ、即、コレナリ。コノ時體溫發散ヲ不可ナラシムル空氣濕熱ノ場合ニテハソノ害殊ニ甚シク、又、個人的素因ニモ關係少カラズ。タトヘバ、動脈硬化症ノ人ハ熱ニ堪フルノ力、弱キガゴトシ。サレバ、コノ際、疾病ノ原因ヲ單ニ外氣ノ溫度自個ニノミ歸スベカラザルナリ。

外氣ノ溫度高クシテ體溫發散ノ妨ケラレタル場合ニテハ、體溫、體內ニ鬱積シ、昇騰シ、往往、攝氏四十度以上ニモ達ス。コノ時ハ、脈迅速・呼吸促迫・頭痛・不快・苦悶ノ感ヲ惹起シ、或ハ俄ニ人事不省ニ陥リ、終ニ死スルコトアリ。ソノ致死ノ理由ニ至リテハ、火傷死ニ於ケルガトク、尙、明確ノ智識ヲ缺ギ、剖檢上ニモ獲ルトコロ鮮シ。動物試驗ニ於テハ、稍單純ナル高熱作用ヲ觀察スルコトヲ得ベシト雖、尙、死因ニ就テハ未、一定ノ説明ヲナスニ至ラズ。恐ラクハ、コノ場合ニ於テモ、種種ノ有害作用ニ、ソノ死因ヲ歸スベキモノナラン。蓋、體溫蓄積及ビ昇騰ガ身體ノ重要組織、殊ニ中樞神經細胞ニ障礙ヲ來タスコトハ、動物試驗ニ徴シテモ亦、認メラレ、コレ恐ラクハ甚、重要ノ意義アルモノナルベシ。而シテ、コノ際ニ認メラルトコロノ「心筋機能ノ障礙ハ、コレヲ所謂「溫硬」ニ因ル直接的障礙ト看做スベキカ、將タ神經中樞ヨリスルトコロノ「心臟麻痺トナスベキヤ、コレヲ正確ニ判別スルコト難シト雖、前者ハ寧、首肯シ難シ。ソノ他、尙、死因ニ對シテ顧慮スベキハ血液ノ變化ニシテ、水分ノ損失ニヨレル血液濃稠及ビ赤血球ノ機能障礙及ビ溶解ノゴトキ、コレナリ。又、呼吸筋・心筋ノ働作過度ニ重キヲ置クノ説アリ。有毒性物質代謝產物ノ蓄積ニヨリテ重要組織ヲ傷害ストノ説アレドモ、孰

(2) Hitzerschöpfung (1) Marchand

レモノノ一ノミヲ以テ全者ヲ解説スルニ適セザルナリ。マルシン氏⁽¹⁾ハ謂ヘラク、「急性ノ中暑症ハ延髓ノ刺戟状態ニ續キテ起ルトコロノ働作不能ニ因ルトスルヲ以テ最、信ニ近シトス」ト。

蓋、中暑症ノ發生ニ對シテハ、前ニモ述ベタルガゴトク、種種ノ原因的要件ノ合同アルガ故ニ、中暑症ト稱セラルルモノノ中ニハ必シモ、全身ノ體溫昇騰ニ因ルモノノミヲ含マズ。又、中暑性身力衰微症⁽²⁾ト名ヅクルモノアリ。コレ上述ノゴトキ體溫ノ昇騰ヲ見ザルニ先チ、既ニ強度ノ神經系統・心臟ノ機能障礙ヲ惹起シ、若クハ呼吸困難ヲ發スルモノナリ。

日射病ト中暑症トハ屢、混同セラレ、且、同時ニ兩原因共ニ作用スルコト多キヲ以テ、往往、兩者ノ區別ヲ明確ニシ難キコトアリ。日射病トハ主トシテ頭首部ニ日光ノ直射ヲ受クルコトニヨリ、即、殊ニ太陽ノ放射溫ノ作用ニヨリテ發スルモノニシテ、頭痛・ソノ他ノ諸神經症狀ヲ惹起シ、解剖的ニハ腦及ビ腦膜ノ強度充血及ビ漿液滲透ヲ見ル。

二。寒冷ニ對スル身體ノ調節作用ハ高溫ニ對スルヨリモノノ範圍廣ク、體溫ノ發散ヲ防ギ、同時ニ體溫ノ產出ヲ高カメ以テ能ク外界ノ寒冷ニ堪ヘシム。但、他ノ共働ノ要約ノ何如ニヨリテ、ソノ結果ニ少カラザル差異アリ。即、寒冷ノ作用方法・タトヘバ、同一溫度ナルモ寒冷ノ空氣ヨリモ寒冷ノ水ノ方害多シ、及ビ個人ノ習慣・榮養状態・精神状態・ソノ他ノ身體状態(タトヘバ、酒ニ酔ヘルモノハ抵抗力少シ等)ニヨリテ全身障礙ノ程度ニ差異アリ。

人ハ永ク全身ヲ冷却スルコトニヨリテ、終ニ體溫ノ沈降ヲ來タス。ゾノ生活ヲ絶ツニ至ルベキ體溫ノ限度ニ就キテハ、判然タルコトヲイヒ難キモ、マルシン氏⁽³⁾ノ記スルトコロニ據ルモ、最、多數ノ溫血動物ニテハ、凡、攝氏一八乃至二〇度ト看做シテ可ナリ。體溫ガ二四度或ハ二二度ニ沈降スルニ至ルマデ、全身冷却セルニ拘ハラズ、恢復シ得タル實例アリ(マルシン氏ノ引用セルトコロニ據ル)。

身體ノ各組織ガ高度寒冷ニヨリテ受クルトコロノ傷害ハ、組織ノ種類ニヨリテ一様ナラザルモ、ソノ未、全然生活ヲ廢滅ス

(3) Marchand

(1) Erkältungskrankheiten
(2) Erkältung

ルニ至ラザルニ先チ、既ニソノ働作ノ性能ヲ失フニ至ル。即、全身凍傷ノ症狀(全身ノ疲憊衰弱・心臟働作及ビ呼吸ノ遲緩・神經作用ノ鈍麻無力・嗜眠等)竝ニ凍死ノ理由ハ身體生活ニ重要ナル臟器細胞ノ機能減退ニ在リト稱シテ不可ナカルベシ。凍死ニ於ケル剖檢の所見ニハ特徴トスベキモノナシ。通例、内臓ニ血量多キハ寒冷ニ早ク接セル外表ヨリ身體内方ヘ血液ノ移行シタルガタメナリト解釋スルヲ得ベシ。

寒冷ノ觸接ニヨリテソノ處ニ一定ノ病變ヲ惹起シテ直ニ疾病ノ發生ヲ來タスコトアリ。若クハコノ寒冷ノ作用ガ原因的要件ノ一トナリ、或ハ一ノ誘因トナリ、或ハ素因トナリ他ノ病因的要件ノ共働ト相待テテ疾病ヲ發生セシムルコトアリ。所謂感冒病⁽¹⁾トハスベテコレ等ヲ總括セルモノト理解シテ可ナリ。蓋、「感冒」⁽²⁾ハ古來疾病原因中、甚、重要ノ位置ヲ占メ來リシガ、原因學ノ發達、殊ニ病原細菌學ノ進歩ハ從來感冒病トナセル若干疾病ノ原因ヲ闡明スルニ至リ、延テ感冒ノ原因性ヲ否拒セントスルノ傾向ヲ生ジタリ。然レドモ、細菌原因性ノ疾病ト雖、時ニ身體冷却ガソノ發生ノ要約トシテ重要ノ意義アルモノアリ。又、細菌ノ侵害ナクシテ若干ノ病的現象ヲ惹起セシムルモノアルコトヲ看過スベカラズ。シカモ、一一ノ例ニ就キ、ソノ個個ノ原因的要件ヲ分拆シテ眞價ヲ判斷スルノ難キ、コレ感冒ノ病理ノ未、明晰ナラザル所以ナリ。

局處、タトヘバ、皮膚ニ於ケル寒冷作用ハ、直ニソノ部ノ動脈管ヲ收縮セシメ、コレ更ニ、血管ノ擴張及ビ充血ヲ繼發シ、若クハ反射的ニ血管運動神經ニソノ作用ヲ及ボシテ、遠隔臟器ニモ同シク、血行ノ變化ヲ惹起シ、又反射的の神經作用ニ依リテ一定ノ機能ヲ促ガシ(タトヘバ、分泌ノゴトキ)、コレ等ノ基礎ノ上ニ、諸般ノ病變ノ見ハレ來ルナリ。シカモ、コノ際、一定ノ「抵抗弱點」ヲ有スル人、或ハ一定ノ素因ヲ有スル人ニ於テ、殊ニソノ病變ヲ生ジ易シ。タトヘバ、寒冷ノ空氣ヲ直接吸入シテ鼻粘膜ノ分泌過多ヲ來タシ、或ハ人ニヨリテ氣管枝筋ノ收縮痙攣ヲ促シ、或ハ特殊ノ素因ヲ有スル人

(1) Siegel

ガ、寒冷ニヨリテ發作性血色素尿ヲ出シ、或ハ下痢、或ハ神經痛ヲ發スルガゴトキコレナリ。ジューゲル氏⁽¹⁾ノ動物試験ニ據レバ、犬ノ體表ニ寒冷ヲ加ヘ(敢テ細菌ノ共働ヲ要セスシテ)能ク腎臟炎ヲ惹起スルヲ得タリトイフ。蓋、感冒病ノ發生ニ於テ、吾人ハ身體ノ素因何如ガ甚大ノ關係アルヲ知ルト同時ニ、スベテノ感冒病ヲ以テ、悉ク細菌性傳染性トナスコトノ失當ナルヲ悟ルベシ。

然レドモ、所謂感冒病ノ多數ニ於テハ、寒冷ニ曝露セルコトガ純粹ノ單一原因ニアラスシテ、感冒ハ他ノ原因的要件ノ共働ヲ喚起シ、若クハ傳染病病原體ニ對スルトコロノ身體ノ抵抗ヲ減弱セシメ、ソノ病原性ヲ發揮スルニ適セシムルモノナリ。タトヘバ、寒冷ノ直接作用ニヨリテ一時粘膜ノ粘液分泌過多トナリ、所謂「加答兒」^{ラヂウム線}ヲ症狀ヲナスモ、コレ更ニ永ク繼續シテ、炎性變化、益、顯著トナルニ至リテハ、最早、コレ單純ナル寒冷作用ニノミ歸スベキモノニアラズシテ、催炎么微體ノ働作ニ、ソノ主因ヲ求メザルベカカラズ。蓋、諸種病原菌ハ、或ハ感冒ニ乘ヅ、若クハコレニ次テ新ニ身體内ニ入ルモノモ有ルベク、或ハ身體内既存ノモノニシテ感冒ニ依リテ、始テソノ原因作用ヲ逞ウスルコトアルヲモ推測スルニ難カラズ。タトヘバ連鎖狀細菌ハ通例、口腔内ニ存在スルモノニシテ時ニ感冒性咽喉炎ヲ惹起シ、肺炎菌亦、多ク健康人ノ口腔内ニ認めラルルモノニシテ、亦、時ニ感冒性肺炎ヲ發生セシムルガゴトキ、コレナリ。斯カル問題ニ關シテハ、諸家既ニ多數ノ動物試験ヲ試ミ、ソノ理論ニ就キテモ種種ノ意見アリテ發表セラレタリ。

寒冷作用ト細菌性疾病發生トノ關係ハ必シモ、常ニ同一様ニアラズ。或ハ感冒ニヨリテ唯、病原菌侵入ノ門戸ヲ開キタリトイフニ過ギザルモノアルベク、或ハ寒冷ニ因セル局處ノ血行障礙ガ病原菌ニ對スル組織抵抗力ヲ減退セシメ、又、加之、却テコレガ繁茂ヲ助長スルモノモアルベシ。茲ニ血行障礙トイフハ、或ハ直接寒冷作用ニ因レル貧血ノコトアリ、或ハ寒冷作用ニ續キテソノ局處ニ、若クハ反射的ニ遠隔地ニ發スル充血ノコトアリ。コノ充血ニハ又、動脈性ノモノアリテ、コノ際

(1) Trommsdorff

ニ見ハルル血液亞爾加里性ノ減少ハ(鬱血ノ場合ニ反シ)病原菌ノ繁殖ニ好適ナリト稱スベシ。ソノ他、コノ血行障礙ヲ伴ヘル組織ノ變狀ガ(タトヘバ、組織液ノ浸潤多キ部)亦、時ニ病原菌ノ蔓延ヲ助クルモノ無キニアラズ。又、寒冷作用ニヨリテ體溫自個ガ著シク下降スルコトアリトセバ、斯ノ如キ場合ニハトロンムスドルフ氏⁽¹⁾ノ動物試験成績ニ徴シテ、白血球ノ運動性・喰菌性・アレキシンノ再生力等ノ減退モ亦、考フベク、病原菌ニ對スル身體抵抗力ノ減退ヲ少クトモ一部分ハ、コレニ歸セシムルコトヲ得ベシ。サレバ、殊ニ身體衰弱ノ人ガ感冒ニヨリテ傳染病ニ對スル疾病素因ヲ作り出スノ理モ首肯スルニ難カラザルナリ。

要スルニ、『感冒』ト謂ヒ『感冒病』トイフモ、ソノ意義、必シモ常ニ全く同一ナルモノノミニアラズ。個個ノ例ニ就キテ、個個ノ發病ノ要約及ビ個人性何如ニヨリテ考察ヲ施スベシ。又、他方ニ於テハ寒冷ノ作用方法ニモ種種ノ差異ニアリテ、疾病發生上ノ影響ガ互ニ相同ジカラザルコトヲモ知ルベシ。

四 ソノ他ノ諸理學的害物(輻射線・電氣・異常氣壓等)

前掲諸項ノ外、尙、種種ノ理學的現象ノ原因的要件トナスニ足ルモノアリ。就中、比較的、屢、吾人ガ經驗スルモノヲ列舉スレバ、電氣、及ビ諸種輻射線、殊ニレントゲン線^{ストライレン}、ラヂウム線、及ビ日光線等ナリ。日光線ニハ溫熱ヲ與フルトコロノ溫熱線ノ外ニ、主トシテ化學作用ヲナスモノ、即、青紫線及ビ紫外線アリ。コレ等ハ時ニ亦、身體ニ病變ヲ惹起スルニ適ス。又、空氣壓力ノ變、過度ノ音響等亦、時ニ原因的要件タルコトアリ。

吾人ハ、今茲ニコレニツキテ細論ヲナスノ餘裕ヲ有セザレバ、唯、コレニ關シテ一言ヲナスニ止ムベシ。レントゲン線^{ラヂウム線}及ビラヂウム線、共ニソノ作用スル局處(殊ニ皮膚)ニ組織ノ破壞(組織變生・壞死)ヲ來タス。コノ性質ハ治療上ニ應用セラ

(1) Erythema solare

レ、能ク病的組織增生ヲ消滅セシムルモ、又、時ニ他ノ不快ナル病的傷害ヲ惹起シ、諸焮衝潰瘍ヲ作り(レントゲン皮膚炎ノゴトキ)、永ク治癒ニ就カザルコトアリ。又、時ニ皮膚及ビコレニ屬スル毛髮・爪甲等ノ萎縮乃至消耗ヲ來タシ、且、皮膚炎ニ續發シテ、更ニ腫瘍殊ニ癌腫ノ形成ヲ促ガスコトアリ。レントゲン線ハ、更ニ深部ノ組織ニモ作用シ、血液・脾臟・生殖腺等ノ組織成分ノ破壞ヲ催シ、胎生の組織ノ發育ヲ害ス。動物試験ニテ能クレントゲン線ニヨリ流産ヲ促サシムルヲ得トイフ。ラヂウム線ノ作用モ、大要、前者ト同ジ。ソノ醫療上ニ應用セラレ、往往著效ヲ收ムルモ、他方ニハ亦、能ク皮膚及ビ深部ノ組織ヲ傷害シ、又、焮衝ヲ惹起スルコトヲ得ベシ。

日光ヲ頭部ニ直射セシメ、コレニヨリテ日射病ヲ起スコトアリ。コレハ蓋、日光線中溫熱線ノ作用ヲ主トスルモノナリ。ソノ他、主トシテ化學的作用ヲナス青紫線及ビ紫外線アリテ、コレ皮膚ニ作用シテ種種ノ傷害ヲ來タスコトアリ。即、所謂日光性紅斑⁽¹⁾又ハ炎性變化ヲナスニ至ル。コノ際ニ於ケル皮膚ノ組織的變化ハ、恰、火傷ト相似テ、表皮細胞ノ種種ノ變性・壞死・血管ノ擴張・炎性滲出ヲ呈シ、又、色素沈著ヲ遺スニ至ル。ソノ皮膚ノ炎性變化ハ更ニ濕疹或ハ色素性乾皮症ヲ誘發シ、コレ更ニ上皮性新生物ヲ喚起スルコトナシトセズ。北國ニテ人、晴天雪中ヲ旅行シ、ソノ雪ニ映ツタル日光ノタメニ往往結膜炎ヲ惹起スルガゴトキモ、同様ノ化學的線ノ作用ト見ルベシ。又、角膜ノ細胞及ビ纖維ニモ變性破壞ヲ來タシ、直接ニ網膜ニコノ紫外線ヲ當ツレバソノ神經細胞ヲ壞死セシムトイフ。但、コノ紫外線が組織ヲ破壞スルノ作用ハ、唯、淺表性ニシテ、深部ニ竄入シテ働作スルコトハ無キガ故ニ、内臟ニ對シテ直達性障礙ヲ與ヘザルモノト見テ可ナリ。コノ組織破壞ノ作用ハ亦、治療ノ目的ニモ應用セラレ。

電氣ノ原因的作用ハ、強度ノ放電又ハ強度ノ電流ニ觸ルル場合ニ見ルトコロニシテ、諸種ノ電氣機ニヨリ、又ハ電擊ニ際シテコロコトアリ。ソノ局處ニ於ケル所見ハ、血管運動神經性ノ障礙・組織細胞ノ壞死・破壞・次デ炎性變化ヲモ

(1) Bergkrankheit

伴ヒ來ルモノナリ。而シテ延テ、身體内部ニ及ビテハ主ニ神經中樞ノ障礙ヲ惹起ス。電擊ニヨリテ身體皮膚ニ、火傷ニ類スルトコロノ所謂「電擊斑」ヲナス。コレ血管運動神經障礙ニ因レル紅斑ニシテ、電氣ノ皮膚ニ於ケル傳達ノ狀ヲ示ス、之字狀・樹枝狀・線狀ヲナシ、又電擊ニヨリテ組織ノ斷裂・出血等ヲ認メシム。ソノ他、被害者ガ即死セザル場合ニ於テ、往往神經中樞ノ障礙ヲ來タシテ失神シ、コレ比較的永ク續キ、或ハ運動知覺ノ麻痺ヲ來タスコトアリ。又、運動性刺戟症狀(搖擲ノゴトキ)ノ認メラルルコトアリ。ソノ神經中樞ノ障礙ハ最、著明ニシテ、生活ニ重要ナル神經中樞ノ作用ヲ失シ、呼吸作用麻痺シ、心臟亦、終ニ運動ヲ停止スルニ至ル。

空氣壓ノ異常高低ハ亦、原因的作用ヲナスニ足ルモノナリ。人類ガ生活シ得ルコロノ氣壓ノ範圍ハ、コレヲ一定スルコト難キモ、凡、三・五三密迷ノ低壓ヨリ地上ニ於ケル氣壓モ種種ノ要約ニヨリ異ナレドモ、凡、一氣壓即、水銀柱七六〇密迷ナリト概算シ)三乃至五氣壓ノ間ナリト稱セラルルモ、シカモ一時的ナラバ、尙、コノ範圍ヲ踰エルコトヲ得ベシ。且、氣壓ノ變動ガ急劇ニ來ル時ニソノ危害ハ殊ニ大ナルモノトス。

人ガ低壓ニ遭フハ高山登攀(所謂「高山病」⁽¹⁾ヲ發ス)・空氣船・輕氣球等ニ搭乘スル場合ニシテ、コレニヨリ、倦怠・嗜眠・頭痛・眩暈・心悸・呼吸頻數及ビ不正嘔吐・失神・齒齦ヨリノ出血等ヲ來タス。蓋、空氣壓ノ變化ニ因ル疾患ニハ、同時ニ他ノ障礙ヲ隨伴セシムルモノナレバ、單純ナル氣壓異變ノミノ結果ヲ識別スルコトハ困難ナリ。殊ニ低壓處ニテハ、通例酸素乏少ナルガ故ニ、コノ事、亦、一ノ重大ナル要件トシテ作用シ、又、身體ノ過勞・精神ノ興奮・不安・モ與テ力アリ。ソノ他空氣ノ溫度・濕度、或ハ空氣中ノ電氣等ニモ關係アリ、且、個人的素因ヲモ顧慮スベキナリ。サレバ、空氣壓力異變ニ因ル身體障礙ノ理ニ關シテハ研究者ノ意見ノ互ニ相一致セザルコト少カラズ。但、前掲ノ病症ヲ惹起セシムル原因ノ一ガ酸素ノ缺乏ニアルコトハ殆、疑ヲ容レズ。タトヘバ高所ニアリテ必發スルコロノ脈頻數ハ、他ノ要

(1) P. Bert

約ノコレニ與カルモノアルモ、主トシテ肺胞内ニ於ケル酸素張力乏少ノタメニ、肺ノ血液ハ十分ノ酸素量ヲ攝取スルコト能ハザルガタメニ起レル現象ト看做サル。ベルト氏⁽¹⁾ニ據レバ、コノ際、酸素ヲ吸入セシメテ能ク脈數ヲ降下セシムトイフ。呼吸ノ頻數モ他ノ諸研究者ノ說ニ據レバ、亦、肺胞内酸素ノ減少ニ因ルトイヘリ。

空氣壓力ノ異變ニ對スル身體内瓦斯體ノ變化ハ、甚、注目スベキ現象ニシテ、氣壓低下スレバ、著シク膨脹シ、殊ニ鼓膜ヲ以テ外界ト相隔テラルルトコロノ鼓室ノゴトキハ、容易ニ、ソノ影響ヲ受ク。即、鼓室内ノ空氣膨脹ノタメニ鼓膜緊張シ、充血・疼痛等ヲ來タスニ至ル。殊ニ甚、重要ナルハ血中瓦斯ノ状態ニシテ、急ニ空氣低壓ニ遭ヘバ、血中ノ窒素ハ遊離ス。若、高壓處ヨリ急ニ低壓處ニ來ラバ、コノ大量ニ遊離セル瓦斯ハ栓塞ヲ形成シ、危險症狀ヲ惹起スルニ至ル。空氣壓ノ高低ト血液トノ關係ニ就キテハ、幾多ノ研究者ニヨリテ、種種ニ説明セラレタレドモ、要スルニ、高處ニテハ(即、低壓ノ場合ニシテ)赤血球ノ數モ及ビ色素ノ量モ共ニ増加ス。コノ現象ハ單ニ血液濃厚ニナリタルガタメニ起レル外觀的ノモノトノミイフベカラズ、恐ラクハ、骨髓ヨリセル血球新生及ビ輸入ノ増加ヲ承認セザルベカラズ。ソノ理ノ精微ニ至テハ、吾人ノ知識尙、徹底ヲ缺クト雖、蓋、亦、低壓ニ伴ヘル酸素減少ニ、ソノ發生動機ヲ求ムベキモノナラン。即、血液ノ酸素攝取減少ノタメニ茲ニ一種適應性變化ヲ示シタルモノトモ見ルヲ得ンカ。低壓ノタメニ血壓ニ著明ノ影響ヲ示スコト無シ。低壓ニ際シテ所所ニ出血スルノ理ハ未、十分ニ明ナラズ。少クトモ血壓ノ亢進ニ因ル出血ニハアラザルガゴトシ。

氣壓ノ増加ニ遭遇スルハ潜水業者・地下業者等ニシテ、二ニ二氣壓或ハ四氣壓以上ノ處ニテ業ヲ操ルモノアリ。斯ノ如キ、高壓ニヨリテハ呼吸・脈共ニソノ數ヲ減ジ、鼓膜内外ノ壓ノ差著シキガタメニ壓感ヲ覺エ、鼓膜ノ破裂ヲ來タシ、出血ヲ致スコトアリ。赤血球ノ數ニハ特異ノ變動ヲ見ズ。空氣壓亢進ニ際シテ殊ニ重要ナルハ血液内ノ瓦斯量殊

ニ窒素ノ増加ニシテ、長時高壓ノ加ヘラレタル場合ニテハ血液ハ容易ニ窒素ニテ飽和セラルルニ至ル。蓋、高氣壓ノ際最、危険ナルハ高壓自個ヨリモ寧、高壓處ヨリ急劇ニ低壓(或ハ常壓)處ニ來ルコトニシテ、コノ際コノ飽和セル多量ノ窒素瓦斯ハ一時ニ遊離シテ諸所ニ血管瓦斯栓塞ヲナスニ至ル。又、血液以外ニテ組織液中ヨリモ、亦、瓦斯泡ノ發散ヲ促ガスコトアリ。種種ノ危険ナル身體症狀ハ蓋、主トシテコレガタメニ生ジ、又、終ニ死ヲ致スモノトス。殊ニ右心及ビ肺臟血管内ニ瓦斯栓塞アリテタメニ心臟麻痺ヲナシ、神經中樞、タトヘバ脊髓ノ血管瓦斯栓塞ノタメニ麻痺ヲ惹起ス。脊髓實質ニ軟化竈ノ認めラレタル例亦、コレアリ。

参考文献

理學的害物ノ原因作用

- Brunns, L., Die traumatischen Neurosen. Unfallneurosen. *Nachhingsels Spec. Path. u. Therapie.* 1901. XII, 1. Teil. IV. Abt. 2. *Hanseemann, D.,* Über das konditionale Denken in der Medizin. 1912. (Die traumatischen Fikrankungen u. Vergiftungen. S. 32.)
- Hanke, F., Die mechanischen Krankheitsursachen. *Krebs-Marchand, Handbuch d. allg. Pathologie.* 1908. I, S. 21.
- Honisch, B., Über Trauma u. Gelenktuberkulose. *Brunns Beiträge.* 1900. XXVIII, S. 659.
- Lejars, F., Les agents mécaniques. *Bouchard, Traité de pathologie générale.* 1896. I, p. 515.
- Litten, M., Kontusionspneumonie. *Deutsche med. Wochenschr.* 1907. S. 499.
- Marchand, F., Der Process der Wundheilung etc. 1901.
- Mann, Ed., Die Bedeutung des Trauma für das Entstehen u. Wachstum der Geschwülste etc. *Deutsche Zeitschr. f. Chirurgie.* 1906. LXXXI, S. 374.
- Müller, L., Traumatische Pneumonie (Sammelreferat). *Centralbl. f. Grenzgeb. d. Med. u. Chir.* 1910. XIII, No. 1-5.
- Paris-Lesclap, Fr., Experim. Untersuchungen zur Pathogenese der Nierentuberkulose. *Trauma u. Nierentuberkulose. Trauma u. Organotuberkulose. Archiv f. klin. Chirurgie.* 1911. XCV, S. 245.
- Riedinger, J., Wesen, Ursachen u. Entstehung der Deformitäten. *Jachimschak, Handbuch der orthopädischen Chirurgie.*

- 1905-1907. I, 1. Abt., S. 1.
- Stern, R.*, Trauma als Ursache innerer Krankheiten. Die deutsche Klinik. 1903. I, S. 201.
- Stern, R.*, Trauma als Krankheitsursache. *Lubarsch*, Ergebnisse der allg. Pathologie. 1897. III, 1, S. 1.
- Trendelenburg, F.*, Über Hirnerschütterung. *及 Windscheid*, Über Hirnerschütterung. Deutsche med. Wochenschr. 1910. S. 1, S. 8.
- Virchow, R.*, Über Traumatismus u. Infektion. *Virchow's Archiv*. 1900. CLXII, S. 163.
- 山極勝三郎 肝臓ノ東洋流線標本一前線標本一二號ヲ「東京醫學會雜誌」第二十一卷「明治四十年」第一頁。
- Heyford, M.*, Zur Lehre vom Hitzschlag. Deutsche med. Wochenschrift. 1900. S. 844.
- Hochhaus, H.*, Über Gewebsveränderungen nach localer Kälteeinwirkung. *Virchow's Archiv*. 1898. CLIV, S. 320.
- Kjartanin, J.*, Zur Frage nach der Ursache des Todes bei ausgedehnten Hautverbrennungen. *Virchow's Archiv*. 1893. CXXXI, S. 436.
- Krieger, H.*, Über hyaline Veränderungen der Haut durch Erfrierungen. *Virchow's Archiv*. 1889. CXVI, S. 64.
- Le Noir, P.*, Les agents physiques. Chaleau-Froid-Lumiere-Pression atmosphérique-Son. *Bouchard*, Traité de path. gén. 1896. I, p. 625.
- Martinsfeld, St. u. Steinhaus, J.*, Todesursachen und Organveränderungen nach Verbrühung. Centralbl. f. allg. Path. 1895. VI, S. 1.
- Marchand, F.*, Die thermischen Krankheitsursachen. *Kreidl u. Marchand*, Handbuch der allg. Pathologie. 1903. I, S. 49.
- Muschala, P.*, Sonnenstich u. Hitzschlag. *Erdlenberg's Realencyklop.* 1899. XXII, S. 523.
- Pfeiffer, H.*, Experim. Beiträge zur Aetiologie des prim. Verbrennungstodes. *Virchow's Archiv*. 1905. CLXXX, S. 367.
- Rischler, A.*, Über die histolog. Veränderungen nach der Erfrierung. *Ziegler's Beiträge*. 1900. XXVIII, S. 541.
- Samuel, S.*, Versuche über die Blutcirculation in der acuten Entzündung. *Virchow's Archiv*. 1867. XI, S. 213. (S. 223.)
- Siegel, W.*, Abkühlung als Krankheitsursache. Zeitschr. f. exp. Pathologie u. Therapie. 1909. V, S. 319. *Meyer-Liehrlein, K. u. Siegel, W.*, Erkältung als Krankheitsursache. Zeitschr. f. exp. Path. u. Therapie. 1911. IX, S. 459.
- Strasser, A.*, Erkältung u. Abhärtung. Die deutsche Klinik. 1903. I, S. 605.
- Trommsdorff, R.*, Experim. Studien über die Ursachen der durch verschiedene Schädlichkeiten bedingten Herabsetzung der

natürlichen Widerstandsfähigkeit etc. *Archiv f. Hygiene*. 1906. LXXIX, S. 1.

Uchinsky, N., Über die Wirkung der Kälte auf verschiedene Gewebe. *Ziegler's Beiträge*. 1893. XII, S. 115.

Wagner, K., Zur Lehre von der Bedeutung der Temperatur bei den Infektionskrankheiten. Warsch. 1890. (Centralbl. f. Bak. 1891. IX, S. 322.)

Acholf, L., Die strahlende Energie als Krankheitsursache. Der Luftdruck als Krankheitsursache. *Kreidl-Marchand*, Handbuch der allg. Pathologie. 1908. I, S. 144, S. 196.

Askaniay, M., Äussere Krankheitsursachen. *Acholf, L.*, Patholog. Anatomie. II. Aufl. 1911. I, S. 39.

Arsmond, I., Énergie élec. et la matière vivante. *Bouchard*, Traité de pathologie générale. 1895. I, p. 645.

Bert, P., Sur la pression barométrique. 1878. (*Acholf* = 據 *v*.)

Borntau, H., Die Elektrizität in der Medizin u. Biologie. (IV. Abschn. Elektropathologie) 1906. S. 105.

Goeli, H., Handbuch der Röntgen-Jahre. III. Aufl. 1911. Physiolog. u. patholog. Wirkungen der Röntgenstrahlen. S. 400.

Wetters, J., Handbuch der Röntgentherapie. 1903. Die biolog. Wirkungen der Röntgenstrahlen. S. 175. Die biolog. Wirkungen der Radiumstrahlung. S. 746.

戊 化學的「害物」「毒物」ノ原因作用

一 概説(「毒物」及び「害物」作用)

一定ノ物質ガ身體組織ニ作用シ、ソノ化學的又ハ物理化學的機能ニヨリテ病的現象發現スルニ至ラバ、廣義ニ於テ

コレヲ中毒ト云ヒ、ソノ物質ヲ毒物ト稱ス。然レドモ、所謂「毒物」ノ意義ハ前章ニモ記シタルガゴトク、關係的比較的ナリ。即、同一ノ毒物ト雖、要約ノ何如ニヨリテハ有害作用ヲ呈スルコトナク、又、通常「無害」ナル物質モ、時トシテハ生體障礙ヲ惹起スルコトアリ。タトヘバ、水ハ生命保持上、必要缺クベカラザルモノナレドモ、蒸留水ハ原形質毒ナリ。コハ主トシテ、滲透壓ノ變化ニ基ツク理學的作用ニ歸スベキナリ。蒸留水ヲ飲メバ、消化液等ニヨリ、ソノ性状ヲ變ジ、有害ノ性質ヲ輕減セシム。然レドモ、反復飲用セバ、粘膜上皮細胞ヲ侵害シ、加答兒ヲ惹起ス。

通常、化學的作用ニヨリテ中毒ヲ生ズト看做サルモノニシテ、實ハ毒物ト原形質トノ理學的關係ニ歸著セシムベキモノアリ、又、ソノ作用ノ化學的ナリヤ或ハ理學的ナリヤ、判明セザルモノアリ。

斯ノ如ク、「毒物」ノ範圍明確ナラズ、同一物質ニテモ場合ニヨリ、或ハ有毒トナリ、或ハ無毒ナルアリ。又、定型性ノ毒物ニシテ、最終ノ有害作用ガ、理學的ナリト看做スベキモノアリ。ソノ他、體内ニ於ケル化學的機能(物質代謝)ノ變動ニ基ツクベキ病的現象アリ(自家中毒内分泌異常)。

榮養物(及ビ酸素)ハ吸收セラレ、細胞原形質(又、間質及ビ體液)ニ對シ、直接或ハ間接ニ、化學的ニ作用シ、生物個體ニ有利ナル健態生活機能ヲ營マシム。コレニ反シテ、毒物ニ於テハソノ作用、同ジク化學的ナルニ拘ハラズ、生理的範圍ヲ超越シ、形態及ビ機能ノ異常ヲ喚起シ、病的現象ヲ發セシム。么微生物ニ基因スル疾病、即、傳染病ヲ發生セシムルノ機能ハ元來、化學的作用ニ在ルガ故ニ、コノ種ノ傳染病ハ主トシテ么微生物ノ生産物ニ基ツク中毒ナリトイフコトヲ得ベシ。

化學的作用ニ因ル病的變化モ、一種ノ生活現象ニ外ナラザルガ故ニ、生理的及ビ病的的生活機能ノ中心タル細胞ガ最多ク、コレニ參與セザルベカラズ。間質及ビ體液モ不要ニハアラザルモ、最、主要ナルモノニハアラズ。故ニ、終極ノ化學的作

用ノ行ハルトコロハ、コレヲ細胞原形質ニ求ムベキナリ。然レドモ、現今、原形質ニ關スル吾人ノ知識ハ、尙、幼稚ナルヲ以テ、毒物ノ作用方法ニ關シテ、未、明瞭ナラザルコト多シ。毒物ガ細胞ニ作用スルヤ、或ハコレニ甚シキ障碍ヲ與ヘ、又ハコレヲ破壊シ、或ハ一旦形態的、又ハ機能的变化生ズルモ、適當ノ要約ニ於テハ、早晚常態ニ復スルコトアリ。コハ實地上、頗、重要ノ事項ニシテ、麻醉ノゴトキハ、ソノ一例ナリ。麻醉ハ一種ノ中毒症狀ニシテ、一定ノ機能障碍(意識溷濁、知覺麻痺等)ヲ來セドモ、通常一定時後ニハ常態ニ復ス。

凡、物質ハ水、又ハ體液ニ溶解シタル狀態、又ハ氣體ニテラザレバ、何等ノ有害作用ヲモ營ムコト能ハズ。斯ノ如ク、溶液、又ハ氣體トシテ、細胞原形質ニ到達スルニ際シ、物質ノ種類ニヨリテ、原形質内ニ滲透スルノ力ニ難易アルモ、コレニヨリテ原形質内ニ起ルトコロノ化學的、若クハ物理化學的變化ガ、細胞ノ形態、或ハ機能ニ、甚大ノ變化ヲ喚起シ、ソノ結果トシテ中毒症狀ハ發現スルナリ。

原形質内ニ脂肪様物質ヲ含蓄スルモノアリテ、コレ細胞ノ化學的機能ニ甚深ノ關係ヲ有ス。水ニ可溶ノ物質ニ比シテ、液狀脂肪類、エーテル等ニ可溶ノ物質ハ、脂肪様物質ト、特ニ親密ノ關係ヲ保テリ。同一金屬含有鹽類ニテモ、脂肪様物質ニ溶解スルモノハ、特ニ強大ナル作用ヲ有スルコト多シ。腸ニ於ケル吸收作用ニ就キテ見ルニ、脂肪様物質ニ可溶性ノモノハ、不可溶性ノモノニ比シ、速ニ且、易ク吸收セラレ。ヘーベル氏⁽¹⁾ニ據レバ、脂肪様物質ニ不可溶性ノモノハ腸細胞間ノミヲ通過シ、同物質ニ可溶性ノモノハ原形質、即、細胞内ヲモ通過スト云フ。マイエル氏⁽²⁾及ビオー、ヱルトン氏⁽³⁾ニ據レバ、細胞内蛋白質ハ、生活現象ニ參與スル主腦者ナレドモ、脂肪様物質モ單ニ貯藏物質タルニ止ラズシテ、細胞ノ機能遂行上、重要ナル働作ヲナス。神經系内ニ多量ノ脂肪様物質(レチン、プロタミン等)アリ、アルコホール、エーテル屬ノ麻醉劑ハ、ソノ吸收セラレテ神經中樞ニ達スルヤ、神經細胞等ノ周圍ニアル血漿又ハ淋巴液中ニ溶

(2) Meyer (1) Höber
(3) Overton

解ス。而シテ、コノ溶在セル麻醉劑分子ハ神經系有形成分(細胞等)内ノ脂肪様物質ニ對シ、強キ溶解性親和力(化學的ナラズ)ヲ有シ、ソノ内ニ、溶解スルニ至ル。蓋、麻醉テラ現象ハ、コレニ由リテ起ルナリ。且、脂肪様物質及ビ非脂肪様物質ノ溶解係數ノ差ニヨリ、麻醉ノ深淺輕重ヲ生ズ。而シテ、コノ溶解度ハ質量作用ノ定律ニ從ヒ、理學的作用ニ基ツクモノナリ。

動物ノ種類ニヨリテ、毒物ニ對スル感受性ニ差アリ。即、クラレハ無脊椎動物ニ何等ノ作用ヲ有セズ、人體ニ有毒ナルベラドンナ葉ハ家兔(經口的)ニ無害ナリ。又犬ハモルヒチニ感受性少ク、人ニ對シ致死ノ大量モ犬ハ能クコレニ堪フ(素因ノ條下、參照)。

管ニ動物ノ種類ノミナラズ、又、同一動物體ニ於テモ、臟器或ハ組織ニヨリテ感受性ニ大差アリ、體組織皆同様ニ障礙ヲ蒙ルモノニアラス、コレ、即、身體部位ニ依ル素因ノ差ヲ示スモノナリ。蓋、異種ノ細胞原形質ハ毒物ニ對スルノ親和力ヲ異ニシ、一定ノ物質ヲ選擇スルノ作用ヲ有ス。ダトヘバ、ストリキニーチハ脊髓ヲ刺戟シ、反射機能ノ亢進ヲ來ス。今、蛙ニストリキニーチヲ注射スルニ、諸臟器中脊髄ニ最、多量ノアルカロイドヲ含ムヲ知ルベシ、コレ脊髄ガ該アルカロイドニ對シテ、最、強キ親和力ヲ有スルガタメナリ。破傷風毒素ガ腦、殊ニ皮質ノ神經細胞ニ特殊ノ親和力ヲ有スルモ同理ナリ。

エールツピ氏⁽¹⁾ノ說ニ據レバ、細胞原形質分子ニレツェフトール⁽²⁾ト稱スル原子簇アリ、通常ノ機能ヲ營ムモノハ、榮養レツェフトール⁽³⁾ニシテ榮養物分子ト化合ス。ソノ他赤血球中ニハ鐵レツェフトール⁽⁴⁾アリ、鐵ト化合ス。又疾病ニ關スルモノニ毒素レツェフトール⁽⁵⁾アリテ毒素ト化合シ、破傷風ノゴトキ症狀ヲ呈セシム。又、化學的レツェフトール⁽⁶⁾アリ、一定ノ化合物(毒物)ト結合ス。トリパノゾーマ⁽⁷⁾ノ砒素レツェフトール⁽⁷⁾ハ、其一ナリ。

『化學的療法』ニ用ヒラルルトコロノ藥劑ハ、ソノ分子ガ體細胞レツェフトールニ作用セズシテ、寄生體ノレツェフトールト結

- (4) Ferreceptor
- (5) Toxinreceptor
- (6) Chemoreceptor
- (7) Arsensoreceptor
- (1) Ehrlich
- (2) Receptor
- (3) Nutrireceptor

(1) Ehrlich

合シテコレヲ斃スモノトス。サルヴァルサン(六〇六號)ハソノ適例ナリ。コノ砒素劑ハ、寄生體原形質(スピロベータ)ニハ劇毒ナレドモ、身體細胞ニハ殆、無毒ナリ。コレサルヴァルサン中ノアミド、オキシ原簇子ガ、特ニスピロベータ原形質ニ對シテ強度ノ親和力ヲ有シ、身體細胞ニハ作用セザルニヨル。故ニエールツピ氏⁽¹⁾ニ據レバ、榮養傳染中毒治療モ同様ナル化學的機能ニ基ツクモノニ外ナラズシテ、唯、ソノ結果ニヨリ、ソノ名ヲ異ニスルノミ。即、生理的ニシテ有用ノ變化ヲ來タサバ、コレヲ榮養ト云ヒ、有害ノ結果ヲ齎ラサバ、コレヲ傳染、又ハ中毒ト稱シ、疾病ノ治療ヲ招來セバ、コレヲ治療ト名ツク。上記ノ學說ハ、半バ憶說ナルニモセヨ、一定ノ物質ガ一定ノ細胞ト結合スルコトハ否定スル能ハズ。然レドモ、毒物ガ一定ノ臟器、又ハ組織内ニ多量ニ含蓄セラルルモ、必シモ特殊ノ親和力ヲ有スルモノニアラズ。破傷風毒素ガ神經中樞以外ニ於テハ(多クハ)、單ニ組織内ニ沈著スルノミニシテ、細胞ト結合セズ、從テ、コノ臟器ノ變化ニ因スル病症ヲ現ハサザルガゴトシ。又、他ノ毒物ニ於テモ、コレト同様ノ例ニ乏シカラズ。

毒物ノ化學的構造ト、ソノ毒性トノ關係ヲ闡明スルコトハ、管ニ毒物學上ノミナラズ、又、實地應用上ニ於テモ必要アリ、且、興味アルコトナルヲ以テ、學者ノコノ事ニ關シテノ努力研究鮮少ナラザリシカドモ、尙、不明ノ點多キヲ遺憾トス。分子構造ノ外、溶解性・分解性ノ何如等ガ、毒物ノ作用ニ重大ノ關係ヲ及ボス。又往往、ソノ作用ガ化學的ナリヤ、將タ理學的ナリヤ、判定困難ナルコトアリ。最近ノ研究ニ據ルニ、化學的構造ノ變化ト共ニ、ソノ溶解性・揮發性・滲透壓等理學的性狀ノ變動ヲ來タシ、コレニヨリ、ソノ毒性ニ變化ヲ生ズ。故ニ、毒物ノ化學的變化ニ續發スル理學的性狀ノ差異ニヨリテ、毒性ニ變動ヲ來タスコト少カラザルベシ。

毒性ノ強弱ハ、必シモ分子量ノ大小ニ關セズ、靑酸ノゴトキ小ナル分子量ヲ有スルモノニシテ、劇甚ノ毒性ヲ有スルモノアリ、水銀・鉛・蒼鉛化合物ハ分子量大ニシテ且、劇毒ナリ。但、分子量大ニシテ無毒ナルモノ亦、少カラズ。斯ノ如ク、分子

(1) Ehrlich

量ト毒性トノ間ニハ、一定ノ關係無クレドモ、化學的構造ト毒性トノ間ニハ多少ノ規律アルモノアリ。

アルカリ・アルカリ土類・造鹽素^{ハロゲン}ノ等分子溶液ハ神經顫毛上皮細胞筋ニ對シ、ソノ分子量ノ増加スルニ從ヒ、興奮作用ヲ増シ、有害作用ヲ減ズ。但、カリウム及ビフルオールハ例外トス。脂肪體列ニ屬スルモノハ(一定制限内ニ於テ)増加スルニ從ヒ、有害作用増進ス。芳香體列ノモノハ脂肪體列ニ屬スルモノニ比シテ、概シテ毒性強シ。

エールリツビ氏^①ノ側鎖說ニ於テ、毒素ノ分子ニトキソフォル簇ナル原子群アリ、有毒作用ニ參加シテ主要ナル働作用ヲ營ムガゴトク、他ノ毒物分子ニ於ケル化學的既知ノ原子、又ハ原子簇中有毒作用ノ發現ニ直接ノ關係アルモノアリヤニ就テハ、多少コレヲ肯定スルニ足ルベキ根據アリ。酸・鹽基・鹽類等ニアリテハ溶液中ニ於ケル電離分解ニヨリ生、スルイオンノ作用ニ歸スベキモノアリ。水銀・鉛・鹽類ハ通常、イツレノ酸ト化合シタル場合ニテモ常ニ水銀又ハ鉛ニ固有ナル作用ヲ有セリ。又沃化物及ビ臭化物ハ、ダトヒ、ソノ一方ノ原子、異ナルモ沃度及ビ臭素ニ特有ナル作用ヲ呈ス。無機性砒素化合物ノ毒性ハ二價ナル亞砒酸イオン AsO_3^{2-} 、或ハ砒酸イオン AsO_4^{3-} ノ作用ニ基ツクモノナリトイフ。毒性ヲ有スルイオンハ多クハカチオン(陽性イオン)ナレドモ、又、アニオン(陰性イオン)ナルコトアリ。

通常ノ化學的毒物ノ作用ハ傳染性病毒ト異ナリ、概シテ潜伏期ナクシテ發現シ、一定時ノ後ニ、ソノ最高ニ達シ、細胞又ハ個體ノ死ヲ來タス。或ハ斯ク高度ノ變化ヲ呈セズシテ個體尙、生存シ、疾病狀態ヲ惹起セシム。而シテ、毒物ノ輸入繼續セザルトキハ生體ノ毒物消滅機能(破壊及ビ排泄)ニヨリテ疾病狀態漸次輕減シ、終ニ中毒現象ハ全然或ハ大部分消失ス。

多數ノ毒物ニアリテ、一定時ヲ隔テテ、コレヲ作用セシムルニ、毎回、略、同一ノ病的現象アリテ起ル。然レドモ、少數ノモノハ頻繁コレヲ用フルニ從ヒテ、ソノ反應或ハ強大トナリ、或ハ弱少シ、或ハ皆無トナルニ至ル。前者ハ即、蓄積作用ニシテ、後

者ハ習慣作用ニヨルナリ。

蓄積作用ハ、ダトヘバ、チギタリス屬ノ毒物、及ビストリキニーチニ於テ見ルトコロニシテ、一定時ヲ隔テツツ一定ノ少量ヲ連用セバ能ク高度ノ病的現象ヲ發現セシム。チギタリス劑ハ一タビ體內ニ攝取セラルトキハ長ク體中(心臟)ニ殘留スルヲ以テ、新ニ輸入セラレタルモノハ、コノ既存ノモノト合同作用シ、恰、同時ニ大量ヲ用ヒタルトキト同様ノ病症ヲ呈ス。コ

レ、即、蓄積作用ナリ。ストリキニーチモ亦、同様ノ作用ヲ示シ、コレ長ク體內ニ保留セラレ排泄極メテ緩徐ナリ。習慣作用ハ麻酔劑(アルコホール劑・オピウム劑・煙草等)・砒素劑ニ於テ、屢、見ルトコロニシテコレ等ヲ連用セバ、ソノ作用漸次薄弱トナリ、終ニ大量ヲ用フルニアラザレバ病的症狀發現セザルニ至ル。コノ習慣發生ノ理由ハ全ク明ナラザレドモ、毒物ニ對スル組織ノ抵抗力増加、或ハ體內ニコレヲ中和スベキ物質ノ生成、或ハ生體ガコレヲ分解シテ無毒トスル解毒作用、又ハ吸收地ニ於ケル吸收性減退等ニ因ラザルベカラズ。習慣ハ傳染病ニ見ルトコロノ免疫ト異ニシテ抗體ヲ生セズ。

習慣作用ヲナス諸毒中、砒素劑及ビオピウム劑ハ最、良ク研究セラレタリ。依テ、今、コレニ就キテ述ベシ。砒素劑ヲ反復服用セバ漸次コレニ慣レ、終ニハ多量ヲ用フルモ中毒症狀ヲ呈セザルニ至ル。コハ人體(砒素劑ヲ取ル人)ニ於テモ、又、動物試驗ニ在リテモ、屢、遭遇スルトコロナリ。砒素劑ニ於ケル習慣作用ハ體細胞ガコレニ慣レ、ソノ有害作用ニ對シテ不感受性トナルニアラザルガゴトシ。クレツタ氏^①ニ據レバ、砒素劑ヲ反復服用(經口的)スレバ腸粘膜ノ砒素吸收機能減退シ、一部分又ハ大部分吸收セラレズシテ糞便ト共ニ排泄セラル。且、大量ヲ與フルモ尿中ノ砒素ハ増加セズシテ却テ減少ス。而シテ、コノ際、皮下注射ニヨリテ更ニ砒素劑ヲ體內ニ輸入スルヤ極メテ少量(經口的)ノ攝取ニテ中毒ヲ起サザル量ノ六十二分ノ一ニテ數時間内ニ動物ヲ斃ス。

(1) Cloetta

モルヒネハ皮下注射ニヨルニ大部分(七〇%)糞便中ニ排泄セラレ、極メテ大量ヲ用ヒタルトキニ於テノミ尿中ニ出現ス。然レドモ、反復多量ヲ注射スレバ糞便中排泄ノ量益、減少ス。蓋、モルヒネニ習慣セルモノハ然ラザルモノニ比シテ、體組織内ニテ無毒ノ物質ニ變化スルコト多キニヨルナルベシ(ラウスト氏¹⁾)。

毒物ノ出所モ疾病原因ニ關係少カラザルガ故ニ、茲ニコレヲ述ベシ。

- 一。無機物界中、人及動物ニ對シテ化學的毒性的作用ヲナスヲ得ルモノ頗多シ。非金屬(造鹽素^{ハロゲン})及ビ金屬(砒素、水銀、鉛銅等)皆ソノ代表者ヲ有ス。金屬ニ於テハ鹽類ノ外、金屬自個ガ有毒ナルモノアリ。
- 二。人工的炭素化合物中ニ有毒ノモノ亦、少ナカラズ。アルコホール、クロホルム、ヨードホルム、青酸加里、石炭酸等枚舉ニ遑アラズ。
- 三。植物性毒中、更ニ多數ノ重要ナルモノアリ。

(イ)アルカロイドハコノ中、最、必要ナルモノニシテモルヒネコカイン・ニコチン・アトロピン等コレニ屬ス。コレ等ノ中、化學的構造ノ既知ナルモノ少カラズ(凡、六十)。而シテ、化學的構造ト、ソノ毒性トノ關係ニ就キテ多少闡明セラレシモノ無キニアラズ。

(ロ)糖原質^{グリコーゲン}ハソノ分子中ニ糖簇ヲ含ムモノニシテ、植物界ニ廣ク分布セル物質代謝産物ナリ。サホニ^{サホニ}、チキタリス^{チキタリス}、アミグダリン^{アミグダリン}(杏仁)等、コレニ屬ス。

(ハ)ソノ他、前二者ノゴトク、重要ナラザレドモ、テレピン油・チモール・樟腦・綿馬等モ亦、著明ナル植物性毒物ナリ。又菌類ニ有毒ノモノアリ、『はへんろし』^{Amantia uibrina}『あしたかべにたけ』^{Amantia muscaria}『きつねのゑかきふで』^{Ithyphallus rugulosus}等ハソノ顯著ナルモノナリ。ムスカリン^{ムスカリン}ハあしたかべにたけ^{Amantia muscaria}中ノ有毒成分ニシテ猛毒ヲ有ス。

(三)細菌毒モ亦、植物性ナレドモ、特殊ノ物質ナルヲ以テ、細菌ノ條下ニ於テ、コレヲ論ズベシ。
アブリン・リチン・クロチンハ植物種子中ニ含有セルル毒物ニシテ、ソノ作用ハ細菌毒素ニ類シ、能ク抗毒素ヲ生成セシメ、又、動物ヲ免疫セシムルコトヲ得。

四。動物性毒物ハ主トシテ、當該動物ノ生存競争ニ於ケル武器ニシテ、多クハ腺ノ分泌液中ニ在リ。昆蟲毒(蜂、蜘蛛等)、蛇毒又、山椒魚、蝦蟇ノ皮膚腺液等コレニ屬ス。蛇唾液ノ外、蛇血清モ有害ナリ。鰻ハソノ血清中ニ毒物ヲ含有ス。昆蟲毒、蛇毒、鰻毒ハ多クハ細菌毒ト類似ノ作用ヲ有シ抗體ヲ生成セシム。

動物性毒中河豚毒(河豚ノ卵巢中ニアリ)、カンタリヂン(元青毒)ノ如キ特殊ノモノアリ。
五。腐敗ハ通常嫌氣菌ノ存在セル際、有機物ノ分解ニ因リテ起ルモノナリ。而シテ、多クハ酸素消燼セララルヲ以テ嫌氣菌ノ増殖ヲ良好ナラシム。コノ際、屢、細菌生産物又ハ培養基(有機物)ノ分解物ナル有毒物質ノ生成ヲ認ム。

ノイリン・ムスカリン・セフシンハコレ等ノ腐敗毒ニ屬セリ。セフシンヲ以テ動物試驗ヲ行フニ、能ク虎列刺様ノ疾患ヲ生セシム。腐敗毒ハ細菌ノ生産物ナルコト多シ。故ニ、コレニ因テ起レル疾病ハ寧、傳染病ニ屬セシムベシ、或ハ傳染病ニ屬スベキモノニアザルモ、ソノ疾病發生ノ理ハコレトソノ軌ヲ同ジクセリ。

腸炎菌^{フロテウス}菌ハ所謂肉中毒^{フロテウス}ノ原因ヲ成シ、コレニヨリ往々多數ノ人ノ同時ニ胃腸症狀ヲ起シ、且、屢、死ヲ來タス。蓋、フロテウス菌ハ動物ノ死後、ソノ筋肉中ニ入りテ増殖スルヲモツテ、コノ肉中ニハ細菌ノ外、尙、ソノ生産物(毒物)ヲ含著スルガ故ニ、コレ、中毒ト傳染トヲ合併シタルモノトイフコトヲ得ベシ。

所謂腸詰毒^{ハ腸詰菌}ノ毒素(外毒素ニ基ツクモノナリ。而シテ、肉類中ニ生成セララル既成毒物ヲ攝取スルモノナルガ故ニ、一種ノ中毒ニ外ナラザレドモ、ソノ毒物ノ性質及ビ作用方法ハ神經毒ニ屬シ、破傷風毒素ニ相當セリ。

六。尙、化學的作用ノ異常ニ基ツキテ起ルトコロノ疾病ニシテ、自家中毒及ビ内分泌異常ニヨリ喚起セララルモノアリ。毒物が體組織ニ作用シテ有害ノ作用ヲナスヤ、ソノ毒物が唯、侵入部ニ局在シ、病的變化モ亦、コノ部分ニ限ラルルコトアリ。コレ毒物が、コノ部分ノ組織成分ト相化合シ、大部分飽和セラレ、遠隔ノ地ニ至ルト能ハザルニ因ル。又、コレニ反シテ、毒物ノ吸收セラレテ後ニ遠達作用ヲ營ムモノアリ。

コノ毒物ヲ吸收スルノ門戸トシテ、最、必要ナルハ皮膚、呼吸器及ビ食管ナリ。左ニ、コノ部位ニ基ツケル關係ニ就キ論述スベシ。

一。皮膚ノ損傷アル部分ヨリシテ、諸種ノ毒物ハ吸收セラル。毒蟲ノ螫刺、又ハ咬嚙ニヨルモノモコレニ屬ス。然レドモ、健全ナル皮膚ハ、ソノ表層ニ角質ヲ存スルガタメ、氣體又ハ液體ノ侵入スルコト、甚、困難ナリ。而シテ、皮膚ハ、脂肪ニヨリ潤澤セラルルガ故ニ、脂肪ニ溶解セザルコトコノ物質ハコレヨリ侵入スルコト、殊ニ困難ナリ。

皮膚ハ嘗テ信ゼラレシトコロニ反シ、不良ノ吸收器ナリ。クロロフォルムエーテルノゴトキ揮發性ノモノト雖、人ニ於テハ皮膚ヨリ吸收セラルルコト極メテ少ナシ。リチウム鹽及ビ沃度加里ハ皮膚ヨリ吸收セラルルコト殆、無シ。コレニ反シテ、グアヤコール・ザロールハ多少吸收セラレテ尿ニ出ヅレドモ、ソノ成分ナルフェノール及ビザルチール酸ガ皮膚角層ヲ傷害スルヲ以テ、全ク健康ナル皮膚ヨリ吸收セラレシヤ否ヤ、疑ナキコト能ハズ。

二。呼吸器モ、屢、毒物侵入ノ門戸ヲナス。氣體(及ビ蒸氣)ハ肺胞ヨリシテ吸收セラルルモノ多ク、肺胞上皮細胞、血管壁等ヲ通過シテ血中ニ入ル。而シテ、ソノ吸收ハ、生理的氣體交換ニ於ケルト同一ノ吸收係數及ビ分壓ノ定則ニ從フモノナリ。吸收ノ速度ハ、單ニ理學的結合ヲナスカ、又ハ吸收セラレテ一酸化炭素・クロロフォルムエーテルノゴトク化學的結合ヲナスカニ依リテ差アリ。

有毒瓦斯ノ肺呼吸ニ就テハ、ソノ少數者ヲ除キ、研究未、十分ナラズ、不明ノ點少ナカラズ。大氣中ニ極メテ少數ノ有毒瓦斯(NH_3 、 Cl 、 Br 、 SH_2 等)ヲ含有セシメ、人體肺吸收試験ヲナスニ、全部又ハ大部分ノ吸收セラルルヲ見ル。

職業上ノ關係等ニヨリ、又ハ偶然ノ事由ニヨリ、有毒瓦斯ヲ吸入シテ、ダメニ中毒ヲ起スコトアリ。タトヘバ砒素化合物及ビコレヲ含有スルコトコノ物品ヲ取扱フモノハ、知ラス識ラズノ間ニ、ソノ有毒瓦斯ヲ吸入シ、ダメニ中毒ヲ來タスガゴトシ。

三。胃腸ハ毒物吸收部位トシテ、最、重要ナルモノナリ。シカモ、毒物ガ消化管ニ入り、消化液等ノタメニ、ソノ化學的性質ノ變化ヲ來タスコトアリ。蛇毒ハ消化管ヨリ輸入セラルレバ無毒ナリ。クラレモ消化管ヨリ入レバ通常無毒ナリ。コノ際、毒物自個ノ變化アレドモ、コハアマリ重要ナラズ。ソノ無毒ナル理由ハ、吸收極メテ緩徐ニシテ排泄速ナルガタメ、身體ニ病的變化ヲ起シ、病症ヲ發現セシムルノ作用ヲ營ムノ暇無キニ因ルナリ。コレニ反シテ、杏仁等ノ内ニアルアミグダリンハ消化液ニヨリ分解セラレ、始メテ有毒ノ青酸ヲ生成ス。

毒物が健全ナル粘膜ヨリ吸收セラルルモノト、然ラザルモノトアリ。次硝酸銻鉛ハ健全ナル胃腸ヨリ吸收セラレザラモツテ、内服ニヨリテハ、通常中毒症狀ヲ呈セズ。

又、消化管ノ部位ニ依テ又、毒物ノ性状ノ何如ニヨリテソノ吸收力ニ大差アリ。口腔及ビ胃粘膜ハ水ニ可溶性ノ物質ヲ吸收スルコト極メテ少シ。然レドモ、コレニ反シ、脂肪様物質ニ可溶ノモノハ易ク吸收セラル。タトヘバニコザンフェノールノゴトキハ、口腔粘膜ヨリシテ吸收セラレ、數分後ニ中毒症狀ヲ發現ス。腸粘膜ハ脂肪様物質ニ可溶ノモノ、及ビコレニ不溶ニシテ水ニ可溶ノモノヲモ吸收ス。而シテ、吸收ニ際シ、上皮細胞體ヲ通過スルモノアリ、或ハ細胞間粘合質^{キフテグスタシツ}ヲ經テ吸收セラルルモノアリ。腸ニ於テモノノ部位ニヨリテ吸收作用ニ差アリ。

吸收ノ多少及ビ遅速ハ、毒物ニヨリテ差異アリ。少數ノモノニ於テハ、毒物ノ化學的構造ト吸收力トハ略、一定ノ關係ヲ保テリ。重金屬化合物中ニ於テモ、種類ニヨリ吸收ノ難易ニ大差アリ。水銀及ビ鉛化合物ハ腸粘膜ヨリ易ク吸收セラレ、血中ニ入レドモ、銅及ビ亞鉛化合物ハ殆、吸收セラレズ。

吸收部位ハ、吸收後ノ有害作用ニ對シテ、全ク、無關係ナラズ。小腸及ビ結腸ヨリ來タル靜脈血ハスベテ門靜脈ヲ經テ肝臟ヲ通過スレドモ、直腸ヨリセルモノハコレト異ナリ、痔靜脈叢及ビ下腹靜脈ヲ經テ空靜脈ニ入ルヲモツテ、ソノ有毒作

用ニ差異ヲ生ズ。タトヘバフェノールモルヒネガ直腸ヨリ吸収セララルトキハ、胃ヨリスルトキニ比シテ中毒症狀ノ劇甚ナルコトアリ。コレ前者ニアリテハ、肝臟ヲ經由セザルガタメ、コノ臓器内ニ行ハラルトコロノ解毒作用ヲ蒙ラザルニ因ル。

吸収力ハ消化管ノ病的状態ニヨリテ屢、著明ノ影響ヲ蒙ルコトアリ。若、粘膜缺損・斷裂等アラバ吸収セラレ易シ。又、血行障礙或ハ加答兒等アラバ吸収力ノ減退スルコト多シ。

体内ニ吸収セラレタル毒物ハ有害性物質ナルガ故ニ、身體ノ防禦性能(疾病原因概説ノ條下参照)ハ務メテコレヲ無毒トナシ、體外ニ排除セントシテ努力ス。蓋、コレ等ノ解毒作用ハ毒物ノ種類・數量・濃度・吸收部位等種種ノ要約ニヨリテ大差アリ。ゾノ害毒甚シカラザルトキハ、多少ノ病的症狀ヲ呈シテ、一定時ノ後、再、常態ニ復ス。然レドモ障礙甚シキトキハ、組織ノ一部分、又ハ個體ノ死ヲ來タスコト少ナカラズ。

体内ニ行ハルル解毒作用ハ、次ノ如シ。体内ニ起ル變化ハ複雑ナルガ故ニ、必シモ、體外試験ニ基ツキテ豫期スルコト一致セズ、故ニ、慎重細心ノ注意ヲ以テ判定セザレバ、過大ノ誤ヲ來タスコトアリ。

一。中和。酸類ハ吸収セラレバアルカリアンモニア等ニヨリ、アルカリ吸収セラレレバ、血中ノケリツェリン燐酸又ハ炭酸等ニヨリテ中和セラレ、無毒又ハ微毒ノ鹽類トナル。

二。酸化及ビ還元。体内ニ於テ酸化ニヨリ毒物が無毒又ハ微毒ノ物質ニ變スルコトハ、屢、目撃スルコトナリ。有毒ナル次亞硫酸及ビ亞硫酸鹽ハ無毒ナル硫酸鹽ニ酸化セラレ、亞硫酸ハ毒力ノ少キ砒酸トナル。又コレト反對ニ、硝酸鹽ガ亞硝酸鹽トナリ、砒酸ガ亞砒酸ニ還元スルコトアリ。砒素化合物ナルアトキシル及ビアルサセチンハ体内ニ於テハトリパノゾーマヲ殺滅スレドモ、試験管内ニテハ然ラズ。コレ体内ニ於テ還元セラレテ亞砒酸ニ相當スルモノトナリ、始メテトリパノゾーマニ有害作用ヲ逞ワスルニ因ル。

有機化合物中、脂肪列ニ屬スルモノハ酸化セラレテ炭酸及ビ水トナリ、無害ノ物質ニ變化スルコト多シ。エチールアルコホールハ九〇%ハ酸化燃焼シ、一〇%ノミ變化セズシテ排泄セラレ。ベンゾール核ハ生體中ニテ酸化破壊セララルコト例外ニ屬ス。但、芳香體ニシテ一部分ノ酸化セララルモノ少ナカラズ。最、簡單ナル例ヲ舉ケレバ、ベンゾールガ酸化セラレテフェノールトナルガトシ。過酸化物・高等酸化物及ビ貴金屬鹽中、生体内ニ於テ還元シテソノ毒性ヲ減ズルモノアリ(沃度酸鹽・鹽酸加里・硝酸銀・オスミウム酸)。

三。加水分解。分解ニヨリテ無毒トナルモノ亦、少ナカラズ。食物トシテ攝取スルコロノ蛋白質ハ、身體組織ニ對シテハ異種蛋白質ナルヲ以テ、ソノ儘、吸収セララルトキハ有害ニシテ過敏症ヲ起スノ虞アリ。故ニ、消化液等ニヨリ分解セラレ、體成分ニ同化シテ有用ノ物質ニ化ス。

糖原質^{グリコーゲン}ノ体内ニ於ケル運命ハ、未、全ク明ナラザレドモ、分解シテ糖分子分離シ、無毒又ハ微毒ノ物質ニ變ズルモノアリ。糖原質ナルザリヂンハ分解シテザリゲニンヲ生ズ。又、タンニン酸吸収セラレレバ加水分解ニヨリテ收斂作用ノ無キ沒食子酸ヲ生ズ。

四。合成。抱合ニヨリテ無毒ノ物質トナルモノ少ナカラズ。アンモニアトカルバミン酸ト抱合シテ尿素トナルコトハ生理的合成ノ顯著ナル一例ナリ。異常ノモノ、又ハ毒物ニ屬スル者ニテハフェノール・クレゾール・タンニン等ハ硫酸ト、樟腦・メントール等ハグリクロン酸ト、安息香酸・ザルチール酸等ハグリコロールト相抱合シテ尿中ニ出ツ。腸内容ノ分解(腐敗)ニヨリ腸管内ニフェノール・インドール・スカトール生成シ、コレ吸収セラレテ硫酸ト抱合シ、終ニ腎臟ヨリ排泄セララルコトハ、能ク人ノ知ルトコロナリ。

上述ノゴトキ、解毒作用ニヨリ、一たび吸収セラレタル毒物が變化シ、無毒トナリ、終ニ排泄セララルモノ少ナカラズ。又、變化

セシテ、或ハ變化スルモ、尙、有毒物質トシテ排泄セラルルモノアリ。然レドモ、全部排泄スルコトハ少ナク、一定時組織ニ殘留固著スルモノ多シ。コノ固著作用ヲナスコノノ臟器ニシテ最、顯著ナルハ肝臟ナリ。肝臟ニハ金屬(銅・水銀・亞鉛・メタロイド・砒素等)、醱酵素(エムルジン)等、固著ス。コレ恐クハ可溶性ノモノガ蛋白質等ト化合シテ難溶性ノモノニ變ジタルガタメナルベシ。然レドモ、一小部分ハ蛋白質(アルブミン)等、固著ス。コレ恐クハ可溶性ノモノガ蛋白質等ト化合シテ難溶性ノモノニ變ジタルガタメナルベシ。而シテ、コレニ因リテ、病的症狀ハ輕度トナリ、ソノ經過ハ延長持久ス。故ニ、一方ヨリコレヲ見レバ、コレ亦、身體ノ毒物ニ對スルノ防禦作用ニ外ナラザルナリ。斯ノ如ク、肝臟ニ沈著スルモノハ、ソノ毒性ノ消失又、減退スルコト多クレドモ、コレニ反シ臟器細胞ト結合シテ固有ノ毒性ヲ發揮スルモノアリ、神經中樞ニ固著シテ有害作用ヲ逞ウスルモノ亦、少ナカラズ。又、心臟ニ固著シ、徐々ニ排泄セラルルヲモツテ、一定時内ニ、同一ノ毒物ヲ用フレバ、ソノ蓄積作用ノ發現スルモノアリ(チキタリス)。

ソノ他、無害ノ状態ニ於テ體內ニ殘留シ、長時ニ、或ハ一生ヲ通ジテ、組織内ニ沈著スルモノアリ。硝酸銀ハ吸收後、結締織・皮膚等ニ黑色ノ顆粒トナリテ沈著ス(原形質内ニハコレヲ見ズ。コノ顆粒ハ、恐クハ蛋白質(アルブミン)ナルベシ。フルオール、ストロンチウム・バリウム化合物ハ、吸收後、骨中ニ留リ、ソノ成分トナル。而シテ多少骨中カルシウムノ代用物質トナルコトヲ得。

毒物ノ排泄ハ、種々ノ臟器ニヨリテ行ハル。ソノ排出セラルルヤ、或ハ變化セズシテ、ソノ儘ナルアリ、或ハ諸種ノ變化ヲ受ケタルアリ。コノ排泄作用ハ肺臟・唾液腺・汗腺・乳腺等ニ於テモ行ハルルモ、最、主要ナルハ腎臟及ビ胃腸ナリ。依テ、コノ二者ニ就キテ述ベン。

腎臟ハ生理的物質代謝物及ビ毒物排泄器トシテ最、主要ノモノナリ。毒物ハ腎臟ヲ通ジテ、或ハソノ儘變化セズ、或ハ

多少ノ化學的及ビ毒性ノ變化ヲ來タシテ排泄セラル。排泄ハ攝取後二四時間以内ニ最高度ニ達スルコト多シ。毒物ノ種類ニヨリテ排泄ニ遲速アリ、無機鹽類及ビ非コロイド質ハ概シテ排泄速ナリ。然レドモ、重金屬化合物ハ排泄緩徐ニシテ數週・數月ニ互ルモノ多シ(砒素・水銀・鉛)。ストロキニーチノ排泄モ緩徐ニシテ一週間後ニ於テモ尿中ニ出現ス。コレ蓄積作用ヲ起シ易キ所以ナリ。謝出物ノ數量及ビ性質ハ毒物及ビ身體組織状態等ノ差異ニヨリテ互ニ一樣ナラズ。クラーレハ變化セズシテ速ニ尿中ニ出テ、ストロキニーチハ一部分ノミ不變ノ状態ニテ尿中ニ出ツ。

腎臟ニ次ギテ、必要ナル排泄臟器ハ胃腸ナリ。コノ粘膜ヨリ出テ再ビ吸收セラルルモノ亦、コレアリ。慢性鉛中毒ニ於テハ鉛ハ主トシテ糞便中ニ出ツ。蒼鉛鹽中毒ニアリテハ、蒼鉛ハ尿中ニモ出ツレドモ、亦、腸殊ニ(急性中毒ニテハ)大腸粘膜ヨリ多量ニ排泄セラル。胃ハ吸收機能少キガゴトク、亦、排泄器トシテノ意義モ少シ。モルヒチハ腎臟ヨリ謝出スルコト殆皆無ニシテ、ソノ大部分ハ胃粘膜ヨリ排泄セラレ、糞便中ニ出ツ。

腎臟・胃腸等ガ病的状態ニアルトキハ、ソノ排泄機能ニ變化ヲ來タシ、中毒症狀ニモ少カラザル影響ヲ與フルコトハ、言フ俟タズ。

二 化學的毒物作用ニ基ツク病的變化

毒物ニ因リ惹起セラルトコノ機能及ビ病理解剖的變化ハ千差萬別ナルヲ以テ一、茲ニコレヲ論ズルコト能ハズ。然レドモ、各物質ニヨリテ多少各自ノ特徴アルガ故ニ、コレヲ總括的ニ記述スルコトヲ得ベシ。

毒物ノ作用ニ因リテ、或ハ著明ノ粗大ナル病理解剖的變化ヲ來タシ、或ハ唯、極メテ微細ノ顯微鏡的變化ノミヲ見ハシ、或ハ單ニ機能ノ異常ヲ呈スルノミノコトアリ。

惹起セラシタル病的變化ハ、或ハ主トシテ毒物侵入ノ場所ニ限局シテ存シ、或ハ遠所ニ達シテ諸臟器・諸組織ヲ侵スコトアリ。而シテ一定ノ臟器、又ハ細胞ニ、上文述べタルカゴトキ、特殊ノ親和力ヲ有スルガタメ、コレニ依ルトコロノ選擇作用ヲ明カニ認メシムルコトアリ。即、ストリキニーチガ脊髓ノ反射機能ヲ亢進セシメ、ムスカリンガ末梢神經ノ末端ヲ刺戟シ、アトロピンガ同一ノ部分ヲ麻痺スルカゴトシ。同一毒物ト雖、ソノ作用ノ結果ニ甚シキ差異ヲ來タスコトアリ、アルコール類ハ主トシテ神經中樞ヲ侵セドモ亦、末梢神經・消化管ニ變化ヲ起スコトアリ、又、心臟或ハ肝臟ノ疾病ヲ來タスコトアリ。コレ等ノ差異ノ來タル所以ハ毒物自個・動物ノ種類ノ差ニヨルノ外、又、個體ノ素因・毒物ノ濃度・用法・組織ノ健康及ビ病的諸狀態ノ差異ニヨルナルベシ。

毒物ノ作用ニヨリテ惹起セラルトコロノ變化ハ、コレヲ種種ニ分類スルコトヲ得レドモ、爰ニハコレヲ二、或ハ三ニ大別シテ論ズベシ。先、大別シテ著明ノ病理解剖的變化ヲ呈スルモノト然ラザルモノトノ二トス。然レドモ、コノ兩者ノ間ニハ明瞭ナル區別アルニアラス、而シテ、尙、兩者ノ中間ニ位スベキモノハ、赤血球ノ變化ナリ。

甲 著明ナル病理解剖的變化

一、腐蝕・收斂・組織融解ナル局所變化ハ、酸類(無機及ビ有機酸類)・アルカリ類・造鹽素・重金屬鹽類・有機物ニヨリテ起ルモノニシテ、二者共ニソノ本體ハ同一ニシテ、各自間ニ確平ナル區別ヲ缺ク。

組織ノ有機成分、殊ニ蛋白質ハ一定ノ物質ト、強キ化學的親和力ヲ有シ、ソノ凝固又ハ融解ヲ來タシ、組織、或ハ細胞ノ壞死ヲ生ズ。コノ種ノ物質ニヨリテ強度ノ組織破壞ヲ生ゼバコレヲ腐蝕トイヒ、ソノ作用緩和ニシテ組織ノ破壞著明ナラズ、表面ニ於テ蛋白質及ビコロイド凝固シテ水及ビ體液ニ不溶ナル緻密ノ膜様物質ヲ生成スレバ、コレヲ收斂トイフ。又、組織液化セバコレヲ組織融解ト稱ス。

酸類、殊ニ無機酸(硫酸)ハ組織ヲ腐蝕破壊ス。コレ主トシテ蛋白質凝固・鹽基奪取・奪水作用ノ強大ナルニ因ル。アルカリハ組織ノ蛋白質及ビ角質ト化合シ、蛋白質アルカリヲ生ジ、脂肪類ヲ鹼化シ、組織ヨリ奪水シ組織ヲ液化ス。故ニ、ソノ腐蝕作用ハ酸類ニ比シテ遙ニ強大ナリ。而シテ苛性曹達及ビ苛性加里ハ、ソノ最、顯著ナルモノナリ。アルカリ土類ニモ同様ノ作用アリ。

造鹽素(クロール・臭素・沃度)ハ組織ノ蛋白質ト化合シテ、コレヲ破壊シ、又、水素ト化合シ酸ヲ生ジテ腐蝕ス。重金屬鹽類(昇汞・硝酸銀・醋酸鉛等)ノ主要ナル局處作用ハ加水分解ニヨリ、金屬ガ蛋白質ト化合スルニヨリ組織ヲ破壊スルニアリ。ソノ作用強度ナラバ腐蝕ヲ來タシ、輕度ナラバ收斂ヲ生ズ。

二、諸臟器、殊ニ實質性臟器ノ變性ヲ惹起スルモノ甚、多シ。諸種ノ毒物ニヨリテ心臟・腎臟・肝臟等ノ實質細胞ニ脂肪變性・顆粒變性及ビソノ他ノ退行性變化ヲ來タスコトハ頻回遭遇スルコトナリ。水銀・砒素化合物・燐・一酸化炭素・クオロフォルム・アルコール等ノ中毒ニ於テ實質臟器ノ脂肪又ハ顆粒變性等ヲ認ム。コレ毒物ガ細胞ニ作用シ、直接又ハ間接ニソノ物質代謝ニ變化ヲ來タシ、化學的及ビ理學的變動起リ、細胞内ニ顯微鏡ニテ見ルコトヲ得ルトコロノ異常物質出現スルナリ。軀幹筋ニモ同様ノ變化ヲ呈スルコト少ナカラズ燐・砒素。腎臟ハ諸毒物ノ排泄機關ナルヲモツテ、ソノ上皮細胞ハ少ナカラザル障碍ヲ蒙リ、變性或ハ壞死ヲ來タシ、腎臟炎ヲ發生スルコト屢、コレアリ。

毒物ニヨリ、特ニ神經系ヲ侵スモノアリ。神經細胞ニニ、ツスル氏小體ノ變化・腔胞形成等ノゴトキ退行性變化ヲ生ジ(アルコール・砒素・鉛・水銀・燐・ストリキニーチ・蛇毒等)、又、脊髓ニ脊髓癆様ノ變化(後索變性)ヲ呈セシム(麥角)、或ハ末梢神經ノ變性ヲ喚起スルモノアリ(アルコール・鉛)。

血管、殊ニソノ中膜ニ變性及ビ石灰沈著ヲ來タスモノアリ(アドレナリン)。

三。消化管ニ於テハ腐蝕・收斂ノ外、諸種ノ炎症(加答兒性出血性實布垚里性壞死性炎)ヲ起スモノ頗多シ。砒素・水銀・蒼鉛化合物ハ大腸ニ赤痢様ノ變化ヲ起サシム。コレ、コレ等ノ化合物ハ吸收後、消化管、殊ニ大腸ヨリ排泄セラルルヲモツテ粘膜ノ諸成分ニ作用シ、炎症・細血管ノ填塞・組織ノ壞死ヲ惹起シ、出血・加答兒潰瘍等ヲ生ゼシム。ソノ他、諸毒物ニヨリテ膿ヲ起スコト亦、少ナカラズ(テルベンチン油・硝酸銀・クロトン油・チキシン)。

四。細小血管壁ニ變化ヲ起シ出血ヲ來タスコトハ亦、屢、認メラル(砒素・水銀・クロム化合物・ウタリヂン・燐・蛇毒等)。

乙 赤血球ノ變化

コレ病理解剖的變化ノ著明ナルモノト、然ラザルモノトノ中間ニ位スルモノナリ。而シテ、赤血球ハ形態ノ異常ヲ來タスコトアリ、或ハ單ニ理化學的變化ノミニ止マルコトアリ。

毒物ガ赤血球ニ作用シ、ヘモグロビン基質ヨリ分離シ、血漿ニ溶解シ、血液ハ赤色透明トナル。コノ際ヘモグロビンハ尿中ニ出ヅルガ故ニ、ヘモグロプリン尿ヲ起ス(クロロフォルム・エーテル・砒化水素・トルイレンヂアミン・サボニン類異種血清)。

赤血球形態ノ變化ヲ伴ヒ、或ハ然ラズシテ、酸素ガヘモグロビンニ固ク結合シ、メトヘモグロピントナリ、血液褐赤色ニ變ジ、メトヘモグロビン血及ビメトヘモグロビン尿ヲ來タスコトアリ(鹽酸加里・焦性沒食子酸・亞硝酸アミール等)。メトヘモグロビンハ酸素トノ結合強固ナルガため、組織ニ酸素ヲ供給スルコト難ク、内呼吸ニ大ナル障礙ヲ生ズ。又、上述ノゴトクヘモグロビンニ變化起ルトキハ屢、黃疸ノ發現ヲ見ル。

又、赤血球ノ形態變化セズシテ、ソノ機能不全トナルモノアリ。一酸化炭素中毒ノゴトキハ、コレナリ。コノ際一酸化炭素ハ

ヘモグロピント化合シ、一酸化炭素ヘモグロピントナリ、酸素ヲ取捨スル性能消失スルガ故ニ、内呼吸不十分トナリテ内室息ヲ惹起セシム。

丙 粗大ナル解剖的變化ヲ伴ハザル病的現象

多數ノ物質ハ著明ノ解剖的變化ヲ伴ハズシテ能ク著明ノ疾病症狀ヲ來タス。コノ際、或ハ尙、多少、微細ノ顯微鏡的變化ヲ伴ヒ、或ハ形態上何等ノ異常ヲ檢出スルヲ得ズ。コノ疾病症狀ハ、單ニ化學的或ハ理學的變化ノためニ、機能障礙ヲ惹起シタルニ依ルカ、或ハ形態上微細ナル變化アルモ現今ノ研究方法ニテ、コレヲ檢出シ得ザルニ依ルカ、コレヲ斷定スルコト能ハズ。然レドモ、組織的・微化學的検査方法尙、進歩セバ、今日未知ノ形態的變化モ終ニ闡明セラレ、所謂機能障礙ニシテ、形態的變化ニ基ツクモノ、益、増加スベシトハ吾人ノ信スルトコロナリ。

粗大ノ解剖的變化ヲ起サザル毒物ハ、普汎的原形質毒ナレドモ、多クハ一定ノ臟器、又ハ細胞ニ特殊ノ親和力ヲ有シ、各自固有ノ作用ヲナス。而シテ、粗大ノ變化ヲ缺グモ、微細ノ形態的異常ヲ來タスモノアリ、前ニ述ベタル神經細胞・實質性臟器ノ變性ノゴトキハ、ソノ一例ナリ。

神經中樞ヲ侵シ、主トシテ麻痺性作用ヲ營ムモノアリ(クロロフォルム・アルコール・モルヒネ劑)。クロロフォルムノ作用ハ人ノ能ク知ルトコロニシテ、初ニ刺戟症狀アリ、後、麻痺狀態トナリ、意識ハ全ク濁シテ熟睡狀トナリ、知覺及ビ反射機能消失シ、呼吸筋以外ノ筋ハ弛緩スルニ至ル。コレ麻痺期ニ於テハ大脳皮質、殊ニ知覺帶麻痺シ、又、脊髓ノ反射機能消失スルニヨル。而シテ斯カル劇甚ナル機能障礙ノ發現スルモ、致死量以下ニ於テハ概、一時性ノモノニシテ、一定時後ニハ中毒症狀去リ常態ニ復ス。故ニコレヲ麻酔劑トシテ實地ニ應用スルヲ得ルナリ。然レドモ、長時ニ互テ反復中毒ヲ起ストキハ種種ノ顯著ナル解剖的變化發現スルニ至ル(慢性アルコール中毒)。

又、同ジク神経中樞ヲ侵スモ、前者ト異ナリテ、主トシテ刺戟症狀ヲ呈スルモノアリ。ピクロトキシン、樟腦ハ神経中樞(延髓)ヲ刺戟シ痙攣ヲ發セシム。ストリキニーチハ脊髓ニ作用シ、ソノ反射作用ヲ亢進セシメ、微小ノ刺戟ニヨリ破傷風様ノ痙攣ヲ起ス、然レドモ、脊髓自發ノ興奮ニヨリテ痙攣ヲ呈スルコトナシ。

神経中樞ノ外、主トシテ交感神経ヲ侵スモノアリ。ニコチンハ交感神経節ニ作用シ、初、コレヲ興奮シ、後、麻痺ス。末梢神経及ヒラノ末端装置ニ、特殊ノ機能變化ヲ來タスモノアリ。クラールハ選擇的ニ運動神経ノ末端装置ヲ麻痺セシメ、運動ノ麻痺ヲ來タス。河豚毒ハ神経中樞ニ作用スル外、又、末端装置ニ對シクラールト同様ノ作用ヲナス。アトロピンモ、同ジク諸種神経ノ末端装置ヲ麻痺シ、散瞳及ビ調節機麻痺(動眼神經)・心臟收縮増加(迷走神經制止機)・諸腺ノ分泌停止又ハ減少(唾液腺・粘液腺・汗腺・肝臟等)ノ分泌神經等ヲ生ズ。ピロカルピン・ムスカリン・フィソチグミンハアトロピント略、反對ノ作用アリ。神経末端装置ヲ刺戟興奮セシメ、瞳孔收縮・諸腺ノ分泌増加等ヲ來タス。神経中樞ヲ避ケ、單ニ末梢機ニミ作用スルモノアリ。但、末梢機(即、諸臟器)ニハ自個ノ實質細胞ノ外、神経・血管アルガ故ニ、果シテ孰レノ組織成分ノ何ナル部位ニ作用セシカ、コレヲ判定スルニ困難ナルコト、頗、多シ。タトヘバ、腎臟分泌ノ異常ヲ生ツタル際、コレヲ上皮細胞自個ノ機能異常ニ歸スベキカ、又、若、上皮細胞中ニ形態的變化アラバ、コレガ機能障碍ト如何ナル關係アルカ、又、血管神經・分泌神經、或ハ血壓ノ異常ハ分泌異常ニ對シ幾何ノ責任ヲ有スルカ等ヲ確定スルニ頗、困難ヲ感ズ。

然レドモ、ソノ作用部位ノ略、確實ナルモノ固ヨリコレアリ。次ノ數例ノゴトキハコレナリ。チギタリスハ心筋ニ作用シ(一定時期ニ於テハ)心臟ノ擴張・強盛・收縮完全ヲ來タス。ベラトリンハ收縮セル軀幹筋ノ伸張ヲ緩徐ナラシメ、コフェインハ筋收縮ノ作用ヲ強大ニシ、又、腎臟上皮細胞ヲ刺戟シ分泌ヲ旺盛ナラシム(利尿)。カリウム鹽ハ心臟ニ麻痺性ニ作用

シ、フロリチンハ腎臟上皮細胞ヲ刺戟シテ糖ヲ尿中ニ出サシム(毒物性糖尿)。グリコズリー

亞硝酸鹽類・脂肪列ノ麻酔劑等ニハ血管擴張作用アリ。チギタリス・アドレナリン等ハ血管收縮ヲ起ス、コレ等ハ血管運動神経ノ作用ナリヤ、又ハ血管壁ノ平滑筋ニ作用スルガタメナリヤ、未、全ク明ナラズ。

ソノ他、多少ノ形態的變化出現スルモ、主ナルモノハ物質代謝ノ異常ニシテ、コレニ因リ、病的現象ノ發生スル場合少カラズ。燐中毒ノ際、酸化作用減退シ、蛋白質分解旺盛トナリ、肝臟内グリコーゲン生成停止シ、腎臟ハ馬尿酸ヲ合成スル機能ヲ失フ。コノ種中毒ニ於テ内臟・筋肉ニ變性ヲ認ムルコト稀ナラザルハ、物質代謝ニ異常ヲ來タセル證左ナリ。

附 自家中毒及ビ内分泌異常

自家中毒

毒物ガ體外ヨリ體内ニ輸入セラレテ、ココニ病的現象ヲ發現セシムルト同ジク、體内ニ自生セル物質代謝産物モ亦、往往自個ノ身體ニ對シテ有害ノ作用ヲナシ、コレニ依リ疾病或ハ病的狀態ノ惹起ヲ見ルコトアリ。コハ實ニ、病理學上重要ノ事項ニ屬ス。然レドモ、多數ノ精緻細密ノ研究アルニ拘ハラズ、物質代謝ニ關セル吾人ノ知識ハ、尙、幼稚ナリ、殊ニ中間物質代謝ニ於テ然リトス。コノ種ノ中毒ニ關シ、ソノ原因タルベキ毒物、若クハコレト直接ノ關係アルトコロノ物質ヲ捕捉シテ研究スルコトヲ得ルモノ極メテ少ナク、多クハ最終物質代謝産物・疾病症狀及ビ病理解剖的變化ニ據リテ身體内ニ於ケル物質代謝ノ異常ヲ推定スルヲ以テ、疾病發生ノ理ニモ亦、多少假定的ノモノアルヲ免レズ。

自家中毒ト内分泌異常トノ間ニハ、相互間ニ多ク共通ノ點ヲ有シ、且、各自ノ範圍明瞭ナラザルガ故ニ、兩者ノ孰レニ屬セシムベキカラ決定スルニ困難ナルモノアリ。

蓋、自家中毒ハ元來身體内ニ自生セル物質代謝產物ニヨリテ喚起セラルトコロノ中毒ナルガ故ニ、寄生體及ビ外來ノ毒物ニ由來スルモノハ、コノ範圍外ナリ。然レドモ、從來ノ慣例ニ從ヘバ、消化管内細菌性發酵、即、腐敗產物ノ吸收ニヨリテ發生スルトコロノ病的現象モコレヲ一種ノ自家中毒ト看做スヲ常トス。故ニ傳染病トコノ種ノ自家中毒トノ間ニ、往往明確ナル限界ヲ劃スルコト能ハズ。然レドモ、一方ヨリコレヲ見レバ、コノ種ノ疾病ハ傳染性ヲ有セズ、又、胃腸等ノ消化液等ガ毒物發生ニ關シテ有力ナル要件ヲナスコト、疑無キガ故ニ、自家中毒内ニコレヲ論ズルモ敢テ不可ナシト信ズ。コレニ依リ、自家中毒ヲ胃腸自家中毒、中間及ビ最終物質代謝異常ニ基ツク自家中毒ノ三ニ分ツコトヲ得ベシ。而シテ、二者中特ニ主要ナルハ後ノ二者ナレドモ、前述ノゴトク、物質代謝ニ關スル吾人ノ知識、尙、極メテ幼稚ナルヲモツテ、不明ナル部分、甚、多シ。

一。胃腸自家中毒ハ、通常腸内細菌・胃腸粘膜細胞及ビ消化液ノ共同作用ニヨリ生成セラルル腸内容ノ分解物ノ吸收ニヨリ惹起セラル。ダトヘバ、腸ニ異常ノ發酵ヲ起セル際、屢、腸麻痺ヲ來タシ、腐敗產物吸收セラレインヂカン尿中ニ出現ス。又、アルカフトン尿及ビチスチン尿ハ從來腸管ニ於ケル異常發酵、又ハ異常ノ物質代謝ニ由來スルモノトセラレシガ、最近ノ研究ニヨレバ、コレ等ハ孰レモ中間物質代謝異常ニ歸スベキモノナリト云フ(クレール氏⁽¹⁾)。又、硫化水素ハ腸管内ニ生成セラレ、時トシテ中毒ヲ起ス。ソノ他、急性腹膜炎ニ因レル致死ハ麻痺セル腸管ヨリ吸收セルトコロノ腐敗產物ニ由來シ、肝臓硬變症ハ慢性胃腸加答兒ノタメニ生成セル異常ノ發酵生產物中毒ノ結果ナルベシトノ説アリ。

二。身體臟器ニ於テ諸種ノ化學的變化ヲ受ケ、最終物質代謝產物トシテ排泄セルベキモノガ、中間物質代謝ノ異常ニヨリ、中間階級ノ物質ガ、ソノ儘、吸收セラレテ有害作用ヲ呈スルコトアリ。諸臟器中、肝臓ハ特ニ中間物質代謝ノ消長ニ密接ノ關係アリテ、合成及ビ解毒作用ノ最、盛ニ行ハルトコロナルヲモツテ、肝臓疾患ハ物質代謝ニ影響ヲ及ボスコト甚、大ナリ。

コノ種ニ屬スル物質中、最、良ク研究セラレシハ、所謂アチドージス⁽²⁾(酸過剩症)ノ際ニ現出スルベータ酸化牛酪酸及ビアツェト醋酸ナリ。健康體ニ於テハコレ等ノ物質ハ酸化セラレテ炭酸及ビ水トナリ、只、酸化作用ヲ免レタル少量ノアツェトシノミ尿中ニ排泄ス。然ルニ、コレ等ノ物質(アツェトシノ體ト稱ス)ハ諸種ノ物質代謝異常ヲ來タセル際(饑餓・糖尿病等)多量ニ排泄セルルコトアリ。饑餓ニ際シテアツェトシノ體ノ最少量ノ出現ハ人及ビ猿ニ於テコレヲ見ル。アチドージスノ最、著明ナルハ糖尿病ナリ。コノ疾病ニ見ルトコロノ昏睡⁽³⁾ハアツェトシノ體ニ因レル酸中毒ナリトイフ(ナウニン氏⁽⁴⁾)。當ニ糖尿病ノミナラズ、又、癌腫及ビ消化不良ノ際ニモ、時トシテアチドージスアリ、昏睡ヲ來タス。

痛風ハ所謂體質異常ニ基ツクル疾病ニシテ、多量ノ肉類及ビ酒類ヲ攝取スルノ人ニ多シ。コノ疾病ニ於テハ、血中ニ多量ノ尿酸鹽アリテ、溶解性ヲ失ヒ、諸組織、殊ニ軟骨及ビ結締織ニ沈著ス。コレ特殊ノ生活狀態ガソノ生成ニ少カラザル關係ヲ有スルモノナレドモ、主要ナルハ「體質異常」ニ因スル物質代謝ノ異變ニヨリ、尿酸ノ生成及ビ破壞機能ニ變動ヲ來タスニ在リ。ソノ他、尙、痛風患者ニアリテハ、常人ニ比シテ尿酸ノ排泄少キガ故ニ、腎臟ノ排泄機能ニモ多少ノ障礙ヲ生ジ、尿酸ノ鬱滯ヲ來タスコトモ亦、ソノ一因ナルベシ。

三。最終物質代謝產物ノ吸收ニ基因スル中毒アリ。膽血症(黃疸)・尿毒症等、コレニ屬ス。膽血症(黃疸)ハ膽石・膽道ノ炎症・肝臓腫瘍等ニ因リテ肝小葉内毛細膽管及ビ細小膽管ヨリ總輸膽管ニ至ル經

過中膽道ノ閉塞又ハ狹窄ヲ來タシ、タメニ膽汁ノ鬱滯ヲ致ス場合ニ於テ、又ハ他ノ肝臟組織ノ疾患(燐中毒・急性黃色肝萎縮等)ニ際シテ膽汁成分血中ニ移行シテ生ズルモノナリ。重症黃疸ニ於テハ諸組織黃染・皮膚瘙癢・腎臟上皮細胞ノ變化ヲ來タシ、又、昏睡^{コイ}或ハ痙攣^{コイ}ヲ起ス。コレ等ノ症狀ハ血中ニ移行スル膽汁、殊ニ膽酸鹽ノ作用ニ歸スベキモノナルベシ。脈緩徐ハ膽酸鹽ガ心臟及ビ迷走神經ニ作用スルガタメナルベク、譫語・痙攣・昏睡^{コイ}等ハ同物質ガ神經中樞ヲ侵スニ因ルナルベシ。動物ニ膽酸鹽ヲ注射スレバコレト類似ノ症狀ヲ呈スルヲ見レバ、人類ニ於ケル黃疸モ亦、同様ノ原因ヲ有スルモノナルベシ。

尿毒症ハ腎臟ノ疾患(腎臟炎)・尿排泄管ノ閉塞・兩腎ノ剔出ニヨリ起ル症狀ニシテ、主トシテ神經中樞(大腦・延髓)ヲ侵シ、刺戟及ビ麻痺症狀(意識濁濁・痙攣・心臟及ビ呼吸作用ノ障礙・嘔吐等)ヲ呈ス。然レドモ、往往閉尿ヲ來タシ、神經症狀著明ナラズシテ速ニ死ノ轉歸ヲ取ルコトアリ。尿毒症ハ尿成分體內ニ鬱積シテ生ズル自家中毒ナルコトハ、固ヨリ異論ナキコトナレドモ、何如ナル物質ガ、コノ症狀ヲ發現セシムルカハ今日、未、明ナラズ。尿素・尿酸・クレアチン等尿ノ諸成分及ビ化學的ニ、コレト近似セル諸物質ヲ用ヒテ動物試驗ヲ施スモ、未、確實ナル陽性ノ成績ヲ得ズ。佛國ノ病理學者、殊ニブーシール氏⁽¹⁾ハ尿中ニ毒物アリト主張シ、ソノ毒力ヲ比較スルニ、『尿毒係數』ヲ以テセリ。然レドモ、今日マデ、確實ナル毒物ヲ分離セル人ハ未、コレアルコト無シ。有毒物質ガ尿中ニ存在セザルモ尙、尿毒症ヲ起スコトヲ得ベシ。ダトヘバ、尿鬱滯ニヨリ尿成分ガ身體組織ニ沈著シ物質代謝ノ異常ヲ來タシ、有毒物質新生シテ血中ニ吸收セラルルコトナルベシ。又、腎臟ハ單ニ排泄器ナルノミナラズ、化學的合成作用(馬尿酸)ノ行ハルル處ナルガ故ニ、腎臟ノ疾患又ハ剔出等ニヨリテ、中間物質代謝ノ異常ヲ來タシ、依テ毒物ノ自生スルコトモ、亦、可能ナリ。

尿毒症ニ類似セルモノ子癩アリ、妊娠中、又ハ產褥中ニ痙攣ヲ發シ、剖檢上肝臟ニ出血及ビ壞死ヲ認ムルコト頻回

(1) Bouchard

ナリ。子癩發生ニ關シテハ、古來諸多ノ說アリ。就中胎盤或ハ胎兒ニ於テ生成スル物質代謝產物ニ因レル中毒ナリトスルノ學者少ナカラズ。然レドモ、果シテ如何ナル物質ノ作用ニ基ツクカ、ソノ真相ハ、未、全ク明ナラズ。最近過敏症學說^{アナフィラキシー}ノ勃興ニ從ヒ、過敏症ニ屬スベキモノナリト主張スルノ說出タレドモ、コノ說ニハ、尙、確實ナル立證ヲ要ス。

内分泌異常

身體組織ハ前章疾病原因概說ニモ已ニ論ジタルガゴトク、相互間ニ諸種ノ關係ヲ有スルモノニシテ、ソノ神經系ニ依ル外ニ、又、化學的物質ニヨリテ隔離セル部分ノ組織、又ハ臟器ニ影響ヲ及ボスコト甚、多シ。一定ノ組織、又ハ臟器間ニ特殊ノ化學的相互關係ノ存在スルモノアリ、所謂内分泌腺、コレニ屬ス。コレ等ノ臟器ハ通常輸出管ヲ缺クガ故ニ、ソノ分泌液ハ血中ニ移行シ、循環シテ、身體諸部ニ至リ、一定ノ臟器組織ニ作用ス。然レドモ、分泌液ノ存在ハ直接ニコレヲ證明スルコト能ハザルモノ多ク、一ニノ例外ヲ除キテ、臨牀的・病理解剖的又、人體及ビ動物ニ於ケル試驗的研究ニヨリ特殊ノ有效ナル分泌液ノ存在ヲ想像假定シ、又ハ間接ニソノ存在ヲ證明スルニ止マレリ。然レドモ、上文既ニ述べタルガゴトク、自家中毒ト内分泌トノ區別ハ往往明瞭ヲ缺キタリ。即、内分泌腺ヨリ特殊ノ物質ヲ分泌シテ他ノ組織ニ影響セシムルモノナリヤ、或ハ肝臟ニ解毒作用アルガゴトク、内分泌腺ニ於テモ亦、有害物質ガ無害性ニ變化セラルルタメナリヤ、全ク明ナラザルモノアリ。

近者ベールリス・及ビスターリグ兩氏⁽²⁾ハ、臍液及ビ膽汁ノ分泌ニ就テ研究シ、ホルモン^{ホルモン}說ヲ公ニセリ。同氏等ニ據レバ、胃内容ガ十二指腸ニ達シ神經ヲ刺戟シテ臍液及ビ膽汁ノ分泌ヲ促シ出スニアラズシテ、酸性胃内容ガ十二指腸ニ至ルヤ、ソノ粘膜ニ作用シ、ゼクレチン^{ゼクレチン}ト稱スル物質、形成セラル、ゼクレチン形成セラルルヤ直ニ吸收セラレ、血行ニヨリ臍

(1) Bayliss und Starling

(1) Starling and Lane-Clayton

臟及ヒ肝臟ニ達シ、ソノ實質上皮細胞ヲ刺戟シテ分泌ヲ催進ス。コノ際セクレチンハ傳令使トシテ先、脾臟及ヒ肝臟細胞ニ分泌ノ命令ヲ傳ヘタルナリ。斯ノ如ク、一定ノ組織、又ハ臟器ニ作用スル特殊ノ化學的物質ヲホルモント稱ス。更ニ、尙、生理的ノ一例ヲ舉ゲシニ、妊娠ノ際、乳腺肥大シ、乳汁ヲ分泌スルハコレ乳腺ト生殖器トノ間ニ、何等カノ關係アルガタメニシテ、從來コレヲ神經系ノ作用ニ基ツク相互關係ニヨリ説明シ來タリシガ、最近ノ研究ニ據レバ、兩者間ニ化學的の關聯アリテ、乳腺ニ生理的の變化ヲ來タスモノゴトシ。タトヘバ乳腺ト生殖器トノ神經性連結ヲ斷絶シ(家兔)、又、乳腺ヲ剔出シテ、コレヲ耳ノ附近ニ移植スルモ(モルモット)尙、妊娠ニ際シ、腺組織増殖シテ乳汁ヲ分泌ス。コレ生殖器及ヒ乳腺間ニ、神經性關聯ノ存セザル證左ナリ。又、未、妊娠セザル家兔ニ同種動物ノ卵巢胎盤・子宮粘膜・胎兒ノ抽出液ヲ注射セシニ、乳腺肥大・乳汁分泌ヲ來セリ(スターリントン及ビレーン、クレーボン氏)蓋、コノ試驗ノ價値ハ、コレヲ疑フ人ナキニアラザリシカドモ、數人ノ立證アルニヨリ正確ナルモノト看做サザルベカラズ。ソノ他、人類ニ於テモ、コレニ類似セル例アリ。タトヘバ重複畸形女ノ一方ガ妊娠シ、次テ正常ノ分娩ヲナセシニ、他方ノ妊娠セザルモノニ於テモ、著明ノ乳汁分泌アリキ。コレ重複畸形女ハ共同ノ血液ニヨリ榮養セラルルヲ以テ、一側ノ妊娠者ニ生成セル刺戟物質、即、ホルモンガ血行ニヨリテ他側畸形女ノ乳腺ヲ刺戟シテソノ分泌ヲ促シタルニ因ルヤ疑ナシ。

上述ノゴトク、ホルモンニヨリテ生理的の調節保持セラルレバ、則、健康状態ニアリ、コレニ反シテ、内分泌ニ異常起ラバ身體ニ一定ノ病的變化ヲ醸ス、コレ化學的の相互關聯ノ變調ニ基ツクモノナリ。

内分泌腺ガ、一定ノ組織、又ハ臟器ニ特殊ノ影響ヲ及ボスコトハ間接ニコレヲ推知スルモノニシテ、主トシテ下記ノ事實ニ據ル。一、外科手術又ハ動物試驗ニ於ケル臟器剔出、或ハソノ病的變化ニヨリ機能脱失ヲ來タシテ一定ノ疾病ヲ發生セシム。二、内分泌腺ガ機能亢進ノ状態ニアラバ機能脱失ノ際ニ見ハルルトコロノ病變ト、反對ノ症狀ヲ呈ス。三、機能脱

失ニ由來スル病的現象ガ、該當臟器ノ移植又ハソノ生産物輸入ニヨリ消失シ、ソノ疾病治愈スルモノアリ。斯ノ如キハ、スベテノ内分泌腺ニ於テ全然證明セラレタルニハアラザレドモ、内分泌ノ存在スルコトハ略、確實ナリ。

主要ナル内分泌異常ハ、左ノゴトシ。

一。甲状腺

甲状腺ハ内分泌腺中、最、必要ニシテ最、良ク研究セラレタリ。甲状腺ノ病變(主トシテ甲状腺腫)ハ一定ノ地方(瑞典、佛蘭西、臺灣等)ニ於テ、略、地方病的ニ存在シ、人類ノ健康ヲ侵害スルコト、少ナカラズ。

最、必要ナルハ、機能脱失現象ニシテ、外科的剔出・實質ノ退行性變化・腫瘍・先天性缺如、或ハ發育不全ノ際、コレヲ見ル。機能脱失ニ基ツク變化ハ骨ノ發育不全(軟骨化骨機能遲緩・身體矮小)・粘液水腫・皮膚榮養障礙(毛髮脱落・汗腺分泌停止)・惡液質・生殖器發育不全・智力缺損(白痴)・腦下垂體腺部肥大・物質代謝減退等ナリ。コレ等ノ變化ガ常ニ皆、必發スルニアラザルコトハ言フ俟タズ。往往、唯一症狀ノミガ主トシテ現出スルコトアリ(粘液水腫)。甲状腺全部剔出セラレバ通常惡液質・粘液水腫・智力減退等(Cachexia strumipriva s. thyreopriva)ヲ來タス。コレニ反シテ地方病性クレチニズムスニ於テハ、上記ノ諸症狀、略、完備セリ。動物(山羊・羊・猿等)ニ於テ、ソノ甲状腺ヲ剔出スルニ、人ニ於テ見ルトコロト略、同一ノ病的現象ヲ呈ス。ソノ他、動物ニ於テハ大動脈ニ高度ノ動脈硬化症ヲ來タスコトアリ。

コレ等ノ脱失現象ハ、甲状腺移植、又、腺自個、或ハソノ製劑ヲ攝取スルニヨリテ消失シ、治愈ニ就クモノトス。上文ニ述ベシガゴトキ機能脱出ニヨルモノノ外、又、機能亢進ニ基ツク疾病アリ。バセドウ氏病ハ即、コレニ屬スルモノト看做サル。然レドモ、コノ疾患ノ原因及ビ病理ハ未、全ク闡明セラレタルニアラス。バセドウ氏病ニ於テハ甲状腺ノ機能

(4) Tetania parathyreopriva (2) Klose (1) Notthaft
(3) v. Fürth

亢進ガ、唯一ノ原因ナリヤ、否ヤハ、今、コレヲ斷定スルコト能ハズト雖、兩者間ニ密接ノ關係アルコトハ疑ナシ。次ノ二例ハ、稍、コノ裡ノ消息ヲ明ニスルモノナリ。健康ナル一男子ガ肥滿ヲ輕減セント欲シ、醫師ニ謀ラズシテ多量ノ甲状腺錠ヲ攝取セシニ、バセドウ氏病様ノ症狀ヲ發現シタリ(ノットハフト氏)。又犬ニ同病患者ノ甲状腺壓搾液ヲ注射セシメシニ同ジクバセドウ氏病様症狀ヲ呈セリ。而シテ、コレニ反シ、健康者ノ甲状腺壓搾液ハ斯ノ如キ作用ヲ有セズ(クローズ氏)(以上ノ二例スルト氏ニ據ル)。

二。副甲状腺(上皮小體)

副甲状腺ヲ全部剔出セバテタニーナル病の症狀ヲ發現ス。動物(鼠・犬・猫)ニ於テモ、略、同様ナリ。從來、甲状腺剔出ノ際、同時ニ副甲状腺ヲ除去セシガ故ニ、テタニーハ甲状腺機能脱失ノ結果ナリトセラレタリ。動物(猫)ニ於テ甲状腺ト共ニ内副甲状腺ヲ剔出スルモテタニーヲ起サズ、單ニ甲状腺性惡液質ヲ呈スルノミナレドモ、尙、殘留セル外副甲状腺ヲ剔出スルヤ始メテテタニー症狀ヲ發現スルヲ見ル。小兒ニ屢、見ハルルテタニーハ副甲状腺出血、ソノ他ノ病の變化ニ由來スルトコロノ機能不全ニ因ルモノナリトイフ。

動物ニ於テ全副甲状腺ヲ剔出シ、テタニーヲ起セルモノニ甲状腺、又ハソノ製劑ヲ與フレバ、ソノ症狀ノ治癒シ或ハ輕快スルヲ見ル。又、外副甲状腺ト甲状腺トハ、ソノ作用相互關聯シ、ソノ一ヲ剔出セバ、他ハ代償性肥大ヲ來タス。コレニ由リテ考フルニ、テタニーハ單ニ副甲状腺ノ機能障礙ニ因ルモノナリヤ、否ヤハ、尙、研究ヲ要ス。

ソノ他、副甲状腺ヲ剔出スルニヨリ齒及ビ骨ニ於ケル石灰沈著ノ障礙ヲ來タシ、自然骨折又、骨折治癒機能遲緩ヲ起スコトアリ(鼠)。又、最近、人類軟化症ハ副甲状腺ノ病變ニ基因ストノ説アリ。

三。腦下垂體

腦下垂體ハ前後兩葉ヨリ成リ、前葉ハ腺性ニシテ内分泌ヲ營ムモノト看做サレ、後葉ハ神經性ニシテソノ機能ハ全ク明ナラズ。

下垂體ノ病的變化(主トシテ腫瘍)ハアクロメガリート密接ノ關係アリ。ビードル氏⁽¹⁾又、オツシー氏⁽²⁾ニ據ルニ、下垂體ニ變化ナクシテアクロメガリーヲ見タリトイフ報告無キニアラザレドモ、精細ナル研究ニ依レバ、下垂體ニ於テ常ニ多少ノ病理解剖的變異ヲ見ザルコト無シトイフ。下垂體ト甲状腺及ビ生殖器トノ間ニ、相互關聯アリテ、互ニ代償性肥大ヲナス。甲状腺ニ機能脱失又ハ減退(剔出後)粘液水腫及ビクレチニズムスニ際シテ來タサバ下垂體ハ肥大シ、コレニ反シテ、下垂體ヲ剔出セバ甲状腺ノ肥大ヲ見ル。生殖器ニ於テモ同様ノ關係アリ。アリロメガリーニ於テ、又ハ下垂體剔出後生殖器ノ發育不全及ビ萎縮(外陰部・辜丸及ビ卵巢)ヲ起シ、生殖器剔出後、下垂體ノ肥大ヲ來タス。ソノ他下垂體ハ諸種ノ物質代謝ニ密接ノ關係アリ、ソノ剔出ニヨリ、骨ノ發育不全・脂肪過多・糖尿ヲ來タス。右ニ述ベシ諸症狀ノ發現ニハ、下垂體後葉モ關係アリヤ、又、各病的現象ハ下垂體ノ機能脱失ニ基ツクカ、或ハソノ亢進ニ因ルカニ就テハ、異説多クシテ未、全ク解決セラレセズ。

四。副腎

副腎ハ身體ノ保全ニ對シテ、必要缺クベカラサルモノナリ。兩側副腎ヲ剔出セバ動物ハ暫時(凡、數時間ヨリ二日)ノ後ニ斃死ス。而シテ皮髓兩質中獨リ皮質ガ生命保全上必要ナルモノナリトイフ(ビードル氏⁽³⁾)。人ニ於テモ副腎ニ出血アリ、大部分破壊セルレバ頓ニ死ヲ來タスコト少ナカラズ。

副腎ヨリ分泌セルルトコロノアドレナリン(ホルモン)ハ化學的構造及ビ生理的作用ノ闡明セラレタルモノナリ。動物試驗ニ於テアドレナリンハ能ク動脈硬化及ビ糖尿^(グリコズリ)ヲ起サシム。但、コノアドレナリン性動脈硬化ハ人ニ於ケル動脈硬化ト

(1) Biedl
(2) B. Fischer

(3) Biedl

- (1) Wiesel
(2) Das chromaffine System

異ナリ、主トシテ筋層ノ退行性變化ヲ呈セリ。

アデソン氏病ハ從來副腎機能脱失(結核・腫瘍)ニ基因スルモノト信ゼラレタリ。然レドモ、多數ノ研究ニ依リ、確實ナルアデソン氏病ニシテ副腎ニ著明ナル病變ヲ呈セザルモノアルコト明白トナリシガ故ニ、本病發生ノ原因ヲ副腎ノ變化ノミニテ説明スルコト能ハズ、他ニモ、尙、ソノ原因ノ要件ヲ求メザルベカラズ。ヴーゼル氏⁽¹⁾ハアデソン氏病ノ原因ヲクロマフィン系⁽²⁾ノ異常ニ歸セリ。クロマフィン系トハ副腎髓質・交感神経系等ノ中ニ散在シ、クローム酸及ビソノ鹽類ニヨリ褐色ニ染著スルトコロノ細胞ヲ總稱ス。若、コノクロマフィン物質ノ減少、又ハ消失ヲ來タサバアデソン氏病發現ストイフ。然レドモ、コノ說ハソノ根據、尙、薄弱ニシテ未、完全ナル説明トイフコトヲ得ズ。要スルニ、アデソン氏病發生ノ理ハ尙、不明ナリ。

五。生殖腺モ内分泌器ニ屬スルモノニシテ、幼年時ニ於テセル辜丸、又ハ卵巢剔除ハ男女身體性質ニ變化ヲ來ス(男子ニアリテハ脂肪發育過剩・鬚髯・腋毛及陰毛發育不全・小兒性喉頭・骨發育異常等。女子ニアリテハ子宮萎縮・月經閉止ヲ生ズ。ソノ他男女性格ノ變調ヲ來ス)。

六。腺臟ハ輸出管ヲ有シ、消化液ヲ分泌スル外、又、内分泌ヲナスモノト看做サレ、含水炭素ノ物質代謝ニ密接ノ關係ヲ有ス。糖尿病中ソノ發生ヲ腺臟ノ病的變化(萎縮・結締組織增生・ランゲルハンス氏島ノ萎小又ハ減少等)及ビ腺臟剔除ニ歸セシムベキモノアリ、腺臟糖尿病ト稱スルモノ、コレナリ。ソノ病的症狀ハ人及ビ動物ノ種類ニ依リ差異アレドモ、アチドーシス・血中糖分(葡萄糖)増加及ビ尿中糖分出現ハ主要ナルモノナリ。ソノ他肝臟及ビ筋組織内ニグリコーゲンノ減少ヲ來タス。而シテ甲状腺ニ於ケルゴットク腺臟組織移植又ハ攝取ニヨリテ疾病ノ發生ヲ防遏シ得ルヤハ未、確定セラレズ。蓋、腺臟糖尿病發生ノ理ハコレニ關シテ、尙、不明ノ點少ナカラザレドモ、恐クハ腺臟内分泌異常ニ

ヨリ含水炭素物質代謝ニ變化ヲ來タシ、血中酸生成過剩及ビ糖分生産過剩ヲ惹起シタルニ在ルベシ。

化學的『毒物』『毒物』ノ原因作用。附自家中毒及分泌異常

- Boyd W. M. and Starling E. H., The mechanisms of pancreatic secretion. Journ. of Phys. 1912. XXVIII, p. 325.
Eickel A. und Wolkgenuth, J., Die Rolle der Leber im intermediären Eiweißstoffwechsel. *Laborsch's Ergebnisse*. 1908. XII. S. 606.
Bidl, A., Innere Sekretion. 1910.
Bircher, H., Die gestörte Schilddrüsenfunktion als Krankheitsursache. *Laborsch's Ergebnisse*. 1904. VIII. 1, S. 521.
Bireher, E., Fortfall und Änderungen der Schilddrüsenfunktion als Krankheitsursache. *Laborsch's Ergebnisse*. 1911. XV. 1, S. 82.
Blumenthal, A., Über die Wirkung verwandter chemischer Stoffe auf den quergestreiften Muskel. *Pflüger's Arch.* 1896. LXII. S. 514.
Boehm, R., Die chemischen Krankheitsursachen (Allgemeine Toxikologie). *Kyell und Marchen's Handb. der allgemeinen Pathol.* 1908. I, S. 198.
Borchardt, Funktion und funktionelle Erkrankung der Hypophyse. *Ergebnisse der inn. Med.* 1909. III, S. 288.
Brunn, J., Über Resorption und Sekretion im Magen und deren Beeinflussung durch Arzneimittel. *Zeitschr. f. Biol.* 1892. XXIX, S. 277.
Choctin, M., Über die Ursache der Angewöhnung an Arsenik. *Arch. f. exp. Path. u. Pharm.* 1906. LIV, S. 196.
Choctin, M., Über das Verhalten des Morphins im Organismus und die Ursache der Angewöhnung an dasselbe. *Arch. f. exp. Path. u. Pharm.* 1903. I, S. 453.
Deryby, O. et Komse, I., Poisons toxique et antitoxique du sang après injection intravenéuse de venin, toxine ou antitoxine. *Arch. intern. de Pharmacodyn.* 1899. VI, P. 211.
Ehrlich, P., Beiträge zur experimentellen Pathologie und Chemotherapie. 1909.
Erlchen, Fr., Vergiftungen. Klin. Teil. I. Hälfte. 1909.
Erdheim, J. etc., Morphologische Studien über die Beziehungen der Epithelkörperchen zum Kalziumstoffwechsel. *Frankfurter*

- Zeitschr. 1911. VII, S. 175.
- Van Ermengem*, Die Pathogenen Bakterien der Fleischvergiftungen. *Kalle und Wassermann's Handb.* 1903. II, S. 637.
- Eschsch, C. E.*, Die Erkrankungen der Schilddrüse, Myxödem und Kretinismus. 2. Aufl. 1909.
- Faust, E. S.* Über die Ursache der Gewöhnung an Morphin. *Arch. f. exp. Path. u. Pharm.* 1900. XLIV, S. 217.
- Fischer, B.*, Hypophyse und Akromegalie. *Frankfurter Zeitschr.* 1912. XI, S. 130.
- o. Rirth, O.*, Probleme der physiologischen und pathologischen Chemie. I. Gewebschemie. 1912.
- Gierke, E.*, Das chromaffine System und seine Pathologie. *Lubarsch's Ergebnisse.* 1906. X, S. 503.
- Hoebner, R.*, Über Resorption im Darm. Dritte Mitteilung. *Pflüger's Arch.* 1901. LXXXVI, S. 199.
- Hönigsmann, G.*, Die Urämie. *Lubarsch's Ergebnisse.* 1895. I, 2, S. 639. 1904. VIII, 1, S. 549.
- 猪子吉人 Über die giftige Bestandteile und wirkungen des japanischen Panthereschwammes (*Amanita pantherina*). 東京帝國大學紀要醫學部第一冊第三十三頁(明治三十三年).
- Kronka, H.*, Intoxikationen. *Lubarsch's Ergebnisse.* 1901. VI, S. 1.
- Kobert, R.*, Lehrbuch der Intoxikationen 2. Aufl. 1902-1906.
- Kraus, Fr. u. Hönigsmann, Gs.*, Pathologie der Autointoxikationen. *Lubarsch's Ergebnisse.* 1895. I, 2, S. 573.
- Krohl, L.*, Pathologische Physiologie, 7. Aufl. 1912.
- Lane-Clayton, T. E. and Starling, E. H.*, An experimental inquiry into the factors which determine the growth and activity of the mammary glands. *Proc. R. Soc.* 1906. LXXVII, p. 505.
- Loewl, R. W.*, An experimental investigation of strychnin poisoning. *Journ. of Physiol.* 1888. IX, p. 99.
- Masohn, P.*, De la rapidité d'absorption des poisons par l'organisme. *Arch. intern. de Pharmacodyn.* 1911. XI, p. 464.
- Meyer, H.*, Zur Theorie der Alkoholnarkose. 1899. XLII, S. 109. *Arch. f. exp. Path. u. Pharm.* 1901. XLVI, p. 388. 1902. XLVII, p. 431.
- Meyer, H. und Gottlieb, R.*, Die experimentelle Pharmacodyn. 1910.
- Meyer, H. und Steinfeld, W.*, Untersuchungen über die toxischen und therapeutischen Wirkungen des Wismuths. *Arch. f. exp. Path. u. Pharm.* 1886. XX, S. 40.
- 森島庫太 Giftigkeitsgrad, Absorptionsgeschwindigkeit und Immunisierungsvermögen des Arsens. *Arch. intern. de Pharmacodyn.* 1900. VII, p. 65.

- 森島庫太 藥物學(明治四十五年).
- Ouerton, E.*, Studien über Narkose. 1901.
- Rogers, H.*, Les intoxications. *Bouchard's Traité de Pathologie générale.* 1895. I, p. 669.
- 高橋順太郎及猪子吉人 河豚毒ニ就テ(東京醫學會雜誌第三卷第十九號(明治二十二年) Beiträge zur Kenntnis des Fugugiftes. 東京帝國大學醫學部第一冊第三七五頁(明治二十五年).
- Tappeiner, H.*, Über Resorption im Magen. *Zeitschr. f. Biol.* 1880. XVI, S. 497.
- Weland, G.*, Über die chemische Reizung des Flimmerepithels. *Pflüger's Arch.* 1894. LVIII, S. 105.
- Winternud, W.*, Gastrointestinale Autointoxikationen. *Lubarsch's Ergebnisse.* 1897. IV, S. 1.
- Winternud, R.*, Zur Lehre von der Hautresorption. *Arch. f. exp. Path. u. Pharm.* 1891. XXVIII, S. 405.

癸 寄生性生物ノ原因作用

一 概説

外來ノ「害物」トシテノ寄生性生物ノ作用ハ疾病原因中、甚、重要ノ位地ヲ占ムルモノナリ。殊ニ傳染病ニ於テハ、コノ寄生性生物ノ作用ヲモツテ、最要ノ原因的要件トナシ、從ツテソノ研究ハ他ニ比シテ頗、精細ヲ極メタリ。而シテ、コレ實ニ、原因學ノ發達史ニ多大ノ意義ヲ附與シタルモノナリ。

疾病ガ往往ニシテ傳染シ、且、流行ヲ來タスコトアルハ、往古ヨリ人ノ熟知ストコロナレドモ、ソノ原因ガ寄生性生物ニアルコトヲ明カニシタルハ十九世紀、殊ニソノ中葉以後ナリトス。昔時、支那・日本及ビ西洋ニ於テモ、一定ノ疾病、タトヘバ、

- (4) R. Koch
- (5) O. Obermeier
- (6) A. Laveran
- (3) J. Ch. Davaine
- (2) Muscardine
- (1) Miasma

マデリヤノゴトキハ、一種ノ瘴氣ニヨリ起ルモノナリトシ、西洋ニ於テハコレヲ瘴氣⁽¹⁾ト名ツケ、通例コレヲ呼ビテ病原體ト稱セリ。蓋、コノ病理說ニヨレバ、マデリヤ等、所謂瘴氣傳染病ハ腐敗セル空氣ノ體內侵入ニ因ルモノ、即、一種ノ瓦斯中毒ナリ。發疹室扶斯⁽²⁾產褥熱⁽³⁾實布垵里⁽⁴⁾丹毒等モ同様ニ考ヘラレ、斯クテ十九世紀ノ末葉細菌學勃興ノ時ニ及ベリ。寄生性生物即、寄生體ガ一定ノ疾病ノ原因ヲナスコトハ、蠶ノ白僵病⁽⁵⁾ニ於テ始メテ證明セラレタリ(一八三七年)。爾後、數種ノ皮膚病及ビ鷺口瘡ガ植物性寄生體ニ因リテ惹起セルルコト明カトナリ、寄生性疾病ノ存在ハ益、確實トナリシガ、コレニ關スル知識ハ尙、極メテ幼稚ナリキ。コノ時ニ方リテ、重要ノ發見アリテ、傳染病ノ病理ニ一新紀元ヲ劃セリ。コレダヴエヌ氏⁽⁶⁾(一八六三年)ノ脾脫疽ニ關スル研究ニシテ、同氏ハ脾脫疽ニ罹レル動物ノ含桿狀菌血液ニヨリ該疾病ヲ他ノ動物ニ傳染セシメ得ルコトヲ確メ、コノ細菌ガ原因ナルベシトイヘリ。後(一八七六年)、醫界ノ偉人コヅホ氏⁽⁴⁾出デテ、脾脫疽ニ關スル研究ヲ公ニシ、傳染ノ病理、益、闡明トナレリ。又、一八七三年オーベルマイエル氏⁽⁶⁾ハ回歸熱ノ病原體スピロベエテ、オーベルマイエリヲ發見シ、一八八〇年ラヴラン氏⁽⁶⁾ハマデリヤ患者ノ赤血球中ニソノ病原體フラスモチウムヲ發見シ、傳染病ニ關スル研究ノ基礎ヲ作レリ。

細菌學及ビ傳染病ニ關シテ吾人ノ知識ハ多數ノ學者ノ檢索ニヨリ、研究方法ノ改良進歩ト相待チテ、微妙ノ點ニ至ルマデ、精細ニ攻究セラレ、闡明ノ域ニ達セシモノ決シテ少ナカラザレドモ、尙、今後ノ研究ニ俟ツベキモノ、頗、多シ。

疾病ニシテ傳染性ナルコト確實ナルモ、ソノ病原體ノ全ク不明ナルアリ。或ハ疑ハシキモノアリ。又、病原體發見セラレ居ルモ、ソノ疾病發生ノ理由明ナラザルモノ、頗、多シ。

吾人ハ今病原性ナル寄生性生物ノ性状及ビコレニヨリ起ルトコロノ疾病ノ状態ニヨリ、コレヲ次ノゴトクニ分類スベシ。

(天) 么微寄生體

一 不可視寄生體及ビ濾過性寄生體

二 細菌

三 高等植物性么微寄生體

四 原蟲

(地) 粗大寄生體

複細胞動物

右ノゴトク、么微寄生體ト粗大寄生體トニ分ツハ、管ニソノ大小ノ形態ノ相異ナルガ故ニアラスシテ、寄生體自個ノ生物學的性状及ビコレニヨリテ惹起セルル宿主身體ノ性的状態ノ病的機能ニ異アルニ依ルナリ。

一定ノ生物、即、寄生體ガ他ノ生物ニ作用シ、後者ニ於テ一定ノ病的現象ヲ發見セシムルモノ、コレヲ稱シテ「傳染」ト云フ。「傳染」テテ語ニ狹義ト廣義トアリ。狹義ナルハ、濾過性寄生體、室扶斯菌⁽²⁾或ハマデリヤ、フラスモチウムノゴトキム微寄生體ニヨリ起ルモノヲイフ。ヘルゼル氏⁽¹⁾ハ動物性寄生體ニヨリ起ルトコロノ疾病ヲ特ニ「侵襲病」ト名ツケタレドモ、コノ命名法ハ諸家ノ採用スルトコロトナラズ。

狹義ニ於ケル傳染病ニテモ、學者ニヨリテ、ソノ意義ヲ異ニスルコトアリ。タトヘバベーリング氏⁽³⁾ニ依レバ、生物・無生物ニ關セズ、既知ノ傳染病ト同一ノ症狀ヲ呈セシムルモノハ傳染物質、即、一種ノ病原體ト看做スベキナリ。破傷風毒素ノゴトキハ、即、コレニ屬スルモノニシテ、細菌ヲ缺グモ尙、定型性ノ疾病ヲ惹起セシム、故ニ傳染ニハ必シモ生活菌ヲ要セズト。而シテ蛇毒又、植物性毒物ナリチン等ニ因リ惹起セルル疾病モ亦、傳染病ニ算入スベキモノトセリ。蓋、コノ說ハ理論上正鵠ヲ得タルガゴトト雖、實際上自然ニ發生スルトコロノ傳染病ハ、生活アル么微寄生體ノ力ヲ借ラズシテハ起ルトナ

- (1) Heller
- (2) Invasionskrankheiten
- (3) v. Behring

シ。又、タトヘバ腸詰毒菌ハ腸詰・魚肉等ニアリテ(二四度以下ノ溫度ニ於テ)増殖シ毒素ヲ分泌ス、コレヲ含有スル者(腸詰等)ヲ食スレバ、所謂「肉中毒」ヲ起ス。コレ生體外ニ於テ形成セラレタル毒素ヲ飲食物ト共ニ攝取シ、ソノ吸收ニヨリテ中毒ヲ起スナリ。コノ時、毒素ノ生成及ビソノ作用ハ實布埜里及ビ破傷風ニ於テ見ルトコロノモノニ一致スレドモ、コレ傳染ニアラズシテ、實ニ單純ノ中毒ナリ。是ニ由リテコレヲ觀ルニ、スベテノ場合ニ於テ、傳染トハ外來ノ生物殊ニ么微生體ガ體内ニ侵入シ、此處ニ増殖シテ、病的現象ヲ發現セシムルモノナリトイフヲ得ベシ。

二 不可視性寄生體及ビ濾過性寄生體

微生物學ノ隆盛ヲ極ムル今日ニアリテモ、尙、傳染病ノ原因體ノ不明ナルモノ少ナカラズ。臨牀的諸症狀及ビ病理解剖的變化等ニ據リテ寄生體性疾病、即、傳染病ナルコトハ確實ナルモノニ於テモ、原因體ノ全ク不明ナルモノアリ。タトヘバ天然痘・猩紅熱・麻疹等ハ他ノ原因體既知ノ傳染病ト比較シテ考察スルニ、特殊ノ原因體ヲ有スルコトハ疑ナシ。然レドモ、今日マデ、屢、原因體ト稱セラルルモノノ發見セラレシニ拘ハラズ、確實ナルモノナキガ故ニ、尙、原因體不明ノ疾病ニ屬セリ。微毒ハ最近マデ、ソノ原因體不明ナリシガ、スピロベータ、バルリダ發見セラレ、ソノ純粹培養、又、動物試驗モ陽性成績ヲ呈シ、微毒ノ原因體ナルコト疑無キニ至レリ。

上述ノゴトク、原因體不明ナルモ、必、一定ノ病原寄生體無カルベカラザルガ故ニ、コノ原因體ヲ不可視寄生體或ハ不可視病原ト稱ス。蓋、今日、吾人ノ研究方法ニヨリテハ、コレヲ發見スルコト能ハザラモツテ、コレヲ不可視ト稱ス。然レドモ、嘗テ「不可視」ナリシ結核菌・スピロベータ、バルリダガ遂ニ「可視」トナリシガゴトク、今日不可視ノ者モ、他日終ニ可視寄生體トナルニ至ルハ、吾人ノ信ツテ疑ハザルトコロナリ。

寄生體ノ不可視ナル理由ハ種種アルベシト雖、ソノ大サノ小ナルコト及ビ染色等ニヨリ可視性ニ變ズルコトヲ得ザルコトガ、ソノ主要ナルモノナルベシ。

今日用ヒラルトコロノ普通ノ顯微鏡ニテハ、被檢物體ノ直徑ガ 0.2μ (1μ ハ即、千分ノ一密迷)以下ナルトキハコレヲ見ルコトヲ得ズ。尙、微小ナル物體ヲ視ントセバ、限外顯微鏡ヲ以テセザルベカラズ。タトヘバ、通常ノ顯微鏡ニテ見ルヲ得ザルルビン硝子中ノ金分子(ソノ大サ 0.3 乃至 0.4μ)モ限外顯微鏡ヲ用フレバコレヲ檢出スルコトヲ得。ソノ他ノ方法ハ、紫外線ヲ用ヒタル顯微鏡寫真ナリ、コレニ頼リテ普通ノ顯微鏡ニテ見ルコトヲ得ザル微小ノ物體ヲモ觀察シ得。但、此ノ如キ方法ニ依ルモ、尙、一定ノ可視限界アルガ故ニ、物體ノ大サガ一定限以下ナルトキハ、現今ニ於テハ、如何ナル方法ニ依ルモ、直接的ニモ、又、間接的ニモ、コレヲ見ルコトヲ得ザルナリ。

又、タトヒ、原因體ノ大サガ、可視限界内ニアルモ、染色又、ソノ他ノ方法ニヨリ、コレヲ可視性ニ變ズルコト能ハザルトキハコレヲ視ルコトヲ得ザルナリ。斯ノ如キモノハ、細菌學上ニ於テソノ例ニ乏シカラズ。不可視寄生體ハ陶器製濾過器通過ノ何如ニヨリコレヲ濾過性ト非濾過性ト二分ツコトヲ得ベシ。而シテ通常ノ最小ナル細菌ヲ通過セシメザルモノヲバ、濾過器ノ標準トナス。

現今確知セラレタル病原菌中、インフルエンザ菌 $(0.5\mu \times 0.2\mu)$ マルタ熱菌 $(0.4\mu \times 0.3\mu)$ 等ハ、ソノ最小ナル者ニ屬ス。コレ等ハ不可視寄生體ニ近キモノニシテ、コレヨリ小ナル么微生體ハ略、不可視性ニ屬スベキモノナリ。所謂濾過性寄生體ハ、必シモ不可視ナルニアラズ。タトヘバスピリルム、バルウム^①ハ顯微鏡ニテ見ルコトヲ得ルモノ、即、可視性ナリ、然レドモ能ク他ノ細菌ヲ通過セシメザル濾過器ヲ通過ス。又、寄生體ノ形細長ニシテ濾過性ナルモ、ソノ幅徑ガ可視限界ナル 0.2μ ニ近キモノハ、特殊ノ染色法(シフレル氏鞭毛染色法・鍍銀法・ハイデンハイン氏染色法)ヲ

- (1) Peripneumonie der Rinder
(2) Maul und Klanenseuche

用ヒテ可視性ニ變ゼシムルヲ得ルコトアリ。

濾過性寄生體ニシテ、ソノ大サ可視限界ニ近キモノハ最強ノ廓大ニテ、微細ノ圓形點狀ノ物體トナリテ見ユルコトアリ
(牛肺周圍炎⁽¹⁾、鶏ベスト等ノ原因體)。故ニ、コレ等ノモノハ可視ト不可視トノ中間ニ位スルモノナリトイフモ不可アルコトナシ。

濾過性寄生體ニシテ、現今確實ニ知ラレタルモノ、凡、十八種アリ。コノ種ノ病原體中、最初ニ研究セラレシハ口蹄病⁽²⁾
(一八九八年)ニシテ、爾後、諸傳染病ニ就キテ研究セラレ、陽性ノ成績ヲ得タルモノ亦、少ナカラズ。ソノ中、人類ニ來タルモノハ黃熱、狂犬病、デング熱、ババチ熱、天然痘、脊髄灰白質炎(ハイチ・メヂン氏病)等ノ原因體、コレナリ。

濾過性ノ如何ハ、必シモ病原體ノ大サノミニ依ラズ、尙、他ノ複雑ナル關係ニ基ツクモノアリ。ソハ、先、濾過器ノ種類ニ關ス。タトヘバ、狂犬病ノ原因體ハ、ライペル氏・北里氏・ジャンペラン氏F號濾過器ヲ通過セザルモ、ベルケスルド氏V號濾過器ヲ易ク通過ス。又、ババチ熱病原體ハ、ライペル氏・ベルケスルド氏濾過器ヲ通過スレドモ、ブカル氏濾過器ヲ通過セズ。次ギニ必要ナルハ、原因體含有液ノ濃度ナリ。タトヘバ牛肺周圍炎寄生體ニアリテハンソノ含毒液中多量ノ血清、即、蛋白質三%以上ヲ含有スルトキハ濾過セラレズ。但、非常ニ稀薄トナスモ、ジャンペラン氏F號及ビベルケスルド氏濾過器ノミヲ通過ス。ソノ他、濾過性ニ關係アルハ、壓力ニシテ、濾過ニ際シテ陰壓ヲ用フルカ、又ハ陽壓ニ依ルカニヨリテ差異アリ。サレバ、同一病毒ニテモ濾過方法如何ニヨリ結果ニ大差ヲ來タスコトアリ。又、濾過方法ハ同一ナルモ、病原體ガソノ發育時期等ニヨリテ、ソノ大サヲ異ニシ、タメニ相異ノ結果ヲ生ズルコト亦、コレアルベシ。タトヘバマテリア、プラスモチウムノ發育中ニ孢子ヲ生ジ、又、脾脫疽菌ニ芽胞アルガゴトク、濾過性寄生體ニモ、ソノ發育中特ニ小ナル變態アルトキハ、通常ノ個體ハ濾過セラレザルモ、ソノ小ナル變態ハ濾過性ナルコトアルベシ(狂犬病毒ハカカ

ル種類ノモノナリトノ説アリ)。

蓋、濾過性ニ對シテ最後ノ斷定ヲ下スモノハ、ソノ濾過液ガ傳染性ヲ有スルヤ否ヤナリ。故ニ、今假ニ、原因體ガ濾過液中ニアリトスルモ、若、生活要約不適當ニシテ(タトヘバ他ノ細胞、又、細菌等ト共棲スルニアラザレバ生育増殖スル能ハザル等)傳染性性能ヲ發揮スルコト能ハザレバ、終ニ亦「非濾過性」ト看做サルルニ至ルベシ。

上述ノゴトク、濾過性ハ比較的ノコトニシテ、通過シ得ベキ同一ノ大サアルモ、必シモ同一ノ濾過器ヲ通過シ得ルニアラズ、又、同一ノ原因體ニテモ、濾過方法何如ニヨリ結果ニ大差ヲ來タスコトアルガ故ニ、所謂濾過性寄生體ノ判定ニ就キテハ、緻密周到ノ考慮ヲ要ス。

濾過性寄生體ガ破傷風毒素ノゴトキ、可溶性化學的物質ニアラズシテ、特殊ノ么微生體ナルコトハ次ノ理由ニヨリテ明ナリ。レフレル氏⁽¹⁾ニ據レバ、口蹄病ニ罹レル動物ノ水泡淋巴液ヲ濾過シタルモノハ強度ノ傳染性ヲ有ス。今コレヲ牛ニ注射シ、ソノ牛ニ發生シタル水泡淋巴液ヲ採リテ復コレヲ豚ニ注射スルニ、ソノ豚ニ生ジタル水泡ノ内容ハ最初ノモノト同様ナル傳染力ヲ有セリ。コノ時、初、牛ニ注射シタル濾過液ガ牛及ビ豚體中ニ入りテ稀釋セラルルノ程度ヲ計算スルニ、ソノ稀釋度ハ原液ノ $\frac{1}{2} \times 10^6$ ナリ。コレ、吾人ノ想像スルコト能ハザルホドノ太シキ稀釋ナリ。然ルニ、尙、原液ト同様ノ傳染力ヲ有スルコトヨリ推セバ、コノ際、疾病ノ發生ハ可溶性化學的物質ニ因ルニアラズシテ、畢竟、體內ニ於テ増殖シタル么微生體ノ作用ニ歸スルモノトセザルベカラズ。

斯ノ如ク、么微寄生體ノ存在ハ確實ナルニ拘ハラズ、現今ニ於ケル最、有力ノ方法ヲ用ヒテ、尙、陽性ノ成績ヲ得ルコト能ハザルモノアリテ、コノ寄生體自個ニ關シテノ吾人ノ知識ハ尙、乏少ナリト雖、ソノ侵入門等ニ關シテハ稍、明ナルモノアリ。

(1) Löffler

- (1) Stegomia calopus s. fasciata
- (2) Culex fatigans
- (3) Pferdesterbe
- (4) Phlebotomus pappataci
- (5) Trombidium sp.
- (6) Geflügelpocken

濾過性寄生體中マリアノゴトク、昆蟲ノ螫刺ニヨリテノミ傳染スルモノアリ。即、黃熱ハステゴミア、カロープス⁽¹⁾、デング熱⁽⁴⁾、クレーツクス、ファチガンス⁽²⁾、馬死病⁽³⁾、ハステゴミア及ビアノフェリスナル蚊ニヨリ、ババチ熱ハフレボトームス、ババチ⁽⁴⁾ト名ツクル昆蟲ニヨリテ傳搬セラル。ゴノ中、黃熱ト蚊トノ關係ハ最、良ク研究セラレ、ステゴミア、カロープス以外ノ蚊ハ傳染ノ媒介ヲナサズ。又、蚊體内ニ於テ一定時(十二日)滞在スルニアラザレバ、傳染性ヲ有セザルコト明トナレリ。故ニ、マリア、プラスモチウムノアノフェリス蚊ニ於ケルゴトク、蚊體内ニ於テ、一定ノ發育ヲ遂ケルモノナリ。又、ババチ熱寄生體ニ於テモ、同様ノ關係アリ。原因體ノ未、全ク明ナラザルトコロノ恙蟲病病原、所謂、赤蟲(恙蟲)⁽⁶⁾ノ幼蟲ニヨリ傳搬セラル。

昆蟲螫刺ニ依ルノ外ニ、又、皮膚損傷部ヨリテ原因體ノ侵入スルモノアリ、狂犬病、鳥類天然痘⁽⁵⁾ノゴトキ、コレナリ。ソノ他、主トシテ呼吸器ヨリ入ルモノアリ、天然痘、牛肺周圍炎ノゴトシ。豚ベスト、鶏ベストニテハ原因體消化管ヨリ侵入ス。更ニ、又、口蹄病、天然痘、牛肺周圍炎ノゴトク、種種ノ侵入門ヲ有スルモノアリ。又、コレニ異ナリテハイチ・メヂン氏病(脊髓灰白質炎)ニアリテハ、動物試験ニヨリテ、身體ノ諸部(腦、脊髓、體腔、血管、神經、皮下組織)ヨリ侵入シ得ルコト明トナリタレドモ、人類ノ自然傳染ニ於テハソノ侵入ノ門戸ハ未、確定セラレズ。

コレ等、病原體ノ身體内ニ於ケル傳播分佈ノ狀態ニ關シテハ、不明ノ點尙、少ナカラザレドモ、或ハ血液及ビソノ他ノ體液中ニ瀰漫スルモノアリ、或ハ血液又ハ組織液中ニハ只、暫時、存在スルノミノモノアリ。或ハ、一定ノ臟器内ニ局在スルモノアリ、ハイチ・メヂン氏病ノ原因體ガ神經中樞、殊ニソノ灰白質ニ局在スルガゴトシ。コレ蓋、臟器又ハ組織ガ各、特殊ノ素因ヲ有スルニ因ル。

實際上、重大ノ意義ヲ有スル身體ノ變化ハ、殆、スベテノ濾過性寄生體ニ因セル傳染病ニ於テ見ルトコロノ強度ナル免

(1) F. Cohn

疫性獲得ナリ。但、コレ等ノモノニアリテハ毒素及ビ抗毒素ノ形成ナシ。

上述ノ濾過性寄生體ハ、ソノ形態全、不明ニシテ、ソノ他ノ生物學的性狀モ亦、不明ノコト多キガ故ニ、コレニ屬スルトコロノ各種原因體ガ果シテ動物ノ孰レニ屬スルカラ確定スルコトハ、殆、不可能ナリ。然レドモ、ソノ諸性狀ヲ綜合シテ考フレバ、原蟲ニ近キ性質ヲ有スルモノ多シトイフベシ。タトヘバ黃熱及ビババチ熱病原體ハ、昆蟲體内ニ於テ一定ノ發育ヲナスヲモツテ、原蟲ニ屬セシムルヲ至當トス。又、グリツェリンニ對シテ強度ノ抵抗力ヲ有スルコト、一定ノ藥物(サボニン、膽汁、牛膽酸曹達)ニ對シテ抵抗弱キコトハ、濾過性原因體及ビ原蟲ニ共通ナル性質ニシテ細菌ニ缺如セルトコロナリ。

三 細菌

細菌ハ病原寄生體中、最、重要ニシテ、最、良ク研究セラレタルモノナリ。細菌學ノ知識ノ尙、幼稚ナリシ頃ニハ、細菌ノ形態ハ必シモ一定セズ、又、コレニ因リテ發生スルトコロノ疾病ハ必シモ特殊ナルモノニアラズト考ヘラレタリ。コノ時ニ當リコノ⁽¹⁾氏(一八七五年)ハ細菌形態ノ不變ナルコトヲ唱ヘ、ソノ形態ニヨリ、コレヲ分類セリ、爾後ノ諸學者ハコノ分類法ニ憑據スルニ至レリ。

I 球菌

(葡萄狀化膿球菌、連鎖狀化膿球菌等)

雙球菌(重複球菌)

(肺炎雙球菌、淋病球菌等)

II 桿狀菌(桿菌)

(腸管扶斯菌・實布埜里菌・脾脫疽菌等)

III 螺旋狀菌(螺旋菌)

「ヒアリオ」(弧菌)

(虎列刺菌)

スピロヘーテハ原蟲ト看做スベキ點多クレドモ、便宜上細菌編中ニコレヲ論ズ。

1 生物學的態度

細菌ノ増殖力ハソノ旺盛ナルコト、生物界ニ於テ他ニ比テ見ザルトコロナリ。ソノ増殖法ハ、人ノ知レルガゴトク、菌體横ニ兩分シテ同一様ナル兩個ノ新個體ヲ生ズルニアリ(窒扶斯菌ニアリテハ三七度アリン液中ニ於テ分裂ヨリ分裂マテニ要スル時間ハ二九分ナリ(ミユルレル氏⁽¹⁾)。少數ノモノニアリテハ、單ニ兩個ニ分裂セズシテ、互ニ直角ヲナスニ軸ニ沿ヒ四個ニ分裂シ(四聯球菌⁽²⁾)或ハ三軸ニ沿ヒ分裂スルモノアリ(サルチチナ)コノ細菌増殖ノ程度ハソノ有害作用、即、疾病ノ發生ニ重大ノ關係ヲ有ス。蓋、他ノ要約同様ナラバ増殖力ノ強キモノハ即、有害ノ作用大ナレバナリ。

病原性桿狀菌中、少數ノモノハ能ク芽胞ヲ形成ス。脾脫疽菌・破傷風菌・惡性水腫菌・鳴疽菌等、コレナリ。芽胞ハ細菌體ノ原形質ガ稠密トナリテ形成セラルルモノニシテ、菌體ガ早晚崩壞スルヤ、スナハチ、游離セラレ、更ニ適當ノ要約ノ下ニ在リテ幼若細菌ヲ發芽セシメ、新増殖ノ源トナル。芽胞ノ最重要ナル性質ハ抵抗力ノ強大ニシテ寒熱・乾燥・藥品等ニヨリ侵害セラルルコト少ナキニアリ。從ツテ芽胞形

成菌ハ無芽胞菌ニ比シテ危險ノ度、甚大ナルコトハ論ヲ俟タズ。芽胞形成ハ菌體ニ榮養分缺乏ヲ告グルトキニ起ルモノトス。故ニ、細菌ガ培養基ニ發育セル際、ソノ榮養狀態良好ナラバ芽胞形成無ク、榮養不十分トナルニ至テ始メテコレガ形成ヲ見ル。脾脫疽菌ガ人畜體内ニ於テ芽胞ヲ形成セザルハ蓋、コレト同一ノ理由ニヨルナルベシ。

(1) M. Müller
(2) Micrococcus tetragenus

細菌發育ハ溫度ニ對シテ重大ノ關係ヲ有ス。溫血動物寄生細菌ニ於テハ通常攝氏三七度内外ヲ最好溫度トス。ペスト菌ハ例外ニシテ、ソノ最好溫度ハ二五度乃至三〇度ナリ、若、三五度ヲ越ユル時ハ發育不良トナル。又、鳥結核菌ハ高溫ナル鳥ニ適應セルヲ以テ、最高溫度モ高クシテ三七度乃至四三度ナリ。多數ノ細菌ニ於テハ四二度ヲ發育ノ上限界トナス。固ヨリ例外アルコトハ勿論ニシテ、鶏結核菌ニ於テハコレヨリモ高ク、コノ菌ハ四五度マテ發育ニ適ス。淋病菌ニハ、コレニ反シテ四〇度乃至四一度ヲ上限界トナス。故ニ、淋病患者ガ偶然高熱ヲ呈スル合併症ニ罹リタル場合ニハ淋病ノ自ラ治療スルコトアリ。

細菌ノ種類ニヨリテハ四五度乃至五〇度ニ於テ速ニ死滅スルモノアリ。淋病菌・ペスト菌・虎列刺菌ノゴトシ。尙、抵抗強キモノト雖、多クハ五五度乃至六五度ニテ死滅ス。故ニ、コノ溫度ヲ利用シテ殺菌法ヲ施スコト、屢、コレアリ。細菌發育ニ對スル溫度ノ下限界ハ、種種ニシテ、ソノ範圍頗、大ナリ。特ニ寄生的生活ニ適シテ、身體外ノ人工培養ヲナスニ困難ナルトコロノ細菌ハ概、低溫ニ堪ヘ難シ。タトヘバ、哺乳動物結核ハ二九度、鶏結核ハ三五度、淋病菌及ヒ腦脊髄膜炎ハ三〇度以下ニテ發育シ難シ。コレニ反シテ、人畜體以外ニ於テモ、亦、能ク生存スルヲ得ルノ種類ニアリテハ、低溫ニ堪フルノ力遙ニ大ナリ。加之、低溫ニ於テ、ソノ生活期ヲ延長スルコト多シ。コレ細菌ヲ冰室ニ貯フル所以ナリ。通常、虎列刺菌ハ一六度、實布埜里菌ハ二〇度、窒扶斯菌ハ九度以下ニテ、ソノ發育停止ス。但、發育停止スルモ必ズモ死滅スルニテラス。窒扶斯菌ハ冰室ニ二乃至五度ニ於テ徐徐ニ増殖スルコトアリ、又、コノ菌ノ含有液ヲ二三回反復氷結セシムルモ尙、生活力ヲ保持ス。ペスト菌ハ低溫ニ對シテ、比較的強度ノ抵抗力ヲ有シ、〇五乃至五度ニ於テモ尙、著明ノ發育ヲ遂グ。

芽胞ハ通常ノ細菌體ニ比シテ溫熱ニ對スルノ抵抗力、著シク大ナリ。脾脫疽菌ハ芽胞形成前ニアリテハ他ノ無芽胞細菌ト異ナルトコロナキモ、芽胞一タビ形成セラルレバ、ソノ抵抗力極メテ強大トナリ、容易ニ死滅スルコトナク、病原菌中ニテ最強ノモノトナル。脾脫疽菌芽胞ノ溫熱ニ對スル抵抗力ハ、必シモ一定セザレドモ、一〇〇度ノ流通蒸氣内ニアリテハ平均五分間ニテ始テ死シ、零下二三〇度ニ於テハ數時間後ニ死滅ス。破傷風菌芽胞モ高溫ニ對シテ略、同様ノ抵抗力ヲ有ス。

光線及ビソノ他ノ諸種輻射線ノ細菌ニ及ボス影響モ重要ニシテ看過スベカラサルモノナリ。日光ハ殺菌的作用ヲ有スルガ故ニ、コレヲ簡單ニシテ有效ナル消毒法ニ利用スルコトハ人ノ能ク知ルトコロナリ。通常ノ光線及ビ波長ノ尙、短キ不可視紫外線ガ細菌ノ發育ヲ停止シ、又、コレヲ死滅セシムルコトハ確實ナレドモ、何レノ種類ノ輻射線、即、如何ナル波長ヲ有スルモノガ細菌ニ有害ノ作用ヲナスカハ、未、全ク明ナラズ。又、果シテ光線自個ガ直接ニ細菌ニ作用スルカ、或ハ先、培養基等ニ作用シテソノ變化ヲ起シ、細菌ニ有害ナル物質ノ生成ヲ促ガサシメ、コレニヨリテ間接ニ殺菌性作用ヲ營ムカハ未、確定セラレズ。

湿度ハ生物ノ生存ニ對シテ必要ナルモノナリ。故ニ、湿度ノ減少ハ細菌ノ生死毒力ノ強弱等ニ影響ヲ及ボシ、從テ傳染病ノ消長ニ關スルコト大ナリ。乾燥ニ對スル細菌ノ抵抗力ハソノ種類ニヨリ大差アリ、淋病菌・インフルエンザ菌ハ乾燥ニ對スル抵抗力極メテ弱ク、乾燥セバ直ニ死滅ス。コレニ反シテ、窒扶斯菌・結核菌ハ抵抗力極メテ強シ、故ニ、喀痰中ニアルトコロノ結核菌ハ乾燥セル狀態ニ於テ數箇月間、能クソノ生命ヲ保持ス、從テ吸入又ハ觸接ニヨリテ感染スルノ危険少シトセズ。芽胞ノ乾燥ニ對スル抵抗力ノ強大ナルコトハ人ノ能ク知ルトコロナリ。

細菌ノ酸素ニ對スル態度ニヨリ、コレヲ偏性好氣菌・通性好氣菌及ビ偏性嫌氣菌トニ分ツコトヲ得ベシ。

偏性好氣菌ハ高等動物植物ノゴトク、酸素供給不全ナルトキハ増殖又ハ生活スルコト能ハズ、病原菌中、肺炎菌・インフルエンザ菌・ペスト菌・淋病菌等コレニ屬ス。細菌ノ種類ニヨリ、各コレニ應ジテ酸素張力ノ上下限界及ビ最好價ニ差異アリ。若、酸素張力ガ最好價ヲ越ユルトキハ、細菌發育ノ減殺又ハ停止ヲ來タス。多量ノ酸素ヲ要スルトコロノ虎列刺菌・脾脫疽菌ニアリテハ一・五乃至二・〇氣壓ノ酸素張力増加セバ死滅ス。コレニ反シテ多數ノ偏性好氣菌ニアリハ酸素張力ノ減少ニ堪ヘ、ソノ張力尋常ノ百分ノ一ニ至ルモ尙能ク發育ス。

通性好氣菌ハ偏性好氣菌ト偏性嫌氣菌トノ間ニ位シ、酸素ノ有無ニ關セズ、發育スルコトヲ得ルモノシテ、大多數ノ細菌ハコレニ屬ス。窒扶斯菌・脾脫疽菌・虎列刺菌・結核菌・化膿球菌等、コレナリ。但、ソノ中ノ一定ノ種類ニ於テハ殆、偏性好氣菌ニ近キモノアリ。ダト

ヘバ虎列刺菌・脾脫疽菌ハ酸素ノ供給十分ナルトキハ發育良好ナレドモ、コレニ反シテ、全ク酸素ヲ缺ケバ、ソノ發育極メテ惡シ。

偏性嫌氣菌ハ生物界ニ於テ他ニソノ比ヲ見サルモノニシテ、遊離酸素ノ無キトコロニ於テノ發育ス。病原菌中コレニ屬スルモノハ破傷風菌・惡性水腫菌・鳴疽菌・スピロヘーテ、バルジダナリ。最近多數ノ精細ナル研究ニヨリ、遊離酸素ノ痕跡タモ含有セザル培養基ニアリテモ尙、能ク發育スルコト確實トナレリ。偏性嫌氣菌ハ多量ノ酸素ニ接觸スレバ則、生活現象停止シテ死滅ス。シカモ營ニ通常ノ菌體ノミ然ルニアラズ、芽胞モ亦、同様ノ性質ヲ有セリ。

偏性嫌氣菌中、酸素ノ極少量ノ存在スル場合ニ於テ、營ニソノ發育ニ障礙ヲ來タサザルノミナラズ、コレ却テ良好ナルモノアリ。斯ノ如キハ、嚴密ノ意義ニ於テ偏性嫌氣菌トイフコトヲ得ザルナリ。

細菌ノ酸素ニ對スル態度ハ、傳染ニ際シテ重大ノ意義ヲ有セリ。蓋、前述ノゴトク、大多數ノ細菌ハ通性好氣菌ニ屬シ、酸素ノ有無ニ關セズシテ能ク増殖シ得ルモノナルヲ以テ、外界ニ於テ酸素ノ多量ニ存在スルトコロニテモ、能クソノ生命ヲ保持シ、又、人畜體內ニ在リテ酸素皆無ノ處ニ於テモ亦、死滅セズシテ増殖シ、有害作用ヲ發揮スルコトヲ得ルナリ。偏性嫌氣菌ハコレニ反シ、酸素ヲ嫌惡スルヲモツテ、コレニ因ルトコロノ傳染ノ機會ハ少ナシ、コレ酸素ニ觸接セル狀態ニテラサレバ菌ノ生命ヲ保持シ、又ハ増殖スルコト能ハザルニ因ル。破傷風ノ病竈ニハ通常、破傷風菌ノ外、他ノ細菌モ混在シ、又、コレヲ動物試驗ニ徵スレバ純粹培養ヨリモ不純ノモノヲ用ヒタル時ニ、却テ陽性ノ成績ヲ得ルコト多シ。コレ一種ノ細菌共棲ニシテ、混在セル好氣菌ガ酸素ヲ吸收消費シテ、破傷風菌ノ生活要約ヲ良好ナラシムルニ因ルナリ。然レドモ、ゴノ際、他ノ么微生物ノ共棲無キモ蛋白質又、壞死組織ノゴトキモノニヨリテ遊離酸素トノ接觸不可能ノ狀態ニアラバ、亦、コレト同様ノ結果ヲ來タシ細菌増殖ノ機會ヲ生ズ。

病原菌ノ人工培養ハ細菌研究上必要缺ケベカラザルコト、論ヲ俟タズ。從ツテ多數ノ細菌培養法アリテ發見セラレタリ。然レドモ、尙培養シ難キ病原菌ノ種類ハ極メテ少數ナカラコトアリ。濾過性寄生體ハ牛肺周圍炎病原體ノ外、コレヲ人工的ニ培養スルコト能ハズ。スピロヘーテノ人工培養ハ最近時ニ至リ始メテ成功シ、微毒病原體ナルスピロヘーテ、バルジダ及類似ノモノノ純粹培養ヲナスコトヲ得ルニ至レ

リ。病原菌ノ種類ニヨリテ特殊ノ培養物質ヲ要スルコトアリ。タトヘバ、インフルエンザ菌ニ血液ヲ要シ、結核菌ニグリツエリンヲ要スルカトシ。又、特別ノ場合ニテハ動物體ヲ利用スルコトアリ。即、コロヂウム小囊内ニ細菌含有液ヲ容レ、コレヲ感受動物體内腹腔、皮下組織ニ置キ、動物體液ノ交流ニヨリテ物質代謝物(毒素)ヲ研究スルコトアリ。濾過性寄生體ナル牛肺周圍炎病原體ハコロヂウム小囊法ニヨルモ培養スルコトヲ得ルナリ。

傳染ヲ惹起スル病原菌ノ出處。嘗テ、細菌ハ到ル處ニ存在シ、隨處傳染ノ機會アルモノトセラレタリ。然ルニ、研究ノ益、進ムニ從ヒ、コノ到ルトコロニ存在ストイヘル説ハ漸次、ソノ根據ヲ失ヒ、罹病人畜體ガ常ニ新傳染ノ根源ヲナスコトヲ知ルニ至レリ。結核菌・破傷風菌ノゴトキ殆、外界到ルトコロニ發見セラレルモノト雖、傳染ハ人畜體ト密接ノ關係アルヲ知ルベシ。即、コレ等ノ病原菌ハ初メヨリ外界ニ生存シタルニアラズシテ、人畜ノ病竈ヨリシテ外界ニ出テ散布傳播セラレタルモノナリ。

外界ニ於ケル細菌ノ分佈ハ頗、廣汎ナルモノアリ、又、比較的局限セラレタルモノアリ。化膿球菌ノゴトキハ身體表面、ソノ他、外界諸所ニ存在スルモ、又、淋病菌ノゴトク、主トシテ淋病性炎症竈ニノミ存在シ、分佈範圍ノ甚、狭小ナルモノアリ。

少數ノモノニアリテハ通常ハ無生物内ニ存在シ、唯、特別ノ機會ニ際シテ人畜ニ傳染スルモノアリ。破傷風菌・惡性水腫菌ノゴトキ、コレナリ。又、印度ニ於テ瀦水等ニ生存スル虎列刺菌モ、コノ種ニ屬スルモノナリ。ソノ他ノ大多數ノモノハ偏性寄生菌ニシテ、外界ニ於テハ増殖スルコト少ナク、只死滅セズシテ、ソノ生命ヲ保持スルノミ。故ニ、コノ種ノ么微生物ニアリテハ、諸害物ニ對シテ多少ノ抵抗力ナカルベカラズ。

細菌ガ人畜以外ノ外界ニ生存スルノ状態ハ、實ニ千差萬別ニシテ、或ハ井水・汚水・飲食物ニ混ヅテ存シ、或ハ衣服・

器具等ニ附着シ、又ハ分泌物・排泄物等ニ入り、依リテモツテ人畜ノ身體組織ニ達ス。而シテ、コノ處ニ於ケル要約良好ナルトキハ、乃、増殖シテ有害作用ヲ逞ウス。

ソノ他細菌ガ外界ヲ經ズシテ、直接ニ或ハ殆、直接ニ患者ヨリ他ノ人畜ニ到達侵入シ、コノ處ニ増殖シテ病的現象ヲ發現セシムル場合モ亦、固ヨリ少ナカラズ。(觸接傳染)。

上述ノゴトキ種種ノ方法ニヨリテ人畜ノ體組織ニ到達スル外、殊ニ注目ニ値スルモノハ昆蟲ガ傳染媒介者トナル場合ナリ。コレ傳染及ビソノ豫防上ニ甚、重要ナル意義ヲ有スルモノトス。

蠅ハ飲食物又ハ汚物ニ接觸スルコト多キガ故ニ、ソノ蟲體ノ表面、殊ニ口・脚ニ病原菌ヲ附着シ、コレヲ他ニ傳播シ、或ハ細菌ガ蠅ノ消化管ヲ經、ソノ糞便ニ混ヅテ新傳染ノ源トナルコトアリ。コノ如キ、傳播法ハ室扶斯・パラチーフス・虎列刺・ペスト等ニ於テ證明セラレタリ。

螫刺昆蟲ガ罹病人畜ノ體表ニ留マリテ吸血スル際、同時ニ病原體ヲ攝取シ、後、他ノ人畜ニツキテ吸血ヲナスニアタリ、コレニ感染セシムルコトアリ。原蟲ニアリテハ昆蟲ガ中間宿主トナリ、ソノ體内ニテ特殊ノ發達ヲ遂グルモノ少ナカラザレドモ、細菌ハ單ニ昆蟲體内ニ於テ器械的ニ存在シ、爾後ノ吸血ニ際シテ、ソノ儘、人畜體内ニ侵入スルナリ。コノ種細菌中、最、必要ニシテ且、最善ク研究セラレシハペスト菌ナリ。印度・オーストラリア及ビ本邦ニ於ケル動物試驗及ビ疫病學的研究ニヨリ、人蚤及ビ鼠蚤ノ螫刺ニヨリテ、ペストガ鼠ヨリ人畜ニ、又、人ヨリ人ニ傳染スルコトハ確實トナレリ。

病原菌侵入ノ門戶ニ種種アリ、ソノ主要ナルモノハ次ノゴトシ。
皮膚ハソノ組織健全ナラバ、概シテ細菌ノ侵入ヲ防禦ス。破傷風菌ノゴトキハ通常皮膚ヨリ侵入スト雖、皮膚ニ損傷無キトキハ全く無害性ナリ。但、例外ナキニアラズ。化膿球菌ノゴトキ、コレナリ。化膿球菌ガ健全ナル皮膚ノ毛根或ハ汗腺

ヨリ侵入シテ膿瘍(癰瘡)ヲ生ズルコトモ亦、稀ナラス。

皮膚ニ損傷アレバ、ココニ身體ノ防禦性能ニ缺陷ヲ來タシ諸種病原菌ハコレヨリ侵入シ、ソノ有害作用ヲ逞ウス。コレ吾人ガ屢、遭遇スルトコロナリ。ダトヘバ皮膚ノ微細ナル損傷部ヨリ化膿菌進入シテ淋巴管炎・敗血症ヲ起シ、又、ペスト菌ノ侵入ニヨリテ腺ペストヲ起スガゴトシ。モルモツトノ腹部ノ毛ヲ剃リ、肉眼的ニハ全く損傷ヲ認メザル部分ニペスト菌ヲ塗擦スルニ、致死ノ傳染ヲ來タス。コレニ由リテ之ヲ觀ルニ、ペスト菌ハ比較的健全ナル皮膚ヨリモ侵入スルコトヲ得ルモノナリ。ソノ他、脾脫疽菌・結核菌・破傷風菌等、皮膚損傷部ヨリ侵入スルコトヲ得ルモノモ亦、少ナカラズ。

次ニ侵入門トシテ重要ナルハ消化管ナリ。

口腔ニ於テハ、屢、齶菌ヨリシテ化膿菌入り齒齦・顎骨等ノ炎症ヲ起スコトアリ。

コノ部分ニ於テ、特ニ重要ナルハ咽頭殊ニ扁桃腺ニシテ、屢、諸病原菌ノ侵スコトナリ、化膿性扁桃腺炎・實布埜里・連鎖狀菌實布埜里等ノ原發地トナル。結核菌モ、亦、コノ處ヨリ侵入スルコト少ナカラズ。(扁桃腺ヨリ頸部淋巴系ヲ傳ハリ肋膜穹隆部ニ至リ、肺組織ニ達シ肺尖結核ヲ起ストノ説ヲナスモノアリ。然レドモコノ傳播經路ハ未、全く明ナラズ。

食道及ビ胃ガ侵入門戸トナルコトハ比較的少ナシ。コレ食道ハソノ粘膜ガ多層扁平上皮細胞ニヨリ被ハルルト、又、飲食物ガ速ニ嚥下セラルルコトニヨリ、傳染ノ機會少ナキガタメナリ。又、胃ハ胃液ヲ分泌スルヲモツテ、多數ノ細菌ハソノ壁ヲ侵害スル能ハズ、コノ處ニテ死滅スルカ、或ハ然ラズシテ食物ト共ニ腸管ニ至ル。胃液ガ胃腔内ノ細菌ニ及ボス影響ハ胃内容ノ數量及ビ性質ニヨリテ固ヨリ差異アリ。

腸管ハ屢、諸病原體ノ侵入門トナルコトアリ。室扶斯・バラチーフス・虎列刺・赤痢・結核等ハソノ主要ナルモノニシテ、著

明ナル特殊ノ解剖的變化ヲ此處ニ生ズルコト多シ。病原菌ガ健全ナル腸粘膜ヲ通過シ得ルヤ否ヤハ、實地上ニモ極メテ重要ノ問題ナルガ故ニ、多數ノ研究、遂行セラレ、ソノ通過ノ可能ナルコト、證明セラレタリ。就中、結核菌ハ能ク健全ナル腸粘膜ヲ通過シ、一定時後、門脈ヲ經テ大靜脈ニ入り、又ハ乳糜管ヨリ淋巴管ヲ經テ胸管ニ入ル。故ニ腸ニ變化ヲ留メズシテ先、他器官又ハ組織ニ結核ヲ生ズルコトアリ。カルメツト氏⁽¹⁾等ニヨレバ、肺結核ハ結核菌ガ主トシテ腸粘膜ヨリ侵入シ淋巴管・胸管・心臟ヲ經テ肺動脈ニ至リ、コノ處ニ増殖シ、終ニ病竈ヲ生ズルニ因ルモノナリト主張セリ。然レドモ、コハ決シテ普通ナル肺結核傳染徑路ニアラザルコトハ、爾後ノ多數ノ研究、既ニコレヲ明カニセリ。又、デツフェルト氏⁽²⁾ニ據レバ腸管ヨリスル食餌傳染法ニヨリテ結核ヲ生ゼシメ得ベキ結核菌量ノ二百萬分ノ一ヲモツテ、高度ノ吸入性肺結核ヲ起サシムルコトヲ得ベシ。故ニ、腸管侵入ノ結核菌ニ因リテ肺結核ガ發生スルコトハ、寧、例外ニ屬ス。

結核菌ト同ジク虎列刺菌・室扶斯菌モ亦、健全ナル腸粘膜ニ侵入シ、ココニ増殖シテ、腸壁及ビソノ他ノ部位ニ病的變化ヲ惹起セシム。コレニ反シテ、大腸菌・連鎖狀球菌・葡萄狀球菌・破傷風菌等ハ健全ナル腸粘膜ヨリハ侵入スルコト能ハズ。

腸粘膜ハ皮膚及ビ食管以外ノ粘膜ニ比スレバ、ソノ傷害ガ(創傷・炎症性變等)病原菌侵入ノ門戸トナルコト少ナシ。但、腸結核アル場合ニ、結核菌ガ腸壁ヲ通過シテ更ニ他處ニ結核竈ヲ形成スルコトハ、屢、見ルトコロナレドモ、コハ腸壁結核竈中ノ結核菌ガ傳播シテ轉移病竈ヲ生ジタルナリ、特ニ損傷アル部分ヨリシテ新ニ侵入シタルニハアラズ。又、腸潰瘍及ビソノ他ノ損傷ハ臨牀上、竝ニ剖檢上屢、見ルトコロナレドモ、特ニ侵入門トナルコトハ比較的、稀ナリ。ナイセル氏⁽³⁾ニ據レバ、諸種ノ病原菌ヲ含有セル食餌ニ硝子ノ微細ナル破片ヲ混ジ、コレヲ動物ニ食セシメ、腸粘膜ニ創傷ヲ生ゼシムルモ、病原菌ノ侵入ノ特ニ多キヲ加ヘタルヲ見ズ。又、クロトン油及ビソノ他ノ藥物ヲ用ヒテ試驗スルモ亦、同様ノ結果ヲ

得タリ。サレバ、前述ノゴトク、一方ニ於テハ病原菌ガ能ク健全ナル腸粘膜ヨリ侵入シ、又、他方ニ於テハ損傷アルモ、特ニ侵入ヲ激增スルコトナキヲ見レバ、腸粘膜ノ損傷ハ侵入門トシテノ意義、比較的少キモノトナサザルベカラズ。呼吸器モ亦、重要ナル侵入門ナリ。上部ナル鼻腔及、ビソノ副腔モ往々、病原菌ノ侵入地トナル。癩病菌ハ鼻粘膜ニ於テ屢、多數ニ存在シ、同病感染ノ門戸ト看做サルレドモ未、確證アラズ。喉頭及ビ氣管ハ前述ノ咽頭ト共ニ、屢、實布埵里菌ノ侵入門トナルコトアリ。

肺ガ病原菌侵入門トシテ最、重要ナルモノノ一ニ屬スルコトハ能ク人ノ知ルコトコニシテ、ココハ肺炎菌インフルエンザ菌、化膿球菌、結核菌等ノ好シテ侵ストコロナリ。就中、肺結核ハ人類疾病中、害毒劇甚ナルヲモツテ、ソノ病理豫防治療法等ニ就キテ擧ゲラレタル精細ナル研究、實ニ頗、多シ。結核菌ガ扁桃腺、腸管ヨリ侵入シテ肺結核ヲ惹起スルコトアレドモ、ソハ寧、例外ト稱スベク、主ナル傳染徑路ガ呼吸道ニシテコレヲ經テ肺ニ達スルコト、確實トナレリ。結核菌ガ塵埃又ハ微細ナル水滴ニ附著シテ空中ニ浮遊シ、又、口腔粘膜ニ附著シ、吸氣ニ際シテ、肺ニ入り、氣管枝又ハ肺胞ニ達シ感染ヲ惹起セシム。但、細菌ハ吸入ニヨリ吸氣ニ乘ジテ肺胞ニ達シ得レドモ、途中氣管及ビ氣管枝粘膜ニ附著スルモノモ、亦、多數ヲ占ム。故ニ嘗テ信ゼラレシガゴトク、易ク一舉ニ肺胞ニ進達スルモノニハアラズ。

腸粘膜ニ於ケルガゴトク、健全ナル呼吸器粘膜モ亦、諸病原菌殊ニ結核菌侵入ノ門戸トナル。

泌尿生殖器屢、病原菌ノ侵入門タリ。淋病菌ハ主トシテ尿道粘膜ヨリ侵入シ、屢、生殖器ニ傳播シ、時トシテ又、血行ニヨリテ遠隔部位ニ轉移性病竈ヲ形成ス(關節炎、心臟瓣膜内膜炎)。ソノ他、外陰部ガ微毒及ビ軟性下疳ノ原發地トナルコトハ、日常吾人ノ目撃スルコトコナリ。

眼結膜ハ健全ナル状態ニ於テモ、屢、諸菌ノ侵ストコロナル。淋病菌(初生兒膿漏)、葡萄狀球菌、連鎖狀球菌肺炎

菌等ハ亦、往往、コノ處ヨリ侵入ス。角膜ニ於テモ同様ノ傳染アリ。時トシテ結膜ヨリペストノ感染ヲ致スコトアリ。コハ、人ニ於テモ、又、動物試験ニ於テモ證明セラレタリ。但、コノ際眞ノ侵入門戸ハ結膜ニアラズ、病原體ガ淚管ヲ經、鼻咽頭腔ニ至リ始メテ、ソノ粘膜ヨリ侵入スルモノナリ。

最後ニ擧グベキ侵入門ハ胎盤ナリ。蓋、胎盤傳染ハ諸先天性傳染病ノ主ナル傳染方法ニシテ、母體內ノ病原體ガ胎盤ヲ經テ胎兒ノ循環系中ニ入り、ソノ體內ニ病的現象ヲ起スモノナリ。脾脫疽菌、肺炎菌、化膿球菌ハ只、稀ニコノ種ノ傳染ヲナシ、母體ヨリ胎兒ニ移行ス。コノ胎盤傳染ヲナスモノノ中ニテ、最、屢、遭遇スルモノハ所謂先天性微毒ニシテ、ソノ臨牀上症狀及ビ解剖的變化ハ生後感染ノモノニ比シ、或ハ同一様或ハ著シク差異ヲ呈セリ。胎盤傳染ニ於テモ、病原菌ハ粘膜ニ於ケルガゴトク、亦、能ク健全ナル胎盤ヲ通過シ得ルヤノ議論ニ就キテハ、今日、尙、確定ヲ見ルニ至ラス。

baumgarten氏⁽¹⁾ニ據レバ、先天性傳染ニ因レル結核菌ハ必シモ直ニ病的變化ヲ起スモノナラズ。生後一定時ノ間ハ結核菌ノ病原的性能發現セズシテ潜伏シ、後、好機會ニ遭遇スルヤ、ココニ始メテ急ニ増殖シ、結核性變化ヲ呈スルニ至ル。小兒及ビ若年者ニ來タルトコロノ結核ハ主トシテコノ種ニ屬スルモノナリト云フ。但、コノ說ハ根據薄弱ニシテ未、學界ノ承認スルコトコトナラズ。

以上述べタルガゴトク、侵入門戸ニ種種アリ。而シテ侵入地ニ主要ナル局在性變化ヲ起スモノアリ、又、多少遠隔セル組織ニソノ病變竈ヲ發スルモノアリ。而シテ侵入部ニ變化ヲ遺サザルコト亦、屢、コレアリ。タトヘバ氣管枝淋巴腺結核ハ肺若クハ他ノ組織ニ結核ヲ存セザル場合ニテモ、屢、見ルコトコナリ。コレ主トシテ氣管枝又ハ肺胞ヨリ侵入セル細菌ガ侵入地ニ變化ヲ遺サズシテ通過シ、淋巴道ヲ經テ淋巴腺ニ達シ、コノ處ニ病竈ヲ形成シタルモノナリ。又、腸間膜淋巴腺結核ア

リテ、他ニ結核病竈ヲ見ザルコトアリ。コレ亦、結核菌ガ腸壁ニ變化ヲ起サズシテ、コレヲ通過シ次デ淋巴腺ニ達シ、コノ處ニテ始メテ増殖シタルニ因ル。

以上、吾人ハ細菌ノ人畜體外ニ於ケル態度及ビ侵入門戸ニ就キテ約説シタリ。依テ更ニソノ體組織中ニ入ラントスルニハ何如ナル要約ノ必要ナルカラ略述セントス。

細菌學勃興ノ初期ニアリテハ、專ラ病原體ニ重キヲ置キ、病原體アラバ即、疾病ハ發生スト考ヘラレタリ。然レドモ、爾後研究ノ漸次ニ進ムニ從ヒ、既ニ前章ニモ述ベタルガゴトク、身體組織ノ諸性質、諸狀態ガ、亦、重大ノ關係ヲ有スルコトヲ知ルニ至レリ。ダトヘバ、恐ルベキ破傷風菌・ペスト菌モ健全ナル皮膚ニ附著スルノミニテハ全く無害ナリ。又、毒力ヲ有スル肺炎菌ガ口腔粘膜炎ニ存在シテシカモ何等ノ疾病起ラザルコト稀ナラス。ソノ他ノ菌保有者(帶菌者)ハ有毒ナル病原菌、ダトヘバ、窒扶斯菌ヲ保有スルモ全く健康ナリ。コレ傳染病ノ原因ハ雷ニ所謂「病原體」ヲミニアザラザラ證スルモノナリ。病原體ガソノ病的作用ヲ逞ウスルニハ、己、先、身體組織ニ達シ、ソノ抵抗ヲ打破シ、而シテ後ニ増殖シテ、有害作用ヲ發現セシムルナリ。コノコトニ關シテ主要ナル要件ニアリ、一ニ曰、侵入門、二ニ曰、細菌ノ數量及ビ毒力、三ニ曰、身體ノ素因(又ハ免疫性)、コレナリ。

侵入門ハ病原菌ニ依リテ必シモ一定セズ、孰レノ徑路ニヨルモ能ク傳染ヲ惹起スルモノアレドモ、一定ノ病原菌ハ特殊ノ侵入門ヲ必要トセリ。結核菌、脾脫疽菌ノゴトキハ皮膚、諸粘膜炎レヨリモ侵入スルコトヲ得レドモ、窒扶斯菌、虎列刺菌、赤痢菌等ハ腸粘膜炎、肺炎菌ハ主トシテ肺及ビ他ノ粘膜炎レヨリモ侵入シテ始メテ病的現象ヲ發生セシム。而シテ、コレ等ノモノガ他ノ門戸ニ在ルトキハ非病原菌ト同様ナリ。

一定ノ細菌ガ、何故ニ特殊ノ侵入門戸ヲ要スルカハ、今日、未、全ク解決セラレズト雖、該當組織ノ化學的状態ガソノ

細菌ノ増殖ニ適當スルガタメナルベシ。ダトヘバ志賀赤痢菌毒素ヲ家兔血管内ニ注射スレバ腸、殊ニ盲腸ニ人體赤痢ニ於ケルト同様ノ變化ヲ生ズ。又、窒扶斯菌毒素ヲ血管内ニ注射スルモ、亦、腸ニ窒扶斯様ノ變化ヲ惹起セシムトイフ。コレ菌體成分ガ血行ニヨリ腸粘膜炎作用シ、一定ノ解剖的變化ヲ生ズルガ故ニ、腸粘膜炎細胞及ビ組織液ハ該毒ニ對シテ特殊ノ化學的親和力ヲ有スルモノト看做サザルベカラズ。故ニ、腸窒扶斯菌・赤痢菌等ガ腸粘膜炎ノミヨリ侵入スルハ特殊ノ化學的關係ニ因ルモノナラザルベカラズ。

病原菌ノ數量及ビ毒力ハ固ヨリ亦、傳染ニ大ナル關係ヲ有セリ。病原體ガ組織ニ入ルヤ、體組織成分ニ對シテ生存競争ヲナサザルベカラズ。而シテコレニ打勝ツニハソノ組織ニ於ケル防禦裝置タル細胞ノ貪喰作用、體液ノ有害作用等ニ對シテ若干ノ犠牲ヲ拂ハザルベカラズ。病原菌ニシテ若、コレ等ノ障礙ヲ打破スルコト能ハズバ則、死滅スルカ、若クハ無害ニ止マラザルベカラズ。

細菌ノ組織ニ對スル抵抗力ハ略、一定セルモノナルヲモツテ、同一菌ニシテ同一ノ毒力ヲ有スルモノハ同種同大ノ動物ニ對シ、略、一定ノ最小罹病量、又ハ最小致死量ヲ算出シ得ベシ。コレ恰、毒藥ガ最小致死量ヲ有スルガゴトシ。故ニコノ量以上ヲ用ヒズバ疾病發生セズ、或ハ死ヲ來タサズ。但、同一菌ト雖毒力ニ非常ノ差アルコトアリ。虎列刺菌ノゴトキハソノ適例ニシテ、長ク人工培養ヲナシタルモノハ殆、無害ナリ。

傳染要約中、甚、必要ナルハ「素因」(或ハ免疫性)ニシテ、コレ前章ニ特ニ述ベタルトコナリ(素因・免疫條下參照)。蓋、前述ノゴトク、菌保有者ハ體内ニ毒力ノ強キ病原菌ヲ有スルニ拘ハラズ、疾病ヲ發生セズ、又、一度天然痘又ハ種痘ヲ經タルモノハ再、天然痘ニ罹ルコト少ナシ。コレ「免疫性」アルガタメニ毒力ノ強キ病原體モノノ有害作用ヲ發揮スルニ由ナキヲ以テナリ。コレニ反シテ、「素因」強キモノハ傳染病ニ罹リ易シ。人・モルモット等ガ結核ニ罹リ易ク、又人ニヨリテ特ニ結

核ニ感染シ易キモノアルガゴトシ。
細菌性以外ノ傳染病ニアリテモ、傳染要約ハ同一ナリ。
既ニ傳染ノ要約具備シタルトキ、病原體ハ何ガ故ニ組織ヲ侵襲シ得、非病原體ハ何故ニ然ラザルカ、コレ、頗、重要ナル問題ナリ。

病原體ハ、一種特殊ノ物質ヲ分泌シ、ソノ作用ニヨリ被傳染者ノ抵抗性能ヲ減殺シ、ソノ障礙物ヲ排除シ、而シテ後ニ侵入増殖スルモノナリトノ説ハ諸學者ノ唱ヘシトコナリシガ、クルーゼ氏⁽¹⁾ハ、コノ物質ヲリジン⁽²⁾ト名ヅク、體液中ニアルアレキシ⁽³⁾ノ作用ヲ中和スルモノナリトセリ。後ウヰン、ヅ、ヅ、ル⁽⁴⁾氏ハ、葡萄酒狀化膿球菌ニ就キテ研究シ、リジンノ外ロイコチチン⁽⁵⁾ナルモノ生成ストイヘリ。コノロイコチチンハ白血球ヲ破壊シ、外來ノ病原菌ト身體組織ノ戰鬥上ニ重要ナル白血球ノ貪喰作用ヲ妨碍スルモノナリ。然レドモコレ等ノ物質ハ病原菌ノ侵襲力ヲ左右スルニ主要ナルモノニアラズ。ソノ侵襲力ハ組織液ノ抗菌作用ニ對スル細菌ノ抵抗力何如ニ關スルモノナリ。故ニ、主要ナル要約ハ細菌體自個ニアルモノナリト。最近、コレニ類スル報告亦、少カラズ。ダトヘバ病原體(細菌、原蟲)ノ適應ニヨリ、通常ナラバコレ等ガ死滅スベキ場合ニ於テモ、依然トシテ有害作用ヲ逞ウスルモノアリ。コレ適應ニヨリ病原體ノ抵抗力増加セシナリ。又、細菌(脾脫疽菌)ノ被膜^(カプセル)ノ有無ガソノ侵襲力ニ重大ナル關係アリトノ説アリ。

近者、バイル氏⁽⁶⁾ハ、アグレツシン⁽⁷⁾ノ説ヲ公ニシテ細菌ノ侵襲作用ヲ説明セリ。アグレツシンハ細菌ノ生産物ニシテ、動物體ノ該菌ニ對スル抵抗力、即、防禦性能ヲ中和又、破壊シ、細菌ノ進入増殖ヲ易カラシム。ソノ防禦性能破壊ノ方法ハ主トシテ白血球ノ貪喰作用ヲ停止セシメ、細菌増殖ニ對スル障礙物ヲ除去スルニアリ。ザレバアグレツシンハ上述ノロイコチチンニ相當スト看做シ得ベク、アグレツシン説ハメテニコツフ氏⁽⁸⁾ノ喰細胞説ノ擴張セラレシモノトイフコトヲ得ベ

- (1) Kruse
- (2) Lysin
- (3) Van de Velde
- (4) Leucocidine

- (5) Metschnikoff
- (6) Bail
- (7) Aggressintheorie

(1) Bail

シ。バイル氏⁽¹⁾ニヨレバアグレツシンハ從來知ラザリシ一新物質ニシテ、コレニ依リテ能ク傳染ヲ説明スルコトヲ得ト。然レドモ、爾後、他ノ研究者ノ説ニ據レバ、動物體外ニテ試験管内ニ於テモ亦、アグレツシント同一作用ヲ有スル物質ヲ生成セシムルコトヲ得、而シテ、コノ物質ハ從來知ラザル所謂内毒素ニ外ナラズトイヘリ。ソノ説ノ當否何如ニ拘ハラズ、傳染性、即、發病性ハ病原體ト宿主、即、被傳染者トノ間ノ相互ノ作用ニ歸スベキモノナルコトハ明ナリ。

病原體既ニ組織内ニ侵入シタルモ、直ニ疾病或ハ病的現象ヲ發生スルモノナラズ。コレハ通例一定ノ時期ヲ經テ始メテ現ハル。コノ病原體侵入ヨリ病的現象發現迄ノ時期ヲ潜伏期ト名ヅク。

潜伏期ハ諸種傳染病ニヨリテ各、略、一定ナレドモ、疾病ノ異ナルニヨリテ亦、差異アリ。虎列刺ノゴトク、潜伏期ノ數時間乃至數日ナルアリ、腸室扶斯ノゴトク、一週乃至三週間ナルアリ、或ハ癩病ノゴトク、數ヶ月乃至數年ナルアリ。實布

瑤里毒素、破傷風毒素ノゴトキ無菌毒液ヲ注射スルモ同様ナリ。毒素ニシテ潜伏期ノ非常ニ短キモノアリ、ダトヘバ虎列刺菌ニ類セルエル、トール弧菌⁽²⁾ノ毒素ヲ家兔靜脈内ニ注射シタル場合ニハ潜伏期僅ニ數分間ナリ。

斯ノ如ク、各種ノ傳染病ニヨリテ潜伏期ニ長短ノ差アルハ各病原體ノ性状ノ差異ニ因レリ。同一傳染病ニアリテハ略、一定シ居レドモ、尙、多少ノ差異アルヲ免レズ。コノ差異ヲ來タスノ理由ハ動物試験ニヨリ略、明白トナレリ。即、コノ差異ハ

主トシテ罹病者ノ個體的素因、病原體ノ毒力及ビ數、又、ソノ侵入門ノ何如ニ依レリ。病原體ノ毒力強ク、ソノ數多ク

レバ潜伏期從テ短シ。侵入門ノ何如ニ依ルノ例ハ狂犬病病原體ハ神經中樞ニ作用シ、因テ發病スルモノナルガ故ニ、コ

ノ處ニ近キ頭部ヲ嚙マレ、又ハ病毒ヲソノ部分ニ注射スルトキハ、他部ヨリ侵入セシ場合ニ比シテ潜伏期ハ短カシ。破傷

風ニテモ同様ノ關係アリ。蓋、動物試験ハ人畜自然ノ傳染ニ對シテ差異ノ點アレドモ、尙、ソノ明白ナル結果ヲ人ノ傳染

病ニ適用シテ太過ナシト信、セラル。

(2) Vibrio El Tor

病原體ガ體組織ニ侵入シテ有害作用ヲ逞ウスルニハ先、菌體ノ増殖ヲ要ス。而シテコノ増殖セルモノハ或ハ永ク侵入地附近ニ局在シ、或ハ遠隔ノ地ニ分佈シ、或ハ好テ一定ノ組織ヲ選ビテココニ占居ス。或ハ又、全身ニ互リテ瀰蔓傳播スルモノアリ。

侵入地附近ニ局在スルモノノ好例ハ破傷風菌及ビ實布垚里菌ナリ。破傷風菌ハ外傷部ニ於テ増殖シ、實布垚里菌ハ咽頭・喉頭及ビソノ附近ニ局在シ、毒素ヲ分泌シ、各固有ノ疾病ヲ發生セシム。コノ種ノ細菌ハ血液及ビ局處以外ノ組織ニ於テ發見セラルルコト少ナシ。又、眞ノ毒素菌ニアラズシテ亦、侵入地附近ニ局在スルモノアリ、化膿球菌(瘡癤・結核菌(屍結核)等)亦、コノコトアルヲ見ル。コレ等ハ細菌本來ノ性質ニ因リテ然ルニアラス、主ニ細菌毒力ノ微弱身體素因ノ僅少等ニ原因セリ。故ニ、コレ等ノ菌ハ一タビ良好ノ機會ニ遭遇セバ身體諸部ニ傳播シテ増殖スルニ至ル。

大多數ノモノハ前者ト異ナレリ。卽、局處ニミチ滯留セズシテ連續的又ハ非連續的ニ、他ノ部分ニ傳播セラル。非連續的ノモノハ血液又ハ淋巴液ニ依リテ他ノ組織ニ至リ、茲ニ増殖シテ新シキ病竈ヲ形成セシム。コノ局限性ニ生ジタル病竈ヲ轉移電ト稱ス。コノ傳播法ハ吾人ガ甚、屢、遭遇スルトコロニシテソノ實例ハ枚擧ニ違アラス。今ソノ二三例ヲ舉ゲンニ、肺結核竈ヨリ多數ノ結核菌ガ血管内ニ入り、血流ヲ介シテ全身ニ散布シ、コレニ因リテ無數ノ轉移電ヲ形成シ、全身粟粒結核ヲ生ズ。又、微毒ニ於テハスピロベータ、バルリダガ原發竈ヨリ遠隔ノ地ニ進達シ、所謂第二期ニ於テハ、主トシテ皮膚發疹ヲ生ジ、第三期ニ於テハ護膜腫等ヲ形成ス。又、腸室扶斯ニアリテハ、病原菌ガ腸壁ノ病竈ヨリ血管ニ入り、血行ヲ介シテ諸處、特ニ腸間膜淋巴腺、脾臟、骨髓ニ至リテ増殖シ、皮膚ニ於テハ發疹ヲ生ゼシム。ソノ他、化膿球菌ニ因リテ諸臟器ニ化膿竈ヲ作り、淋毒性尿道炎ニ續發シテ心臟内膜炎・關節炎ヲ發スルガゴトキモ、亦、コレナリ。傳播方法ノ特異ニシテ病原體ノ全身ニ瀰漫スルニ至ルモノヲ敗血症トス。概、細菌ハ血液内ニテ増殖シ難キモノナレド

(1) Bakteriämie

モ、コノ場合ニアリテハ亦、能ク血液内ニ於ケル茂生増殖ヲ示シ、全身到ル所ニ無數ノ細菌ヲ認メシム。コレ轉移性ト相異ナルトコロナリ。蓋、單純ナル轉移性ノモノニアリテハ、血液ハ只、病原體運搬ノ器械的作用ヲ營ムノミニシテ、血液ガ細菌増殖ニ適スル培養基トナルニアラス。コレニ反シテ、上述ノゴトキ、特異ナル傳播増殖法ヲ營ムモノ、卽、敗血症ハ連鎖狀球菌ニ由來スルコト最、多ク、葡萄狀球菌・脾脫疽菌・ペスト菌等コレニ次グ。所謂膿毒症ハ敗血症ノ一種ニシテ、諸處ニ膿瘍ヲ形成スルモノヲイフナリ。

敗血症ナル語ハ嘗、重性ノ全身症狀ヲ呈スル傳染病ニ適用セラレシガ、今日ハ上述ノゴトキ意義ヲ有スルニ至レリ。而シテ敗血症ナル語ハ、現代ニ於テ適當ナラザルガ故ニ、菌血症(1)ナル語ヲ以テコレニ代ヘントセシ人アレドモ、未、汎ク採用セラルトコロトナラス。

斯ノ如ク、病原體ガ身體組織内ニ増殖シ、細胞、體液等ノ身體防禦作用ニ反抗シ、コレト相戰ヒ、一定時(潛伏期)ヲ經バ身體組織ハ、コレガ反應性變化ヲ呈シ、茲ニ始メテ病的症狀ヲ發現ス。

□ 細菌ノ病因的作用

病原體ノ作用ニヨリテ惹起セラルトコロノ身體ノ解剖的變化及ビ機能障礙ハ、其狀、千差萬別ニシテ、各疾病ニヨリ各相異ナレドモ、コレヲ局處及ビ遠達作用ノ二ニ分チテ考フルコトヲ得ベシ。然レドモ、コノ兩作用ハ必シモ、常ニ、明確ニ區別シ得ラルルモノニアラス。

局處作用トハ病原體及ビソノ生産物ノ存在地ニ身體組織ノ病的變化ヲ發生セシムル作用ヲイフ。コノ局處性變化ハ固ヨリ一樣ニアラザレドモ、主トシテ炎症性ヲ呈シ、シカモ、病原體又ハ組織ノ如何ニヨリテ、ソノ狀ニ大差アリ。同一菌ハ

通例、同一様ノ變化ヲ惹起スレドモ、又、相異ナル病變ガ、同一菌ニ因リテ發生スルコトアリ。或ハコレニ反シテ、異種ノ病原體ニシテ同一ノ病變ヲ發呈スルコトアリ。ダトヘバ連鎖狀化膿球菌ハ主トシテ通常ノ化膿性炎ヲ起セドモ、又、時トシテハコレニ因リテ丹毒・瘰癧性炎(肋膜炎)、或ハ實布垓里性炎・格魯布性炎(連鎖狀球菌實布垓里)ガ發生スルコトアリ。又、化膿ハ通例化膿球菌ニ因リテ惹起セラルルモノナレドモ、亦、他ノ諸種ノ病原體(室扶斯菌・大腸菌・脾脫疽菌・結核菌等)ニヨリテモコレヲ生ズルコト稀ナラズ。斯カル差異ヲ生ズルノ理由ハ、未、全ク明ナラザレドモ、要スルニ、病原體ノ數量及ビ毒力ノ如何、竝ニ組織ノ解剖的及ビ生物學的性狀ニ基ツク素因、及ビ病竈所在地ノ差異ニヨリテ、ソノ結果ニ異同ヲ來タスモノナルベシ。但、又、一定ノ病原體ニ於テハ、コレニ因リテ發生スル燄衝ノ狀ニモ各、特色ヲ存シ、ソノ解剖的變化ニモ各顯著ノ狀態ヲ示スモノアリ。結核・護膜腫・癩・關節等ノゴトシ。

前述ノゴトキ、局處性變化生成ノ主ナル理由ハ病原體ノ器械的作用ニアラズ、又、ソノ生活力自個ニモ據ラズシテ實ニ病原體、又、ソノ生産物ノ化學的作用ニ在リ。コノコトハ、炎症ノ典型トモ稱スベキ化膿性炎ニ於テ能ク研究セラレタルガ故ニ、先、コレニ就キテ述ベシ。

化膿性炎ノ組織的特徴ハ白血球集簇及ビコレニ續發スル組織ノ融解ナリ。即、所謂ベモタキシス作用ニヨリテ白血球ハ化膿菌所在地ニ向テ趨リ來リ、コレ集積シテ化膿電ヲ生ズ。コノ事ヲ初メテ試驗的ニ證明セシハルーベル氏⁽¹⁾ナリ、氏ハ蒸氣ニテ殺シタル黃色葡萄狀化膿球菌ヲ以テ角膜炎ヲ起サシメタルニ、生活菌ヲ以テセルモノト同様ノ變化ヲ呈セリ。而シテ、コノベモタキシスヲ營マシムル物質ヲフロコジン⁽²⁾ト名ケタリ。斯ク血管及ビ組織ヨリ遊走シ來タル白血球ハ一種ノ醱酵素ヲ遊離シテ組織ヲ融解ス。コレ化膿ノ本態ニシテ最要、且、最終ノ作用ハ常ニ化學的ナリ。

ブプテル氏⁽³⁾ニ據レバ、化膿ヲ起ス物質ハ菌體內ニアル蛋白質ニシテ、細菌プロテイン⁽⁴⁾ト稱スルモノナリ。然レドモ、コノブ

- (1) Leber
(2) Phlogosin
(3) Buchner
(4) Bakterienproteine

ロテインハ蒸氣ニテ殺シタル細菌ヨリ製造セラレシモノニシテ、諸種ノ化膿性及ビ非化膿性非病原菌及ビ病原菌ヨリ得タルモノモ皆同様ニ化膿ヲ起スガ故ニ、氏ノ所謂プロテインガ生活菌ノ化膿ヲ惹起スル物質ト同一ナリヤ否ヤハ疑ハシ。ソノ他結核菌ニ於テモ化膿菌ト同ジクソノ作用化學的ナルコト確實ニ證明セラレタリ。死菌モ生活菌ト同様ニ組織ニ結核性變化ヲ生ゼシム。但、ソノ變化ニ差異アリ。即、前者ハ死菌ナルガ故ニ、後者ノゴトク、増殖スルコト能ハズ、從テ生成ノ變化ハ一定度ヲ越エテ増進蔓延スルコト能ハズ。

要スルニ、病原體ガ局處性變化ヲ起サシムル終極ノ作用ハ主トシテ化學的ナリ。然レドモ、往往器械的作用ノコレニ隨伴スルコトアリ。ダトヘバ、細菌ガ血管内ニ増殖シテ栓塞ヲ形成シ、局處性血行障礙、殊ニ貧血性壞死ヲ來スコトアルガゴトシ。

以上、述ベタル局處性作用ノ外、病原體ノ身體ニ及ボス作用ニ遠達性ノモノアリテ、亦、重要ナル意義ヲ有セリ。蓋、兩者ノ區別ハ必シモ常ニ分明ナルニアラズト雖、實際上、斯ク區別スルヲ便利トス。

遠達作用ハ病原體ガ身體諸部ニ傳播セラレ、又、ソノ生産物(毒素)ガ吸收セラレ、循環系ニヨリテ全身ノ組織ニ進達シ、茲ニ化學的作用ヲナシ、ソノ反應トシテ病的現象ヲ發現セシムルモノヲ云ヒ、ソノ内容、複雑ヲ極ム。

コノ時、身體ニ起ル反應ノ最重要ナルモノハ體温上昇(發熱)・神經中樞及ビソノ他、諸臟器ノ機能及ビ榮養障礙(神經腺腫・痙攣・麻痺・心臟麻痺・蛋白尿等)(心臟・肝臟・腎臟ノゴトキ實質性臟器ノ變性等)・脾臟ノ腫大・血液内白血球ノ増加・抗體(溶菌素・凝集素等)ノ發生・免疫性ノ發現等ナリ。コレ等ハ多クノ傳染病ニ於テ見ルトコロナレドモ、悉、必發ノモノナリトイフベカラズ。ダトヘバ、體温上昇ハ通常コレヲ見レドモ、純粹ノ結核症ニハコレヲ缺グコト多ク、神經中樞ノ解剖的及ビ機能的變化ハコレナキ場合決シテ少ナカラズ。脾臟ノ腫大ハ室扶斯ベストニハ通常コレアレドモ、實

點、尙、甚、多シ。

嘗テ、脾脱疽ニ於テハ細菌多數ニ増殖シ、死前ニハ血管及ビ組織ヲ填充スルガ故ニ、ソノ器械的作用ニヨリ所謂内室息ヲ來タシ、病的變化ヲ生ズルモノトシテ、ソノ疾病發生ヲ説明シタリシガ、コノ説ハ根據薄弱ナルヲ以テ、終ニ世ノ非認スルトコロトナレリ。

病原體ノ毒素自個ハ證明セラザルモ、細菌ノ生産物が吸収セラレ、身體細胞ニ作用シテ疾病症狀ヲ起サシムルコトハ疑ナシ。然レドモ、ソノ詳細ノ發生理由ニ至リテハ尙、不明ノモノ甚、多シ。タトヘバベスト毒ハ未、全ク明ナラザレドモ、ソノ存在ヲ證明スルニ難カラズ。即、妊娠セルベスト患者ノ胎兒ハ無菌ナルニ拘ハラズ、ソノ内臟ニ實質性變化及ビ出血アリ、コレ毒物が母體ヨリ胎兒ニ移行シ、ソノ組織ニ作用シタル證左ナリ。又、脾脱疽菌ニ就キテハ如何ナル方法ニ依ルモ、確實ナル特殊ノ毒物發見セラレズ、嘗テ毒素ト稱セラレシモノハ皆、菌毒ト直接ノ關係ヲ有セザル分解物ニシテ、眞ノ毒素ニアラズ。然レドモ、一種不明ノ毒素アリテ、ソノ作用ヲナスコトハ、病竈ガ一部位ニ限局スルモ尙、死ヲ來スコトアルヲ見テ、コレヲ證スベシ。

(2) Endotoxine (1) Pfeiffer

ズイスル氏⁽¹⁾及ビソノ他、多數ノ學者ニ據レバ、室扶斯菌虎列刺菌等ニ於テハ、ソノ菌體內ニ毒素アリ、菌體崩壊シテ後始メテ吸收セラレ病的現象發現ス。コレ細菌増殖スルト同時ニ、ソノ一部ハ死滅ス、故ニ、コレ等ハ自家融解ニヨリ崩壊シテ吸收セラルルナリ。コノ種ノ毒素ヲ實布埤里毒素ノゴトキ分泌毒素、即、外毒素ニ對シ「内毒素」ト稱ス。

細菌ニヨリ外毒素ナリヤ、又、内毒素ナリヤ、不明ナルモノアリ、又、同一菌ニシテ兩種ノ毒素ヲ有スルモノアリ、或ハ何レニモ屬セザルガゴトクニ見ユルモノアリ。虎列刺菌毒ハ通常内毒素ト認メラルルモノナレドモ、コロチウム小囊試験ノ成績ニ據レバ、寧、外毒素ニ屬セシムベシトイフ。又、ベスト赤痢菌毒ハ通常内毒素ト信ゼラルレドモ、コレヲ外毒素ト看做ス人モ

アリ、或ハ兩種ノ毒素ヲ生ズトノ主張モアリ。ソノ他、室扶斯バラチーフス及ビ腦膜炎菌毒ヲモ外毒素ト看做スノ説アリ。

外毒素ハ菌體ヨリ分泌スルガ故ニ、菌體自個ハ無毒ニシテ、無菌ニシタル培養液ハ有毒ナリ。而シテ、外毒素ハ動物體內ニ於テ抗毒素ヲ發生セシムルノ性能アリ。コレニ反シテ、内毒素ニアリテハ菌體自個有毒ノ作用ヲ有シ、抗毒素ヲ發生セシムルノ性能ヲ缺グ。但、コレ等ノ區別ハ理論上コレヲナスコトヲ得ルモ、實際ニ於テハ往頗、困難ヲ感ゼシム。蓋、菌體崩壊セスシテ分泌セシモノナリヤ、或ハ菌體ノ融解セル物質ガ培養液中ニ溶在セルモノナリヤラ區別スルコトハ實際上、殆、不可能ナリ。又、抗毒素生成ノ有無ハ破傷風及ビ實布埤里ニ於ケルガゴトク、判定困難ナラザルモノモアレドモ、他ニ

ハ又、然ラザルモノアリ。タトヒ、コノ二者ハ常ニ相別ツヲ得ルトスルモ、實地應用上ニ於テハ獲ルトコロ、多カラザルベシ。虎列刺菌、室扶斯菌、肺炎菌等ノゴトキモノハ、人體ニ於ケルガゴトキ、定型性ノ疾病ヲ動物ニ發生セシムルコト能ハズ。ソノ病的症狀ハ多クハ普汎ノモノニシテ、他ノ細菌腐敗物等ニ因リテモ類似ノ病的症狀ヲ生ズ。故ニ、斯ノ如キ作用ヲ有スル物質ハ果シテ該當疾病ノ原因タルベキ眞ノ毒素ナリヤハ、直ニコレヲ肯定スルコト能ハズ。又、自然ニ罹病セル人畜及ビ試験的ニ傳染セシメタル動物ノ體液又ハ組織内ニ同様ノ物質ヲ發見スト雖、未、必シモノ物質ガ疾病ノ原因タルベキ毒物ナリトハ斷定スルヲ得ズ。

病原體研究ニ於テハコロチウム小囊試験法ノゴトク、動物體內培養ヲナスコトアレドモ、多クハ人工培養基ヲ用フ。而シテ、コノ人工培養法ニ依リシモノハ人畜生活體內ニ於ケルト常ニ同一要約ノ下ニ在リヤ、又ハソノ試験結果ヲ直ニ人畜自然ノ疾病ニ適用シ得ベキヤハ尙、研究ヲ要スルノ問題ナリトイフベシ。

培養基内ニ於テモ患者ノ體內ニ於ケルト同一性質ナル毒物ヲ生ズトスルモ、コレト同時ニ、又、時ヲ經ルニ從ヒ、多量ノ該

毒物ニ關係ナキ非特殊性ノ物質生成セラレ、コレ動物ニ有害作用ヲ及ボスコト少ナカラズ。又、コレ等ノ物質中、外毒素ノゴトキ性質ヲ有シ抗毒素ノ生成ヲ來タサシムルモノモアルベシ。斯ノ如キ關係ハ、ベスト菌脾脫菌・ビオチアチウス菌等ニ於テ認メラレタリ。

コレヲ要スルニ、傳染病ノ疾病發生作用ハ、孰レモ化學的ナリトイフベク、シカモ、ソノ精緻ナル理ハ、少數ノモノヲ除ク外、尙、暗黒ノ裡ニアリ。

上述ノ外、體溫上昇、即、發熱ハ、微病原體ニヨリ惹起セラルル病の症狀中、重要ノモノノ一ナリ。蓋、體溫上昇ノ病理ニ直接ノ關係アルハ、身體ノ物質代謝及ビ體溫調節ノ異常ナリ。然レドモ、茲ニハ主トシテ、唯、病原體ト發熱トノ關係ニ就キテ述フベシ。

病原體自個、或ハソノ生産物が、直接ニ發熱ノ原因的作用ヲナスヤ、又ハコレ等ガ培養基中、或ハ體組織内ニ於テ先、化學的變化ヲ受ケ、依テ新生シタル産物が物質代謝及ビ體溫調節ニ影響ヲ及ボシテ體溫上昇ヲ來タスヤハ、頗、複雑ノ問題ニシテ、多數ノ研究アルニ拘ハラズ、尙、不明ノ點少ナカラズ。

人畜體内ニ生活菌、又ハ死滅菌ヲ注入スレバ、通常多少ノ體溫上昇ヲ來タス。コレ菌體内物質又ハソノ生産物ノ化學的作用ニ因ルコトハ疑ナシ。然レドモ、又、發熱ハ血液内ニ於ケル固形體ガ異物トシテ器械の障礙ヲ與フルタメニ發生スルモノナリト主張スル人アリ。蓋、コレヲ動物試験ニ徵スルニ、杜松子・澱粉・バラフィン・乳劑等ノゴトキ、殆、化學的作用ナキ物體ヲ血管内ニ注射スルモ、亦、能ク體溫上昇ヲ來タスコトアリ。然レドモ傳染病ニ於ケル發熱ガ斯カル器械的作用ニ依リテ説明シ得ラルルヤハ、頗、疑ハシ。

病原體、或ハソノ生産物中ニ發熱物質アリヤニ關シテハ、既ニ多數ノ研究ヲ經タリ。諸病原菌及ビ非病原原因ノ培養液

ハ孰レモ同様ニ發熱作用アリ、又アルブモ一七殊ニ細菌アルブモ一七セハソノ注射ニヨリテ體溫上昇ヲ來タス。但、コレ等ノ試験ニ於ケル發熱ハ蛋白質類似ノ物質ノ作用ニ歸スベシト雖、シカモ、ソノ性普汎のニシテ特殊のナラズ。故ニ、コレヲ以テ傳染病ニ於ケル發熱ト同一視スベカラズ。蓋、傳染病中熱型ノ一定セルモノ少カラズ、腸室扶斯肺炎・マテリア・ハンノ最、顯著ナルモノナリ。肺炎ニ於テハ、何故ニ體溫、先、急ニ上昇シ、次テ稽留性トナリ、而シテ後分離性ニ下降スルカ、又多クノ化膿性炎ニ於テハ何故ニ、弛張熱ヲ來スカ等ノ理由ニ至リテハ全ク不明ニ屬ス。マテリアニ於テ、ソノ病原體フテスモチウムガ赤血球内ニ入り胞子ニ分裂スル時期ニ當リテ最高ノ體溫上昇ヲ來タスコトハ明ナリ。然レドモ、胞子形成ニ因レル赤血球破壊自個ハ發熱ノ原因トナルコト能ハズ、必ズ、他ニ不明ノ毒物アリテ、コレガ發熱ノ原因的作用ヲナサザルベカラズ。近者、赤血球破壊ニヨリ生ズル色素メラニンノ作用ガマテリア發熱ノ原因ノ一ナルベシトノ說アレドモ、コハ尙、確實ナル立證アルニアラザレバ未、完全ナル説明トイフベカラズ。

同一傳染病ニシテ、或ハ體溫上昇シ、或ハ然ラザルコトアリ。コハ主トシテ病原體ノ特性、患者ノ素因ニ因レドモ、又、病竈廣延ノ大小ニモ關スルコトアリ。ダトヘバ化膿竈小ナルトキハ無熱ナルモ、廣汎トナレバ高熱アルガゴトシ（瘡瘡ト蜂窠織炎）。又、病竈ノ位置ニヨリ差異ヲ來タスコトアリ。ダトヘバ丹毒ノ病竈ガ四肢ニ存スル場合ニハ多ク無熱ナルモ、頭・顔面ニアルモノハ高熱ヲ伴フコト多シ。ソノ他、肺結核症ノゴトク混合傳染ノ有無ニ關スルコトアリ、結核菌ノミニテモ亦、發熱スルコトアレドモ、多クハ化膿菌ノ混合傳染ニ因ルモノニシテ、コレガ爲ニ不規則ノ熱型（消耗熱）ヲ見ハス。

四 高等植物性ノ微生物體

コレニ屬スルモノハ細菌ト同ジク、植物性ノ微生物體アレドモ、ソノ原因的意義細菌程ニ重要ナラズ。コノ種ノ菌類ニ因リテ

發生セラルル疾病ハ比較的稀少ニシテ重症ヲ來タスモノ亦、少ナシ。而シテ疾病發生及ビ毒素ノ作用ニ關シテハ殆、全ク不明ナリ。

コレニ屬スル主要ナルモノハ次ノゴトシ。

- I 毛狀菌 *Trichomyceles*
- ストレプトトリックス *Streptothrix*
- クレプトトリックス *Cladothrix*
- レプトトリックス *Leptothrix*
- 放線狀菌 *Actinomyces*
- II 分芽菌 *Blastomyceles*
- サツカロニツヒス *Sarcocornices*
- Saccharomyces *hominis*
- III 絲狀菌 *Hypomyceles*
- アスペルギルルス *Aspergillus*
- ムコール *Mucor*

コレ等ハ多ク自然界ニ廣ク分佈スルモノナレドモ、人體ニ傳染ヲ惹起スル場合ハ少ナシ。コレ一ハ人體ノコレニ對スル素因ノ少キニ因ル。放線狀菌ハ穀類・草・木片等ニ附著シ、コレヨリ人畜體中ニ侵入ス。侵入門ハ種種ニシテ、放線狀菌ノゴトキハ口腔・腸・肺・皮膚ナリ。又、鷺口瘡菌ノゴトク消化管ノ上部ニ占居スルモノアリ、又、皮膚ニ寄生シテ皮膚病ノ原因ヲナスモノ、或ハ毛狀菌・絲狀菌ノゴトク肺ヨリ侵入スルモノアリ。

高等植物性ニ微寄生體ニ屬スルモノハ、概シテ、全身症狀ヲ惹起スルコト少ナシ。發生セル病變ハ多クハ局處性ニシテ化膿・壞死・又、肺ニテハ肺炎等ナリ。

毛狀菌中、必要ナルハ通常ノ放線狀菌ニシテ、人畜ニ來タル放線狀菌症ノ病原體ナリ。コレ病竈ニ於テ聚落ト稱スル固有ノ顆粒ヲ形成シ化膿性炎或ハ肉芽性炎ヲ發生セシム。人體ニ於テハ多クハ組織ヲ融解シ化膿ヲ來タス。コノ菌ハ身體中孰レノ組織ヲモ侵スコトヲ得レドモ、特ニ屢、口腔ヨリ侵入シテ、ソノ附近部位(上下顎・頸部)ニ病竈ヲ發呈ス。牛ニ於テハ上下顎ニ於テ屢、コレヲ認ム。ソノ他、放線狀菌ノ一種ニシテマツラ足病⁽¹⁾ヲ起スモノアリ。コハ主トシテ足ニ來タリ、上述ノモノト略、同様ノ組織的變化ヲ來タス。ソノ他、毛狀菌(ストレプトトリックス・レプトトリックス)ハ肺ニ結核様變化又ハ化膿炎ヲ來タシ、内臟(腦・腎臟等)ニ轉移性化膿竈ヲ生ゼシム。

絲狀菌症ニ於テモ類似ノ變化ヲ呈スルモノアリ。人體ニハアスペルギルルス比較的屢、來タリ、ムコールコレニ次グ。アスペルギルルス中、最、屢、見ルモノハアスペルギルルス、フミガイツス⁽²⁾ナリ、コノ菌ハ肺ニ於テ肺炎・肺膿瘍・肺壞疽或ハ肺結核様變化ヲ起シ、又、外聽道ノ漿液性炎又、化膿性炎・鼻粘膜ノ加答兒ヲ來タス。

分芽菌ト絲狀菌トノ兩性ヲ有シ分類上ノ位置未定ナル鷺口瘡菌⁽³⁾ハ特ニ小兒ノ口腔粘膜及ビ食道・胃粘膜ヲ侵シ主トシテ粘膜ノ上層ニ占居シ、コノ處ニ輕度ノ炎性變化ヲ呈ス。又、稀ニハ完全ナル寄生體ノ性質ヲ帶ビ、粘膜下組織ノ深部ニ入り、或ハ尙、進デ内臟ニ轉移ヲ生ゼシム。

ソノ他ノ鷺口瘡菌ト形態ノ酷似セル皮膚病病原體アリ。黃癬菌⁽⁴⁾・寄生性匍行疹菌⁽⁵⁾・癩風菌⁽⁶⁾等、コレナリ。病原性分芽菌ハ極メテ少數ニシテ、ソノ原因ノ意義重要ナルモノニアラス、今日マデニ確實ナルモノハ、只數例アリシノミ。コ

- (1) *Madurafuss (Mycetoma)*
- (2) *Aspergillus fumigatus*
- (3) *Oidium albicans*
- (4) *Achorion Schönleinii*
- (5) *Trichophyton tonsurans*
- (6) *Microsporon furfur*

レニ屬スルサツカロミツエスハ人體ニ於テ化膿様炎症ヲ起シ、動物試験ニ於テモ略、同様ノ變化ヲ呈ス。
 分芽菌ガ腫瘍、殊ニ惡性腫瘍ノ病原體トシテ報告セラレシモノ少ナカラザレドモ、果シテ眞ノ病原體ナリヤ或ハ偶然ノ寄生體ナリヤ、又、動物試験ニヨリ腫瘍様組織形成セラルルモ、果シテ眞ノ腫瘍ナリヤ、或ハ單ニ炎症性肉芽腫ナリヤ等ノ點ハ未、全ク明ナラス。恐クハ眞ノ腫瘍ト原因ノ關係ノ存スルモノナカルベシ。
 絲狀菌ニ因ル病變ハ主トシテ局處性ナリ。菌絲増殖ノ器械的及ビ化學的作用ニヨリテ諸種ノ炎症變化起リ、コレニ該當スル障礙ヲ來ス。併シアスベルギルスニ有毒ノ者アリ、伊太利ニ於テ原因不明ノ疾患ナルペテグラハ玉蜀黍ニ附著スルアスベルギルス生産物ノ中毒ニ因ルノ疾病ナリトイフ説アリ。

五 原 蟲

原蟲ハ單細胞ヨリ成レル動物性么微生體ニシテ、ソノ病原性ヲ有スルモノハ不可視寄生體・植物性么微寄生體ト共ニ、重要ナル病因ノ意義ヲ有シ、近時、寄生原蟲學ノ勃興ニ從ヒソノ眞價益、闡明セララルニ至レリ。

I 根足蟲類 Rhizopoda

大腸アメーバ Entamoeba coli

赤痢アメーバ Entamoeba histolytica et tetragena

アメーバ、ウロゲニターリス Amoeba uregenitalis

II 有毛蟲類 Mastigophora (Flagellata)

トリコモナス、バクテリアリス Trichomonas vaginalis

トリコモナス、インテスチナリーリス Trichomonas intestinalis
 ツエルコモナス、ホモニス Cercomonas hominis
 ランブリア、インテスチナリーリス Lambliia intestinalis
 トリパノゾーマ Trypanosoma
 トリパノゾーマ、ガンゴニゼ Trypanosoma gambiense (睡眠病)
 所屬不明ナレドモトリパノゾーマニ近キモノ
 レイシマンニア、ドノヴァニ Leishmania donovani (カザ、アザール病)

III 胞子蟲類 Sporozoa

筋肉胞子蟲 Sarcocystis sp.

プラズマキウム Plasmodium malariae, vivax et innocuatum (マラリア)

球蟲 Eimeria stiedae (Coccidium oviforme)

所屬不明ナレドモ胞子蟲ニ近キモノ

バベシア、ビギミナ Babesia bigemina (チキサス熱)

バベシア、パルバ Babesia parva (海岸熱)

ピロプラズマ、ハヤシ Piroplasma hayashi

IV 浸滴蟲類 Ciliata (Infusoria)

大腸バランチヂウム Balantidium s. Paramoecium coli

スピロベータ主トシテ縦裂ニヨリ増殖スルコト、純粹培養困難ニシテ、最近時始メテ成功セシコト、ソノ形態及ビ化學的物質ニ對

スル抵抗力等ニ據リ原蟲ニ屬スルモノトセラルドモ。分類上ノ位置未、全ク明ナラザルヲ以テ、便宜上細菌ト共ニ既ニコレヲ述ベ
タリ。

イ 生物學的態度

原蟲ノ純粹培養ハ細菌ニ於ケルゴトク容易ニラズ。而シテ純粹培養殊ニ困難ナルモノアリ(アメーバ類)、又、比較的容易ナルモノアリ(ト
リバノゾーマ類)。然レドモ、斯カル人工培養ニ依レルモノハ、生體內ニ増殖セシモノニ比シテ形態著シク差異アルコトアリ。
原蟲ノ生殖法ニ、有性ト無性トノ二種アリ。有性生殖ハ高等動物ニ於ケルガゴトク、精蟲ト卵細胞トノ融合ニヨリ新個體ヲ生ズ。無性
生殖ニハ更ニ種種ノ方法アリ。略、同大同形ノモノニ二分スルアリ、コノ方法ハ原蟲ニ於テ最、屢、見ルトコロノ生殖法ナリ。次ニ、大小不
同ノ二個體ニ分ルアリ(分芽)、又、母體ガ略、同大ノ多數ノ個體ニ分ルアリ、コノ内胞子ト稱スル同大ノ多數ノ個體ニ分殖スルノ方
法ハ主トシテ胞子蟲類(マテリア寄生體コレニ屬ス)ノ生殖法ナレドモ、他種ノ原蟲ニ於テモコレヲ認ムルコトヲ得。

原蟲中宿主轉換⁽¹⁾又、世代轉換⁽²⁾ヲナスモノアリ。ソノ狀定型性ニシテ且、最、能ク研究セラレシハマテリア寄生體ナリ。マ
テリア寄生體ハ蚊ノ螫刺ニヨリテ人體内ニ入り、赤血球内ニ進入シテ、ソノ内ニテ發育ヲ遂ゲ、終ニ略、一定數ノ胞子ニ
分裂シテ赤血球ヲ破壊ス。コノ胞子ノ一部分ハ復、他ノ赤血球内ニ進入シ、同一ノ行爲ヲ反復ス。他ノ一部分ハ雌雄
ノ生殖體トナリ、蚊ノ吸血ヲ待ツ。コノ雌雄生殖體ガ吸血ニ依テ蚊ノ消化管ニ入りソノ胃腔ニ於テ有性生殖ヲ營ミ、オ
オキチト⁽³⁾ト稱スル新個體ヲ生ズ。コノ新個體ハ更ニ胃腔ヨリ胃壁中ニ侵入シ、コノ處ニ於テ漸次發育シ細長ナル鎌
狀芽⁽⁴⁾ト成リ、遂ニ胃壁ヲ去リ、體腔ヲ經テ唾液腺ニ達ス。コノ時ニ當リ、コノ寄生體ヲ有スル蚊ガ吸血セバ、コノ際鎌狀
芽ハ直ニ人體内ニ入り、依テマテリアヲ發現セシム。此ノ如ク、マテリア寄生體ハ人體及ビ蚊體內ニ入ルニアラザレバ完全
ノ發達ヲ遂グルコト能ハズ。即、人體内ニ於テ無性生殖ヲナシ、蚊體內ニ於テ有性生殖ヲ營ミ、茲ニ完全ナル發育ノ一

- (1) Wirtswchsel
- (2) Generationswechsel

- (3) Ookinet
- (4) Sichelkeime

- (1) Proteosoma hoemoproteus
- (2) Boophilus

- (7) Anopheles
- (8) Culex pipiens
- (9) Trypanosoma lewisii
- (5) Tsetse
- (6) Glossina
- (3) Muscidae
- (4) Culicidae

循環ヲナス。コノ際、有性生殖ヲ營ムハ蚊體內ナルヲ以テ蚊ハ眞ノ宿主ニシテ人ハ中間宿主ナリ。

ソノ他、鳥類マテリア寄生體⁽⁵⁾モ鳥類及ビ蚊體內ニ於テ、人類マテリア寄生體ト同様ノ發育ヲナス。又、球蟲モ類似ノ
發育ヲ營ム。パベシア⁽⁶⁾即、ビロプラズマ⁽⁷⁾ハ哺乳動物ノ赤血球ニ寄生スルモノニシテ、牛ノテキサス熱海岸熱又犬パベシ
ア病ノ病原體ナリ。コレ等ノ寄生體ハホービルス⁽⁸⁾屬⁽⁹⁾及ビソノ他、數種ノ蟲類ニヨリ傳搬セラレ、ソノ體內ニ於テ一定ノ發
育ヲナス。トリバノゾーマ⁽¹⁰⁾ニ於テモ昆蟲體內ニ於テ特殊ノ發育ヲ遂グルモノアルガゴトシ。

原蟲性寄生體ノ傳搬ニ際シ昆蟲ノ媒介ヲ要スルモノアリ。細菌ニアリテハベストノ蚤ニ於ケルガゴトキ關係及ビ細菌ガ偶
然蠅等ノ口、脚等ニ附著シテ他ニ運搬セラルル場合ヲ除ケバ、通例昆蟲ハ重要ナル細菌傳搬者トイフベカラズ。コレニ反
シテ、原蟲ニ於テハマテリア病原體ノゴトク、必、一定種類ノ蚊體內ニ入ルヲ要スルモノアリ。コノ事實ハ學理上及ビ疾病
豫防上ニ重大ノ意義ヲ有ス。

昆蟲中傳搬ニ與カルモノハ種種アレドモ、最、主要ナルハ家蠅科⁽¹¹⁾及ビ蚊科⁽¹²⁾ニ屬スルモノナリ。家蠅科ハ通常ノ蠅ノ屬ス
ル科ニシテ、吸血性ヲ有スルモノ少クレドモ、ソノ中吸血性ヲ有スル少數者ニ重要ナル傳搬者アリ。動物ノナガナ病及ビ人
ノ睡眠病ノ病原體ナルトリバノゾーマ⁽¹³⁾ノ傳搬者ハツエツエ⁽¹⁴⁾即、グロツシナ⁽¹⁵⁾屬⁽¹⁶⁾ノ蠅ナリ。ソノ他ノ哺乳動物トリバノゾー
マ病ニ於テハ未、全ク明ナラザレドモ、病原體ガ蠅類ニヨリ傳搬セラルルモノハ少ナカラザルガゴトシ。

蚊科ニ屬スルモノハ主トシテマテリア寄生體ノ傳搬者ニシテ人類マテリア⁽¹⁷⁾ハアノフェリス⁽¹⁸⁾屬⁽¹⁹⁾ノ鳥類マテリアハ通常ノ蚊⁽²⁰⁾ノ
媒介ヲ要セリ。ソノ他、鼠トリバノゾーマ⁽²¹⁾ハ鼠蠅⁽²²⁾ニヨリテ傳搬セラレ。

斯ノ如ク、一定ノ傳搬者ヲ要スルコトハ確實ナレドモ、コレ等ノ寄生體ノ昆蟲内ニ於ケル態度、即、此處ニテ特殊ノ發育
ヲ遂グルヤ、將、唯、器械的ニソノ體內ヲ通過スルニ止マルヤニ就キテハ、既ニ確知セラレタルモノアリ(人類及鳥類マテリア

(1) Trypanosoma hippicum

(2) Dourine
(3) Mal du coit

寄生體・バベシア。又、未定ナルアリ(トリバノゾーマ)。最近ノ研究ニ據レバ、ナマ地方ノ動物ニ來ル一種ノトリバノゾーマ⁽¹⁾ハ、通常ノ蠅ニヨリ傳搬セラルルモ、コレアリテハ、前述ノモノト異ナリ、寄生體ハ蠅體ニ附著シテ、他ノ健康動物ノ皮膚損傷部ニ至リ、コノトコロヨリ侵入シ傳染ヲ惹起ス。即、昆蟲體內發育ニハ全ク無關係ナリ。

原蟲侵入ノ門戸モ種種ナリ。ソノ特殊ナルモノハ、昆蟲ニヨリ傳搬セラルルモノニシテ、コハ主トシテ皮膚蝨刺ニ依ル。ソノ他ハ消化管ヨリ侵入スルモノ多シ。赤痢アメーバ及ビソノ他ノ腸アメーバ・大腸バランヂウム・ランブリア等ハ、飲食物ト共ニ腸管ニ來タリ、コノ處ニ寄生ス。トリバノゾーマガ自然ノニモ、又、動物試験ノニモ、罹病動物肉ノ攝取ニ依リ腸管傳染ヲナスコトアリ。然レドモ、コノ傳染法ハ、昆蟲蝨刺ニヨルモノニ比シテ稀有ナリ、且、重要ナルモノニアラズ。家兔ニ屢、見ルトコロノ球蟲症ニ於テハ、ソノ胞子ガ飲食物ト共ニ腸管内ニ攝取セラレ、腸及ビ膽管粘膜ノ上皮細胞ニ寄生ス。又、諸哺乳動物及ビ稀ニ人類ニ來タル筋肉胞子蟲ハ、動物試験ニ據ルニ亦、消化管ヨリ侵入ス。

消化管以外ノ粘膜ヨリ侵入スルモノアリ。馬ノトリバノゾーマ病ナルツリン⁽²⁾(一ニ交接病⁽³⁾トイフ)ニアリテハ、交接ノ際病原體ガ生殖器粘膜ヨリ侵入ス。又、睡眠病ガ時トシテ、コノ方法ニヨリ傳染スルコトアリ。ソノ他、侵入門不明ノモノ亦、少ナカラズ。

□ 原蟲ノ病因的作用

原蟲ノ病因的作用モ、局處性ト全身性トニ分チテ考フルコトヲ得ベシ。

局處性作用ニ依ル病變ハ、最、屢、消化管ニ見ハル。ソノ最、顯著ナル例ハアメーバ赤痢ナリ。赤痢アメーバ、即、アメーバ、ヒストリチカガ大腸ニ寄生シ、加答兒、壞死及ビ潰瘍ヲ來タシ、赤痢ニ固有ナル症候ヲ呈ス。但、コノアメーバガ果シテ眞

ノ病原體ナリヤニ就キテハ異論アレドモ、次ノ事實ニ徴シテ眞ノ病原體ナルコトハ疑ナシ。コノアメーバハ所謂アメーバ赤痢以外ニテ發見セラレズ、本邦内地ノゴトキ、細菌性赤痢多キ處ニ於テモ、コノ種ノ赤痢ニアリテハ、病原體ト看做スベキ細菌發見セラレズ。アメーバ含有ノ新鮮ナル糞便、或ハ胞子含有ノ乾燥便ヲ動物(猫)ニ與ヘ、試験的赤痢ヲ起サシムルコトヲ得。又、アメーバ赤痢及ビ細菌性赤痢ノ腸ノ解剖的組織的變化ニ一定ノ差異ヲ認ムルヲ得ベシ。

ソノ他、エントアメーバ、テトラゲナモ赤痢病原體ト看做サル。アメーバ赤痢ノ際、屢、肝臟膿瘍又、稀ニ膿胸・腦膿瘍ヲ來スコトアリ、コレ等ノ病竈ニ於テ通常アメーバハ存在スレドモ、膿瘍ガ果シテアメーバノミノ作用ニヨリ生成セシカ、又ハアメーバニ附隨シ來タレル細菌、コレニ與ルカハ全ク確定セザレドモ、アメーバノミニテモ、亦、能ク膿瘍ヲ起シ得ルコト疑ナシ。

大腸バランヂウムニ因リ腸ニ變化ヲ呈スルコトハ、稀ナルドモ、時トシテアメーバ赤痢ニ似タル大腸炎ヲ起スコトアリ(バランヂウム赤痢)。下痢ヲ來タセル患者ノ腸内ニ、時トシテ有毛蟲(トリコモナス・ツェルコモナス・ランブリア)ヲ見ルコトアリ、コレ等ノ寄生體ハ腸疾患發生ニ對シテ亦、多少原因的關係アルモノノゴトシ。

ソノ他アメーバ又、有毛蟲ガ消食器・泌尿生殖器・腹腔及ビ膿瘍中ニ存在セシコトアレドモ、病原體トシテノ意義ハ殆、コレナシ。

球蟲症ハ人ニ來タルコト稀ナルドモ、家兔・牛ニ於テハ屢、コレヲ見ル。球蟲ハ膽管及ビ腸粘膜ノ上皮細胞ニ侵入増殖シ

テコレヲ破壊シ、又、反應性炎ヲ起サシム。而シテ、コレニ因リテ下痢ヲ來タシ、牛ニ於テハ往往、赤痢様症狀ヲ發ス。

原蟲症ニ於ケル遠達性、或ハ全身作用ハ亦、屢、見ルトコロナリ。マテリア・トリバノゾーマ病(睡眠病等)・レイシユ・マニア病(カテ、アザール病)・バベシア病(テキサス熱・海岸熱等)ハ甚シキ腦症狀ヲ呈スルコトアリ。熱帶マテリアニ於テ昏睡ニ

陥リ死センモノノ腦毛細管ハマテリア寄生體ニテ填充セラレ、又、虎列刺様、或ハ赤痢様ノ症候ヲ呈セシモノニ於テハ腸毛細血管ニ多數ノフラスモチウムヲ見タリト云フ。又、トリパノゾーマ病ニ於テモ小血管内ニ多數ノ病原體ヲ認ムルコトアリ。斯ク器械的作用ニヨリ血行障礙ヲ來タシ、諸病的現象ヲ發生セシムルコトハ固ヨリ疑ナキ事實ナレドモ、疾病發生上ヨリ論ズレバ餘リ重要ナラザルモノノゴトシ。何トナレバ、トリパノゾーマ病ニ於テ病症ノ輕重ト血管内寄生體ノ多少トハ必シモ併行セズ、又、砒素劑ニヨリテ體内ノトリパノゾーマヲ害セシメ、ソノ數、比較的僅少トナレルモノニ於テモ尙、病症ノ劇甚ナルコトアリ。故ニ、全身症狀發現ハ器械的作用ニ因ルニアラズ、寧、寄生體ノ生成ニ係カル毒物ノ作用ニ因ルトイハザルベカラズ。然レドモ、細菌ニ於ケルゴトキ毒素ハ未、發見セラレズ、從テ疾病發生ノ理ニ關シテ不明ノ點少カラズ。血液ヲマテリアノ最高熱時ニ採取シテコレヲ濾過シ、フラスモチウムヲ除去シタルモノハ間歇性熱ヲ發セシメ、又、コノ發熱物質ハ赤血球ノ破壊ニヨリ遊離セラレタル色素ナルベシトノ說アレドモ、未、確ナラズ。又、トリパノゾーマ病ニ關シテ、近者、コノ寄生體体内ニ溶血性物質存在スルコト證明セラレ、又、トリパノゾーマ病ニ於テ屢、見ルトコロノ實質性角膜炎ハトリパノゾーマノ生産物ナル化學的物質ニヨリ生、ズルコト略、明トナレリ。然レドモ、コハ唯、疾病發生ノ一小部分ヲ說明シ得ルニ過ギザルヲ以テ不明ノ領域ハ尙、甚、廣大ナリ。

六 複細胞動物

I 扁平蟲類 Plathelminthes

(I) 吸蟲類 Trematodes

肝蛭(肝臟ニ口蝕) Fasciola hepatica (Distomum hepaticum)

籠形ダストイマ Clonorchis sinensis (Distomum spatulatum)

肺ダストイ Paragonius westermanni (Distomum westermanni)

シムリアダストイ Opisthorchis felineus (Distomum sibiricum s. felineum)

肥大吸蟲 Fasciolopsis buski (Distomum crassum)

住血吸蟲 Schistosomum haematobium

日本住血吸蟲 Schistosomum japonicum

(2) 線蟲類 Cestodes

有鉤線蟲 Taenia solium

胞蟲 Cysticercus cellulosae

無鉤線蟲 Taenia saginata

テニア、エキノコックス Taenia echinococcus

包蟲 Echinococcus

裂頭線蟲 Dibothriocephalus latus (Bothriocephalus latus)

リケラ線蟲 Bothriocephalus mansoni (Ligula mansoni)

大形複殖門線蟲 Diplogonoporus grandis

分殖性幼線蟲 Pterocerooides prolifer s. sparganum proliferum

II 線蟲類 Nematodes

ストロンギロキス、インテリナ、ストロンギロイデス Strongyloides intestinalis

(1) Epizoa
(2) Entozoa

- 住血絲狀蟲 *Filaria sanguinis hominis s. bancrofti*
- メチナ蟲(フリアア、メチナハム) *Filaria medinensis*
- 鞭蟲 *Trichocephalus trichurus s. dispar*
- 旋毛蟲 *Trichinella spiralis (Trichina spiralis)*
- 十二指腸蟲 *Ancylostoma duodenale*
- 蛔蟲 *Ascaris lumbricoides*
- 蟻蟲 *Oxyuris vermicularis*
- III 節足類 *Arthropodes*
- 疥癬蟲 *Sarcoptes scabiei*
- 毛囊蟲 *Demodex folliculorum*

1 生物學的態度

身體ノ外部ニ寄生スルモノヲ外部寄生蟲⁽¹⁾トイヒ、體ノ内部ニ寄生スルモノヲ内部寄生蟲⁽²⁾ト稱ス。内部寄生蟲ノ大部分ハ消化管(腸・膽管)ニ寄生シ、一小部分ハ筋肉・肺・血管等ニ占居ス。
寄生蟲ノ發育全經過ガ同一ノ人體(又、動物體)内ノ同一臟器ニ於テ行ハルルアリ。腸管ニ寄生スル蛔蟲鞭蟲蟻蟲卵子が外界ニ出テ復、人腸内ニ入りテ發育スルガゴトキ、コレナリ。又、同一人體(或ハ動物體)内ノ異種臟器又ハ組織ニ於テ發育ノ諸時期ヲ經過スルモノアリ。旋毛蟲ガ腸ニ於テ成熟セル腸旋毛蟲トナリ、ソノ幼蟲ガ同一個體ノ筋組織ニ入り、筋旋毛蟲トナルガゴトシ。

(2) *Limneus minutus* (1) Plerocercoid

コレ等ト異ナリテ、ソノ經過發育中、他ノ動物體(中間宿主)ヲ經由スルモノアリ。コレ、即「宿主轉換」ニシテ、ソノ例ニ乏シカラズ。且、中間宿主體内、又ハ外界(水・泥土)ニ於テ、特殊ノ發育ヲナシ「世代轉換」ヲナスモノアリ。ソノ顯著ナル數例ヲ擧ゲンニ、裂頭縲蟲卵ガ人體ヲ去リ、コレヨリ出タル仔蟲ハ水中ヲ游動シテ、終ニ鱒ノゴトキ淡水魚ノ體内ニ入り、ソノ筋肉ニ占居シテ幼蟲、即、*Plerocercoid*トナル。コノ幼蟲ハ魚肉ト共ニ攝取セラレ、人腸内ニ於テ成熟セル縲蟲トナル。又、無鉤縲蟲ノ幼蟲ハ胞蟲ト稱スル囊狀物トナリテ牛ノ筋組織内ニ發育シ、牛肉ノ攝取ニヨリ人腸内ニ入ル。又、住血絲狀蟲ノ幼蟲ハ、蚊ノ吸血ニヨリソノ胃内ニ入り、體腔ヲ經テ胸筋ニ達シ、一定ノ發達ヲナシ、螫刺ニヨリ再、人體内ニ入ル。ソノ他、肝蛭ハ淡水貝⁽³⁾體内ニ於テ特殊ノ發育ヲナシ、終ニコノ中間宿主ヲ去リ胞子トナリテ食物ト共ニ寄生スベキ動物體内ニ達ス。

斯カル宿主及ビ世代轉換ハソノ全發育經過ノ闡明セラレタルモノアレドモ不明ノモノ亦、少カラズ。本邦ニ多キ籠形ギス⁽⁴⁾トマニ就キテハ、近來マデ、ソノ中間宿主全ク不明ナリシガ、近者、人體侵入前ニハ淡水魚ニ寄生スルコト發見セラレタリ。但、肺ギス⁽⁵⁾トマ及ビソノ他ノ多クノ吸蟲類ニアリテハ中間宿主及ビ世代轉換ノ有無不明ナリ。

通常宿主轉換ヲナスモノガ、時トシテ同一個體ニ於テ全發育ヲナスコトアリ(自家傳染)。タトヘバ、有鉤縲蟲ノ幼蟲(胞蟲)ハ通常中間宿主ナル豚ニ寄生スレドモ、時トシテハ人腸内成熟蟲卵子ヨリ出ツル仔蟲ガ同一人ノ組織内ニ侵入シテ胞蟲トナルコトアリ。

斯ク發育狀態ニ差異アルガ故ニ、侵入門及ビ侵入ノ方法或ハ體内傳播ノ狀況モ亦、コレニ相當シテ種種ナリ。内部寄生蟲ノ卵子又ハ仔蟲ハ多クハ食物ト共ニ消化管ニ入り、腸管内ニ發育シテコノ處ニ留マリ又ハ腸壁ヲ貫通シテ他ノ體部ニ至ル。

(1) Cercaria

仔蟲ノ發育狀況ニモ種種ノ差別アリ。テニア繸蟲(有鉤繸蟲)ノゴトク、仔蟲ガ母體內ニ於テ十分發育シ卵殻ヲ被リテ母體ヲ去ルモノアリ、或ハ旋毛蟲・絲狀蟲ノゴトク母體內ニ於テ十分發育スルノミナラズ、幼蟲ノ狀態ニテ産出セラルルモノアリ。又、十二指腸蟲・蛔蟲・蟯蟲卵ノゴトク、一部分腸内ニ於テ一部分外界(糞便・水・泥土内)ニ於テ發育シ仔蟲トナルモノアリ。故ニ、人體内侵入時ノ形態ハ卵子ナルアリ、或ハ幼蟲ナルアリ。蛔蟲・鞭蟲・蟯蟲等ニ於テハ發育未、十分ナラザル幼蟲ガ卵殻ヲ被リテ消化管ニ入り來タリ、卵殻除去セラレ漸次發育シテ終ニ成熟蟲トナル。十二指腸蟲ストロンギ・ロイデスニテハコレト異ナリ、外界ニ於テ仔蟲トナリ多少發育シタルモノガ人體内ニ入り成熟スルナリ。宿主及ビ世代轉換ヲナスモノニテハ特殊ノ幼蟲ガ食物ト共ニ腸管ニ入り來タリテコノ處ニ留リテ發育シ成熟スルアリ、無鉤繸蟲ノ胞蟲(牛肉ト共ニ)・裂頭繸蟲ノプロツェルコイド(淡水魚肉ト共ニ)ガ腸管ニ入り來リテ、成熟蟲トナルガゴトキコレナリ。又腸管ニ留ラズシテ膽管或ハ臍管ニ侵入スルアリ。タトヘバ、肝蛭ノ幼蟲ナルツェルカリア⁽¹⁾ハ囊胞ヲ被リ胞子トナリ、胃ニ入りテソノ囊膜消化セラレ、幼蟲遊離シ、コレ膽管ニ入りテ發育成熟ス。ソノ他、窠形ヂストマモ同様ニシテ淡水魚ニ寄生スル幼蟲ガ消化管ニ入り終ニ膽管ニ侵入ス。消化管ニ入ルモノノ處ニ留ラズシテ腸壁ヲ貫通シ他ノ組織ニ至ルモノアリ。

(2) Onchosphaera

有鉤繸蟲ハ人ニ於テハ通常成蟲(繸蟲)ノ寄生スレドモ亦、屢、幼蟲ナル『胞蟲』ノ寄生スルコトアリ。有鉤繸蟲(成蟲)ノ卵子ハ食物ニ混ジ又、ソノ他ノ方法ニヨリ人ノ消化管ニ入り(屢、自家傳染ノコトアリ)卵殻消化セラレテ仔蟲即、オンコスフェラ⁽²⁾遊離シ、コレ腸壁ヲ穿通シ血管ニ入り靜脈ヨリ心臟、肺血管ヲ經テ大循環ニ入り、諸組織殊ニ腦及ビ腦膜ニ至リ、居ラコノ處ニ占メテ發育シ囊胞狀態ヲ成ス、コレ即、胞蟲ナリ。仔蟲ノ大サハ凡、〇・〇二二乃至〇・〇二八密迷ナルヲ以テソノ發育時期ノ早キモノハ肝臟及ビ肺臟ノ細血管ヲ通過シ得ルナリ。人體ノ諸組織又、臟器殆、皆侵

(1) Cyclops

サレ得レドモ、殊ニ腦及ビ腦膜ニ多キハコノ神經中樞ガ幼蟲ニ對シテ特殊ノ(恐クハ化學的性質ニ基ク)素因ヲ有スルニ因ル。包蟲モ同様ノ傳染法ニ依レリ。成熟蟲ナルテニア、エビノコツクスハ犬ノ腸管ニ寄生ス。而シテソノ卵子ガ中間宿主ナル人ノ腸管内ニ入り腸壁ヲ貫通シ、諸組織ニ至リ囊胞ヲ形成ス、諸組織中特ニ屢、侵サルハ肝臟ナリ。コレ肝臟ガ特殊ノ化學的性質ニ基ク素因ヲ有スルニ因ルカ、若クハ器械的作用ニ歸セシムベキナリ。蓋、仔蟲ノ發育迅速ナルタメ門脈枝ヲ經テ肝臟ニ至ルモ、肝臟毛細血管ヲ通過シ難キホドノ大サノモノ多ク、主トシテコノ處ニ抑留セラレテ病竈ヲ形成ストモ考ヘラルレドモ、ソノ關係未、全ク明ナラズ。

旋毛蟲ハ人體ノ外、豚及ビソノ他ノ哺乳動物ニ寄生シ、豚肉攝取ニヨリテ人ニ傳染ス。攝取セラレタル筋肉内ノ筋旋毛蟲ハ胃ニ至リソノ被膜消化セラレ幼蟲遊離シ、小腸ニ至リ發育シテ成蟲トナリ交尾ス。受胎シタル雌蟲ハ粘膜ヲ穿通シ淋巴系ニ入り腸間膜ニ至リ淋巴管内ニ於テ仔蟲ヲ産出ス。コノ仔蟲ハ淋巴管・胸管ヲ經テ血管系ニ入り全身ニ傳播シ、筋組織ノ毛細管ニ至リ、ソノ管壁及ビ筋鞘ヲ破リ筋纖維内ニ入り、此處ニ留リ永クソノ生ヲ保チ(人ニ於テ長キハ二五乃至二一年ノ久シキ)或ハ死滅ス。旋毛蟲ハ横紋筋(殊ニ横隔膜筋・呼吸筋)ニ寄生シ他種ノ組織ニコレヲ見ザルヲ以テ、筋纖維ハコノ寄生蟲侵襲ニ對シテ特殊ノ素因ヲ有スルモノトイフベシ。

メヂナ蟲ノ幼蟲ハ節足類ナルチクロッパス⁽¹⁾ニ寄生ス。該幼蟲ガチクロッパスト共ニ偶然人體内ニ入り來ラバ、此處ニ留ラズシテ腸壁ヲ穿通シテ諸處殊ニ足部ノ皮下組織ニ至リテ發育成熟ス。

消化管ヨリ入ラズシテ皮膚ヨリ侵入スルモノアリ。住血絲狀蟲ノ幼蟲ハ蚊ニ寄生シ、ソノ體內ニ於テ一定ノ發育ヲナシ、蚊ノ整刺ニヨリ人體ニ傳染ス。斯ノ如キ傳染法ハ複細胞寄生動物ニ於テハ他ニソノ比ヲ見ザルトコロナリ。

(2) *Ancylostoma caninum* (1) Looss
(3) *Necator americanus*

傳染方法ニ關シテ近年特ニ學者ノ注意ヲ惹キシモノハ十二指腸蟲及ビ日本住血吸蟲ノ皮膚傳染ナリ。

十二指腸蟲ニ於テ經口の傳染ノ外、又、健康ナル皮膚ヨリモ侵入スルコトヲ始メテ證明セシハロース氏⁽¹⁾ニシテ、寄生蟲學上注目スベキ發見ナリ。十二指腸蟲ニ於テハ經口的及ビ皮膚侵入ノ孰レガ主ナル傳染方法ナリヤニ就キテハ異説アリ。ロース氏ハ皮膚傳染ヲ以テ主要ナルモノトセリ。近者、ワガ邦ニ於テ土屋及ビ宮川兩氏ハ野外ニ於ケル動物試驗ニ依リ、皮膚侵入ガ主ナル傳染徑路ナルコトヲ證明セリ。同様ノ傳染法ハ犬十二指腸蟲⁽²⁾・亞米利加十二指腸蟲⁽³⁾・ストロンギロイデス、インテスチナリスニ於テモ確認セラレタリ。

ロース氏ニ據レバ、十二指腸蟲幼蟲ハ毛根ヨリ侵入シ淋巴管及ビ血管ニ入り血行ヲ介シテ心臟ヲ通シ肺ニ至リ、更ニ血管ヨリ出テテ氣道ニ進ミ氣管・喉頭・食道ヲ經テ腸ニ達スト。皮膚傳染ハ人體及ビ動物試驗ニヨリ確ナレドモ、ソノ腸ニ達スルノ徑路ニ就キテハ異説アリ。氣道及ビ食道ヲ經由セズシテ體腔ヲ通過シ、又ハ血流ニヨリ直接ニ腸ニ達ストノ説ヲ持スル人モアリシガ、最近、氣管及ビ食道切斷ヲ施シタル動物試驗ニヨリロース氏ノ氣道・食道經由説ノ正確ナルコト追證セラレタリ。但、一小部分ハ血流ニヨリ直接ニ腸ニ達ストイフ。

日本住血吸蟲ノ幼蟲ガ亦、消化系ヨリ侵入セズシテ、皮膚ヨリスルコトハ全く確實トナレリ。然レドモ、内臟血管ニ達スルノ徑路ニ就キテハ尙、不明ノ點少ナカラズ。既知ノ實驗ニ據リ考フルニ、皮膚ヨリ侵入シタルモノハ恐ラク血管系(一部分ハ淋巴系)ニ由リテ、肝臓内門脈血中ニ至リ、コレ漸次發育シテ、普通ニハ門脈系統ノ靜脈枝ヲ以テ、主要ノ寄生地トナス。コレト酷似セル埃及ノ住血吸蟲ハ主シテ直腸壁及ビ膀胱壁ノ靜脈ニ寄生シ、コレ等ノ臟器ニ著明ノ變化ヲ呈セシム。コレ兩寄生蟲ハ形態ノミナラズ、亦、生物學的態度ヲ異ニスルニヨルナリ。埃及ノ住血吸蟲ニ就キテハ、夙ニ皮膚傳染説立テラレタレドモ、尙、確實ナル證左ヲ缺ケリ。

尙、茲ニ附記スベキハ蟻蟲ナリ。コノ寄生蟲ガ女子ニ於テ直腸ヲ出テ腔ヨリ生殖器ニ入り、輸卵管ヲ經テ腹腔殊ニツググデス氏窩ニ至リ、ソノ漿膜面ニ蟲體及ビ蟲卵ヲ含メル結節ヲ形成スルコトアリトイフ。

粗大寄生動物體ガ亦、先天性傳染ヲナスコトアルハ、近時、日本住血吸蟲ニ於テ發見セラレタリ。コレ新ニ母體ニ侵入セル幼蟲ガ母體內ニ於テ、恐ラク血行ヲ介シ胎盤ヲ通過シテ胎兒體ニ入り、コノ處ニテ發育シタルモノナルベシ。

傳染方法ノ全く不明ナルモノモ少ナカラズ。ダトヘバ、本邦ニ多キ肺チストマリケラ縲蟲ハコレニ屬ス。肺チストマハ通常肺ニ寄生スレドモ、又、肋膜・腸壁・肝臓・腦等ニ於テモ發見セラレシコトアリ。ソノ中間宿主及ビ侵入門ハ不明ナレドモ侵入セル幼蟲ガ體內ニテ諸處ニ傳播セラルルモノト信ゼラル。リケラ縲蟲ハ一種ノ裂頭縲蟲ノ幼蟲ト看做サルルモ、コレハ皮下組織又ハソノ他ノ身體諸部ノ結締組織内ニ寄生シ、往往膀胱ヲ穿通シ尿ト共ニ排泄セラルルコトアリ。ソノ母蟲傳染方法等ハ全く不明ナリ。

粗大寄生體ノ病因的作用

先、器械的作用ヲ述フベシ。器械的作用ノ顯著ナルモノハ有鉤縲蟲ノ胞蟲及ビ包蟲ナリ。

胞蟲ハ身體諸組織ヲ侵害シテ、コレヲ破壊シ、更ニ附近ノ組織ヲ壓迫ス。而シテ好シテ腦及ビ腦膜ニ來タルガ故ニ、ソノ大サハ甚大ナラズト雖モ、生命ニ危険ヲ及ボスコト少ナカラズ。時トシテハ、形態著シク大トナリ、タメニ腦壓迫ノ症狀ヲ發シテ死ヲ致スコトアリ。又、第四室ニ寄生シテ腦脊髄液ノ鬱滯ヲ招キ、或ハ靜脈ヲ壓迫シテ腦水ヲ惹起シ、又ハ菱形窩或ハ延髓等ノ樞要部位ニ壓迫ヲ加ヘ輕微ナル動機ニヨリテ頓死ヲ來スコトアリ。但、腦實質内(大腦白質)ニアルモ何等ノ症狀ヲ呈セザルコトアリ。腦膜ニ占居スルトキハ腦實質ヲ刺戟シ、シクソン氏癩癩ヲ發シ、又、腦神經或ハ腦血管ヲ壓

シテコレニ該當スル病症ヲ見ハシ、ソノ他、屢、眼球ヲ侵シ眼癆ヲ由來スルコトアリ。

包蟲ノ器械的作用モ甚、著明ナリ。ソノ好シテ來ル處ハ、肝臟ニシテ屢、肝臟ノ著シキ膨大ヲ來シ、橫隔膜ヲ壓シテ呼吸障礙ヲ促シ、終ニ死ノ轉歸ヲ取ルコトアリ。又、肝臟組織ノ大部分破壊セラレ、コレ主トシテ囊胞及ビ結締組織ヨリ成ルニ至ルコトアリ、或ハ門脈ヲ壓シ腹水ヲ來ス。ソノ他、諸臟器ニ寄生シテ組織ヲ破壊又ハ壓迫シ、腦ニアリテハ前述ノ胞蟲ト類似ノ變化ヲ起シ、骨ニ於テハ骨折ヲ生ズルコトアリ。

蛔蟲ハ通常無害ノ寄生蟲ナレドモ、時トシテハ亦、甚シキ障礙ヲ惹起ス。腸管内ニ數十雙ノ寄生ヲ見ルコトハ往往アリ。極メテ稀ニハソノ數數百ニ上ル。嘗テ一幼女ガ凡、千雙ノ蛔蟲ヲ有シテ腸管ノ大部分ガ鎖塞セラレタル實例アリ。又、蛔蟲ノ塊團ガ腸管ヲ閉塞シ、外部ヨリ觸知シ得ベキ腫瘤ヲ形成スルコトアリ。斯ク腸管ヲ閉塞スルモ、コレガタメニ果シテ腸管縮症ヲ發生スルヤ否ヤハ疑ハシ。蛔蟲ハソノ他、總輸膽管ニ入り膽汁ノ鬱滯、膽管ノ擴大ヲ來タシ、或ハ尚、深ク進テ肝臟内ニ至リ膿瘍ヲ起スコト必シモ稀ナラズ。又、胃ニ逆テ嘔吐等ヲ促ガシ、又ハ食道ヲ經テ鼻腔、或ハソノ副腔ニ達シ、或ハ稀ニ喉頭氣管ニ入り込ミテ窒息ヲ招クコトアリ。

蛔蟲ノ器械的作用ニシテ、尙、注目スベキハ腸穿孔ナリ。腸室扶斯又ハ腸結核ノ際、蛔蟲ニ因リテ潰瘍部穿孔ヲ來シ、腹膜炎又ハ膿瘍ヲ起シ招クコトアリ。蓋、斯ノ如キ病的變化アル腸壁ヲ穿孔シ得ルコトハ確實ナレドモ、腸寄生蟲ガ果シテ健全ナル腸壁ヲ貫通シ腹腔ニ出テ得ルヤニ就キテハ異說アリ。コレヲ肯定スル學者アレドモ、尙、確實ナル立證ヲ要ス。無鉤縱蟲ガ健全ナル十二指腸壁ヲ貫通シテ脾臟組織ニ入りタル例アレドモ、果シテ生前ニ於テ行ハレシモノナリヤ否ヤハ疑ハシ。又、蟻蟲ガ婦女子生殖器ニ入り、輸卵管ヲ經テ腹腔内ニ達スル外、亦、腸壁ヲ穿通シテ腹腔ニ出ツルコトアリトイフ。

膽管ニ寄生スル吸蟲類(肝蛭、籠形チストマ等)ハ時トシテ膽管系殊ニ總輸膽管ヲ閉塞又ハ狹窄シ、胆汁鬱滯ヲ促ガシ、膽管擴大或ハ膽管性肝硬變症ヲ惹起スルコトアリ。但、コノ場合ニハ管ニ器械的作用ノミナラズ、亦、化學的作用ガソノ成立ヲ助クルコト論ヲ俟タズ。籠形チストマハ時トシテ甚、多數(數千)寄生スルモコレニ因リ惹起セラルル解剖的變化ハ主トシテ膽管壁ニ止リ、病變ノ度、比較的僅少ナルコトアリ。

埃及ニ於ケル住血吸蟲及ビ日本住血吸蟲ハ主トシテ門脈系(及ビコレト交通セル)血管内ニ住シ、化學的作用ノ外器械的作用ニヨリ病的變化ヲ起ス。即、蟲體及ビ卵子ニヨリ小血管ヲ閉塞シ出血炎症、組織増殖等ヲ來ス。斯ノ如キ解剖的變化ヲ起ストコロノ主要ナル原因の要件ハ、即、卵子介在ナリ。日本住血吸蟲症ニ於テハ肝臟ニ間質炎ヲ起シ一種ノ肝硬變症(山極氏ノ所謂「寄生性肝間質炎」ヲ來シ、腸特ニ大腸ニ於テハ、加答兒性炎、出血、壞死、潰瘍ヲ生ズ。日本住血吸蟲病ニ於テ時トシテ、ヰクソン氏癩癩ノ症狀ヲ現ハスコトアリ、コレソノ部位ニ進達セル蟲卵ニ因スル多發性腦硬化及ビ軟化、成形性腦膜炎ニヨリ惹起セラルルナリ。

コレト同様ニ、ヰクソン氏癩癩様發作ガ又、肺チストマニヨリ來タルコトアリ、コレ恐クハチストマ幼蟲ガ血行ヲ介シテ腦ニ來リ、腦實質炎及ビ腦軟化ヲ起スニヨルナルベシトノ說アリ。

住血絲狀蟲ハ往往、睾丸下肢或ハソノ他ノ部分ノ淋巴管又ハ淋巴腺ニ介在シテ淋巴液ノ鬱滯ヲ來タサシメ、終ニ結締組織増生ヲ促シ象皮病ヲ來タスコトアリ。而シテ淋巴液鬱滯ヲ來タセルモノニアリテハ膿球菌ノ侵入増殖ヲ起シ易ク、屢、丹毒様ノ發作ヲ現ハス。血中ニ多數ノ住血狀蟲ノ幼蟲ヲ藏スルモ何等ノ病的現象ヲ示サザル例少カラズ。故ニ、コノ蟲寄生スルモ特殊ノ場合ニ於テノミ疾病ヲ惹起ス。

寄生蟲ハ屢、ソノ宿主身體ニ諸種ノ反應性炎症及ビ結締組織増生ヲ惹起ス。蓋、コノ炎症變化ハ寄生蟲ノ器械的

及ビ化學的刺戟ニ對スル局處性反應ナリ。

腸管ニ寄生スルモノハ通常著明ノ局處性炎症ヲ起サズ、又、リゲラ繸蟲ノゴトク組織内ヲ移動轉住シテ、シカモ通常何等ノ炎症變化ヲ起サザルモノアリ。胞蟲・包蟲ハ屢、臟器又ハ組織ノ廣汎ナル部分ヲ壓排シ廢滅ニ歸セシメ、ソノ周圍ニ結締織被膜ヲ新生セシムレドモ、周圍組織ニ於ケル炎症變化ハ極メテ少ナシ。

コレニ反シテ、著明ナル炎症變化及ビ結締織增生ヲ來タスモノハ膽管及ビ血液ニ住スル吸蟲類及ビ筋組織ニ寄生スル旋毛蟲ナリ。筧形ヂストマハ膽管内ニ於テソノ管壁ニ器械的及ビ化學的刺戟ヲ與ヘ加答兒性及ビ増殖性炎症ヲ發生セシメ、上皮細胞ノ腺樣茂生及ビ結締織增生ヲ來タシ、時トシテハ膽管性肝硬變ヲ生ズ。日本住血吸蟲病ニアリテハ卵子介在部ニ於テ通常圓形細胞浸潤・結締織ノ増殖ヲ呈シ、依テ顯著ナル肝硬變・腸壁ノ炎症浸潤肥厚等ヲ來タス。膀胱ニ於ケル病變ハ埃及ノ住血吸蟲症ニ限レリ。

筋旋毛蟲ハ筋組織ニ細胞浸潤・筋纖維壞死・結締織增生ヲ促ス。又、分殖性幼繸蟲ハ身體諸組織内ニ於テ分芽増殖シ、組織ニ炎症變化及ビ結締織增生ヲ來タシ、象皮病樣變化ヲ惹起スルコトアリ。

寄生蟲ガ腫瘍ニ對シ原因的關係ヲ有スルモノアリ。住血吸蟲症ニ於テ膀胱ニ屢、癌腫、稀ニ肉腫ヲ認メ、又、日本住血吸蟲患者ノ直腸ニ腺腫或ハ癌樣腫瘍ヲ見、又、ソノ肝臟ニ於テ肝臟癌併發スルコトアリ。コレ等ノ腫瘍ハ常ニ高度ノ組織變化アル部分ニ生ジ、寄生蟲殊ニソノ卵子ノ介在及ビコレニ因ル病變ガ上皮細胞ノ茂生ヲ促シ腫瘍ヲ形成セシメタルナリ。然レドモ、未、寄生蟲及ビラノ卵子自個ガ腫瘍發生ノ唯一ノ原因或ハ要件ヲナスト斷言スル能ハザルハ勿論ナリ。皮膚毛囊蟲ガ皮膚痛發生ト原因的關係アルコトヲ唱道セシ人アレドモ、ソノ根據薄弱ニシテ確實ナラズ。

以上ハ、主ニ局處性作用ニ就キ陳ベタリ。コノ外、尙、重要ナルハ化學的毒性作用ナリ。

蚊・蚤等ノ螫刺ニヨル局處的有毒性作用ノ外、化學的毒物ニヨリ遠達作用ヲナスモノ少カラズ。貧血・エオジン嗜好細胞増加・神經症狀等ハコレニ由來スルモノナリ。

裂頭繸蟲殊ニ十二指腸蟲ガ屢、高度ノ貧血ヲ由來スルコトハ人ノ知ルトコロナリ。裂頭繸蟲ヲ有スル患者ハ屢、高度ノ惡性貧血ヲ呈シ、驅蟲ノ後、多クハソノ症狀治癒スルヲモツテ觀レバ、寄生蟲ト貧血トノ間ニ原因的關係ナカルベカラズ。然レドモ何如ナル物質ガ貧血ノ原因ヲナスヤニ就キテハ、多數ノ研究アルニ拘ハラズ、未、全ク闡明ノ域ニ達セズ。蓋、コノ不明ノ物質ハ蟲體ヨリ產出スルモノニシテソノ儘或ハ一定ノ變化ヲ受ケテ赤血球又ハ造血器ニ作用シ、コレニ因テ貧血惹起サルト考ヘザルベカラズ。裂頭繸蟲ノ抽出液中ニ溶血性物質(脂肪樣物質)アリ。但、貧血ヲ有スル患者及ビ然ラザルモノヨリ得タル繸蟲ノ抽出液ハ兩者トモソノ溶血性ノ程度同一ナルコト多キヲ以テ、抽出液中ノ溶血性物質ハ自然ノ状態ニ於テ蟲體ヨリ生成シタルモノト果シテ同一ナリヤ否ヤ確ナラズ。ソノ他裂頭繸蟲貧血症患者ノ血清中ニ該蟲ニ對スル沈降素ノ存在證明セラレ、又、該患者ニ於テハ物質代謝ノ變化ヲ來シ蛋白質分解増加セリ。

裂頭繸蟲寄生スルモノ必シモ貧血ヲ來タサズ。本邦ニ於テ裂頭繸蟲ヲ寄生セシムル人ハ少カラザレドモ、實際ニ高度ノ貧血ヲ伴フハ稀ナリ。何故ニ、同一寄生蟲ニヨリテコノ貧血ノ状ニ差異アルカニ就キテハ諸多ノ說アリ。或ハ曰ク、病蟲ト健蟲トハソノ生産物ヲ異ニスルヲ以テ、病蟲寄生スレバ貧血ヲ起スナルベシト。然レドモ、寄生蟲自個ガ果シテ疾病ニ罹リヤ否ヤヲ決定スルコトハ不可能ナリ。又、死セル蟲節分解シテ毒物吸收セラルルニ因ルト主張スル人アレドモ、貧血ナキ場合ニモ死節アリ、又、貧血アルモ死節ナキコトアルガ故ニ、コレ亦、完全ナル説明トイフ能ハズ。要スルニ、ソノ理由不明ナレドモ、恐クハ繸蟲ノ個體的差異・腸粘膜ノ状態・宿主身體ノ素因等ニ關係スルモノナルベシ。

十二指腸蟲ハ亦(特ニ本邦ニ於テハ)吾人ノ屢、遭遇スル寄生蟲ニシテ、常ニ多少ノ貧血ヲ伴フ。貧血發生ノ原因ニ就キテハ、コノ寄生蟲ノ螫刺ニ由ル失血ヲ以テ主要ノモノナリトセラレタリ。然レドモ、十二指腸蟲ハ眞ノ吸血蟲ニアラス、ソノ消化管内ニアル赤血球ハ變化ヲ呈スルコト少キヲ以テ主要ナル蟲體營養物ト認ムベカラズ。且、ソノ失血ノ量ハ通例僅少ナルヲ以テ直ニコレノミヨリ高度ノ貧血ヲ説明シ難シ。故ニ、失血モ貧血ノ一原因ナルコトハ疑ナクレドモソノ主要者ニアラス、依リテ、貧血主因ハコレヲ毒性物質ノ吸收ニ歸セザルベカラズ。十二指腸蟲病ニ於テ貧血症狀未、著明ナラザルニ際シテ、既ニ他ノ全身の症狀現ハレ、又、犬ニ於テ試驗的ニ感染セシムルニ速ニ死ノ轉歸ヲ取ルコトアリ。コノ事實ハ、毒物ノ吸收ニヨリ起リタリト看做サザル可カラズ。又、コノ貧血患者ノ物質代謝亢進シテ蛋白質ノ分解増加シ或ハ尿中ニケリクロン酸出デ或ハ網膜ニ出血ヲ來タスコトアリ。コレ等モ毒物吸收ノ結果ト考フベキナリ。然ラバコノ毒物ハ何如ナル物質ナルカ、コレニ就キテモ多數ノ研究アリ。蟲體(主トシテ頭部)ヨリ溶血性物質抽出セラレ、コレヲ以テ貧血ヲ起ス物質ナリトセラレタリ。然レドモ、斯ノ如キ溶血性物質ハ、諸種ノ繚蟲・蛔蟲・癌組織又、諸内臟組織(脾・胎盤)ヨリモ抽出シ得ルヲ以テ、繚蟲ニ就キテ述ベシガゴトク、果シテ生活寄生蟲ノ產出スル毒物ト同一ニシテ貧血ノ原因ヲナスモノナリヤニ就キテハ、尙、研究ノ餘地ヲ存セリ。鞭蟲・蟯蟲ヲ寄生スル人體ニ於テモ屢、貧血ヲ呈スルコトアリテ亦、驅蟲ニヨリシノ症狀消散スルコト少カラズ。然レドモ、コレ等寄生蟲ト貧血トノ間ニ直接ノ原因的關係アリヤ未、明ナラズ。

エオジン嗜好細胞増加ハ殆、凡テノ粗大寄生蟲病ニ見ルトコロノ症狀ナリ。エオジン嗜好細胞増加ノ最、著明ナルハ旋毛蟲症ニシテ血中全白血球ノ四〇乃至六〇%ヲ占ムルコトアリ(常態ニ於テハ二乃至四%)。住血吸蟲病・日本住血吸蟲病・十二指腸蟲病・住血絲狀蟲病・メチナ蟲病コレニ次グ。繚蟲病・蟯蟲病・包蟲病等ニ於テハ比較的輕度ナリ。且、コノ種ノ細胞増加ハ常ニ血液中ニ於テ然ルノミナラズ又、組織内ニ於テモコレヲ認ム(旋毛蟲病・日本住血

(3) Metschnikoff (1) Marer
(2) Helminthiasis meningitiformis

吸蟲病等)。而シテコレ等寄生蟲ノ驅除シ得ベキモノニ於テハ驅蟲ト共ニ血中ノエオジン嗜好細胞減少シテ常數ニ復ス。又、繚蟲・蛔蟲等ノ破砕乳劑或ハソノ濾過液ヲ動物ニ注射スルニエオジン嗜好細胞増加ス。又、硝子毛細管内ニコノ液ヲ容レテ動物ノ皮下ニ置ケバ、殆、コノ種細胞ノミヨリ成レル白血球多數管内ニ集合ス。

コレニ由リコレヲ觀ルニ、エオジン嗜好細胞増加ハ寄生蟲生産物ノ化學的刺戟ニ因リテ生ズルモノニシテ、寄生蟲ノ寄生部位(腸管内ソノ他ノ組織内)ニハ大ナル關係ナシ。但、貧血トエオジン嗜好細胞増加トハ必シモ併行セザルガ故ニ、兩種ノ病變ノ原因タルベキ化學的物質ハ同一物ニアラザルベシ。

古來内臟寄生蟲ハ反射的ニ種種ノ神經症狀ヲ惹起スルモノナリト信ゼラレタリ。然レドモ、今日ニ於テ斯ノ如キ原因的關係ノ認メラルモノハ著シク減少シ、且、ソノ作用タルヤ反射的ニアラズシテ蟲體ノ生産物ニ因ル中毒ニ歸スベキモノトセラレタリ。

腸寄生蟲殊ニ蛔蟲ノ寄生ニ當リ、屢、諸種ノ神經症狀ヲ呈シ、時トシテハ腦膜炎様ノ症狀ヲ現ハス。而シテ驅蟲ニヨリコレ等ノ症狀ノ頓ニ治癒スルコト亦、少カラズ。コレ寄生蟲ノ生産物吸收セラレ、神經系ヲ刺戟スルニ因ルト斷定セザルヲ得ズ。マーレル氏⁽³⁾ハ此ノ如キ疾病ヲ腦膜炎様寄生蟲病⁽³⁾ト名ケタリ。

腸寄生蟲ト蟲様突起トノ關係ニ就キテ、尙、一言ヲ費スベシ、蓋、コノ關係ハ夙ニ注目セラレタルトコロナリシガメテニコツフ氏⁽³⁾特ニコレヲ揚言セシ以來、一層醫學者ノ注意ヲ惹キタリ。即、腸寄生蟲殊ニ鞭蟲・蟯蟲・蛔蟲ハ盲腸及ビ蟲様突起粘膜炎起シ、病原菌ノ侵入ヲ易カラシメ蟲様突起炎(及ビ盲腸炎)發生ノ誘因ヲナストイフ。然レドモ、果シテ斯カル原因的關係アリヤ、今日、未、明ニコレヲ決定スルコト能ハズ。

參考文籍
寄生性生物ノ原因作用

- Abel, R.*, Überblick über die geschichtliche Entwicklung der Lehre von der Infektion, Immunität und Prophylaxe. *Kölle und Wassermann's Handb.* 1912. 2. Aufl. I, S. 1.
- 有聲頼扣 Über die Typhustoxine und ihre pathogene Wirkung. *Centralbl. f. Bakt. Orig.* 1912. LXXIII, S. 424.
- Askaniy, M.*, Über Infektion des Menschen mit *Distonum felmanni* (shiricum) in Ostpreussen und ihren Zusammenhang mit Lebertrebs. *Centralbl. f. Bakt.* 1900. XXVIII, S. 491.
- Askaniy, M.*, Zur Lehre von der Trichinosis. *Vierteljahrsschr. f. Naturgesch.* 1895. CXLI, S. 42.
- Askaniy, S.*, Jothricephalusantämie und die prognostische Bedeutung der Megaloblasten im anfänglichen Blute. *Zeitschr. f. klin. Med.* 1895. XXVII, S. 492.
- Babinetz, J. et Charin, A.*, De la paralysie pyocyanique. *Compt. rend. Soc. biol.* 1888. p. 257.
- Bali, O.*, Untersuchungen über natürliche und künstliche Milzbrandimmunität. *Centralbl. f. Bakt. Orig.* 1901. XXXVI, S. 266, 397.
- Bali, O.*, Untersuchungen über Typhus- und Choleraimmunität. *Archiv f. Hyg.* 1905. LII, S. 272.
- Baungarten, P.*, Über congenitale experimentale Tuberculose. *Arch. a. d. patholog. Instit. Tübingen.* 1891-1892. I, p. 322.
- Beck, M.*, Diphtherie. *Kölle und Wassermann's Handb.* 1903. II, S. 754.
- Becker, J.*, Über die durch Trichocephalus dispar verursachten Krankheitszustände. *Deutsche med. Wochenschr.* 1912. S. 468.
- v. Behring, E.*, Einführung in die Lehre von der Bekämpfung der Infektionskrankheiten. 1912.
- Beitzke, H.*, Häufigkeit, Herkunft und Infektionswege der Tuberculose beim Menschen. *Zahorski's Ergebnisse.* 1910. XIV, 1, S. 169.
- Blanchard, M. R.*, Sur la typhlo-colite muco-membraneuse ou saléense et l'appendicite. *Bull. Acad. med.* 1906. LVI, p. 17.
- Blumenthal, F.*, Infektion und allgemeine Reaktion. *Kölle und Wassermann's Handb.* 1904. I, S. 326.
- Boeck, A.*, Über Fieberscheinungen nach intravenösen Injektionen, vornehmlich indifferenten Partikelchen. *Arch. f. exper. Pathol. u. Pharm.* 1912. LXXIII, S. 1.
- Bohland, K.*, Über die Eiweisssetzung bei der Anchylostomiasis. *Minch. med. Wochenschr.* 1894. S. 901.
- Boorman, F. B.*, The pathogenesis of the balantidium coli. *Journ. of Amer. Med. Assoc.* 1911. LVII, p. 1814.
- Boyce, A. E.*, A note on the poisonousness of worms. *Journ. of Path. and Bact.* 1905. X, p. 383.

- Brunn, M.*, Tierische Parasiten des Menschen. 4. Aufl. 1908.
- Bruegel, L.*, Über das Vorkommen von Tetanin bei einem an Wundstarrkrampf erkrankten Individuum. *Berl. klin. Wochenschr.* 1888. S. 329.
- Brown, W. H.*, Malarialpigment (Hematin) as a factor in the production of the malarial paroxysm. *Journ. of Exper. Med.* 1912. XV, p. 579.
- Buchner, H.*, Über pyogene Stoffe in der Bakterienzelle. *Berl. klin. Wochenschr.* 1890. S. 673.
- Buschke, A.*, Die Sprossspitze. *Kölle und Wassermann's Handb.* 2. Aufl. 1912. V, 8/9. Lieferung, S. 155.
- Busse, O.*, Schimmelpilze als Krankheitserreger. *Zahorski's Ergebnisse.* 1902. VII, S. 596.
- Busse, O.*, Die Sprossspitze. *Kölle und Wassermann's Handb.* 1903. I, S. 661.
- Cabrette, A. et Guerin, C.*, Origine intestinale de la tuberculose pulmonaire. *Ann. Pasteur.* XIX, 1905. p. 601.
- Cecil, R. S. and Bullock, K.*, On the lesions produced in the appendix by oxyuris vermicularis and trichocephalus trichinura. *Journ. of Exper. Med.* 1912. XV, p. 225.
- Charin et Ruffet, A.*, Mechanisme de la fièvre dans la maladie pyocyanique. *Compt. rend. Soc. biol.* 1889. p. 63.
- Cheqz, J.*, Recherches expérimentales sur les alterations du système nerveux dans les paralysies diphtériques. *Arch. de med. exper.* 1895. VII, p. 507.
- Dating, S. T.*, Experimental infection of the mule with trypanosoma hippicum by means of musca domestica. *Journ. of Exper. Med.* 1912. XV, p. 365.
- Dante Calamita, G.*, Weitere Untersuchungen über das Gift der Taenien. *Centralbl. f. Bakt.* 1901. XXX, S. 374.
- Darvigne, C.*, Nouvelles recherches sur les infusoires du sang dans la maladie comme sous le nom de sang de rate. *Compt. rend. Acad. sc.* 1863. LVII, p. 386. *Compt. rend. Soc. biol.* 1863. p. 149.
- Darvigne, C.*, Nouvelles recherches sur la maladie du sang de rate considérée au point de vue de sa nature. *Compt. rend. Soc. biol.* 1863. Mémoires p. 193.
- Diamond, A. und Otto, R.*, Pest. *Kölle und Wassermann's Handb.* 2. Aufl. 1912. IV, 6/7. Lieferung, S. 155.
- Doerr, J.*, Über filterbares Virus. *Centralbl. f. Bakt. Ref.* 1911. I. Beiheft, S. 12.
- Doerr, J.*, Dysenterietoxin. *Handb. der Technik und Methodik der Immunitätsforschung.* 1908. I, S. 164.
- Doerr, R. und Riss, V. K.*, Weitere Untersuchungen über das Pappataciefieber. *Arch. f. Schiff- und Tropenhygiene.* 1909.

- XIII, S. 693.
Djfflein, F., Lehrbuch der Protozoenkunde. 1907.
Dopter, M. Ch., Anatomie pathologique de la dysenterie amibienne. Arch. de méd. exper. 1907. XIX, p. 505.
Dutton, J. E., Note on a trypanosoma occurring in the blood of man. Brit. Journ. 1902. II, p. 881.
Dutton, J. E., Todd, J. H. and Christy, C., Human trypanosomiasis on the Congo. Brit. Med. Journ. 1904. I, p. 183.
Ehrlich, P., Über die Constitution des Diphtheriegiftes. Deutsche med. Wochenschr. 1898. S. 597.
 藤藤繁雄 日本ニ於テ見ラシキ「カラムチー」ノ一例。東京醫學會雜誌「二五卷」第一二二號「第四十三頁」明治四四年。
van Ermengem, E., Untersuchungen über Fälle von Fleischvergiftung mit Symptomen von Botulismus. Centralbl. f. Bakt. 1896. I, XIX, S. 442.
Ferguson, A. R., Associated Bilharziosis and primary malignant disease of the urinary bladder, with observations on a series of forty cases. Journ. of Pathol. and Bakt. 1911. XVI, p. 76.
Függe, C., Die Verbreitung der Phthise durch stauförmiges Sputum und durch beim Husten verspritzte Tropfen. Zeitschr. f. Hyg. 1899. XXX, S. 107.
Flemer, S. and Lewis, P. A., The transmission of acute poliomyelitis to monkeys. Journ. of the Amer. Med. Ass. 1909. LIII, p. 1639.
Franke, C., Die Lehre von der Infektion mit Protozoen und der pflanzlichen Parasiten. *Kryhl und Merckand's* Handb. d. allgemeinen Pathol. 1908. I, S. 290.
French, P., *Lyssa, Kalle und Wassermann's* Handb. 1. Ergänzungsband. 1907. S. 626.
 藤浪鑑 再び所謂「片山地方病」ニ就テ並ニ其病源の寄生蟲。京都醫學雜誌「第一卷」第二〇一頁。明治三七年。
 藤浪鑑及中村八太郎 廣島縣「片山病」(日本住血吸蟲病)ノ感染徑路、病源蟲ノ發育、並ニ其孳病動物。京都醫學雜誌「第六卷」第二二四頁。明治四二年。
Fülleborn, F. und Schilling, V., Untersuchungen über den Infektionsweg bei Strongyloides und Ankylostomum. Vorläufige Mitteilung. Arch. f. Schiff- und Tropenhyg. 1911. XV, S. 569.
Gotschlich, E., Allgemeine Morphologie und Biologie der pathogenen Mikroorganismen. *Kalle und Wassermann's* Handb. 2. Aufl. 1912. I, S. 30.
Gotschlich, E. und Wägans, J., Über die Beziehungen zwischen Virulenz und Individualzahl einer Cholerakultur. Zeitschr.

- f. Hyg. 1895. XX, S. 376.
 原榮「ブメーン」赤痢ニ就テ、中外醫事新報「第六九六乃至七〇二號」明治四二年。 Beiträge zur Kenntnis der Amöben-Dysenterie. Frankfurter Zeitschr. 1910. IV, S. 329.
Heller, A., Darnschmarotzer. *Ziemsen's* Handb. der spez. Path. und Therap. 2. Aufl. 1878. VII, 2, S. 577.
Heymann, B., Versuche über die Verbreitung der Phthise durch ausgetrocknete Tropfen und durch trockenen Sputumstaub. Zeitschr. f. Hyg. 1901. XXXVIII, S. 21.
 飯島覺 人體寄生動物編「明治」一一年。
 稲田龍吉 肺ノ「トモロー」疾患ニ就テ、中外醫事新報「第五三二號」第七〇七頁。明治三五年。
 稲田龍吉 十二指腸蟲内ニ存在スル血球溶解性物質及ビンノ他ノ一二物質ニ就テ、中外醫事新報「第七〇二號」第八二六頁。明治四二年。
Isaac, S. und von den Velden, Eine spezifische Praecipitinreaktion bei *Bohricephalus latus* beherb. Menschen. Deutsche med. Wochenschr. 1904. S. 982.
Jamnes, L. et Mandoul, H., Sur l'action toxique des vers intestinaux. Compt. rend. Acad. sc. 1904. CXXXVIII, p. 1724.
 金森辰次郎 腫瘍ノ原因追加。東京醫學會雜誌「第一二卷」第六八頁。明治三一年。
Kartulis, Zur Aetologie der Dysenterie in Aegypten. *Trochov's* Archiv. 1886. CV, S. 521.
Kartulis, Die Amöbendysenterie. *Kalle und Wassermann's* Handb. 1. Ergänzungsbd. 1907. S. 347.
 桂田富士郎 篋形二口蟲病論増補。東京醫學會雜誌「第一三卷」第二二二四「明治三二年」及第一四卷「第一二二號」明治三三年。 Beiträge zur Kenntn. d. Distom. spathul. 1900. XXVIII, S. 479.
 桂田富士郎 Schistosomum japonicum, ein neuer menschl. Parasit, durch welchen eine endemische Krankh. in verschied. Gegend. Japans verunsacht wird. Annot. zool. japon. 1904. V, 3, p. 147.
 桂田富士郎及藤木稻太郎 肺二口蟲ノ病理。東京醫學會雜誌「第一三卷」第一二一三號「明治三二年」。
 北里柴三郎 Experimentelle Untersuchungen über das Tetanusgift. Zeitschr. f. Hyg. 1891. X, S. 267.
 北里柴三郎及宮島幹之助 恙蟲病研究第三報告。細菌學雜誌「第一六六號」第五五九頁。明治四二年。
 北里柴三郎、宮島幹之助、小泉丹及高野親雄 由良町ニ於ケル「ノスト」調査概報。細菌學雜誌「第一五八號」第一頁。明治四二年。
Klimenko, W., Beitrag zur Pathologie des *Balanidium* (Paramoecium) coli. *Ziegler's* Beiträge. 1903. XXXIII, S. 281.
 小林晴次郎 肝臟「ヤスト」ノ研究(本報「細菌學雜誌」第二〇二號「第一頁」大正元年)。

- Koch, M.*, Höhere tierische Parasiten. *Zubrecht's Ergebnisse*. 1910. XIV. 1, S. 41.
 小泉丹 寄生原蟲學明治四三年。
 小泉丹 人體寄生動物學, 大正元年。
Kohls, R., Über den Befund von auf dem Peritoneum des Cavum Douglasii angewachsenen Oxyuriden. *Centralbl. f. Bakt. Orig.* 1902. XXXI, S. 268.
Kolle, W. und *Schramm, W.*, Cholera asiatica. *Kolle und Wassermann's Handb.* 2. Aufl. 1912. IV. 4. Lieferung. S. 1.
Kolle, W. und *Hetsch, H.*, Mikroorganismenbefunde bei anderen Infektionskrankheiten. *Kolle und Wassermann's Handb.* 1903. III. S. 893.
 今裕 臺灣ニ於ケル地方病性赤痢ノ病理學的研究, 中外醫事新報, 第六三四乃至六三六號, 明治三十九年臺灣地方病及傳染病調查委員會報告, 明治三十九年。
 近藤大鑓及山村正雄 「フンロシエロコイデス」ニ因ル象皮病, 中外醫事新報, 第六七六號, 第六八二頁, 明治四一年。
Kruse, A., Über die Beziehungen sogenannten Endotoxinen zu den Toxinen. *Centralbl. f. Bakt. Ref.* 1908. XLII, Beiheft, S. 13.
Kruse, W., Bemerkungen über Infektion, Immunität und Heilung. *Ziegler's Beiträge*. 1893. XII, S. 333.
 栗本東明 新條蟲「チノロコシエロルニス・タランヤニス」ニ就テ, 東京醫學會雜誌, 第一五卷, 第一號, 第一頁, 明治三十四年。Diplom-noporus grandis. *Zeitschr. f. klin. Med.* 1900. XI, S. 1.
Loeffler, J., Experimentelle Studien über die Fütterungstuberkulose der Meerschweinchen und die Beeinflussung derselben durch stomachal herabreichendes Tuberkulin. *H. Betke = 撰ル*.
Landsteiner, K. et *Leviditi, C.*, La transmission de la paralysie infantile aux singes. *Compt. rend. Soc. biol.* 1909. LXVIII, p. 592.
Landsteiner, K. et *Leviditi, C.*, La paralysie infantile expérimentale. *Compt. rend. Soc. biol.* 1909. LXVII, p. 787.
Landsteiner, K. und *Runkelbeck, H.*, Beobachtungen über Hämolyse und Hämagglutination. *Centralbl. f. Bakt. Orig.* 1908. XLV, S. 660.
Langlet, J., Zur Frage der Bildung spezifischer Antikörper im Organismus der Bandwurmwirte. *Munch. med. Wochenschr.* 1905. S. 1665.
Latour, A., Note sur un nouveau parasite trouvé dans le sang de plusieurs malades atteints de fièvre palustre. *Bull. Acad. med.* 1880. IX. p. 1268.

- Latour, A.*, Deuixième note relative à un nouveau parasite trouvé dans le sang des malades atteints de la fièvre palustre. *Bull. Acad. med.* 1880. IX, p. 1346.
Leber, A., Über Trypanosomentoxine und trypanotoxische Keratitis parenchymatosa. *Deutsche med. Wochenschr.* 1908. S. 1850.
Leber, Th., Über die Entstehung der Entzündung und die Wirkung der entzündungs erregenden Schädlichkeiten. *Fortschr. d. Med.* 1888. VI, S. 460.
Leichterstem, O., Behandlung der Darmschnurwizer. *Handb. der Therap. v. Pensaold-Stinzing*. 2. Aufl. 1898. IV, S. 579.
Leitz, O., Dysenterie. *Kolle und Wassermann's Handb.* 1903. II, S. 309. & 1909. II. Ergänzungsband, S. 391.
Leo Loeb und Smith, A. J., Über die eine Blutgerinnung hemmende Substanz in Anchylostoma caninum. *Centralbl. f. Bakt. Orig.* 1904 XXXVII, S. 93.
Leuckart, R., Die Parasiten des Menschen. 1879-1901. Thèse Paris. 1901.
Linnaeus, H., Essai sur l'osinophilie dans le parasitisme vermieux chez l'homme. Thèse Paris. 1901.
v. Lingelsheim, Tetanus, Kolle und Wassermann's Handb. 1903. II, S. 566.
Löffler, J., Über filtrierbares Virus. *Centralbl. f. Bakt. Ref.* 1911. I, Beiheft, S. 1.
Löffler und Frauch, Berichte der Kommission zur Forschung der Maul- und Klauenseuche bei dem Institut für Infektionskrankheiten in Berlin. *Centralbl. f. Bakt.* 1898. XXIII, S. 371.
Looss, A., Über das Eindringen der Ankylostomalaren in die menschliche Haut. *Centralbl. f. Bakt.* 1901. XXIX, S. 733.
Looss, A., Von Wirmen und Arthropoden hervorgerufene Erkrankungen. *Meyer's Handb. der Tropenkrankheiten*. 1905. I, S. 77.
Looss, A., The anatomy and life history of *Ancylostoma duodenale* Dub. *Records of the School of Medicine*. 1911. Vol. IV.
Marchand, F., Die tierischen Parasiten des Menschen. *Kroll und Marchand's Handb. d. allgemeinen Pathologie*. 1908. I, S. 340.
Meyer, J., Helminthiasis meningitiformis. *Allg. Wien. med. Zeitung*. 1902. S. 315.
 松下禎二 「タムシリヤ」蟲ノ有害作用ヲ論シ、*オホシノ* 象皮病原因説ヲ駁ス、*京都醫學雜誌*, 第九卷第三號, 京都醫學會第九次總會誌, 第三八頁, 明治四五年。
Mayer, M., Trypanosomen als Krankheitserreger. *Kolle und Wassermann's Handb.* 2. Aufl. 1912. VII, 16/19. Lieferung.

- S. 321.
- 前島淳一「リブラ」狀裂頭絛蟲ノ實驗追加、中外醫事新報第七二〇號第三六一頁、明治四三年。
- Mitschinkoff, E.*, Sur l'appendicite. Note helminthologique sur l'appendicite. Bull. l'Acad. med. 1901. XLIV, p. 301.
- Mitschinkoff, E.*, Die Lehre von den Phagozyten und deren experimentelle Grundlagen. *Kolle und Wassermann's Handb.* 1904. IV, S. 332.
- Mitschinkoff, E., Roux, E. et Tawell-Saitkeni.*, Toxine et antitoxine cholérique. Ann. Pasteur. 1896. X, p. 257.
- 宮島幹之助 京都附近ニ於テ「テラリマ」ト蚊ノ關係、中外醫事新報、第五四七號、第一頁、明治三六年。
- 三浦謹之助 十二指腸蟲病ニ就テ、東京醫學會雜誌、第一一卷、第九號、附錄、第五頁、明治三〇年。
- Moser, K. und Peiper, E.*, Tierische Parasiten. *Mohrjegg's spez. Path. und Therap.* 1894. VI.
- 中村八太郎 日本住血吸蟲病ノ病理解剖、京都醫學雜誌、第七卷、第二三九頁、明治四三年、及第八卷、第一頁、明治四四年。
- 中村八太郎、土屋岩保、桂田富士郎 日本住血吸蟲病、日本病理學會誌、第一年、明治四四年。
- Nesher, M.*, Über die Durchgängigkeit der Darmwand für Bakterien. Zeitschr. f. Hyg. 1896. XXII, S. 12.
- Neufeld, F.*, Typhus. *Kolle und Wassermann's Handb.* 1903. II, S. 204.
- Noord, Ed.*, Die Peripneumonie der Rinder. *Kolle und Wassermann's Handb.* 1903. III, S. 682.
- Obermeier O.*, Berl. med. Wochenschr. 1873. S. 152, 378, 391, 406, 455.
- 緒方正規、石原喜久太郎 鼠蚤ニ就テ、日本衛生學會雜誌、第四卷、第四號、第二二五頁、明治四一年。
- Orth, J. und Rabinsowitch, L.*, Über experimentelle enterogene Tuberkulose. *Virehow's Archiv.* 1908. CXCV, Beiheft, S. 305.
- Ostrow, N.*, Über histologische Veränderungen in Spätstadien der Muskeltrichinose. *Ziegler's Beiträge.* 1903. XXXIV, S. 253.
- Opke, W.*, Appendicitis und Eingeweidewürmer. *Milch. med. Wochenschr.* 1903. S. 859.
- Osering, H.*, Hühnerpest. *Kolle und Wassermann's Handb.* 1903. III, S. 846.
- Otto, M.*, Gelbfieber. *Kolle und Wassermann's Handb.* 1909. 2. Ergänzungsb., S. 153.
- Pfeiffer, J.*, Über die Beziehungen der sogenannten Endotoxine zu den Toxinen. *Centrall. f. Bakt. Ref.* 1908. XLII, Beiheft, S. 1.
- Peiper, E.*, Tierische Parasiten des Menschen. *Lubarsch's Ergebnisse.* 1897. III, 1. S. 22.

- Peiper, E.*, Tierische Parasiten. *Lubarsch's Ergebnisse.* 1902. VII, S. 524, 1905. IX, 2, S. 182.
- Pernuschky, J.*, Entscheidungsversuche zur Frage der Specificität des Erysipelstreptococcus. *Zeitschr. f. Hyg.* 1896. XXIII, S. 142.
- Petruckky, J.*, Die pathogenen Trichomyceeten und Trichobakterien. *Kolle und Wassermann's Handb.* 2. Aufl. 1912. V, 14/15-Lieferung, S. 267.
- Plaud, H. C.*, Die Hyphenpilze oder Eumycoeten. *Kolle und Wassermann's Handb.* 2. Aufl. 1912. V, 8/9. Lieferung, S. 1.
- Ramphinger, P.*, Isolément du virus rabique par filtration. *Compt. rend. Soc. biol.* 1903. LV, p. 1433.
- Roux, E.*, Über Infusoriendiarrhoe. *Deutsch. Arch. f. klin. Med.* 1893. LI, S. 505.
- Roux, K.*, Untersuchung über Malaria. 1898.
- Roux, E. et Yersin, A.*, Contribution à l'étude de la diphtérie. *Ann. Pasteur.* 1888. II, p. 629.
- Ruge, K.*, Malariaerkrankheiten, 2. Aufl. 1906.
- Ruge, R.*, Malariaerkrankheiten. *Kolle und Wassermann's Handb.* 2. Aufl. 1912. VII, 16/19. Lieferung, S. 167.
- Rumelberg, J. W.*, Bothriocephalus latus und perniciose Anämie. *Deutsch. Arch. f. klin. Med.* 1887. XLI, S. 304.
- Sauerbeck, E.*, Die Trypanosomiasis vom Standpunkt der allgemeinen Pathologie. *Lubarsch's Ergebnisse.* 1906. X, S. 305.
- Schlafke, H.*, Heilung der *Biemerschen* penic. Anfämie durch Abreibung von *Bothr. latus*. *Zeitschr. f. klin. Med.* 1887. XIII, S. 416.
- Schannmann und Tallqvist.*, Über die blutkörperchenauslösenden Eigenschaften des breiten Bandwurms. *Deutsche med. Wochenschr.* 1898. S. 312.
- Schlegel, M.*, Aktinomykose. *Kolle und Wassermann's Handb.* 2. Aufl. 1912. V, 14/15. Lieferung, S. 301.
- Schlotzky, K.*, Die Homberger Trichinosis-Epidemie und die für Trichinosis pathognomonische Eosinophilie. *Deutsch. Arch. f. klin. Med.* 1904. LXXX, S. 1.
- Schottmüller und Praetzel.*, Über Streptotrichosis hominis. *Milch. med. Wochenschr.* 1912. S. 1405.
- Sobernheim, G.*, Milchbrand. *Kolle und Wassermann's Handb.* 1903. II, S. 1.
- Stieda, A.*, Durchbohrung des Duodenums und des Pankreas durch eine Taenie. *Centrall. f. Bakt.* 1900. XXVIII, S. 430.
- Straus, I. et Gamkela, N.*, A l'étude du poison tuberculeux. *Arch. de med. expér.* 1891. III, p. 705.
- 田中祐吉「アメリカ」赤痢ノ病理的研究第一報告、中外醫事新報、第五五七號、第七二二頁、明治三十六年。

谷口長雄 Über Filaria Bancrofti. Centralbl. f. Bakt. Orig. 1904. XXXV, S. 492.
 谷口長雄 「フィラリヤ」病ニ就テノ報告, 第九回九州醫學會雜誌, 明治四十二年。
 Tallqvist, T. W., Zur Pathogenese der perniciösen Anämie, mit besonderer Berücksichtigung der Balthrocephalusanämie. Zeitschr. f. klin. Med. 1907. LXXI, S. 427.
 田中正鐸 日本ニ於ケル十二指腸小鉤口蟲及其疾病ニ就テ, 東京醫學會雜誌, 第二卷, 第七八四號, 明治四〇年。
 Thompson, J. A., On the etiology of bubonic plague. Lancet. 1903. Vol. II, p. 1090.
 土屋岩保及宮川米次 十二指腸蟲病皮膚感染ニ關スル一小實驗, 日本消化機病學會雜誌, 第一卷, 第二三七頁, 大正元年。
 Uglatti, G. B., Das Fieber. 1895.
 碓居龍太 分殖性幼蟲蟲症, 醫學中央雜誌, 第七卷, 第二號, 第七九頁, 明治四十二年。
non de Felde, Etude sur le mécanisme de la virulence du staphylocoque pyogène. La Cellule. 1894. X, p. 403.
 Visman, Wm., Wirkung todtler Tuberkelbacillen und des Tuberculins auf den thierischen Organismus. Virchow's Arch. 1892. CXXIX, S. 163.
 2. Wassermann, A. und Keyser, Fr., Wesen der Infektion. Kollé und Wassermann's Handb. 2. Aufl. 1912. I, S. 555.
 Wassermann, A. und Takachi, T., Über tetranthoxische Eigenschaften des normalen Centralnervensystems. Berln. klin. Wochenschr. 1898. S. 5.
 山極勝三郎 病理總論講義, 中卷, 新訂八版, 明治四十二年。
 山極勝三郎及井上善次郎 「サントマ」病研究報告, 東京醫學會雜誌, 第四卷, 第一八・一九・二〇・二二・二三號, 明治三三年。

大正二年四月一日印刷
 大正二年四月四日發行

正價金貳圓

編者 中川恭次郎

發行者兼印刷者 田中增藏

東京市本郷區龍岡町三十二番地

印刷所 杏林舍

東京市本郷區駒込林町百七十二番地

杏林舍

日本內科全書
 第一卷第一冊



發行所 吐鳳堂書店

東京市本郷區龍岡町三十二番地
 振替口座東京四一八番
 電話下谷一六七二番
 電話下谷四〇七九番

